



# У ПОСЛѢДНЕЙ ЧЕРТЫ

М. П. АРЦЫБАШЕВЪ



著 フェシーバイツルア

# 線 一 の 後 最

譯 夫 正 川 米

版 出 社 潮 新

非賣品

第二期

世界文學全集(13)

最後の一線

第二回配本

昭和五年六月廿五日印刷  
昭和五年七月一日發行

翻譯者 米川正夫

發行者 佐藤義亮

發行所 東京市牛込區矢來町  
新潮社

電話牛込

八八八八  
〇〇〇〇〇  
九八七六五  
番番番番番

振替東京 二二三、四五〇番

東京市小石川區江西戶川町 富士印刷株式會社印刷

## 解 說

十九世紀の終りから二十世紀の初頭にかけて、露西亞文學が長い間の傳統となつてゐた人道主義的、社會教化的傾向から次第に離れて行つて、極端な個人主義的思想を基調とする謂はゆるモデルニズムに移つて行つたのは、人のすでに知るところである。これは政府の極端な壓迫政策のために萎靡沈滞して、無氣力な灰いろの小市民的生活の泥沼に沈んでゐた、當時の一般社會に對する反動として生まれた現象で、若々しい新鮮な生活力と、敏感純眞な魂を持つた新時<sup>ヤンギージェネレーション</sup>代は、對社會的活動に對する希望と勇氣を失ひながらも、平凡卑賤な町人的生活に同化しきる事も出来ないで、そのヂレンマから遁れる出口を、美の禮拜とニーチェの流れを汲む超人哲學に見出したのである。彼らは周圍を領してゐる家常茶飯の生活の上に、高く超越した獨自の世界を築き、貴族的に洗煉された複雑な趣味や、輝かしく力づよい個性の魅惑に生きようとした。彼らの文學はあるひはネオ・ロマンチズム、あるひは象徴主義、あるひは類敗派等の名をもつて呼ばれてゐるけれども、現實生活、集團的社會生活からの逃避といふ點において、揆を一にしてゐると言ふことが出来る。彼らは自我もしくは美の象牙の塔に籠もつて、平凡瑣末な醜い現實から美しい傳説を作り出さうとした。したがつてこの時代の文學には、神祕的、幻想的、もしくは異國趣味的要素が横溢して、そのために「世相の死」、すなはち寫實主義文學の滅亡を呼ぶ聲さへ聞こえたくらゐであるが、しかしこのモデルニズム文學の中にも、より多く寫實主義的手法を維持した作家も、ぜん／＼皆無ではなかつた。クーブリンなどはそのもつとも鮮明な代表者である。アルツイバーシエフも大體の分類に従へば、寫實派の陣營に屬する作家ではあるが、彼の抱いてゐた獨自の世界觀は、トルストイ、ツルゲーネフなどから發してゐる、朗かな人生肯定の寫實主義藝術とは、著しく趣を異

にしてゐる。彼は客觀的アポロ型の作家たる要素も有してゐるけれど、むしろ主觀的デオニッスの破調がより多くの作品を支配してゐるからである。

ミハイル・アルツイバイシエフはかの有名な小説『サーニン』によつて、露骨な性慾描寫の作家として、一躍世界にその名を宣傳せられるに到つたが、しかし彼が始めて文壇に初舞臺した時分には、彼の作風はかなり異なつた方向を指さしてゐたのである。彼は一八七八年に一警察署長の子として生まれたが、その生地は彼自身も覺えてゐないとの事である。アフトゥイルスクといふ田舎町の中學に五年級まで籍を置いてゐたが、その後畫家にならうと志して、ハリコフの美術學校に入學したが、一年たらずでそれも抛擲して了つた。その後、地方新聞などに投稿したのが動機となつて、遂に作家として立つやうになつた。彼が文學者として名前を知られるやうになつたのは、『革命家』、『村』、『血痕』、『朝の影』などといふ短篇を發表してからである。これらは一九〇四年から一九〇六年へかけての革命——日露戰爭によつて誘導された全國的革命を題材としたもので、そこには叛軍と鎮壓隊の間に演ぜられた暴行、流血、殺戮、凌辱などが、線の太い、鋭い筆で描き出されて、人をして慄然と戰かせるやうな、息づまるやうな印象を與へる。その中でも、叛徒の防塞戰とその後の銃刑の光景を詳細に描寫した『血痕』は、このテーマに捧げられた作品の中で、最も感銘の深い代表作と數へられてゐる。これら初期の短篇には、強權の暴壓に對する公憤とプロテストの精神、その暴力を拂ひ落とさんがために、生命を賭して奮起した虐げられたる民衆に對する同情が、かなり明瞭に觀取せられる。とはいへ、かういふ公民的社會的動機が、右に擧げた諸篇の基調となつてゐるとは言へない。これらの作品のすべてを支配してゐるのは、血みどろな死骸の山、斷末魔の呻吟、打ち割られた頭蓋骨、罪のない小兒の殺戮、多くの兵士に強姦される無邪氣な少女の叫び、白雪の上になまなましく残る銃殺された叛徒の血——すべてかういふ悽慘な、どす黒い苦痛と恐怖の雰圍氣である。若い頃から不治の肺患に苦しんでゐたアルツイバイシエフは、露西亞の全土を充たしたこの無

意味な、醜い、慘酷な、集團的殺戮の物凄く繪巻き物に壓倒されて、勇敢な争闘的精神を半ば痲痺せられ、さながら催眠術をかけられたもののやうに、無氣味な謎のやうな死の顔から、目を放すことが出来なかつたやうな風である。一九〇七年に書いた中篇小説『人間の波』も革命の暴動を主題としたもので、オデッサに於ける戦闘巡洋艦『ボチョームキン』の乗り組み員の叛亂が中心に置かれてゐて、當時かなり世評の高かつた作品であるが、こゝでも背景に大きく浮き出してゐるのは、依然としても凄しい死の微笑である。これから以後、死の問題はアルツイバーシエフに取つて、生涯はなれる事のない創作の主なる題目となつた。題材は既に革命から離れてゐるが、優れた中篇『ランドの死』なども、滅び行くものの哀愁と恐怖に捧げられた哀歌である。

しかし、いつまでもかういふ絶望と暗黒の境地に彷徨するのは、結局おのれ自身に死を宣告することである。そこに何らか打開の方法を講ずる必要があつた。アルツイバーシエフはこの打開の道を性愛の中に見出さうとした。彼がこの道へ出て行つたのは、當時一般青年の頭腦の支配者命令者であつたニーチェの謂はゆる「自由にして強き性慾は力あるものの賜ものなり」といふ個人主義的思想の影響によることも無論であるが（もつとも、彼自身はニーチェを好まないと言つてゐるけれど）、また一方に於いて、時代の影響といふことも見違はず譯に行かない。當時の露西亞社會は、殘忍な暴力によつて鎮壓された失敗せる革命の後を承けて、再び極度の萎縮状態に陥り、政治に對する甚しい無關心を示し始めた。少くとも、積極的政治行動や革命運動は表面上影を潜めて了つた。そして文學の方面では、この大勢が露骨な性慾小説の流行となつて現れた。革命による精神的高揚と緊張の反動として、失望と銷沈に浸り切つてゐた疲弊せる社會が、一種の自己痲痺の方法として、個人的興味の中でも最も刺激の強い性愛の方面へ、翕然として傾いたのは怪しむに足りない。カメンスキイ、ゾルビーツカヤ（閨秀作家）などの猥褻文學者が相ついで擡頭し、忽ち讀書界の寵兒となつた。この趨勢に乗じて現れたアルツイバーシエフの最初の長篇小説『サーニン』（一九〇七年）は、多くの安

價な通俗的好色小説を壓倒して、この種の文學の王座を占め、當時の若き知識階級のバイブルとなつた。この小説がいかに偉大な成功を博したかといふ事は、自由戀愛を意味するサーニニズムなる言葉が、新しい流行語として一般社會に行はれ、青年男女の間に多くの模倣者を生み出したために、革命思想から人心を轉換させる緩和劑として、性慾文學の横行に比較的寛大であつた當局でさへ、第二版以後この作品の發賣を禁止した事實に徴しても、想像することが出来ると思ふ。

小説の主人公サーニンは極端な個人主義者で、彼に言はせれば、人生の目的は自己の欲望の満足と歡樂の追及のみ存し、それ以外の人間活動はことごとく皮相な虚偽のものに過ぎないのである。人生について彼の知つてゐる事は、生活が彼自身にとつて苦痛であつてはならぬといふことである。それがためには自然の欲求を満足させることが必要である。人間は餘り長い間の社會的生活の約束に束縛されて、性慾を動物的な醜いものの如く卑しめて、その結果、貧弱な臆病な不具的存在となつて了つた。無論、人間が動物と選むところのない生活をしてゐた間は、野蠻で粗野な不幸な時代であつたに違ひないが、肉體が精神のために壓倒されて、蔭の方へ押し込められて了つた現代は、あまりに無氣力で意氣地がなさ過ぎる。従つて、今後來るべき新しい生活は、原始的な動物生活でもなければ、修道院的な禁慾生活でもなく、兩者を相融合した靈肉合致の生活でなければならぬ——とかういふ事になる。しかし、作品そのものに描かれてゐるサーニンは、たゞ自分の肉體的欲望を満足させることよりほか、何ごとをも考へてゐない粗野な動物的存在として、より多く讀者の頭に印象される。彼は利那々々の衝動に任せて、その場限りの情慾の満足を求める事のみ没頭し、常住座臥たえず女性の肉體を領有する機會のみを窺つてゐるかのやうに思はれる。彼は自分の肉身の妹さへも、さういふ目をもつて見ずにゐられない男なのである。靈肉合致どころか、精神的要求の存在さへ疑はれるほどである。もつとも、小説『サーニン』は思ひ切つて露骨な性慾描寫と並行して、もしくは交互的に、



個人主義の福音を説き肉の解放の理論ホモソイを述べた議論が、對話の形式で極めて豊富に盛り込まれてゐるけれど、これらの雄辯な議論もその内容は比較的單純幼稚で、卑俗な感じさへ與へるので、これによつてサーニンの人格を高めることには成功してゐない。

では、一體なにがこの作の異常な成功の原因となつたのだらうか？ 無論、篇中いたる所に充滿してゐるエロチシズムもその主なる原因の一つであらうが、單にそればかりであつたなら、エルビーツカヤなどの猥雜作家ポルグライストと別に選むところはないので、發表後まもなくあらゆる外國語に翻譯され、殆ど三十年に近い今日まで生命を失はず、古典的價值さへ生ぜんとしてゐる事實が、説明しがたいことになる。譯者はその原因をアルツイバーシェフのみづゝした、鮮かな、男性的に颯爽とした描寫の筆と、彼の強烈な素質デュムペメントに歸すべきであると思ふ。彼の自然描寫は色彩が濃厚でタツチが力強く、しかもその中に作者の鋭い感覺が溶かし込まれてゐるので、咽むせるばかりの香氣を放散して、十九世紀の露西亞文學に見られなかつた近代的味はひを藏してゐる。この點は當時の讀者にとつて一つの驚異でさへあつた。第二に、人間としてのアルツイバーシェフは極めて強烈な生活慾を有しながら、生來の痼疾のためにその欲望を満足させる可能を奪はれ、病的なほど激しい死の恐怖に苦しめられてゐるので、この二つの精神的要素から來る破調クラツナミが、独自の力となつて、彼の創作に自暴自棄な奔放さと深刻味を添へてゐるのである。

とにかく、アルツイバーシェフは『サーニン』に於いて、オリムピヤの神々のごとく朗らかで、清淨な、力づよい性慾の開放をこの地上に實現せんとしたけれど、それは無数の約束や條件で縛られた、現代の人間社會では不可能事であるのを悟つて、物語りの終りにサーニンが進行中の汽車から飛びおり、無人の曠野の中をあてもなく濶歩する場面で筆を止めてゐるが、これはつまり現實生活から逃避して、空想の世界に隠れが見いださうとする、一種の藝術的自慰であると言はなければならぬ。

かうして、靈肉合致の三昧境に突進せんとして、苦い幻滅の失望を嘗めさせられたアルツイバーシエフは、やがて一切の罪を女性に歸し、女性の無理解と淺薄と淫蕩のために、男性の有する純真高潔な魂が卓俗化されるものと信じ、かつて兩性の解放を唱道したのと同じくらゐの劇しきをもつて、女性攻撃の火蓋を切つた。彼はそのテムベラメントにふさはしいが、むしろ、やゝな猪突的態度で、ストリンドベルヒやオットー・ワインゲルにも劣らぬほどの、反女性主義者と化したのである。一九一一年の短篇『小さきオットー』を手はじめとして、『ある頬打ちの話』、『嫉妬について』及び一九一三年の戯曲『嫉妬』及び『野蠻人の法則』その他に於いて、女性に對する執拗な根深い憎惡を、繰り返し繰り返し藝術の形で表現した。

しかし、かういふ否定的な態度で如何に多くの論證を重ねても、肯定的意義を有する何ものかに到達し得るはずがない。結局アルツイバーシエフの人生觀が、完全な厭世主義に落ちて行つたのは當然である。彼の暗黒な人生否定論が全面的に結晶されたのは、『サーニン』につぐ第二の長篇であり、彼の藝術の一大綜合ともいふべき『最後の線』である（この小説は一九一〇年から一二年にかけて、文集『地』の誌上に發表せられた）。標題に示す最後の線とは無論、人生行路の最後に横たはる一線、即ち死線の意味である。この作品の表現手法は從來の諸作と同じく、明快な寫實主義であるけれど、その構想は極めて奇怪な、殆ど狂的なものと言つていゝほどである。とある田舎町に飄然と現れたナウーモフといふ年若い技師が、人生は何の意味もない醜い苦痛の連續に過ぎぬといふ確信から出立して、すべての人をこの無意義な苦痛から救済するために、人類絶滅の誓ひを立て、死の福音を人々の間に宣傳し始める。すると、一見なんの特徴もなさうに思はれる、この平凡な一技師の有する魔術的な魅力に引きずられて、作中のおもなる人物が悉くわが生命を斷つて了ふ。天賦の才能と美貌に恵まれた畫家のミハイロフは、何のこだはりもない、明るい、藝術家らしい享樂主義的性格に任せて、花から花へ移り行く胡蝶の如く、一步ごとに對象を變へながら、刹那利

那の歡樂をあさり求めてゐたが、遂に單なる肉の満足が意味のない永久の反覆に過ぎない事を痛感し、藝術の不滅といふ信念さへ空しい蜃氣樓と化したのを見、自分の刹那的情慾の犠牲となつた少女の自殺といふ悲劇に直面して、これらすべての精神的重荷に耐へきれないで自殺する。純粹な抽象的思索の結論として、生きる事の無價値を悟つた騎兵將校クラウゼは、死の恐怖に打ち勝つために騒がしい饗宴の席で、衆人環視のたゞ中で額を彈丸で打ち抜いて了ふし、平凡で善良な家庭の主たる二等大尉トレニョフは、妻を對象とする器械化した習慣的愛撫に飽きて、その不満から生じた見苦しい諍ひに前後を忘れ、殆ど無意識的に自分の喉を剃刀で掻き切つて了ふし、會計官吏ルイスコフは貧しい、みじめな、蟲けらのやうな存在を續けながらも、いつか作家として文壇に立たうといふ、滑稽にかつ悲痛な空想をはぐむ事によつて、僅かに生の意義と價値を見出してゐたが、一朝にしてその幼い夢が容赦ない手に破られた時、意識せずしてナウーモフの魔力に掴まれてゐた彼は、同じくこの狂信的憎人主義者の犠牲となつて了ふ。最後に輝かしい人類の未來を信じて、常にナウーモフの人生否定論と戦ひ續けて來た、社會主義者のチージュさへも、次第に忌はしい、灰色の、凡俗卑賤な日常生活に同化される自分自身に、嫌惡と絶望を感じて縊死を遂げる。そのほかたゞ一人の戀ひ人を求めて、自分自身の狂暴な情慾の嵐に悩みもがいてゐた、多血質な純情の蕩兒アルブゾフさへも、長い間の追求の對象であつたネルリの肉體を領有すると共に、發作的嫌惡の念に襲はれて修道院へ世を遁れ、最後の精神的避難所を失つた薄倅なネルリも、同じく自殺を企てることになつてゐる。

この梗概によつても想像されるやうに、アルツイバーシェフは人生のあらゆる努力が遂に空の空であつて、墓上の踊りに過ぎないといふ厭世哲學を、ありとあらゆる藝術的形象と多辯な論議の助けをかりて、この一篇に儼然樹立させようとしたものに相違ない。それ故、この物語りには右に述べた六つの自殺のほかに、なほ四つの死が挿話の形で、詳細に描寫されてゐる。第一は殆ど自意識を持たぬ幼兒の死であり、第二は年寄つた大學教授、第三は華かな過去を

もつ若い女優の病死であり、第四は決闘による壯年の將校の横死である。疑ひもなく作者はこれによつて、ナウーモフなる人物に託せられた根本思想を、徹底的に讀む者の脳裡に印しようとして企圖したのであらうが、しかしこの厭世哲學と交互に織りまぜられてゐる性慾描寫（つまり生活享樂の再現）や美しい自然描寫が、あまりに生き／＼として明るい色彩に充ちてゐるので、死の描寫や滅亡の理論は作者の豫期したやうに、歴倒的な戰慄的印象を與へないで、むしろ物凄い腐屍の臭ひと豐滿な女性の肌の香と、斷末魔の呻吟と甘い接吻の音と、日光に輝く自然と醜い灰色の田舎町の生活と——かういふものが互に相交錯し融合して、そこに独自の不思議な調和——破調の中なる調和（もしかういふ表現が許されれば）を生み出してゐる。譯者はこれを言葉や思想で捕へることの出來ぬ藝術の祕密と呼びたい。もし作者にさへ意識せられなかつたこの微妙な藝術の作用がなかつたら、この作品は現在有してゐる價値の大半を失つたに相違ない。なぜと言つて、藝術は創造でなければならぬのに、一切の否定すなはち虚無の上に何の創造もあり得ないからである。

事實この『最後の線』はかういふ不可能を取つて企圖された作品であるから、その構成コンストラクションに著しい不自然さを藏してゐる。第一にその基礎的構想、即ち一箇の無名の青年の暗示や教唆によつて、多くの人が死を決するといふ事は、到底あり得べき現象として受け入れられない。或ひは極めて特種の場合として、有り得べき事かも知れないけれど、それにしても、現代のメフィストともいふべきナウーモフの人物性格が、ほとんど藝術的に具象化されてゐないし、多くの自殺者についても、自殺を決行するまでの徑路や、その瞬間の描寫に充分な動機モチベーションづけが足りない。全體に、作者が筋の運びと結末を急ぎ過ぎて、物語り中の重要な契機モメンツを未開拓のままに飛躍してゐるのが、あり／＼と感ぜられる。例へば、アルプーゾフを救ふために、決闘の前夜アウグストフ副官に身を任せたネルリのその後に於ける心理的推移、決闘で副官を殺したアルプーゾフの内的體驗などが、全然抛擲されてしまつて、單なる挿話の如く取り

扱はれてゐる事など、かなり重大な缺點と言はなければなるまい。一口にいへば、アルツイバーシェフは『サーニン』のやうに殆ど筋らしい筋のない、平和な日常生活の描寫に對する時と大差のない態度で、この異常な事件に充ちた小説の筆を取つたために、題材に相應した慎重な創作的用意が不足してゐたのであらう。

もつとも、この種の用意も外面的に見れば全然ない事はない。その最も顯著なものはドストエーフスキイとの類似である。ドストエーフスキイは異常なストライキングな事件を描く天才であつたので、素質の上から彼と共通點を有するアルツイバーシェフが、この大先輩を取つて範としたのは怪しむに足りない。例へばクラウゼ少尉補が『惡靈』のキリーロフを聯想させ、アルブゾフが『白痴』のラゴジンを思はせるが如き、ネルリがドストエーフスキイの好んで描いた猛禽型の女性に髣髴たるが如き、アルブゾフとミハイロフの對決の場面が、同じく『惡靈』のキリーロフとゾルボンスキイの「魂の格闘」と血脈相通するものがあるが如き、なほ數へれば雙手の指を屈するに足りるであらう。作者自身の思想を物語りの間へ執拗に挿入する手法は、兩者の先天的傾向の然らしめるところと思はれる。ただアルツイバーシェフの鬼才をもつてしても、世界文學の奇蹟的存在である天才に比肩し得ないのは、あまりにも當然すぎることであらう。とは言へ、『サーニン』以來いちじるしく圓熟した描寫の手腕は、いかなる非難をも沈黙せしめるだけの力を藏し、精彩奕々たる個々の場面は、この作者の非凡な才能を充分に證明してゐる。そしてこれらの個々の描寫が相倚り相助けて、この作品の藝術的價値を保有してゐるのである。

彼は十七年の革命後、しばらくソゼト露西亞にとゞまつてゐたが、のち追はれて國外に亡命生活を送ることとなつた。そして一九二二年に感想『永遠の蜃氣樓』、一九二五年に戯曲『惡魔』(ファウスト傳説のグリエーション)を發表したが、いづれも彼にとつて永遠のテーマたる厭世哲學の敷衍で、ほとんど反響なしに過ぎて了つた。かうして一九二五年ワルシャワの假寓で淋しく世を去つた。(米川正夫)

目次

前

編

..... 一

後

編

..... 二〇

カバーの繪……エウゲーニヤを打撃して自分の意に従はせるミハイロフ(二六五頁)

# 最後の線

アルツイバーシェフ著  
米川正夫譯

## 前編

小さな町は曠原の中にぼつんと立つてゐた。もし人が町を出はづれて、蜃氣樓のやうな遠い野や、地平線の上を匍ふ遙かな森の幻や、無關心な高い空などを眺めたならば、この地上に住んで苦しみながら死んで行く、一團の人々のつまらない存在は、決して悲劇的な美文めいたものではなくて、平凡といふより、寧ろ退屈な眞實に過ぎない事は、はつきり悟るに相違ない。

夏は焼けるやうな太陽が曠野の上に懸かり、冬はこの曠野が一面に白皚々たる世界となつて擴がつた。熱い夏の夜などは、山のやうな黒雲がむく／＼ともちあがつて、雷鳴が墨を流したやうな廣い廣い空間を、勝ち誇つたやうに端

から端へ轟き渡るのであつたが、しかし曠野はいつも同じやうにもうげな、謎のやうな、人間とはなんの關りもない姿をしてゐた。

風が吹き起こると、曠野の中に細かい、乾いた埃が舞ひ立つて、さながら生の通はぬ幻の軍勢かとばかり、絶え間なく町の方へ押し寄せて行つた。埃は家々の屋根や窓に降り積もり、ちつと澱んで動かぬ川水の上に落ち、己れの意志を持たぬ柔かい層となつて、町を一面に蔽ふのであつた。さうすると町は世界と共に古い、老朽し切つたもののやうに感じられた。この町の中にある一切の物が、單調で貧弱で、危く風に吹き散らされるのを免れてゐる塵つかのやうであつた。

かうした灰色の田舎町にこそ、緑の木立ちや、薔薇色の山や、青い海や、壯麗な建てる物の間などに先んじて、蒼ざめた死の幻影に似た思想の生まれ出る可能があつた譯である。この思想は後に世の中へ出て行つて、地球の全面へ擴

がつたのである。

海中へ投げられた巨岩は、跡かたもなく消えて了ふけれど、静かな池の面へ落ちた小石は、必ず遠くの方まで無数の圈を擴げる。大都會の喧騒の中で、毎日いつともなしに行はれてゐる事が、この町では人の魂を底の底まで震撼し、多くの人の心を動搖させるのであつた。

その後事情を探つた人々は、土地の富豪アルブゾフの工場に新しく招聘せられた、ナウモフといふ技師に、すべての原因を發見した。それはいかにもありさうな事だつた。實際この陰鬱な男の影が町の生活に蔽ひかぶさつて、事件の開展促進になみ／＼ならぬ影響を與へたのである。しかし本當に目を開いて、周圍を見廻したら、いかなる人間の力も、人生の中に潜んでゐる物を、一厘一毛も増減する事は出来ないといふ事を、觀取しない譯に行かないであらう。實際、人生に於けるすべての物は、深い深い大地の底に根をおろしてゐるので、その根から次第に幹が延びて行つて、晚かれ早かれ、避くべからざる結末に到着するのである。

静かで平凡な日常生活や、慌ただしい混亂雑踏などの間に、もうずつと以前から奇怪な恐ろしい大事變が、徐々と

して熟してゐた。しかしその突發する三四箇月前までは、一切が飽くまで平凡退屈に感じられた。小さな町は暑さに喘ぎ惱んで、世間みなな生活が靜かに營まれてゐたのである。

出稽古から出稽古へと忙しげに駆け廻つてゐる、チージュといふ小柄な大學生も、望みのないいら／＼した氣持ちで、倦怠に惱まされてゐるのであつた。

色の褪めた青いバンドつきの、古びた白い學生帽は、耳の邊まで被さるほど深く、尖つた頭蓋の上に載つてゐて、その下では様々の想念が、絶え間なく動いてゐるのであつた。彼が大都市に居住する權利を奪はれて、この田舎町に尻を据ゑてから、もう二年になる。しかも、そのうちにこゝから足を洗ふといふ望みは全然なかつたので、心の底からこの町を憎んでゐた。惱ましいほど、胸の痛むほど憎んでゐた。どこかよその方では、人類の偉大な争鬪生活が、數百萬の火花を散らしつゝ、苦痛と歡喜の中に呻吟や叫喚の聲を發しながら、徐々と鍛へられてゐるにも拘らず、こゝでは開闢以來たれ一人として、高調した言葉も聞かなければ、生きた顔も見ることがないやうに思はれた。みな眠つてゐるのでもなければ、姿を潜めたのでもなく、また全然



生きてゐないのでもない。たゞ道傍の埃の中に捨てられた、一塊りの蟲けらのやうに、うよ／＼と露めいてゐるだけなのであつた。

太陽は町の眞上に懸かつてゐた。そして空氣は暑熱のために慄へながら、炭火の火氣のやうに、ちら／＼と垣根つたひに流れてゐた。がらんとした並木街に立つてゐる、稠れな骸骨じみたアカシヤの木は、骨ばつた枝を力なげに垂れ、その下には息もたえ／＼な、貧弱な、乾からびた陰が横たはつてゐた。殆どすべての窓は日避けに鐵戸を閉めてゐたが、その中で汗にまみれてぐつたりとした、無思想、無感覺の人々が、炎熱と倦怠のために、惱ましげに喘いでゐる様が想像された。何もかもまるで死に盡くしたやうになつて、雀どもの轉りさへ聞こえなかつた。チージュは汗みどろになつて、並木街を走りながら罵るのであつた。

「畜生めら！……こないま／＼しい所へ、何の必要があつて町を立てたのだ！……一體ほかに場所が見つからなかつたのだらうか、まあ考へても見るがい／＼！……一體誰があんな連中をこゝへ引つ張つて來たのだらう？……實際この世界には森だつて、川だつてあるぢやないか……それなのに、わざ／＼面あてがましくこんな所へ……何といふ厄

介なばか者らだ！」

憎惡の念が彼の胸を締めつけた。しかし何よりもいけな  
い事には、それは對象のない憎惡だつたのである。チージュ  
は複雑な必然の網が、かうした曠野よりもつと悪い所へ  
すら、人間を驅り立てて行く事を、人一倍よく承知してゐ  
た。もし誰か人が訊ねたら、チージュは別に大して思案もし  
ないで、「そんな事は問題ぢやない。人はどんな所に生活し  
ようと、依然として、最も廣く豊かな意味に於いて、人間  
であり得る。」と答へたに相違ない。しかし、何かしらある  
物が彼を壓伏して、彼と太陽の間に立ち塞がりながら、未  
來の代りに何やら灰色な空虚な物をさし示した。それが彼  
の心に絶え間なく、神經的な憤懣を呼び起こして、周圍の  
あらゆる物に毒を注ぎかけるのであつた。

並木街の向かうの端からチージュの方へ向けて、制帽を被  
つた一人の男が歩いて來た。あたりは極度な空虚と死の氣  
に充ちてゐるので、がらんとした大きな廣場の中に現れた  
生きた人間の顔が、不愉快に感じられるほどであつた。廣  
場の上には幾棟かの赤煉瓦の店と、太陽で白熱せられたや  
うな白塗りの教會が、ちつと不動の姿勢を保つてゐた。さ  
ながら永久にとざされたやうな、重々しい教會の鐵扉の上

には、大きな鏡前が下がつてゐる。

チージュは近視だつたけれど、まだ大分遠い處から、知り合ひの會計官吏ルイスコフだと氣がついた。ルイスコフはまるで呑氣さうな、といふより、寧ろ輕はずみな態度で杖を振り廻しながら、ゆつくり／＼と歩いてゐた。チージュは擦れ違ひさま、馬のやうな齒をして、色のない小さな目を光らせてゐる、黄色な長い顔を平然と見やりながら、ちよつと帽子を持ちあげて、さつさと先へ走つて行つた。ルイスコフが杖を振り廻しながら一方へ進んで行くと、チージュは一層せはしさうに反對の方へ歩いて行つた。彼等は互に何一つ言ふべき事がなかつたのである。

もし小柄な大學生が、いま少し注意ぶかくルイスコフを見つめたならば、彼は必ずその表情に打たれたに相違ない。會計官吏の小さな鈍い目は、ちよつと動かなかつたけれど、その中には緊張した、化石のやうな思想が凍り付いてゐたのである。正しく間隔を置いたその長い足の運動も、ちよつと上へ向けたまゝちよつと動かない顔も、まるで自働人形か何ぞのやうに、少しも生の通つてゐない、息づまるやうな印象を與へるのであつた。彼は他人の意志に依つてその運動を押し止められ、何の必要もないばかげた螺旋人形か

何ぞのやうに、わきへ片付けられて了ふまで、永久にこつこつと歩き続けさうに思はれた。

しかしチージュはこの呪はれた町のもつてゐるものに、何から何まであき／＼して了つてゐたので、こゝには極めて平和で平凡な、俗態なもの以外、何一つ存在し得ないやうな氣がした。その上、彼は心底からルイスコフを輕蔑してゐた。なぜと言つて、自分の興味の圏外に住んでゐる人間を、ことごとく輕蔑してゐたからである。會計官吏の顔は彼の心に新たに油然として湧き出る、憤懣の情を呼び醒ますばかりであつた。

「ふん、あれでもやはり生きてゐるのだ。」蒼褪めた額から汗を拭きながら、チージュは機械的な苛立たしさを覺えつゝ、かう考へた。「しかもどうだらう、まるで何か偉大な事業でもしてゐるやうな氣であるのだ……いぢんち汗みどろになつて、蠅に一杯たかられながら、何だか譯の分からない事を書いて、會計課長にべこ／＼頭を下げ、簿記がよりの首席を蒙り、人のやうに思つてゐるのだ……それから娘つ子どもと一緒に並木街を散歩して、一番しまひにその中の一人に幸福を授けてやり、新しい會計官吏を半ダースくらゐ生ますのだ。その中の一人が簿記方の首席になるかも知れない

——おゝ何といふ幸福だらう！……一たい鐘記方の首席が何だといふのだ？……本當にあいつ何だつて首をくくらないんだらう、いまくしい！」

チージは、もし自分があんな生活をしたら、三日と生きてゐられないやうな氣がした。

毒々しい想念は次ぎから次ぎへと走つて行つたが、當のチージは殆どそれに氣がつかないのであつた。

「何か事が起こればいゝなあ！……せめて地震でもあればいゝのに！……どこかよその國では、本當に地震があるといふぢやないか！……何でも酸鼻の極ださうだが……ちよつ、ばか／＼しい！……酸鼻の極どころか、有り難いお恵みだあ。家が倒れて、大地が震へ、女が裸で駈け出して、誰も彼も、自分が何者かといふ事も、またこれがどういふ譯で、いかなる意味を有してゐるかといふ事も、みんな忘れて了ふのだ……そこには、自己犠牲もあれば、掠奪もある、あつちでは誰やら助けたといふ者もあれば、こつちではどさくさ紛れに強姦した者もある……實に愉快だ！……おれは地震なら大賛成だ、何も決して……酸鼻の極だつて！……何百萬といふ人が死骸になるのは、決して酸鼻の極ぢやない！……ちよつ！」

チージはいま／＼しさの餘り、べつと唾を吐いた。そして突然たちとまつた。

「商人の子供らの所へ行くのはまだ早いやうだ……」つダ  
「ヂェンコノ所へでも寄つて見ようか？」

さうする値うちがあるかないか、まだ決めもしない中に、チージは機械的に横町へ曲がつて、く／＼を開け、埃つばい草のぼう／＼と生えた、大きな内庭へ入つて行つた。

まるでそのちよつと前に恐ろしく愉快な事でもあつたやうに、彼はすぐ堪らなく退屈になつて來た。もういつを引つ返さうかとも思つたが、これは毎日の事だつたので、チージはいつもの通り惱ましげに手を振つて、人の足跡で自然についた草の中の徑つたひに、氣難かしげな顔つきをしながら、内庭の一ばん奥に立つてゐるまだら剝げの空色に塗つた離れをさして歩いて行つた。どこか倉の蔭の方で、犬が吠え出したが、暑い日向へ出て來なかつた。牝鶏が三羽に牡鶏が一羽、羽毛を脹ませながら垣根の下にうづまつてゐた。離れの向かうには埃つばい庭の木立ちが、寢ぼけたやうに突つ立つてゐた。

チージは暗い廊下へ入つて、手探りで扉の把手を掴み、叩もせずに、大きな汚い部屋へ一歩ふみ込んだ。その中は

まるで穴藏のやうに涼しく、静かだつた。まづ彼の目に映つたのは、汚い敷布の揉みくたになつた、まだ片づけてない二つの寢臺と、窓仕切りに載つた麥酒の壘と、煙草の吸ひ殻と、ばら／＼になつた本などだつた。部屋の内真ん中には箒が一本投げ出してあつたが、その下から何かの反古らしいものが、辛抱つよく顔を覗けてゐた。

二人の大学生は卓を挟んで、一生懸命に將棋の盤を眺めてゐた。その蓬々とした頭は低く屈められて、はゞの廣い若者らしい肩は、餘り長く坐つてゐるために、ぐつたりしてゐた。

「またやつてるな、情ない連中だ！」冗談ともつかず、本當に憤慨してるともつかず、チージュはかう言ひながら、杖を片隅へ立て掛けた。「よく飽きもしないねえ？」

二人の棋客は首を上げて、相手を見ようともせず、手を差し伸べたなり、またもや將棋の方へちつと目をそゝいだ。

「それにこの暑さはどうだ、やり切れやしない！ 麥酒でもご馳走して貰はうかね？」チージュは帽子を脱いで、暑さと疲勞のために、蒼白くなつた額を拭ひながら、かう訊ねた。濡つた髪の毛がべつたりくつき合つて、まるで鳥の

毛冠のやうに馬鹿々々しく、頭の上にびんと立つてゐるところは、本當に驚のやうだつた。

棋客の一人が無言のまま、窓の上の壘を指さすと、將棋盤の上の駒を一つ動かした。

「より豪勢だな！」といま一人が大儀さうな低音で言つた。

チージュは殆ど山盛りになるほど、なみ／＼と杯に麥酒をついで、ぐび／＼と長い間、うまさうに冷たい液體を吸ひ込んだ。餘りの心地よさに喉が鳴るほどだつた。

「あゝ、いゝ氣持ち！」濡れた鬚を拭きながら、彼はかう言つた。「ダギチェンコ、新聞は着いたかね？」

「えゝつ。」肩はゞの廣い美しい大学生が、振り向かうともせずにかう答へた。がつしりしたその肩の上には、色の褪めた更紗の襦袢が、まるで水でも浴びたやうに、ぐつたりとくつ付いてゐた。その襦袢の下にあるのは人間の肩ではなくて、鐵で鑄た彫像の歪ましい筋肉か何ぞのやうに思はれた。

「ミーシユカ、新聞はどこにあるんだ？」とチージュは執拗に追窮した。自分は何もする事がないのに、人が何か仕事をしてゐるのが、退屈でもあればいま／＼しくもあつたのだ。瘠せたミーシユカは、薄色の髪をした賢さうな頭を上げ

て、もの思はしげな、心持ち沈み勝ちな目つきで、ちらと天井を見やつた後、

「寢臺の下にある。」と言つた。

チージュは、べつと唾を吐いて、これ見よがしに寢臺の下へ潜り込み、新聞の上から吸ひ殻やごみを拂ひ落とし、窓の傍に坐つて読み始めた。

あたりはひっそり閑としてゐた。新聞が喧ましく書き立ててゐる、かの巨大な騒がしい生活は、このがらんとした汚い部屋から、遠く遙かに隔たつてゐた。窓の外では木の枝が微かに動いて、緑の影が天井をゆらくしてゐた。どこか近い所で、雀がもの問ひたげにちうつと一聲さへづつたが、まるで物に驚いたやうにやめて了つた。チージュは新聞をがさ／＼はせてゐるし、ミーシユカとダギヂェンコは無言のまま、將棋盤を睨んでゐた。盤の上の小さな駒、細工の駒は、自己獨特の眞面目な、規則たゞしい、複雑な生活を営んでゐる、神秘的な小人に似てゐるやうでもあれば、また似てゐないやうでもあつた。

チージュは馴れた手つきで大きな新聞紙を折り返しなごら、一生懸命に讀んでゐた。とき／＼彼は麥酒を杯についで、泡の中に深く鬚を沈めながら、ぐびり／＼とゆつくり

飲んで、また新聞に讀み耽るのであつた。

彼の前には、廣い世界の目まぐるしく重苦しい生活が、短い印刷された文章の間に展開して行つた。寢ほけたやうな田舎町へ置き去りにされた、チージュの生き／＼した想像には、それがはつきりと鮮明に映つたのである。彼は今かうして讀んでゐる中に、ペンを走らす雑誌記者や、汗水たらして稼いでゐる労働者や、一心に議論する議員や、死刑を執行する首斬り人や、まるで所作劇のやうに物々しく、行儀よく會釋し合つてゐる君主や、かういふ人達を目の前に見るやうな心持ちがした。

この偉大な棋戰は、依然として續いてゐるのであつた。そして勝利は絶えず一方から一方へと移つてゐる。しかし、どちらか一方の状態がかなり絶望的に思はれる事もあつたけれど、結局、永久に勝負なしで終るに相違ないといふ事が、臆げながら感じられるのであつた。

けれど小柄な大學生には、かうした灰色の事實の總計が目に入らなかつた。歴史の車は一つ所を廻轉してゐるのでなく、行く手に當たる一切のものを粉砕しながら、どんどん前へ進んでゐるやうに思はれたのである。人生がかういふ風に混沌とした、絶望的な性質を有してゐるのは、ほん

の昨日か今日か、長くて明日くらゐのもので、その中に遠からず偉大な波が襲つて来て、すべて古い汚いものを洗ひ去つた後、數學的に公平な、整然とした幸福が人生を支配するやうになる、その時は、追放に處せられた一介の大學生であり、遅かれ早かれ死ぬべき運命を持つた、微々たる一箇の人間に過ぎないチージュも、自己の分け前、自己の意義、自己の義務を有する等なのである——かう彼は確信してゐた。

かういふわけで、目下この國で行はれてゐる一切の事——諸新聞紙が口角泡を飛ばして論じてゐる一切の事が、彼を興奮させ惑亂させるのであつた。

「畜生、何といふ事だ……ダギデェンコ、君は讀んだかね、サマーラで……」チージュは大きな聲で興奮したやうに言ひ出した。

「えゝ、くそつ……！……ついつかりしてゐたぞ！」とミーシユカは叫んで、蓬々とした薄色の髪を掻き上げながら、椅子の上で身を動かした。

「うつかりするのが悪いのさ、子供の振つ木遊びぢやないからな。」とダギデェンコが注意した。

チージュはいま／＼しさうな、非難するやうな目つきで二

人を見やりながら、ばかにしたやうに肩を疎めて、麥酒を注いだ。

「こゝで何としたものかなあ？」ミーシユカは夢みるやうな目つきをしながら、もの思はしげにかう言つた。彼はちよつと考へて耳の後ろを掻いたが、やがて盤の上の駒を一つ動かして、恐ろしく煮えきらない調子で、

「玉手！」と言つた。

チージュは吐息をついた。急に彼は、サマーラに於ける七人の革命家の絞刑も、さして大事件ではないといふ氣がし出した。この七人の者が、ルイスコフや、ミーシユカや、ダギデェンコのやうな手合ひに思はれたのである。彼らの顔がものうく退屈さうにチージュの方を眺めた。と、こんなやつ等が首を絞められたつて、なんの知つた事があるものか、といつたやうな心持ちが、ほとんど無意識に彼の頭を掠めた。

小柄な大學生は新聞を疊んで、氣難かしげな顔をしながら立ち上がった。

「おや、僕は失敬するよ。」別段たれに向いてともなしにかう言つて、彼は片隅から自分の帽子を取り上げた。

二人の坩客は顔を上げようともしなかつた。

青い煙が葬式の時の香のやうに、二人の頭上に立ち昇つてゐた。緑色の影はまるで魔術のやうに、音もなく天井の下をゆら／＼してゐた。

チージュはまた草の生えた内庭を横切り、だるさうな犬の吠え聲を聞き、垣根の下に蹲つてゐる三羽の牝鶏と一羽の牡鶏を見た。そして、往來へ出た時ふと機械的に考へた。

「一たい鶏は汗を掻くものか知らん？」

この疑問が不思議なほど氣になり出した。彼は長いあひだ記憶を呼び醒まさうと努めたり、心の中で無数の書物の頁を繰つて見たりして、始めは論理、後には想像で問題を解決しようとした。そして、漸く、鶏と雖も汗を掻くべきであるが、しかし汗を掻いた鶏などといふものは、全然はかげた事だといふ結論に到着した時、彼は始めて我に返つて、憤然として唾を吐きながら、濱町から駆け出したのである。

## 二

暑さは一しほ烈しくなつたやうに思はれる。空氣は白熱した火のごとく燃え慄へてゐた。地球全體が恐ろしい太陽の怒りを受けて、びくとも身動きする勇氣さへなく、ぢつ

と身を潜めてゐるやうであつた。まだチージュは横町を出ない中から、もう汗がうるさくねと／＼と額を流れて、踵の上にたれた。いやに悪がら汗がぐたりと垂れた鬚や、唇の上へ落ち懸かつた。目の中が暗くなつて、こめかみはまるで固い楯で叩かれるやうにづきん／＼して來た。

チージュは自暴自棄になつて了つた。

「ちよつと暫く逃げ込むかなあ！」

で、彼は俱樂部へ寄ることに決めた。

俱樂部の白い二階だての建て物は、がらんとして涼しかった。開け放された圖書室の戸口からは、誰にも必要のないささうな書物が、整然と並んでゐるのが窺はれた。金箔で押した書名が、硝子ごしに儼然と輝いて、おごそかに空しい部屋々々を睨んでゐる。歌留多室ではロムベル用の小卓が、人待ち顔に緑いろの面を並べてゐた。あたりは教會のやうにしんとしてゐたが、たゞ料理場の方で、きれ／＼に皿の鳴る音が聞こえた。チージュは帽子掛けに自分の帽子を引つ懸けた。そこには見覚えのある醫師のアルノルヂイの帽子が、たつた一つ懸かつてゐるばかりだつた。彼は華奢な足をした、ロムベル用の小卓の間を縫つて、廣間を通り抜け、食堂へ入つて行つた。

醫師のアルノルヂイはそこにゐた。彼の前には火酒オキシジェンの入つた硝子の壺が置いてあつて、當の醫師は、暑さに喘ぎ惱む偉大な體をどつかと振へて、白ソーホワイトスに薄い山葵の汁を懸けた、あぶらつこい料理を平らげてゐた。ゆつたりした支那紳の背廣服は、腋の下がぐつしより濡れて、頸の所で固く結んだ糊つきナブキンの兩端が、豚の耳か何ぞのやうにびんと押つ立つてゐた。

「今日は、醫師。」とチージュは言つた。

アルノルヂイは何やら妙に喉を鳴らして、まるで長老のやうに肥つて柔かい手を差し出した。そして壺を目でさしながら、かう聞くのであつた。

「火酒は？」

「いや、どうしてそんなものを……こんな熱さに、わざわざ火酒を飲むなんて！」さも憤慨したやうな調子でチージュは手を振つた。

「でも、一杯くらゐ！」と醫師は喉を鳴らした。

「いや、有り難う、澤山です！」極度の嫌惡の色を浮かべながら、チージュは口を歪めた。そして椅子を取つて醫師の向かうに座を占めた。

開け放した窓からは廣い消防隊の庭が見えて、そこから

甘酸っぱいやうな馬糞の匂ひや、埃っぽい乾し草の臭が漂つて來た。細長い物置の下には、力なげに轆を上へ撥ねあげられた水槽馬車（露西亞の驛原地方は水缺乏のため、一般用水が立つてゐて、同じく暑さに悩んでゐるやうであつた。高い柱に吊された銅の半鐘が、ぎら／＼と太陽に輝いて、その中から一本の長い綱が、まるで舌でも吐き出したやうに、だらりと垂れてゐた。）

「暑いですね。」とチージュが言つた。

「さう、暖いですな。」と溜め息でもつくやうな調子で言つて、醫師は皿を鳴らした。

まるでたつたいま髪を掴んで引き廻されたやうに、恐ろしく頭を蓬々させた、寝ぼけ眼のボーイは、いきなり食器棚の所から駈け出して來たが、途中で何の用か思ひ出したらしく、また臺の方へ引つ返して、新しく仔豚の冷肉（ホット）に白ソースを掛け始めた。

「ねえ、醫師、」チージュは倦怠に悩んでゐるやうな、突つかゝるやうな調子で言ひ出した。「一體あなたは、この惡魔のおとし筈のやうな土地に、まだ愛想を盡かさないんですか？　もう十年もこゝでまご／＼してゐるんでせう……」

「十七年ですよ。」仔豚の足を皿の上へ抛り出して、白ソー



スをうんと塗り付けながら、醫師はかう訂正した。

「チージュはいま／＼しげに頬骨をびくりと動かしながら、そつぽを向いて了つた。彼は少しも食ひたいとは思はなかつたが、それでもやはり口の中に唾が湧いて来るのであつた。彼は消防隊の庭を見やつたが、今度は自分の肥満した巨軀を持って餘まして、息を切らしてゐる醫師に視線を轉じ、妙に考へ込んで了つた。理由のない憂愁が彼の心中に動き始めたのである。」

醫師のアルノルヂイは杯に火酒を注いで、片目を細めながら、長いあひだ明りに透かしてゐたが、やがて何とも見當のつかぬ表情でかう言つた。

「どこも行く所がないですから……」

「どうしてないんです!?」とチージュは瘤走つた聲で叫んだ。「こゝを出て、西伯利へでも行つたらいいぢやありませんかー」

「いや、西伯利はもつと悪いですよ。」醫師のアルノルヂイは、平然たる調子で言ひ返した。

チージュはまごついた。

「いや、そりや勿論、西伯利へ行くんぢやありませんがね……しかし……あなたは獨身ぢやあるし、金に困つてもゐる

られないやうだから……一つ外國へでも出掛けたらいいぢやありませんか。」

「外國だつてすつかり見て來ましたよ。年取つた俳優のやうに脂きつた、綺麗に剃り上げた顔をナプキンで拭きながら、アルノルヂイはかう答へた。

「すつかりですつて？　なあに、あなたはなんにも見てやしませんよ！」

「何もかも見ました。」と醫師は大儀さうな聲で言つた。

「といふと、例へば？」

「この世にあるもの一切……人間も、芝居も、鐵道も……すつかり見ましたよ。」

「しかし、まさかあなたは宇宙全體を見たか、仰しやる譯ぢやありませんまい？」とチージュは突つかゝるやうに聞いた。

「さあ、どうでせう。」醫師は落つき拂つて言つた。

「こりやどうだ！」チージュは眞底から驚いて、かう叫びながら、好奇の目を見張つて醫師を見つめたが、やがてからからと笑ひ出した。

醫師のアルノルヂイは皿を向かうへ押しやつて、几帳面にナプキンを疊んだ後、食器棚の方へ向いて、何かしら共同濟組合員の合ひ圖めいた手振りをした。こゝでは醫師の合

ひ圖を全部のみ込んでゐるらしく、ボーイはすぐさま麥酒の壺を持つて來た。

「やりませんか？」と醫師は聞いた。

「麥酒なら、悦んでご馳走になりませう！」とチーヅは答へた。

醫師は二つの杯コップになみくくと注いだ。彼が注いでゐる間、水のやうに冷たいうまさうな液體が、ぼつと汗を掻いた硝子の中で、黄色い火花のやうに踊るのを、二人はちつと一生懸命に觀察してゐた。見てゐるうちに、體が涼しくなるやうな氣持ちさへして來た。

「ちや、あなたは宇宙を見つくと仰しやるんですね。」チーヅはすつかりいゝ氣持ちになつて、かう訊ねた。

彼は醫師を愚弄してやりたくなつたのである。

「まあ、お聞きなさい。」と醫師のアルノルヂイは答へた。そのどんよりした、小さな、しかし惻巧さうなな目の中には、少しも活氣ついたやうな表情が見られなかつた。「無論、世界がゆうを見つくれた譯ぢやありません……それには餘り多くの時日と、勞力を要しますからね……しかし、わたしはこの世界に關して、ある觀念を持つてゐますから、わたしとしてはそれだけで澤山なのです……」

「いや、どうして……それだけぢや決して澤山ぢやありません。」自ら信ずる所ありげな、自己の優越を感じてゐるやうな調子で、チーヅは駁論した。「問題は概括的な觀念でなくして、人生と自然のテールその物にあるのです……美といふものはつまり色彩と、形状と、習慣の多種多様な點に含まれてゐるのです……どうしてあなたはそれが分からないんでせう？」

「わたしには何でも分かつてゐるのです。」アルノルヂイは恬然たる調子で辯駁した。「但し、それはわたしの空想の中だけの話ですが、その方がかへつて變化が多いですよ。」

「といふと？」

「どうもありません……ごく簡單です。一たい外國に何があります。海はいつでも青くなければ緑いろです。ところが、わたしはたとへ夢の中でも、虹色をした海を想像する事が出來ますからね……ほら何かに、緑の水精ゴムツが住んでゐる黒い湖を、詩的に描寫したものがあつちやありませんか……それは底なしの湖なのです……え、どうです……エゼレスト山の高さは八里エズルもあるといふ話ですが、わたしはそのエゼレストより百倍も高い山を想像することが出來ます……昔むかしには水晶の城や、牛乳の川や、物をいふ鳥

さへあるぢやありませんか……どうです！」

「そりや昔噺でさあ！」チージュは氣むづかしげに言葉じりを引いた。

「なんだつて同じ事ぢやありませんか……」と肥えた醫師は手を振つた。

チージュはちよつと考へた後、

「ぢや、人間は？……變はつた習慣や、風俗や、典<sup>クワイ</sup>型<sup>イブ</sup>や、そんな物はあなたに興味がないんですか？」

「ありませんな。」アルノルデイはものうげに答へた。「習慣も何もあるものですかね……どこへ行つても、生存競争とか何とか、そんな物ばかりです……分かつてまさあね。

古い物を新しく見せかけただけのものです。わたしだつて子供ぢやありませんからね……どこへ行つても同じやうに醜惡で、たゞその退屈さ加減が、それ／＼違つるだけです……いや、それさへ違つてはゐない、全體が同じやうに退屈なんだ。」

「ぢや、つまりあなたに取つては、何もかも同じ事なんですな？」

「でなきや、どうなんです？ 無論さうですよ。どんな人間だつて、結局死ぬべき運命を持つてゐるので、みんな自

分の生活に満足してゐない。それから後は……まあ、何ですよ、ある者はシルクハットを被<sup>カケ</sup>つてるし、ある者は木の皮靴を履<sup>ハキ</sup>いてゐるし、またある者は既<sup>ハジ</sup>で歩いてゐるくらの相違で、そんな事はわたしに取つて、まるで風馬牛でさあ。」

チージュは不満足らしい様子で、肥滿した醫師の言葉を聞いてゐた。その尖<sup>トビ</sup>つた鳥のやうな顔は、死人に對するやうな侮蔑と憐愍の色を現してゐた。

「ぢや、よろしい。」ほんのお義理で會話を續けるといつたやうに、彼はかう言つた。「ところが、文化はどうです？……もう現にあちらでは空を飛んでゐますよ……あなたご承知でせう？」

「飛んでゐるんですつて？」

「さうです！」まるで航空術の成否が、自分一人に懸かつてでもゐるやうに、得々としてチージュは答へた。

「まあ、勝手に飛ばしたらいいですよ。どうせ大した飛び方は出来やしないのだから……」

醫師がかう言つた調子は、たうてい救ひの見込みのないほど退屈さうだつたので、チージュは會話を續けようといふ意志を、すつかりなくして了つた。かうした考へ方は餘り

に自分から懸け離れてゐて、殆ど理解に苦しむほどだつたので、彼は醫師の誠實さへ疑ひたくなつた。

「たゞもう露西亞式の怠惰病に取つ付かれてるんだ！」と彼は氣難かしい心持ちでかう考へた。

小柄な大學生に取つて生活は沸騰であり、自然は汲めども盡きぬ富みと、美の寶庫であつた。零落した地主の半ば崩れかゝつた邸よりほか、壯麗な宮殿など見た事のない貧しい百姓が、世界でこれ以上豪華な美しいものはないと考へてゐるやうに、チージュは増璃色の海や、房々と枝葉の繁つた木立ちや、薔薇色の山などを持つたこの地球が、美の極致であるやうに思はれた。彼の思想は常に地の上ばかり這つて、無限の空間、水晶のやうな永遠の冷たさ、數億萬の輝く星、偉大な力強い永劫の不動——かういふ天上界へ昇ることが出来なかつたのである。

佗びしい無意味な人間の生活は彼の心に、崇敬の念を呼び醒ますのであつた。哀れな國民どもが愚かにも自分で推戴した、ちつぽけな暴君と闘つてゐる事や、貧弱な船を造つたり腫物を治療したりする科學や、懸命で自然に近づかうとしてゐる藝術の事など考へる度に、彼は頭が燃えるやうな氣がした。嘗て幾百萬となく存在してゐたものと同様

に、いづれは「過去」の霧の中へ没し去るべき運命を持つた、新しい生活様式の實現を夢みながら、彼が參與した熱烈な社會運動は（しかし、これも實際彼自身にさへよく分かつてゐなかつたのである）、絶対眞理のやうに感じられた。もし思ひ掛けない事情が起こらないで、自分が石造の家や、鐵道や、大群集などの間に住むことが出来たら、自分の生活はかうした空虚なものでなくて、すべてが第一義的の經驗や、人類の幸福に貢獻する重大な事件で充たされたに相違ない、とかうチージュは考へたのである。

いま彼の生活はなんの目的もなく、ばかげて退屈であるけれど、この生活が曠原の上を流れる霧のやうに過ぎて行くのは、チージュの考へに依ると、生活その物の罪ではなくて、この小さい田舎町や、憲兵や、肥つた醫師などが悪いのである……

チージュは眠さうに冷たい麥酒を飲んでゐる醫師のアルノルデイを、まるで始めて見るものか何ぞのやうにぢつと眺めた。

「あれでも元は人間なみだつたのだらう！……十年間流刑を食つたとか言ふ話した……しかしその傍はどこにあるのだらう？　ぶく／＼肥つて、山葵汁を懸けた仔豚をたらふ

く詰め込んで、麥酒を飲んで、少しばかり歩いたら、今度は寢る……一體この男に何か少しでも思想らしいものがあるだらうか。それとも、あのお喋りは本當にあれだけの物で、たゞの寢ごとにと過ぎないのだらうか？……あゝ、人間も僅か何年か田舎の泥沼に浸つてゐると、あゝまで深く、底の方へ引きずり込まれて、見る影もなくなつて了ふものだらうか？」

チージュは急に胸苦しいやうな氣持ちがして來た。彼自身もとき／＼極度に無關心な状態に陥つて、どうかすると讀むことも、話すことも、働くことも、考へることも厭な日があるのを、ふと思ひ浮かべたのである。

「だん／＼退化して行くのだな。」心中ひそかに慄然としながら、彼は考へた。「これは一つ手綱を締めなくちや駄目だぞ。」

それからまた彼は、アルブゾフの工場に働いてゐる、黨内労働者のために書いた宣傳文を、大學生のダヂヂェンコに渡し忘れた事も思ひ出した。

醫師は再び麥酒を注いだ。しかし、チージュは急に何もかも忌はしくなつた。醫師も、麥酒も、寢ぼけ顔をしたボーイも、太陽の下で泰平らしくまどろんでゐる消防隊の庭も

……彼は立ち上がつて、手を差し伸べた。「あなたはつまり寢ぼけてゐるんですよ、醫師、それつきりですよ！」

彼はとにかく最後の一言を、自分の物として別れるのが愉快だつた。

アルノルヂイは何とも答へないで、例のどんよりした惘巧さうな小さい目を、ちよつと彼の方へ振り向けたばかりである。その目の奥の方に、何か皮肉なある物がちらと閃めいたが、それは非常に纖細で、稻妻のやうに早かつたので、チージュはまるで氣がつかなかつた。

小柄な大學生が再び並木街を走り出した時、アルノルヂイの四輪馬車が彼を追ひ越した。肥つてどつしりした醫師が小さな腰掛けに坐つて、兩手で杖に凭れながら居眠りしてゐるらしかつた。重々しい雲のやうな埃が車輪の後ろに舞ひ上がつて、長いあひだ静まらなかつた。

「それでも感心に病家へ廻つてゐるわい！」とチージュは機械的にかう考へたが、患者がみな一様に口を揃へて、この醫師を賞めるばかりでなく、優しい愛情をもつて彼の噂をすることを思ひ起こして、彼は和睦するやうな心持ちでかう斷定した。

「不幸な人間、もう將來のない變人だが、しかしそこいらの有象無象よりはました！」

## 三

チージュはあつちの隅からこつちの隅へ歩き廻りながら、やけに太い巻き煙草を飲んでゐた。それは窓の一つしかない、小さな息苦しい部屋で、壁はまるで唾でも吐き掛けたやうに汚かつた。この廣い商家の中でも、一ばん悪い部屋を教室に決められたのが、チージュは癪に觸つて堪らなかつた。それがために彼はこの無恰好な石造の家も、魚や木脂の一杯つまつてゐる倉庫も、没趣味な雜納式の家具も、窓に載せられた鉢植多の花も、足が短くて腹の大きい、魚と銅貨の匂ひの浸み込んだ主人夫婦をも、眞底から輕蔑してゐるのであつた。

開け放した窓からは空氣の代りに、魚や木脂の腐つたやうな匂ひがむん／＼と流れ込んで來た。堅固な倉庫で取り圍まれた廣い庭の中は、まるで市場のやうに騒々しくごちやごちやしてゐた。遅ましい挽馬は無器用らしく、のろのろと動き廻つてゐるし、巨大な荷車や、石器時代の人間のやうに肩はゞの廣い馬方や、鞍や、樽や、魚の一杯つまつ

た四貫俵や、かういふものが雜然と入り亂れてゐた。罵詈叫聲、轟音は庭の上に立ち迷うて、空氣さへいかにも窮屈らしく、ちやうど油の差してない大きな車輪か何そのやうに、埃と苦熱の中をぎし／＼と軋みながら、動いてゐるやうに思はれた。

希臘語や、物理學や、地理などと首つ引きをしてゐるチージュは、かういふ所へ來ると、まるで土と肥料の匂ひのぶんぶんする、素ばらしく大きい丈夫な蕪の中へ食ひ込んだ蟲けらと同様、小つぽけな、縁遠い、しかも妙に毒々しいもののやうに感じられた。

彼は神經的に煙草を吹かしながら、毒々しげに窓の外を覗いた。そして外の轟音を壓倒しようとしてもするやうに、細く鋭い聲を張り上げつゝ、譯讀をするのであつた。

「レオニドス一世（紀元前四九一年）は三百のスパルタ兵を率ゐて、テルモピレの峽谷を占領した……」

くつきり際を立てて刈り込みした、二つの薄あかい襟頸や、仔豚のやうに透き通つて、びんと突つ立つた耳などを、彼はさも憎々しさうに眺めてゐた。彼の顔は蒼白く寔れて、口の兩隅には老人めいた氣むづかしげな皺が寄り、額の上の雞冠のやうな髪は、濡れてぐつたり垂れてゐた。

子供らの汚い指についてゐるインクのしみ、希臘語、餘計者のやうな自分自身の聲、これ等すべてのものが、矢も楯も堪らぬほどあき／＼してゐた。理智の進んだ野蠻人ともいふべき、創造的な好戰生活を送つてゐた希臘人などは、この汗臭い商人の家に取つて何の縁もゆかりもない、随つて自分らは木脂や魚より、ずつと悪い部屋を當てがはれたのだ——彼はかういふ事を、はつきり意識した譯ではないけれど、いやになるほど明瞭に直覺したのである。

やがて時が移つたら、この蔷薇色をした襟類もいやに脂ぎつて、牡牛のやうな肩の上にながつしりと載るだらうし、透き通つた耳も猪のやうに肉がついて渦を巻き、インクに汚れた指も油じんで、ごつ／＼した拳に變はるだらう。その時は文明の保持者であり、人類の未來の光榮の空想者たる古希臘人も、恐怖と嫌惡の念を感じるだらう、そしてこんな腹の突き出た、額の低い、意地の悪い動物が自分の子孫だとは、とても信じられないに相違ない。

外の轟音を壓倒しようとするやうに、チージュの引つ千切れたやうな聲は、まるで誰かに哀訴するやうであつた。

彼は生徒のうしろへ廻つて、肩／＼にその手帳を覗き込んだ。その中にはにじみ勝ちな金釘流の字が、昏弱さうに

汚らしく這ひ廻つて、鮮明な生きた人間の言葉は見分けられないくらゐだつた。

「まるで惻巧な猿が書いたやうだ！」チージュは嫌惡の念を覺えながら、かう考へた。

誰やら戸を叩く者があつた。

「お入りなさい。」とチージュは應じた。

生徒らの姉が顔を覗かした。柔かい灰色の目に、ふつくらした無邪氣さうな唇を持つた、可愛い娘である。

「入つてよろしうございますか？」と訊ねながら、彼女は返事を持たないで入つて來た。

「どうぞ。」とチージュは齒と齒の間から押し出すやうに、ぶつきら棒にかう言つて、やはり授業を續けてゐた。

彼はこの娘の訪問を好まなかつた。それに全體この娘が嫌ひだつた。それはたゞ彼女が商人の娘だといふ、それ一つだけでも充分だつた。チージュはすべて商人が憎くて堪らなかつたのである。彼はこの娘が自分の家の中でも、まるで他人のやうに見える事に氣が付かなかつた。もつとも、子供達を中學校へ入れるやうに主張したのは、ほかでもないこの娘だといふ事は、彼も承知してゐた。

きつと彼女は、子供らにいきなり商賣の方をやらせよう

といふ父親に反對して、長いあひだ根氣つよい戦ひを續けたに相違ない。で、いま彼女は自分に責任があるやうに感じるらしく、しじゆう教室へやつて来て、靜かに窓の傍へ座を占め、白い丸々した手で頬杖をついて、もの思はしげに廣い庭をちつと眺めながら、幾時間も幾時間もこの息苦しい、退屈な教室に坐り續けるのであつた。何の益もないこの無言の監督は、チージュの心をいら立たせた。彼は憎惡の念をもつて娘を見やつた。

「畜生！ お前なぞはごく普通な百姓娘になつて、跣で畑を歩き廻つたり、刈り入れをしたり、草取りをしたりしながら、誰か頭丈な若い衆に首つたけ惚れ込むくらゐが相當してる。そいつは頭の周りをぐるりと剪つて、繩の帯に鐵の櫛でも差してゐようといふ奴なんだ。」と彼は腹の中で考へた。「田舎にゐればちやうど身分相應で、丈夫な娘、よく働く女、よく子供を生む女房として立派なものだ。それがまあ、どうだらう……ばか／＼しい、何のためか知らんが、女學校なんか卒業して、小説を二三十冊讀んだために、かへつて自分で自分をどう始末してゐるか分からないで、厄介な寄生蟲となつて了つたのだ。今に木脂の樽みたいに、ぶく／＼脹れるんだらうよ……仕様のないばか女だ！」

奇妙な事であるけれど、彼女の灰色の目が何とも言へないほど無邪氣で、いき／＼とすんなりした頸筋が心もち目に焼け、笑ふとき唇が白い齒を見せて可愛らしく持ち上がるために、チージュはかへつて餘計いら／＼して來るのであつた。

子供らが鼻汁を擧つたり、椅子の上でもぞ／＼身を動かしたり、インクで手を汚したりしてゐると、チージュは隅から隅へ歩き廻りながら、煙草を吹かしたり、癩癩を起こしたりしてゐた。けれど娘はちつと窓際に坐つたまゝ、無邪氣な優しい灰色の目で空を眺めてゐた。何か物を考へてゐるかどうか、それさへ分からなくらゐであつた。

中庭ではもう最後の荷馬車が出拂つて、まるで木蔭の深い庭に面した通風口でも開けたやうに、どこからともなく新鮮な空氣が流れ込んだ。到頭チージュは時計を眺めてかう言つた。

「いや、もう澤山……」

子供らは急に生き返つた。汚い手帳はどこかへけし飛んで了つて、卓の上には見る／＼墨汁の海が出来た。すると、すぐに一匹のばかな蠅が、その中であへない最期を遂げた。兄の方は窓から外へ飛び出した。弟は何か聞かうとしたけ



れど、たゞ愚かしく口をぽかんと開けただけで、おとなしく戸の外へ引つ込んで了つた。チージュは自分の書物を集めて、青いバンドの附いた古帽子を取り、相かはらず物思はしげに窓際に坐つてゐる娘の傍へ寄つて、暇を告げた。

「さよなら、エリザエータ・ペトロヴナ。」と彼は言つた。

娘はゆる／＼と手を差し伸べて、晴れやかな目を上げた。と、驚いた事には、その目の中に、何かしら奇妙な表情が浮かんでゐた。娘は何か聞きたいと思ひながら、思ひ切つて口へ出せないやうな風つきだつた。顔には紅の色さへさして、そのために彼女は急に一層しほらしくなつた。

「もうお歸りでございますの？」と彼女は聞いたが、それは腹で思つてゐるのと、まるで別な事らしかつた。彼女はまた餘計あかくなつた。

「えゝ。」チージュは幾分おどろいてかう答へたが、すぐにむつとなつて、「まさかこゝで泊る譯にも行きませんかからぬ！」

かうした娘らしい内氣な態度によつて、このよく肥えて落ちついた女の中にも、何ごとか空想し何ごとかに興奮してゐる、若々しい少女の存在してゐる事が、思ひがけなく暴露されたけれど、彼はそんな事にまるで興味も持たなけ

れば、また動かされもしなかつた。チージュはたゞぐづ／＼引き止められるのが、いま／＼しくて堪らなかつた。彼は矢も楯も堪らないほど、外の新鮮な空氣が吸ひたかつた。朝早くから始まつて、太陽が西に沈み、曠原から黄昏の氣が迫る頃に、やつと片づく出稽古の疲れを、少しでも休めたいと思つたのである。

「事によつたら、おれに惚れてゐるのぢやないかな？」小柄な大學生は嘲るやうにかう考へた。と、彼女の壯健で新鮮な肉體に對する露骨な想像が、彼の心中に湧き起つた。「わたしあなたにお訊ねしたい事があります。」と娘は急ぎ込みながら言ひ出したが、突然おちついた無關心な調子で語を結んだ。「あなたはミハイロフさんとお知り合ひですの？」

「知り合ひですよ。」厭な薄笑ひを浮かべながら、チージュは答へた。そして心の中で、「この娘もやはりご同様に——仕合はせな男だなあ！」と考へた。

けれど娘は、相手の厭な薄笑ひに氣の付かない様子で、手を上げて頭を一撫でした後、澄んだ無邪氣な灰色の目で、ちつと彼を見つめながら、かう言つた。

「あの方は一風かはつた面白い人だつて話しますが、本當

「でございますか？」

「一風かつた人なんかありやしません、よしあるとしても、この町ぢやないですよ！」チージュは腹立たしげにかう答へた。

「だつて、それにしても……」

「そりや何といつても、畫家ですからね……新聞でも才能のある藝術家とか何とか書き立ててみます……それに黒い目をして、立派なドン・ジュアンでさあ……」

「ドン・ジュアンですつて？」物思はしげに娘はかう繰り返した。

チージュは突然おそろしく瘳猛な勢ひで、

「勿論田舎のお嬢さん方に取つてですよ！ あんなドン・ジュアンなど、この町に擽かいて棄てるほどあります！ どの電信局へ行つても、ちゃんと控へてみますよ……この連中にはもつと適當な名前が、露西亞語でありますよ——女たらし！ 餘り美しくないですが、しかしよく穿くつてみます！」

「ところで、あるお嬢さんがあの人のために、拳銃ピストルで自殺したといふのは、本當でせうか？」

娘は穩かな調子でかう聞いた。

チージュはすつかり前後を忘れて了つた。

「そりやあの男のためかも知れませんが……しかし僕の知つた事ぢやありませんよ。エリザベータ・ペトロヴナ、退屈で困つてゐるご婦人方を慰めるために、市中の噂話を集めたりするよりか、もつと面白い仕事がありますからね。

世の中にはばかな女は少くないですよ！……極めて簡單な事でさあ。失禮な言ひ方ですが、女に子供を孕まかせて、後足で砂を懸けたんです……本當に仕様のない豪きの者ですよ！ ほかに仕事はないんですからね……もつとも、あんな連中などどうだつていゝです！……さやうなら。」突然チージュは言葉を切つて了つた。

戀ひの悦びに渴してゐる、のん氣で健康なこの娘を始めとして、罪のない田舎令嬢を誘惑するよりほか能のない、すべてののらくら男どもを脅おそしつけて、侮辱を加へるために、彼は殊さら無作法な言葉つかひをしたのである。彼にもつと勇氣があつたなら、もつと／＼ひどい言ひ方をしたかも知れない。彼は娘が極こりを悪ががつて、侮辱を感じるだらうと待ち設けてゐたが、彼女はたゞ心もち圓々した肩を縮めたばかりで、もの思はしげな灰色の目を据ゑて、平然と彼の顔を見つめながらう言つた。

「ですが、あなたはあの人がお厭なんですね！……さよなら。」

「ごめんなさい！」チージは腹立たしげに、娘の手をぐつと引つ張ると、まるで怒つた雀のやうに部屋を飛び出した。娘は夕焼けで色鮮かに燃え始めた空を眺めながら、まだ暫く窓の傍に坐つてゐた。やがて立ち上がつて二足ふみ出したが、突然ばら色の肘をした圓つちい両手を、頭のうしろへ延ばして、さも惱ましげに長いのびをした。無邪氣な灰色の目は心もち閉ぢられて、さがつた睫の下に、奇妙な狡猾らしい光りがちらと閃いた。が、それもすぐ消えて了つて、娘は手をおろすと、そのまま部屋を出て行つた。

#### 四

醫師のアルノルヂイは、重々しく杖に倚り掛りながら、内庭へ入つて行つた。

どつしりした偉大な彼の體は、まるで量り知れぬ重荷を擔いででもゐるやうに、さも疲れたらしく、地の上を引き摺るやうに動いて行つた。彼の曲がつた背中にも、大きな重々しい頭蓋にも、すでに終りを告げた生涯と、眞底まで滲み込んだ深い疲労とを物語る、悲愴なるものが窺はれ

た。まるで小さな内庭を横切るのでなくて、永遠の猶太人のやうに、果てもなく意味もなくはれなくしい休息の喜びもなく、目あてのない旅をいつまでも、いつまでも續けなければならぬ、といつたやうな感じであつた。皮膚がたるんで脂ぎつた顔には、無關心よりほか何の表情も見えなかつた。この無關心の中には憂愁も、希望も、悔恨も、何一つ入れる餘地がなさうであつた。自分の小舎の傍に鎖で繋がれて、悄然としてゐた老犬は、醫師のアルノルヂイを見た時、ちよつと體を掻いて鎖を鳴らしただけである。大方、毎日醫師を見馴れたために、もう疾うからこの歩みの鈍い肥つた姿を、何の意味をも持たぬこの世の事物の中に、編入して了つたものらしい。

内庭はちひさく小ぢんまりしてゐて、遠い太陽が鮮かにその上を照らしてゐた。前栽は愛と忍耐で作り上げたらしく、華やかな友禪模様染め分けられてゐたが、花はみな埃を被つて、折られたり、踏み躪られたりしてゐた。それはちやうど巨人がこの家を目がけて恐ろしい襲撃を試みながら、重い足で踏み荒らしたやうであつた。入り口の階段のすぐ傍に、殺風景な黒い色で塗られた椅子形の便器が、乾かすために持ち出されたらしく、通り路の邪魔をしなが

ら立つてゐた。その圓い孔は、人をばかにした厚かましい  
顰め面のやうに、露骨に無作法に口を開けてゐた。醫師ア  
ルノルヂイは機械的に、その方をちらと見やつたが、別に  
立ち止まりもせず、階段を上がつて行つた。

戸には鍵が懸かつてゐなかつた。醫師はそれに馴れてゐ  
たので、自分で戸を開けた。堪らないほど息苦しく熱い控  
へ室には、誰ひとり客を迎へる者もなかつた。醫師はの  
ろ／＼した手つきで釘に帽子を掛け、片隅へ太い杖を置いて、奥へ入つて行つた。幼稚な古めかしい客間は、ものう  
げな沈黙と埃の匂ひで、彼をとり圍んだ。どこへ行つても  
ひつそり閑として、まるで一切の者が死に盡くしたやうだ  
つた。たゞ一匹の大きな蠅が、なぜか意地悪さうに圓卓の  
上に圈を描いて、その齧すやうな惱ましげな唸り聲が、家  
ぢゆうに響き渡るのであつた。

醫師のアルノルヂイは次ぎの間を覗いて見た。そこはた  
つた一つしか窓がついてゐない上に、隣家の壁が外廊下に  
面してゐると見えて、書物卓も安樂椅子も、厚い本の入つ  
た埃だらけの書棚も、柔かい薄やみの中に沈んでゐた。何  
かしらばやつとした物の影が、部屋の隅々に浮遊してゐる  
やうに思はれた。ぼんやり白く見える窓を背景にして、胡

麻鹽の禿げ頭が黒く影繪のやうに浮き出してゐた。この頭  
は安樂椅子の中に深く沈み込んで、兩手に顔を埋めてゐた。  
「イアン・イアーノゴッチー」アルノルヂイは鬨の上に立つ  
たまゝ、餘り大きくない聲でかう呼んだ。

頭はびくりともしなかつた。疎らな胡麻鹽の毛は心細く  
日光を透かして、骨と皮ばかりに瘦せた細い指の上には、  
死人のやうな青みがよつた光りがちら／＼してゐた。

「イアン・イアーノゴッチー」やゝ大きな聲で、醫師はもう  
一度かう呼び掛けた。

後頭部が死人のやうに骨張つて、ちつとしたまゝ少しも  
動かない人間の頭からは、息づまるやうな静寂の氣が發散  
してゐた。その中には何かしら恐ろしい、死のやうなある  
物が感じられた。が、それはまだ死ではなかつた。なぜと  
いつて、醫師のアルノルヂイがちつと目を見すゑた時、憐  
れな胡麻鹽の毛が禿げた頭蓋の上で、呼吸のたびに微かに  
動くのが、目に入つたからである。醫師はほつと溜め息を  
ついて、思ひ切り悪さうに引つ返さうとした。と、次ぎの  
間でせか／＼した小刻みな足音が聞こえて、悲しげな顔つ  
きをした小柄な白髪の婦人が、客間へ入つて來た。

「あゝ、あなた、先生でめらつしやいましたか」と言ひ

ながら、彼女は薄暗い部屋の中を見透かして、片手を振つた。

「やはり同じ事ですか？」醫師のアルノルデイは訊ねた。

老婦人はまたもや片手を振つた。限りない憂愁と疲勞とが、この老人らしい絶望的な身振りの中に感じられた。が、それでも彼女は、安樂椅子に坐つてゐる老人の傍へ寄つて、ちよつとその肩に觸つた。

「あなた、先生がお見えになりましたよ……」

頭は動かなかつた。

「先生がお見えになりましたよ、あなた。」と彼女は繰り返した。

頭はふらくと慄へながら動いて、剃刀かみそりの入れぬ、胡麻鹽の鬚で蔽はれた顔が、こちらへ振り向いた。そして涙の滲んだ、ぼうつとした視線が醫師の方へそゞがれた。

「あゝ」まるで呻くやうな、殆ど聞き取れないくらゐな聲が響いた。そして、病人は撓たがぎ離すやうな身振りで、慄へながら急に起き上がりとした。

「坐つておいでなさい、坐つて。」と醫師のアルノルデイは言つたが、白髪頭のイワン・イワーノヰッチはもう衰へ果てた、關節の曲がらぬ足で立ち上がった。半ば死んだやうな

彼の顔は、客を迎へる微笑のためにひん曲がつてゐた。この微笑は恐ろしかつた。その中には、どうする事も出来ない絶對の無力と、自分の衰弱や醜態に對する、みじめな老人らしい羞恥——かういふものと闘はうとする、以前の理智的な禮儀心の苦悶があらはれてゐた。それは眞に魂を震撼させるやうな悲劇であつた。

老婦人はそつと彼の腕を取つた。すると、古びた黒いフロックコートの中でふらくしてゐる、瘠せた骨ばかりの體が、顫へながら客間へ入つて來た。それは解剖室から取り出した古い骸骨が、嚴まめしい大學教授のフロックコートを着て歩き出したら、かうもあらうかと思はれるやうな、惨酷な滑稽みを帯びてゐた。

彼は安樂椅子に腰をおろした。肥えた大きな醫師はその前にどつしり坐つて、注意深く眞面目に病人の顔を見た。

「ご気分はどうです？」

イワン・イワーノヰッチは、またしても濟まないやうな、憐れげな微笑を洩らした。

「どうもかうありません。いけないです。」

「食慾はありますか？」

「まあ、普通ですな……よく食べますよ。」

「何がよくでせう！」小柄な老婦人は愁はしげに手を振つた。

「なぜ、どういふ譯で……わたしはよく喰べるぢやないかと……」老人はとつぜん腹を立てた。彼の聲は子供が怒つた時のやうに、慄へを帯びて來た。「現に今日なども肉汁も飲んだし、それからあの……何とか言つたつけ……なあ、ほら、あの……春の始めに花の咲く……」

醫師のアルノルヂイはげんさうに老婦人を見やつた。「莓ですよ。」と彼女は口を添へて、きまり悪さうとも、苦しさうともつかぬ微笑を浮かべた。

「あゝ、さう……莓だ。」と老人は言ひ直して、これはたゞひよいと偶然まちがつたので、こんな事など少しも氣にはしない、といつた心持ちを見せようと努めながら、膝の上に置いた瘡かさせた手の指を、長い間ぼんやり動かしてゐた。

醫師のアルノルヂイは無言のまま、試験するやうに彼を眺めてゐた。それは彼の體內で、老いさらばうた人間の内臓が破壊され、神祕な死の作業が着々と進行し、腦力が消滅し、視力が減退し、當てはさかに鼓動してゐた心臓が、老い疲れて靜かに止まつて行くのを、ぢつと觀察してゐるかのやうであつた。このとき彼はふと思ひ出した——むか

し學生時代に始めて顯微鏡で、腐敗しかゝつた組織體の中に發生する、生きた有機物を觀察した事がある。奇妙な虹のやうな光りで色どられた顯微鏡のレンズの中で、何物か恐ろしい速度で廻轉しながら、次第にもその狂ほしい運動を早めて行く様ようが、彼の注意ぶかい、とはいへ驚異に打たれた目に映じた。それは獨自の樞軸を中心として廻轉してゐる、一つの小さな世界であつた。彼はなぜか胸のつまるやうな氣がして、この恐ろしい微生物の運動を止めたくなつた。遂に半透明の小さな蟲がレンズの下で、惻巧りやくさうに生き生きと動き始めた時、アルノルヂイは恐ろしいやうな、嬉しいやうな、悲しいやうな心持ちがした。つい一分間前まで、死よりほか何物もなかつた所に、忽然として生きた蟲が——今の今までどこにも存在しなかつた蟲が現れるとは……彼は自分の心持ちを傳へる事も出来なければ、それを説明する事も出来なかつたけれど、その中には彼以上に大きなある物が潜んでゐた。それは彼自身の生活から、急に一切の意義を奪つて了ふほどの、恐ろしい力を持つてゐるものであつた。その晩、學生のアルノルヂイは外へ出て、死人のやうに酔ひ潰つぶれたのである。

「ときに、何か面白い話しはありませんか？ あ、それ、

何と言つたか……あれですよ？」不意にイワン・イワーノ  
平ッチは話し掛けた。視力の鈍つた涙つぽい目は、奇妙な不  
自然な活氣を帯びて、醫師の方へ向けられた。

醫師アルノルヂイはこの惱ましい目つきが分かつた。死  
に瀕した病人は何かにしがみつきたいのだ、たとへ好奇心  
によつてでも、遮二無二遠ざかつて行く生命と聯絡を保ち  
たいのだ。

「何ですか、別に面白い事などありませんよ、何もかも舊  
態依然たりです。」醫師は妙に言ひにくさうに、やたらに言  
葉を離しながら答へた。

彼は出来るだけ自然に素直に返事をして、あり觸れた平  
凡な話しを始めたかつた。つまりはたの者が、健康な人に  
對するのとは違つた態度を取るといふ事を、病人に感じさ  
せまいがためであつた。けれど言葉が思ふやうに口から出  
て來ないで、聲はいやに緊張したわざとらしい響きを帯び  
た。老人が理解してくれるといふ確信もなかつたけれど、  
それと同時に、彼の問ひに答へないのも空恐ろしく感じら  
れた。何と言つても、彼は古い大學教授で、その名が何ら  
の痕をもとどめずに消え去るべき人ではなかつた。彼の著  
書は嘗て當の醫師アルノルヂイにも、人生を理解する事を

教へてくれたのである。

「何もありませんかな？」とイワン・イワーノ平ッチは繰り  
返しながら、何となく信じ兼ねるやうに考へ込んだ。

醫師のアルノルヂイはちつと相手を眺めながら、次ぎを  
待つてゐた。けれどイワン・イワーノ平ッチは、突然いら  
らとあわたゞしげに身動きを始めた。

「何かご用ですか、あなた？」忠實な愁はしげな目を夫か  
ら離さずに、老婦人はかう聞いた。

「どうだね、皆で醫師と一緒に……あれを喰べようぢやな  
いか……それ、何と言つたかな……はる……きち……」老  
人は記憶を呼び起こさうと、恐ろしい努力をしたが、いかに  
も濟まぬやうな、憐れつぽい目つきで醫師を見やりながら、  
思ひ切りの悪い聲で語を結んだ。「きつね——だつたね？」  
次第に硬化して行く腦髓を支配しようとして、空しい努力を  
してゐる瀕死の老體が、どんなに深い憂愁と惱ましい疑惑  
に充ちてゐるかは、察するに難くなかつた。彼の様子を見  
てゐると、痛ましいやうな、胸苦しいやうな、をかしいや  
うな氣持ちがして來るのであつた。醫師の肥えた顔を病的  
な痙攣が走つて通つた。

「莓ですよ。」とまた老婦人が口を添へた。

「あゝさう……」目を上げて醫師を見ながら、イワン・イワノノギッチは、言葉に盡くされぬ苦惱と哀願の表情を浮かべて、かち言つた。「ご覚なさい、記憶力がこんなになつて了りましたよ！」

「記憶なんか言つてる場合ぢやありませんよ！」いま／＼しいとでもいふやうな聲で、老婦人は抗辯した。「たゞ病氣して熱があるから、それで記憶が弱つたのですよ。今によくおなりになりますよ。」

「あゝ、何を言ふのだ！」いら立たしげに老人は叫んだ。「なんの、よくなるものか……わたしだつて子供ぢやないからな！」それから哀愁の色を浮かべながら、醫師の方へ向いてかう附け足した。「こんなになるまで生きてゐようと、思はなかつたですよ！」

長いものうい沈黙が襲うた。またしても大きな黒い蠅が卓の上で、無氣味にぶん／＼唸る音が、静寂の中に聞こえ始めた。そして、まるで空氣が足りないのかと思はれるほど、息苦しくなつて來た。イワン・イワノノギッチは、禿げた頭を手で支へながら、ちつと坐つてゐた。この頭の中で、貧しく弱々しい人間の思想が、惱ましく恐ろしく廻轉してゐるのが感じられた。それはまさに永久の闇に消えなんとし

てゐる、一點の手頼りない火のやうなものだつた。醫師のアルノルヂイはこの思想を最後まで追窮して、一刻ごとに死へ近づいて行くのを確かに知つてゐる人間が、果たしてどんな感じを抱いてゐるか、たつた一度だけでも突き留めやうと努力するらしく、無言のまま彼を見つめてゐた。

老婦人は立ち上がった。そして、そつと醫師に向かつて、後からついて來るやうに小手招きした。

二人は音のせぬやうに次ぎの間へ出て、そこに腰をおろした。瀕死の病人はたつた一人とり残された。

「もう四箇月といふもの、あの通りなんですからねえ！」老婦人は絶望したやうな聲で、悄然と言ひ出した。「どうしたのでせうねえ、先生？」

アルノルヂイは弱々しく肩を竦めた。

「どうも仕方がありません……人間の壽命は限りのあるものですから……」疲れたやうな調子で眞面目に彼は答へた。「いえ、それはわたしも承知してをりますけれど……しかし、どうしてあんな風なのでせう？ 眠るやうに息を引き取つて、それきり歸つて來なければよろしいのにねえ、あの人苦しみやうは、まあ、どうでせう！ 先生、たくも自分よくそれを承知してゐるので、たゞ口に出して言はない



ばかりなのでございます……ねえ、先生、自分の近しい人が死ぬといふのは、それはもう恐ろしい事に相違ありません……何にせよ、わたし達は四十二年の間、一緒に暮らして来たのですからねえ……けれど、わたしはどんな事でも辛抱いたしますが……何より恐ろしいのは、じり／＼に死んで行くといふ事でございます……わたしどうもうまく言へませんけれど、お察し下さいませうね……自分の近い愛する人が段々……なになつて行く姿を見るのは、何といふ情ない事でございます……まあ、考へて見して下さい——たくはこのごろ方々の店を馬車で乗り廻して、何やかや買ひ物をする癖が出来たのでございます。あの手代どもの妙なにか／＼笑ひ、知り人の痛々しさうな目つき……あゝ、堪りません！ わたしは以前、若死にする人達を氣の毒に思つて、たくが充分年を取るまで生きてくれるやうにと、よく神様にお祈りしたのですが、今もおもひ出すと不思議で堪りません……何といふばかりか、わたしはな祈りだつたでせう！ お分かりになりますか、わたしはこれを思ひ出すと、不思議な氣が致しますの！ ねえ、何といふ恐ろしい事でせう……いえ、わたしうまく口で言へません！……」

「よく分かります！ 醫師のアルノルヂイは靜かに答へた。老婦人は強く、殆ど瘰癧的に、皺だらけの手を握りしめながら、ちつと据つた目で、長いあひだ眞すぐに前の方を見つめてゐた。

「あゝ、一體あゝした苦しみが、誰に必要なのでせう！」と彼女は獨りごとのやうに言つた。

「分かりませんなあ……」こだまのやうに、機械的にアルノルヂイは答へた。

この言葉の後に襲つた沈黙の中で、目に見えぬ何ものかの翼が、おごそかにはたく／＼と搏つてゐるやうに思はれた。やがて老婦人は、蜘蛛の巣に掛かつた蠅の呻きに似た、弱々しい聲でまた言ひ出した。

「先生、わたしは疲れました！……しかも、これが誰にも分らないのでございます。けれど、わたしだつて人間でございます……わたしにも限りがありますからねえ！」  
彼女は誰一人として自分の恐ろしい悲しみを理解してくれる者がなく、といふ事を訴へるのであつた。それは何の希望も光明もなく、毎日々々、半分死骸のやうな人と暮らしながら、かつては天にも地にもかけ變へのない、何よりも大切な存在物として、自分の生活全部を充たしてゐた人

が、次第に腐敗分解して行くのを、目の當りに見るべき運命を擔つた女の悲しみである。これはどんなに慘酷な人間でも、かつて考へ出した事のない恐ろしい拷問であつた。生きた人間を死骸と一緒に棺の中へ入れたまゝ、いつまでもそれなりに打つちやつて置いて、死體が次第に腐爛して行き、脂ぎつた蛆蟲がその上を這つたり、膿が流れたりするやうになり、頭蓋骨が露出して、墓穴の暗やみでにたにた笑ふのを、ぢつと眺めさせるのと同じである。いかなる言葉をもつてしても、この恐ろしさを完全に言ひ現して、ほかの者に理解させ、同情させる事は出来ないだらう。

彼女の悲しみは深刻で眞剣だつたが、不思議な事に、醫師のアルノルヂイは、彼女が何か言ひ残してゐるやうな氣がした。人が彼女に同情を表しても、またいつも變らぬ無益な繰りごとにすぎなく顔をそむけても、彼女は同じやうに腹を立てて、いら／＼するのであつた。何かしらある物が彼女に必要なのであつた。それは、彼女自身明瞭に意識しない何ものかであつた。死に行く人を哀惜する彼女の心持はかなり痛切で、近い中に來たるべき最後の事を想ふと、心臓に血が溢れるのであつたけれど、疲れ切つた肉體と苦しみ抜いた精神とは、静養を欲してゐるのであつた。

それが何より恐ろしかつた。この二つの物は、いつともなく彼女の意志に反して、病人が早く死んで自分を休ませしてくれるやうにと、要求するのであつた。で、彼女はこの心持を恐れて、そんな事はあるべき筈がない、たゞ病人の傍に一人きり置いてきぼりにされるのが苦しいのだと、大急ぎで自他に辯解するのが常であつた。

「何より一番つらいのは、のがれ道がないといふことですの、先生……のがれ道が！」

「のがれ道はいつでもあります。」アルノルヂイは疲れたやうに言つた。「この世の事は、すべてとまれかくまれ、終りがあるからいゝのですよ……遅かれ早かれ。」

老婦人は慥えたやうな目つきで、年取つた役者のやうに無興味な、たるんだ醫師の顔を見やつた。

「えゝ、まあ……それはわたしも知つてをります……」恐ろしい一ことを言はずまいと思つて、彼女は周章でてかう言つた。「何もかも終りを告げます……けれど、あゝした苦しみは何のためなんでせう？」

「知りません……」依然として簡単に醫師は繰り返した。

「わたし達が苦しむといふ事は……」

客間の中から弱々しい、短い響きが聞こえた。それはま

るで、駈れたバネが腹立たしげに軋む音のやうであつた。  
「呼んでゐるー」何かしら妙な非難するやうな調子で、老婦人は言つた。

「ポリーナ、ケリゴリーエヴァー！」と病人は呼んだ。

二人は立ち上がつて、客間へ赴いた。

老教授はフロックコートの廣い袖口から、力なげに突き出してゐる瘠せた指で、安樂椅子の腕木を掴みながら、眞直に身を伸ばして坐つてゐた。彼は慫えたやうな疑り深い目で、侮辱でもされたやうに二人を見つめるのであつた。

「どうだね、足りるだけ喋つたかね？」と彼は子供らしく意地悪い調子で訊ねた。

「わたしが話した事ですか？ なに、つまらない事ですすよ、あなた……」老婦人は濟まないやうな聲で、優しくかう辯解した。

イワン・イアーンノギッチは迂散くささうに彼女を眺めながら、落ち込んだ口をもぐぐさせた。彼はみんなが轟々した自分を冷笑して、もういゝ加減に死にさうなものだと、蔭口を利用してゐるやうな氣がするのであつた。何かまだそのほかに、一番おそろしい物が彼の心に閃いたが、弱つた脳にはそれが何だか分からないので、たゞ力ない孤獨な苦

痛を苦しむより、仕方がなかつた。

「そこに誰かゐるやうだな。」と彼は心配さうに言ひ出した。

「誰がゐるのですか。先生がゐらしたつたのですよ……」  
「先生？ あゝ、醫師、あなただつたのですか……わたしは氣が付かなかつた。ねえ、醫師、あなたは昨日われくの會に出席なさいましたか？ 何といふばかり者らでせう！ いつもく不死の議論ばかりしてゐる……まるでわたしが頼みでもしたやうに！ あなたはどうお考へですか？」

「あなた何を言つてらつしやるの？」と老婦人はつらさうに訊ねた。

しかし、老人はそれに耳も假さないで、充分意識の働いてゐるやうな興奮した目で、まともに醫師を眺め續けた。黒い霧が彼の脳へおりて来て、衰へた思想は遠い過去を現在と混濁させながら、一生懸命に跳いてゐるのであつた。それはちやうど霧の深い海の中で、方向を失つた鳥が、落ちたり、飛び上がったたりするのに似てゐた。

「もしお望みなら、わたしはこのまゝ往來へ出てやるよ。みんな勝手に見るがいゝ……さぞいゝ恰好だらうな？ え？ ……これはなか／＼面白いでせう、醫師？」

「さう、それは非常に結構です。」と醫師のアルノルヂイは落ちつき拂つて同意した。彼の顔の表情は全然無關心であつたが、それだけに彼の言葉の企まざる皮肉が、一そう恐ろしく響いた。

「ぢや、いゝんですな？」と老人は繰り返して、醫師に目ませをしながら、勝ち誇つたやうに笑ひ出した。それは彼が自分の唯一の腹心で、自分がどんな狡い計略を考へつたか、ちやんと察してゐるものやうであつた。

「全くいゝですよ。」

醫師は一見したところ何の興味もないやうで、その實おそろしい意味に充ちた、この混亂した囁語を、一心に理解しようと努めた。かつて聰明で、敏感で、思慮に富み、自分の思想に誇を抱いてゐた人間の廢墟を、ぢつと眺めてゐるうちに、生きた精神の最後の火花が、その内部で力なく消えて行くのが感じられた。彼は人間の不死などといふ考へが、いかに愚かな空想であるかを悟つた。神とか死後の生活とか、宇宙の魂などといふものは、素人あがりの畫家が、黒い空虚を蔽つてゐる幕の上に塗りたくつた、無器用で滑稽な畫のやうに思はれた。そこには次第に腐爛して行く肉體——燃え盡きて行く蠟燭よりほか、何ものもなかつ

た。頭腦が働き、肉體が完全な生活を營んでゐる間こそ、宗教を論じ不死を信ずる事も出来るけれど、いま一箇の人間が單なる瀕死の動物となり、白痴となり、内臓と脆い骨の塊りに化して行くのを、眼前に明瞭に見せつけられた時、さういふ思想は鬼や化け物の昔話と同じくらゐ、滑稽にばか／＼しくなつて了ふのであつた。

老人は力ない首を兩手の上に垂れ、目をふさぎながら考へ込んだ。

醫師のアルノルヂイはもう歸らうとしたが、そのとき突然イワン・イワーノヰッチは頭を擧げ、意識の籠もつた目をまともに据ゑて、かう言つた。

「あゝ、もう少し力があつたらなあ！ ぼつちり、ほんの一週間だけでも……たゞ休息するだけでいゝのだ……一切のことを思ひ出すだけでいゝのだ。手が慄へないで、足が立ちさへすれば……わたしは門の外へ歩いて行つて、ベンチに腰を掛けるのだがなあ……！」

醫師のアルノルヂイは思はず微笑した。瀕死の病人のこのさゝやかな希望が、餘りに意想外だつたからである。彼は微笑した後で、門の外へ出てベンチに腰を掛けたいといふ希望が、たうてい實現の出来ない、及びもつかぬ空想に

なるとは、よく／＼世界が狭くなつたものだとか考へた。ふとどういふ譯か、こんな事が醫師の心に浮かんだ——もしパンテオンに埋葬されたナポレオンが、何か希望を起し得るとしたら、彼は永久に胸の上に組み合はされた手の指を、せめて一本だけでも動かしたいと空想して、泣いたり祈つたりするに相違ない。

と、またもや老婦人のたるんだ顔を、痙攣が掠めて通つた。

老婦人は瞬きしないやうに骨折りながら、涙に充ちた目で見つめてゐた。もうその目の中には、早く休みたいといふ隠れた希望はなくなつて、たゞ限りなき悲痛な哀憐の情ばかりが見えてゐた。

「ぢや、奥さん。」と醫師は立ち上がりながら言つた。「別に變はつた事はありません。續けてスベルミンをお上げなさい……もし熱があつたらアスピリンをね……どうもほかに……」

彼は老教授に別れを告げようとしたが、老人は慄へる禿げ頭を、骨ばかりの死人みたいな兩手に凭せて、もう目を閉ぢてゐた。その垂れた臉の蔭から、いかにも毫綠したやうな、惱まじげな涙が光つてゐるやうに、醫師は感じたの

である。

ポリーナ・グリゴリエヴナは醫師を見送りに出た、彼が帽子や杖を取つてゐる間に、彼女はまた自分が疲れた事や精も根も盡き果てた事や、何も見ず、感せず、意識しないために、地の中へ頭を突つ込みたいと思ふ事などを、くどくどかき口説き始めた。彼等は二人ともすべての言葉——人間の舌の發し得る一切の言葉が、無益なものだと悟つたのである。

この時はでな服装をした、一見して妊娠らしい、一人の肥つた婦人が、まるで挑むやうな態度で、つか／＼と控へ室へ入つて來た。その後から洒落者らしい、赤毛の將校が續いた。

「なんだつてお母さん、いつも愚痴ばかり言つてるんですの！」醫師のアルノルヂイと無造作に挨拶しながら、婦人は憤慨したやうな調子で、聲高にかう言つた。「そんな事を言つたつて、仕様がなぢやありませんか。それはあなたの務めですもの。つらいんですつて？ それぢや、どうしようとして仰しやるんですの？」

老婦人は憎えたやうな風をした。苦勞が彼女を押し挫いで了つたのである……

「そりや、リードチカ、わたしだつて務めといふ事は知つて居るけれど……それでもやはりつらいからね。」

若い婦人は、曲のない、投げやりな様子で、手を擴げた。

と、妊娠を隠すために、わざと廣く仕立ててあるレースの着物が、香水と若い健康な女の匂ひを、部屋ぢゆうへばつと擴げるのであつた。醫師のアルノルチイは、恥づかしげもなく突き出た大きな腹を、我ともなしに思はず尻目にかけてながら、無意識的に、惱ましい怪訝と、羞恥の念を感じた——一體どうして世間の人々は、すべての者を待ち受けてゐるこの恐ろしい最後を見ながら、新しい人間の生命——換言すれば新しい苦痛を受胎したり、妊娠したり、生み出したりなど出来るのだらう？ それどころか、まるで偉大な使命でも果したやうに、それを誇りとしてゐるではないか。裸體を暗示するやうなげくしい着物にも、圓い固さうな腹にも、健康な若い男がしつこく後にくつついてゐるといふ事實にも、何かしら圖々しく感じられるものがあつた。

「彼等は恐ろしい罪を犯してゐるのだ！」突然アルノルチイの頭に、かういふ考へが浮かんだが、この偶感を持ちこたへて、最後まで徹底さす勇氣がなかつた。

「それにお母さん、何だつて玄關先にあんな見つともない物を、麗々しくお出しなすつたの？」妊娠はいま／＼しざともつかず、媚態な冗談ともつかぬ表情で顔を顰めながら、半分わらひ／＼、投げ出すやうに言つた。「幾ら何だつてあゝ無遠慮に擴げ立てて……」

「一體なんの事なの？」と老婦人は惱めたやうに訊ねた。

すつかり忘れて了つてゐるらしく、急には合點が行かなかつたが、やがて、

「あゝ、そんな事どころかね！」と彼女は言つた。

醫師のアルノルチイは、はでに着飾つた妊婦を、重々しい目つきで見送りながら、入り口の階段へ出た。もう中庭を歩いてゐる時に、恐ろしく打ち解けた、朗らかな彼女の聲が聞こえた。

「今日は、お父さん！ ご気分はいかゞですの？」

と、急に憂愁と嫌惡の發作に打たれながら、彼はかう考へた。「我々はみんな、みんな一人残らず死ぬるんぢやないか！」

太陽は明かに輝いて、雀どもは喧嘩でもしてゐるやうに、騒々しく庭で轉つてゐた。遠く家々の屋根や木立ちの上に、かる／＼した鐘樓の圓屋根が金色に光り、古い蛇腹の邊で

は、鳩が銀色に閃いてゐた。

その時またもや支離れに置いてある黒い醜い器が、しみのやうに醫師の目に映じた。それは人間の排泄物の胸悪い匂ひに交じつて、愚弄するやうな忌はしい死の呼吸を、あたりへ擴げてゐるのであつた。

そこですべての物が終つてゐた。遂に人生は一切の扮飾を棄てて、厚かましく裏面を引つ繰り返して見せた。今まで恥つべきものとして、隅の方へ隠されてゐた物が、急に堂々と表へのさばり出て、大威張りで上席を占め、通り路の邪魔をし、美々しい花を押し倒してゐる。

醫師のアルノルヂイは立ち止まつて、機械的に杖をさしのべ、厭はしい木造の怪物に觸つて見た。杖は鈍い音を立てて撥ね返つた。圓い穴は悪臭を放ちながら、嘲るやうにコバルト色の空を眺めてゐた。

醫師のアルノルヂイは杖をおろして、背を曲げながら、静かにそこを歩み去つた。

## 五

次ぎの病家は隣りの街だつたので、醫師のアルノルヂイは徒歩で出掛けた。いつも彼を病家まはりに曳いて行く牝

馬は、並み足でとぼくと後からついて來た。白っぽい頭をしたニキータは、きちんと行儀よく馭者臺に坐つてゐたが、その様子は醫師を俱樂部へ連れて行つたり、一人で水を取りに行くときと、すつかり同じ事であつた。

暑熱はまだ収まらないので、往來は依然として埃つぽく、太陽のもとにまどろんでゐた。窓の鏝戸は依然としてびつたり閉めきられて、家々は古びた空虚な感じを帯びてゐた。この家の壁の中で、人間どもがうよく蠢めいたり、笑つたり、接吻したり、泣いたりしてゐるのだ。もしすべての家の屋根を一どきに取りのけて、上から覗いて見たら、一刻も休息を知らずに、物狂ほしく動き廻つてゐる、蟻塚のやうな光景が目映るかと思ふと、不思議な氣持ちがするくらゐだつた。ありとあらゆる隅々隈々に、苦しみ躓きながら子孫を生んで、彼等にもまた自分と同じ苦しみを經驗させようとしてゐる。不幸な生物が蠢動してゐて、苦しみの餘りに、さまざまの醫師アルノルヂイを呼び招くのであつた——まるで必然な運命を遁れる方法を、授ける力を持つた人かなんぞのやうに。

しかも彼らの多數は、今日くるしい努力に依つて死から救はれながら、明日はもう死んで行くのであつた。たゞ一

ど餘計に同じ苦痛と、同じ死の恐怖を味はふのみである。醫師のアルノルヂイは自分の苦しい努力が、いかに無力で無意義であるかを、明瞭に悟つてゐたので、もう久しい以前から、別に興奮する事なしに、自分の義務を果たすのに馴れて了つた。自分の治療が成功しようと、または病人が自分の手の中で目をねむらうと、醫師のアルノルヂイはいつも同じやうに平然として、すぐ次ぎの病家へ出掛けて行つた。それはちやうど時計屋が一つの時計を見終つて後、また別な機械に取りかゝるのに似通つてゐた。たゞ彼の頭は日まじに重々しく、その顔はますます疲れたやうになるのであつた。

暑さのためといふより、寧ろ自分の肥大した體のために喘ぎながら、彼はとあるくよりへ入つて、皮の臭ひのする小さな町人の家らしい中庭を通り抜け、一軒の家へ入つて行つた。そこでは彼の到着を、神の如く待ち焦れてゐるのであつた。

絶え間のない心配のために干あがつて、憎えたやうな顔をした若い女が、絶望したやうな目つきで醫師を迎へた。この見馴れた表情に依つて、醫師のアルノルヂイは、子供がだん／＼悪くなつて行くといふ事を悟つた。もつとも、

彼はそれを豫期してゐたのである。市中では悪疫が流行して、死が家から家へ音もなく訪れてゐた。まだ生の何たるやを知らぬ幼い者どもが、最後の息を吐いて、小さなこつこつの死骸と化して了ふ。それを幾十となく取り集めて、郊外へ搬んで行き、地の中へ埋めるのであつた。そこには縦の若木が植ゑられて、緑の色が年と共に濃やかになつて行く。

「ところで、どんな模様ですかね？」どこへ帽子を置いたものかと、あたりを見廻しながら、醫師のアルノルヂイはかう聞いた。

小さな汚い部屋は焼けた脂と、石鹼の匂ひがしみ込んで、汚れた肌衣が到るところに、山の如く積み上げてあつた。石鹼の泡の一杯ついた盥の中からは、脂っこい甘つたるい湯気が、もく／＼と天井へ昇つてゐた。悲哀と昏困とは、襤褸ぎれの一つ／＼、塵の塊りの一つ／＼からさし覗いて、人生の大道を踏みはづして落ちぶれた人々が、最後の力を失つて行く有り様を、さも満足げに眺めてゐた。

「またいけませんの、先生、また餘計いけません！」なぜか小さな聲で、女はかう答へながら、アルノルヂイのゆつくりした手の中から、帽子を機械的に取つた。



「大丈夫ですよ、おかみさん、氣を揉むことはありません……神様のお恵みで、何もかもうまく行きますよ。」肥つた醫師は相手の顔を見ずにかう言つて、重々しく吐息をつきながら、薄暗い息苦しい部屋の闇を跨いだ。その中から死に行く幼児の聞き馴れた、ちぎれ／＼のしは覆れた聲が聞こえた。

この上で瀕死の幼児が受胎し、分娩したものと思はれる、大きな羽蒲團のかゝつた大形寢臺の傍に、目のきら／＼光る若い町人が立つてゐた。彼は同じやうに希望と恐怖に充ちた、熱病やみのやうな目つきで醫師を迎へた。そして床の上に枕を落としながら、飛んで行つて、醫師に椅子を勧めた。

アルノルヂイは重々しく寢臺の傍へ腰をおろして、まるで氣力を集中しようとするやうに、ちよつと考へ込んでゐたが、やがて小さな熱い手を取つた。するとその手は、すぐ本能的に拗ぎ放さうとして、力なく腕きはじめてた。幼児はどんよりした視力のない目を、心もち醫師の方へ向けて、びくりと體を慄はすと、一そう強く腕き出した。梟の爪に掴まれた小さな獸の發する悲鳴のやうな、やつと聞こえるか聞こえないかの啼き聲が、部屋の中に響いた。

醫師のアルノルヂイは手を放して、考へ込んだ。彼には診察の必要などなかつた。この癡癡的な腕き方や、どんよりした目の色や、呼吸の音などから推して、もう望みはないと察した。この上はたゞ良心の疾ましくないために、別に成算はないけれど、思ひ切つて英雄的な方法に訴へるほかはなかつた。

赤い斑點で蔽はれた、まるで雛子のやうに華奢な、小さい胸の中では、何やらしきりに惱ましげに慄へて、びくびく動いてゐた。それはちやうど全身が痛みのためでなく、恐怖のために戰いてゐるかのやうであつた。人のものみたいに大きく見える頭は、骨なしのやうに細い頸の上でぐらぐらと揺れ、小さな顔は脹れて赤くなつてゐた。それは温ましい目に見える手が、まるで慰み半分に、不可解な慘忍さをもつて、ゆる／＼と次第に強く、弱々しい小鳥のやうな頸を締めつけてゐるかと思はれた。

「さう……」深い物思ひに沈みながら、醫師のアルノルヂイはかう呟いた。

「どうぞごさいませうか？」女は彼の方へ飛んで來た。

醫師は彼女の哀願するやうな、憎えたやうな目を、重苦しい目つきで見やつた。

「變はつた事はありません。」と彼は言つた。「一つ熱い湯を用意して、スムスカヤ街にゐる看護士の、ジョゼイソンとこへ一走り行つて貰ひたい。分かつてるでせうな？ すぐこゝへ來いつて。もう話してあるから、あの男は知つてをります。さう……」

若い町人は絶望したやうな顔つきで帽子を取り、戸口の方へ飛んで行つた。

「あゝ……お待ちなさい！」アルノルヂイはいま／＼しきうに呼びとめた。「あの門の傍にわたしの馬がゐるから、あれに乗つてお行きなさい……早くしなきゃならないのだから……少しも早く！」

轍わだちのがら／＼と鳴る音が聞こえたと思ふと、直ぐ遠くの方へ消えて了つた。醫師のアルノルヂイは死に行く幼児の傍に、たゞひとり居残つた。

部屋の中はひつそりとして息苦しかつた。窓外の庭で雀どもが、この佗たびしく汚い部屋の中で、なに事が起こつてゐるかも知らぬげに、厚かましく啼なき立てるのを聞くと、變な氣がして來るのであつた。幼兒は依然として、しや嘎がれた聲で息をしながら、毛が纏まとれて粘りついた石のやうに重い頭を、枕の上であちこち動かしてゐた。脹れ上がった

肺が、小さな胸をずだ／＼に引き裂くかと思はれ、煮え湯のやうに熱い血は腦に充ち溢れて、名狀し難い痛みをもつて壓しつける。小さな手足は痙攣的に收縮して、まるで何か深い穴から出ようと跳はきなながら、どうしても出ることが出来ないで、一つ所にじたばたしてゐるやうだつた。幼兒は自分がどうしたのか分らないで、丸太に抑へ付けられた仔猫のやうに、一生懸命からだを抜き取らうとあせりながら、目に見えぬ力と闘つてゐるのであつた。

どうかすると誰かを呼ぶやうに、

「ママ……」とやつとの事で聞き取れるくらゐな、おしつけられたやうな聲を立てた。それは巢から落ちた小雀の聲によく似てゐた。

それはきつとあの大きな、優しい、暖い母親が、急いでやつて來るのを、待ち兼ねてゐるのだらう。この母は何でも一切の事を知つてゐて、人生を支配し、あらゆる不幸からかばつてくれるやうな氣がするに相違ない。

「さう、さう……」と醫師のアルノルヂイは機械的に呟いて、脈を取つて見たり、窓の傍へ寄つて、外を飛びかふ雀を、無意味にぼんやりと、長いあひだ眺めたりした。

瀕死の子供の枕もとについてゐる時はいつものことなが

ら、彼の感情は混沌として尨大な形を取るのであつた。

醫師のアルノルヂイは、たとへ今實行しようと思つてゐるやうに、自分の生命を犠牲にして、幼兒を助ける事が出来たとしても——少くとも苦痛を軽くする事が出来たとしないだらう。しかし、もし彼がかうした益もない無数の苦痛を作り出す者を發見したなら、年老いた一醫師ではあるけれど、堂々と恐るる所なく、その者に面と向いて立ちはだかり、呪詛の言葉を吐き掛けたに違ひない。死も、裁判も、永久の苦痛も、彼は少しも恐れなかつた。

けれど、アルノルヂイはそこに何ら救助の方法がない、呪詛も、哀願も、論證も、永久に答へを得る時がない、といふ事をよく知つてゐたのである。

太陽は依然として東から昇つて、西へ没するだらうし、花咲き盛る地球は膿汁うみじゆの中を廻轉するだらう。しかし一切は無益なのである。彼、醫師アルノルヂイが、泣かうと、冷笑しようと、哀願しようと、呪詛しようと、乃至は自分の頭を壁へ打つつけて、粉微塵こないぼにしようとして、一切勝手ではあるけれど、しかしそれはすべて、荒野に於ける啞聲の悲鳴と同じやうに、なんの意味もない事なのである。

たゞ苦痛のために生まれ出たこの小さな一存在物が、まだ死を恐れる事を習はないで、愛すべく同時に呪のろはしい人生の美しさを、知らない中に死んで行くのだ、と考へるだけが、せめてもの慰めであつた。

醫師のアルノルヂイは、寢床の中で身を跪かいてゐる蜘蛛みたいな、この不思議な生きものを見やつた。蟲のやうな恰好をした細い手足や、曲がつた背中や、充血したやうな黄色い頭や、重々しげな後頭部や、狭い額などを見つめながら、

「さう！」と彼は物思はしげに繰り返した。

彼の腦裡には、遺傳性の缺陷で醜みにくくされたこの恐れな生き物の、將來いとなむべき筈であつた生活が、極めて細かいデテールまでまざ／＼と浮かんできた。それは何といふ苦痛に充ちた、無意味な、つまらない生活だらう！ また彼の子孫は、徐々に衰滅すべき運命を擔かつた、恐ろしいものに相違ない……しかも、かうした蜘蛛のやうな生き物は、何といふ生の執着の強い、繁殖力の盛んなことだらう！ もし死がかう早く訪れなかつたら、醫師のアルノルヂイすら嫌惡の念に顔を顰しかめるほど、恐ろしい犯罪と、醜惡と、魯鈍と、無限の苦痛とが、この部屋から世の中へ、膿汁のや

うに流れ出したに相違ないのだ。

漠然とした巨大な結論が、醫師の脳中で次第に熟してゐたけれど、それを最後まで徹底させる力が足りなかつた。

その後、明晰で大膽な頭腦と、堅固な情念をもつた、いま一人の人間が、醫師アルノルデイの力なく尻込みして、つひに發し得なかつた一ことを、男々しく言ひ放つたのである。もしこの老醫師に堅固な意志があつたら、彼はその太い手を差し上げて、かう言つたに相違ない。

「あゝ、自然界のあらゆる現象に歡喜して、何一つ悪い事をしなかつたこの憐れな生き物が、たうてい自分の力に堪へられなくなるまで、苦痛のために身を跳くのが、それほど必要なことだらうか？　しかし、おれは何人にも意志を束縛される事のない、自由な理智を持つた一箇の人間だから、たゞ一擧手一投足の勞で、この哀れな犠牲を撈ぎ取る事が出来るのだ！　あるひは人間の理智を絶した成算があつて、それが人生を支配してゐるのかも知れぬ……さうかも知れぬ！　しかしおれはそんなものを知らない、従つてそんな物を認めない！」

戸が靜かに軋んで、蒼白い顔の女が、そつと部屋の中へ入つて來た。そして、ちやうど叩かれた犬のやうに、闖の

所から媚びるやうな、祈るやうな視線を醫師に投げた。

「どうです！　看護手は來ましたかね？」アルノルデイは我に返つてかう聞いた。

「いゝえ、まだ様子がありません……」

醫師はちらと子供を見やつて、溜め息をついた。

「お湯を用意しました、先生」奇妙な視線を醫師から放さないで、その場を助かうともせず、彼女は小さな聲でかう言つた。

「いや、それなら結構。」とアルノルデイは言つた。

「先生……」一そう小さな聲で彼女は言つて、ちよつと一足すゝみ寄つた。

「先生……」

「え、何ですわね？」とアルノルデイは憐ましげに訊ねた。

「グリーンシャはいかゞでせう……よくなるでせうか？」今度はまるで聞き取れぬほど小さな聲で、彼女の乾いた唇がかう言つた。そして、まるで何かほかの言葉で喉がつまつたやうに、聲がびくりと慄へた。

醫師の小さな目は、落ちつきのない様子で、ぼち／＼と瞬いた。

「それを當てにしてるんですよ……」不自然なほど磊落な

調子で彼は答へた。

女は疑はしげに彼を眺めた。と、醫師は彼女の目が次第に大きくなつて、遂に全世界をみだし盡くしながら、彼の魂を覗き込むやうな心持ちがした。彼は思はず立ち上がつて、また窓の傍へ近寄り、眼前にぼつとしみのやうに擴がる、緑の木の葉をぢつと眺め始めた。

「何といふ大きな木の葉だらう！」なぜか彼はこんな事を考へた。

「どうか先生、お骨折りを願ひます……きつと神様のお報いがございます。」やつと聞こえるやうな囁きが、彼の耳に入つた。「あのグリーンシエンカはわたしどものたつた一人子で……」

「グリーンシエンカ！」ちやうと墓の上の枯葉を、秋の風が撫でて通つたやうな囁きが、部屋の中でさら／＼と響いた。

この葉摺れのやうな囁きの中に、千萬無量の愛と苦しみが籠もつてゐたので、醫師は自分がたつた一分間まへに、このグリーンシヤの不幸な運命と、醜惡な生活を想像して、今の中に早く死んでかへつていゝ事をする、などと考へたのが、不思議に思はれるほどだつた。たとへ彼がどんな人間であつても——ばかでも、かたはでも、悪人でも、彼女に

取つては、かけ變へのないグリーンシエンカである。殆ど聞こえるか聞こえないかの囁きの中から——臆病な祈るやうな言葉の中から、どうする事も出来ない、力強い、偉大な感情が頭を擡げて來た。この感情に比べると、自分などは砂粒ほどに思はれて、醫師は心の中に恐怖を感じた。この恐るべき畏の中に、避くべからざる無限の苦痛、永久に亡びる事のない苦難の種が潜んでゐるのだ。

「これは恐ろしい！」とアルノルヂイは口走つた。

「何でございますか？」

「いや、何でも……あゝ、どうやら看護手が來たやうだ！」と醫師は答へながら、まるで間ひを避けるやうに、再び寢臺の傍へ歸つた。

看護手が來ると、彼はすなほに背廣を脱いで、袖をたくし上げ、つい今まで考へてゐた事は忘れて了つて、ちやうど手車に縛り付けられた懲役人のやうに、再び苦しい無益な仕事に取り掛かつた。

彼は長いあひだ一心不亂の體で、石鹼の泡を散らしたり、溜め息をついたり、鼻を擧つたりしながら、手を洗ひ淨めてゐた。蒼白い顔をした女房は、彼に湯を汲んで出したが、その一舉一動に臆病さうな色と、醫師の偉大な知識に對す

る深い尊敬の念が現れてゐた。看護手は赤毛の丈夫さうな男だつたが、巧みにてきばきと、器械や、綿や、糊帯などの準備をした。その様子が、まるで何か種の込み入つた、手品でもして見せようとする風つきだつた。

幼児は絶えずしや嘎れた聲を立てながら、跪いてゐた。

やつと醫師のアルノルヂイは手を洗ひ終つて、ぢつと驗すやうにそれを眺めた後、空中で一振りして寢臺に近寄つた。

「さあ、あんた方は……」町人と妻の方へ向いて首を振りながら、溜め息をつくやうにかう言つた。

男はすぐびつくりしたやうに、戸の傍へ飛びのいたが、瘡せこけて糞れた女房は、たゞ祈るやうな視線を醫師の方へそゞくばかりだつた、かうした目つきは、子供を川へ棄てられようとしてゐる牝猫に、よく見受けられる。

「わたしの言つてるのが聞こえないんですか！」ちよつと一瞬間、醫師のアルノルヂイは苛々した氣持ちで、かう呶鳴りつけたが、すぐさま我に返つて、深い憐れみを聲に響かせながら、つけ足した。「いや、おかみさん、あんたはその……出て行つて下さい……でないと、わたしまで氣持ちが亂れます……なにぶん仕事の仕事だから……さあ、お行

きなさい、こゝを出して下さい……出来るだけの事はしますから！」

そのとき彼女はおとなしく、しほ／＼と部屋を出て行つた。けれど、戸口の處でもう一ど立ち止まつて、無言のまま醫師の顔を見返り、その視線を捕へようとした。醫師のアルノルヂイは顔を反けた。

幼児は急に泣きやんだ。まるで何か恐ろしい物の接近を感じたやうに、どんよりとして視覚はないけれど、理解ありげな目で、ぢいつと醫師を見つめるのであつた。彼はいきなりわきの方へ身をひかうとさへしたが、ちやうど牛殺しのやうに、赤毛の一杯はえた、頑固な看護手の手が、それを押し止めた。醫師は靜かに注意ぶかく、惱ましげにびく／＼動く、充血した、鳥のやうに細い喉へ手を觸れた。

と、ぎら／＼光るメスの鋭い刃先が、ちよつと突いて抑へたかと思ふと、もう皮膚を切り破つた。一瞬間、生きた細胞組織の軋むやうな、厭はしい感觸を覺えたが、とつぜん眞赤な南京玉のやうな雫がにじみ出た。メスは巧みに軟骨を避けながら、一そう深く斬り込んだ。血はアルノルヂイの太い指の蔭から、だく／＼と流れ出て、幼児の細い頸を頸飾のやうに取り巻くのであつた。病児はぢつと靜まり

返つてゐたが、急にびくりと身慄ひしたかと思ふと、ちやうど脳を錐で揉まれる兎のやうに、全身小刻みにびく／＼と引つ吊り始めた。小さな管は血にまみれながら、どくどくと血を吹く暗い穴の中へ、譯もなく入つて行つた。と、ひう／＼笛のやうに鳴る、しや嘎れた息がとまつた。さながら全世界に一瞬間の沈黙が襲つて、周囲の物がすべて偉大なる祕密を冥想しながら、ひつそりと静まり返つたやうに思はれた。

醫師のアルノルヂイは汗にまみれて、顔を眞赤にしなが  
ら、鹽にべつと唾を吐いた。すると血に染まつた唾は、べつたりと重々しく水の中へ落ちた。

やがて空気のやうに清らかな、新しい、穩かな、落ちついた呼吸が部屋の中に聞こえた。それは人間の耳の聞き得る、最も優れた音楽のやうに、美しく軽やかであつた。

しかし、醫師のアルノルヂイは沈み込んでゐた。彼の目は試験するやうに、いかつく光つてゐた。彼は長いあひだ無言のまま、寢臺の傍に立つてゐたが、やがて太つた手を軽く振つた。その手は明かに慄へてゐた。

赤毛の看護手は手早く器械を集め始めた。  
幼児は穩かに兩手を置いたまゝ、ぐたりと長くなつて音

なく臥てゐた。けれどもその顔は蒼褪めて、紫が、つた陰が現れ始めた。自由になつた呼吸も、次第に低くなつて行く。

## 六

醫師のアルノルヂイが無益な努力に疲れ果てて、汗みどろになつて庭を出たのは、もう暗くなり始める頃だつた。

太陽はもう沈んで、清らかな柔かい色調が空に漲り、家の庭は暗くなつて、もう埃つぼく乾かないで、薄やみと新鮮な氣に充たされた緑色を呈してゐた。微風が柔かく醫師の熱い顔に吹きつけて、氣持ちよい涼氣が滯れた額を撫でた。ほつとしたやうな、悦ばしげな、新しい物音が、四方から聞こえて來た。それはちやうど地球の上の重みが取り去られて、息が軽くなつたやうな具合ひだつた。どこかで人の笑ふ聲がして、誰やら響きのいゝ聲で呼び交はすのが聞こえた。教會では晩禱を知らせる鐘が鳴つてゐた。すべての物は、堪へ難く暑い長い一日の後に訪れた、晴れやかな晩にのみ見られる、美しい、悦ばしげな姿を呈してゐた。

たゞ醫師の背後には息苦しい、暗い部屋が残つてゐて、その中には小さな引き伸ばしたやうな死骸が、薄やみの中

で見る見る冷たくなつて行きながら、横たはつてゐるのであつた。そこには斃れた獸に群らがる黒蠅のやうに、薄黒い姿をした、どこかの老婆たちが、こそく歩き廻つてゐた。そして突き通すやうな、興奮した、粗野な叫び聲が、閉け放した窓から聞こえた。

「あゝ、グリーシキ、うちの可愛いグリーシエンカ！ あゝ皆さん、どうしませう！……」

醫師のアルノルヂイは、どこもかしこもしんと静まり返つて、遠い空さへもこの淋しい悲鳴に、注意ぶかく耳を傾けてゐるやうに感じられた。

くゞりの所で若い町人が彼に追ひついた。赤い頰髯のくしや／＼した、蒼白い彼の顔は涙に濡れて、目は依然として憎えたやうな、絶望の表情を浮かべてゐた。彼はきつと醫師を見もしないらしく、慄へる唇で何やらくゞり／＼と呟きながら、握りしめた拳を突き出した。

「こ……これ……これを……」と彼は他愛のない調子で呟いた。

醫師のアルノルヂイがその拳を見ると、握りしめた紙幣まきの隅が目に映つた。

「えゝ……何だつてそんな物を！」肥つた慄へる手を振り

ながら、彼はいま／＼しげにかう言つた。

「お取り下さい、お取り下さい……それはいけません、お骨折りをかけたんですもの……わたし達だつて分かつてゐます……神様のお心ですから……」まるで墨を塗つたやうに黒い拳を、依然として突き出したまゝ、町人はぜん／＼無意味にかう繰り返した。

アルノルヂイは不意に顔を顰めて、引つたくるやうに金を取ると、そのまゝくるりと踵を轉じて、まるで後から揉られはしないかと恐れるやうに、背中を屈めながら、くゞりを出て行つた。

白つばい毛をしたニキータは、待ち兼ねたやうに、愚かしい微笑をもつて彼を迎へた。

「死にましたかね？」體の重みで馬車をぎし／＼と軋ませながら、醫師が腰掛けに尻をおろした時、彼はかう訊ねた。

「お前もその中いつか死ぬのだ、ばか……」醫師のアルノルヂイは機械的にかう答へながら、杖の握りで彼の背中を一つ突つた。

ニキータはこの氣の利いた洒落しゃれに、さも愉快らしく笑ひながら、立ちくたびれた赤毛の牝馬に鞭をくれた。埃は車輪の後に重々しく舞ひ上がった。醫師が早くも最初の角を



曲がらうとした時、雖で空を穿つやうに鋭い叫び聲が、澄んだ夕方の空気を慄はせながら、まだ彼の耳に入るのであつた。

「あゝ、皆さんどうしませう！ あゝ、聖母マリヤ様！」  
馬車は角を曲がつて了つた。そして、すべてはまるで存在しなかつたもののやうに、しんと静まり返つた。

## 七

もうすつかり日が暮れて了つた。疲れて氣難かしげな顔をした醫師のアルノルデイが、最後の往診を済まさうとしてゐた時には、冷たい緑色がかつた夕焼けが、遙かな曠原に消えんとしてゐた。

彼はもう久しい以前から、自分の患者を區別する事なく、子供のころでも、女のころでも、年寄りのころでも、若い者のころでも、同じやうにものうげな様子で出掛けてゐた。しかし、一箇月ばかりまへ郷里へ歸つて死にかゝつてゐる、もと女優をしてゐた病人の所へ呼ばれてからこのかた、醫師のアルノルデイはいつもなしに、毎晩すつかり往診が済んでから、彼女の所へ立ち寄る習はしとなつて了つた。始めのうち彼も治療をしてゐたが、なにぶん不

治の病ひなので斷念して了つた。いつも入つて來ると、ちよつと一分間ばかりといつたやうに、帽子や杖を手から放さないで坐る癖に、病人の絶え間ない静かな饒舌に耳をなぶらせながら、黄昏の静寂の中に二時間も、三時間もぢつとしてゐた。病人はだん／＼彼に馴れて來て、自分の生涯を——波瀾きはまらないばかりか女優生活を、すつかり彼に話して聞かせたのであつた。

もし何か大切な用事に引き止められるやうな時など、醫師のアルノルデイは、病人の静かな聲や、愁ひを含んだ目つきや、静かな夏の黄昏の病室で彼の疲れた心に忍び入る、物思はしげなつゝましい憂愁——かういふものに接することが出来ないのが、妙にも足らなくなつたのである。

いつものやうに太い杖の上に兩手を組み合はせて、ずつしりと身をもたせ掛け、その手の上に肥えて脂ぎつた腮を載せながら、醫師は庭へ向けて廣々と開け放した窓ぎはに坐つてゐた。いま一方の側には、病人が白い枕で體を包みながら、安樂椅子の上に身を休ませて、何か非常に大切な事を、少しも早く言つて了ひたいとあせるやうに、低い聲でせか／＼と話し續けるのであつた。

「何といふ晩でせうねえ、先生……なんていゝ氣持ちでせ

う！ わたし丁度かういつた晩に死にたうござんすわ……わたしは何よりも一番、夜なかに死ぬのが恐ろしいんですの……全くこはいでせうね、先生！ だつてあの墓の中は暗いんでせう……暗いんでせう……わたしみたいになつてから、何にもせよ、望みを抱くなんて、滑稽ですけれど！——ね、さうでせう。でもね、やはり最後に目にうつるものは、あくして静かに消えて行く空であつてほしいと思ひますわ……何だか樂なやうな氣持ちがしますの……一んちの目が靜かに死んで行つて、空もだん／＼暗くなる、ね、そしてわたしも死んで行く……わたしはもうちやんと諦めて了ひましたの、先生……どうか心配しないで下さい。わたしはもういつかみたい泣いたりなんかしませんわ……泣いてどうしませう。泣いたつて、どうせ役に立ちやしないんですもの！ たゞわたしね、自分が墓場へ運んで行かれて、土を被せられる事を考へると、恐ろしくなりますわ……みんなめい／＼家へ歸つて了つて、わたし一人が残るんでせう、まるつきり一人ぼつちで……その中に夜が来る、まはりには十字架が立つてゐて、事によつたら、風が起るかも知れません。そして周りは眞暗なんでせう……あゝ、恐ろしい、先生！ そりやわたしも、さうなればもうなんに

も感じないつて事は知つてますけど、でも今は恐ろしいんですの、先生、あなたは本當に優しい親切な人だから……約束して下さいな。皆が歸つて了つた時、あなたは墓場に殘つてゐて、暫くわたしの傍に付いて下さいな……約束して下さい？ あなたがさうして下さいと知つてたら、そんなに恐ろしありませんわ。」

「残りませう。」醫師はがらんとしたやうな聲で言つた。

「まあ、どうも有り難う！ 先生、あなたはほかの人みたいに、そんなに早くわたしをお忘れになりやしないでせうね、そりやわたし分かつてますわ……ねえ、わたしの好きな先生、あなたはどうしていつもそんなに、難かしい顔をしてらつしやるんですの！ もつとも、わたしはばかな事を聞いてますわねえ。おほかた毎日のやうに誰か一人づゝ墓場へ送つてゐる人が、喋つたり笑つたり出来るものですか？ ねえ、先生、あなたはわたしが死んだ後で、おもひ出して下さるでせうか？ だけど、これもやはり可笑しい話しね、あなたはこれまで長い間、數へきれないほどの人を、墓場へお送りなすつたんですもの、みんな一々おぼえてゐられるのですか！」

「わたしはみんな覚えてゐます！」依然として小さな聲で

醫師は答へた。彼の顔——大きな肥つた顔は、闇に隠れて見えなかつた。

「さうですか？　だから、あなたはそんなに優しくつて、沈み勝ちなんですよわね！　先生、あなたは優しいかたね、恐ろしく優しい物柔らかなかたね……だけど、不幸なかたですよ、大抵の者はあなたを重苦しい、不愉快な人のやうに思つてゐます。わたしだつて始めの中は、あなたがこはござんしたの。けれど今では、わたしどんな人でも、すつかり腹の底まで分かるやうな氣がします……何だか、以前とは見方が違つて來ました。よく死にかゝつた人間は、健康な人の思ひも寄らないやうな事を、見たり感じたりするつて話ですが、現にわたしも、あなたの大きな優しい心が見とほせます。そして、あなたがこの世の生活を大變、大變苦しく感じてゐらつしやるのが、よく分かりますのよ。ねえ、先生、なぜこの世にはかう苦しみが多いのでせう？」

「知りませんなあ。」と醫師のアルノルディは答へた。

「知りません……知りません……誰も知らないんですよえ！」まるで獨ごとのやうに小さな聲で、病人はかう繰り返して、ちよつと口を噤んだ。

黄昏の光りの中に、彼女の顔はまつ白に見え、暗い二つ

の目は、濃すぎるくらゐ黒く、かつきりとその上に浮き出してゐた。その大きな悲しげな目は、一種不可解な表情をもつて、庭の上に擴がつてゐる、清らかな、廣々とした、次第に暗くなつて行く空を見上げてゐた。夕焼けの反映は彼女の落ち込んだ頬や、足に巻いた毛布の上へ力なく載つてゐる、まだ美しい華奢な両手に、薄く光るのであつた。

「先生、依然として低いせか／＼した聲で、彼女は囁き始めた。「今わたしはね、達者で若かつた時にまるで考へなかつた、ある一つの事を考へてゐますの……一體なんだつてわたしはあゝ意地悪で、喧嘩かひで、そして残酷だつたのでせう？　わたしには人を苛めるといふ、悪い病氣があつて、現在自分で愛してゐる人を、どれだけ無駄に苦しめたか分かりませんわ。何だかみんなの仕方が間違つてゐて、みんながわたしを侮辱するやうな氣がしました。つまり自分の利益のためにわたしを利用するばかりで、その實すこしもわたしを愛してゐないやうな氣がしたんですの……わたしは少しも人を信じないで、一語々に何かしら隠れた意味——それも決まつて穢らばしい意味を搜したものです……あゝ、どのくらゐ言ひ争つたり、不快な思ひをししたり、辱しめたりした事でせう……本當にどれくらゐいやな感情

で血を濁したか、考へても恐ろしいやうですわ。しかもその起こりは何でせう！今になつてわたしは始めて、それがみんなつまらない事だつたといふことが、はつきり分かりました。たとへ人が嘘を言つたとしても、それが一體どうしたのでせう……それに、皆が嘘を吐いたのも、大抵の場合、わたしが不快な眞實を忍ぶことが出来なかつたからですの……それにまた大抵の人がわたしを恐れて嘘をついたんですよ。なぜつて、わたしは恐ろしくこらへ性がなくつて、一たん痲癢を起こしたら最後、どんな恐ろしい事でも言ひ兼ねなかつたんですからね……つまり皆を苦しめたんです。人一倍わたしを愛してくれる人を、かへつて餘計に苦しめたんですの！それに全體として、わたしは他人からどんな事を望んだでせう？まるで自分が何か特別な女でゝもあるやうに思つて、みんながわたしのために、生まれ變はつたやうな人間になつてくれなければ、厭だつたんですの。全く誰にもせよ、人が愛してくれたら、それに對して感謝しなければならぬのに、わたしはそれを自分の權利か何そのやうに、考へてゐたんですものね！……あゝ、本當にこのために、どれだけ悦びを無駄にしたでせう。またわたし自身もどれだけ苦しみを味はつたでせう！

……お互に心持ちよく、優しく愛情をもつて暮らすことが出来るのに、何だつてこんな思ひをするのでせう！ねえ、先生、いま壽命が残り幾らもなくなつてから、あんなにばか／＼しく失つた生涯が、一分一秒でさへ痛ましくつて堪らないんですの！今かうして死ぬ前に、自分のした一切のばか／＼しい事、よくない事のために、どれだけ痛ましい、恥づかしい、口惜しい思ひをしてゐるか、それを充分に言ひ現すことが出来たら、世の中の悪も随分すくなくなつたでせうにねえ！……けれど、わたしもそれを言ひ現すことが出来ませんの。たゞどうかすると、つらくつて堪らなくなつて、自分で自分の頭を、壁へ打つ突けてやりたいやうな氣がしますわ……でも、もう取り返しはつきません！何よりも一番おそろしいのは、この取り返しがないといふ事ですの。」

醫師のアルノルヂイは、大きな重々しい頭を窓の方へ向けて、ちつと庭を見つめてゐた。誰やら静かな木立ちの下を、音もなく歩いてゐるものがあつた。

「先生、何をそんなに見てらつしやいますの？ あれはネルリです……ご存じでせう？」

醫師は無言のまゝ窓外を眺めながら、何やら考へてゐた。

患者は庭の靜かな足音に耳を傾けてゐたが、まるで病氣の目を醒ますのを恐れるやうに、小さな聲でかう言つた。「あの子是不仕合はせな女です？ あの子の境遇は本當に恐ろしいございますわ。この町の人があゝした出來事を、どんな目で見るとも、わたしだつて元は同じ目で見てゐたのです。でも、いま壽命が残り幾らもなくなつて、さんざ考へて考へ抜いたあけく、人間でものは、まことに悦びの少い不幸な者だから、よしんばどんな事であらうとも、そのために人間を責めるのは慘酷だ、といふ事が分かりましたの。」彼女は再び物思ひに沈みながら、細い透き通つた手で、靜かに膝かけの端をまさぐつた。その指は生命力が盡きかかつて、まるで蠟で作つたもののやうに見えた。

醫師のアルノルヂイは依然として沈黙してゐた。彼の重畳しい姿は黄昏の薄暗の中に、薄黒いしみのやうにぼつとにじんであつた。

「可哀さうなネルリー」と患者はまた話し出した。「そりや一時まよつたのは事實ですわ……だけど、そのために誰か迷惑を受けたとでもいふのでせうか？……どうも世間の人は、他人の幸福が不愉快なために、何もかも打ちこはして

了つて、幸福な人をなくしようといふ一生懸命に骨折つてるとしか思へないぢやありませんか……で、一緒になつて子供が出來た、それで結構な筈なんですが、本當はさうぢやなくつて、あの子はどこへ行つても追ひ出されて、教師の職も奪はれて了ひました……一體あの子はどうしたらいいのでせう、何で暮らして行くのでせう？……夜の巷へでも墮ちて行けといふのですか？ 大方さうしてほしいのでせうよ。まあ、わたしが引き取つたからいゝやうなものゝ、もしもなかつたらどうでせう……全く不仕合はせな娘ですわ。いちんち何やら忙しさに働いたり、わたしの看病をしたりして、晩になると庭を散歩するんです……黙つて散歩するんです。あの子はいつても黙つてゐますわ。たゞときんぐ口の中でそつと歌ふくらゐなものです。それを聞いてると、堪らなく淋しくなりますの。どうかすると、わたしは泣きながら、こんな事を考へますの——あゝ、今にわたしも死んで了へば、ネルリーも死ぬ、またあの子を蔑んで迫害した者も、みんな死んで了つて、わたし達の事などまるで知らない人達が、生活を始めるのだ……こんなに短いはない人生を、何だつてわざ／＼けがれや、憎しみを傷つけるのだらう、といつたやうな事を考へると、わた

しはあの子を慰めたり、励はげつたりしてやりたくて、堪らなくなつて來ますの……けれど、あの子は恐ろしく誇りの強い女で、死にかゝつた病人のわたしさへ、避けるやうにしてゐます。あの子は辛いんですよ、先生？」

醫師のアルノルヂイは、まるで喉のどの中にか何か小さな蟲でもゐるやうに、奇妙な短い音を發しながら、一そう重々しげに腮を兩手の上へ載せた。患者は闇の中でさへきら／＼と輝く、悲しげな目で見やつた。けれど何一つ目に入らなかつたので、また話し続けた。

「先生、わたし淋しくつて、そして可哀さうなんです……自分の身も可哀さうなら、ネルリも可哀さうだし、あの空も可哀さうです。そしてね、先生、死んで行くのが残念ですの！ しかも一人で死んで行くつて事が、一そう辛いんですの。わたしが舞臺に立つてゐた時には、周りにうようよするほど人がゐましたが、今ではみんなわたしを忘れて了ひました。だけどわたしは泣言なみごを言ひません。そんな事をしたつて何になりませう？……それにつまるところ、わたし自分が悪いんですわ。わたしはいつもかういふ風な女として、このまゝ人から愛してもらひたかつたんですの……意地悪だらうと、卑屈な女だらうと、そんな事には一さ

い頓着なしにね！ 所で、皆がわたしを愛してくれたのは、わたしの持つてゐた一つ一つのいゝ物のためでした——つまり美しい肉體のためでした。ところが、肉體は今かうして亡びて行つて、以前わたしの傍へ人を牽ひけたものは、何一つ残らなくなるのです……あなたは到底ともお分かりにならないでせうけれど、人がわたしの性質を變へようと思つて、どうかそんなに癩癩かたかたもちの、わがまゝな、意地悪でなくなつてくれ、などと頼たのんだりしようものなら、どんなに腹を立てたか分らないくらゐですの……ところが、かうしてその報いが來ました！ わたしはね、あのアルペーニンを非難しようとは思ひません。病氣するとすぐわたしを棄てて了つたからつて、恨うらんだりなどしやしません。あの人は生活と女を愛する、健康で快活な人ですもの。あの人に必要なのは戀ひ人で、死にかゝつた人間の哀れつばい目つきぢやないのです……仕方がありません、わたしはあの人にわたしの魂を愛させよう、またこの魂を愛に價するものにしようと、努力しなかつたんですものね。まあ、犬のやうに死んで行きませうよ……構かまひませんわ……そのうちに、あの人もやはり皆に忘れられて、同じやうに死んで行くでせう……その時はあの人もわたしの事を思ひ出して、

可哀さうに思ふでせうよ……その時はきつとあの人も、やはり苦しい思ひをして、自分の一生は誤りだつたと悟るでせうよ？ でもまあ、仕方がありませんわ、今となつては、何一つ取り返しがつきません……一人で死ななけりやならないなら、一人でもよござんす……まあ、かうして生まれ故郷へ死にに歸りましたが、こゝだつて誰ひとり縁者はないんです。たゞ何となしに昔なじみの土地で死にたくなつたんですの。こゝでは何もかも見覚えがあるもんですから、何だかもう一人ぼつちぢやないやうな氣持ちがしますわ。どこかの療養所やホテルなどだつたら、随分つかつたでせうけれど……わたしはね、先生、こゝの女學校で勉強したものですよ！」

患者は低い聲で笑つた。

「本當に人間てものは、不思議なほど自分の生涯の察しがつかないですねえ。わたしが小さな女學生で、本を持つて、黒いエプロンを掛けて、こゝの學校へ通つてゐる時、こんな病みほゝけた、ひよろ長い、肺病もちの女優あがりとなつて、もと宿題を勉強した、同じこの窓の傍に臥ようなどと、どうして考へられませうか……それとも……だけど、わたしうまく言へませんわ、もう澤山！ わたしは

のべつ喋り通しに喋つて、先生きつとお疲れになつたでせう。それに私のお喋りなど聞いているのは、お辛いに決まつてますわ。どうかお歸り下さい。わたしもすぐ寝つくかも知れません。さあ、お歸り下さい。」

醫師のアルノルヂイは重々しく立ち上がった。

「どうかまた寄つて下さいな。もうわたしを癒さうとしていらつしやらないのは、自分でもちやんと承知してゐますわ……もうかうなつてから、どうなるものですか。たゞ何かなしに寄つて下さいな、わたしの好きな先生……」

醫師は太いむく／＼した指で、自分の方へ差し延べられた、軽い、弱々しい手を取つた。と、不意にのつそりした重々しい體を屈めて、死にかゝつてゐる蒼白い指を接吻した。病人は驚きもしないで、たゞ優しく、淋しげに笑つたばかりであつた。

「何のためですの？……さあ、先生、お歸りなさい……ご機嫌よう。」

醫師のアルノルヂイは部屋を出て行つた。彼女はひとり窓の傍に取り残された。そして、次第に薄れ行く夕焼けの弱々しい反射を受けながら、白い枕の中に埋もつた彼女の顔は、段々と蒼白く溶けて行くやうに見えた。それは貴重

な繊細な畫が次第に耗れて、色が褪めて行くやうな具合ひであつた。

そとはまだずつと明るかつた。いつも暗い部屋から表へ出た時、誰でも感じるやうに、アルノルヂイはまだ恐ろしく明るいのにびつくりした。頭上の空はたゞ深みを増して來たばかりで、幾つかの夕づゝは、ちやうど黄金の氷のかげのやうに、臆病な、透き通つた光りを放ち始めた。庭の中からは何かしら物悲しげな、まるで病んでもゐるやうな花の薫りが、快い濕りけを帯びて漂うて來た。木立ちの下には息のつまるやうな、沈黙がちな最初の陰が群らがり始めた。

くゞりのすぐ傍で醫師のアルノルヂイは、一人の若い女に行き會つた。女が臆病さうに身を避けたので、醫師は摺れ違ひさま、黒い目と、峻しく引き寄せた眉と、半ば憎えたやうな、半ば物凄いいつききを、見分ける事が出來たばかりである。彼女は醫師が通り過ぎて了ふまで、ぢつと木立ちの下の小暗い陰に立つてゐた。そして黒い着物を纏つた胸の邊に、蒼白い細い兩手を押し當てながら、奇妙な目つきで彼を見送つてゐた。

「これがきつとネルリなんだらう……」と醫師は考へた。

くゞりの所で、彼は思はず後を振り返つた。彼女はいつまでも同じ所に立つてゐた。醫師が歸つて了ふのを、待ち受けてゐるらしい。

醫師のアルノルヂイは急いでくゞりを閉めた。

今度は仕事が濟んで自由の體となつたので、もう家へ歸ることが出來た。夜はこの小さな町を、華やかないき／＼したともし火で飾つた。遙かに町の公園では、毎晩きまりの樂隊の演奏が聞こえて、始終たえまなくその方角をさして、若い令嬢たちは薄色の着物を闇に白く浮き出させながら、若い男たちは巻き煙草の火を赤く光らせ、無遠慮な高聲で話し合ひながら、ぞろ／＼と歩いて行つた。通りの端には、内部から灯に照らされた巡廻曲馬團の露天幕と、その入り口に飾られた色々々な、花環のやうな電氣が見えてゐた。どこもかしこも愉快で、暢氣さうに思はれた。

## 八

家へ歸ると、醫師のアルノルヂイは蠟燭をつけ、背廣を脱いで、がつかかりしたやうに卓に向かつて腰をおろした。その上では小さな湯沸が、もうしう／＼と煮立つて、たつた一つきりのコップが淋しさうに、自分の老主人を待つて



ゐた。

部屋の中はまるで安宿のやうにがらんとして、居ごゝちが悪かつた、あらはな壁の中には、微くさい、年取つた獨身者の匂ひが滲み込んでゐた。寢臺はこんな肥大漢の物としては、餘り幅がせま過ぎた。窓仕切りの上には、濕氣を吸ひ込んだ煙草の吸ひ殻がごろ／＼してゐるし、埃は薄い層をなして、厚い緑いろの本の立つてゐる棚を蔽うてゐた。開け放した窓からは、蛾が出たり入つたりして、恐ろしい勢ひで蠟燭の火の周りを飛び廻つたり、力なげに薄い翼を慄はせながら、卓布の上を這ひ廻つたりしてゐた。釣り合ひの取れないほど大きな彼等の影は、蝙蝠のやうに音もなく、壁の上にさら／＼と動いた。そして醫師の背後には、彼自身の大きな影が、天井の方まで折れ曲がりながら伸びてゐた。それは誰かしら顔のない黒い物が、無言の期待を抱きながら、彼の上へのしか／＼つてゐるやうであつた。

窓の外から、夜の冷氣があるかなしに流れて来て、引き伸ばされたやうな蠟燭の焰が、わな／＼と慄へた。その黄色い蠟の光りを受けて、疲れてたるんだ醫師の顔が、奇妙な響めつ面をしてゐるやうに見えた。

遙かに樂隊の音が響いて來た。きつとそこでは色電氣の

輝きや、仕立屋の女と散歩する聯隊書記のカイセル髻と同じやうに、何か陽氣で俗な物を演奏してゐるに相違なかつたけれど、この老醫師の部屋で聞くと、何か高尚な、悲しい、美しい音楽に感じられた。とき／＼孤獨な眞鍮喇叭の聲が、段々と調子を高くして、どこか星空の下で惱ましげな、助けを呼ぶやうな節を引きながら、次第に消えて行くのであつた。

醫師は無言にこれらの響きを聞きながら、甘い櫻ん坊のジャムを添へて、濃い茶を一杯々々と、際限なしに飲んだ。そして蠟燭の灯と、自分の太いふつくりした手と、物狂はしい無踏でもするやうに旋轉してゐる蛾の群れとを、かはるがはる眺めてゐた。

蛾の数は數へ切れぬほど多く、しかも後から後からと、新しく闇の中から飛んで來て、殘忍な目ぶしい光りを目かけて突進するのであつた。あるものは緑、あるものは白、あるものは黄、あるものは染め分け、あるものは花びらのやうに小さく、あるものは毛むく立つて大きい。これらの蟲の群れは、緊張した瞑想にでも耽つてゐるやうに、卓布の上におちつと止まつたり、急に引き千切るやうに飛び上がつて、恐ろしいともし火の耐へ難い光りの中を、情熱に驅られた

やうに旋回したり、もう飛ぶ力のなくなつた翼を、物狂ほしいほどの速度ではた／＼と打ちながら、卓の上に根氣よく、奇怪な、病的な圓を描いたりするのであつた。この絶え間ない緊張した運動は、聲のない苦悶と衝動に充ちた、不思議な、神祕めかしい混亂を創り出した。開放した窓の風のために、少し流れ氣味になつた蠟燭には、溶けた蠟にまみれて見る影もなくなつた、小さな死骸が一面に粘りついてゐた。この不可解な力をもつて牽き寄せては、焼き盡くして了ふ灯を向かうへ廻して、死にもの狂ひになつて戦ふ生のための争闘が、こそとの響きも立てないのであつた。しかし事によつたら、蠟燭を黠じた醫師のアルノルヂイに、蟲の聲が聞こえなかつただけかも知れない。彼の石のやうな顔は無言のまま、彼等を上から見おろしてゐた。

誰やら急ぎ足に入り口の階段を駆け昇つて、騒々しく戸をさつと開け放した。蠟燭がぼつと明るく燃え上がつて、ゆら／＼と動き、壁の上の巨人めいた影が不安げに揺れた。醫師のアルノルヂイは、誰が來たのかよく心得てゐるらしく、席を立たうともせず、たゞジャムを取らうとして差しのべた手の蔭から、悠然と戸口を振り向いたばかりだつた。「今晚は、醫師！」と客は聲高に愉快らしくかう言つた。

その聲はまるで青春と力の響きを、悉く集めたもののやうに、佻びしい部屋の静寂に響き渡つた。

「お茶を飲みますか？」挨拶の代りにアルノルヂイはかう聞いた。

「無論ですよ！」依然として大きく快活な聲でかう答へると、客は寢臺の上へ白い帽子を抛り出して、醫師の前の椅子に腰をおろした。そして坐ると、いきなり椅子の背に反り返つて、から／＼と笑ひながら、恐ろしくぎら／＼光る興奮した目つきで、無言のままちつと醫師を見据ゑた。それはまるで生まれて始めてこの人を見、その奇怪な様子に驚き呆れたといふ風であつた。彼の大きな黒い目の中では、何ものかど抑へつける事の出来ない勢ひで、躍つたり光つたりしてゐた。

アルノルヂイは年取つたやもめらしい、馴れた手つきで新しいコップを取り出し、丹念にゆつくり／＼それを洗ひ上げ、まるで麥酒のやうに濃い茶を注いで、客の前へ押しやつた。

「ジャムをお取りなさい……櫻ん坊です。」と彼は吐息をつくやうな聲で言つた。

「櫻ん坊ですつて？……そりやぜひ頂きませう！」客は滑

稽なほど感動の籠もつた調子で答へた。

醫師のアルノルヂイは相手の黒く輝く目や、白い額や、柔かく渦巻いてゐる髪や、男らしく可愛い顔を、氣難かしさうに尻目に掛けてゐたが、突然はづかしさうな優しい微笑を浮かべた。

「醫師、あなたは何が嬉しいのですか？」すぐに若々しい、突つかゝるやうな聲がかう抑へた。

醫師はもう一ど相手を見やつて、ゆつくりした調子でかう言つた。

「まあ、茶でもお飲みなさい、ミハイロフ君。」

しかし、彼はまるで別な事が言ひたかつたのである。「君のやうに若い、美しい、暢氣な人間になれたら、まあ、どんなにいいだらう。わしのやうな年取つた陰氣くさい人間は、君を見てると羨ましくもあり、いゝ氣持ちでもある。」——けれど、彼はこれを口に出して言はなかつた。ものういだらけた舌が動かなかつたのである。ミハイロフは笑ひ出した。

「ねえ、ドクトル、ドクトル！ あなたはさう畏みたいにつくねんとして、よく恥づかしくない事ですねえ？……外は夜で、星が光つて、女が笑つてるのに、この人は一人

ぢつと坐り込んで、ジャムを添へて、お茶を飲んでるんだからね……」

「まあ、わたしくらゐこの世の中に生きて見て、」アルノルヂイは氣難かしげにかう言ひ返した。「それからまたこゝへいらつしやい。そのとき改めて話し合つて見ませうよ。」

ミハイロフは試験するやうな、物思はしげな目つきで醫師を見やつた。と、その美しい顔が急に暗くなつた。漠とした不安が影のやうに輝かしい目を掠めて、美しい唇は暗い豫感に襲はれたかのやうに、心持ちびくりと慄へた。けれど彼はすぐに頭を振つて、から／＼と笑ひ出した。そして、春風がふと流れ來た薄雲を吹き拂つたやうに、彼の顔は再び青春と生命に輝き始めた。

醫師のアルノルヂイは、束の間起こつたこの急激な表情の變化を、無言に觀察してゐた。その變化の早くて明瞭なところに、一種不可解な、人を牽き寄せるやうな美が籠もつてゐた。で、極めて繊細な深い心の動きを瞬間的に、明瞭に反射する能力の中に、この青年が婦人に對して持つてゐる、恐ろしい魅力の祕密が潜んでゐるのではないか、とかう醫師は考へた。このとき彼はふと、悲しげなネルリの姿を思ひ出した。まるで何か貴重な物を落とすまいと骨折

つてゐるやうに、蒼白い細い手を胸に押し當てながら、木蔭に立つてゐる彼女の姿と、半ば憎えたやうな、半ばもの凄目つきを思ひ出した。

「何をあなたは考へ込んでるんです？　ドクトル、今日あなたは何をしたんです？」とミハイロフは訊ねたが、出し抜けに大きな聲で歌ひ出した。

「……日毎に死者を墓へと運ぶ……」

そして醫師が答へる暇のない中に、彼は早口に、充分自信のなささうな調子で言ひ出した。

「あなたはいつも僕を攻撃しますね……しかし、あなたもいゝ加減わかつてよささうなもんぢやありませんか……どんな生活をして見たところで、最後は同じ事です！　後へ歸る事は出来ないんですからね。して見ると、つまり、全身の血が湧き立つやうな生活、一分間と雖も無駄のないやうな生活、後になつて後悔する事のないやうな生活、さういふ生活をしなきゃならない譯です。人生から享け得るものを掴まなかつた、と後悔するやうぢやつまりませんからね。え、醫師！」

「一たい人生はそれのみでせうか？」

「それのみとは何ですか？」

「まあ、つまり女の事です……」とアルノルヂイは目を伏せながら説明した。

「一體それが人生に何の關係があります？」とミハイロフは笑ひ出した。「人生は一つの事實です、しかも、かなり厭な事實です……わたしはたゞ人生の悦びを語つてゐるのです。もしそれがなかつたら、殆ど誰一人としてこの人生に耐へ得ないだらう、と思はれるやうな悦びを語つてゐるんです。醫師、あなたは女がどれくらゐの悦びを興へ得るか、それをご承知でせうね？」

「さあ！」肥つた醫師は曖昧な、唸るやうな聲を發した。「さあでなくつて、さうですよ！　あなたにはつまりそれが分からないのです、ご存じないんですよ。でなかつたら、そんな引つこみ思案の、氣難かし屋になる筈がありませんもの……一體あなたは、どういふ風に考へておいでなんですか？……僕のいふ快樂は、性的行爲その物の中に存するのぢやありません。それはたゞ自然的結末に過ぎないので、これをほかにしては、未完成不満足な感じが残るといふだけの事です。これはつまり接近の最後の一段階です、それつきりです……本當の美はそんな所にあるのぢやない！」

「ぢや、どこにあるんです？」醫師のアルノルヂイはもの

うげに聞いた。

「さあ、あなたのやうな死人にどう説明したものでせう……さう、かりにあなたが若い美しい女に出會つたとする……はじめこの女はあなたに取つて、全然ひややかな、縁のない人間で……わきから眺めることは出来るけれど、手を觸れる譯に行かない。彼女の有する一切は、あなたに取つてまだ謎です——手袋も、聲も、帽子につけた花も、衣摺れの音も……目も……その目には暖かい深みが潜んでゐるのだけれど、氷の壁をすかして眺めるやうな具合ひです。彼女の美はあなたのために存在してゐるのでなく、あなたは彼女に取つて無です。ところが、ほかのある男に對すると、暖かい、愛に充ちた、情熱的な女なのです……それがふと、あなたの欲望の一種不思議な力によつて、この神秘的な、誇りに充ちた、冷やかな存在物が段々と暖かくなつて來ます……一瞬間ごとだん／＼近く、理解し易く、いとしくなつて來るのです。あなたが攻撃すると、彼女は防禦する。さうした捕捉し難い微妙な遊戯の中に、時に近づき、時に遠ざかりながら、彼女は次第にあなたを深みへ誘つて行つて、あなたの全生涯を一つの意義、一つの目的で充たして了ひます。日毎に彼女は、ちやうど花が太陽の光りを受け

て、一ひらづく花舞を開くやうに、恥ぢを顧みぬ美しさを擴げて見せるのです。そのうち突然、理解することも記憶することも出来ない微妙な一瞬間に、彼女の全身がぱつと燃え上がる。そして羞恥の念が全然きえうせて、誇りに充ちたもの／＼しい着物が迂り落ち、幸福と苦惱に燃える露はな肉體のみが、ありだけの美しさを見せながら、あなたの目の前に残るばかりです……醫師、あなたは女の肉體の美しさ、見事さが分かりますか……かうしてこの肉體は、恐ろしい物狂ほしい歡樂の中に、あなたの體と融合しきつて、全世界がどこかへ飛び去つて了ふやうな氣持ちがするのです……宇宙間に存在するのは、あなた方ふたりきり、彼女に取つてはあなた、あなたに取つては彼女あるのみです……ねえ、美しい永遠なガラテヤの物語りも、つまりこれに基づいてるのぢやありませんか……しかも、感情と經驗の深みは計り知れないくらゐです……時には嫉妬に泣き、時には歡喜に歌ひ、時には女をとろ火に懸けて、責めさいなみもし兼ねない氣持ちになり、時にはまた女の足に接吻するのも厭はない……狂氣の沙汰と言はば言へ、これは實際、歡喜の極の狂氣です！すべて若い美女の美しさはどうでせう！彼女があなたを愛する時は、すべて

がその女の調子に彩られて、全世界があなたの目に、別もののやうに映ります。たゞ／＼その時はじめて、あなたは眞に生活してゐるのです。そのとき始めて太陽の輝き、月の美しさ神祕さ、暖い夏の夜の心地よさが、本當に分かるのです……ねえ、ドクトル、僕が始めて戀ひした時は春でした……雪が溶け始めたばかりでね……今あの娘はどうしてゐるか、神様よりほか知る者はないが、一つの印象だけは、一生涯わすれられないほど、はつきりと残つてゐます——よく僕がその娘を夜うちへ送つて行くと……それは明るいやうな暗い晩で、どこかで小川のさら／＼鳴る音が聞こえ、溶けかゝつた雪と弾力のある春風が匂つて来る……もうそれから何年たつたか分からないが、僕は夜とけかゝつた雪の匂ひを嗅ぐと、堪らないほど甘く懐かしい哀愁に、心臓が縮まるやうな心持ちがする……もう一ど會つて抱きしめてやつて、一緒に暗い町を歩いて見たくなる……そして泣きたいやうな、祈りたいやうな、過ぎ去つた遠い幸福に對して、人生に感謝したいやうな氣がするのです——

ミハイロフは醫師に見えない何ものかを、目の前に見てゐるやうな風つきで、大きく目を見開きながら、無言のまま蠟燭の焰を見つめるのであつた。

「それはさうだけれど、」と醫師は言つた。「しかしさうした悦びに對して、恐ろしい代價を拂はなきゃなりませんまいよ……」

「そりや、」とミハイロフは言つた。「この世ではどんな事に對しても、代價を拂はなきゃなりませんさ。拂ふだけの値うちがあれば、まあ結構なんですすよ——」

醫師は口を噤んでゐたが、またもや蒼白い顔をしたネルリを思ひ出した。

「實はね、今日いゝ人に會つたんですよ。」思ひ切りの悪い調子で彼はかう言ひ出した。

「誰に？」とミハイロフは早口に訊ねた。と、何か一つに集中したやうな、執拗な表情が彼の顔を掠めた。

「あの君の、それ何とか言つたけ……ネルリですすよ……」相手の顔を見ずに、醫師のアルノルデイはかう言つて、へどもどしたやうに、ジャムの方へ手を延ばした。

ミハイロフは相手の心の底まで見抜かうとするやうに、無言のまま醫師に視線を投げた。

「あの娘は一生を棒に振つたぢやありませんか……」と醫師は小さな聲で言ひ足した。

ミハイロフは何かと戰つてゐるやうに、すぐには返事を

しなかつた。

「ねえ、醫師！」殆ど毒々しい調子で、彼は言ひ出した。

「まあ、一生を棒に振つたとしませう！　しかし一生を棒に振つたとは、何の事でせう？　我々二人は、幸福だつたのです、それで結構ぢやありませんか。一體あの女が老嬢として、何の悦びも思ひ出もなく萎びて了ふか、それともどこかの……官吏と結婚して了へばよかつた、とても仰しやるんですか！　本當にどんな貴重な物を失つたと言ふのだ、考へてもご覧なさい！……」

醫師のアルノルディは黙つてゐた。彼は本當にこの美しい、女好きのする、熱情的な、面白いミハイロフのものとなつた方が、ほかの誰に身を任せるよりも、女として氣が利いてゐるやうな氣がしたのである。

「それに、これは一たい誰の罪でせう？」ミハイロフは奇妙にむきになつて、再びかう言ひ出した。「僕は別にあの女を騙した譯ぢやありません。永久の戀ひなぞ約束しやしなかつたんですからね……あの女も自分がどういふ事をしようとしてるか、よく承知してゐた筈なのです……」

「夢中になつたんですなあ。」と醫師は用心ぶかい調子で口を入れた。

「僕だつて夢中になつたんですよ！」とミハイロフは凄じい聲で叫んだ。「あれは僕の犠牲になつたのぢやなくて、社會組織せんたいの犠牲なんです……もし人生がもつゝ別なものだつたら、この事の中には悦び以外、何ものもなかつたに相違ないんです……もし世間の人々が幸福になりたかつたら、勝手に別な秩序を作り上げるがよい。僕なぞに謹慎を要求する筋合ひはありやしないんだ！……僕は合點が行かない、従つて、そんな物を考量に入れようと思はないです。」

「だつて、君はあの女を棄てたぢやありませんか……」アルノルディは一そう低い聲でかう注意した。

「僕は何も棄てやしません……僕はたゞ生きたいのです！　たとへ誰のためだらうと、僕が自分自身を犠牲に供しなせやならないなんて、まるでわけが分からないぢやありませんか！……女は澤山あります。そして彼等はみんな美しい。僕に必要なのはすべての女で、一人きりぢやありません。しかも僕は自分で自分を苦しめたり、自分を歪げたり、うはべばかり装つたり、他人を欺いたりすることは出来ないです！……あの女は永遠の愛とか、何とかいふものが必要なんだが、僕には生憎その持ち合はせがない……それで別

れた譯なんです！……實はね、醫師、僕は今でもやはりあの女が好きです。だから、あゝいふ不幸な身の上になつたのが、痛ましくて堪らないのです……僕は一ど共棲した女を決して忘れないで、一生涯やさしい情愛を保存してゐますが、しかしその中の一人を幸福にするために、自分の魂を亡ぼすのは耐へきれない事だし、無意味な事でもありません……またそれが一體なんの幸福でせう？……人間を無理に鎖で繋いで置くなんて、奇妙な話しぢやありませんか！人間は一生涯一つがひびくになつて、自分で自分を束縛しようと思つてゐますが、その結果は醜惡以外に何ものもありません。まだかつて一度も幸福な結婚も、永遠の愛も現れたことがないのに、是が非でもみんなにかうした生活を送らせなければ承知しないんです！……一體みんな何を望んでゐるんでせう。もし萬が一、偶然どこかに幸福が出て來はしないだらうかと、そんな事でも、當てにしてゐるんでせうか？」

「しかし、これについては嫉妬も非常な意味を有してゐますよ……」とアルノルヂイが言つた。

「嫉妬ですつて？」とミハイロフは考へ深さうに問ひ返した。「さう……勿論……しかし人間の心理上、恐ろしい力を

持つてゐたのは奴隷根性ですが、それは既に征服されて了ひました！　ところが、この嫉妬は奴隷根性よりもつと悪いです！　これは系統的に人間を不具にしました、またこれから先も不具にする事だせう……しかも、ありとあらゆる奴隷根性の中で、もつとも悪質な奴隷根性たるこの嫉妬（それはつまり、靈魂、肉體、感情、その他人間の有する一切のものの奴隷状態を、同時に意味するからです……）これに對して戦ひを宣する者は、殆ど惡黨あつかひにされないばかりです……いや、こんな事を話したつて仕方がありません！……僕は現在生活してゐるやうに生活したいのです、またさうするつもりです！」

醫師は首をたれて、コップの中で匙をがちや／＼と鳴らした。彼は何一つ論駁する事が出来なかつた。なぜと言つて、一切の駁論はもう疾うに知れ切つて、あき／＼してゐたからである。何かしら一種漠然とした眞理が、ミハイロフの言葉の中に含まれてゐて、それを辯難する事は不可能だつた。彼の頭にはたゞ無限な苦痛の連続のみが映じて、あれほど明るい強烈な感情や、あれほど強く人間を奮擡みにする力をもつた歡樂が、たゞ／＼苦痛のみに導いて行くかと思ふと、奇妙な感じがするのであつた。



ミハイロフは黙つてゐた。彼の美しい顔を、暗い激昂の影がたゆたつてゐた。

醫師のアルノルヂイはそつと彼を偷み見た。

「ぢや、宜しい。」と彼は言つた。「それはまあ、假りにさうとして置いても、しかし君の歡樂は、永久に他人の苦しみに毒される譯ですな……」

「僕がそれを知らないと思つてゐるんですか？」とミハイロフは奇妙な調子でかう訊ねた。「苦痛の癡癡が明かに彼の唇を歪めた。」

「えゝ……」とアルノルヂイは呟いた。「だつて、人生はもつとほかの事で充實させることも出来るぢやありませんか？」

「何です？」

「する事は幾らでもありますよ……現に君などは、藝術を持つてゐられるから……」

ミハイロフは苦笑を洩らした。

「人生といふものはねえ、醫師、何をしてても苦痛しかないやうに出来るんでせうよ！」

彼の顔は東の間にさつと變はつた。そして目の光りは消えうせて、その中に哀愁と苦痛の表情が閃めいた。

「醫師、あなたは藝術がどういふものか、ご存じですか？ご存じない？……ところが、僕にはよく分かつてゐます！藝術は要するに、不斷の苦しみに過ぎないです……僕は堂堂たる大家の口から、極々あり觸れた職人か腰辨にでもなりたいといふ言葉を、何遍聞いたか分らないくらゐです……それは勿論、意氣沮喪した時のことですが、しかし俗惡卑賤な事物を、まるで最上の幸福の如く空想するやうになるためには、どれくらゐ苦しい經驗を嘗めなければならぬか、とても想像も出来ないくらゐです！あなたそれが分かりますか？」

「分かりません。」と醫師のアルノルヂイは首を振つた。

「實際、藝術家となるためには、氣ちがひにならなければなりません。」とミハイロフは語をついだ。彼の暗い目には、偏執狂のやうな閃きが燃えた。「なぜといつて、永久にさういふ緊張の中に生活しながら、實際のところ、よくも分らない奇怪な理想のために、自分の脳漿を最後の一滴まで搾り盡すやうな事は、氣ちがひでなければ、とても出来る事ぢやありません。あゝ、それは何といふ恐ろしい事だらう！……畫家が仕事をする時には、まるでとろ火に掛けられて、焼かれてゐるやうなものです。どんなものを描い

ても、自分の目にはいやに映つて、自分で自分の仕事が恥づかしいのです。そして、そのつまらない弱々しい仕事を、誰かに見られはしないかと、恐ろしくつて堪らないといふ有り様なのです。やがて次第に、どうしておれはこんなにつまらない、平凡な人間に生まれたのだらうと、自分で自分を輕蔑するやうになります。ほかの者には出来る事が、なぜ自分に出来ないのだらうと思ふと、時々泣きたくなつて來ますよ。しかも何より恐ろしいのは、自分が立派な作品を拵へたといふことを、どうしても心底から、眞面目に信じられないといふ事なのです。何かしら妙な分裂した心もちになつて了つて、人から褒められれば、ほんのお世辭に過ぎないやうな氣がするし、罵倒されると、その人間は自分の仇敵で、自分の藝術が分らないのか、または自分を傷つけるために、わざと分らないやうな振りをしてゐるのだ、と思はれて仕方がないのです。この状態が棺の中へ入るまで、絶えず續くのですからね……もし才能が盡きるまで生き延びたら、それこそ一そう恐ろしいです！ またさういふ例は、幾らでも我々の眼前にありますよ！……で、結局かういふ苦しみをして何になるのか、と問ひたくなつて來るのです。」

醫師のアルノルディは何か言ひ返さうとしたが、間に合はなかつた。

「僕はあなたの言はうと思つてゐられる事が、みんな前から分かつてゐます。」とミハイロフは遮つた。顔は燃えるやうな色をして、目は前後を忘れるほど興奮してゐた。「藝術の讚美とか何とかいふ事について、發し得る言葉は悉く語んでゐます……が、それは要するに、うはごとくか何ぞのやうなものに過ぎません！ ヒステリイ患者の自惚れといひたいが、それよりもつと悪い事かも知れませんが……現に僕はあの『白鳥湖』の繪にまる二月かゝりましたが……それは一たいどうした湖でせう？ なぜですつて？ まあ、それはいま問題にしない事にしませう……ほかぢやありません、やつとの事で眞白な生けるが如き白鳥が、いや、生きたのよりもつと美しい白鳥が、暗い水の上に影を映してゐる姿が、僕の目の前に現れたとき、あなた分かりますか？ ……何とも言へないほど氣高くて、純潔で、冷ややかな白鳥が、暗く冷たい淵の上に浮かんでゐるのです……そのとき僕は歡喜の餘り、殆ど發狂しないばかりでした！ 僕はいきなり往來へ駈け出して、自分の作つた物がどれくらい物だといふ事を、みんなに吹聴したくなりました……もし僕

があんな白鳥を現實に見たら、僕は岸に膝をついて両手を組み合はせ、感激と誇りで泣き出したに相違ありません。ところが、繪が仕上がつてから見ると、僕は情ないやうな、痛ましいやうな氣がして來ましたよ、醫師！」

「なぜですか？」と醫師はげんさうに訊ねた。

「知りません……説明が出來ないので……そこに何かあるんですね……それは實に奇妙な心持ちなんです……さうですね、もし生血のしたゝる心臟を一きれ千切つて、それを投げつけるとしたらどうでせう……僕は突然かう感じたのです——自分があればだけ苦心した畫と自分との間には、全然なものも存在しない！かう思ふと僕の歡喜も、苦悶も、何かかう望みのない空洞の中に、すつかり溶けて行つて了りました。白鳥を描いた、それでお了ひだ……それつきりだ……自分は自分で獨立した生活を營まねばならぬし、繪もまた自分で独自の生活をする……で、僕はかういふ事を空想して見ました。自分の描いた白鳥がどこかの大きな、冷たい美術館の廣間へ懸けられるとする……右の方には『イゴリ軍話』といったやうな物があるかと思ふと、また一方には『家畜飼ふ庭』とか、『岐路に立ちたる騎士』とか、『ヨアン皇帝』とかいふ畫が、ずらつと一列に並らん

である。ところが、自分はどこか遠い所に住んでゐて、同じやうな惱ましい緊張をもつて、後から後からと死ぬまで何か描き續けてゐる……もし僕が百枚目の畫を描きさして死んだとしても、十枚目の畫を描きさして死ぬのと、何の相違もないのです！……さうして美術館の中では依然として冷ややかな、變化のない光線がさし込んで、晝はむつつりと押し黙つたまゝで、見物は感動の餘り首を痛くしながら、ぶら／＼歩いてゐる……百年たつゝ後、僕の白鳥は依然として、暗い水に姿を映してゐるでせう……」

「さう、それがどうなのですか……結構ぢやありませんか……」  
「……合點が行かないらしくアルノルヂイは訊ねた。

「あゝ！」とミハイロフは忌々しさに叫んだ。「あなたは分らないんですね！……だつて、白鳥は僕といふ物なしに生活するぢやありませんか！それは丁度なにかしら他人に必要なものが、僕を滲潤して通り抜けるやうな具合ひです（けれとまた人によつては、必要なものかも知れませんがね）……ところで、僕はまるで塵塚の中に忘れられたほろきれのやうに、自分一人なのか、やはりもなく取り残される譯です……分かりますか、それは僕自身ぢやないのです、え……分かりますか……いや、僕にはとても言ひ現

せないです！」

ミハイロフは飛び上がつて、部屋の中を歩き廻り出した。醫師アルノルヂイの背後に立つてゐるのと同じ、天井の方まで折れ曲がつた巨大な影が、彼のうしろに起こつて、折れたり、くねつたりしながら、隅から隅へと絶え間なくついで廻つた。醫師もミハイロフも、それに氣がつかかなかつた。

ミハイロフは長いあひだ無言に歩いてゐたが、あらたに呼び醒まされた惱ましい想念が、凄じい勢ひで彼の腦裡を狂ひ始めたのは、その顔つきから察しられた。やがて彼は不意に立ち止まつて、いつもの癖で頭を一振りすると、急に鋭い聲でから／＼と笑ひ出したので、醫師は思はず慄然とした。

「こんな事はみんなノンセンスですよ、醫師！」

「ノンセンスですつて？」まるでこだまのやうに、醫師は器械的にかう繰り返した。

この瞬間ふと彼の頭に、白い、冷ややかな美術館の廣間が浮かんで來た。ずらりと並らんだ畫、物々しい静寂の冷氣、そして暗い神祕的な淵の上に永久に凍りついた、まるで誰かの苦痛の記念碑のやうな白鳥！

「君は何と言つたんですか？」ふと彼は我に返つて、かう問ひ返した。

「俱樂部へ出掛けようと言つてるんですよ。」何となくわざとらしい快活な調子で、ミハイロフはかう言つた。

「俱樂部へ？」と醫師のアルノルヂイは繰り返して、溜め息をついた。

「溜め息なんかつくのをおよしなさい、醫師、お願ひだから！」とミハイロフは叫んで、相手の肥えた兩肩を掴まへながら、優しく責めるやうな手つきで揺すぶつた。彼はもう以前どほりの快活な、暢氣らしい青年になつて、深い闇の中から、永遠な白鳥の死せるが如く美しい、冷ややかな幻を呼び出したのは、この人ではなかつたのかと思はれるやうだつた。

「ぢや、出掛けよう。」ぢつと彼の顔を見てから、醫師のアルノルヂイは同意して、重々しさに體を擡げた。

ミハイロフは自分の白い帽子を取るし、醫師のアルノルヂイは肥つた肩に、いつもお決まりの帆布の背廣を着て、蠟燭を消した。部屋は一瞬間に闇の中へ沈んで、黒い影も聲のない蛾も、まるで存在しなかつた物のやうに、跡かたもなく消えて了つた。二人は外へ出た。

偉大な星空は二人の上に擴がつて、夜の空間から生ずる冷気をさつと吹きつけた。頭の上は一面にきら／＼と、火花のやうに輝いてゐた。銀河は凍つた霜の花のやうに煙りながら、まるで想像もつかぬほどの高みへ遠ざかる、蒼黒い空の圓天井に連なつてゐた。しかし地上はどこもかしこも漆のやうな闇で、ミハイロフは危く入り口の階段から、轉がり落ちないばかりであつた。

「氣をおつけなさい、そこに段々がありますよ……」と醫師は遍ればせに注意した。

「ついでに、あなたは明日それを言つたらよかつたのに！」ミハイロフは闇の中から愉快げに答へた。彼等がまた支關さを離れない中に、誰やら門前へ馬車を乗りつける氣配がした。車輪の軋む音や、目に見えぬ馬の鼻を鳴らす音が聞こえたと思ふと、白いものの蔭がぐよりの所に現れた。

「醫師のアルノルデイのお住まひはこちらですか？」といふ若い女の聲がした。

「ちよつ、悪い鹽梅だなあ」とミハイロフはいま／＼しげに呟いた。彼は醫師と一緒になければ、俱樂部へ行きたくなかつたのである。

「わたしはアルノルデイです。」と醫師は答へた。

白衣の婦人は二人の傍へ近寄つた。彼女は氣をせいでゐるらしく、その姿は水の上の霧のやうに、闇の中をふわふわと漂つてゐた。

「先生、失禮ですが、おいでを願へませんか。わたしお迎へに上がつたんですの！」暗闇の中で醫師の顔を見分けようと努めながら、彼女は早口にかう言つた。

「何のご用ですか？」落ちつき拂つた調子で悠然と醫師は訊ねた。

「お迎へに上がつたんでございますの……」まるで醫師の胸に兩手を載せようとでもするやうな、奇妙な素振りを示しながら、若い女は繰り返した。「父が大變わるいんでございます……何だか知りませんが、どうやら發作が起こつたらしいので……わたし自分でお迎へに参りましたの……どうか少しも早くお願ひします！」

醫師のアルノルデイは背の高い肥つた體を屈めて、彼女の顔を覗き込みながら、その眞黒な目や、ふつくらした唇や、あわてて無造作にふわりと被つた白い頭巾を見透かした。

「誰か發作を起こしたのですつて？」と彼は訊ねた。  
「わたしトレグーロフですの。」こちらは忙しさに説明し

た。それは小柄な大學生のチージニが出稽古をしてゐる、子供らの姉に當たる娘だつた。

けれど、醫師のアルノルチイはもうそれと氣がついた。

「あゝ、エリザエータ・ペトロヴナ、あなたでしたか！  
ぢやお宅のお父さんが悪いのですか？ それは一體……前からですか？」

そして丁度をりが悪いのも考へず、醫師はいつもの癖で咳きをするやうな聲で、

「ちよつとご紹介させて頂きます……こちらはミハイロフさん……」

大きな目にふつくらと無邪氣な唇を持つた、見覚えのない可愛い顔が、揺れ動く闇の中で、覺束ない星明りに透かしながら、ミハイロフの顔をさし覗いた。娘は殆どその名を聞き分けようともしないで、彼に手を與へると、すぐにくるりと醫師の方へ振り向いた。

「後生ですから、どうか少しも早く！」

「参りませう。」重々しく吐息をつきながら、醫師は同意した。

娘は醫師を曳き立てて行くやうに、先に立つて歩き出した。彼女の足どりは輕快だつたが、肥大した醫師は、まる

で懲役人が永久に離れることのない手車に、またしても鎖で繋かれたもののやうに、重々しく後から足を運んだ。

ミハイロフは無言のまま二人を門外へ送つて、逞ましい商家の飼ひ馬が蹴上げた埃の、ちつと落ちつくのを待つてゐたが、やがてたゞひとり暗い往來つたひに歩き出した。

柔かい女の手の感觸と、何の縁もない無關心な目の、稻妻のやうに早い冷淡な（と彼には思はれた）視線とは、否應なしに彼を女の方へ引き寄せる、いつもの奇怪な、焼けつくやうな好奇心を呼び醒ましたのである。彼は暗い往來を歩きながら、眞黒な空に撒き散らされた輝かしい星を眺めてゐるうちに、ふと目の前の闇の中で、薄色の着物のびたりと吸ひついた圓い肩の躡げな輪廓や、白い顔に印せられたよそよそしい黒い目や、むつちりと高い胸や、見知らぬ娘のしなやかな、強健らしい、いざなふやうなからだ全體が、揺れ浮かんで来るやうな氣がした。

すると、彼は再び謎の前に立つて、解決し難い、満たす事の出来ないある物に誘引され始めたのが、ほとんど胸の痛いほど、惱ましく感じられて來た。

## 九

俱樂部ではどこもかもすつかり灯がついて、まるで中に蠟燭をともした玩具の家のやうに明るかつた。樂しげな光りが幅の廣い帯をなして、開け放した窓から暗い往來へ流れ出しながら、神祕めかしい圓屋根を星空に浸した、陰鬱な教會の足もとを照らしてゐる。

俱樂部の控へ室は、帽子や、杖や、傘などで一杯だつた。歌留多室からはもう青い煙草の烟が流れ出て、どこからか、どつと崩れるやうな大勢の笑ひ聲や、玉突き玉の乾いたから／＼いふ音などが聞こえてゐた。

ミハイロフは自分の白い帽子を見ずに掛けて、胡麻鹽の兵隊鬚を生やした、年寄りの支關番に訊ねた。

「誰々來てるね、ステパン？」

「誰々と申しまして、」なれ／＼しげに、しかも慇懃な態度で、杖を受け取つて、片隅へ立て掛けながら、支關番は答へた。「だいが大勢さま見えてゐらつしやいます……警察署長も來ておいでになりますし、將校がたも……それからザハール・マクシュームイチも……」

「アルブゾフが？」とミハイロフは早口に問ひ返して、ちよつと一瞬間、闕の上に立ち止まつた。

「左様でございます。つれの方とおいでになりましたので。」

クラウゼ少尉補、トレニョーフ二等大尉、それから大學生がたなどで……なかく大人數でございます。」

ミハイロフはそれを聞き流して、圖書室の方へ行つた。

そこはひっそり閑として、ラムプの笠が深く被さつてゐるために、暗いやうな氣がした。たゞ大卓に掛けた緑いろの羅紗の上で、新聞や本がけぼ／＼しく、しろ／＼と見えてゐた。大學生のチージュは片膝を椅子の上へ載せ、兩肘を卓に突きながら、低く屈み込んで新聞を讀んでゐた。長老とも助祭ともつかぬ見知らぬ男が、安樂椅子の中へふか／＼と身を埋づめ、赤い豊かな髪を兩肩へ波打たせながら、さも氣持ちよささうに繪入り雑誌を見てゐた。

「やあ、今晚は！」とチージュは首を上げて、聲を掛けた。

「どうしました、さつぱり見えませんか。」

「仕事をしてたんです。氣の進まぬ様子でミハイロフは答へた。彼はチージュが煙たかつた。それはこの大學生が自分に對して、輕蔑したやうな、反抗的態度を取つてゐるのが、感じられたからである。

赤毛の男は雑誌の蔭から、まじ／＼とミハイロフを尻目に掛けた。チージュは指で新聞の端をいぢりながら、この次ぎに何と言つたものか、分からないやうな風であつた。ミ

ハイロフは卓の上から本を取つて、ちよつと目次を見ると、すぐもとへ戻した。

「さう……」まるで敵の陣中にゐるやうな、ばつの悪さを感じながら、彼は何ともつかぬ調子で、齒と齒の間からかう言つた。

チーヅは黙つてゐた。助祭は目も放さずに、雑誌の蔭から眺め續けるのであつた。

ミハイロフはどうしていゝか分からなかつた。アルプーゾフと會ふのもつらいし、歸つて行くのも卑屈なやうに思はれた。さうすれば、相手を恐れた事になつて了ふ。ミハイロフは悲しいやうな、いま／＼しいやうな氣がした。彼はアルプーゾフと長く一緒に暮らして、勉強し合つた仲なので、しんから暖かい友情を感じてゐたが、今は敵同志として顔を合はせなければならなくなつた。ミハイロフは罪の意識に悩まされた。もつとも、彼は決して罪惡など認めなかつたのだけれど……

「結局、これは當のネルリ自身の問題なのだ！」まるで痛みでも感じるやうに眉を蹙めながら、彼はかう考へた。

あか／＼と照らされた食堂の戸口を洩れて、大勢の入聲や、皿のかちや／＼鳴る響きや、破れるやうな男の笑ひ聲

などが聞こえた。と、誰やらそこから人が出て来て、食堂の光りを隠したものがある。

背の餘り高くない、肩はどの廣い、黒い縮れ毛のくしやくしやくに纏れた、亂酒と不眠に黒い目を充血させた男が、圖書室へ入つて來たのである。

「あゝ……セルゲイー」思ひがけなくミハイロフを見つけて、彼はしや嘎れた磊落な聲で叫んだ。

少しよろけ氣味ではあつたけれど、それでもエナメル靴をしつかりと大股に擴げながら、彼はまつすぐにミハイロフの方へ歩み寄つた。このエナメル靴や、釦をはづした青い外套の下から覗いてゐる絹の赤シャツや、それに蓬々とした髪の毛などは、彼の容貌にさも鷹揚潤達らしい、しかも無氣味な趣を添へてゐるのであつた。

ミハイロフは彼を迎へるやうに立ち上がったが、何となく奇妙な、警戒するやうな身構へをした。近寄つて來た男の粗野で豪放な様子に比べると、彼の姿はすらりとして優美に見えた。

「見忘れたのかね？」挑戦と冷笑と憂愁の籠もつた、奇怪な調子で相手はかう言つた。「それとも僕が怖いのかい？」チーヅは頭を上げた。赤毛の僧も雑誌を膝へおろして、



一生懸命に目を見はりながら、二人を注視し始めた。町ぢゆうの人がこの顔合はせの裏面の消息を知つてゐた——アルプーゾフが酔興ではあるけれど、死ぬほど戀ひ焦がれてゐた娘を、ミハイロフが誘惑して棄てたのである。

「ばかな事を言ふなよ。美しい誇に充ちた頭を高く振り上げながら、ミハイロフは輕蔑したやうな冷たい調子でかう答へた。

アルプーゾフは外套の衣囊に兩手を突つ込んで、ちよつと立ち止まりながら、焼けつくやうな熱した目で、額ごしにミハイロフを見つめた。一秒間、いや、それよりもつと短かいかも知れない——息の塞るやうな緊張した沈黙が續いた。アルプーゾフははゞの廣い胸で重々しく息をしながら、牡牛が突撃にかゝるまへ土を掘るやうに、額の廣い重さうな頭を、だん／＼低く下げて行くのであつた。黒い髪が一握りだらりと垂れた。

ミハイロフは依然として卓に手を突きながら、ぢつと立つたまゝ待ち受けてゐた。彼は落ちつき拂つて、輕蔑したやうな冷たい微笑さへ浮かべてゐたが、細い白い手は卓の上で微かに慄へてゐた。

何かしら物凄なもの——ちやうど醜いばかげた殺人人の豫

感めいたものが、空中に垂れかぶさつて來た。白い手はいよいよ強く慄へ、アルプーゾフの息使ひは、いよ／＼しやゑれて重々しくなつた。

チージは自分でもそれがつかないで、いつしか卓の傍を離れた。赤毛の僧は何やら言はうとしたが、たゞ蒼くなつた唇を動かしたのみで、とつぜん椅子から飛び上がった。

しかしこの瞬間、アルプーゾフは纏れた長髪を一振りして、黒い鬚の蔭から白いはゞの廣の齒を見せながら、ひん曲がつたやうな薄笑ひを浮かべると、強ひて愉快さうな、引き千切つたやうな聲で言ひ出した。

「いや、まあ、いゝさ……ご機嫌よう、ずるぶん長く會はなかつたぢやないか——」

ミハイロフは靜かに慄へる手を差し出した。けれど、アルプーゾフはその方へ一步踏み出して、まるでかけ換へのない親友か何ぞのやうに、固く相手を抱きしめた。二人は接吻し合つた。そして、赤毛の僧とチージが二人の顔を見た時には、ミハイロフはまるで屈辱を受けた者のやうに、蒼白い驚感したやうな顔つきをしてゐるし、陰鬱な美しさを持つたアルプーゾフの顔には、重苦しい病的な憂愁とい

つたやうな、奇妙な表情が浮かんでゐた。

「ところで、どうだらう……一緒に行つて飲まうぢやないか？ え？……」しつかりとミハイロフの手を取りながら、アルプーゾフは不自然にのん氣らしい調子で言つた。「向かうにゐるのはみんな仲間の連中ばかりだ……盛んにやつてるよ、セリョージャー……」巴里へも行つて来た……盛んにやつてるよ！……飲まうぢやないか、え？……もうどうせ破れかぶれだ！……だが、君はどこへ行つてたね？」

「行かう。」ミハイロフは目を上げないで、小さな聲で答へた。「莫斯科にゐた、繪を持つて行つたのさ……それから、自分の持ち村に引つ込んで仕事をしてたよ……」ところで、君はどういふ風に暮らしてるい？」

アルプーゾフの充血した陰鬱な目は、奇妙な愛情を帯びて、ミハイロフの話してゐる間、ちつと彼を見つめてゐた。ミハイロフが口を噤んだとき、彼は鐵のやうな指で一そう強く相手の肘を握りしめた。

「君はいゝ男だよ、セリョージャー！……繪を持つて行つたつて？……どうして僕に見せてくれなかつたのだね？ 僕は君の繪が好きなんだよ……もしかししたら、買ったかも知れないのに……それとも僕には分らないかな、え……全く

僕は舊態依然たりだ。飲む、あばれる……それだけなんだ！ 僕らみたいな商人の息子には、それが相當してるのさ……ぢや、行かう！」

よく騎兵に見受けられるやうな、すこし曲がつた、強健な、エナメル靴をはいた足で、例の如くしつかりと大股に歩きながら、彼は、ミハイロフを引つ張つて、食堂へ行つた。

ほつと息をついたチージュは、ばかにしたやうな目つきで二人を見送つた。赤毛の僧は、二人が戸の蔭へ隠れるのを待つて、にや／＼笑ひながら、チージュに話し掛けた。

「わたしは實のところ、びつくりしましたよ……きつと横面でもぶん撲るに相違ないと思つてね！ あなた知つてゐますか、あの繪かきがアルプーゾフの女を横取りしたんですよ……」ところで、今その女はたゞならぬ體なんです、先生それを棄てて了つたんですよ……何しろ大した騒ぎで、町ぢゆうその噂ですよ。」

「あなたは、」やつと薄い唇を動かしながら、チージュはしづかに毒々しく注意した。「なるべく世間の蔭口など取り次がない方がいいよでせう……僧職にをられる方には、どうも不似合ひのやうですよ、全く！」

赤毛の僧はどこまでも人のよささうな聲で、ひゅと笑つた。

「何が蔭口ですか？ 正真正銘の事實ですよ……みんな誰でも知つてますよ。ところで、キリール・ドミートリッチ、あなたの口の悪いことも、やはり疾うから承知してをりまして……しじゆう皮肉ばかり言つておいでよすからな！」  
チージは新聞を棄てて、ばかにしたやうに彼を見やつた。

「ニコライ長老、あなたのお人好しにもあき／＼しましたよ……あなたにや眞面目で腹を立てる譯にも行かない……滑稽な人物ですなあ！」

赤毛の僧はもう大聲あげて笑ひ出した。

チージは、べつと唾を吐いて、椅子から片足おろし、食堂の方へ行つて了つた。

こゝでは一切のものがげば／＼しく騒々しかった。棚は幾百と知れぬ色さまざまな燈を輝かし、あちこち飛びかふボーイ達はあたりの光景に、陽氣な忙しさといつたやうな氣分を添へてゐた。

ある一つの卓を圍んで一組みの客が陣取つてゐた。それは將校連のほかに、随分ひどく酩酊してゐるらしい、眼鏡

や頤鬚のばかに目立つ人達であつた。彼等は譯の分らない響きのいゝ聲で、互に負けず劣らず叫んでは、雷のやうな笑ひ聲を立ててゐたが、その中で見事な鬚を生やした、肥つて、大きな警察署長の堂々たる聲が、かくべつ耳立つて聞こえるのであつた。ミハイロフはその仲間で、見知り越しの副官に氣がついた。彼は白い肩章をつけ、細おもての傲慢らしい顔つきをしてゐたが、低いけれど自信に充ちた聲で、何やら話をしてゐた。人々がから／＼と笑ひ崩れる時でも、腮の突き出た美しい彼の顔は、たゞ冷たい薄笑ひに心もち歪むだけであつた。

一面に皿や壺を並らべた大卓では、アルブーゾフの組みが食事をしてゐた。

「さあ、諸君、鷹(美丈夫を)を掴まへて来たよ！」しつかり掴んだミハイロフの肘を、いつまでも放さうとしないで、アルブーゾフは思ひ切つて磊落な調子で叫んだ。「實に愛すべき男なんだ。酒も中々いけるし、しかも豪い畫家なんだからね……さうぢやないか、セリョージヤ、僕の言ふ事に間違ひあるまい？……みんな知り合ひかね？」

ミハイロフは取られた手をふり放して、挨拶に行つた。少しも早くアルブーゾフから離れたかつたのである。彼の

さういふ笑ひ聲の中には、取つて付けたやうな愉快らしい調子を透かして、引き千切つたやうな病的な響きが、明らかに聞き取れるのであつた。

ミハイロフを迎へるべく立ち上がったのは、人をばかにしたやうな、メフィストフェレスじみた顔つきのクラウゼ少尉と、蒼い顔をした、鬚の立派なトレニョーフ二等大尉と、どこかの商人の息子と、頭の毛のぼう／＼した、目つきの野性でアブノーマルな、見覚えのない陰氣くさい男であつた。「ナウーモフ、」とアルブーゾフはこの男を紹介した。「新しく来た家の技師だ……さあ、坐り給へ、セリョージャ、飲まうぢやないかー」

ミハイロフはクラウゼ少尉補とナウーモフの間に坐つた。「ところで、あの大學生連中はどこへ行つたんだい？ まさか逃げ出したのぢやあるまいな？」

不自然に活氣を帯びた調子で、アルブーゾフは氣を揉み出した。

「あの人は玉突きに行きました。」正確かつ慥然な調子で、クラウゼ少尉補は答へた。

「また？ ちよつ、勝手にさして置け！……飲めよ、セリョージャー」杯へ火酒を注ぐ拍子に、卓布の上へ溢しながら、

アルブーゾフはかう呶鳴つた。「邪魔になるかね、こつちへ寄越し給へ。」ミハイロフが杯や皿の間へ亂暴に抛り出された鞭を、肘でわきへ退けてゐるのに氣がついて、彼はかう言つた。

彼は鞭を取つて、椅子の上へ抛り出した。

「ところで、僕等は今夜あたらしい三頭立を祝つて、飲んでるんだよ、セリョージャー」依然として熱病やみのやうな調子で、アルブーゾフは語り續けた。彼は絶えず何かにぐんぐんしやくられてゐるやうな風だつた。「僕は今度すばらしい、どえらい馬を買つたんだ。工場からこゝまで二時間で駈けつけたよー」

「新しい三頭立を買つたつて？」ミハイロフはわざとらしい調子で訊ねた。「で、もとの分はどうしたの？」

「もとの分？」物思はしげにアルブーゾフは問ひ返した。

「斬り殺しちやつた！」陰鬱なぶつきら棒な調子でかう言ひ終ると、彼はちよつと口を噤んだ。

「ぢや、あなたの言はれるのは。」クラウゼ少尉補は細おもての白い顔の上に、メフィストじみた細い眉を吊り上げながら、ナウーモフに向かつて、丁寧な低い聲でかう言ひ出した。

「わたしが言ふのはかうです。」ミハイロフが思はず振り向いて見たほど鋭い聲で、ナウーモフは出しぬげに相手を遮つた。「人間は自分の思想を不合理になるまで、押しつめる事が出来ます……それは残忍になるまでと言はうと、暴虐になるまでと言はうと、どうでもご隨意です……權利なんて事は問題にもならないくらゐです？……一たい權利とは何です？ 權利は何物か——或ひは何人かに對する打算を豫想してゐるが……一たい何人に對する打算でせう？ 何のためでせう？ わたしは欲する事が出来るでせう？ もし欲する事が出来るとすれば、従つてわたしはその欲求を實行し得るわけです……もしわたしに取つて生が厭はしければ、わたしは自分自身のものだらうと、他の生存物のものだらうと、その生を撲滅すべき絶對の權利を持つてゐます。だつて、わたしは誰に責任があるのです？ 他の人間にですか？ しかし彼等はわたしを殺す事こそ出来るけれど、それはそれとして、わたしが自分の欲求を實行しようとするのを、禁じる譯に行きません！……人が自殺を考へてゐる時に、その權利があるかどうか、などと詮議（せんぎ）だてをするのは、たゞ滑稽（せき）でみじめなばかりです！……力あるものをして行はしめよ——これがあらゆる教訓の中で、唯

一の眞理ですよ！」

「全くだ！」とアルブローフが熱くなつて叫んだ。「權利も何もあつたものか！……なくなつた僕の親爺は、この地方一圓を貸地契約で擡り上げたし、僕はまたあの工場で、ぐうの音も出ないほど抑へつけてやつてる！ どつちだつて同じことなんだ！ まあ、腕のある者は僕と競争するがい……權利も人道もあつたものか！ 人間は吸血鬼だつたのだから、これから先もやはり吸血鬼で通すのさ。全くその通りだ。自分が悪魔に喉を絞められない中に、うんと他人をやつつけて、魂まで剃き取つて了ふんだ！ よく人は棺の中へ金を持つて入れないと言ふが、ぢや、人道は持つて入れるのか？ 愛は持つて入れるのか？……さあ、やらないか、セリョージャー！ どうして飲まないのだ！」と彼は粗野な聲で呶鳴つた。「ちよつと待つてくれ、僕は君と一緒に乾すぜ。さあ、ひとつ杯をかちりと合はさうぢやないか！」

ミハイロフは自分の盃をさし伸べた。アルブローフは充血した黒い目で、ぢいつと彼を見つめてゐたが、またもや優しい愛情と、憂愁の影がその目を曇らせた。

「僕は君が好きだよ、セリョージャー、今も好きだし、これか

「先も永久に好きだらう……萬一君を殺すやうな事があつても、それでもやはり愛するに相違ない……さあ、飲み給へー」

むつとするやうな亂酔の氣が、卓の上に漂つてゐた。ひよる長いクラウゼは、死のやうに蒼い顔をしてゐたが、例のはずり上がったメフェイスとじみた眉が、奇妙に黒々とその尖つた顔面に浮いて見えた。無口なトレニョーフ二等大尉は、言葉もなく首を垂れて、長い鼻鬚をひねりながら、立て続けに杯を重ねてゐた。ナウーモフは偏執狂のやうに緊張した、ワイルドな目つきで邊りを見廻しながら、たゞ濃い茶ばかり飲んでゐた。圖書室から現れたチージニは、卓の端へ座を占めて、自分の前に小さな三鞭酒の杯を置きながら、耳へ觸れるあたりの會話に、侮蔑の薄笑ひを洩らすのであつた。彼は酔漢の中に交じつてゐるのが退屈だつたけれど、こゝを去つて了ふのも氣が進まなかつた。かうした光りと喧噪の境を出て、薄暗いラムプと鏝くたの寢臺のみが待ち受けてゐる、がらんとした小さな自分の部屋へ歸るのは、餘りにも耐へ難いことであつた。アルプーゾフは目立たぬやうに飲んでゐたが、誰よりも一ばん大聲で呷鳴るのだつた。見受けたところ、彼は非常に酔つてゐるらしく、

黒い目はだん／＼陰鬱になつて、頬の上には白い斑點が浮いて來た。

そこへ赤毛の僧がやつて來た。そして、こそ／＼と酒場の方へ行つて、火酒を一杯ついでくれと、人差し指で手眞似をした。彼はアルプーゾフの連中に少しも興味を持たぬやうな振りをしながら、つましく鱈を肉刺でつつ突いてゐた。

「あゝ、ニコライ長老……こゝへ來なさい！ そんな所で火酒なんか飲んだつて、仕様があまりやしない。一つ神の光榮を祝して、三鞭酒でもおやんなさい！」

赤毛の僧は嬉しさうにこそ／＼しながら、自分の鱈を打つちやつて、この酔つ拂ひの一座を祝福しようと身構へるやうに、歩きながら法衣の袖を直し直し、傍へやつて來た。

「許さん、ご免下さい！ ちよつと坐らして頂きませう。」

二等大尉のトレニョーフは鬚をひねるのをやめないで、少し椅子をいざらせた。

「しかし、すべての人の生活には、許すべき事と許すべからざる事を決する、何等かの標準がある筈ですよ。」まるで議論してゐるのではなくて、忠言でも求めるやうな調子で、クラウゼに相變はらず丁寧な、低い聲で言ひ續けた。「なぜ

つて、もしそれがなければ、一般の人間生活は言ふまでもなく、個々の人間の生活に、非常な混沌が生じて……」

「哲學なんかやめるよ。」とアルブーゾフが叫んだ。

「生きる事が不可能になるからです。」まるで何も耳に入らなかつたやうに、相變はらず落ちつき拂つて、クラウゼは語を結んだ。

「あなたはぜひ生きなさいやならないんですか？」とナウーモフが聞いた。

「あなたは現に生活してゐるぢやありませんか？」冷笑的な、殆ど毒々しい調子で、チージが傍から口を入れた。彼はナウーモフが氣に食はなかつたのである。

「なにっ？」突然アルブーゾフが、恐ろしい聲でかう嗚鳴つた。その聲に一同は思はずびくつとなつた。ポイイらさへも、臍棚の蔭から飛び出したほどである。

チージはこの叫び聲が自分に向けられたものと思つて、侮辱されたやうに後を振り向いた。けれども、アルブーゾフは腰を擡げて、兩手を卓に突きながら、彼の頭ごしに向かうの方を見つめてゐた。いま彼の顔は蒼白になつて、唇などは紫いろだつた。

隣りの卓でも、みな一齊に首をこちらへ向けた。

「どうしたのです？」と副官は高慢らしく目を細めて、アルブーゾフを眺めながら、冷ややかにかう聞いた。

「黙れ！」とアルブーゾフは叫ぶや否や、椅子を突き飛ばして、危くチージュを床へ倒さないばかりの勢ひで、副官の方へ飛びかゝつた。唇が烈しく慄へるので、彼は言葉を續ける事が出来なかつた。

「ゾーリヤ(ザハルム)！」とミハイロフは叫んだ。「何をどう腹を立てるんだい？」

戸口には物ずきた人々の顔が覗いた。クラウゼ、ナウーモフ、チージ、トレニョーフなどは、何の事やら分らないで立ち上がった。赤毛の僧は今にも逃げ出さうと身構へるやうに、臍棚らしく法衣をまくつてゐた。

美しい副官もやゝ顔を蒼くしながら、同様に立ち上がった。ほかの人達も一歩あとへすさつて、憎えたやうに眺めてゐた。彼等はこの騒動の原因を知つてゐるらしかつた。たゞ肥つた警察署長だけは兩手を振り振り、何か頻りに宥めようとあせつてゐた。

「失禮ですが……君は僕に言つてゐるんですか？」低いけれど表情に富んだ聲で、副官はかう言ひながら、猫のやうな素はしこい動作で、そつと目につかぬやうに、手を騎兵ズ

ボンの衣囊へ突つ込んだ。「一體なにご用です？」

「おれは貴様の言つた事を聞いたぞ、畜生。」とアルブゾフは叫んで、鞭で卓をびしりと叩いた。杯が粉微塵に碎けて、硝子のかけらが一同の顔に飛び散つた。「ネルリだつて？ ネルリとは誰の事だ？……畜生！ たい貴様は自分で何を言つてるか分かつてるのか……うん？」

それから彼はミハイロフの方へ振り向いて、はつきりと落ちついてかう言つた。

「セルゲイ、あいつはかう言つたんだ——これから馬車をやつてネルリを呼んだら、あれはきつとやつて来るに相違ない。どつちにしたつて、失ふべきものはないからつて……どうだい？」

ミハイロフはつか／＼と前へ進み出た。しかし、アルブゾフは彼を傍まで行かせなかつた。

「やい、よく聞け！」と彼は副官に向けて叫んだ。「もし貴様かもう一度あれの名を口にしたら、おれは……おれはこの鞭で、貴様の面を叩き潰してくれるから！ 何だと？」

黙れ、貴様なんか、あのネルリの手を接吻する値うちもないんだ、畜生！ 黙れと言ふのに！」

突然、彼は狂氣のやうに鞭を振り上げて、卓の食器を

りたけ床へ叩き落とした。皿や杯のかけらが、がら／＼音を立てて散亂した。一同は跳り上がった。

「もし貴様があつた一ことでも口を利いたら……おれはこの鞭で貴様らの面をみんな叩き潰してくるぞ！ 畜生めら！」はあく／＼息を切らせながら、アルブゾフはしやゝ噁れた聲で嗷鳴つた。

副官は思ひ掛けなく妙に身を屈めて、卓の蔭から飛び上がった。彼の手の中には、醜い黒い拳銃の銃口がちらと閃いた。多くの人は思はず目をつぶつた。

「あ……あ……」食ひしばつた齒の間から彼はかう唸つた。

「あゝ、ブローニングか！」まるで非常な歡喜にでも打たれたやうに、彼は愉快げにかう叫んだ。「さあ、構はない……射て！」

と言ひさま、彼は恐ろしい力で鞭を振り上げた。

しかし、この時ミハイロフが身をもつて彼を庇つた。また誰やら後ろから素早く副官の手を叩いた。重い拳銃はどすんと卓の上へ落ちて、皿を粉微塵にした。

「なんか間違ひがあるといかんたい！」玉突き室から駆け出した大學生のダギデニコが（彼は小鷹で、低い太い聲でかう言つた。「諸君、あいつを取り給へ……さうだ、それでよ



かー」

ひよろ長いクラウゼは、部屋を殆ど一足に跨いで、冷然と拳銃を取り上げると、そのまま衣囊へ納めて了つた。

「もしお望みでしたら、僕は自分のこの行爲に對して、あなたにご満足を與へる事が出来ませう」彼は低い聲で副官にかう言つた。

「なに、構ふもんか、打つちやつとけー」アルブゾフは急にすつかり落ちついて、さも酔つ拂ひらしい、うき／＼した聲で呷鳴つた。「セリョージャ、打つちやつとけよー 一つ飲みに行かうー」

副官は齒を食ひしばつて、眞蒼な顔をしながら、無言のままダギデニコと争つてゐた。が、大學生はまるで袖め木に掛けたやうに彼を抑へつけながら、絶え間なしに落ちつき拂つた低音でかう言つてゐた。

「ミーシユカ、劍を取つて了へ……軍人さん、氣は鎮めなさいー あい、があんたの面をはつて、あんたが、あいの横つ腹に穴を明けたかちうて、なんのよか事があるとか。取り返しはつきませんぢやろにー」

突然、副官はダギデニコを突きのけて、嘲るやうに笑ひながらかう言つた。

「アルブゾフ君、お互にもう一度あひませうよー」  
「いゝとも。」アルブゾフは暗い調子で答へた。「鞭はいつでも持つてるからー」

副官はまた嘲るやうに笑つたが、誰にも目をくれないで拍車を椅子に引つ掛け引つ掛け、食堂を出て行つた。取り残された仲間の者は、どうしていゝか分からないで、途方に暮れたやうに目と目を見合はせてゐた。警察署長はフロクコートの牛酪と山葵を、ナプキンで拭きながら、憤慨したやうに呟いた。

「これはどうも赦すべからざる事だ……富豪といふものは……」

「お前なんか黙つてゐろ、老いぼれ雀ー」アルブゾフは愉快さうに呷鳴りつけた。「お前に關係した事ぢやない……それよりこつちへやつて來なー」

「そりやわしも知つてる……わしは勿論、この事件に何の關係もないけれど……」自分で自分を宥めるやうに、署長はかう言つた。「だが、實際のところ、ザハール・マクシームイチ、あゝいふ事はいかにですよー」

「もう充分だ、よしにしなー」アルブゾフは忌々しさうに手を振つた。「さあ、諸君、敵軍征服を祝はうぢやないかー」

ミハイロフはぐたりと身を落として坐つてゐた。卓の上に載せた彼の華奢な手は、先ほどと同じやうに烈しく慄へてゐた。

「セリョージャ。」突然、卓ごしに彼の方へ屈みかゝりながら、アルブゾフは小さな聲で言つた。「しかし、何といつても、君の作つた罪ぢやないか……可哀さうぢやないか！」

ミハイロフはちらと彼を見やつて、また目を伏せた。

アルブゾフは暫くの間、沾みのある充血した目で、相手を見つめてゐたが、やがて面倒くささうに手を振つて、獨ごとのやうに呟いた。

「え……誰が悪いのか分かりやしない！」それから出し抜けに、俱樂部ちゆうへ響き渡るやうな聲で叫んだ。「おい、ポイイ！ 三鞭酒だ！ 大急ぎで持つて来い！」

ポイイらは目くばせをする勇氣もなく、黙々と忙しさうに器のかけらを拾つてゐた。で、明日にも早速ポイイらの口から、醜い穢らしい嘘半分の噂話しが、町中へ滲み擴がるだらうとは、その顔を見ただけでは想像する事が出来なかつた。副官の連中は、小さな聲でひそ／＼話し合つては、アルブゾフの方を振り返つてゐたが、やがて勘定を済まして立ち去つた。署長はこちらの卓へ座を變へた。そ

して制服についた脂のしみを、器械的にナブキンで拭きながら言つた。

「ザハール・マクシムイチ、あなたは随分わるい事をしてをられるが、まさかこんな騒ぎを擡げようとは、思ひ掛けなかつたですよ……全く何かいやな事になるかも知れませんが……しかし、何といつても痛快だつた。有り體に言ふと、あれは實に言語同断だ。わしも自分でも、あの男に注意してやらうと思つたくらゐですよ……もつとも、あの娘さんは、全くのところ……」彼はちよつと間誤つきながら、ミハイロフの方を振り向いた。「だが、あんな事を言ふべきもんぢやない、正直なところ、わしでさへ憤慨したくらゐですよ……」

「下らない事を喋るのは澤山だ！」とアルブゾフは無作法に遮つて、陰鬱な目つきで一座を見廻した。「だが、こゝにゐても面白くないなあ……諸君、一つ僕の工場へ行つて見ないか、え？」

このとき戸口に、醫師アルノルヂイの、偉大な、重々しい姿が現れた。顔は老併優のやうに綺麗に剃り上げ、惘巧さうな目はどんよりしてゐた。

「ドクトル！」とアルブゾフは有頂天になつて叫んだ。

「僕の大好きなドクトル！一緒に出掛けませんか？」

「さうですなあ。」と醫師は無關心な聲で應じた。

間もなく一同は椅子をがた／＼言はせたり、騒々しく話し合つたりしながら、食堂から出て行つた。チージュはちよつと考へた後、氣難かしい顔をしながら、ついて行つた。

食堂の中には、一つ所へ寄せられた卓や、方々へ投げ散らされた酒びたしの卓布や、皿や、壺のかけばかりが取り残された。ボーイらはがや／＼喋りながら笑ひ出した。

外は眞暗な夜で、空は無数の星に燃えるやうだつた。どこか暗闇の中でアルブゾフの三頭立が、鈴をちやら／＼と鳴らす音が聞こえた。

「では、誰々行くのだね、諸君？」すつかり酔つ拂つたアルブゾフが、闇の中でかう喚いた。「セリョージュ、僕と一緒に乗り給へ……ドクトルも引つ張つて行かう……ナウ！モフ！」

「僕は全く駄目だ……」目に見えぬチージュが、氣難かしげにかう言つた。「明日は早くから出稽古で……」

「出稽古なんか何だ！」彼の手を掴まへながら、アルブゾフは嗚鳴つた。「下らないことを言ふな、放しやしないよ！一緒に行かう！」

「ぢや、いゝやー」自分でもなぜか知らず、相變はらず氣難かしい調子で、チージュは同意した。

第一の三頭立の鈴が、ちやら／＼とお喋りを始めるのが聞こえた。

「あなたは新しい方に乗つて行くんですか？」几帳面な調子でひよろ長いクラウゼが訊ねた。

「さうだ……あゝ、待て……セリョージュ」とアルブゾフは叫んだ。「君に一つ見せてやらうか？立派な馬だよ！……待て……パーエル(敷名)、手綱をしめろ……セリョージュ、こつちへ來給へ！」

マッチの火が慄へながら、ばつと燃え上がった。と、眞暗な闇の中から、まるで凱旋門の上に載つてゐるやうな、俐巧さうな美しい馬の首が、三つ並らんで浮き出した。黒い目は瑤瑤のやうに光つて、耳はびく／＼と痙攣的に動いた。

「見給へ、まだよく乗り馴らしてないから、すぐ驚くよ……」と騎兵大尉のトレニョーフが無關心な聲で言つた。

アルブゾフは答へなかつた。彼はすぐ馬の鼻づらの下を歩いて、マッチの光りに照らして見ながら、ミハイロフに向かつてともなく、自分の馬に向かつてともなく、落ちつ

いた優しい聲で話してゐた。

「え、どうだね、全く好男子だらう！　實際、僕はその通りの名前を付けてやつたんだよ。この方が『美人』、これが『美女』、そして眞ん中の分が『美男子』といふんだ！……君よく見給へ！……たゞ口を利かないのがもの足りないだけだ、可愛いやつ等だよ！」

黒毛の『美女』は敏感らしく、圓い瑪瑙のやうな目をかたく横へ引つ吊らした。中馬は頻りに耳をびく／＼動かしながら、絶えず足踏みするのであつた。細い網目のやうな血管で蔽はれた、薄いつや／＼しい皮膚が、神経的に動くのがよく見えた。三頭立は釘づけにされたやうに立つてゐた。

マツチは消えた。

「さあ、出掛けよう！」赤い炭火をわきの方へ棄てると、アルブローゾフはかう言つた。「乗りな、セリョージャ……さあ、いゝかね！……坊さんを忘れやしなかつたかい？」

「わたしはこゝにゐます、こゝにゐますよ！」といふ赤毛の僧の聲が闇の中から聞こえた。

「もう出發してもいゝです、みんな乗りました。」とクラウゼ少尉補が大きな聲で言つた。

「ぢや、パーゼル、やれ！」

馬車に馴れない三頭立は、闇の中に隠れながら、どこかわきの方へ暴れて行つたが、すぐまともに向きを直して、手綱を引き締めると、笑ふやうな、喋るやうな、また呻くやうな鈴の音を立てながら、埃で天鵞絨のやうになつた暗い道を、とつと走り出した。

絶えず速力を増しながら、往來ぜんたいに車輪の轟きと鈴の響きを響き渡らせ、近所の犬の眠りを醒ましつゝ、馬車は後から後からと、一つ／＼町角を曲がつた。と、兩側の塀のぼうとした輪廓や、白いしみのやうな家々や、教會の圍ひや、兩手を差しのべた幽霊じみた木立ちなどが、目まぐるしくちら／＼掠めて行つた。

「手綱を放せ、パーゼル！」思ひがけなくアルブローゾフがかう叫んだ。

「後の車が追つ付けませんよ、且那樣。」うしろを振り向かうともせずに、馭者は泰然として答へた。その背中が闇の中で躍けにゆらく動いてゐる。しかし、それでも彼は手綱を放したらしく、突然、大地が急にぐんと後ろへ流れて、乾いたねば土の小さな塊りが、乗つてゐる人々の顔に手痛く飛んで來た。空氣はすべての物を一つの線に溶かし込み

ながら、四方で轟々と鳴り出した。鈴は絶えずたか／＼と粗野な響きを立て始めた。

町は寢しづまつてゐた。罌戸を閉めた白い家々は、けんさうな、同時に非難するやうな目つきで、この氣ちがひめいた駛り方を眺めてゐた。

曲がり角で灯のついた窓が一つ、赤い點のやうに閃いたが、すぐ消えて了つた。

## 10

寢臺に近い小卓の上には、ラムプが燃えてゐた。老教授イワン・イワーノヰッチは、干からびた兩手を毛布の上へ投げ出しながら臥てゐる。

ラムプの光りは鋭く寢臺を照らすのみで、遠い四隅は縁がかつた闇に沈んでゐた。この露のかゝつたやうな片隅で、何かしら奇妙な、人間の目に見えぬ神祕な仕事か、絶えず静かな騒ぎを立てながら、綿々と續いてゐるやうに感じられた。

イワン・イワーノヰッチは身動きもせず、片隅を見つめてゐた。あたり全體を占めてゐる睡りと沈黙の中で、奇妙に冥想的なこの凝視がなかつたら、彼はもう一個の死骸と

見られたかも知れない。關節の邊が一面に剛ばつて、干からびたやうな手は力なく横たはり、顔を上へ向けた頭は重く枕を仰へつけ、骸骨のやうな骨は鋭角をなして、掛け布の下から突つばつてゐた。

白髪の小柄な老婦人は、靜かに隣りの寢臺で眠つて、氣持ちよさうに鼾さへかいてゐた。

イワン・イワーノヰッチは、ちつと眺めながら考へてゐた。彼の頭腦は澄みきつて、思想は絶えず緊張し、始終ひとつの圈内で働いてゐた。記憶はしば／＼間違つた言葉を提供したけれど、イワン・イワーノヰッチは、そんな事に氣がつかなかつた。自分の苦しみを人に語り傳へたいと思ふ時、記憶が變に先き走りをしたり、恐ろしい苦痛を語らうと思つた言葉が、奇怪で、滑稽な、意味もない事を現したりすると、堪らないほど苦しかつた。彼は自分の老耄さ加減、衰弱さ加減が忌々しかつた。人が自分の心持ちを理解してくれない、自分の耐へ難い憂愁の感じが他人に通じない、周圍のもの顔にはたゞ弱々しい鈍い同情の色しか見えない、かう思ふと胸が痛いやうだつたが、今は誰も聴き手がないので、彼の覺束ない片ことが分かつたやうな顔をする者もない。で、思想は言葉なしに——でなければ、手當た

り次第の言葉を使ひながら、鐵のやうな力で働いてゐるのであつた。

死はもう目前に迫つてゐた。イワン・イワーノヰッチは、自分の生涯が残り少くなつた事を知つてゐた。もつとも、それが一日や二日の間に來ようとは、想像してゐなかつたけれど、しかしこの秋まで——少くとも、冬までは生き延びられないと思つてゐた。この恐ろしい霧の秋は、長い一生に比べると、もう戸の外まで來てゐるやうに感じられた。

あゝ、彼は何と長いあひだ暮らして來た事だらう！ イワン・イワーノヰッチは自分の過去を回顧して、そこに絲口のない年の行列を見た。彼は子供時代の自分、大學生の自分、行儀よく講壇へ上つて行く老教授の自分を、同時に思ひ出すのであつた。些末な事實や重大な事實が幾百萬となく、途方もなく大きなほつとした模様をやうに、入り交じりながら目の前に擴がつた——結婚、試験で取つた零點、村で過ごした夏期休暇、卒業論文の辯護演説、マルクスとの邂逅、外國旅行、倫敦、巴里、紐育のほつとした輪廓……その他いつたこと考へたこと、出會つた人などは無際限で、數へることが出來なかつた。それは恐ろしい速力で、記憶の中を前後に動き廻つてゐる、巨大なパノラマみたいなも

のだつた。それがいま幾日かたつと、まるで活動寫眞のフィルムが切れたやうに、突然ぶつりと中絶して、跡かたもなく消えて了ふなどとは、とても想像が出來なかつた。何か不可解な恐ろしいものがやつて來て、彼といふ人間が存在しなくなるのだ。世の中に何かしらばか／＼しい、充たす事の出來ない空虚が生じる譯だ。葬式、墓、腐敗……かうして、人智をもつて抱擁の出來ない絶對の闇黒、純粹の無が到來するのだ！

すべては以前のまゝで残つて、晝も來れば、夜も來るだらうし、人々は歩いたり、話しをしたりするだらう、戰爭も、偉大な發見も、新しい豫言者も、すべてこれまでであつたものは、悉く現れるだらう。けれど、たゞ彼といふ者だけは永久にないのである。

「その時でも、やはり誰か笑ふものがあるだらうか。」

イワン・イワーノヰッチは老退職大佐であつた自分の父が死んだ時の模様を思ひ出した。わざと思ひ出したのである。それは恐ろしく古い事だつた。イワン・イワーノヰッチはそのころ郊外の別荘に住んでゐて、若い、健康な人生の享樂者だつた。彼は休息のため、といふより、寧ろ父の臨終に侍するために歸郷したのである。けれど毫<sup>ちよ</sup>碌して了つて、

もう幾年か安樂椅子に坐つたきりで、刺蜜ハチミツの粥かきを匙しで食くさせて貰つてゐる癖に、大將軍のやうなつもりでゐる老人を見てゐるのは、あまり退屈な苦しい事だつた。父の家の中には、病氣と近い最後の期待とが、穢臭ケガレいやうな息苦しい寒圍氣サムイを作つてゐた。母は一日泣いてばかりゐるし、父は大きな聲で號令を掛けては、口から泡を飛ばしてわめき立てるのであつた。イワン・イワーノヰッチは妻と娘をつれて別荘へ引き移り、町へは極たまにしか出て來なかつた。それもたゞ世間體のために過ぎなかつた。

あゝ、あの別荘！ 月の夜々、緑の斑紋マダラ灌木クサの間にちらちらする小さい娘の赤い着物……かうした幸福の有り難さを、彼は果たして理解してゐたらうか？ いや、理解してゐなかつたのだ！ それは彼の目に極めて單純な、自然なものに映つてゐた。イワン・イワーノヰッチは少しも早くこの二三箇月を過すごして、今度あらたに講座を受け持つ事になつた莫斯科へ出發する事ばかり考へてゐた。そして、青い月光の輝く時、金色の太陽が明かに悦よろこばしげに照あらと照らす時、妻と共に野へ出て裸麥の間を散歩しながら、恰も地上を祝福するやうに、赤々と消えて行く夕焼を眺めた時、イワン・イワーノヰッチが考へたのは、太陽の事でもなければ、

ば、月の事でもなく、また現在はありませんが、いつかなくなつて了ふ生命の事でもない——遠い昔に亡びた時代の光景をまぎ／＼と展開すべき、自分の講義の腹案はらだつた。

あゝ、あの別荘！……も一度あの時代へ歸つて見たい！ 誰か彼の顔へ貼り付けた、白髪と皺しわで出來たこの恐ろしい假面めんや、干からびた手を棄てて了つて、月の夜に菩提樹の間を歩きながら、胸一杯に根限り爽さわやかな夜氣を吸つて見たい、貪慾どん欲に、熱烈に、果てしなく吸つて見たい！ もう何もいらぬ——書物も、人類の歴史も、名聲も、ぼつとした歐羅巴の町々もいらぬ……たゞこの足が歩いて、この手が慄おそへず、この目がしよぼ／＼涙なみだじまず、暗い片隅かどで肩の後ろから、避け難い死が覗き込まないやうになればいいのだ。

新鮮な空氣の一吸ひ、一聲の高らかな快活な言葉、緊張した最後の期待感と苦痛のない一分間——これだけでも既に異常な幸福で、これに比べれば、まぶしい太陽すら何の價値ちやうもない。

「だめだ、もう萬事をはつたのだ……わしは死にかゝつてゐるのだ……」暗い片隅を見つめながら、イワン・イワーノヰッチは考へた。そこでは神祕しんひめかしい囁ささきを立てながら、

何ものかが自分の仕事をしてゐた。果てしもなく仕事を續けてゐるのだ。

しかし理智は、經驗や知識の語るやうに、これがそんな簡単なものだといふ事を、どうしても理解しようとしなかつた。勿論、有機體が變形して、細胞組織が腐蝕し、心臓の鼓動が止まると、人間は死んで行く。それは他人が死ぬる時には、極めて簡單であるけれど、しかし彼イワン・イワーノフが、どうして死ぬ事など出来るのだらう！

またもやある一日の事が記憶に浮かび出た——町から来た一臺の馬車が、父の死にかゝつてゐるといふ報知を齎らした。イワン・イワーノフは、そのとき妙に活氣づいたやうな胸懐ひが、心臓の邊を掠めたのを覚えてゐる。なんだか血が前より早く流れ出して、自分の體の生活力が一層はつきり感じられるやうな氣がした。急に愉快になつた——といふより、妙な息苦しいほどの好奇心が生じて來た。それは丁度つめたい水で、頭の中のしち面倒くさい俗念をすつかり洗ひ流して了つて、人生がその偉大な軀幹を、すつくと延ばして立つたやうな具合ひだつた。

「お父さんが死にかゝつてゐるよ」と彼は妻に言つた。

それからすぐ矢のやうに馬車を飛ばした。野には風が吹いて、息づまるやうな好奇の念は、次第に強くなつて行つた。やがて見馴れた田舎町が來た。古びた家並み、埃、用事ありげにどこかへ急ぐ人々が目に映つた。やがて父の家の庭前で、年取つた親類の女が、涙に汚れた皺だらけの顔をして、彼を出迎へた。

「おかくれになりました！」

と、彼は苦しいやうな、恐ろしいやうな氣持ちがして來た。臨終の間に合はなかつた、もう生涯父の顔を見る事が出来ないのだ、かう思ふと、泣き出した。やうだつた。急に父が人の好い、堪らないほど愛すべき老人のやうに思はれて來た。殆ど二週間ばかりといふもの、見舞ひを延ばし延ばしたが、あの間に幾らでも父を見る事が出來たものを、かう思ふと、痛いほど胸を刺されるやうな氣がした。

イワン・イワーノフは、なぜか錠戸を閉めた暗い部屋の中へ入つた。廣間ではどこかの人達が、今ではもう疾うに死んで了つた叔父と一緒に、長椅子を片づけてゐるのが目に入つた。「なぜだらう？」といふ疑問が、ちらとイワン・イワーノフの腦裡に閃いたが、その譯を思ひめぐらす暇もなく、寢室の中へ入つた。彼が入つた瞬間、知り合ひの醫



師が（これも今ではもう死んで了つて、皆に忘れられてゐるが、當時はまだ若い樂天的な男だつた）、どうも仕方がありません……おしまひです、といつたやうな力ない身振りをしてながら、寢臺の傍を離れた。

イワン・イワノギッチは兩眼を曇らす涙の隙から、食るやうにぢつと眺めた。と、皺だらけになつた濕つぽい枕の上に、長いあひだ見馴れたものではあるけれど、何だか見覚えのないやうな首が、がつくり後ろへ反り返つてゐるのが薄やみの中に見透かされた。目は固く閉ぢて、口はぼかんと黒い穴を明けてゐるのを、白いナブキンでゆはへてあつた。それから更に記憶は、イワン・イワノギッチの腦中に、父の死骸をよみがへらせてくれた。それはさながら生きた人のやうな、とはいへ、少し力ない姿勢をして、床の上——寢臺と暖い湯の入つた盥の間に坐つてゐる。胡麻鹽の頭は、胸の上にながくりと垂れて、ゆらく揺れてゐた。どこかの女達が死骸の手を、古い大佐の制服の袖に通してゐたが、その手はまるで生きた老人が、狭い袖へ手を通し憎くて困つてゐるやうに、ひよいと曲がつてゐた。もう彼はなんにも感じてゐないのだ、これはもう決して人間でないのだ、もし人が手を放したら、まるで袋のやうに倒れて、うしろ

頭を床へぶつゝけるのだ、これは單に死骸に過ぎない——といふ事はどうしても考へられなかつた。なぜ死骸なのだ？ これは父ではないか、永久に見馴れた、年取つた父ではないか？ たゞ何も感じないやうな振りをしてゐるだけで、目は閉ぢてゐながら、體は死んだやうに他人の手の中でぐらくしてゐながら、一切の事を見たり聞いたりして、何かある物を知つてゐるのではなからうか？

それに續いて、卓の上に敷せられた干からびた體、きれいなナブキンで縛られた足、不可思議な威厳を帯びた物々しい顔、高い蠟燭が靜かに流れながらぼち／＼いふ宵、窓外の夜、古い經文を讀む單調な聲……死。

胸が悪い。これは恐怖とさへ言ふことが出来ない。これは全身を引き伸ばすやうな奇怪な嘔吐感であつた。イワン・イワノギッチは、耐へ切れない遣るせなさが迫つて来るやうな氣がした。思想は四方八方へ躍り狂つて、かうした恐ろしい映像を手當り次第に追ひ拂ひ、揉み消さうとするのであつた。やつとそれ等が影を潜めると、思想はわざとつまらないことに飛びかゝつて行つた。ポリーナ・グリゴリーエヴナがどんな風に寢てゐるだらう、いま何時だらう、ラムプがどんなに燃えてゐるだらう、さういふことに細か

く注意を向けたが、それもやはり無駄だった。さうした偽りの思想の努力を透かして、何かある物が感じられた。ちやうど死人の目が、棺蔽ひの衣を透かして物を見るやうに、だん／＼と透いて来てあたりへ擴がり、遂には全世界を満たし盡くす……息が窒つて来る、恐ろしい、堪らない……死！

彼女はついそこらゐて、傍を離れようと、立ち去らうともしない。以前はそんな事を考へないでもよかつた。頼みにならぬ事を頼む事も出来た。が、今は一切が終りを告げた。器械のやうな正確さをもつて、彼女は次第々々に近づいて来るのだ。それはちやうど墓が自分の方から、寢臺の上で、恐怖の餘り身を悶えてゐるイワン・イワーノヰッチの傍へ、じり／＼と靜かに這ひ寄つて来るやうであつた。

憂悶は次第々々に高まつて来て、頭の上から彼を掴み盡くさうとしてゐる。息が苦しい、もういよく最後だ……：體ぜんたい、魂ぜんたい、いな、神經が一本々々ひき伸ばされて、慄へてゐるのだ。早く何か思ひ出して、何かしなければならぬ。

しかし何を思ひ出すのだらう？ 死はありふれた生理的現象で、どんな人でもみな死ぬといふ事か？ この瞬間は

晩まかれ早かれ訪れるが、それは今すぐでないから、そんな事を考へる必要はない——といふ事なのか？……鐵の如く堅實明晰な常識に逆らつて、一つの救ひがある、即ち靈魂の永遠不滅——神が存在してゐるといふ事か？

と、恐ろしい勢ひで狂奔してゐた思想が、急に崩れ落ちて了つた。死の幻影は遠く後ろへ去つて、子守り歌でも歌ふやうな、空想の中に溶け込むのであつた。

「神！」まるで蜘蛛の巢のやうに弱々しい、臆病な希望を驚かすまいとして、息を殺しながら、イワン・イワーノヰッチは考へた。「あゝ、神様！ 一體これがあなたに取つてどれだけの勞なのでせう！ 勿論わたしのやうに年取つた、分別のある、大學教授ともいはれる人間が、百姓女のやうにあなたを信じるのは、滑稽で莫迦げてゐる、それは自分でもよく承知してゐます……これはたゞ心の狭さから起つた事なのです。けれど事によつたら、何といつても、あなたは存在してゐられるかも知れません……もしさうなら、わたしを憐あはんで下さいまし、わたしは恐ろしいのでございます！ わたしがどんなに苦しんでゐるか、ご覧の筈でございます。わたしは年取つた病人なのです、まことに憐れな老人なのです！」

自己に對する憐愍の情のために、濁つた涙がイワン・イヅ  
ノギッチのどんよりした目に溢れた。彼はまるで誰かの同  
情心を動かさうとするやうに、出来るだけ憐れつづく、出  
来るだけ卑屈な調子で、この言葉を繰り返した。

「あゝ、神様、わたしを苦しめてどうなさるのですか？  
せめてそれだけでも知る事が出来たら、ほんの少しでも教  
へて貰つたなら、どんなに嬉しいでせう……わたしは同じ  
死ぬにしても、こんな恐ろしい死に方は致しますまい……  
それに、誰一人わかってくれないのです！……ポリーナ……  
……あれはわたしを憐れんでくれます……もしあれが一人き  
りになつて、もう一生わたしを見ることが出来ないとしたら、  
あれはどんなに恐ろしく淋しいこととせう。わたしたち二  
人はもう四十年も一緒に暮らして、互に愛し合つてゐたの  
です。しかしそれでも、あれにさへすつかりは分からない  
のです……そればかりか、あれはわたしの傍（そば）にあるのが苦し  
しいのです。わたしは父のやうな氣ちがひかかも知れません、  
それどころか、今わたしが考へてゐるのも、たゞ考へてる  
やうな氣がするだけで、實際のところ愚にもつかぬ、ばか  
げた謔言（わはげごと）に過ぎないかも知れぬ。」

突然、胸をしめつけるやうな恐ろしい想念が、イワン・イ

ヅノギッチの心を領し始めた——それは、誰ひとり自分を  
惜しんでくれる者はない、それどころか、自分のやうに著  
碌した、憐れな、半分死んだ人間には、皆もう飽き／＼し  
てゐるに相違ない、といふ想念であつた。

しかし、何といつても、彼は科學に多大の貢獻をした人  
間である。勿論、今では時勢に遅れて、多くの事を忘れ盡  
くしたけれど、一時は彼の名が一世の尊敬の的になつた事  
もあるのだ。彼の著述たる浩瀚な人類史の研究は、死後ま  
でも残つて、人々は彼の名を記憶するであらう。さうすれ  
ば、彼はやはり結局死なない譯である。

一瞬間、闇の中に戸が開いて、輝かしい太陽の照らす朝  
を望むやうな氣持ちがした。さうだ、肉體は死んでも、彼  
の靈魂はその著書の中に、その感化の中に、永久に生きる  
だらう。さうだ、これが即ちかの不死なのである。

しかし、重々しい戸は陰に籠もつた響きを立てながら、ぱ  
たりと閉まつて、再び空虚と恐怖とが襲つて來た。さうだ、  
書物と思想は長く生きるだらうけれど、それは彼自身では  
ない。彼は要するに死んで了ふのだ。ソクラテスの名が譯  
の分からぬ下らぬ連中によつて、その場合々々に適切であ  
らうとあるまいと、一切お構ひなしに引用されるからと言

つて、それが當のソクラテスに取つて何だらう。彼自身は疾うにどこかの土の中で腐つてゐるではないか。一體これが不死なのか？ 否、これは單に嘲笑である！ イアン・イアーノギッチはまだ死んでゐない、たゞ年取つたばかりに過ぎないが、しかしその今ですら、彼自身と彼の著書の間に、果たしてどんな關係があるだらう？ そんなものなど、始めから書かなかつた方がましなくらゐである。物を考へたり、紙の上で生を燃焼させたりしないで、自由に呼吸したり、もう二度と再び見られない太陽を眺めたりした方が、どれくらゐ氣が利いてゐたか知れない。

事によつたら、ポリーナでさへ——彼に取つて最も近い人間たるあのポリーナでさへ、たゞ彼を惜しむやうな振りをしてゐるに過ぎないかも知れぬ。實際のところ、二人の間には何の關係もなく、彼が死んで了つた後も、彼女は生活を續けて、彼がもう關與し得ない自分自身の想念や感情を、思考し味はふことだらう。さうして、二年も経過したら、彼女は彼のことを、半ば忘れた夢のやうに、思ひ起こすに過ぎなくなるのだ。

彼がかうして苦しみながら、自分の全存在をもつて憐れみを乞うてゐるこの瞬間にも、彼女は考へてゐるのだ……

「何を考へてゐるのだらう？ おれが早く死んでくれ、ばい、と思つてゐるのかしらん？……いや、そんな事はあつべき筈がない！ 誰にもせよ、おれが死ねばいゝなどと考へる筈がない！……だが、きつと考へてるに相違ない。ほんの時々だらうが、それでも考へてるに相違ない……皆がどれくらゐおれに飽き／＼してゐるか、わしの世話をするのがどれくらゐ苦しいか、それしきの事が分らない程、おれはまだ毫<sup>まじ</sup>碌してゐない、それほどまだ性根<sup>しんこん</sup>をなくしてはゐない。實際おれはもう半分死んだ人間で、誰にも必要のない體だから……もういゝ加減に死んでもいゝ時分だ！……あゝ、神様！ 一體あなたは何をなさるのです？ あなただつて、ちやんと分かつていらつしやる筈です！ 一體あなたはわたしをどんな目に合はせていらつしやるか、お感じにならないのですか？ 何といふ恐ろしい、慘酷な仕打ちでせう！ わたしは死にかゝつてゐるのぢやありませんか、死にかゝつてゐるのです、死にかゝつて……」

イアン・イアーノギッチはまるで死人のやうに、靜かに横たはつてゐた。ぼろとした鈍い目は、ちつと一つの點を見つめてゐたが、この不動と靜寂の中で、誰の耳にも入らない思想が、時には弱まつたり、時には水晶のやうに

澄みきつたり、時には悪夢のやうに巨大な形を取つたりしながら、物狂ほしく廻轉するのであつた。それは熱に浮かされた幻像と言葉の混沌であり、叫喚と哀願と呪詛の物凄い旋風であつた。

「神様、なぜわたしに生命を授けて下さつたのです？ それはつまり、一つの罫に過ぎなかつたのでせうか？ 青春も、月の夜も、希望も、愛も、科學も、すべて遁れる事の出来ない死の中へ引き摺り込んで、一思ひに壓し潰して了ふための、餌に過ぎないのでせうか？……いやだ、わたしは厭だ！ 一たい誰がわしをそんなに愚弄する權利をもつてゐるのだ？……こんな人生は、星や、永遠や、太陽や、宇宙全體と一緒に呪はれるがいゝ！ それは何一つすることの出来ない、弱い手頼りない人間を苦しめ愚弄して、それを樂しみにしてゐる、憐れむべき、意地わるな怪物に過ぎない！……わたしはこんな人生を憎む、呪つてやる！ 一體こんな生活が、宇宙の光榮のために必要だつたのだらうか？ さあ、このわしの犠牲を受け取つて、喜ぶがいゝ！」

突然イワン・イワーノヴィッチははつとした。このはつと思つた氣持ちの中に、またもや何かしら希望のやうなものを感じられた。

「けれど、最後の瞬間に忽然と、かういふ事はすべて少しも恐るゝ事はない、かへつて本當は單純で、合理的な、いゝ事だ、といふことが分かるかも知れない！……事によつたら、この卑劣な理性を呪ひ斥けて、單純嚴直な信仰をもつて、長老や、聖像や、死者の復活や、永遠の生活を信じなければならぬかも知れない！……あゝ、神様、それで結構です！……どうぞさうして下さい！ わたしは信じます、お祈りでも何でも致しますから、たゞ死なないやうにして下さい！……死ぬとしても、この苦しみなしに死なせて下さい！ こんな苦しみなどは、あなたに何の必要もないではありませんか？……どうかわたしを見て下さい。何といふ憐れな、弱々しい、病みひよろけた老人でせう！……わたしは泣く事も出来ず。率直に涙を流しながら、どうか神様、あなたの宏大なるお恵みをおもちまして、わたしにお慈悲を垂れて下さいましと、かうお願ひする事も出来ず！……」

憐れな弱々しい涙が、だぶ／＼した年寄りらしい顔の下からこぼれ落ちた。そして、こんな事はすべて何のかわからない、誰ひとり助けてくれる者も、憐んでくれるものもない、かうはつきり意識すると、イワン・イワーノヴィッチ

は細い力ない聲で呻き始めた。

「あなた、どうなすつたんですか？」すぐに奇妙な生き生きした聲が聞こえて、白髪頭のこがね小柄な老婦人が、自分の寢臺の上に身を起こした。

イワン・イワーノヰッチは彼女が可哀さうになつた。彼女は一晚ぢゆう眠らないで、何十遍となく起き上がつては、寢返りの手傳ひをしたり、用便の壺を出したり、また寢させたりするのであつた。可哀さうだ、堪らなく可哀さうだ！かう思ひながら、やはり自分が苦しんでゐるのに、彼女は眠つてゐる、少くとも眠ることが出来るのだと考へると、胸が痛いやうに感じられた。これもつまり、死にかゝつてゐるのが彼女でなくて、自分だからである。

「寢なさい、寢なさい、いゝから！」イワン・イワーノヰッチは意地わるい、氣紛きまぐれな調子でかう言つた。そして、干からびた骨ばかりの指を、力ないもどかしさに（しかし、それは決して彼女に向けられたのではない）ちつと握り締めるのであつた。「わしはたゞその……起きたいのだ！お前は寢ておいで、わしはお前の邪魔をしやせんから……」  
「あなたは何を考へ出すんですの？……よる夜中に……それよりおやすみなさいよ。あなたは寢なくちやいけないん

ですから。」

「それはお前の知つた事ぢやない！……打つちやつといてくれ！……お前はわしがまるで目を……目を醒まさなければいゝと思つてるんだらう！」

イワン・イワーノヰッチは、もうふたり一緒に暮らすのも長い事ではないのに、眞當まことでない事を言つて彼女を苦しめ、辱しめてゐると感じながら、それでも物狂はしく惱ましい焦燥を、押しこたへる氣力がなく泣き出した。苦い涙は口あたりのがつくりと落ち込んだ、年寄りらしい顔を傳つて、ほろ／＼流れた。胡麻ごま鬚すげの毛は力なく垂れた。

すると、丁度イワン・イワーノヰッチの恐れてゐた想念が、彼に最も近い人間の腦裡に閃いた。それは四十年のあひだ彼と生活をともにし、妻として、情人として、また母として彼を愛し、心の底から彼を惜しみ、たとへ少しでも彼を休める事が出来れば、自分の片手を斬り落としても厭はないと思つてゐる、その人なのであつた。この想念は、無眼の哀憐に締めつけられた心から出たのでもなければ、そんなものを恥ぢとする理性から出たのでもなく、毎夜々々の睡眠不足と、病人の氣紛れと、不潔な老人の死に伴なふ周囲の情景によつて、疲憊ひんぱいし切つたからだ全體から出たも

のだけに、一そう切ないのであつた。

「あゝ、一體いつになつたら、かういふ事がすつかりおすひになるかしら！」とポリーナは考へた。彼女はどういふ譯か、自分を苦しめる権利があるやうに考へてゐる、この意氣地のないひよろ／＼した老人を、頭ごなしに嘔鳴りつけてやりたかつた。

「そりやこの人は病氣だらうさ、苦しい思ひをしてもゐるだらうさ、だけど、それは何もわたしのせみぢやないぢやないか！……本當にわたしがその氣になつたら、この人を突き飛ばして、どなりつけてやる事も出来るのだ。さうしたら、この人は折檻された子供のやうに、びつくりして、音なしくちつと臥たまゝ、恐ろしさにおい／＼泣かなけりやならないのだ……たとへ何にもせよ、たとへこの人がどんなに苦しんでゐるにもせよ、わたしだつて苦しいといふ事を——わたしがこの人のために何もかも犠牲にしてゐる事を、察してくれるのが當たり前ぢやないか！……」

けれど不思議にも、イアン・イアーノギッチがそれを察しないで、怒つたり、なんの力もない干からびた拳を突き出したたりしたために、かへつて彼女の心は柔らいで來たのである。

「まあ、さうわたしをいぢめないで、お寝なさいよ！……」とポリーナは情なさうに言つた。

「あゝ、お前はわしが早く死んで了へばいゝと思つてるのだらう！……それはつまり、早く方々の色男の所へ行きたいからなのだ！……ところが、わしは死にやしないぞ……なんの、死ぬものか……わざと當てつけにでも死んでやらない！……さあ見るがいゝ。老人らしい愚かさを帯びた、意地わるい嘲笑を聲に響かせながら、イアン・イアーノギッチは答へた。そして出し抜けに物々しく手を突き出して、妻に妙な指の恰好をして見せた。

それが餘りに突然で、滑稽で、憐れだつたので、ポリーナは熱い涙が双の目に溢れるのを感じた。彼女は殆ど家ちゆうへ響くやうな大きな聲で、わつとばかり泣き出したいやうな氣がした。そして、先ほどの疲れ切つた意地悪い想念は忘れて了つて、悲しみをおしこたへながら、無言に彼を起こし始めた。たゞずつと深い心の奥の方で——理性が覗いて見るのも憚るやうな、暗い残忍な秘められた一隅で、「せめて、少しも早く死んでくれゝばいゝのに！」といふ恠へ性のない想念が、しつこく病的に動いてゐるのであつた。「さあ、行きませう、あなた、わたしが手傳つて上げます

からー」と彼女は齒を食ひしぱりながら言った。

イワン・イワーノビッチは思ひ掛けなく急におとなしくなつた。妙な氣持ちの悪い霧が腦から取れて了つて、不意に彼は自分の哀れな状態や、いはれない氣ちがひめいた癩癩や、彼女の孤獨な、弱々しい従順な苦悶などが、はつきりと目に映つたのである。彼は全身を屈めて、素直に彼女に凭れかゝりながら起き上がった。そして襯衣一枚の、白い、小さな、弱々しい體をよろ／＼させながら、暗い廣間を横切つて、控へ室へと辿つて行つた。そこには夜だけ便器を置く事にしてゐたのである。

彼はまるで毛を拂られた罐のやうに、干からびて輕かつたけれど、それでも老婦人に取つては堪らないほど重かつた。彼女は息を切らしながら、部屋から部屋へと彼を引き摺つて行つた。彼女の手の中では、蠟燭が幻のやうにゆらゆら慄へ隣いてゐた。そして、二人の後ろには、二つの大きな黒い道化のやうな影が、陰鬱な陽氣さといつたやうな氣持ちのする、醜い身振り手眞似をしながら、壁つたひについて來るのであつた。

控へ室へ來ると、ポリーナは蠟燭を卓の上へ立てて、彼の骨張つた輕い體を下の方に抱き變へながら、襯衣の釦を

はづさうとした。

妻に凭りかゝりながら、とほ／＼と廣間を歩いて行く中に、妻と自分と兩方に對する、涙ぐましいほど熱烈な愛と憐愍の情が、イワン・イワーノビッチの死にかゝつた心臓を、ひし／＼と搾め付けた。彼は妻が自分を愛し、憐み、かつ苦しんでゐる事や、自分らがふたりとも不幸な人間だといふ事を、惱ましいほど力強く感得した。彼は妻を抱きしめながら、この干からびた老人が白髪のお婆に向かつて、もう長いあひだ言つた事のないやうな、優しい言葉をかけてやりたい氣持ちがした。彼女に身を摺り寄せて、苦い苦い涙を流しながら、泣きたかつたのである。

彼の老人らしい思想は、重苦しい非難の念をもつて、どこか計り知れぬほど遠い、神祕な高みへ昇つて行つた。もし彼の感情を言葉で言ひ現す事が出来たら、おそらく暗い天は、聞こえるか聞こえないかの弱々しい人間の聲が、かういふのを聞きつけたであらう。

「神様、神様、何のためにわたし達は苦しむのでせう? : : : まあ、わたしがお厭でしたら、あれを一目見てやつて下さいまし : : : あれは髪も白くなつた、小さな弱い女でありながら、かうしてわたしを引つ張つて歩いてるぢやありませんか?」



せんか……あれはわたしを愛して、憐んでゐるのでござい  
ます……神様、一體わたしどもを可哀さうとは、お思ひに  
ならないのでございませうか？ 一體わたし達はあなたに何  
をしたのでせう……覚えておいでになりますか、わたし達  
も昔は若い健康な人間で、かうして同じやうに抱き合ひな  
がら、部屋々々を歩き廻つたものでございませう……その當  
時わたしは背の高い丈夫な男でしたが、あれは小柄な女で、  
まるですべての危害を防ぎ守り得る人間のやうに、ひとと  
わたしに倚り添つてゐたものでございませう……ところが、  
今はそれよりもつと弱くなつて、頭も霜をいたゞき、可愛  
いボーリヤでなくて、古い古い婆になつて了ひましたが、そ  
れがわたしを引つ張つて歩いてゐるのでございませう……わ  
たしの方があれより弱くなつたのです……あゝ、神様、神  
様！」

しかし誰ひとり聞く者のないこの訴へは、人間が永久に  
名前を知る事のない、宇宙の法則の儼然たる暗い顔の前へ  
出ると、力なく哀れに消えて了ふのであつた。

イワン・イワーノギッチは、さうした哀れな者になりたく  
なかつたので、五體を奮ひ起こし、しつかりした力強い足  
どりで歩き出さうとした。以前と同じやうに、何もかも自

分で無造作に、軽々として見たくなつたのである。段々ず  
り下つて行く彼の體を支へようと、よろ／＼するほど力を  
入れながら、ボリーナが夫の襯衣の釦をはづしてゐる間、  
彼は衰弱のためにぶる／＼慄へながら呟いた。

「放せ……わしが自分でする……放せ……」

彼は慄へる指を絡ませて、ボリーナの邪魔をするのであ  
つた。鈍い立たしきの念が、再び彼女の胸にこみ上げ  
て來た。頭がづき／＼痛んで、手足は慄へるのに、それ  
も彼は頻りに引つ張り續けた。

「まあ本當に、どうしてあなたなんかに出来るものです  
か？」こんな人など打つちやつて了はう、といふ心持ちを  
やつとの事で抑へながら、ボリーナはかう言つた。

イワン・イワーノギッチは容易に屈しないで、譯も分から  
ず手を出して絡み付きながら、自分の弱さ意氣地なさを、  
恥ぢ苦しんでゐた。それにいら立たしきの念も、同様に彼  
を苦しめるのであつた。

「自分でする、自分でするといふのに……さあ、放してく  
れ、お願ひだ！……一體わしが何をしたといつて、お前は  
そんなにわしを苦しめるのだ？」殆ど泣き出さないばかり  
に、彼はかう呟いた。

「つまり、あなたのためなんですよ、あゝ、情ないー」思はずかういふ痛ましい叫びが、ポリーナの口を洩れたのである。やつと彼は便器の上にしやがんだ。胡麻鹽頭の小さな哀れつぽい姿は、ちつと静まり返つた。

ポリーナは彼の傍に立つたまま、疲れて充血した目で、惱ましげに片隅を見つめながら、待つてゐた。蠟燭は静かに卓の上で燃え、あたりは陰に籠もつてひつそりとしてゐた。何だかこの息苦しい、小さな部屋の壁の外には、誰ひとり何一つないやうな氣持ちがした。そこには永久の夜と沈黙があるのみで、廣い世界には、最後の遁れ道もないやうな悲しみを抱いた彼ら兩人よりほか、誰もゐないやうに感じられた。

イワン・イワーノヴィッチは、彼女が傍に立つてゐるのが恥づかしかつた。かうして死にかゝつた人としては、滑稽で、ばか／＼しい、年寄りじみた潔癖が、彼を惱ましたのである。

「あつちへ行つてくれ、お願いだから……おい、何だつてそんな所に立つてるのだ、あつちへ行つておいで！」と彼はいら／＼しながら呟いた。

ポリーナは重々しくほつと溜め息をついて、彼の方から

は見えないけれど、いざといふ瞬間を逸しないやうな所へ身をひいた。

黄色い不揃ひな斑點が、壁の上をちよろ／＼と動き廻つた。あたりは静寂が立ち罩めて、息苦しい凄愴の氣に充ちてゐた。イワン・イワーノヴィッチは便器の上にごつと腰掛けたが、その尖つた剃き出しの膝頭には、こぶ／＼とした死んだやうな骨が飛び出してゐた。時々たるんだ生氣のない腹部を緊張させながら、ぐつ／＼と喉を鳴らしたが、その音が滑稽でしかも物凄かつた。

ポリーナは物思ひに耽り始めた。夫がこのじり／＼と進んで行く業病に罹つてから、もうこれで三四箇月になる。さうして、自分は皆に見棄てられて、途方に暮れながら、死の圏内を力なく蹴き通してゐる——かういふ事を彼女は考へたのである。

「結局、その中にわたしも斃れて了ふだらう……その時は一體どうなるのだらう？ あの人を誰が引き取つて、世話をするのか知ら？ リーダには自分の生活があるし、他人の知つた事でもなし……」彼女は恐怖の餘り、慄然としながらかう考へて、誰かを威嚇するやうな恰好をした。が、すぐに誰ひとり威嚇すべき人はないのだ、と思ひついた。

たとへ彼女が斃れて了はうと、病人が今よりもつと悪くならうと、苦痛が一切の想像を超えて、生き身の皮を剥ぐよりもつと恐ろしく、耐へ難いものにならうと、やはり彼女は其の苦しみを忍ぶだらうし、また忍ばなければならぬのである。何もかも耐へ忍ぶのだ！ しかも、かういふ苦しみを作つた神は、一言半句も永久の沈黙を破らうとしななのだ。

「あゝ、これは一體どういふ譯だらう！ 何といふ事なのだらう？」恐怖の餘り鈍つたやうな目つきで、戸棚の陰の暗い片隅に見入りながら、彼女はかう自問した。

そのとき彼女は忽然として、すべてが移つて行く事を思ひ起こした。遅かれ早かれ、今の苦しみも過去のものとなつて了ふのだ。もちろん哀悼の念はある……けれどその代り、自分は後で腹に足りるほど眠つたり、往來を歩いたり、客に行つたり、自由に軽々と呼吸したり、大きな聲で話したりする事が出来るのだ……あゝ、何といふ嬉しい事だらう！ 早くその時が来ればいゝ！

突然、イワン・イワーノヰッチはもぞ／＼動き出した。そして、彼女がまだそれと氣つかない中に、手傳つて貰はないで濟まさうと、急いで起き上がり始めた。彼はズボン下

を引き上げようとして、取り落とした。そして、あらはな足を使器に突つ掛けて、危く引つくり返さうとしながら、冷たい固い床に重々しく膝を突いた。彼は起き直らうとしたが、それも出来ないで、びちやりと大きな音を立てながら、床の上に両手を突いて、四つん這ひに倒れたのである。

「イワン・イワーノヰッチ！」と老婦人は魂ぎるやうに叫びながら、飛びかゝつて抱き起こさうとした。彼女は兩腋に手をかけたが、力が足りないで、また下へ落とした。イワン・イワーノヰッチは床に両手を突きながら、妻や卓の脚に取り縋らうとしたが、剥き出しの足は力なくつる／＼と下つた。彼は堪らない羞恥を感じて、憐れな聲で呟くのであつた。

「な……なに、大丈夫……わしは今すぐ……放してくれ……わしが自分で……なに、何でもないよ……」

不意にポリーナは、まるで犬が吠えるやうな聲で、わつとばかり泣き出した。この力ない嗚咽の中に、恐ろしい悲しみが呻いてゐた。彼女は両手で夫の白髪頭を抱いて、自分の方へ締め寄せながら、相並らんで床にどうと膝をついたまゝ、ちつとそこにゐ竦まつて了つた。

イワン・イワーノヰッチはあらはな足と、老人らしく干からびたあらはな臀部を曝したまゝ、四つん這ひになつて、

同じく彼女にひしと身を寄せながら、聲に立てぬ意氣地ない涙を流して泣き出した。

窓の隙間からは、もう夜明け近い青い光線がさしてゐた。それは誰やら明るい者が、やつとの事でこの家に近寄つて、悲しげな不可解な目で、さし覗いてゐるやうであつた。

## 一

俱樂部の庭ではすべてが青く見えてゐたが、野へ出るともう遠い地平線がはつきりと見えてゐた。空は明るくなつて、星は透明な銀色の涙か何ぞのやうに、一たん輝かしい金色の太陽が地平に現れたら、すぐ莊嚴な碧瑠璃の淵に沈んで消えて了はうと、用意してゐるやうであつた。

アルプーゾフの三頭馬車は、もう疾うにほかの馬車を追ひ抜いて、露にしめつた野を疾走し続けた。

ミハイロフや醫師のアルノルディや、主人公のアルプーゾフの顔は、寝ないで明した一夜のために灰色をして蒼褪めてゐた。酔ひにまかせた陽氣な發作はいつしか過ぎて、一同はたゞもう睡かつた。そして、なぜ清潔な温い床で横になる代りに、刺すやうな夜明け前の寒さと、疲勞のため

るのか、誰ひとり合點が行かなかつた。人々の顔は冷たい空氣のために雞肌が出来て、全身が惱ましく縮こまつた。

野は前後左右に大きな圓を描きながら、くるくると展開して、また後ろの方へ逃げて行く。露に濡れた麥は、ちやうど夜明け前の敏い夢を見てゐるやうに、ちつと立ち盡くしてゐたが、露のために灰色に見えるのであつた。どこかで果てしない森が青く見えて、そちらの方から、濕つた翼を重々しく搏ちながら、鴉が幾つか飛んで來た。その生きた姿が、ものみなのまだ寢しづまつてゐる中で、なんだか不思議に感じられた。

「ところで、どうだね……もうすぐ？」とミハイロフが苛だたしげに訊ねた。ぐたりと垂れた白い帽子の陰から疲れたやうな、とはいへ依然として美しい目が、重苦しげに覗いてゐた。

「すぐでございます。あの森を通り抜けると、そこから河つ端について行くので……もうあと三里ばかりしかありませんよ。」疲れてはゐるけれど、不思議なほど無關心な顔を振り向けながら、駁者はかう答へた。

「一體なんのこつたらう、なんのためにこんな所へやつて來たんだ？」とミハイロフは氣むづかしげにかう呟いた。

彼はアルプーゾフがわざと自分を苦しめるために、この行を思ひ立つたやうな氣かし出した。

醫師のアルノルデイは、十字に組んだ手を杖の上に載せて、まるで石で刻んだものゝやうに、黙つて腰掛けたまゝ、とき／＼馬車の揺れる度に、大きな重い頭を不規則に振るばかりだつた。アルプーゾフもやはり黙り込んで、黒い充血した目でちつと野を眺めてゐた。

けれど、朝の薔薇色をした光線が空中に漲つて、露と霧のために野が一そう白くなつたとき——以前くろかつた森が、空氣のやうに輕々と着みを帯びて、どこか遠い地平のはてで、教會の圓屋根が金の星みたいに輝き出した時、アルプーゾフは出し抜けにから／＼と笑ひながら頭を上げ、磊落な元氣のいゝ聲で嘔鳴り出した。

「なんだつて君等はさうしよげ返つてるんだ？……パーエール、一つうんとやれよ……わき馬を走らせろ……大いにやるんだぞ！」

彼は奇妙な光りを帯びて輝き出した目を、ミハイロフの方へ向けて嘔鳴つた。

「おい、畫家先生……見ろ、これがみんな僕のものなんだぞ！ 目の届く限り、森も、畑も、野原も……みんな僕の

ものなんだ！ アルプーゾフ家の土地なんだ！」

「ふん、それがどうしたのだい？」アルプーゾフが何か自分に突つかゝらうとしてゐるのを感じながら、ミハイロフは輕蔑したやうにから問ひ返した。

「だからさ、君、大いに努力して畫を描き給へ……記念碑でも建てて貰へるよ……ところが、その記念碑の立つ土地は、僕のものなんだぞ！」本當に愚弄するやうな調子で、アルプーゾフは語り續けた。「何もかも僕のものだ……が、仕合はせといふものがないのだ！」思ひ掛けなく彼はかう言ひ足して、急に氣ちがひめいた聲で喚いた。

「パーエール、とめろ！ ほかの車が遅れて了つたぢやないか、ばか……待たなきや駄目だ！」

三頭立は蹄で土を掘つて、腰を落とすやうにしながら、びたりと止まつた。小鈴は侮辱されたやうに一齊にたかだかと鳴つて、暫く鳴りやまなかつた。馬の體からは盛んに湯氣が立つてゐたが、それが蹄の光線のために、薔薇色に見えるのであつた。

後ろの方から二臺の馬車が追ひついて來て、もう人々の叫び聲が聞こえた。誰やら朝日の光線を受けて赤い顔をしたながら、帽子を振り廻してゐた。

後ろから二臺の馬車が、危く打つ突からなければかりの勢ひで飛んで来て、車輪を絡み合はせながら止まつた。一同は急に大きな聲で話したり、叫んだり、笑つたりし始めた。急にまた陽氣な輕々した氣分になつた。疲労の感じなどは忽ち消えて了つて、爽かな輝かしい朝の氣は、若々しい豪放な心持ちとなつて、人々の魂へ入つて來たのである。

たゞ赤毛の僧だけは、すつかりへとく／＼に疲れ果てて、濡れしよぼけた長い髪を力なげに垂らしながら、ぶつ／＼不平をこぼしてゐた。

「下らない所へ来て了つたものだ……家内もさぞ心配してゐるだらうに……何だつてこんな事を考へ出したんだらう……ちつとも氣の利いた所はありやしない……」

「何だつて？」焼けつくやうな陰鬱な目を、重々しく彼の方へ向けながら、アルブゾフがかう尋ねた。

「こんな所へ来て、つまらない事をしたと言つたのですよ……それに家内も……」

「なに、家内だつて!?」充血した白眼を剥きながら、アルブゾフは氣ちがひのやうに呶鳴つた。「ぢや、何だつてついで來たんだ?……家内だつて? それなら家内の所へ行ぐがい……出る、おりろー!」

赤毛の僧は惱えてむつとしながら、

「一體わたしがどうしたといふのだ……わたしはたゞ言つて見ただけの事だ……」

「あゝ言つて見ただけか?」相手の言葉を聞かうともせず、アルブゾフは譯が分からないほど腹を立てながら喚いた。「さあ、出て行け……とつとと行かんか……パージェル、あいつを追つ拂つて了へ!」

「あなた失禮ですが、僧職に對してさういふ態度を……」  
「出て行けといふのに!」アルブゾフは物狂はしくかう叫んで——といふより、寧ろ金切り聲を振り絞つて、鞭をふり上げた。

僧は眞蒼になつて、一同の顔を祈るやうな目で見廻しながら、しほ／＼と音なく馬車をおりて、道傍に立つた。

「パージェル、やれ!」とアルブゾフは叫んだ。

「まあ、君は何といふ事をするのだ!」とミハイロフは不満げに言ひ出した。

「商人の分からず屋だ!」チージュは氣難かしげに呟いた。

アルブゾフは陰鬱な目つきで、待ち構へるやうにミハイロフを見やつた。

「誰でも氣の進まない人はどうぞ……」彼はゆつくりと威

嚇するやうにから言つた。

で、一同は口を噤んで了つた。たゞ醫師のアルノルデイが、例の賢さうな目つきで、ちらとアルブゾフとミハイロフを見比べたのと、ナウモフが無關心な表情で肩を疎めただけで、その他の人々はそつぽを向いてゐた。

馬車は動き出した。赤毛の僧は道ばたで棒のやうに立つたまま、三臺の馬車が段々と遠くなつて、輝かしい朝日の光りの中に溶けて行くさまを、げげんな目つきで見送つてゐた。

やがて、彼は途方に暮れたやうに兩手を擡げて、もと来た方へ引つ返した。暫くすると、彼はまた立ち止まつて帽子を取り、ちやうど説教の前に威容を整へるやうに、手で髪を一撫でした。それからまた後ろへ引つ返して見たり、また以前の方へ向き直つたりしたが、たうとう變てこに法衣の裾を蹙げて、肩を疎めながら、とぼ／＼ともと来た道を通り始めた。

「實に醜態だ！」と彼は惱ましげに吐息をついた。「家内がかゝり合ひになるなど言つたが……到頭あれの言つた通りになつた！……何といふ恥ぢ曝しだ！」

もうすつかり日が昇つて、露に洗はれた編み垣や、屋根

や、井戸が、薔薇色、瑠璃色、黄色の火で、燃え立つやうになつた時、先ほどは闇の中で氣も付かなかつた、ある村へさしかゝつた。

赤毛の僧はすつかり疲れ切つて、濡れた靴には道の埃が厚く積もつてゐた。まるで女が袴の裾を摘むやうに、一生懸命に片手で法衣を蹙けて歩いたけれど、それでも膝の邊までぐつしより濡れてゐた。鬚も髪もぐたりと垂れ下がつた彼の顔は、埃に汚れて灰色になつて、いかにも困つたらしい、途方に暮れた表情をしてゐた。

井戸で水を汲んでゐた村の女は、手を止めて彼を眺めた。「おほかた靈場めぐりでもしてをられるのだべ！」彼女は敬虔の念を抱きながら考へた。

一群れの百姓が帽子を脱いだ。

やつと午近くに、彼は百姓の荷馬車に乗つて町へ着いた。そして、疲勞と憤懣のためにすぐ床に就いた。夕方になると町中が、アルブゾフのこの新しい亂行の噂で持ち切つてゐた。

## 一一一

まだ暑氣が襲つて來ないで、夏の太陽がまるで春のやう

に、明かにすが／＼しく照つてゐる、楽しい時刻だつた。庭の中はまだ悦ばしく軽やかな早朝の氣分に充ち、露を含んだ爽やかな温氣と光りのために、興奮してゐるかのやうに思はれた。

病める女優は一杯に開け放した窓際の、安樂椅子に腰を掛けてゐた。まだ熱くない清らかな空氣と共に、金色の光りが大波のやうに、室内へ流れ込んだ。白い着物をきて白い枕に埋もれ、蒼い顔に黒い目をした病人は、まるで祝ひごとでもあつてお洒落をしたやうに、美しく見えるのであつた。

彼女は氣分がよかつた。夜の痛みも収まつて、疲憊した弱い體は柔かな朝の暖氣に甘えてゐた。太陽は清潔な床の上にも、白い枕の上にも、白い壁の上にも、躍るやうな金色の斑點を置いて、瀕死の若い女にのみ見られる柔かな弱しい髪の毛さへ、金いろに見せるのであつた。

病人は自分一人にだけ聞こえる音楽の一節を奏するやうに、ゆる／＼と指を動かしてゐた。そして、自分自身の想念に向かつてともつかず、庭の上に高く擴がつてゐる、輝かしい青空に向かつてともつかず、蒼ざめた弱々しい微笑をもつて答へるのであつた。彼女は立ち上がつて、病氣も

衰弱も打ち忘れ、軽快な着物をきて、笑ひ聲を立てながら、緑の庭の奥へ駆け込みたい欲望が起こつた。そこでは幾千となく太陽の小兎が跳り戯れて、露の玉がきら／＼と光り、まだしつとりと沾んだ、とはいへ、もう透明な影が溶けてゐるではないか！

奇妙な事であるが、彼女がまるで詫びでもするやうな、つゝまじやかな微笑をもつてほゝ笑み掛けたこの欲望の中で、醫師アルノルヂイの重々しい、氣難かしさうな姿が、一種の役割りを演じてゐるのであつた。

彼女が故郷へ死にに歸つて、以前のあらゆる生活の記憶が、次第にあせて了つて以來、彼女の世界は靜かに、恐ろしく狭まつて行つた。今では病床と、窓ぎはの安樂椅子と、幾時間も續けて行儀よく無言のまま坐つてゐる醫師とが、彼女の全存在を充たして、以前の舞臺や、喧囂や、人聲や、割れるやうな拍手の音や、舞踏會や、料理店の酔ひしれた空氣などと同じくらゐ、彼女に取つて重大なものとなつたのである。

病人は、さういふものがみんな恐ろしく遠い、昔の事のやうに思はれた。彼女がまだ女學生として、茶色の服を着てこの庭を歩き廻つたり、この窓際で學課の豫習をしたり、



晩になると、今ではもうすっかり忘れて了つたどこかの中学生と、並木街へ散歩に行つたりした——その時分よりもつと古い事のやうに感じられた。

よく以前も成功した芝居がはねて、三鞭酒や、叫び聲や、祝辭や、さういふものに充ちた騒々しい晩餐をした翌朝、彼女は昨日どういふ事があつたのか、なんとしても思ひだせないで、一切のものが何かしら輝かしい、一つのしみのやうにしか思はれない事があつたが、それと同じやうに、いま死に瀕した孤獨な身となつて、古い家で暮らすやうになつた時、彼女は以前の生活をはつきり思ひ起こすことが出来ないで、やがて間もなく、殆どすべての事を忘れて了つた。

たゞとき／＼もの淋しい夕方、庭の上に悲しげな夕榮えの蔭が消えて、静かな夕寒の中に、死の囁きが一層はつきり聞こえる頃になると、彼女は過去の追想を始めるのであつた。

夕闇の中から誰かの顔が浮かみ出て、彼女の方へ屈みかかつたり、蒼ざめた幻の灯がともつたり、遠くの方からやつと聞き取れるやうな拍手や、何の曲ともつかぬ不明瞭な樂音などが傳はつて來たりする……さうして影法師の群集

の中から、誰かしら黒い者が音もなく進み出て、會釋しながら花環をさし出す……何かにつけてつまらない些細な事が、特に鮮かに記憶に浮かんで來た——眞裸かのデオザンナに扮して、赤いマントにくるまりながら、張り物の天幕の中へ入らうとする時、危く倒れさうになつた事だの、島へ旅行した事だの、杯の毀れる音だの、二口めにはすぐ「わしの可愛い娘、一體わしが……」と言ひ出す、年とつた座元の厭らしい微笑だの、すべてちよつとした身振りや言葉が、いき／＼と思ひ起こされた。すべては滅茶々にちぎれた、華やかな扇の一ひら一ひらのやうに、ばら／＼になつて散つて了つたのである。

これらはすべて過ぎ去つて、二度と返つては來ないのである。たゞあの限りない喧囂と、光輝と、動搖と、情慾と、無数の人物とが、かうも早く忘れられて、いま恐ろしい死の闘ぎはに間近く行はれてゐる事件と、何の關係もないといふことが、奇妙で不思議で堪らなかつた。この弱々しい透き通つたやうに見える病的な體が、かつて挑發的に刺き出されたり、他人の自由に任されたり、獸的な愛撫のもとに恥ぢもなく戰慄したり、舞臺の二重の上で不自然なしなを作つたりした體と同じものだと思ふと、奇怪千萬な心持

ちがするのであつた。

「まるであゝいふ事は、みんな本當ではなかつたやうな氣がする。」と病人は考へた。「まるでよその生意氣で、淫亂で、頭の空つぽな女が、ちよつと一時わたしの體を損料がりして、舞臺や寢臺の上で、散々いぢめつけたやうな氣がする。今になつて見ると、一體なんだつてその女があんな事をしたのか、あんな事がなぜ面白かつたのか、てんで合點が行かない！……何だつてあんなに苦しんだり、騒いだりしたのでらう。いま壽命が残り少なくなつて考へて見ると、あんな事はみんな氣ちがひめいた譚話で、一ばん肝腎で意味のある大切なものは、この枕や、痛みや、惱ましい憧憬や、窓ぎはの靜かな夕景色や、陰氣くさい醫師……それから死、かういふものなのだ！もしあゝした喧囂や光輝が、今この場へ集まつて、一つのまぶしい花火のやうなものとなつて爆發し、なんにも氣のつかぬうちに、悲しみも痛みもなく、わたしをこの世からつれて行つてくれたら、かういふ生活も、生きがひがあるだけけれど……」

「ねえ、先生、」あるとき彼女は、無口な醫師のアルノルチイにかう言つた。「これがつまり人生だつたんですわ……人生といへば、つまりすべてですわね！　つまりかうなる

ために、生まれて、大きくなつて、空想したり、もがいたり、娘から女になつたり、女優になつたりしたんですの……本當にどれだけ精力を浪費した事でせう！　ところが、今になつて見ると……ねえ、先生、わたしは丁度どこへ旅行すると言ふので、大騒ぎして着物を纏めたり、腹を立てたりした擧げ句、停車場へ駈けつけて見ると、汽車はもう出ようとしてゐる。ところが、わたしは何もかもみんな忘れて了つてるんですの。何だか下らない物ばかり、しこたま集めて來てる癖に、一番だいな必要な品がない、といつたやうな形ですわ……いえ、さう言つちやいけない！……これはそれよかずつと恐ろしい事なんですもの、あなたにはとてもわたしの心持が分からないでせう！」

「いや、わたしにはよく分かります。」いつものとほり小さいものうげな聲で醫師は答へた。

彼の事を思ひ出す度に、靜かな微笑が病人の唇に浮かぶのであつた。彼女はこの無口な氣難かしい醫師が、かつて誰からも見せられなかつたやうな深い理解を、自分に對してもつてゐてくれる、といふやうな氣がした。そしてこの理解の中に、こんど自分の生涯ちゆう、一度も經驗しなかつたあるものが、潜んでゐるやうに感じられた。

彼女の心にはある悪戯つ子らしい想念が浮かんだ。それは死に瀕してゐる美しい婦人の空想として、痛ましいものであつた。ほかでもない、もし自分が以前のやうに健康で快活だつたら、この醫師の氣難かしい魂を呼び醒まして、前後を忘れるほど夢中にさせ、もと大勢の空虚なつまらない人間に、少しづつ切り賣りしてゐた幸福を、すつかりこの人にやつて了ふものを……この地味な田舎醫師は、女がどれくらゐる魅力に富んで、華やかに興味のあるものか、またどういふ快樂を與へ得るものか、きつとまだ知らないに相違ない。さうしたらこの人の淋しい生活は、華々しいともし火に輝き出して、この人はどれだけ自分を愛するやうになるか分らない！……かう思ふと、彼女は自分の肉體の美があせて、裸身の妻も以前のやうに光りまばゆいどころか、かへつて恐ろしくくらゐだといふ事が、自分のためよりも彼のために惜しまれるのであつた。

「もう遅い！」

けれど、とつぜん病人はかう考へた——その時は光輝もなければ、芝居めいたポーズもない、地味な生活や戀ひに満足できないで、自分の方から彼を捨てて行くかも知れない。今はたとゝ死が間近に迫つてゐるために、以前なら冷笑

を浮かべて通り過ぎたやうな事を、眞面目に考へてゐるのかも知れない。

「では、つまりわたしの生活して来たのが、本當の自分の生活なのか知ら？……奇妙なこと！あれが本當の生活でなかつたといふ事は、自分でちやんと分かつてゐるのに、あれよりほかの生活は存在し得ないといふ事になる。なぜだらう？何もかもこんぐらかつて了つて、わけが分かりやしない。」

ついたつた今、もし新たに生活をし直す事が出来たら、何もかもすつかり別になつて了ふやうな氣がしたのに、一つ一つの瞬間を別々に取つてよく考へて見ると、一切の事實は正しかつた。ほかに生活のし方はありやうがない、といふ事になつて来る。彼女は自分も醫師も、すべて一種の霧のやうなものの中でうろく／＼迷つてゐる、人間全體が可哀さうになつて来た。眞實は眞實なるがために偽りと觀じられる。たゞ一つ常に正確で、かつて人を欺かず、時いたれば必ず訪れる者は——死あるのみであつた。

病人は自分の透き通るやうな手を光りに翳して、ものうげな微笑を浮かべながら、瘠せた指と指の間からさして来る、ほんの心もち暖かみを帯びた、薄い薔薇色を見つめて

ゐた。

「綺麗なこと」と彼女は小さな聲で言つた。

けれど、あたりは何ともいへないほど晴れやかに楽しく、世界ちゆうに日光が漲り溢れ、その輝きの中で、青空が熱情に耐へ兼ねるやうに慄へ戦き、緑の園は異常な力をもつて生長してゐるので、死とか、闇とか、沈黙とかいふ事を、いつまでも考へてゐられなかつた。で、病人も温い、穩かな、いゝ心持ちになつて、なんの原因もないのに、いかにも死にかゝつた病人らしい、静かな束の間の樂しさを感じた。そして思想は、まるで日に照らされた野のそよ風のやうに、かる／＼と馳せ廻るのであつた。

何もかも過ぎ去つて、一つとして大切なものはなかつた。たゞ太陽が照らして、金色の斑紋が指の上で閃いたり、慄へたりするのが、嬉しいばかりである。何と言つても、彼女はまだ死んでゐないから、まだ太陽を見る事も出来れば、その暖かみを感じる事も出来、緑の園の自由な風を呼吸する事も出来る。彼女はこの日光の一片々々を捉へ、碧瑠璃の空に慄へる點を一つ／＼、記憶の底に印して置きたいやうな氣がした。空には目に見えぬ樂しげなコバルト色の羽が、無數にちら／＼と動いてゐるやうに思はれた。そ

れに、また夕方になると、醫師のアルノルデイが来るのだ、かう考へると、彼女は嬉しくつて堪らなかつた。醫師が來たら長い間——恐ろしく長い間あの顔を眺めて、この窓際に坐りながら、頭に浮かんで來ることを何でもかでも、靜かな調子でみんな話して了ふのだ。しかし、それはみんな非常に優しい、氣持ちのいゝ事でなければならぬ。

誰やら家へ馬車を乗りつけた者がある。病人は辻馬車のひとの入つたやうな響きを聞きつけて、耳を澄ました。誰かしら聞き覚えのある（しかし彼女は、どうしても誰か思ひ出せなかつた）女の聲がかう訊ねた。

「ちよつと伺ひますが、こちらはラズドリースカヤさん……マリヤ・パーヴロヴナのお宅ですか？」

「え、こちらでございます。」どこからかネリリがかう答へた。

半ば忘れてゐた自分の藝名を呼ぶこの聲の響きを聞いた時、恐ろしい興奮が彼女の全幅を領した。あり得べからざる可能が幾千となく、旋風のやうに四方から彼女に襲ひかかつた。彼女は頸を伸ばしながら、弱い手をついて半ば身を起こし、戸口の方へ振り向いたまゝ、ちつと息を吐らしてゐた。

「誰だらう？」「一體なものだらう？」

明るい戸口を背景として、きつちり引き締まつた赤い着物を身に纏ひ、大きな帽子を被り、削つたやうな白い靴を穿いた、背の高い女の姿が現れたとき、病人は小さな聲であつと言つて、白い透き通つた手をさし伸ばしながら叫んだ。

「ジーネチカ」

黒い眉と、高い胸と、赤い唇と、黒い髪とが、色鮮かな斑紋をなしてちら／＼と動きながら、勢ひよく彼女の傍へやつて来て、しなやかな力強い手がしつかりと優しく、病人の體へ巻き付いた。そして、香水や、旅中の埃や、贅澤で豪華な婦人に特有な何かの匂ひに交じつて、舞臺や、遊蕩や、舞踏會や、音楽や、笑ひや、遊樂などの匂ひが、むつとばかり病人の鼻を襲つた。それは丁度さう／＼しく華やかな美に充ちた以前の生活が、このきらびやかな若い婦人と一緒に、突如として靜かな部屋の中に闖入したやうな具合ひだつた。

「まあ、わたし誰かと思つたわー」ジーネチカの柔かい暖かな兩手を取りながら、病人は半ば笑ひ、半ば泣くやうにかう言つた。「わたしは多分……だけど、そんな事はどうでもいゝわ……つまらない事だわ……でも、あんたが來よう

とは、夢にも思ひがけなかつた……まあ、ジーネチカ……どうしてあんたこんな所へ來たの？」

「何も大して深い譯はないわー わたし達はカザン行きの間談を持ちかけられたんだけど、わたし一人だけ行かなかつたの……もう旅から旅へ廻つて歩くのが厭になつたし、それに急にあんたに會ひたくなつたもんだから……」

「けど、あんたは此方へ來てからどんな？」

かう言ひ掛けて、ジーネチカはちよつと後句につまつたやうな具合ひで、その黒い目はちらと病人の顔を掠めて走つた。が、すぐに氣がついて、顔の表情を替へ、以前と同じ元氣のいゝ、愉快さうな調子で話し出した。けれど病人はすぐにこの目つきを見て取つた——彼女の胸は妙に怪しくわな／＼いた。ちやうど黒い鏡でも覗いたやうに、この黒い透明な瞳の中に、自分の本當の相——恐ろしい死相を發見したやうであつた。醫師の宣告も、苦痛も、衰弱も、この東の間に掠めて消えた階えたやうな視線や、赤い唇の上を這つた僅か一轉瞬の癡癡的な憐愍の影ほど、否應なしにはつきりと、死の迫つてゐることを語つて聞かせるものはなかつた。しかし、何よりも恐ろしいのは、ジーネチカが目をそむけたその素早さと、不自然な聲の躍りやうであつ

た。病人は急にぞつと寒けがして、恐ろしいやうな痛いやうな心持ちがした。彼女は危くあつと叫ばないばかりだつた。

けれども、太陽は金色の光りで室内を充たし、やさしい夏の微風は窓に笑ひ、黒い目に黒い眉をしたジェーネチカは、いかにも華やかで美しく、全身が青春と健康に輝いてゐるので、やがて苦惱は過ぎ去つた……黒い死の幻影は今一度うしろへ退いて、悦ばしい生の輝きの中に溶けたのである。病人は再び笑つたり、ジェーネチカを抱きしめたり、根掘り葉掘り、訊ねたりし始めた。その笑ひ聲の中には、かつて、否應いはさぬ力をもつて多くの男を牽き寄せた、天鵞絨のやうに滑らかな調子が響いてゐた。

「さあ、少し自分の事を話して聞かせて頂戴。暫く逗留に來たの？……少しわたしの傍にゐて頂戴ね。」

かうして、二人の輕はずみな美しい婦人の有する、青春と快活の美を思ふ存分發揮しながら、話しは次第に油が乗つて來て、もう病氣もなければ死もなく、すべてが日光と笑ひに充ちてゐるやうに思はれた。二人の女は、自由な美しい二羽の小鳥のやうに、快活な囀りで空氣を充たしながら、病ひと悲しみに充ちたこの淋しい部屋から、飛び立つ

て行きさうに思はれた。

二人の若い女達は何を話したのか、まるで見當がつかなかつた。彼女ら自身も、自分達のお喋りの内容を他人に傳へる事は、困難だつたに相違ない。しかし、すべてが恐ろしく興味津津々として、いき／＼とした意味に充ちてゐるやうに思はれた。元氣のいゝ華やかな女らしい饒舌の中には、時には新しい帽子、時には何かの臺詞のいくさり、時には人の名、時には戀語が、廻り燈籠のやうにちら／＼と閃いた。それはさながら様々な色紙で拵へた造花を、亂雑に投げ出したやうな印象だつた。たゞ一度このけば／＼しい反古だめの中で、何かしら黒い不吉なある物がちらと目を掠めた。

「ところでねえ、あのペロフが死んでよ……」

女優達をみんな「嬢や」と呼んでゐた、肥つた老俳優の好人物らしい、滑稽な顔が頭に浮かんだ。あの單純率直な、慳巧さうな、好人物らしい顔が、永久に臉を閉ぢて、肥つた手をちつと十字に組んだまゝ、いま墓穴の中に横たはつてゐるかと思ふと、不思議なやうな恐ろしいやうな氣がした。

「一體あの笑ひはどうしたのだらう？」

あの皮肉や洒落は

どうしたのだらう？ 美しい女に對する愛はどこへ行つたのだらう？ あの藝はどこへ行つたのだらう？……まるでなんにもなかつたかのやうに……なんの事はない、剝けて落ちた芝居衣裳の金箔か、舞踏會の後にこぼれ散つた紙玉のやうなものだ、それつきりだ！……」

けれどその黒いものは、まるで空を掠めた黒い鳥影のやうに、ちらりとしたかと思ふと、もう跡かたもなく消えて了つた。さうして、言葉は南京玉のやうにぱら／＼とこぼれ出て、笑ひ聲や、叫び聲や、冗談などが、遠く庭の中まで響きながら、輕快な小飾りもののやうに、四方へ飛び散るのであつた。

もう太陽は高く庭の上にさし昇つて、物の影は短くなり、空氣は乾燥して、息のつまるやうな暑熱が、そろ／＼と感じられ出した。ふとマリヤは氣がついて心配し始めた。

「ジーネチカ、あんたはまだ朝ご飯を食べてないんでせう……珈琲でも一口飲まなくちや！……わたしいうつかり喋り込んで了つて……あんたは昨夜まる一晚、汽車に揺られて来たんだものね！」

「なあに、平氣よ！」 薔薇色をした若々しい顔に、くつきりと描かれた黒い眉と、黒い目を輝かしながら、ジーネチ

カは事もなげにから答へた。「珈琲はいま自分で入れるわ。わたしあんたの家で女房役を勤めさせて貰つてよ。まあ、こゝは何ていゝんでせうね！」

やくざな舞臺衣裳や樂屋の埃を見馴れた目には、何もかも美しく映るのであつた。緑の園、コバルト色の空、太陽の光りなどは、まるで子供のやうに彼女を悦ばした。彼女はマリヤが重い病氣に罹つて、明日を知らぬ状態に陥つてゐる事などは、すつかり忘れて了つて、たゞ二人で楽しくこの夏を過ごす事のみ、空想するのであつた。

「あんたの所では、いろんな道具をどこへ置いてるの？ わたし自分でするわ……あんたは坐つてらつしやい、坐つてらつしやいよう……女中はゐるの？」 部屋の向かうの端にある卓の上へ手袋を抛り出して、大きな薔薇の花のついた帽子を脱ぎながら、彼女はかう言つた。

彼女は高く兩手を上げて、肘で圓を描いた。マリヤは舊い女優時代の習慣で、彼女のふつくらした胸もとや、輕く美しい力の緊張のために、しなやかに曲がつた細い腰の邊へ、試験するやうな目を投げた。

「仕合はせな人だわ！」 淡い無意識の羨望を覺えながら、彼女はかう考へたが、急にびつくりしたやうに、「あつ！」

と叫んだ。

「どうしたの？」

「うちのパーシヤ(女中)が呼ばれて行つたんだつけ……さし當たりどうしたらいいか知ら？」

「何でもありやしないわ！」とジェーネチカは一人で決めて了つて、病人が思案する暇もない中に、もう帽子を抛り出して、眞赤な長い裳(ドレス)をかゞげながら、戸の外へ駈け出してつた。と、どこか遠くの方で彼女の聲が聞こえた。始め何やら歌つてゐる風だつたが、やがて一人で面白さうに笑ひ出した。察するところ、彼女は自分が自由で、若くて美しい上に、太陽が何とも言へないほどはれなくと輝いてゐるのが、嬉しくて堪らないらしかつた。ふと彼女の聲が裏庭の方から聞こえたが、すぐにびたりとやんで了つた。恐らく庭の方へ駈け出したのだらう。

マリヤは弱々しい両手を膝の上に置いて、依然として軽い微笑を浮かべながら、コバルト色の空を見入つて考へ込んだ。彼女は少し目まひがして來た。もうかうした快談や、騒音や、笑ひなどが、彼女の力に耐へられなくなつたのである。けれども自分ではそれと氣がつかないで、沾(つ)みを帯びた目を、宵々した輝かしい淵(淵)に沈めながら、遠い空を眺

めて、物思ひに耽つてゐた。追憶は春のそよ風に吹かれた花びらのやうに、輕々と氣紛れに廻轉するのであつた。

ジェーネチカは長いあひだ姿を見せなかつた。どこかしら時には遠く、時には近く、彼女の朗らかな聲や、ちぎれちぎれな唱歌や、どこかで捜し出した食器の觸(ふ)れ合ふ響きなどが聞こえた。やがて、誰かと話し合ふ彼女の聲が流れて來た。

マリヤは聞き耳を立てて、相手がネルリだといふ事を知つた。彼女はびつくりした。いつも他人を避けて庭に隠れてばかりゐる、不仕合はせな、口數の少い野性的なネルリと、あの騒々しいほど元氣のいゝジェーネチカは、似ても似つかぬ赤の他人であつた。もしかしたら、ジェーネチカがいろんな事を訊ねて、彼女を怒らしはせぬかと、マリヤはびく／＼しながら心配してゐた。けれどネルリの聲は穩(ま)かに響いてゐるし、ジェーネチカは依然として愉快さうに笑つてゐるので、マリヤはやつと安心した。

「何といふ可愛いジェーネチカだらう？」彼女は感激の涙を浮かべながら考へた。「あの人は誰にもせよ、他人を怒らしたりなんか出來やしない……どんなに不仕合はせなひねくれた人間でも、あの人を見て氣持ちよく思はない者はあ



りやしな……」

「さあ、今度は二人づれよ！」ジーネチカは部屋へ入りながら、大きな聲でかう言つた。

その後からネルリが、眞面目な笑顔を浮かべながら入つて来た。

ジーネチカは珈琲<sup>わか</sup>しや、コップや、クリームなどを載せた盆を運び、ネルリは従順な表情でパンの入つた籠を提げてゐた。

「わたし達はもう近づきになつたのよ」まるで相手が疾うから待ち兼ねてゐる報告でも齎らすやうな調子で、ジーネチカはかう披露した。

ネルリは籠を卓の上へ載せて、瘠せた美しい両手を膝の上へ載せ、眉を八の字に寄せながら腰をおろした。彼女はもう妊娠六箇月で、その大きな重々しい腰の邊と、まるで娘々した脆<sup>もろ</sup>さうな肩を見較べると、妙な心持ちがするのであつた。

ジーネチカは乾<sup>ほ</sup>しパンのかけを珈琲の中に浸<sup>ひ</sup>けて、さもうまさうに喰<sup>く</sup>べながら、喋<sup>喋</sup>り續けた。

「この人が女優でないのが、残念で堪らないわ。」と彼女はネルリの事をかう言つた。「まあ、ご覽なさい。何て顔でせ

う……『三人姉妹』のマーシャそのまゝよ……緑の椋に緑の猫……」と彼は臺詞<sup>せせ</sup>を思ひ出しながら笑つた。

マリヤは優しい憐愍<sup>れんみん</sup>の微笑を浮かべながら、ネルリを見やつて考へた。

「あゝ、本當にさうだわ……何といふ可愛い、そして恐ろしい顔だらう。」

ネルリは何か一生懸命に緊張した物思ひをしてゐるやうに、眉根<sup>まゆね</sup>を寄せながら、眞つすぐに身を伸ばしたまゝ坐つてゐた。重々しい髪の毛は、まるで黒い蛇のやうに編まれて、頭の周りに巻き付いてゐた。薄い唇はきつと眞<sup>ま</sup>一文字に引き締まつて、彼女の若々しい、そのくせ十九や二十歳どころでなく、何百年も暮らして来た者のやうに、恐ろしく年寄りじみた顔からは、疲労と悲哀の氣が漂<sup>よ</sup>つてゐるやうに思はれた。

「まあ、それはいゝとして、」とジーネチカは喋り續けた。「かうしてわたしはこの町へ來ましたが、あんな方のお仲間はどうな人達でせうね？ マーシャ、あんなの所へ誰か來て？」

「わたしの所へなんか、誰も來る人はありやしなわ。」諦<sup>あきら</sup>めたやうな淋しい調子で、マリヤはかう言つた。「たゞアル

ノルヂイといふお醫者さま一人だけよ……そのほかは始終  
ネルリカと二人きり……」

「アルノルヂイ？」とジェーネチカは問ひ返した。「美しい  
苗字ね！……そして、どうなの、若い人？ 面白い人？」

マリヤは笑ひ出した。と、涙くましいやうな優しい表情  
が、その目を掠めた。

「いえ、もう大分な年配で、皆のいふやうな意味では、ま  
るで面白い人なの……まあ、今に見られてよ……その  
人は毎日うちへいらつしやるから……そりや氣むづかしさ  
うな人よ……だけどいゝ人なの、そりやあ本當にいゝ人な  
の……わたしあんないゝ人に今まで會つた事がないわ。」

ジェーネチカは黒く輝く美しい目で、ぢつと狡猾らしく  
マリヤを横目に見た。病人はその目の意味を悟つて、まる  
で小娘のやうに可愛い羞恥の色を浮かべた。微かな紅が蒼  
ざめた頬をさつと染めて、病氣のために大きく擴がつた美  
しい目には、涙がにじみ出た。

「そんなに見たつて駄目よ。」悲哀を帯びた冗談の調子で、  
彼女はかう言つた。「わたしなんか、そんな事を考へるのは  
もう遅いわ。」

彼女は相手に見てくれといふやうに、嚙細工みたくに透

き通つた兩手を機械的に上げると、また靜かに下へおろし  
た。

「こゝには面白い人が大勢ありますわ。話題を轉じると  
もつかず、また腹に一物あるためともつかず、突然ネルリ  
が思ひがけなくかう言ひ出した。「アルノルヂイ様があな  
たに紹介して下さるでせう。あの方は誰でも知らない人が  
ないのですから。」

マリヤは憚えたやうにネルリを見守つた。どういふ譯か  
彼女もジェーネチカも、ネルリが誰の事を話してゐるのか  
合點が行つた。ジェーネチカの顔にはやゝ残忍な好奇の色  
が浮かんだ。マリヤは手をさし伸べた。その様子は丁度、  
「おゝ、可哀さうに、不仕合はせな子……そんな事は言はな  
い方がいゝのに。」とでも言ふやうだつた。

けれどネルリは一そう細い眉を擡めて、蒼白い緊張した  
顔をしながら、言葉を續けるのであつた。

「あなた、あの方にセルゲイ・ニコラエフッチ……ミハイロ  
フさんを紹介してお貰ひになつたら宜しうございますわ。」  
「それは誰ですの？」とジェーネチカは訊ねた。

マリヤは恐ろしく氣を揉み出した。彼女の頬には無氣味  
な斑點が現れた。

「ネルリ、どうしてあんたは……」

「どうしていけないんでせう？」暗鬱な目つきで向かうの方を見つめながら、ネルリはぶつきら棒にかう言ひ返した。そしてくるりとジェーネチカの方へ振り向きながら、挑むやうな調子で言葉を結んだ。「それは元わたしの愛してゐた人ですの……まあ、一つ近づきになつてご覧なさい……わたし面白いんですの。」

「それがなぜ面白いんでせうねえ？」

「いゝえ、たゞ。」

ネルリはこの一語を漠とした威嚇の調子で發音した。ジェーネチカはげんさうに彼女を見やつて、人を莫迦にしたやうな、傲慢な微笑を浮かべた。マリヤはその黒いつややかな髪や、黒い眉や、赤い唇や、赤い着物で鋭く縁どられてゐる、しなやかな強健らしい姿を一瞥すると、心の中でかう考へた。

「この人には誰ひとり恐ろしい者が無いのだ……可哀さうなネルリ！」

「あなたはそんなに笑つてらつしやるけれど、それはわたしに取つて面白い實驗なんですの！」非常に眞面目ではあるが、薄氣味の悪い調子でネルリはかう言つた。

ジェーネチカはから／＼と笑ひながら立ち上がつて、しなやかな兩手をくねらせながら伸びをした。

「あなたは何て奇妙な人でせう！」と彼女はものうげな、しかも謎のやうな調子で言葉尻を引いた。「あなたは何かしらご自分の實驗のために、わたしを利用してと思つたらつしやるのね……番拔だこと。まあ、構はないわ……あなたのミハイロフさんをわたしに見せて頂戴。だけど、全く滑稽だわねえ……あなたは今日はじめてわたしに會つたばかりぢやありませんか……」

ネルリは頑なに眉を寄せて、無言のまま彼女を眺めてゐた。ジェーネチカは、まるでぐいと張つた罌粟木の弓のやうに、強健でしなやかな體を反らせながら、部屋の眞ん中に立つて、何やら言はうとした。その時とつぜん戸が靜かに開いて、醫師アルノルヂイの巨大な、ずつしりした姿が、闖の上に現れた。ジェーネチカは半分いひさして口を噤むと、そのまゝ部屋の眞ん中に立ち竦んだ。

「あゝ、いよ／＼先生がお見えになつた！」マリヤはさも悦ばしげに叫んだ。そして顔せんたいが、散り失せた花の名残りの一片にも似た、優しいほゝ多みにばつと輝いた。「さあ、どうぞお入り下さい……今日は嬉しい事があるん

ですの——ジエーネチカが訪ねて来てくれましたね……さあ、ご懇意にお願ひします。醫師アルノルヂイ、エヴゲーニヤ・サモイロヴナ・ウズダーリスカヤ……ネルリとはもうお知り合ひでしたわね。」

醫師のアルノルヂイは挨拶をして、腰をおろした。彼の顔はいつもより一そう氣むづかしげにだぶ／＼してゐた。

人々は何をしたらいゝか、すぐには考へつかなかつた。

醫師は注意ぶかく眞面目に三人の顔を見比べてゐるし、マリヤは例の蒼褪めた生氣のない微笑を、つゝましまやかに浮かべてゐるし、ネルリは悲痛な表情で細い眉を寄せたまゝ、眞つすぐに背を伸ばして、ちつと坐つてゐるし、エヴゲーニヤは窓の傍へ行つて、腰をおろして了つた。彼女はまだやはり興奮してゐた。ネルリの言葉に對して、腹を立てたものかどうか分からないで、高く張つた胸を波立たせて呼吸をしながら、いつも汗<sup>あせ</sup>ひを帯びた黒い目をきら／＼光らせてゐた。

「暫くご逗留<sup>とちゆう</sup>ですか？」と醫師のアルノルヂイは聞いた。

ジエーネチカは彼の方を振り返つて、につこり笑つた。醫師が氣に入つたのである。

「この夏いっぱい……もしマーシャが追つ立てなかつたら

ね……道具裏でまご／＼してゐるのにも、飽きて了ひましたもの、もういゝ加減やすまなくちやあ。」

「あなたのご苗字<sup>めいじ</sup>は藝名ですか？」

「いゝえ、本名ですの……」

「ぢや、あなたは波蘭出ですね？」

「父の方から言へば波蘭出で、母の方から言ふと猶太<sup>ユダヤ</sup>出ですの……ジウですわー」とエヴゲーニヤは言つて、からからと笑つた。

老醫師は優しくほゝ笑んだ。

「でねえ、先生」とマリヤは言つた。「うちのジエーネチカがこの町で退屈しないやうに、あなた一つ心配して下さらなければなりませんわ。この女<sup>むすめ</sup>にあなたのお知り合ひを紹介して下さいな……だつて、あなたは大勢しり合ひがおありでせう！」

「それは出来ません。」とアルノルヂイは無關心な聲で承諾したが、後でまたエヴゲーニヤの顔を見て、親しげな調子で繰り返した。「それは出来ません……エヴゲーニヤさんが俱樂部へお出でになるといふんですよ。あすこにはいつも大勢あつまつてをりますから。」

「どうしてわたし一人で行けますか？」ジエーネチカは愉快さ

うにかう聞いた。

「なぜ一人です？ わたしが迎へに來ますよ。」

「わたしがご一緒に行つてもよござんすわ。出し抜けにネルリがかう口を入れた。」

醫師もマリヤも、一齊に彼女を見やつて、目交ぜをした。

「あゝ、さう……」とジューネチカは荒らかな聲で高笑ひした。「あなたはわたしを使つて、何かの實驗をして見たいとかいふ事でしたね……ぢや、あなたがわたしを社交界へつれて出て下さるの？」

「えゝ。」いかめしい顔や聲の表情を變へようとししないで、ネルリは言葉みじかにかう答へた。

「これはどうもいよく不思議だ……一體どうしようといふのだらう？」とエツゲーニヤは考へながら、高慢げにネルリを見おろした。

けれども、若い妊婦の顔はびくりともしなかつた。それは永久不變の残忍な祕密の想念を顔に表した、石像か何ぞのやうに思はれた。

「何だかスフィンクスみたいだ。」思はず息づまるやうな感じを抱きながら、エツゲーニヤはかう考へて、顔をそむけた。しばらく彼女は無言のまま、物思はしげに坐つてゐ

た。

醫師のアルノルチイは、かたみに二人の顔を見やりながら、我ともなしに比較を試みたのである。

エツゲーニヤは全身光りと運動に充ちてゐた。そして呼び招くやうな人生が、必ず授けてくれるべき未知の幸福をさして、前へ前へと突進してゐるやうだつた。彼女の強健な若々しい豊かな肉體は、その幸福を豫感して惱み慄へてゐる。彼女の體には、一線一劃として暗い影はなく、すべてが鮮明で強烈だつた。それと並んでゐるネルリの姿は、さながら悲哀そのもののやうに、暗鬱に思はれた。丁度なものかを抑へ包むやうに、細い両手を強く胸へ押し當てながら、眞つすぐに身を伸ばして坐つてゐた。きつと彼女は、自分の前もうしろも、たゞ苦悶の連續に過ぎないやうな氣がして、到底いやすことの出来ない憎悪が、心中にじり／＼と生長して行くらしかつた。マリヤは、測り知れぬ運命の祭壇の前にもとされて、靜かな光りを放つてゐる蠟燭のやうに、従順な悲哀を胸に抱きながら、つましやかに明るく輝いてゐた。彼女に取つては、もう一切が終りを告げたのである。幸福と悲哀に充ちた人生は、彼女から離れてしまつて、物狂ほしい生の熱望も、物凄しい生の呪詛も、

すべて力ない憐れなものだといふ事が、彼女にはよく分かつてゐた。で、奔放なジニーネチカに對しても、いかついネルリに對しても、ものうげな老醫師のアルノルデイに對しても、同じやうに悲しげな微笑を見せるのであつた。

エヴゲーニヤは長くぢつと坐つてゐられなかつた。彼女は何かしら、不愉快な想念を追ひ拂はうとするやうに、頭を一振りして、醫師やマリヤを相手に、苦のなささうな調子で喋り始めた。彼女の聲は美しく樂しげで、目はいきいきと輝き、體ぜんたいから青春と、力と、勇氣との新鮮みが發散してゐたので、氣難かしい醫師さへ、少し元氣づいて來たほどである。

ネルリは無言で坐つたまゝ、何やら一心に考へ込んでゐた。黒い眉は、白砂の上に並らんだ二匹の蛭のやうにびくびくと動き、きつと引き締めた唇の兩隅には、あるかなきかの痙攣が走つてゐた。ほかの人がほとんど彼女の事を忘れた時に、突然ネルリは、マリヤと醫師のアルノルデイをまともに見据ゑながら、口を切つた。

「わたしがエヴゲーニヤさんと俱樂部へ行きたいと言つた時に、どうしてあなたはあんなに吃驚なすつたんですの？……それとも、わたしは世間へ顔出しが出来ないと、思つ

てらつしやるんですの？」

彼女の目は試すやうな意地悪い表情を浮かべた。

醫師もマリヤも、そんな事は少しも考へてゐなかつたが、なぜか二人とも間違つた。

「いや、どうして。」とアルノルデイはものうげに言つた。

「ネルリ、どうしてあなたはそんな事が言へるんでせう！」とマリヤは叫んだ。

「いゝえ、あなた方はさうお思ひになつたんですわ！」ネルリはぶつきら棒にかう言ひ返して、席を立つと、そのままぶいと部屋を出て了つた。

後に残つた人は長いあひだ黙り込んでゐた。

「あゝ、何といふ不仕合はせな人でせう！」と病人は言つた。

「それに何だか變な人ね。あの人は確かにアブノーマルだわ！」とエヴゲーニヤが應じた。

醫師のアルノルデイは重々しく吐息をついて、立ち上がった。

「わたしはもう出掛けなきやなりません。」と彼は言つた。

「ところで、あの女はたゞ／＼不仕合はせなんです。あの女のやうに虐げられ、迫害された境遇にゐる人間が、ノー

マルで打算的だつたら、それは墮落しきつた人か、でなければ、ばかな人間ですよ……」

「ミハイロフさんも屹度この報いを受けますわ！」とマリヤは叫んだ。

醫師のアルノルヂイは、自分の老いた心の中に裁きを求めたが、何一つ發見する事が出来ないで、たゞ肩を鍊めたのみである。

彼の代りにエヴゲーニヤが口を入れた。

「マーシヤ、あなたは本當に妙なものの考へ方をするのねえー」何だか毒々しくさへ思はれるやうな調子で、彼女はぶつきら棒にかう反駁した。「あの女だつて小娘ぢやないから、自分でもどうなるかくらゐ、ちやんと承知してゐた筈だし、その男の人だつて、處女の貞操を守る事はかり心配してゐるのは、ばか／＼しいに違ひありませんものね……それはあの女が自分で決めるべき問題なんだわ。」

「さうね……ちや、あの女はこれからどうしたらいいの？」

「あら、マーシヤ……どうしたらいいかつて……まあ、身投げでもするんだわ……ほかに何をする氣力もないとすればね……」

「これはそんなに簡単な問題ぢやなくつてよ、ジエーネチ

カ」優しい譴責の調子で病人はかう言ひ返した。

エヴゲーニヤは何とも答へなかつたが、その黒い目の中には、すべて自分以外の女に對して慘忍な、男に對して絶對に寛大な、若々しい貪慾な力が輝いてゐた。彼女は、見うけたところ、單にほかの美しく若い女が、既に戀ひを味はつたといふだけの理由で、誰に向かつてともなく、嫉妬をしてゐるかのやうであつた。

アルノルヂイは帽子を取つて、マリヤの傍へ寄りながら、暇を告げ始めた。

「今日わたしは市外へ行つて來なけりやなりません……明日また。」と言つてから、彼は歪んだやうな微笑を浮かべながら、エヴゲーニヤの耳に入らないやうに、小さな聲で附け足した。「ネルリに知らせして下さい。今日アルブゾフがあゝの女を訪ねて來るさうですから……」

マリヤは慄然として彼を見やつた。

### 一三

ジエーネチカは醫師をくゞりまで見送つた。二人はゆるゆると歩いて行つた。彼女は幾分ふざけたやうに聞こえるほど愉快さうな聲で、町の事や、若い面白い人達の事や、遊

樂の事など、根掘り葉掘り訊ねてゐたが、もう家の中まで聲が届かない邊まで來ると、ジーネチカは歩みを止めながら、祕密めいた不安げな様子で、醫師の背廣の肘をつゝ突いた。

「ねえ、先生、全くのところ、マーシヤはどんな容體なんですかの？」

醫師のアルノルヂイは何やら思案するやうに、暫く無言であつた。

「絶望です。」ものうげな調子で言葉みじかに彼は答へた。

「まるで望みがないんですの？」

「まるでありません。」殆ど腹立たしげな鋭い聲で、醫師のアルノルヂイは遮つた。

エヴゲーニヤは彼の手を取つた。いつも興奮したやうな彼女の美しい顔は、驚愕の表情を浮かべた。しかし、それでも醫師の言葉の否認（いふかた）いはさない、恐ろしい意味は充分に理解できなかつたらしい。生に刺戟された若々しい健康な彼女に取つて、死の接近といふ事を無造作に感ずるのは、困難だつたのである。

「先生、ひよつとあなたのお考へ違ひぢやありませんか？」  
どうか脅かさななくてくれと頼むやうに、彼女は憐れつぽい

調子でかう言ひ返した。「本當にまるで望みがないのですか？ もしかしたら癒（なご）りやしませんかしら？……あの女はまだあんなに若いんですもの。まあ、あの女の笑ひ方をご覧なさい……それに目なんかまるまるといき／＼して……だつて肺病患者でも、ずるぶん長生きする人があるぢやありませんか……わたしもある畫かきを知つてゐますが……」

醫師のアルノルヂイは頑（かた）なに首を振つて、うつろのやうな聲でかう言つた。

「あの女はもう一月ともちません。」

かう言つた後で、相手のいき／＼した輝かしい目を、憐れむやうに見入つた。この目は死の苦痛を見るのが、厭（いと）で堪らなかつたのである。彼は思はず視線を落とした。

ジーネチカは長いあひだ、憎（にく）えたやうに彼を見つめてゐた。彼女の目は、まるで猫が何か怖い物でも見た時のやうに、まん圓（まる）くなつて來た。

突然、アルノルヂイの肥えた顔は、奇妙に歪（ひず）んで來た。それは丁度いつもの假面が剝（む）がれて、苦しんだり泣いたりする生きた人間の顔が、むき出しにされたやうな感じだつた。彼は暫く相手の目をまともにはたと見つめてゐた。その下脛は、何か言はうと思つて名狀し難い努力をしなから、



何一つ言ひ出す事が出来ないかのやうに、ひく／＼と瘰癧するのであつた。やがてちよつと手を一振りして、挨拶もせずに、さつさとく／＼の方へ歩いて行つた。

エズゲーニヤはちつとその場に立ち竦んだまゝ、依然として慄えたやうに、眞ん圓く目を見はりながら、その後を見送つてゐた。

#### 一四

もう空が黒ずんで、埃も静まつたたそがれ頃、アルプゾフの三頭馬車が、轟然たる車輪の音と、澄んだ鈴の響きを立てながら、乗りつけた。

マリヤは窓の傍に坐つて、燃え盡きんとする夕ばえの空に、樹々の梢が徐ろに黒ずんで行くのを見上げてゐた。彼女がこの瞬間なを考へてゐたか、それは神よりほかに知る者はない。死に行く若い女の悲哀は、決して誰にも分らないのである。

エズゲーニヤは散歩かた／＼町を見物に出掛けた。一日病人の傍についてゐて疲れたので、爽やかな外氣に觸れて、健康な楽しい人々の顔が見たくなつたのである。

アルプゾフはエナメルの靴を穿いた足を、大腿にどつ

し／＼と擴げながら、やゝ踰躑として庭の中へ入つて來た。赤い襦袢や、前を擴げた外套や、阿彌陀に被つた白い帽子は、放膽な拳闘家といつたやうな佛を彼に與へた。けれど、燃えるやうな黒い目の表情は暗澹としてゐた。

マリヤは彼の姿を見つけたが、何とも言はないで、小首を振つたばかりである。彼女はアルプゾフを知らなかつたけれど、すぐにあれがさうだと悟つた。

アルプゾフはネルリの部屋の戸を叩いた。彼女は答へなかつた。戸の中は闇として、緊張した沈黙があたりに立ち罩めてゐた。黄昏の色は次第に濃くなつて、息づまるやうに無氣味な影が、庭から入り口の階段へ這ひ寄るのであつた。

アルプゾフはまた叩いた。何やら戸の向かうでこそりと動いたかと思ふと、またしんとして了つた。アルプゾフは、彼女が單にノックの主を知つてゐるばかりでなく、閉め切つた扉ごしに、自分の全身を見透かしてゐるやうに感じた。不思議な狂憤が彼の心を襲つた。彼はうんと力任せに戸を引つ張つた。すると戸には鍵がかゝつてなくて、やんはり開いたのである。

ネルリは卓の傍に立つてゐた。薄やみの中に黒い眉をし

た蒼白い顔と、闇に溶け込んで了つた黒い着物の兩がはに、力なくだらりと垂れた白い手が見える。彼女は身動きもしなければ、物も言はないばかりでなく、顔を伏せようともしないで、いかつい目つきで、アルプーヅフの顔をひたと見つめてゐた。

「ネルリ、」と彼はしや嘸れた聲で言つた。「ネルリ……」  
今度は一そう低い聲で繰り返したが、まるで喉でもつまつたやうに句を切つた。

ネルリは返事をしないで、依然として無言のまゝ相手を見つめてゐる。

アルプーヅフはちよつと闕の上立つてゐたが、やがて頭を一振りして、醜い薄笑ひに顔を歪めたと思ふと、とつぜん部屋の中へ一步踏み込んだ。ネルリはびくりとなつて、静まり返つたが、その顔はまるで眞蒼になつた。

「ご機嫌よう……思ひ掛けなかつたかね？」ひん曲がつたやうな微笑を浮かべながら、アルプーヅフは訊ねた。「もう随分しばらく會はなかつたね……どうしたい、僕が來ても嬉しくないのかね？」

ネルリは押し黙つてゐた。アルプーヅフは笑ひ出した。「事によつたら、僕が來たのは餘り有りがたくないかも知

れないね？……さうならさうと言つてくれ、僕は歸るから……僕はたゞちよつと會つて見たかつたのだ。どうだね、ミハイロフは時々やつて來るかね？ 來ない……さうだらうとも！……ところが、僕はかうしてやつて來た……ネルリ……この決心をつけるのは、なか／＼骨が折れたよ。三日間のべつ飲み明かした擧げ句、到頭やつて來た譯なのさ。ばか／＼しい事だ……厭らしい事だ……が、それでもやつて來た。何だつてお前だまつてるのだ？ 僕は別に何も……まさか僕の來たといふ事が、侮辱になる譯ではあるまい……たゞちよつと氣が向いたんだよ……お前はがる事はないよ、僕は別に何も變な事を言やしないから……今さら何を言ふ事があるものかね！ もう濟んだことは取り返しがつきやしない。たゞ半年前には、かうした態度を見せたことがない、それを思ふと苦しいよ……覚えてるかい？ 忘れた、さうだらうとも！……ところが、僕は何もかもみんな覚えてるよ！……一體お前なんだつて黙つてるのだ、話しをおしよ、えー」

「わたし、何も話す事なんか無いわ。」とネルリは小さな聲で答へた。

アルプーヅフはまたしや嘸れた聲で、短い笑ひを發した。

彼がネルリの所へ出掛ける時には、過去の事など少しも言はないで、彼女を責めたり、侮辱したりすまいと考へてゐた。けれど、すべての知人から恐れられてゐる盲目的な、酔ひに任せた狂憤の發作が、どうする事も出来ないやうな力をもつて、むら／＼とこみ上げて來たのである。この見覺えのある、變はり易い優しい目や、唇や、髪や、ほつそりしたしなやかな姿ぜんたいを見ると、かつて氣が狂ひはせぬかと氣づかはれるほど、一睡もせずすゑに悶もえ明あかした夜の幻覺が、ふたゝびよみがへつた——ほかの男が彼女をまるで品物のやうに、また娼婦のやうに自由に搦なんで、抱きしめてゐる様子が、まざ／＼とアルブゾフの腦裡に映じてるのであつた。なぜかしら全く「娼婦のやうに」といつた風な感じがした。かうして、眞裸まなだな彼女がほかの男の手に抱かれてゐる所を想像すると、無氣味なな血腥ちぢい霧きりのやうなものが、彼の頭の中に立ち昇るのであつた。

「勿論、何も言ふ事はなからうさ！」力任せに彼女の横面を揉もりつけたと思ふ心を、人間わざと思はれないくらの努力で押しこたへながら、アルブゾフは齒を食くひしはつてかう言つた。

「何でもない事だ……女に取つては、かういふ事など簡單

なものだ。今日ひとりに接吻したかと思ふと、明日はまた別な男と寝に行く……何でもありやしない！ 僕がどんなにならうと……僕がこの所がどんなに燃えてゐようと……そんな事には少しもお構構ひなしだ！」

アルブゾフは、もう自分が何を言つてゐるか知らなかつた。たゞ自分は深い淵ちのやうなものの中に轉まがり落ちてゐる、自分は彼女を侮辱してゐる、二人の間にはもう永久に障壁が築かれてゐるといふ事を直感して、慄然とするのみであつたが、それと同時に、彼女を畜生同様に侮辱し、苦しめ、貶おとしめてやりたいといふ、矢も楯たても堪らない焼けつくやうな欲望が、うしろから彼を推すやうな具合たひだつた。彼は一そう強く相手を侮辱するやうな、無作法な、汚い言葉が見つかからないのに苦しみながら、言葉を拾ひ拾ひゆつくりと語り續けた。

「え、それでどうだつたね？ どんな風にやつたい？……あの男を充分よろこばしたかい？ うまく抱いてやつたかね？……あの男も満足したかね？……何だか恐ろしく早く棄てて了つたぢやないか？ きつとお前は色女として餘り大して……事によつたら、僕はつまらない事に苦しんだのかも知れない……そんなにするがものはないかも知れない

よ……一つあの男に聞いて見なきゃならない……こいつは面白い、え、さうぢやないか？……」

ネルリは押し黙つてゐた。彼女がまるで辯護もしなければ返事もせず、ほつそりした白い手を力なげに垂れたまゝ、無言で立つてゐるので、この嘲笑が一層おそろしく感じられた。

「返事しないのかい？」憎悪のために息を切らせながら、アルブーゾフはしやゝ唄れた聲で續けた。「まあ仕方がない、黙つてゐるが、いゝ、全く今さらお前に何を言ふ事があるものか？まあ、いゝや……お前は黙つてゐるが、いゝ、僕が一人で喋るから……何といつても、僕は長いあひだ黙つてゐたからなあ……えゝ、さうぢやないか？」

ネルリは押し黙つてゐた。

「さう／＼、恐ろしい残忍な調子で、自分をも彼女をも責めさいなみなながら、アルブーゾフはゆつくりゆつくりと言つた。「噂で聞くと、お前はお祝ひしなきゃならないさうぢやないか、え？……お祝ひしなきゃならないのかね？……さあ、返事しないか。」

ネルリは返事をしなかつた。

アルブーゾフもちよつと言葉を休めた。彼の目の前には

何か赤い斑紋くまがくる／＼廻つて、胸の中はまるで空氣がなくなつたやうに思はれ、兩手は恐ろしい打撃を用意するやうに握りしめられた。もう彼は一分もこの苦痛に耐へる事が出来ないで、何かしら到底とり返しつかない、恐ろしい事が起こりさうに思はれた。と、不意に彼はネルリが泣いてゐるのに氣がついた。

彼女は兩手を垂れながら、奇妙な、緊張した、嚴いつ、蒼褪めた顔をして、ほつそりと立つてゐた。この顔の上を、涙がほろ／＼と流れてゐるのであつた——靜かに、聲もなく。

アルブーゾフは目の中が急に暗くなつて、何もものが恐ろしい力で、心臓をしめつけるやうな氣がした。彼は何もかもすつかり忘れて了つて、憎悪も、嫉妬も、憤怒も消えうせたのを感じながら、まるで酔ひどれのやうに、よろよろと二歩まへへ踏み出し、兩手を差し伸べて、彼女の手を取り、どつと重々しく膝を突いた。この瞬間、彼は一切を赦し一切を忘れて、たゞ彼女一人——すべての人に辱うぢかしめ處おとがげられた、不幸な愛する少女しか目に入らなかつた。この不幸な少女を、自分までが侮辱したのである！

「ネルリ！」アルブーゾフはしやゝ唄れた聲で叫んで、焼け

るやうな唇を彼女の手に押し當てた。「赦してくれ、僕は氣が  
ちがつたのだ……赦してくれ……」

ネルリは手を振り放さうともしなければ、身を引かうと  
もしなかつた。たゞ唇だけがわな／＼と慄へた。彼女は目  
を上げて、苦痛と、恐怖と、一種もの狂はしい歡喜に充ちた、  
不思議な表情をしながら、眞つすぐに前の方を見つめた。

「もう堪らない……」とアルブゾフは狂せる者の如く叫  
んだ。「もうこれ以上たまらない……赦してくれ……僕を  
可哀さうだと思つてくれ！」

ネルリは押し黙つてゐた。アルブゾフはよろ／＼しな  
がら立ち上がった。彼の顔は蒼ざめて、一房の黒い髪は額  
に垂れかゝり、目は醉漢らしい、とは言へ、人間のものと  
思はれないやうな、悲愁と哀願の色を浮かべてゐた。

「何もかも忘れて了はうぢやないか……何ごともしなかつた  
ものとして……すつかり以前通りに……え、ネルリ？」彼  
は絶望の調子でかゝ言つた。

ネルリは不意に兩手を額のところへ上げて、指を揉みし  
だき始めた。目を閉ぢた彼女の顔は、恐ろしい苦痛の癡癲  
に曲がつて、食ひしばつた齒が、闇に閃いたほどである。

「何のためにそんな事を……あゝ神様、何のために！」ア

ルブゾフがやつと聞き取れるか、聞き取れないくらゐの  
小さな聲で、彼女はかゝ言つた。

「ねえ、お聞きよ、ネルリ。」莊重に聞こえるほどの暗い聲  
で、彼はかゝ言ひ出した。「僕はお前なしぢや生きてゐられ  
ない……憎みもし、輕蔑もするけれど……やはりだめだ、分  
かつてくれるかね、どうしてもだめなのだ！……そのうち  
に忘れて了ふだらうと思つて、酒を飲んだり、ばかな眞似  
をしたりして、醜惡な生活をして來た……お前の身代りに  
大勢の女を傷ものにした……それはみんな金づく、力づく  
で手籠めにしたので。どれくらの貴重な人の生活が傷つけ  
られたか分かりやしない。しかし、その犠牲もみんな無駄  
だつた！ なんにもなりやしない……またかうしてお前の  
所へやつて來た！ これは一體どうしたといふのだらう？  
氣でも狂つたのだらうか？ だめだ……何もかも忘れるし、  
何もかも赦すから、どうか……」

「それは出来ない相談だわ。」やつとの事でネルリは答へ  
た。

「なぜ？ 僕がとでも忘れないと思ふのかね？ 忘れるよ  
……かうして胸を抑へつけて忘れるよ！ お前を愛して、  
子供のやうに大切にするよ……ネルリ！……可愛い子、お

前は僕の太陽だ！……それとも、お前はまだあれに惚れてるのかね？」

ネルリはびくりと慄へた。そして、唇は惱ましげな痙攣のために微かに動いた。

「いえ」と彼女は答へた後、また毒々しいほどの調子で、もう一ど繰り返した。「いゝえ！」

「本當かね？」アルプーヅフは悦ばしげに叫んだ。「お前が決して嘘をつかないのは、僕も知つてゐる……本當だね？ちや、どうだね……ネルリ……出かけようぢやないか……僕と一緒に！」

「いや。」がらんとしたやうな聲でネルリは答へた。

「どういふ譯で？ 僕を愛してゐないのかい？ それぢや友達同志にならう……一緒に生涯を終らう……實際、お前は自分の心を知らないのだ……全くお前……お前さうしてゐたら、一生が臺なしぢやないか、僕はお前のために……」

「そんな時は決して來やしません。」とネルリは答へた。

「一體お前は氣でもちがつてゐるのか？」恐ろしい憎悪でも感じたやうに、アルプーヅフはかう叫んだ。「何だつてお前はさうひねくれるんだ……どうしようといふのだ？……僕が拳銃の丸でも額へぶち込めばいゝのか？……それは人

を死ぬといつて突くやうなものだ！」

ネルリは急に短かい、無氣味な笑ひ聲を立てた。

「あなたはそれより以上、ばかげた事を考へつく事が出来なかつたの？……搦め手からの責め方が、少しまづかつたわ！……」

アルプーヅフは身慄ひして、一步あとへすさつた。彼は自分が聞き違へたのか、思ひ違へしたのか、それとも彼女の氣が狂つたのか、とかう考へた。

「それはなんの事だね？」

ネルリは依然として低い、謎のやうな聲を立てて、笑ひ續けた。

アルプーヅフは彼女の方へ一步ふみ出して、額の大きな重々しい首を、相手の顔へ近々とし寄せながら、瞬きもしない黒い瞳を、ちつと食ひ入るやうに見つめた。餘り近すぎるために、奇怪に恐ろしく見える、大きな、まるい、黒い瞳が、ちか／＼と彼を見据ゑてゐた。この瞳の中には、人間の魂が潜んでゐた。深い淵の底の薄やみに潜んだ蛇が、もそろと蠢めくやうに、捕捉し難い滑らかなある物が、この瞳の中に動いてゐた。

「さあ、しまひまで言つてご覧、さあ！」しや嘎れた聲で

彼は咳いた。

ネルリは到頭大きな聲で、愉快さうにからりと笑ひ出した。そして彼を押しつけながら、窓の方へ行つて腰をおろした。きつと引き結んだ唇の兩隅は、ひく／＼と引つ吊つて、目には暗鬱な意地悪い笑ひが浮かんでゐた。

「わたしはなんにもほしくないの！ みんなわたしに構はないで下さい……わたしだつて誰にも手を出しやしないんだから。」

アルブゾフは頭を低く下げ、がつしりした強い手を垂れながら、ちつとその場に立ち竦んだ。

「まあ、お聞きよ、ネルリ。」そつぽを見ながら、彼はかう言ひ出した。「この場合ひ、冗談なぞ言ふ事はありやしない……僕はよく承知してゐる……本當にあいつの頭を即座に叩き割つて……ついでに、自分の頭の始末も付けて了つたら、いゝかも知れない……それよりうまい分別は出ないよ！……しかし、さうして見たところで、何にならう？……そんな事をしたつて、やはり取り返しはつきやしないのだ……それに、お前もその時は僕を憎むに相違ない……ええ、何といふいま／＼しい女心だらう！」

ネルリは黙つてゐた。

アルブゾフは不確かな足どりでその場を離れ、彼女の傍へ近寄ると、またもやどろと膝を突いて、まるで小さな子供のやうに、毛のもじ／＼した大きな頭を、彼女の黒い袴の上へ載せた。ごは／＼した織り物の下で、柔かく暖い女の膝が慄へた。幾分かたつた時、とつぜん軽い優しい手が、彼の縛れた頑固な髪の毛を、いとしげに撫で始めた。彼はたゞびくりとしたのみで、一そう強く彼女の膝に頬を押し當てた。

「可哀さうに、あなたはいゝ人、わたしの好きな人よ！」子守り唄でも歌ふやうな小さい聲で、ネルリはかう囁いた。夕暮れの薄やみと静寂の中に、やつとの事で聞こえる、彼女のゆる／＼とした悲しい聲は、何となく奇妙に響いた。彼女は黒い目を大きく見はりながら、男の頭／＼に上の方を見つめてゐた。目に見えぬ涙は、彼女の蒼ざめた頬を傳つて、靜かに流れた。

「わたしの可愛い人！」

アルブゾフは素早く頭を上げた。限りなき憐愍と愛情の涙が、彼の心に漲つたのである。唇は彼の意志に反／＼かやうに、涙で熱くなつた柔かい女の唇と出會つた。何やらあたりは歌でも歌ひ出したやう、壁はぐら／＼と揺れて、

膝を突いてゐる床は靜かに流れ出した。今まで経験した一切のもの——嫉妬も、悲哀も、憤怒も、何もかもどこかへ行つて了つた。残つたものは彼の鐵のやうな手の中へ、柔かくおとなしく投げ出された、可愛い、弱々しい、手頼りない女の體ばかりだつた。

「僕の大事な大事な可愛い女、大好きな女——彼女の熱い唇や、濡れた頬や、濡れた目や、髪や胸などを接吻しながら、アルプーゾフはかう囁いた。

「ぢや、あなたはわたしを愛してくれるの？……愛して？赦してくれて？ 何もかも？……」まるで熱に浮かされたやうにつままりもなく、小さな聲でネルリはかう言つた、全身を彼の方へ摺り寄せながら。

突然アルプーゾフは厭らしいほど丸い、大きなふつくりした腹を、自分の頬に感じたのである。恐ろしい嫌惡の痙攣が彼を突きつけた。彼は一切をだめにして了ふと感じたので、殆ど氣の狂ひさうな、恐ろしい努力をもつて自分を勵ましたながら、再び彼女を抱きしめようとした。前より一そう強く、痛いほど抱きしめて、この抱擁の中に彼女をも自分の嫌惡をも、押し潰して了はうと思つたが、しかし駄目だつた。

「あーあー」と彼は呻き聲を發した。

ネルリは、男の頸から沁り落ちた兩手を、だらりと垂らし、理解力を失つて恍惚とした目つきで、ぢつと相手を見つめながら、全身を男の方へ吸ひ寄せられてゐた。アルプーゾフは思はず兩手で頭を掴んだ。突然、彼女の顔はさつと蒼ざめて、目は理解力を恢復して鋭くなり、傲慢な毒々しい表情がその中に閃いた。ネルリは靜かに立ち上がった。「お歸りなさい」と彼女は冷ややかに言つた。

もう一切が瓦解したと感じると、もの狂ほしい絶望の發作に驅られて、アルプーゾフは彼女に飛びかゝり、力づくで抱きしめようとした。

「ネルリ、ゆるしてくれ……僕だつて……急に忘れて了ふ事は出来まいぢやないか……お前もそれくらゐの事は察してくれなきやいけない……ネルリ——」

「いゝえ、かういふ事は誰だつて、決して赦す譯に行きませんよ、ザハール・マクシーモビッチ。」とネルリは冷ややかに遮つた。「それに、あなたもそんな性質の人ぢやありません……歸つて下さい。わたしに構はないで頂戴……わたしは苦しいんですよ——絶望したやうに彼女は叫んだ。

「決してそんな事はない——」とアルプーゾフは答へたが、



その聲は怪しく家ちゆうへ響き渡つた。

「え、澤山ですよ……」とネルリは嘲るやうに言ひ返した。「そんな事は誰でも言ふことだわ……」

「僕はみんなと違ふ」

「あなたが皆のやうな人間でないんですつて？……わたしも自分でちよつとさう思ひましたが、それが思ひ違ひだつたといふ事が、今はつきり分かりました……一體あなたはわたしの何がほしいんですの？ わたしの體ですか？……ちや、それをお取りなさい。わたしの體なぞ呪はれたものなんだから……たゞね、どうかわたしに構はないで頂戴……え、何ですつて？ あなたはわたしを色女にしたいんですか？……結構だわ！ さあ、お取んなさい、遠慮なくお取んなさい！ あゝ、情ない、いつそ早く死んで了ひたい」

アルブゾフは何か言はうとしたが、聲がと切れて了つた。不意に彼は眞底から、今度こそもう萬事休したと悟つた。ネルリは待ち設けてゐた。事によつたら、もしこの瞬間、彼がたつた一こと優しい言葉を掛け、ほんのちよつとした愛撫を與へたら、彼女の狂憤した病的な胸が、無限な愛の中に溶けほぐれたかも知れなかつたのだ。しかし、ア

ルブゾフは無言のまゝだつた。と、ネルリは彼の泣き聲を聞きつけた。

アルブゾフはもと彼女の坐つてゐた窓際の席に坐つたまゝ、顔を兩手で隠しながら、泣いてゐた。まるで犬の吠えるやうな、しやべれた、奇妙な男の泣き聲が、ちぎれちぎれに洩れて出た。ネルリは狂氣のやうにその方へ飛んで行かうとしたが、ふと立ち止まつて、兩手を揉みしだいた。

「あなたおやめなさいつてば」と彼女は絶望したやうに叫んだ。「よくまあ恥つかしくないこつてすねえ……以前會つたときには、あなたもそんな人ぢやなかつたのに……アルブゾフともあらう人が、女がほかの男を愛してるからつて、泣き出すなんて……」

「何だつて？」アルブゾフは機械的に問ひ返した。

ネルリの目の中には、何かしら自暴自棄といつたやうな想念が閃いた。

「え、ほかの男を愛してるのよ……」

彼女は力を蓄へようとするやうに、暫く黙つてゐたが、やがて突然、腹に一物あるやうな残酷な調子で言葉を結んだ。

「愛してるのよ！ 何といつても愛してるんだわ！……よく聞いて頂戴、さつき戀ひが醒めたと言つたのは、嘘なの

よ……よくつて？ わたし戀ひしてゐるの！ 憎みながら  
やはり愛してゐるのよ！……あの人ひとりだけ愛してゐる  
のよ……あなたなんかわたしの目には……滑稽に見えるば  
かりだわ！ よくつて、滑稽に見えるのよ！ あの人はあ  
りたけの物を取つて、棄てて了つたでせう……それが男な  
のよ。ところが、あなたはまるで女の腐れたみたいに、めそ  
めそ泣いてるぢやありませんか……わたしはあの人が好き  
なの。よくつて、あの人が好きなのよ！ あのさへその  
氣になれば、わたしはあなたをふり棄てて、膝突きのまゝ  
であの人の所へ這つて行くわ！ 犬つころみたいに！ あ  
なた聞いてて、え？」

恐ろしいほど癡癡する力の強い手が、彼女の喉を掴んだ。  
ネルリは目がくらんで、赤い圈が幾つも幾つも、傍を流れ  
過ぎるやうな氣がした。

「あーあー」とアルブゾフはもの狂ほしく唸り出した。

「では、貴様はまだ人を愚弄しようといふんだな……畜生……  
……可哀さうだが、殺して了ふぞ！」

ネルリは抵抗しなかつた。黒みを帯びた髪の毛は、瘡せ  
た脆さうな肩へはら／＼とこぼれた。彼女は本能的に兩足  
を支へようとして、一莖の葦のやうにぐつと全身を反らし

た。そして顔色は眞蒼になり、目は眼窠から飛び出して、  
白く露出した齒は闇の中に輝いた。彼女はひい／＼と喉を  
鳴らしてゐた。

突然アルブゾフは恐ろしい勢ひで、彼女をわきの方へ  
突き飛ばした。ネルリは横腹を卓へ打ちつけて、卓布  
に掴まつたが、ずる／＼とこりながら、卓の上の物をすつか  
り引き摺り落として、床の上にはつたり倒れた。アルブ  
ゾフは思はずその方へ飛んで行つた。恐怖と憐愍と愛情と  
羞恥のために、彼の心臓は張り裂けんばかりであつた。

「ネルリ！」と彼は絶望したやうに叫んだ。彼はネルリを  
殺したと思つたのである。

ネルリは起き上がつて、落ちつき拂つた様子で兩手を上  
げ、髪を直しながら、そこへ坐つた。彼女は何やら言つた  
けれど、餘り小さな聲だつたので、アルブゾフには聞き  
取れなかつた。

「何だつて？……ネルリ、赦してくれ、赦して、赦して……  
……僕は氣が狂つたのだ！」泣き泣き彼女を抱き起こさうと  
努めながら、彼はかう呟いた。

「あなたが絞め殺して了はなかつたのは残念だわ！」ネル  
リは小さな聲でかう言つて、笑ひ出した。

アルブリーツフは両手で頭を掴みながら、いきなり帽子も被らずに、部屋の外へ駈け出した。

「ゾーリヤー」ネルリは前後を忘れたやうにかう叫んで、彼の後を追つてゐざり出した。けれども、アルブリーツフはそれを聞かなかつた。

## 一五

三頭馬車は彼を待つてゐたが、アルブリーツフはそれに氣もつかず、両手で頭を抑へてよろ／＼しながら、傍を通り過ぎてしまつた。彼は暗闇の中で歩道の標柱に打つ突かつて、血の出るほど膝がしらを挫いたが、それにも氣がつかないであつた。

誰やら彼を呼び掛けるものがあつた。

「アルブリーツフさん！ どこへ行くんです……帽子も被らずに？ 何事が起こつたのです？」

アルブリーツフは騎兵少尉補クラウゼの白い軍帽と、灰色の長い外套に氣がつくと、氣ちがひのやうにから／＼と笑ひ出した。

「あなたどうしたんですか？」少尉補は眞面目になつて訊ねた。

「何でもないよ君！ 帽子なんかいりやしない……この世の中では心情がなくても済むさうだから、帽子がないくらい何でもないさ！」

クラウゼは注意ぶかく眞面目くさつて、この興奮し切つた譚言を聞き終つた。

「僕の所へ行きませんか。」と彼は言つた。

アルブリーツフはまたから／＼と笑つた。

「君は僕が氣でもちがつたかと思つてるな？……いや、君、僕のやうな人間の一ばん困るのは、決して氣ちがひにならないつて事なんだ……よく／＼卑劣に出来てるから、何でも我慢するのだ、何でも持ちこたへるのだ……ちや、本當に行かうかね……君のところには火酒があるかね？」

「葡萄酒がある。」注意ぶかくアルブリーツフに見入りながら、クラウゼはかう言つた。

「ちよつ、ばか／＼しい、葡萄酒なんか仕様がありやしない！ 火酒があるかい？」

「火酒も出させようよ。」とクラウゼは同意した。

「ちや、行かう。」

「馬車が迎へに來ましたよ。」とクラウゼが言つた。「家へ歸さなきやなりませんまい。」

「馬車？ あゝ、さう／＼……あんなものなぞ、どこへでも勝手なところへ行くがいゝ」とアルブゾフは手を振つた。

「いや、それでは都合が悪い。」と少尉補は反對して、三頭立に近寄り、ほかの街を通つて自分の住み家へ来るやう、馭者に言ひつけた後、アルブゾフのところへ歸つて來た。

アルブゾフは、垣根に額をすり付けながら立つてゐた。「さあ、濟みました、もう出掛けてもいゝです。」彼の肩に觸りながら、クラウゼは言つた。

「え？……さうだ、君、出かけてもいゝ、出かけてもいゝ……」とアルブゾフは答へた。と、不意に無意味な微笑を浮かべながら、かり言ひ出した。「僕はね、君、いま危く人間を殺すところだつたよ……」

クラウゼ少尉補は注意ぶかく聞き終つて、「よろしい、それは後にしませう。とにかく殺しやしなかつたのでせう？……さあ、出かけませう。」

彼はアルブゾフと腕を組んで、引つ張つて行つた。アルブゾフは一步ごとに躓きながら、すなほに歩いた。

「そこに柱があるから、ぶつ突からないやうになさい……今度はこつちです……さあ、來ました……遠くないでせ

う。」小門を開けて、アルブゾフを先へ通しながら、少尉補はかり言つた。

クラウゼの住まつてゐる離れの支關はまつ暗で、兵隊式のスリーブがぶん／＼匂つてゐた。彼は手探りで戸の把手を掴み、アルブゾフを部屋の中へ入れて、燐寸を捜し出し、ラムプに火をつけると、歩きながら外套を脱いで、再び支關へ出た。

「ザハルチェンヨー」と彼は誰かを呼んで、それから長い間ほそ／＼囁いてゐた。

「はい、承知しました、少尉補殿。」と答へる兵隊の聲が聞こえた。クラウゼは歸つて來た。

「いま火酒が來ますよ。」と彼は言つた。

アルブゾフは前に少尉補が出て行つた時と少しも位置を變へずに、部屋の眞ん中に突つ立つて、ちつと床を見つめてゐた。クラウゼはちよつと考へて、彼の兩肩を抑へ、卓の傍へ坐らせた。アルブゾフはおとなしく腰をおろして、まるで始めて見るやうに、奇妙な、病的な好奇心に充ちた微笑を浮かべながら、部屋の中をきよ／＼見廻すのであつた。

「君の部屋は中々いゝね。」人の好きさうな調子で彼はかう

言つた。

「ええ、僕はちよつとうまく落ちつきましたよ。」とクラウゼはうなづいて、「僕は安樂が好きですからね。」

部屋はずるぶん大きかつた。一人きりの住居としては、大き過ぎるくらゐだつた。壁紙は仕きり板で隠してあるし、壁の傍には幅の廣い、土耳其風の長椅子が据ゑてあり、大きな書物卓の上に、素晴らしい大理石の文房具が輝いてゐるほか、舟底椅子もあれば、床の上に狼の毛皮も敷いてあり、長椅子の上には壁掛けの毛氈もさがつてゐた。その毛氈の上には刀剣や、小銃、拳銃などが、ニッケルめつきの部分を鈍く光らせながら、半圓形にかゝつてゐた。隅の方には譜を載せた譜臺が立つて、ギオロンセロの奇妙な長い頸が、覆ひ布の蔭から謎のやうに覗いてゐた。あたりには香水と煙草の匂ひが漂つてゐる。

從卒が使ひから歸つて、火酒や、杯や、何か鹽つばさうな下物の入つた皿などを持つて来て、それを卓の上へ載せると、そのまゝ出て行つた。

「いま湯沸を持つて来ます。」とクラウゼが言つた。

「湯沸？……なあに、下らない……それよりこの火酒を飲まうぢやないか。」とアルプゾフは言ひながら、一杯つ

いで飲み干した。

クラウゼは自分の杯に手も觸れなかつた。アルプゾフはもう一杯々々と引つかけた。

「君、君は戀ひを信じるかね？」歪んだやうな薄笑ひを浮かべながら、不意に彼はかう聞いた。

「僕は一度も戀ひをした事がないから、何とも決定的な事は言へません。」と少尉補は答へた。

「戀ひをした事がない？ それは君の仕合はせといふもんだ！ ぢや、一般的に信じるかね？ 認めるかね？」

「無論、僕もさうした感情を認めない譯に行きません。」とクラウゼは言つた。「それはきつと非常に強烈な感情でせう！」ちよつと考へた後、分別くさい調子で、彼は言ひ足した。

「ところが君、僕は戀ひをしたよ……一杯やらうぢやないか、え。」

「やりませう……僕は知つてゐます……あなたは不幸な人ですよ。」とクラウゼは言つた。

アルプゾフはかた／＼の目を細めながら、ぢつと彼を見据ゑた。

「知つてる？……ぢや、いゝさ……しかし僕は、アルプ

ゾフは、不幸な人間なんかになる譯わけに行かん！　これはただ一時の愚かな迷ひだよ、クラウゼ……なに、すぐ濟んで了ふ……かうして一杯飲んだら、なほつて了ふさ！」

「どんな人間だつて、不幸になる可能はありますよ。」と少尉補は分別くさい調子で抗言した。「たとへあなたがアルブゾフであつても、大金持ちであつても、ほかの人間と同じやうに、苦しみはあり得るわけです。さうして、これは火酒ウイスキーを飲んだからつて、到底だめですよ。」

「君はすべての人が不幸だと言ふのかね？　しかしそれが本當だらうか？……果たして幸福な人間はゐないだらうか？……では、何もかも自然と手の中に入つて来るやうな、さういふ人間はどうだ？……才能も成功も與へられた上に……好いた女もちよつと口笛を鳴らせば、四つんばひに這つて来るやうな人間は……」

「それはまだ幸福といへませんな。」と少尉補は反對した。「僕の考へでは、才能は幸福よりも寧ろ苦痛ですし、成功は相對的なものです。また一人の女が全生活を充たす事も出来ません。」

「ところが、僕の生活はそれで充たされてゐるのだ。」  
「それはたゞさう思はれるだけです。なぜかと言へば、あ

なたは子供の時から甘あまやかされて、無爲の生活を送つて来たために、自分の欲望がすべて満足されるといふ事に、馴れて了つたのです。それだから、たま／＼自分の欲するものが興へられなかつたら、もう何もかもだめになつたやうな氣がして、幸福はすべてこれ一つのみ……その女ひとりのみに存するやうに感じられるのです。しかし、それは單にそれだけの事ですよ……もしその女があなたを戀ひたなら、その時はもうこの女も、それほど意義を持たなくなるばかりか、或ひはあなたの生活を妨げるかも知れないですよ。」

アルブゾフは黒い髪の毛を一たばたば額へ垂らしながら頭を下げて聞いてゐた。

「僕は勿論あなたのやうな戀ひをした事がないけれど、人生や愛についていろ／＼考へた擧げ句、かういふ結論に到着したのです……」

アルブゾフはとつぜん笑ひ出した。

「あゝ、君はどこまでも獨逸根性だなあ……規律一點ばりの獨逸根性だな……思索をしたり、結論に到着したり、加減乗除をしたりして、そしてどういふ答へが出て來たか？　だめだよ、君、この問題では結論に到着できないよ

……思索も出来なければ、加減乗除も出来ない……それどころか、自分の方が減算で撥ねのけられて了ふのだ……とき、君は戀ひが何か知つてるかね？」

「僕はもう言ひましたよ。」とクラウゼが言ひかけた。

「ちよつと待ち給へ！」彼の手を取つて、下の方へ引きながら、アルプゾフは遮つた。「僕が言つて聞かさう……戀ひとはね、君、人間がすつかり分別をなくして了つて、心が痛んで、こゝのところが燃える時なんだ……嫉妬をしたり、憎んだり、輕蔑したりしながら、その女なしには生きて行かれない心持ちなんだ……一たん戀ひをすると、その女を通して世の中を見るやうになるのだ。幾晩も幾晩も窓の下に立つたり、女の足を接吻したりして、何もかも赦し、何もかも耐へ忍ぶやうになる……それどころか、もう一そう苦しくなればいゝ、とさへ望むやうになるのだ!!……もし女が眉を蹙めて、優しくしてくれないと、幾晩も幾晩も泣き続けるし、もし別れの時に優しく接吻してくれると、歌つたり、笑つたりする……やけ酒を飲んだり、放埒を盡くしたり、淫賣どもを苦しめたりするかと思ふと、今度は顔を洗つて、綺麗に頭をかき付けて、さつぱりした服装をして、さもおとなしやかに女の所へやつて来て、まるで犬こ

ろのやうにその目色を窺ふのだ！ かと思ふと、喉首を掴まへて、危く絞め殺さないばかりの目に會はせたり……叩いたり、苦しめたりして置きながら、すぐその後では、いじらしさに涙を流して、自分の拵へた打ち身の痕を一つ一つ接吻するのだ……ところが、またその後では……」

「僕には分かりませんなあ……あなたは何を言つてるんです！……それはまるで狂氣の沙汰です！ 嫌厭の色を浮かべながら、クラウゼはかう言つた。

アルプゾフは一そう強く彼の手を握りしめた。

「あゝ、可哀さうな獨逸つばだなあ！ つまり狂氣の沙汰だからこそ、幸福なのだ！ もし本當にすつかり氣がちがつて了つたらなあ！ もし自分で自分をずた／＼に切り刻んで、女が手を叩いて笑つてくれたらなあ！」

「それがどうして幸福でせう？ 苦痛ぢやありませんか！」  
「ところで、一たい苦痛の中に快感がないだらうか？ 君はなんにも分らないのだ！……まあ、せい／＼思索をして、結論に到着するがいゝさ……どうせ分かりつこはないのだから！ ところで、君かういふ事が分かるかい——君が薄暗い片隅に立つてみると、女が布を頭から被つて、君の傍を亡り抜けながら、ほかの男の所へ行つてるのだ。君

が外に立つて、壁ごしに中を見てみると、女が入つて来て、もじ／＼と赤い顔をする……自分で自分が何しに來たのか、何のために自分が男に必要なのかといふ事を、よく心得てゐるのだ……すると、男はせか／＼と女の着物を引きむしつて、揉みくたにしてふ……君は今まで女の手よりほか見た事もないのに、その男に取つては、恥づかしげもない眞裸な姿が、女の眞相なのだ。何でもしたい放題の事が出来るのだ……君の神聖な女神を、まるで淫賣か何ぞのやうに、寢臺の上へ押し倒すではないか。しかも女は萬事意のままになつて、男が思ふ存分自分を慰みものにしてくれた、その幸福を感謝して……男の手を接吻してゐるのだ！それから、男は疲れて煙草を吸ひ始める……もうそれ以上女は必要がないんだよ……やがて外が明るくなると、女はまた君の傍を影のやうに迂り抜ける……髪はばらばらで、着物は皺だらけ、おまけに着方が曲がつてゐるし……全體に疲れて、へと／＼になつてゐるのだ……でも、君はやはり立つてゐる……ちつと立つてゐるのだ……さあ、飲み給へ、クラウゼー」とアルブゾフは叫んだ。

彼はまるで讒言でもいつてゐるやうだつた。ひよいひよい飛び上がるやうな、連絡のない言葉の意味を捕捉するの

は、たうてい不可能であつた。

「飲んでよいです。」とクラウゼー少尉補は言つた。「然し、あなたの話す事は實に恐ろしい。どうしてそんな心持ちを經驗する事が出来るか、僕はまるで合點が行きません。」

アルブゾフは嬉しさうに笑ひ出した。

「あゝ、合點が行かないかね？ 僕さへ合點が行かないのだ……何もかも分らないんだよ、わが敬愛なる獨逸つば先生……ところが、どうだい、僕はそれを經驗したよ……」

「一たい本當にあなたが……」

アルブゾフは重々しい、酔ひどれらしい目つきで彼を見つめた。

「僕がさ……」と言葉みじかに答へて、彼は叫んだ。「飲んでよ、君、どうだつていゝぢやないか……飲めよ！」

クラウゼは酌をした。そして二人ともくつと飲み干した。アルブゾフは片手で頭を支へたまゝ、考へ込んだ。ひよろ長いクラウゼは無言で坐りながら、注意ぶかく彼を眺めてゐた。

「さう、やつと我に返つたやうに、深く思ひ沈んだ調子で、アルブゾフは徐ろに言ひ出した。「これは數學ぢやないよ、クラウゼ……幸福も、苦痛も、人生全體も、數學



ぢやないから、人間の力で同一分母に通分する事は、とて  
もとても出来やしない……従つて、従つて……いや、ちよ  
つと待ち給へ……僕はどうやらすつかり酔つ拂つたやう  
だ……僕は三日間のみ續けてるんだからね……もつとも、  
まだく飲むよ……」

「構はないです。」とクラウゼは相槌を打つて、酌をした。

「聞き給へ、クラウゼ。」ゆつくりく句を切りながら、ア  
ルブゾフは言ひ出した。「もし僕が人を殺したら、どうだ  
らう？」

「それは人殺しですよ。」と少尉補は言つた。

アルブゾフは笑ひ出した。

「その通り！ 君は實に賢い獨逸人だ！……勿論、たゞ人  
殺しに過ぎないさ……それだけの事だ……時には飯も食は  
うし、時には便所にも行かうし、時には人も殺さうさ……  
それだけの話しぢやないか……苦しむことも、頭を悩ます  
こともいりやしない……人殺し、それつきりさね！……僕  
は一ど犬を殺した……拳銃で射つたんだが、その後ながい  
あひだ寢られないで、困つた事がある……少し忘れかけた  
かと思ふと、またふいと夜中に、犬が雪の上できりく舞  
ひをしたり、四つ足をひくくさせたりしたのを思ひ出す

のだ……しかし、その中に大丈夫わすれて了つて、何でも  
二度ばかりお嬢さん方を擱まへて、得意になつてその時の  
感覺を話した事さへある。おれは生き物を殺したが、平氣  
だ……何と豪い人間ではないか、といつたやうな自慢氣も  
あるのだ……獵に行つてもさうだね……まだ生きた鳥の首  
を握ちるのは、不快なもんだが、ぎゆつと握ちて了へば、  
後はすぐ忘れて了ふんだよ。こんな事はみんな何でもあり  
やしないよ、クラウゼ……殺したつて、別に何とも……と  
ころで、人間は犬より優つてるかね、クラウゼ？」

「分かりません……別にさうも思はれませんよ。」と少  
尉補は答へた。

「僕もさう思はないんだ……事によつたら、本當に殺すか  
も知れないよ。たゞ誰を殺したのか分らないんだ——  
誰にしよう、女にしようか男にしようか、それとも自分に  
しようか？……君は何と思ふ？」

「僕の考へでは、男を殺すのが、一ばん惻巧のやうですよ  
……」ちよつと考へた後、クラウゼはかう言つた。

「善哉！ 全く惻巧だよ！ 一ばん肝腎なのは、その惻巧  
だといふ點なのさ。だが、もしその男も愛してゐたら？」  
「その時は女……自分を片づけるんですね。」

「一體どつちなんだ？」とアルブゾフはもの狂ほしいほど、執拗な調子で追窮した。彼の目はどんより濁つてゐた。

「僕は自分の方がいゝと思ひますね。」

「なぜ？」

「なぜつて、もし女を殺したら、あなたは一生、懺悔のために苦しむでせうよ。」

「その通り……女が最後の瞬間に自分を眺めた目つきを、忘れる事なんか出来ないからなあ！ きつと小つぽけな弱々しいものに思はれるだらうが、おれはそいつを殺した！ といふ事になるんだからね。いつそ自分の方がいゝなあ、クラウゼ？」

「多分その方がいゝでせう。」

「さて、もし僕が自殺したら……最後の瞬間に、こんな考へが浮かんで来はしないだらうか——女はおれの墓を踏いで、あいつの所へやつて行くかも知れない……自分は土の中で腐つて行くのに、あいつは女を裸にするに相違ない……つまりあいつが落ちついて楽しみをするために、おれは自分から道を譲るやうなものだ、自分で自分を土の中へ埋めるやうなものだ……かう思つたら、僕は餓鬼道の苦しみで、墓土を嚙らなければならぬぢやないか、クラウゼ？」

「さあ、どうですかね。ちよつと考へた後かう言ひながら、クラウゼは肩をひく／＼動かした。

「どうですかねだつて？」とアルブゾフは考へ深さうに繰り返した。「これは君のやうな獨逸人にやとでも分らないよ、誰にも分らないよ……かういふ事は、そのまゝ信じるか信じないかの問題で、知る譯には行かないのだ……理性では分かつてるやうにも思はれるが、心の底ではやはり分らないのだ！ 實際、肉體のない魂とか何とかいふものが、眞つ裸で世の中をうろ／＼してゐるなどと考へるのは、ばか／＼しい話しぢやないか！ 全くばか／＼しい、これ以上ばか／＼しい事は考へ出せやしない。」ところが、このばか／＼しい事でさへ、正直なところを言ふと、やはり分らないんだからね！ ばか／＼してゐながら、それさへ分らないんだよ、クラウゼ！ そこが恐ろしいのだ……」

「さう、それは恐ろしいですね。」とクラウゼが言つた。

「この世の中に何も恐ろしい事はないさ、獨逸つぽ先生！ みんなつまらない事さ！ 駄目だよ、君、そのうちに棺の蓋をされて了ふんだからね……もう腐り出すやうになれば、恐ろしいも何もあつたもんかね。現に僕は、親父が死んだ時の事を覚えてるがね、棺の上に横になつて、眞面目

な鹿爪らしい顔をしてるのだ。そして、白い頭髻が上の方を向いてゐたつけ……僕は立つてそれを見ながら泣いてゐた……僕は親父が好きだつたからね……尼さんがひとり經を讀んでると、蠟燭がばち／＼音を立てるのだ……夜なんだ……ふと僕は考へたね——もし親父の鼻を引つ張つて見たらどうだらうつて……すると、僕はぞつとしたよ……壁の上からは古い聖像が見おろして、たゞ白目ばかりぎらぎら光つてるのだ……僕は何か足が萎えて、手が痺れたやうな氣持ちがした、何か恐ろしい事が始まりさうに思はれてならない……今にも自分の氣が狂つて、死人が經かたびらを着て起き上がりながら、呪ひを上げると、天が震へて、神殿の帷が颯と開きさうな氣がした……が、それでも手は前へ出たがるのだ……恐ろしくつて心臓は痺れたやうになり、冷たい汗が額に滲み出てゐる癖に……手は前へ伸びるぢやないか……引つ張らうかー いや、いけない……引つ張らうか……と思つてゐる中に、たうとう引つ張つて了つた……」

「それでどうでした？」好奇の色を浮かべながら、クラウゼ少尉補はかう聞いた。

「冷たい鼻だつたよ……」アルブーゾフはものうげに答へ

て、口を嚙んだ。

クラウゼもやはり黙り込んだ、と思ふと、突然ぶつと噴き出した。アルブーゾフはびつくりして 彼を見やつた。

「どうしたんだい？」

しかし、クラウゼは一そう烈しく笑ひ出した。彼の長い顔が一めん皺になつて、メフィストのやうな長い眉は間が迫り、口は耳の邊まで擴がつた。アルブーゾフはなぜか不快になつて來た。

「よせよ、」と彼は言つた。「よせつてば！」

けれどクラウゼは聞かなかつた。彼はいきなり座から跳り上がつて、前へ屈み込んだり蹲んだりしながら、部屋の中を歩き廻り始めた。そして體ぜんたいが笑ひに慄へるのであつた。

「君は一體どうしたんだ？」酔ひどれらしい笑ひを立てながら、アルブーゾフは叫んだ。

「あはは……あはは……」とクラウゼは際限なしに、ただかか笑ひ續けた。彼は顔を紫色にして、咳きをしたり、はなをかんだり、兩手を振つたりした。奇妙な恐怖がアルブーゾフを襲うた。不意に彼は、これは全然クラウゼでないやうな氣持ちがしたのである。

「え、やめろ！」少尉補の兩肩を掴みながら、彼はかう  
嘯鳴りつけた。「ぶち殺すぞ！」

クラウゼは急にばつたり笑ひやめて、顔を引き伸ばし、  
斜めになった眉を氣どつて吊り上げると、腰をおろしながら、  
落ちつき拂つてかう言つた。

「もつと飲みますかね？」

アルプーゾフは今度は好奇の目つきで彼を眺めた。

「ちよつ、いま／＼しい獨逸つげめ！」と彼は言つた。

沈黙が襲うた。ラムプは卓の上で鈍い光りを放ち、火酒  
でぐしよ／＼に濡れた布の上は、まるで安酒屋のやうに汚  
らしかつた。毛氈の上にかゝつた武器は、死んだやうな光  
りを放つてゐた。壁の外には敏感らしい夜がちつと立ち單  
めて、細い蒼ざめた月は優雅な悲哀を散らしながら、澄ん  
だ空にかゝつてゐた。

## 一六

翌朝はやく從卒がクラウゼを起こした。

アルプーゾフは、ゆうべ二人で飲んだ部屋の長椅子の上  
で、まだぐ／＼睡つてゐた。あと片づけの出来てゐない  
卓の上には、汚れた皿やコップや壺などが、ごちやごちや

並らんでゐる。部屋の中は息苦しくて、火酒や長靴や炭酸  
瓦斯の匂ひが、むん／＼してゐた。アルプーゾフは、服  
を着たまゝ、長椅子の上へ突つ伏して臥てゐたが、片々の  
手はまるで折れでもしたやうに、妙にだらりと床まで垂れ  
てゐた。鎧戸の隙間からは、金色をした日光が一筋ほそく  
さし込んで、埃が虹色の柱のやうに部屋の薄闇の中で、樂  
しげに慄へたり、舞つたりしてゐた。金色の縞が斜めに卓  
の上へ落ちて、毀れたコップの端には白い星が一つ、まぶ  
しいほどきら／＼と輝いてゐた。

クラウゼは客を起こさないやうに、そつと動き廻りなが  
ら、清らかな軍服を着、銀の吊り帶と刀をつけると、忽ち瀟  
洒たる美丈夫になり濟ました。少し立派すぎる程だつた。

そとは水々した淺黄空で、空氣は清らかに悦ばしく、太  
陽は輝き、物の響きはまるで朝露に洗はれたやうに、高々  
と聞こえるのであつた。

時刻はまだ早かつた。太陽は低く燦然と照らして、垣根  
や木立の下には、碧みがかつて濕氣を帯びた陰が横たは  
つてゐた。家々の鎧戸は殆どすべて閉ざされて、往來を歩い  
てゐるものは、壺や籠を持つて市場に行く、女房たちばか  
りだつた。雀はあんまり明るくて氣持ちがよいので、浮か

れて喧嘩でも始めたやうに、騒々しく轉り散らしてゐた。町の方からは、とき／＼淋しい鐘の響きが傳はつて來た。それは早朝の祈禱式を告げる知らせであつた。

クラウゼの栗毛の牡馬はつや／＼して、まるで鍛へた黄金のやうに太陽に輝いてゐた。後ろには傳令兵が隨いてゐたが、二人の方圖もなくひよろ長い影は、互に纏れ合つて、方圖もなく長い足を動かしながら、埃っぽい道を二人の後から走つて來た。何もかもそれ／＼獨自の朝の美に包まれて、目醒ましく、くつきりと、爽かに見えるのであつた。

教練は市外の埃っぽい街道の傍で行はれた。徒歩の兵卒がふたり低い柵に立つてゐると、突撃の時に斬られる藝人形が、まるで野菜畑の案山子のやうに、滑稽な悲痛の表情でぼろ／＼した両手を擴げながら、街道に沿うて並らんでゐた。教練はもう始まつて、兵士らは密集して圓を描きながら、馬を乗り廻してゐた。馬はゆらくと首を揺り、尾を振つてゐる。

蒼白い顔に見事な鬚を生じたトレニョーフ二等大尉は、クラウゼに挨拶した。

「いゝ天氣だね。」と言つて、沈んだ目つきで兵士らを眺めながら、彼は圓の眞ん中に馬を乗り入れた。

大きな栗毛の馬は、一生懸命にダンスをしながら、輕やかな歩みを自慢でもするやうに、大きな圓を描いて、ゆつくり／＼並らんで進んだ。その長い影は互に纏れ合つたり、ちら／＼閃いたりしながら、踏み荒らされた土の上を這ひ廻る。

「廻れ右前へおいつー」とトレニョーフは簡単に號令を掛けた。

すると突然すべての馬が、一齊にその場で優美なダンスをしながら、くるりと一廻轉して、依然として首や尾を振りながら、同じ圓に沿うて反對の方向へ歩き出した。

「廻れ右前へおいつー」

と、再び一つ處に立ち止まつてダンスをしたかと思ふと、再び圓は反對の方向へ規則たゞしく動き始める。どの馬もどの馬も、自分の前に立つてゐる馬の尻尾にしばらくつけられてゐるやうだつた。

太陽はだん／＼高くなつて、街道の端に立つてゐる柳の影は溶けて了つた。そこには赤い頭巾を被つた女達や、雀のやうな悪戯小僧の群れが立つてゐた。彼等は兵士を眺めて、笑ひ興じるのであつた。

やがて街道の眞ん中に柵が立てられて、兵士の長い横列

が遙か前方に作られた。クラウゼは馬の手綱を締めて、右翼に立つた。

速くの方からトレニョーフの號令が、きれ／＼に聞こえた。

すると、主人の意志を待たないで、クラウゼの馬は足を縮めて駈け出した。そして、彼と柵との間の距離は、自然となくなつて來た。足の下柵の長い横木がちらりと見えて、心臟がどき／＼としたかと思ふと、柵はもう後ろの方に取り残されてゐた。クラウゼは跑からまた並み足に直して、後へ引つ返し、トレニョーフと並らんで立ち止まつた。いま一方の端には頤鬚を生やした曹長が、肥えた老馬に跨がつて立ちながら、口髭の白い若い兵士らを眺めてゐた。

右翼の方から、口髭の白い若い兵士が列を離れた。馬が次第に烈しく頻繁に、足で砂を蹴つてゐるのが見分けられた。乾いた泥土の塊りが、クラウゼの方へ飛んで來た。白い襦袢と、前足を縮めて後足を延ばした栗色の馬が、ちらりと目を掠めた。續いて後から後からと、兵士等は列を離れて、緊張したいかつい顔をしながら疾走し、馬と共に輕と空中へ上がったと思ふと、柵を一躍して、遠く向かうの方で整理するのであつた。

金色に光る小さな馬に乗つた一人の兵士が、柵のすぐ傍まで飛んで行つたとき、馬はとつぜん滑稽な風つきで尻尾を巻いて、わきの方へ飛びのいた。

「もとへー」とトレニョーフは腹立たしげに叫んだ。

兵士は後へ引つ返した。柳の下でどつと笑聲が起つた。一つ處でちよつと足踏みして、兵士は再び足を進めた。

馬は次第に烈しく頻繁に後足で砂を蹴りながら、柵を目掛けて突進した。もう今度こそは風よりも軽く、向かう側へ飛び越すに相違ないと思はれたが、とつぜん足が狂つて纏れて、馬は尻尾を巻きながら、同じやうに滑稽な跑を踏んで、柵に沿うて駈け出した。柵はどつと倒れた。

兵士の憎えたやうな顔がちらと閃いた。彼はまたもや後へ引つ返した。柳の下の子供らは、歡喜の聲を上げて叫んだ。

「間抜け野郎！」トレニョーフは言葉みじかにかう言つて、ぎこちない目つきで曹長を睨みつけた。頤鬚の曹長は馬を進めて、兵士の方へ駈け出した。

クラウゼは兵士の蒼白い顔と、びり／＼慄へてゐる下脛を、遙かに見分ける事が出來た。と、馬は三度めに自信のなささうな、重々しい足どりで駈け出した。やがて兩耳を

びつたり伏せて、柵の傍へ駆け寄つた時、兵士は意地悪さうに兩手で手綱をしゃくつた。と、その瞬間、白っぽい馬の腹と、長く突き出した兵士の足が、ちらと閃めいたと思ふと、とつぜん何かしら重々しい醜い一團の塊りが、ぐらりと引くり返つて、埃の雲を上げながら、どうと地べたへ倒れるのが目に入つた。白い襦袢が空中にちら／＼して、遠く前方の街道づたひに重々しく駆け出した。

ひよろ長いクラウゼや、トレニョーフや、曹長や、大勢の兵士らは、その方をさして駆け出した。

兵士は半ば身を起こして、兩手を突きながら、奇妙に背を曲げたと思ふと、足をしゃくつてどうと横倒しになつた。馬は蹄で土を蹴つてゐたが、やがて犬のやうに後足で地びたに坐つて、半ば身を起こした。それからふるつと身慄ひすると、全身をわな／＼とわな／＼かせながら立ち上がった。何だか急に瘠せて汚らしく、まるで百姓馬のやうにみじめになつた。ちやうど射落とされた鳥のやうに、身を蹴いてゐた兵士は、抱き起こして連れて行かれた。

「だから、おれが貴様と言つたぢやないか」とトレニョーフは腹立たしげに叫んだ。

「大尉殿、何よりおもな原因は、」頤頰の曹長は憎えたやう

な顔つきで、何やら言ひ譯してゐた。「自分でも経験がありますが、飛びかゝつた時に……ちよつと指でも突かうものなら、大變なのであります……それにあの男は……」

クラウゼは柵に近寄つて、横木がすぐ落ちるやうになつてゐるかどうか、檢べて見ようと思つたが、それもやめて了つて、向かうの原の方へ歩き出した。

遠い地平線は青みを帯びて、今にも溶けさうに見え、空は青々としてゐたが、今すべてのはまるで残酷な反語か何ぞのやうに、美しい中にも、奇怪な毒々しい陰を藏してゐた。頭の皮でも剝がれたもののやうに眞赤になつて、目ばかり大きくきよんとしてゐる兵士の首、小さな皺の一つ／＼に溜まつてゐる血の流れ、全身うち碎かれた兵士が起き上がつては倒れる、その難かしさうな毀れたやうな動作——かういふものが太陽や、青空や、ぼつと溶けて行きさうな地平線などの間に、立ち塞がつてゐたのである。

## 一七

トレニョーフは埃だらけになつて、不機嫌な氣持ちで家へ歸つた。

門きはでひらりと馬からおりて、傳令兵に手綱を渡すと、

騎兵獨特の歪んだやうな拙い足どりで、庭を横切つて歩き出した。控へ室で従卒が刀を受け取りながら報告した。

「大尉殿、お客様がお待ち兼ねであります……」

「誰だ？」

「ア、ウ、グ、ス、ト、フ、二、等、大尉殿と、トーツキイ中尉殿であります。」

トレニョーフは顔を顰めた。彼は聯隊ちゆうの人々と同じやうに、この副官が大嫌ひだった。その美しい傲慢な顔や、生意氣らしく突き出た腮を、義理にも我慢する事が出来なかつた。副官とトレニョーフの妻は客間に坐つてゐた。次ぎの間でトレニョーフが顔を洗つてゐると、妻のわざとらしくしなを作つた笑ひ聲や、人をばかにしたやうに丁寧な、冷たい副官の聲が聞こえて來た。

「あゝ、やつと歸つて來た……實は君を待つてたんですよ……」彼を迎へるやうに席を立ちながら、副官はかう言つた。

「あなたけふ遅かつたんですね。」と妻はほゝ笑みながら、口を入れた。

「君は何か用事ですか、それとも、たゞ遊びに來たんですか？」妻には答へないで、トレニョーフはわざとらしく苦し

げな薄笑ひを浮かべながら、かう聞いた。

夫婦は今朝いさかひをしたのである。でトレニョーフは、妻がこんなに優しいのは他人の前だからで、客が歸つた後ではまた一層はか／＼しい、しかも堪らなく不愉快な諍ひの續きが始まるといふ事を、ちやんと承知してゐたのである。

「用事なのです。ほんのちよつと……」副官は軽く會釋しながら答へた。

トレニョーフは無言のまま手眞似をもつて、二人の客を書齋へ招じた。戸が閉まつた時、赤ら顔で肥つちよのトーツキイ中尉は、卓の傍に腰をおろして、いつも威張り返つた、ばか／＼しい表情には似ても似つかない、恐ろしい物々しい顔つきをしながら、薄い鬚を振り始めた。トレニョーフも同じく座に着いた。副官は部屋の中を隅から隅へと歩き出した。

「實はですな、ステュバン・トロフイーモギツチ、」まるで聯隊の命令でも朗讀するやうな、落ちつき拂つた、冷ややかな聲で彼は言ひ出した。「君はあの俱樂部で起こつた、アルプゾフ一件をご承知でせうね？」

「僕はあの場に居合はせただです。」とトレニョーフは何とも



つかぬ調子で言つて、浮かぬ顔つきで鬚を振り出した。

「それです、」と副官は語をついだ。「僕はあの翌日、ご承知の用件で旅行に出ましたが、あの事件をこのまゝ打つ棄つて置けない事は、君も充分了解して下さるだらうと思ひます。で、もちろん決闘の必要を認める以上、君も僕の介添人となる事を拒絶なさらないでせうね？」

トレニョーフは黙つてゐた。彼は規則たゞしく絨毯の上を歩む副官のエナメル靴を、憎々しげに眺めてゐた。そして、なぜアルブゾフが本當に鞭をもつて、この冷やゝかで高慢な面を撲りつけなかつたらう、と腹の中で考へた。

「こゝにをられるトーツキイ中尉も……僕に友人としての好意を示す事を、承知してくれました。」依然として落ちつき拂つた冷やゝかな調子で、副官は語り續けた。「どうかお願ひですから、君一つアルブゾフ氏の所へ出かけて、僕の挑戦を傳へてくれませんか。」

トレニョーフは無言のまゝ頭を下げた。

「僕の希望は、この決闘を飽くまで眞面目なものにしたいといふ事です……この意味に於いて出来るだけの盡力を願ひたいのです。」

トレニョーフは再び無言のまゝ、氣難かしさうに頷いた。

「全體として、僕はかう思ひます。」突然だし抜けにトーツキイ中尉が、物々しい聲でかう言つた。「もし闘ふなら、堂々と闘ふべしです。さうでなければ、なんの價値がありませんか……単に子供の悪戯です。」彼は全身かつと充血させながら、ちやうど極寒の時のやうな赤い顔の上に、白つぼく見える薄い鬚を振り始めた。副官は冷やゝかに慍慍な注意の表情を浮かべながら、彼の言葉聞き終つた。

「僕の意見もそれと全然おなじです。」と彼は言つた。

中尉は一そう顔を充血させながら、小さな目を嚴めしく動かした。トレニョーフは沈んだ顔つきで彼を尻目に掛けながら、

「ばか野郎！」と腹の中で罵つた。

副官はトレニョーフの前に立ち止まつて、きつちり締まつたズボンに包まれた、強健らしい足を踏みしめて、體を揺りながら言ひ出した。

「ステニバン・トロフィーモザチ、僕はご承知の通り、君に非常な尊敬を拂つてゐます。ですから、君のご意見を聞く事が出来れば、非常に愉快なんです……一たい僕が雪辱を要求するのは、正當でせうか？」

トレニョーフは陰鬱な目つきでちらと彼を見やると、その

まゝ急いで目を伏せて了つた。彼は「お前はやくざ者の卑劣漢で、雪辱など要求する権利は少しもない」と答へたかつた。副官の關係してゐる穢らはしく忌はしい、さまざまの残酷な戀愛事件が、彼の頭に浮かんだ。しかし、かつて一度も自分のしたい事をしなかつたトレニョーフは、今もやはり考へたやうにはしなかつた。自分の嫌ひな軍隊に勤務し、あきくくした妻と暮らし、同僚が兵士を撲る時に止めもせず、他人の事についても、腹で思つた事を少しも言はない彼は、常に直截な斷乎たる意力の不足に苦しんでゐた。で、今も自分の不誠實を惱ましいほど痛感しながら、彼はかう答へた。

「それは無論ですとも……そんな事など、今さら言ふ必要はないですよ。」

副官は新しい聯隊内の出來事を喋りながら、しばらく部屋の中を歩き廻つて、煙草を一本吸ひ終ると、帽子を取り上げた。トレニョーフは客を控へ室まで見送りに出た。そして、早く歸つてくれればいゝと、じり／＼するほど望んでゐる癖に、ぐづ／＼會話を引き延ばして、客を止めるのであつた。彼は妻と二人きりになるのが、恐ろしかつたのである。

「僕の隊では、けふ兵隊が一人馬に殺されましたよ。」と彼は言つた。

「さうですか？」副官は戸を開けながら、冷や／＼かにかう聞き返した。

「今夜、俱樂部で會ひませうね？」トレニョーフは妙な惱ましさを覺えながら、言葉をついだ。

「多分あふでせう。」と答へて、副官は後ろ手に戸を閉めた。

トレニョーフは書齋へ引つ返した。彼はどこかへ隠れた気がした。もうこれ以上一ことも、妻の毒舌を耐へ忍ぶ事が出來ないと、かう感じたのである。もう殆ど忘れて了つて思ひ出せないやうな、つまらない事がもとなつたこの譯ひは、お話しにならないほどばかげた、不必要なものに思はれた。憂愁の念が彼の全心を領し盡くして、戸の外で聞き馴れた柔かい足音が聞こえた時、トレニョーフの顔は烈しい苦痛と、憎惡の念に至んで、まるで別人のやうになつて了つた。

「スチョーバ……」戸口に姿を現しながら、妻はかう言つた。

彼女の聲は殆ど憐れつばいくらゐ、優しく詫びるやうに響いた。彼女はついちよつと前に顔を洗つたらしかつたが、

少し脹ればつたい疲れたやうな目には、まだ涙の痕が見えてゐた。あの諍ひから幾時間かたつた間に、彼女はもう心が落ちついて来て、彼と同じやうに、そのばかりしき愚かさを悟つたのである。夫が散々あびせ掛けた毒々しい不公平な言葉は忘れて了つて、彼女はたゞ自分が夫を侮辱した事だけ覚えてゐた。彼女はひたすら和解のみを願つてゐたので、祈るやうな素直な目つきで夫を見つめた。

トレニョーフは妻の目の表情を讀んだ。けれど、彼女の方からまづ自分の罪を認めためたために、彼は今まで自分が悪いと思つてゐた事も、妻に謝罪しても厭はないと覺悟してゐた事も、妻を可哀さうに感じてゐた事も、すつかり忘れて了つて、いよ／＼今度こそ、妻が自分に對して不公平な、間違つた態度を取つてゐるといふ事を、論證してやらなければならぬと考へた。

「何だね？」と彼はわざと冷ややかに訊ねた。

あらはな薔薇色の手をした肉つきのいゝ妻は、部屋の中へ入つて来た。彼女は無意識な女性の本能によつて、言葉よりも寧ろ自分の美貌に望みをかけながら、わざと顔に似合ふやうに髪を結び、白粉を刷いてゐるのであつた。かうして夫に好かれよう、自分の美で罪を贖はうといふ可憐な

望みは、トレニョーフの心を和らげる代りに、かへつて冷淡に残酷になる力を與へたのである。

「あゝ……今度はさうなのか？」といふ想念が、勝ち誇つたやうに彼の頭を掠めた。

「あんた怒つてるの？」両手を夫の肩へ載せて、濟まないやうにその目を覗き込みながら、妻はかう訊いた。

あらはな手の馴れきつた接觸感と、可愛い黒い目の接近で、トレニョーフの心は忽ちにして和らいだ。しかし、彼はたとへ一度だけでも意地を通して、妻を罰してやらなければならぬと思つたので、

「お前どう思ふね——一體わたしに怒る権利があるのだからか？」と皮肉に訊ねた。

その瞬間、いら立たしげな色が彼女の目に閃いた。彼がはつと我に返つて、新しい諍ひを引き起こすやうな自分の言葉を後悔する暇もない中に、彼女はちつと自分を押しこたへて、夫を黙らせようともするやうに、執拗に抱きしめるのであつた。

「もう澤山よ、澤山よ……」と彼女は言つた。しひて優しくしようとするその聲の際から、苦痛と焦燥の念が響いてゐた。

トレニョーフはぎよつとして、  
「あゝ、本當に澤山だね……」と言つた。

彼女は餘りに馴れ過ぎた柔かい接吻をもつて、彼の口を蔽うた。トレニョーフは微笑した。それは愛情と、倦怠と、不信の苦笑であつた。彼はこの和解も長くは續かないと知つてゐたので、かうして際限なく永久に繰り返される和解に、もうあき／＼して了つたのである。

「始めはさん／＼人の心持ちを掻き亂して、苦しめて置きながら、後で接吻するのだ……まるでユダの接吻だ！」と彼は考へた。

彼女は下から夫を見上げて、それから、自分の肥えた薔薇色をした腕の曲がり目にある、薄青い窪みを見やつた後、更に夫の目と唇を眺めた。

「何だね？」惱ましげにトレニョーフはかう聞いた。

「さあ、キスして頂戴よ。」氣紛れな調子で彼女は言葉じりを引いた。

トレニョーフはおとなしく、心持ちひやりとする柔かい皮膚に、唇を觸れた。

「もつとー」興奮したやうなコケティッシュな聲で、彼女は夫の耳のすぐ上で囁いた。その聲はかつて彼の耳に、音楽の

やうに響いたものであるが、今では極めて平凡な、人間の囁きに過ぎなかつた。彼は屈み込んで、もう一ど接吻した。

と、またしてもあの忌はしい感情が、頭を持ち上げて來た。それは彼の意志を束縛して、一生涯、懲役人のやうな苦しみを續けさせる感情であつた。手入れをして磨き上げた、女の皮膚の有する肉感的な冷やりとした感じと、その體から發散する匂ひとが、彼を興奮させたのである。けれど、それは冷たい馴れきつた興奮だつた。彼は思はずあらはなこの腕を、指でぎゆつと握りしめ、愛情と本能の昂進と、それに倦怠を同時に感じながら、目を塞いでその手を接吻し始めた。

「またか？」といふ想念が彼の頭腦に閃いた。

またしてもいつものやうに、自分は今かうして向かう何十年か、同じこの手を接吻し、幾千度となく繰り返されて、あらゆる微細な點まで厭になるほど分り切つた、習慣的の欲望に興奮する事だらう、といつた心持ちが浮かんて來るのであつた。どこか手も届かないほど遠いもののやうにほんやりと、よその見知らぬ若い神祕めかしい女の朦朧たる姿が、彼の閉ちた目の前を掠めて過ぎた。と、烈しいふさぎの蟲が心を締めつけるのであつた。

「あなた疲れたの、可哀さうに。」柔かい肥えた體を摺り寄せながら、彼女はかう言つた。「少し坐つて休みませう。」彼女は夫を長椅子の方へ引き寄せて、愛撫を願ふやうな、情眼に充ちた目で、その顔を眺めた。

彼女の言葉、彼女の身振りは、悉くトレニョーフに分かり切つてゐた。かうして、何がどんな風になるか、恐ろしいほどはつきり見え透いてゐるといふ事實の中に、ふさぎの蟲の原因が潜んでゐるのであつた。彼は殆ど嫌惡の念を抱きつゝ、妻の乞ひに従つた。

「あなた何だつてそんなにふさいでらつしやるの……わたしと一緒にゐるのがつまらない？」甘えるやうに身を摺り寄せつゝ、彼女はかう言つた。

「何のために？ たゞ頭が痛いだけなんだよ。」トレニョーフは目をぼく／＼させながら、嘘をついた。

「まあ、可哀さうな坊つちちゃん……酷く痛んで？」  
彼女は柔かい暖かな手を夫の額に當てて、自分の胸を彼の胸へびつたり押し當てた。

いつでも近づく事の出来る、この熱く柔かい女の體は、彼のすぐ傍にあつて、女らしい目は熱情と愛に充ちて、彼を見つめてゐる。彼は妻の手、それから肩、それから胸と、

かはる／＼接吻し始めた。

「何といつても、おれはこの女よりほか誰も愛しちやゐないんだ！」と彼は考へた。

かう思ふと、優しい愛情の涙が目がしらに滲み出た。なぜ自分らは愛してゐる辯に、喧嘩などするのだらう、お互に苦しめ合ふのだらう？ もしいま少し自由が許されて、妻のいま／＼しい嫉妬心が、自分の手足を縛りつけず、新しい生き／＼した感情の湧き出る可能を、一さい遮断してはなかつたら、自分はすぐに再び妻のもとへ歸つて來ようものを……

彼は自分の心中に、古い昔の情慾を呼び醒まして、ほかに女がある事を忘れてはうと努めながら、ゆつたりした上着の襟あきから、優しい波のやうに彼の顔を包む、ひんやりした柔かい體を接吻し始めた。彼女は接吻を求めるやうに胸をさし出し、身をすり寄せて夫に委せながら、ぢつと彼を抱きしめた。

トレニョーフは妻の體を柔かく肘椅子へおろした。その一瞬間、本當に昔の火のやうな熱情は死滅してゐない、あゝした争論や、新しい幸福に對する憧憬は、單に一時の迷ひとして忘れる事が出来るかも知れない、といつたやうな心

持ちがした。

やがて彼は起き上がった。そして満足感も消えて了ひ、またもや倦怠——といふより、寧ろ嫌悪の念が持ち上がつて来るのを感じながら、妻がは……切らせ、……：……：……ながら、……してゐるのを、なるべく見ないやうに努めた。

「あなたは今日なんて……」と彼女は囁いて、感謝と安心の接吻を與へるために、夫を引き寄せようとした。

しかしトレニョーフは煙草でも一本のんで、どこかへ行つて了ひたかつたのである。以前の憂愁が彼の心臓をしめつけた。

「いつも同じ事ばかりだ、いつも同じ事ばかりだ……」といふ想念が、彼の頭に閃いた。「しかも永久にさうなのだ！……」

「放してくれ。」我慢し切れないで、彼はかう言つた。「わたしは頭が痛いから、庭へ行つて散歩して来る……」

女の目は暗くなつて、唇の兩隅には残忍な、嫉妬ぶかい線が現れた。彼女に取つては、夫の心に秘密は存在しなかつた。どんなに微妙な束の間の感情でも、彼自身はつきり分らない中に、彼女はちゃんと見抜いて了ふのであつた。

いつも冷め切つた肉感が満足せられた時、決まつて、二人の間にはこの恐ろしい無意識の争ひが起ころるのであつた。「どこへなと好きな處へいらつしやい！」侮辱を感じて毒毒しくなつた彼女は、ぶつきら棒にかう言ひながら、立ち上がった。

トレニョーフはぎよつとした。

「ほら、もうこれだ……何をまたお前は怒つてるのだ？」もうどんな屈辱も厭はない、たゞ諍ひさへ起ころなければいゝといつたやうな氣持ちで、聲に無邪氣な驚きの表情を添へようと、一生懸命に空しい努力をしながら、彼はおつおつとかう言つた。「だつて、本當に頭が痛いんだから……」「えゝ／＼、さうでせうとも……わたし怒つてなんかおやしません。何だつてそんな事をお思ひになるの……さあ、いらつしやい……散歩していらつしやい。」

彼女の聲の中には、一生懸命に抑へつけられた憎悪の情が響いてゐた。彼女がうはべばかり穩かに、「いらつしやい」と快く承諾して、腹を立ててゐる事を否定したために、トレニョーフはすつかりしよげて了つた。何とも言へない恐ろしい痴話場は、いつでもこのそら／＼しく落ちついた聲と、目の中に浮かんだ容赦のない暗い憎悪の表情から始ま

るのを、彼は承知してゐたのである。これから續いて起らうとしてゐる事——この二三年、毎日のやうに起こつてゐる事が、彼の目の前に浮かんで來た。妻の涙と沈黙、彼の哀願、叫び聲、ヒステリイ、閉め切つた戸の前の哀願（彼はなぜかこの戸の傍を離れる氣力がなかつたのである）、それから憤怒の發作、戸の破壊、摺み合ひ……それからまた和睦……それからまた同じ事の反覆……彼はかういふ事をなくするためには、何を犠牲にしても厭はないと思つた。疲れ切つた魂は、ほんの一瞬間でも、安靜を求めるのであつた。

「まあ、お聞きよ、こんな事は實際はか／＼しいぢやないか！……ほら……また涙が……一體お前は何を泣いてるんだね！ 合點が行かない？……本當にこれは何といふ事だらう！」と彼は叫んだ。

妻は返事もせず、部屋を出て行かうとした。

「まあ、お聞きよ……カーチャー！」

トレニョーフは、自分の心持ちを隠さうとしなかつたのを、痛切に自責しながら、彼女の後を追つた。彼はわれとわが手を折りたいやうな、髪の毛を掻きむしりたいやうな、力任せに妻を揉りつけたいやうな、一種異様な心持ちを覺

えた。中でも、最後の欲望が一ばん恐ろしい、耐へ難い力をもつて彼に迫つた。あゝ、幾度この欲望が破裂した事だらう！そして、後で彼女に對する哀憐と、自分自身に對する侮蔑の念が、どんなに彼を苦しめた事だらう！

「あゝ、情ない……一體いつこれがお了ひになるのだらう！」もう自分の一語々々を恐れながら、自分でも何を言つてゐるか知らないで、彼はかう叫んだ。

まるで人のもののやうに目を泣き脹らした、冷酷で残忍な妻の顔が、彼の方へ振り向いた。

「ご安心なさい、すぐですよ！」恐ろしい憎惡を響かせながら、彼女はかう言つた。

トレニョーフの胸の中で、何やら引き千切れたやうな氣がした。彼はこの脅し文句をいつも恐れてゐた。そんな事はてんから本當にしてゐなかつたけれど、彼はどうしてもそれを我慢できなかつたのである。もう一瞬間このまゝで過ぎたら、確かに妻を揉りつけるに相違ないと感じたので、彼は急にくるりと踵を轉じて、われとわが髪の毛を引き揉りながら、ふいと部屋を駈け出してつた。

庭の中は明るくて熱かつた。木の上では李の實が紫色に熟し、肉感的な心持ちでもものうげに、日光に甘えてゐるや

うに思はれた。静かな生活は、高く延びた草の中にも流れ  
てゐた。こはいごつ／＼した、侍従官の制服のやうな翼を  
した一匹の大きな甲蟲が、重々しく體を揺りながら、細い  
草の莖を傳つて上へ昇つてゐたが、絶えず足を迂らせて、  
下へ落ちるのであつた。甲蟲は、自分の遠征が思ひがけな  
い結果に終つたので、暫くは呆氣に取られたやうにぢつと  
臥てゐたが、やがて、何か怪我はなかつたかと試すやうに、  
そろ／＼と用心ぶかく動いて見た後、今度は思ひ切つて制  
服の裾を擡げ、またもや奇妙に執拗な努力を續けながら、  
辛抱つよく昇り出した。

トレニョーフはベンチに腰かけて、ぢつと甲蟲を眺めてゐ  
たが、その頭の中を、まるで烟のやうにちぎれ／＼な、黒  
い想念が掠めて通るのであつた。

幾度彼は自分自身に向かつて、今度こそは最後まで男ら  
しく毅然として、冷靜な態度で押し通さうと誓つたか分  
らない。自由な身になつた時の新しい生活が、漠然として  
はゐるけれど、悦ばしく眼前に描き出されるのであつた。  
彼の空想には、亞麻色の髪をしたのや、黒い毛をしたのや、  
色々な若い優しい女の姿が浮かんで來た。彼はかうした女  
達の傍へ、蜜蜂が花の方へ慕ひ寄るやうに、かる／＼と悦

ばしげに近づいて、何の恐怖もなしに歡樂の蜜を吸つた後、  
野の風のごとく自由に、先へ先へと飛んで行くのだ。

世の中は無限に廣く、その中の歡樂は青海のやうに無盡  
藏である。トレニョーフは氣ちがひめいた感激と熱情をもつ  
て、この自由の境遇を空想した。が、それは終身懲役囚の空  
想と同じく、何の甲斐もない事であつた。この自由は今ま  
で幾度彼の目の前に近づいたか分からない。恐ろしい無意  
味な舞臺面が演出されて、愛し愛されてゐる二人の人間が、  
互に出来るだけ餘計相手を侮辱しよう、憎悪の念を呼び起  
こさう、耐へ難い苦痛を加へようと努力した後で、もう一  
こと最後の言葉を發したら、それこそ共同の生活は不可能  
になつて、二人は別れるよりほか仕方がない、といふ事が  
明白に感じられた——さういふ事がもう幾度あつたか知れ  
ない。二人がめい／＼自分の勝手な方へ行つて、人生の中  
から充分に幸福を掴み出せばいいのだ。しかし、この最後の  
の一言は決して發せられない。もう離婚が目前の事實とな  
つて、鞆や箆の引き出しなどの取り散らされた部屋の中  
には、もう終りを告げた生活の空虚さが、うそ寒く感じられ  
るやうになつた時、あのいま／＼しくしかも懐かしい愛情  
が、突然ふたゝび燃けつくやうな焰となつて、燃え上がるの



であつた。二人はもう縁のない他人なのだ、悲喜哀樂を共にして来た十年間の生活は、單に要のない追憶に過ぎなくなるのだ、明日からは互に遠く離れて暮らして、互に相手の生活に何の交渉もなくなつて了ふ——かう考へると堪らなかつた。哀憐の情が胸をさいいんで、最後の「ご機嫌よう」を言ふと同時に、涙と、幸福の希望と、赦罪の哀願が始まつて、やがて接吻となり、遂に和解が成立して、二人の體は嵐のやうな、頭を昏迷さすやうな情慾の發作に、落け合ふのであつた。體と體とは極めて微妙な、無制限な愛撫の中に纏れ合つて、涙で濡れた唇は火のやうに感じられた。續いて優しい、戀ひ人同志のやうな心持ちが湧き起ころるのであつた。

「何だつてわたし達は喧嘩なぞするのでせう？」優しく陳へる柔かい體を摺り寄せながら、彼女はかう言つた。

トレニョーフは彼女を宥めて、これは一時の狂的な發作に過ぎないと言つたが、自分も今は何だかそれが本當のやうに思はれた。もう今度こそ一切が終りを告げて、愛と情に充ちた新生活が、明るく悦ばしく營まれさうな氣がするのであつた。かうして幾日か(時とするか幾週間か)、まるで初戀ひの日のやうに過ぎて行つた。十年の夫婦生活は單に

一場の夢で、彼女は依然として、かの若い戀ひせる少女なのだ、といふやうに感じられた。あゝ、この少女のために、自分はどのくらゐ苦しんだり、肉親の人々と争つたり、空想したり、泣いたりした事だらう！

太陽は彼らの家を明るく悦ばしげに照らして、子供たちは楽しさうな叫び聲を上げながら、部屋々々をかけ廻つてゐる。これこそ幸福である。人々が絶えず語つたり、空想したりしてゐる、永遠な理想的戀愛の齋らす眞の幸福である。

やがて飽滿の感じが襲つて来て、まるで人生を斬り傷つける刃物のやうに、微妙で鋭利な以前の倦怠感が、蛇のやうに鎌首を持ちあげ始めた。

すると、彼は分からなくなつて来た。

「一體おれは妻を愛してゐるのぢやないか……愛してゐるのだ！」トレニョーフは兩手で頭を掴みながら考へた。「ほかのどんな女だつて、あれの代りにはならないぢやないか……おれはどんな事があつたつて、あれを忘れる事は出来ないのだ……あれがほかの男のものになるなんて事を、果たして想像が出来るだらうか！」

彼はこれを想像に描いて見ようと努めた。小さな黒子の

一つ／＼までが、自分に取つて愛らしく思はれる、久しいあひだ馴れ親しんだ華奢な體が、ほかの男に抱擁されてゐる——かう考へただけで、かつと血が頭へのぼつて來て、胸が息苦しくなるのであつた。彼はわざと自分で自分を責め苛むやうに、この悪夢のやうな幻像を、思ひ切つて微細な、露骨な點まで想像して見ようと努力したが、しかしそれは無駄であつた——それほど恐ろしかつたのである。

「それでは、一體どうしたと言ふのだ？……單に安價な享樂が必要なのだらうか？ 氣を變へるために新しい女の肉體がほしいのだらうか？ そんな物に何の必要がある！……そんな女なぞは永久に呪はれるがいゝ！……」

かう考へて見ると、結局、彼ら二人の愛は最も眞正な愛で、ほかの愛などは存在し得ない、といふ事になるのであつた。妻は彼に幸福を與へなければならぬ筈だが、その幸福が得られない所を見ると、つまり一時ちよつとほかの肉體が必要なので、またその後で妻の所へ歸つて來ればいゝのだ。しかしそれは不可能だつた。もし彼にほかの肉體が必要なら、妻も同様に一時的變化を要求する權利がある。従つて、自分もちよつとわきへ行つて氣を紛らし、妻にも一時戀ひ人を拵へる事を許せばいゝ譯である。が、それは

想像さへ出來ない恐ろしい事だ。で、トレニョーフは悄然として、たうとう自分を犠牲にしようと思ひし、ほかの女の事は忘れて、たゞ妻のみを見ようと努めた。

けれど、それは一週間か二週間くらゐ續くけれど、また思ひ掛けなく召し使ひや、子供らや、家の壁に對してさへ恥づかしくなるやうな、一そう恐ろしく醜い舞臺面が演ぜられて、二人の者は互に相手の讓歩を非難しながら、前には誰が先に謝罪したか、といふやうな事を詮索して、互に相手の意氣地なさを嘲るのであつた。

かうして、何かしら明るい幸福の憧憬に充ちた、日が去り年が移るのであつた。それは決して實現される事はないけれど、實現の可能だけ藏してゐる幸福であつた。

かうして聯隊の同僚も、彼の大きな聲や殘忍な目つきで、子供のやうに脅しつけられてゐる兵士らも、この見事な鬚を生やした斷乎たる美丈夫が、それほど不幸な憐れむべき境遇にゐるやうとは、夢にも想像しなかつたのである。

「あゝ、何といふ事だ、何といふ事だ！……」のろ／＼と這ふ甲蟲を注意ぶかく觀察しながら、トレニョーフは鬚を振り振り振り振り考へた。

この甲蟲が高い所まで這ひ上がつて、更に埃の中へ落ちるのを眺めるのが、むづ／＼するほど気持ちが悪かつた。この気持ちは、悪性の傷を掻き捲る時の快感に似通つてゐた。

## 一八

チージュは自分の部屋で、頻りに巻き煙草を填めてゐた。日はもう沈みかゝつて、庭の向かうでは、夜を迎へるやうに落ちつき始めた埃が、きら／＼と金色に輝いてゐた。

窓の外には涼しい夜が軽々と、悦ばしげに降りて來た。庭の木立ちの下はもう緑が黒ずんで、しとどに露を浴びてゐたが、高い梢のあたりには、透명한明るい日光が飛んで來て、木々の上枝はその中にちつと睡つてゐた。

チージュは窓の外を見てゐなかつた。彼は窓際に立つて、巻き煙草をつめる道具を胸へ押し當てながら、太い紙管を一本々々と卓の上へ突き出してゐた。紙管の中には匂ひの高い、もく／＼した煙草が一杯つまつてゐた。

チージュの居間は窓の一つしかない、白壁に紙も張つてない、小さな部屋だつた。古新聞で蔽はれた卓や、椅子の上ばかりでなく、寢臺の上にさへも、本や、雑誌や、色樣々のパンフレットが、ごろ／＼してゐた。それが部屋ぜんた

いに、主人のチージュと同じやうな、妙にばさ／＼取り亂した趣を興へてゐるのであつた。彼はちよ／＼動く鋭い顔をして、動作は神經的に意地悪らしく、額には髪の毛が腹立たしげに亂れかゝつてゐた。

卓の横には、ひよる長い騎兵少尉補のクラウゼが立つてゐた。そして、例の斜めな眉を吊り上げながら、敏捷なチージュの指をちつと觀察してゐた。

「僕そんな事は聞くのも気持ちが悪い。」とチージュは憤慨に耐へないやうな鋭い聲で言つた。「そんな泣きごとはとても理解できない！ また理解したくもない！……君が人生の無意義に就いて、どんな理論を並らべ立てようと勝手だが、それに對して僕はかう言ひませう——それはあなた自身の意氣地なさを證明するのみです、それだけの事です……本當にばか／＼しい！……君は生活が色女かなんぞで、迷つたり、失望したりする事が、出來ると思つてゐるんですか……冗談ぢやない！……第一、生活は人間に何も約束なぞしなかつたぢやありませんか……生活は何とでも人間のお氣に召したやうに、一身の始末をつける事を委してくれたのです……だから、人生を仕事場にする事も出來れば、神殿にする事も出來、倦怠に苦しむ令嬢の化粧室にす

る事も出来る譯です……本當に驚いて了ふ！」

「君は人生をそんなに無人格なものだと思ひますか？」メフィストのやうな眉を動かしながら、グラウゼはかう聞いた。

頭をくしゃくにしたミーシユカは、何かのパンフレットを敷いたまゝ、寢臺の上に臥そべつてゐたが、このとき半ば起き上がつて、たつた今チージュの器械から落ちたばかりの巻き煙草を取り、先の方に覗いてゐる煙草を千切つて、火をつけると、また両手を頭の下に支ひながら、ごろりと横になつた。

チージュはこの譯の分からない行爲に、氣のつかないやうな振りをしてゐた。實際、指で煙草を千切るよりも、ちやんと先を切つた煙草を取つた方が、ずつと便利だからである。

「無人格ぢやありません……自然は截然と浮き彫りされた人格を持つてゐます。が、人間はこの自然との戦ひに於いて、戦闘の方法を選ぶ自由を有してゐます。つまり、この選擇が我々の謂はゆる人生を創造するのです。だから、もし自分の生活が苦しいか、または不満足であるならば、他の戦闘方法を捜せばいいのです……もし幸ひにして發見され

たら、勿論、満足感が續いて起こつて、意義なり何なり、好きなものが現れて来るに相違ないです……たゞ戦ひかつ探求すべきで、決して泣きごとを並らべるもんぢやありませんー」

「では、一體どうすればいいんだね、それにしても？」とミーシユカが無關心な調子で訊ねた。

「どうすればとは何の事だい？……どうする事もいりやしない！」ミーシユカが突き崩した巻き煙草の山を、器械的に直しながら、チージュは毒々しい皮肉な調子で叫んだ。「理智を有する人間は、自分で自分のなすべき事が分かつてゐる筈だ……たとへ分らないにしても、他人に聞く事はいりやしない……ばか／＼しい、世の中は慈惠院ぢやないからね！……誰がそんな奴の事など知るものか……周りはどこを見ても戦闘で、國は自由を保護し、藝術は新しい道を求め、科學は手を休める暇もなく働いてゐる……もう今にも、全人類が空中へ昇つて行きさうになつて、生活の組織が全然一變しようとしてゐるのに……君たちは悠々閑々と寢そべりながら、どうしたらいいかなどと聞いてゐる……そして、將棋なんか弄んでゐるのだ、ばか／＼しい……」

ミーシユカは臆病さうに目をぼちりとさせて、自分の煙草

の烟を一心に見つめてゐるやうな振りをした。

「或ひは君のお説どほりかも知れません……いづれにしても、幸福は事實上、自然との争鬪における方法の選擇だといふのは、しごく面白い理論です。」とクラウゼが勿體らしく言ひ出した。「しかし、我々は他人に對して、是非ともこの方法を探求しなければならぬと、義務のやうに強ひる權利があるでせうか?……」

彼は高く肩を吊り上げて、詰問するやうな目つきでチージュを眺めた。

チージュは腹立たしげに新しい巻き煙草を抛り出した。

「もし假りに、」相手の答へを待たずに、クラウゼは語をついだ。「僕が全然なんらの戦ひをも望まないとしたら——いや、それどころか、幸福を求める事を望まないで、寧ろ全然それを拒むとしたらどうでせう……僕はそのとき誰かに對して罪人となるでせうか……」

「罪人ぢやなくてたゞでくの坊ですよ!」とチージュは叫んだ。「そんな事が言へるのは、死んだやうな、頭の調子の狂つた人間だけです……人類が強い幸福なものにならうとやるまいと、そんな事には一切お構ひなく、たゞ自分の腹ばかりが大切な人間だけです……」

「もし假りに、そんな事は僕に何のかゝはりもないとしたら?」クラウゼ少尉補は落ちつき拂つて、かう口を入れた。

チージュはちよつと間誤ついた。人間は何か信じなければならぬ、何かに向かつて努力しなければならぬと、飽くまで信じ切つて疑はなかつたので、これらの言葉を何の氣もなく、單に罵詈の言として使用してゐたのである。「何ものをも信じない人間」とか、「自分の腹の事ばかり考へてゐる人間」とかいふのは、彼に取つて卑劣漢とまで行かないにしても、白痴といふのに匹敵するくらゐの力があつた。で、この非難はどんな人間でも、何とか辯解しようと努めるべき筈だ、とこんな風に思はれたのである。

「第一、僕はそんな事を本當にしないし……第二に、もし本當とすれば……君はたゞもう……病的な人間です。」

「それはどうだつていゝです。」クラウゼ少尉補は、威嚴を帯びた調子で言ひ返した。「さう呼ばれても構ひません。」

「死人ですよ!」

「いや、僕は生きた人間です……」同じく威嚴を帯びた調子で、クラウゼはまた言葉を返した。

「さう……われ呼吸す……即ちわれ存在す!」卓の上へ新しい巻き煙草を抛り出しながら、チージュは冷笑した。「し

かし存在するといふ事は、生くといふ意味にはなりませんよ……もし君が自ら誣ひるのでないとすれば、君の内部には時代から時代へと相ついで傳はり、生活の源泉となつたところの、生きた流れが涸れて了つたのです……君は自分で呼吸したり、物を言つたり、歩いたり、考へたりする事が出来るけれど、もう君は生命を抱いてゐるのではなく、死を持つてゐるです……幾百萬の人間を通して滲み出た生の流れが、君の内部で干上がつて、終りを告げたのです……とここで、終りといふ事は腐敗の始めだから、これはつまり、生きた人間の中に腐敗しかゝつた死骸が交じる事です……クラウゼ君、失敬な言ひ方ですが、人類は自己の利害を尊重するために、さういふ人間を撲滅しなければなりません！」

「それは人類の権利です。」ひよろ長いクラウゼは肩を竦めた。

「どうも、君それはあんまりだよ！」ミーシュカは取りなすやうに口を入れた。

「何もあんまりな事はありやしない！」チージュは斷乎として、熱を帯びた調子で食つてかゝつた。「人類は非常な努力を費し、無数の犠牲を拂ひ、想像する事も出来ないほどの努

力を傾注して、偉大な建築物の基礎を据ゑたのです……人類は我々を血潮の波に乗せて、こゝまで運んで来て、その偉大なる事業をそつくり我々に手渡ししました……それは我々がこの貴重な相續物を、感謝の念をもつて受納し、更にそれを先へ先へと押し進めて行くだらうと、望みを囁すればこそです。それなのに……まあ、どうでせう……何かしら人生に失望した人間どもが、かへつて自分の損だといふことも知らないで、泣きごとを並らべ始めるぢやありませんか——自分はなんにもいらない、何もかもノンセンスだ、自己を犠牲に供した偉大なる人達も、要するに癡癡白痴に過ぎない、などと言ふのです……白痴！」チージュはこの暴論を嘲るやうに笑ひ出したが、その笑ひ聲は餘り愉快さうでなかつた。

なぜこの憤懣にたへぬやうな、皮肉な、自信に充ちた笑ひ聲の中に、惱ましがねな調子が響いたか、彼自身と雖も、それを説明する事は出来なかつたに相違ない。しかし、それは「もし萬一それが本當だつたら——癡癡白痴だつたらどうしよう！」といふやうな想念が、どこか意識の底の方を、殆ど無意識に掠めたからである。

「僕はそんな事を言やしません。」とクラウゼは注意した。

「彼等は自分の見地から見て正當だし、僕はまた自分の見地から……」

「もしさうとすれば、」相手の言葉を耳にも入れずに、チージューはかう言葉を續けた。「ほかの者におせつかいなどしないで、勝手に一人で干乾しになつたらいいのだ……つまり、かうすればいいのです——自分は何ものをも信じない、人類も必要がない、心の中は空虚で人生は面白くない、さういふ事なら、どうかご遠慮なく、額へ彈丸をぶち込んで、どこなと勝手な處へ行くがいゝ！ 少くとも潔白なやり方です……空氣を汚さないだけでもね！」

「僕の思想も丁度その通りでないと、誰が言ひました？」眉をびくりと動かして、クラウゼは言葉みじかに應じた。

チージューは思はず彼を見やつた。が、眉の吊り上がつたその長い顔は、いつもの通り、落ちつき拂つた威嚴に充ちてゐた。惡寒が思はず小柄な大學生の背筋を走つた。けれど、これが單に警句や、論議の武器として發せられた言葉でなく、もつと深い意味を持つてゐるとは、眞から信ずる事が出来なかつた。

ミーシユカは首を振り向けて、同じやうに少尉補を見やつた。

「ぢや、なんですか、君は自殺でもしようと思つてゐるんですか？」チージューは作り笑ひをしながら、かう聞いた。

「いや、事によつたら……この獨逸つぼめ、何をし出すか分からないぞ！」彼はふとかう思つた。

「さうかも知れませんが。」二そ言葉みじかにクラウゼは答へた。そして彼の顔は、まるで釘でも懸けたやうに、閉ぢ籠もつたやうな冷たい表情になつた。

チージューは再び間違つたが、負けるのが厭なので、最後まで論理的に押し通さうと思つて、かう言つた。

「ぢや、仕方がない……さうすれば、君は自分自身の見地から見ても正しい譯です……」と言つて了つてから、自分で自分の言葉にはつとした。

「もしひよつと？」「またもやかういふ想念が腦を掠めたが、今度も彼は本當にしなかつた。

「君はさう思ひますか？」クラウゼは眞面目に訊ねた。

チージューは腹を立てて了つた。なぜといつて、それは最後の一言を絞り取らうとするものやうに思はれたからである。何だかクラウゼは壁際へ押しつけられたやうな氣がした。

「まあ、さう……思ひますね！」彼はやつとの事で、しか

し壽々しげにかう答へた。

クラウゼ少尉補はちつと執拗に、試すやうに彼の目を見つめながら、暫く黙つてゐた。チージュは思はず顔を反けて、もうちやんと一つ器械に銃めてあるのに、紙管を箱から取り出し始めた。

「さう……」奇妙な表情でかう言ふと、クラウゼは立ち上がつて、自分の小さな騎兵帽を取つた。

「左様なら。」

「まあ、お待ちなさい、君どこへ行くんです？」

「僕はちよつと一人にならなきやならないんです。」クラウゼ少尉補は冷ややかに言葉を返して、戸口の方へ歩いて行つた。

「まあ、ちよつと。」無理に笑ひながら、チージュは叫んだ。

「君はもしかしたら……」

彼は「本當に自殺する氣ぢやないですか？」と言はうと思つたのだが、それは餘りに唐突で、奇怪で、ばか／＼しく思はれたので、言葉が喉に引つか／＼つて了つた。

「待ち給へ、クラウゼ君、それは……」

しかしクラウゼは耳を假さないで、ばたんと戸を閉めて了つた。

「えゝ、あんな畜生、いま／＼しい奴だ！」小柄な大學生は途方に暮れて、氣でも狂つたやうに呶鳴つた。「まるで氣ちがひだ！」

長く横になつてゐたために、頭をくしや／＼にしたミーシユカが、起き上がつて、兩手を寢臺に突きながら坐り直した。

「君、あんな事を言はなきやよかつたのに。」と彼は口を出した。

「何を言つたのだ！」

「だつて、あの男はしじゆう自殺の事ばかり、口癖のやうに言つてるのに、君はまるでその背中を突くやうな事を言ふんだものね。」

チージュはもうすつかり腹を立てて了つた。

「勝手にどうなとするがいゝゝ……それに僕は……まあ、あんな奴なんかどうなつたつて構ふもんか……それがちやうど似合つてらあ。しかしね、死ぬ死ぬと言ふやつに限つて、決して死にやしないよ……それは事實だ……それより、散歩にでも行かうぢやないか。」

「ぢや、行かうかな。」氣のない調子でミーシユカは同意した。



彼は寢ようと、散歩に行かうと、何もしないでゐようと、全然おなじ事らしかった。

## 一九

大地は柔かい青味を帯びた夕べの悲哀に包まれて、もの思ひに沈んだ少女のやうに美しく謎めて見えた。その上には、澄み切つた大きな星が明るく輝いて、空は殊に深く廣々してゐるやうに思はれた。

チージュとミーシユカはぶら／＼と當てもなく、がらんとした並木街を歩いた。

チージュは退屈だつた。ミーシユカは言葉もなく傍を歩いてゐるので、一たい何を考へてゐるのやら、譯が分からなかつた。小さな町は静まり果てて、暗い窓をした家々は、盲人のやうに兩側を這ひ、空は遠く冷たくよそ／＼しかつた。輝かしい星は、不可解な永久のさざめごとを續けながら、靜かに動いて、青みを帯びた細い魔法の矢が、そこから黒い大地まで延びてゐた。あたりはがらんとして靜かだつた。憂愁は石の下の小蛇のやうに、小柄な大學生の心の中で蠢いてゐた。眼前の闇の中には、クラウゼ少尉補の長い白い顔が、依然として立ち塞がつて、ゆつくりした氣取

つた聲が聞こえるやうな氣がした。

「譯の分からん奴だ。」不思議な惱ましさを感しながら、チージュは苛々した氣持ちでかう考へた。「こんな忌々しい穴のやうな町に、もう一二年も住んでゐたら、おれも釘に繩でも懸けて、いゝ死にざまを曝すかも知れないぞ。」

いつもの癖で、チージュはこの田舎町を罵倒して、かねがね空想してゐる喧囂に充ちた大都會の生活を、しひて心の中に呼び醒まさうとしたが、何だかそれがあき／＼したやうな、ばか／＼しいやうな、まるで時と場所がらに似合はないやうな氣がした。靜かな青い夜は、いつももなく不思議な憂愁を吹き送つて、何かしら漠然とした、悲しい想念を呼び醒ますのであつた。それに、眉を冷やゝかにきつと吊り上げた長い白い顔が、一種異様ないら立たしい挑むやうな力をもつて、絶えず彼の眼前に立ち塞がつてゐた。

「君は何を考へてるんだね、ミーシユカ？」チージュは惱ましげにかう聞いた。

「うん？」と應じたミーシユカの聲は、どこか遠い所で響いたやうに聞こえた。

「何を考へて、そんなに黙つてるんだね？」と小柄な大學生は繰り返した。

「いや、別に……何といつたらいいか……将棋の事なんだよ……」とミーシユカは器械的に答へた。

「ちよつ！」チージュは腹立たしげに唾を吐く眞似をして、侮辱された雀のやうに面を脹らした。「ミーシユカ、そのうちに君はあのばか／＼しい将棋で、氣がふれるに相違ないよ！」

「さうかも知れん。」ミーシユカは平然として同意した。

彼等は再び無言のまま歩き出した。チージュは星を眺めながら、人生が説明し難い謎に充ちてゐる事を考へた。暗い無際の際に高く明るく點綴された、永遠の表象たるこれらの神祕な天體によつて、世界創造の偉大な、神々しい、壯麗な畫圖が、彼の眼前に掲げられてゐるのだ。ミーシユカはまた將棋の事を考へてゐた。捕捉することの出来ないほど微妙な、透き通つたやうな網目が、彼の目前に編み出されたのである。彼は同じやうに星を眺めながら、もしあの大きな青い星で、大熊星座の一番はじめの小さな星に、王手と行つたらどうだらうと、機械的に考へてゐた。この偉大な星座の天秤形が、奇妙に將棋の駒の道を聯想さすのであつた。

二人はとき／＼暗闇でぶつ突かり合ひながら、並らんで

歩いてゐた。が、めい／＼自分の事を考へてゐたので、もしその思想の歩みと同じ距離に、二人を立たせて見たら、チージュとミーシユカとは、丁度あの遠い孤獨な星と同じくらゐ、互に懸け離れてゐたかも知れない。

「今晚は、キリール・ドミートリッチ！」と誰やら小柄な大學生に聲をかけた。

チージュは頭を擧げて見ると、ミハイロフが誰か白い着物を着た女とつれ立つてゐた。

「今晚は。」と彼は澁い聲で答へた。

やがて娘の方も見わけがついた——それは自分の教へ子の姉であつた。彼は尋々しい目で娘を見送りながら、氣むづかしげに、

「あの女までが同じやうに……」と考へた。

彼は自分の思想に返らうとした。ついたつた今まで、何か非常に重大な、面白い事を考へてゐたやうな氣がしたのだ。けれどそれが何であつたか、どうしても思ひ出せないで、その代りに今そはをちらと通り過ぎた、娘の事を考へ込むのであつた。

チージュは彼女の無邪氣な、びつくりしたやうな灰色の目や、肥えてしつかりした肩や、水々して丈夫さうなからだ

全體を、心に描いて見た。

「精力旺盛らしい娘だ！」氣むづかしげな、皮肉な心持ちで、彼はかう考へた。

どういふ譯か、とつぜん小柄な大學生は、彼女がミハイロフと知り合ひになつたのが、忌々しくて堪らなくなつた。「あんな女なんか、どうだつていふぢやないか！彼は昔々とかう獨りごちた。「おれの知つた事ぢやありやしない！」

彼は再び自分の想念に立ち歸つたが、それはまるで別なものだつた。人間生活の偉大なる活畫圖や、その愚昧な組織に關する悲憤慷慨的な想像の代りに、チージュは自分自身の生活の事を考へ始めた。そして始めてこの生活が、一種特別な、灰色の、佻びしいものに映じたのである。

彼は中學生であつた頃から、方々出稽古さを駈け廻つたものだが、大學生になつても、やはり同じやうな出稽古を拾つて歩いたり、教授連の講義を聞いたり、友達や反對黨の者と、行動計畫や、戦法の細目に關する議論をしたり、宣傳ピラを工場へ持つて行つたり、もう疾うに行くへの知れなくなつた、實際すこしも面白味のない人達の間で、煽動を試みたりした。それに費された勞苦と、奔命と、興奮は非常なものだつたが、しかし全體から見て、これらすべ

てのものは、一つの灰色をした長い道程に溶け合つて了つた。彼はこの道を三十の年まで、とぼ／＼辿つて來たが、一體なんのためにさうしたのか分からなかつた。もつとも、一時街上で鐵砲を射ち合つたり、群衆が赤旗を持つて歩いたりして、一切のものが軌道を踏みはづして了つた時には、いよ／＼目的が達しられて、自分があれば努力奮闘したその對象たる、新しい生活が始まつたやうに思はれた。が、それはほんの一瞬間であつて、その後はすべて元の李阿彌となつて了つた、いや、以前よりもつと悪くなつたくらゐである。人々は奮起の瞬間にすら、いつもと同じやうな——むしろ、いつもより以上の、けだものだといふ事が分かつた。革命までは、彼等も共通の憎惡に結び合はされて、奮起したものだけれど、いざといふ場合ひになつて、彼等は恐ろしく漠然とした主張目的の相違で、互に爭論をはじめた。まるでこの主張目的が、彼等の全生命でもあるやうな風だつた。それから、チージュは長いあひだ牢に入れられて、もうプロレタリアートの勝利を夢想するやうな事もなく、たゞ／＼倦怠に惱まされた。彼は一日々々を指をり數へながら、散歩を許されなくなつたのに對して、抗議を申し込んだりなどした。彼の生活全部は監房の四壁と、世の

中から遮断された憐れな存在の小つげな興味に、限定されて了つたのである。それから彼は郷里へ送還されたが、生活は依然として自分の流れを續けて、どこか途中で落伍した貧しい小柄な大學生の事などは、すっかり忘れて了つてゐるのだ。

今もう一切が過ぎ去つて了つて、再びよりよき未來に對する希望に生きるほか仕方が無くなつたとき、過去の追懷はまるで色が褪めて了つて、くだらなくばか／＼しいものに思はれた。チージュは心臓を締めつけられるやうな氣がした。もし憐れな微生物にひとしい、自分の努力奔命がまるで無益なもので、結局たゞ滑稽に過ぎないとしたらどうだらう？

と、まるでこの絶望的な宣告を裏書きするやうに、希望から希望へとさ迷ひながら、これまでの生涯を過ごして來た事が、あり／＼と彼の脳裡に描き出された。最初は中學校を卒業して、大學へ入る事を唯一の希望にしてゐたが、次ぎには革命に憧れ、その後は自由な娯楽へ出てからの空想を愛ではぐくみ、今では監視の期限が終るのをひたすら待ち兼ねてゐる。かうして今後も再補何ものかを期待しながら、明日にも本當の生活が始まるかも知れない、といふ

希望を抱いて、死んで行くのだらう。

事によつたら、かうした無益な階段を一足とびに飛び越えて、いきなり最後の目的地へ到着した方が、いつそ氣が利いてゐるかも知れぬ——といつたやうな極めて朦朧とした、殆ど意識に觸れないやうな想念が、ちらと彼の心を掠めて過ぎた。騎兵少尉補クラウゼの長い白い顔が、再び闇の中から浮かみ上がつて、まるでどこかへ誘き寄せようとするやうに、ふわ／＼と漂つて行くのであつた。

## 二〇

ミハイロフとリーザ・トレグーロフとは、暗い町を靜かに歩いて行つた。

弱々しい星あかりは處女の顔に宿つて、物思はしげな美しさを添へてゐた。それは過去幾千萬年のあひだ、何かしら新しい、異常な幸福を約束するやうに見せかけながら、異性を誘惑して來た美しさなのである。暖い夏の夜々、人の心を波立たすやうな春の宵々が、若い女の輕やかな、謎のやうな美しさに匂つたのは、昔から今まで幾千萬たびとも知れない。それは散文的な晝の光りに消えて行くといふ、女の昔語りにも似た情趣である。

ミハイロフは眉の黒い、無邪氣な大きな目をした、白い顔を眺めながら、夕闇の中で近々とその方へ屈み込んだ。彼は今まで、生きるという事がこれほど軽やかに、悦ばしく思はれた事は、かつてないやうな気がした。そしてこの若い、美しい、新鮮な娘が、自分を抱擁して、愛撫してくればいゝと、たゞそのみを一筋に願ふのだつた。彼は今までかうした愛撫に馴れ、またそれを容易に譯なく獲得したので、今ももう最初の接吻を欲するに立たしい渴きのために、全身がふる／＼慄へるのであつた。彼は今となつて、まだ何か話しをしなければならぬといふ事が、不思議に思はれるくらゐだつた。

「なぜあなたはそんなに僕と知り合ひになりたかつたのです？」娘の顔を覗き込みながら、彼は小さな聲でかう聞いた。女でなければ分からない欲望の神祕力が、興奮に慄へる熱い囁きの中に籠もつてゐた。

リーザはたつたいま彼に向かつて、ずつと前から知り合ひになりたいと思つてゐた。といふ事を自白したのであるが、若い娘に獨特の狡猾な本能の働きで、何げなささうな素直な調子で答へた。

「色々とお噂を伺つたものですから。」

「誰に？」

「いろんな人に……この人がどれだけあなたに興味を持つてゐるか、あなたはとても想像がお出来にならないでせう。もつとも、それは當たり前ですけれど。」

「なぜ當たり前なんです？」もつと女に言はせようと思つて、ミハイロフは空とぼけながらかう訊ねた。

「だつて、それは分かり切つてゐるぢやありませんか！」リーザは憤慨したやうな風さへ見せた。「あなたは藝術家で、新聞や雑誌が色々書き立ててゐますし……それに……」

彼女は思ひがけなく口を噤んだ。

「それに何です？」

「ご覧なさい……流れ星！」

「そんなものどうだつていゝぢやありませんか？」ミハイロフは彼女の單純な詭計に微笑しながら、巫山戯たやうに手を振つた。

リーザは聞こえない振りをして、

「今日はなんて暖い晩でせうねえ！」

彼女は危く口を迂らしかけたので、思はずぎよつとした。もつとも、彼女が興味を感じてゐたのは、ほかならぬこの事なので、つまりこれを言ひ出したくて堪らなかつたので

ある。それはちやうど禁制の帷まきが人間を興奮させたり、威嚇したり、誘惑したりしながら、烈しい欲望を唆るやうな具合ひだつた。そこには彼女の無邪氣な若々しい魂と、強健な娘らしい肉體を牽き寄せる、一種の祕密が潜んでゐた。彼女は色々な女との關係を、彼に聞きたかつたのである——ネルリの事や、去年自殺をしようとして、どこか遠い南方へ連れて行かれた女學生の事や、彼得堡ピートルから來て、二週間ばかりこの町に滞在した後、焼けつくやうな大膽な目と、華美で挑發的な衣裳と、誰にも知られない悲劇の祕密を、まるで暗いよからぬ罪惡の薫りか何ぞのやうに、町の人の記憶に残したまゝ消えて了つた、美しい女優の事などが聞きたかつたのである。

リーザはミハイロフの黒みを帯びた目や、強さうな手や、くつきり線を引いた唇を眺めた。すると、これらの物が彼女の想像の中で、愛したり苦しんだりした神祕めかしい女達の、霧のやうにぼうつとした姿に溶け合ふのであつた。この唇で彼はさういふ女たちを接吻したのだ、この手で抱擁したり、着物を脱がせたりしたのだ、かう思ひながら、彼の顔を眺めてゐるうちに、女性としての自分の體が感じられるやうに思はれた。そして一種不可解な恐怖と、何と

も捕捉することの出来ない希望のために、彼女の頬は赤くなり、胸はどきどき、動悸ドウキを打つて來るのであつた。

ミハイロフは彼女が何を言はうとして、口に出せないでゐるのか察して、いつまでもこの暗い罪の道に娘を引き止めようと、なほも執拗に繰り返すのであつた。

「さあ、ごまかさないでお言ひなさい。」女が自分から隠すやうにする、無邪氣なきまり悪さうな目を近々と覗きながら、彼は命令するやうな優しい聲で言つた。「あなたがわざと話をそらさうとしてゐられるのは、僕によく分かつてゐますよ……僕の身の上について、世間の人があるの口に出せないやうな事を言つてる、一體それは何ですか、教へて下さい。」

彼は暫く無言の後、胸に企みを隠しながら、わざとかう聞いた。

「さうでない、世間で何か非常に醜惡な噂うわさをしてゐるやうに取りますよ！」

リーザはすつかり間違つた。

「いゝえ、まあ、あなたは何を仰しやるんでせう……何も變はつた事はありませんの……たゞ……」

「それでもやはりね？」

「つまりね、あなたが……あなたはいろ／＼な女の方と、澤山ローマンスを持つてゐらつしやる……そして、あなたは全體に女といふものに對して、よくない見方をしてゐらつしやるつて、さういふ噂があるんですの……」まるで冷たい水の中へでも飛び込むやうに、思ひ切つてリーザはかう言つた。

ミハイロフはぢつと貪るやうに彼女を見つめた。と、彼の薄い鼻孔が擴がつて、目はぎら／＼と輝いた。

「ところで、あなたはどうです……それが本當だと思ひますか？」と彼は聞いた。

リーザは透き通つたやうな、純潔な目で男を見やつた。

「わたし知りませんけど……たぶん本當だらうと思ひますわ！」侮辱でもせられたやうに、きつと身を反らせながら、彼女はかう答へた。

「何が本當なんですか？」

「あなたが女をたゞ女として眺めてらつしやる、といふ事なんですの。」

若さと純潔さが彼女に力を與へた。彼女はひたと男の目を見つめた。

「女としてはなんの事です？」彼女を暗い罪の觀念へ追

ひやるかのやうに、ミハイロフは狡猾さうに聞いた。

「だつて、あなた分かつてらつしやるんですもの……」自分が男の前で裸になつて行くやうな氣がして、思はずかつと赤くなりながら、娘はきまり悪さうにかう言つた。

彼はリーザを眺めながら、奇妙な微笑を浮かべた。リーザはこの微笑を見ると、自分もやはり女であつて、圓々した肩や、美しい胸や、すらりとした強い足や、あらはな若々しい弾力に充ちた肉體を持つてゐる、そしてミハイロフは、軽い薄色の着物一重の覺束ない隔てを透かして、この肉體を眺めてゐる——かういふ事を痛切に直感したのである。

「ちや、一體そのほかに、なにを女の中に見たらいふんです？」とミハイロフは大膽に聞いた。

「何をですつて？ 一たい女は人間でないのせうか？」

一たい女の持つてゐるものはたゞあの……」狼狽してわくわくしながら、娘は言葉を返した。

「何も人間なんて事に、關係はないぢやありませんか？」依然として斷乎たる聲で、ミハイロフは答へた。「一たい女を女として愛する事が、その女に對する尊敬を缺く事になるでせうか？ それを侮辱だといふのは、餘り女性を輕蔑した話ですよ！」

「いえ、さういふ譯ぢやありませんが……」とリーザは間誤つきながら言つた。「でも、あなたは餘り偏した見方をしてゐらつしやいますわ……」

男が自分を後めたい争論へ引き込んで、何か自分の目的を達しようとしてゐるのを感じたけれど、彼女は巧く會話を打ち切つて、心を興奮させたり、威嚇したりするこの話題を、回避する事も出来なかつたし、またさうするだけの腕もなかつたのである。

「それは第一、女自身によつて決せられる問題なんですよ。」とミハイロフは反駁した。「僕がさういふ風な見方をした婦人は、それ以外の見方を要求する資格がなかつたのです……女はいつでも自分の好きな態度を、他人から要求できるんですよ……しかし、僕一箇に關して言へば、僕は女に對して、たゞ女でなければ得られないものを求めてゐます。もし僕に人間が必要だつたら、その時は誰の所へでも出かけます。まあ、たぶん男の所へ行くでせうよ。なぜと言つて、要するに現代においては、まだやはり男の方が女よりも精巧で、經驗がつんで、發達の程度が進んでゐますからね。何のために女を掴まへて、藝術だとか、政治だとか、それに類した事を談じる必要があります？……さうい

ふ話しのためには、女より以上の答へを與へてくれる畫家なり、文士なり、學者なりを見つける事が出来ますよ……僕は女に對して、愛撫と、美と、歡樂を求めめるのです……僕が女を愛するのは、その女性のためです、美のためです、その肉體のためです……」

彼は奇妙な引き入れるやうな力をもつて話した。彼の口から出る女といふ言葉は、熱烈な罪ふかい叫びのやうに響いた。

彼の熱い呼吸は娘の頬を沁つた。彼女は興奮したやうな瞬きのために、ふら／＼と目まひがして、薰りの高い息苦しい霧で、全身を包まれるやうな氣がした。

「それは大變いけない事ですわ。」無邪氣な處女の純潔性の最後の反抗として、彼女はやつとかう言ひながら、いかつい清淨な目で彼を見つめた。

「何がいけないのです？」とミハイロフは挑むやうに抗辯した。「すべての女はあなたもその一人ですが、愛するために生まれて來たのです……それは自然の法則で、純潔な美しい歡樂です。それを愚劣で卑俗な人間が、何か汚いもののやうに扱つてゐるのです。おひ／＼にはあなたも何なりと好きな事をしていゝです……科學でも、藝術でも、何で



も勝手なものに従事したらいいでせう……しかし、今あなたは若くて、健康で、美しい婦人ですから、戀ひをしなればなりません……あなたはいづれ誰かを戀ひし、誰かを愛撫し……誰かに身を任されるでせう。で、僕はその誰かが、僕自身であるやうにと望む権利もあれば、それを追求する権利もある譯です！」

彼はいつとなく目立たぬやうに、直接リーザの事を話してゐたので、リーザもすぐにはそれと氣がつかなかつた。けれど、ふとそれを悟つた時、彼女はさつと顔を眞赤にして、薄色の房々した髪を頂いた頭を垂れて了つた。その様子はまるで途方に暮れて、あつけに取られたやうな風つきだつた。ミハイロフは、彼女が我に返つて腹を立て、その腹たち紛れに、越える事の出来ない冷たい溝を作る暇のないやうに、急いで言葉をついだ。

「例へば、今この瞬間に、僕はあなたと婦人論などしたいとは、少しも思つてゐません、たゞあなたを抱きしめて、接吻したいだけです！」

リーザは慫えたやうに一歩うしろへたじろいだ。濃い紅の色は兩の頬ばかりでなく、軽い着物で蔽はれてゐない、丈夫さうな、恰好のよい頸筋まで、さつと染めて了つた。

ミハイロフは少しあせり過ぎた、これでは女が離れて了ふかも知れない、と感じた

「あなた怒つたんですか？」一瞬間に聲を變へながら、侮辱されたやうにちつとそつぽを見つめてゐる、彼女の目を覗くやうに低く屈み込んで、彼は暖かい優しい聲でかう訊ねた。

「あなた怒つたんですか？……ぢや勘忍して下さい……あなたを侮辱しようなんて氣は、少しもなかつたんですから……可愛いリーザさん！」

リーザは急に少し可笑しくなつて來た。彼の聲がいかにも申し譯なささうな、憐れみを乞ふやうな響きを帯びてゐたのである。

「いゝえ。」と彼女は氣持ちを和らげて言つた。「だけど、何だつてあなたはそんな事を仰しやるんですの！」

「何だつてですつて？つまり、それが本當だからです！」力を籠めてミハイロフは答へた。

リーザは途方に暮れたやうに肩を竦めた。

「だつてさういふ事を空想する権利は、僕にもあるぢやありませんか？ね、さうでせう？……實際、空想では何を考へたつていい譯でせう？……！」

リーザは、彼が自分を網に掛けようとしてゐるのを直覺したが、巧くそらすことが出来なかつた。

「え、そりや……權利は無論もつてゐらつしやるけれど……」彼女は器械的に答へた。

「もし空想する權利があるとすれば、本當の事を言つてならないつて法はないぢやありませんか？ 僕は何も嘘を言つたり、氣がねしたりする必要がありません……そんな事は滑稽ですもの……僕はあなたを接吻したいから、それを口に出したまでです……」

「ぢや、仰しやつたらよござんすわー」一切を冗談にしてはうと、力ない努力をしながら、リーザはかう呟いた。

「ところで、僕にそれを實行する時が来るでせうか？ 来るでせうか？」突然ミハイロフは娘の耳のすぐ上で、小さな聲でかう聞いた。

彼女は殆ど男の熱い唇の愛撫を感じたやうな氣持ちがした。すると、熱い霧のやうな物が蔽ひかぶさつて、目まひがして來た。けれど、暗い禁制のものに對する好奇心の方が、恐怖や憤怒よりもつと強かつた。ちよつと一瞬間、それが單に興味のある、なんでもない事のやうな氣がして、本當にさうして見ればいふ希望が、ちらと心の底で

動いた。それは深い淵の中を覗いて見たい、といふ心持ちに似通つてゐた。

「わたし知りませんわ……」といふ言葉が、無意識に彼女の唇を離れた。と不意に、今すぐ彼が接吻するに相違ないと直感したので、娘は急に駆け出さうとするやうな、彼を突き離さうとするやうな、どちらともつかぬ風でぱた／＼と身を跳き始めた。

ミハイロフは力の強い手で、彼女の若々しい、しなやかな體を、殆ど無作法なくらゐに抱きしめて、熱い唇を天鵝絨のやうな頬の上にこらせながら、リーザの唇を發見すると、いきなり物狂ほしい接吻で……して了つた。彼女は兩手を男の胸へ突つ張つて、なほも争つてゐたが、彼はいまま一方の手を女の柔かい房々した後頭部へかけ、惱ましいほどの力をもつて、女の唇を自分の口へおしつけた。ひんやりと…………が感じられた。リーザは息が窒つて、殆ど意識を失はないばかりであつたが、一生懸命に身を振り解いて、傍の垣根へ飛びのいた。

「それはあんまり失禮です……よくもそんな事が出来ますねー」急激な動作のために倒れさうになつたのを、危く垣根に掴まつて身を支へながら、彼女はかう叫んだ。

彼女の帽子はがつくり後ろへのめつて、髪はしどろに亂れ、顔はまるで燃えるやうになり、全身はわななくと慄へ、心臓は破裂しさうなほど動悸を打つた。彼女は重々しく息をつきながら、今にも泣き出しさうであつた。

けれど、ミハイロフはまたもや彼女が我に戻つて、冷淡な路傍の人になる餘裕を興へなかつた。

「どうか勘忍して下さい！」と彼は優しい、従順な、靜かな聲で言ひ出した。「僕はあなたを侮辱しました……勘忍して下さい！……しかし、あなたがそんな可愛い娘さんだからつて、なにも僕の責任ぢやないでせう……いや、よろしい、僕は行きます……」

彼はなほも何やら無邪氣な、殆ど滑稽な事を、くどくと言ひ續けたが、その様子が餘りしほくとして従順らしいので、リーザは腹を立てる事が出来なかつた。

「わたし怒つてやしませんわ……そんなことは滑稽ですわ……わたし自分ですいません……しないで下さい。」彼女はやつとの事であつた。その明るい無邪氣な目には、涙がにじみ出してゐた。

「勘忍して下さい。」二そう悲しげな優しい聲でかう言ひな

がら、ミハイロフはまたしても何やら訊ねるやうに、下から女の目を見上げた。この根氣のいゝ力は遂にリーザの武器を奪つて、何が何やら分からなくして了つた。彼女の怒りの言葉も、すべて無駄になつたのである。

「まあ、いゝわ……」彼女は途方に暮れたやうに言つた。

「わたし腹を立ててなんかもありません……だけど、もう澤山ですわ……さよなら。」

二人はもうだいたい前から、彼女の家の裏門のすぐ傍へ来てゐる事に、はじめて気がついたのである。

「でも、また會へるでせうね？……だつて、赦して下さいのぢやありませんか。是非そのお赦しを實際に證明して下さい！ 會つて下さるでせうね、え？」彼女の目を覗き込みながら、哀願と權威を同時に聲に響かせながら、彼は言つた。

「えゝ、えゝ……わたし分かりませんわ……よござんすわ……」目の廻るやうな心持を覺えながら、娘は惱ましさをうな聲でかう叫んだと思ふと、いきなり袴をつまんで、ちよつと頤をしゃくつたまゝ、潜りの戸をがたんと言はせて、庭の中へ駆け込んだ了つた。

ミハイロフはたゞ一人とり残された。彼は暫くちつと一

つ所に立つて、妙に鋭い目で女の後を見送つてゐたが、やがてにたりと笑つて、もと来た方へ引つ返した。

二人がまた顔を合はすといふ事も彼女が自分を戀ひするやうになるといふ事も、彼はちやんと知つてゐたのである。

## 二

醫師のアルノルヂイはマリヤの依頼どほり、ジェーネチカに氣晴らしさせるといふ任務を忠實に實行した。彼はアルブローツに頼んで、郊外の白樺林で遊山を催すやうに取り計らつた。そして當日の夕方、自分からエヴゲーニヤ・サモイロヴナを迎へに寄つたのである。

行つて見ると、ジェーネチカはもうすつかり支度が出来てゐた。彼女はいつもの如く赤い着物を着てゐたが、今日のは地が軽くて透いてゐるので、しなやかで豊麗な肉體のふくらみを帯びた美しさが、一そう鮮かに浮き出してゐた。冷淡な氣難かしい醫師でさへ、廣く剝つた着物の襟あきから、白々と見える圓つこい滑らかな肩の線に、我ともなく見惚れるほどだつた。

「ちや、どうです、出掛けませうか？」と彼は聞いた。

「わたしもう支度が出来てゐますわ！」若い婦人は帽子を

被りながら、さも嬉しうにかう言つた。

彼女は何といつても、着いた顔をした女が二人までゐる、この陰氣な家にゐるのが苦しかった。一人の方は惱み悶えながら徐々に死んでゐるし、いま一人は微笑も見せなければ、挨拶もろくにしないで、氣難かしげないかつい顔をして、家の中を歩き廻つてゐるので、生に充ちた肉體は、自由や、喧騒や、運動や、心を躍らすやうな熱烈な男たちの視線や、さうしたものを纏うてやまないのであつた。遊山がわざわざ自分のために催されて、そこには面白い若い人達が大勢あつまるといふ事を知つてゐたので、彼女はまるで子供のやうにこの催しを悦んだ。自分の大膽な華々しい美貌を誇る心持ちから、彼女はすべての男がたゞ自分にのみ興味を持つだらうといふ事を、少しも疑はなかつたのである。

ジェーネチカが鏡に向かつて帽子を被つてゐる間、マリヤ・パーヴロヴナは靜かにつましくほゝ笑みながら、ちつと彼女を眺めてゐた。もう自分に取つて、さうした歡樂は死滅したのだ、といふ心持ちに馴れて了つたので、病人は格別ジェーネチカを羨みもしなかつた。たゞ幾分わびしいやうな氣持ちがしたが、その佻びしさを人に見せたくなかつた。「一體なんのためだらう？」と彼女は淋しくかう考へた。

「そんな事を誰が知るものか」

「ちや、先生、」と彼女は言つた。「うちの子エーネチカをお預けします。一つこの子を浮き立たせて下さい。まあ、この子の可愛い事はどうでせう！……この子の悦んでゐる事が分かつたら、わたしまでが嬉しくなりますわ……可哀さうに、わたしと一緒に暮らして、さんざ苦しい思ひをしたんですものね。」

「ばかな事を言つたら厭よ、マリーシャ……わたしそれが嫌ひだわ」とエヴゲーニヤが應じた。

彼女は友が死に瀕してゐるのに、自分がこんなに若くて美しくて健康なのが、何となく極り悪いやうな風であつた。何かしら譯の分からない、申し譯のないやうな心持ちが、彼女を惱ました。で、自然と薔薇色の唇を掠めて、黒い目の中に輝く興奮したやうな微笑を、頻りに押し隠さうと努力するのであつた。それはかりでなく、自分はそれほどこの遊山ビシラウに行きたくないのだけれど、たゞこんなに骨折つてくれた醫師を失望させるのが、心苦しいから出かけるのだ、といふやうな振りさへして見せるのであつた。

「だけど、あんた退屈ぢやなくつて？ 大丈夫？」マリーヤを接吻しながら、彼女はかう言つた。「もしさうなら、わたし

し行かないわ。」

「いゝえ、そんな事ないわ、そんな事ないわ！……行つてらつしやい、ジェーネチカ……あんたが行つてくれると、わたし嬉しいのよ！」強ひて微笑を浮かべながら、病人はかう答へた。

エヴゲーニヤはそつと氣のつかないやうに溜め息を洩らした。ちよつと一瞬間、彼女は遊山の事を考へるのが、寧ろ苦しいほどであつた。けれど、二人が出た後の戸がしまつて、病人の陰氣な部屋が後ろに取り残された時、ジェーネチカはちやうど新鮮な水に浸つた時のやうに、足の爪先までしみ渡る悦ばしい興奮を、抑へることが出来なかつた。彼女は醫師のアルノルヂイが年取つた、ものうい人間だといふ事を忘れて、その腕を取つて組み合はせながら、無理に入り口の階段を駆けおりさせた。

「早く行きませう、ドクトル、早く！……馬車に乗りませうよ！……あゝ、何ていゝ氣持ちでせうねえ……わたし今日は飲んだり、歌つたり、駈け出したり、踊つたりしますわ……オイ、ラ、オイ、ラ！……まあ、一體なんだつてあなたは、そんなに退屈さうにしてらつしやるの！ よく恥づかしくない事ですわねえ？ さあ、先生、せめて今日だけ

でもお浮かれなさいよ！  
肥つてどつしりした醫師は、彼女について急ぎながら、たゞ重々しく吐息をつくのみであつたが、彼女は道々野の風に吹かれながら、黒い目と黒い眉を輝かせてゐた。そして自分の無口な道づれをからかつて、笑ふのであつた。

太陽はもう地平線の上に低くかゝつて、火事のやうに赤い夕焼けで溶けさうに見えた。森の端の白樺の上には、火のやうな斑紋が燃えて、緑は目ざましい金色を帯びてゐたが、森の奥の方では、もう細い幹が蒼みがゝつて来て、水々した暗い葉の繁みが、互に迫り合つてゐるやうに見えた。白樺の木立ちが疎らになつて、太陽に赤々と染まつてゐるあたりで、急な斷崖が河へ逆落としに走つて、廣々とした静かな河水は、浅い砂地を静かにせざらいでゐた。その向かうには蘆が青々と茂つて、村の家々の屋根が、まるで鳥の巢のやうにほゞけて見えた。河は鮮かな影を亂さうとせず、静かに滑らかに横たはつて、たゞあるかなきかの銀色をした波がしらが、浅い所できら／＼と閃くのみであつた。

アルプゾフの馭者たちは、方々へ野外用の卓を並らべて、その上に白い卓布を掛けてゐた。わきの方では湯沸が幾つもしゆん／＼とたぎつて、小さな焚き火が煙りを上

げて蚊を追つてゐた。そして下物や酒壇のはいつた箱は、ぢかに草の上に抛り出してあつた。藪の蔭には、車から離れた馬がぢつと立つて、のん氣さうに尻尾や頭を振つてゐた。太陽の光線は、透き通つた細い金色の箭のやうに、高梢の間で尾を引いて、ちやうど蜘蛛の巣か何ぞのやうに、森の奥の方で纏れてゐた。

チージュと、ミーシユカと、ダゼヂェンコは、崖の下へ水浴びに行つたし、アルプゾフと、トレニョーフと、クラウゼと、ナウーモフとは、草の上で麥酒を飲んでゐたが、ミハイロフはたゞひとり、崖の上に坐つて、向かうの岸の景色や、白く點々と見える田舎の百姓家や、太陽で薔薇色に見える、穩かな、滑らかな河の表面や、水の波紋の中に若々しく輝く、三人の大学生のあらはな體などを眺めてゐた。

彼は帽子を草の上へ投げて、河の涼氣を背一杯に呼吸してゐた。若々しく泡立つ酒のやうな、元氣のいゝ輕々とした森の氣が、體ちゆうに溢れるやうな氣もちがした。

物思はしげに幸福らしく微笑しながら、彼は鮮かな夕焼けの色を眺めてゐた。と、彼の目の前には、戀ひせる少女の無邪氣な灰色の目と、軽い亞麻色の髪をした、可愛い極り悪さうな顔が浮かんで來た。それからまた不馴れな拙い

接吻や、若い肉體の戰慄や、彼の愛撫を避けようとする努力なども思ひ出された。

あの晩から後、二人は殆ど毎日あつてゐた。そして、娘も自分が彼を愛してゐる事を悟つて、抱きしめたり接吻したりする事を男に許すばかりでなく、とき／＼自分でも妙に滑稽な、子供らしい接吻をするのであつた。いつもあひびきの後でミハイロフは、彼女の臆病で純潔な愛撫に興奮させられて、物足りない心持ちを抱きながら、歸つて來るのであつた。彼はより密接な關係、より完全な領有を望んだ。そして、先がどうなるかといふ事などは少しも考へないで、どうかして彼女を自分の家へ誘き寄せようと、たゞそればかりに苦心してゐた。ちやんと道具立ての出來てゐる自分の家で、二人きり差し向かひになつた時には、娘も自分の愛撫と哀願を飽くまで斥ける事は出來ない、かう彼は確信してゐたのである。かう考へると、彼のからだ全體が、耐へ難い情慾の惱みに、甘く引き締まつて行くやうな氣がした。娘は長いあひだ彼の家へ行く事を拒んだ。そして、純潔な明るい目で無邪氣に彼を見つめながら、

「一體なんのために行くんですの？」と訊ねた。

ミハイロフがそれに對して、自分はたゞ彼女の一人きり

でゐる所が見たいのだ、そして自分の晝室が見せたいのだと、餘り眞摯でない調子で答へた。と、リーザはためすやうに、ぢつと相手の目を眺めてゐたが、自分でもえたいの知れぬ憂愁のために、彼女の瞳には涙の玉がにじみ出した。たうとう彼はリーザを説きつけて、明日はリーザが彼の家へ來るといふ事に、約束したのである。

彼女が自分の所へやつて來て、あたりに誰も他人がゐないのだと思ふと、ミハイロフの頭の中には、まだ誰のためにも着物を脱いだ事のない、若々しい彼女の體や、圓々した手や、すらりとした足や、羞恥の念と最初の欲情のために曇つた目などが、浮かんで來るのであつた。彼は療養的に指を握りしめた。髪の毛もとか甘く慄へる膝に至るまで、鋭い情慾が彼のからだ全體に漲り渡つたのである。

彼は河のほとりに坐つたまゝ、彼女の事を思ひながら、時には眞裸で、時には半裸體で、時には寢臺の上には自分の膝の上に横たはつてゐる、女の姿を描いて見た。彼は夕日の暖みと濕り氣を帯びた河の涼氣を、自分のからだ全體に感ずるのであつた。

ふと高い人聲と、運動と、轆の響きが耳に入つた。と、不意に甲高い朗らかな女の笑ひ聲が、森の中の夕べの靜寂

をつんざいて、思ひに沈んだやうな廣々とした河面へ、遠く飛び去つた。

ミハイロフは好奇の念を抱きながら、振り返つた。

色々な服装をした男の群れに交じつて、すらりとした女の姿が鮮かな赤い斑點をなして、緑の草原に浮き出してゐた。見事な鬚を生やしたトレニョーフが屈み込みながら、彼女の差し伸べた手を接吻してゐると、偉大な體をした大学生ダギヂェンコは、いま一方の手を熊のやうな手の中に握つてゐた。彼女は細い腰の邊をぎゅつと引き締めた、赤い着物身を纏つて、二人の男の間で礫になつたやうに、青々とした草の上に立つてゐた。そして、いき／＼とした薔薇色の顔に、黒い目と黒い眉を輝かしつゝ、から／＼と笑ふのであつた。

「まあ、女はわたし一人きりなんですわえ！」自分の周囲にこんな大勢男が集まつて、女が一人もゐないといふ事を、すこしも極り悪がらないで、彼女は愉快さうにかう言つた。

腋の下のぐつしより濡れてゐる、帆布の背廣を着込んだ、偉大な醫師のアルノルヂイは、ものうげに彼女の後ろに立つてゐた。彼は傍へ寄つて來たミハイロフを、エヴゲーニ

ヤに紹介した。

若い婦人はまるで濡れたやうな黒い目を輝かして、ちらと好奇心に充ちた視線を彼に投げたが、すぐにそつぽを向いて、から／＼と笑ひながら、どこかへ駈け出した。そして、例の長いまつ赤な着物に足を絡ませて、危く倒れさうになりながら、これから川へ行つて水を浴びると言ひ出した。

「あなた濡れやしませんか？ この邊は深いんですよ！」ひよろ長いクラウゼがかう聞いた。

「どうも憚り様！……わたし魚と同じくらゐ泳げるんですよ……だけど、何ですか、こゝには脱衣場がないんですか？……」

「なに、我々がおとなしいから大丈夫ですよ。」とトレニョーフが言つた。彼の陰鬱な目はぎら／＼と輝いた。

「大丈夫ぢやありませんよ、エヴゲーニヤさん！」とダギヂェンコが引き取つた。「あなたは今われ／＼の掌中にあるんですよ！」

「オイ、ラ、オイ、ラー！」ジエーネチカはざるさうに黒い頭を振つて、指を立てて彼を脅かす眞似をした。そして、四方から浴びせ掛ける洒落や冗談を、大膽に受け流しながら、



着物の裾をつまんで、崖の方へ駆け出した。

彼女の不意な出現と、赤い着物と、白い肩と、輝かしい目とは、一同の度膽を抜いて了つた。男達は長い間ちつと黙り込んだまゝ、互に氣をかねながら、わざと一生懸命に川の方から顔をそむけるのであつた。

やがてその中に段々と落ちついて来た。一同は卓に向かつて腰をおろした。するとナウーモフが、先ほど途切れた話しの續きを始めた。

「君のお説では、」まるで怒つてでもゐるやうな鋭い調子で、彼はチージュに向かつてかう言つた。こちらには難が喧嘩でも始める前のやうに、忽ち全身の毛を逆立てるのであつた。「自殺は量見の狭い人間のする事で、アブノーマルな現象だと言はれるんですね。僕は君のお説に賛成する譯に行きません。もつとも、自殺を讚美する事も出来ないけれど、それを非難する譯にも行かないと思ひます。しかしいづれにしても、自分の生命を斷たうと言ふには、なみ／＼ならぬ意志の力が必要です。そして、この世にありとあらゆる死に方の中で、一ばん自然なものは自殺です。」

どんな事を口にしても、必ず不快に神経を掻き擽るやうな、狂信者めいた鋭い彼の聲の中には、何かしら萬人に耳

を傾けさすやうなあるものがあつた。野性的な、殆どアブノーマルに感じられる目は、斷じて自己を曲げないといつたやうな、陰鬱な光りを放つてゐた。

「それは逆説だ。」茶を注いだコップを引き寄せながら、チージュは氣難かしげにかう言つた。

「斷じてそんな事はないです。」とナウーモフは言葉するどく遮つた。「すべて死といふものは、どんなに自然の法則だなどと言つても必ず不自然なものに決まつてゐます!……すべての死は人間に對する自然の暴虐で、たゞ自殺のみが自由なのです。もし僕が生を欲するにも拘らず、死んで行くとしたら、それは自然だと言ふ譯に行かないけれど、もし僕に生きて行く目的が少しもなく、生きてゐるのが厭になつたために、自ら進んで死ぬるとしたら、僕の行爲は極めてノーマルです!」

「どうして君はこれだけの事を、あへて理解しようとしなないのでせう。」もう分かり切つた眞理を、悟りの悪い人間に言つて聞かすやうな調子で、チージュはかう駁論した。「アブノーマルだといふのは、結果が非論理的だからちやありません。勿論、生きてゐるのが厭になつたら、そんなあきあきした生活なんか、一思ひに片つけて了ふのは、極めて

自然な事です。しかし、僕がアブノーマルだと言ふのは、生きてゐる人間に取つて、死が望ましく思はれる、などといふ事なのです。それは自然に反した事です。だから僕の考へでは、病人か、氣ちがひか、それとも世間からあふれ出した、氣の小さい人間でない限り、自分の額へ彈丸を打ち込んだり、繩にぶら下がらうなどといふ考へは、決して頭に浮かんで來ない筈です。本當に、何のためにそんな事をするんだらう、ばか／＼しい！……」

一同は無言のまゝ、小柄な大學生の言葉を聞きながら、ナウーモフが何と辯駁するかと、好奇の念を抱きながら、待ち設けてゐた。たゞクラウゼ少尉補のみは、メフィストのやうな眉を高慢らしく吊り上げながら、冷ややかな物々しい様子をしてみたり、それから例の如く、將棋の事ばかり一生懸命に考へ込んでゐるミーシユカは、くしやく／＼に纏れた薄色の髪を揺き上げながら、ぢつと森の方を見つめてゐた。「ところが、僕に言はせると、」ナウーモフはまるで痛みでも感じるやうに、唇を引つ吊らせながら言つた。「人類が自分の苦い經驗によつて、人生は本質的に不幸なものであると確信しながら、しかもこの無益な、果てしのない拷問を斷ち切るために、人間のなし得る最良の方法は自殺である、

といふ眞理を悟らないのこそ、かへつてアブノーマルに感じられますよ。なぜ君は、人間として生を欲するのが、自然だと思ひますか？……無論、死を恐れるのは自然です。なぜと言つて、死は苦しい謎だからです。が、生を欲する！それが僕には分らない。君は一度でも幸福な生活を見た事がありますか？ ないでせう！」

「なぜです！」不信の表情でかう言ひながら、ダゼヂェンコは逞ましい肩を疎めた。

「ぢや君は見たのですか？」とナウーモフは彼に食つてかかつた。「僕は見た事がないです。幸福な愛も見た事がなければ、幸福な結婚も見た事がありません。また自分の運命に満足した人も見た事がなければ、病氣もせず、苦しみもせず、泣きもしない人間を見た事ありません……君は見ましたか？ それなら僕に見せて下さい……見せて下さつたら、僕は自分の理想をすつかり抛擲して下さいます……」

「君に理想があるんですか？ それは面白い。」とチージュは冷笑するやうに言つた。

ナウーモフの言葉は彼を憤激させた。で、自分自身不幸な身の上で、一日として苦しんだり空想したりしない日がないといふ事も、なぜかすつかり忘れてしまつて、小柄な

大學生は、この奇妙な莫迦けた人間と、危険で野蠻なその理論を、嘲笑し粉砕するのが、自分の義務であると考へた。

「僕にも理想がありますよー」微妙な反語を帯びた調子でかう言ひながら、ナウーモフは彼に會釋した。「もしお望みなら、それが何かお話ししませう。」

「それは面白いでせう！」とチージュは冷笑するやうに鼻の先で答へた。

「僕の理想は人類の剿滅です。」小柄な大學生の冷笑には氣もつかぬらしく、確信に充ちた眞面目な調子で、ナウーモフは語をついだ。

「へーえー」とチージュは叫んで、憤懣の餘り跳り上がった。「それは一體なんといふ事だらう！」

ひよる長いクラウゼは、一そう高く肩を吊り上げながら、急にナウーモフの方へ振り向いた。

「それは何のためです？」

少尉補の白く長い顔の中に、人の氣づかないあるものを認めたやうに、ナウーモフは奇妙な試すやうな目つきで、クラウゼを見つめた。

「僕は自分の眞理と信じてゐる事を言つてゐるのです。何のためですつて？……つまり、無益な苦痛を絶滅するためで

す。人類は幾千年か生活を續けました。この幾千年のあひだ人類は、人生そのものの意義から言つてあり得ない、またあり得べからざる幸福に對する愚かしい希望によつて、養はれ維持されて來たのです。幸福とは即ち取りも直さず、完全に無神經の状態に陥る事です。苦しみもせず、必要も感ぜず、また恐れる事をも知らない人間は、戦はうともしなければ、苦痛の中を前進しようともしません……たゞ豚のやうにぶら／＼したり、臥たりするだけです。苦痛は一切を動かす動力です。それは誰でも知つてゐる眞理ですよ。假りに幸福を鼻先へ突きつけられたとすれば、我々はもうどこへも行きやしません。ところが、我々は幸福を追ふのです。人間の生活は全部その中に含まれてゐます。しかし、人類はなんのために限りなく苦しんでゐるのでせう？　まあ、思ひ出してもご覧なさい、地球の歴史は始めから終りまで、絶えることのない流血の河ぢやありませんか！　悲哀、苦痛、病苦、憂愁、惡——すべて人間の空想の裏にある暗黒なもの、これが即ち人間の生活なんです……もう人間もそろ／＼く加減に、『これは實に恐ろしい事だ、自分達は過去に於ける數十億の人々が經驗したと同じ苦痛を、後に來るべき限りなき子孫に課するなんて、そんな權利を持つ

てゐない」といふ事を悟つてもよささうなものです！……人間はみんな気が狂つたのです！ 彼等は苦痛に身をまがき、毎日のやうに自己の存在を呪ひながら、この生存が永久に終らないやうにと、一生懸命に努力してるんですからね！……一體これは何ごとでせう？ 野蠻と愚昧の結果でせうか、それとも、誰か悪魔のやうなものの大膽不敵な偽瞞でせうか？……

「それはつまり確乎不拔な生の本能です。幸ひにして、君方のいかなる理論に對しても抵抗力を有する、生の本能ですよ！」思ひ切つて毒々しい調子でチージは應じた。

「遺憾ながら、それは眞理です！」とナウーモフはきつぱり言ひ切つた。「何かしら狡猾で意地悪い力が、我々の心にこの本能を注ぎ込んだので、つまりこの中に我々の呪ひがあるのです……しかし人類が今まで生活して、無数の本能と戦つて来たのは、決して無駄ぢやありません。もしこれが本能だとすれば、必ず絶滅しなければなりません！」「しかしそのためには、人類を改造しなければならんでせうよ！」と興奮したダギチェンコがかう口を入れた。

「もし必要なら、改造しますさ。」とナウーモフは落ちつき拂つて答へた。

「チージは氣難かしげな聲で笑ひ出した。

「だが、それは何のためです？」といら立たしげに彼は叫んだ。

「それは、さつき言つた通りです——無益な苦痛を斷つためです。」

「それは大丈夫、成功しませんよ！」と小柄な大學生は勝ち誇つたやうに言つた。

「なぜ君はさう思ひますか？」額ごしに相手を見つめながら、ナウーモフはゆつくりゆつくりとかう聞いた。

「なぜと言つて、生の本能は滅ぼす事の出来ないものだからです。それは一莖の草にも、小さな蟲けらにも、生きてゐるからです！……いかなる詭辯もこれを滅ぼすことは出来ません！」

「これは詭辯ぢやありません。それに、生の本能は亡ぼす必要なありません。自分で亡びて行きます。」

「君は何を言ひ出すか分かりやしない！」チージは極度の憤激にかう叫んだ。

「すべての物は死んで行くのです！」一種陰鬱な信仰を聲に響かせながら、ナウーモフは答へた。「すべての物は成長して全盛に達すると、今度は死滅するのです。それが自然

の法則なのです。なぜ若は人間の精神力をこの法則から除外するのでせう？……人間の精神力も遅かれ早かれ頂點に達して、やがてだん／＼下へ降り始め、遂に沼の上の霧のやうに、溶けて了ふ時が来るに相違ありません。何もかもあき／＼して了ふのです！……一たい人類は永久にいがみ合ふのを樂しみとしたり、いつまでもいつまでも小つぽけな政府を作り變へたり、永久に繪を描いたり、永久に病人を治療したり、永久に本を書いたり、永久に彫像を拵へたり、永久に芝居小屋を建てたり、永久に戀ひをしたり、永久に土を掘つたり、永久に煉瓦を積んだり……つまり、永久にいつまでもいつまでも生きて行く事が、果たして出来ると思つてゐますか！……まあ、考へてもご覽なさい、まあ第一、そんな事は退屈で、ばか／＼しいぢやありませんか！ やがてそのうちに、人間の活動の野が荒れ果てる時が來ます……人々は退屈まぎれに鐵砲で射ち合つたり、幾つも幾つも群れをなして身投げをしたり、首をく／＼つたり、絶壁から飛びおりたりするでせう。母親は惱ましい心持ちを抱きながら受胎して、誰にも要のない、誰にも興味のなない赤ん坊を生むやうになります……そして自分の子供の未來に、何かしら素晴らしい、美しい運命が待ち構へてゐよ

うとは、信じなくなつて了ふに相違ありません……現在自分で充たした揺り籠の中に、彼女らはたゞ未來の不幸、未來の苦痛、痴愚、衰退を見るに過ぎなくなりませう……かうして母親たちは倦怠に充ちた表情で出産を拒むか、さもなくては生まれた子供を、産んだその場で棄てて了ふかです！……」

ナウ・モフの聲は陰鬱な物々しい力を帯びて、鋭く刺すやうに響いた。彼の野性的な目は、黒い光りを放つて燃えながら、丁度どこか遠くに恐ろしい人間の運命を認めたかのやうに、聽衆の頭上を越して向かうの方を眺めてゐた。暴れ騒ぐ人民を、神の怒りといふ一言で威嚇する豫言者の目も、丁度この通りだつたに相違ない。

一種の悪寒が聽衆の心を掠めた。何となく胸苦しいやうな、惱ましい氣持ちが一同を襲つた。チージュさへも氣難かしげに眉を蹙めながら、口を噤んで了つた。あるひは、その表現に謬りがあつたかも知れない、また當然この地上に響き渡るべき、雄大な力には缺けてゐたかも知れないが、何かしら一種異様な眞理が、一同の前に立ち塞がつたのである。すべての人は自分自身の生活を顧みた。するとその生活は何の希望もない、鈍い條か何ぞのやうに、目の前に

現れるのであつた。

「僕は生活に戦ひを宣します。」ナウーモフはきつぱりとかう言ひ切つた。「僕は生活などを認めません。そんなものは否定します、呪詛します……僕はかうした血みどろな、無意味な苦痛の断絶を絶叫します……今日まで人間の活動はすべて無限に生命を保存し、永續させるといふ點に集中されてゐました……生に對して頌歌を唱ひ、生のために自己を犠牲とした人々は、人類の恩人と見做されて、神殿を築かれたり、記念碑を立てられたりしたものです。ところが、僕はさういふ人々を人類の敵と考へます。良心も廉恥心もない裏切り人と認めます！……彼等は人類を屠殺場へ導いてゐるといふ事を、自ら悟らない筈がないのですからね！ さうです、無限の拷問と苦痛と死に導いてゐるのです！……すべての思想家、豫言者、詩人、學者などは、悉く呪はるべきものです……彼等は人類に幸福を夢想する事を教へました。恐ろしい目前の事實に對して、眼を閉ぢる事を教へました。もし我々が目を開きさへすれば、恐怖と嫌惡の情に打たれて、永久に人生といふものから、よろめき退るに相違ないのに、彼等は強ひて我々に人生を信じさせたのです！」

「まあ、お待ちなさい」とチージュは殆ど病的に叫んだ。「一たい君は何者です、そして何を言つてゐるのです。まるで、豫言者か何ぞのやうな口吻だ、ばか／＼しい！……そんな事は滑稽ぢやありませんか！……戦ひを宣するのだの、呪ふのだの、誰が君の言ふ事などに耳を貸すのですか……そして、誰がそんな事を本當にするのですか！ 一たい君は何のために、そんな奇怪千萬な思想を抱いてゐるんですか？」

「何のためですつて？ さうですね、まあ、千年もたつた頃に墓の中で目を醒まして、こゝの小山に軍隊の屠殺所、あすこの川邊に疲憊し盡した人間のうよ／＼してゐる工場、また向かうの森の中に墓場か、病院か、瘋癲病院が立つてゐるのを見ながら、『それ見ろ、おれの言つた通りぢやないか！ それだのにお前たちは聞かなかつたのだ……まあ、自分で自分を責めるがよい！』と言ふ權利を得るためだ、とでもして置きませうよ……もつとも、たつた一つ君の言はれた事で、正しいところがあります。ほかでもない、わたしは餘り夢中になり過ぎた。我々がこゝへ集まつたのは遊山のためで、決して争論のためぢやありません。もう澤山です！」

ナウーモフは口を噤んだ。

それは長い緊張した沈黙であつた。この陰鬱で野蠻な言葉は無数の幻像と、瘡癩的な思想の戦慄を呼び醒ましたのである。多分たれ一人として彼に同感したものはなく、みんな彼を單なる偏執狂か、さなくば、殊さら誇張した言辭を弄ぶ人と見たであらう。しかし彼の言葉の中には、ちやうど秋風に吹かれる枯葉の如く騒ぎ立つた思想が、蒼鬱めた人間の魂の中でくるくると荒れ廻るやうな、さういふ風なところがあつた。

「その理想を何と言つたらいいのでせう？」チージュが一番に沈黙を破つた。

「最も偉大なる人道主義と言ふべきです。」とナウイモフが猶豫なく遮つた。

「結構な人道主義だ！小柄な大學生は毒々しげに叫んだ。「全人類に絶滅を勧める人道主義か！ちよつ！」

「目下、地球の上には無数の人間が住んでゐます……まあ、假りにそれを數十億人として置きませう……しかし、どれくらゐ多くの不幸な人達が、來るべき世紀に於いて自分の順番を待ち設けてゐるか、まあ、想像してご覧なさい！かうした苦しめる人々の巨大な群れを、想像する事が出来るのでせうか？彼等は事によつたら、宇宙のはてからこつ

ちへ來てゐるのかも知れませんが。實際、錐を立てる隙間もないほどの恐ろしい数です……彼等のために、僕は人類の絶滅を説いてゐるので、この思想こそ、これまで人間の頭腦が生み出したものの中で、最も人道的な思想だと思ひます！」

チージュは呆れたやうに兩手を擴げた。

彼の頭の中には、數限りない駁論がうよく／＼してゐた。そしてその一つ／＼がこの熱に浮かされたやうな、病的な思想を粉碎するに充分らしく思はれた。が、どうしたものが、言葉が口へ出て來なかつた。チージュの知つてゐること——未來に於ける社會主義の勝利とか、自由とか、平等とか、友愛とかいふやうな事は、すべてこの場合に當て筋まらなかつた。彼は今はじめて、自分の思想には何か理窟つばい所があつて、生きた人間らしい肉がないといふ事を悟つたのである。この場合としては、どうしても肉體から出た駁論でなければならぬ。極めて單純な動物的生活の喜びから出た言葉でなければならぬ。ところが、小柄な大學生にはかうした言葉が見當たらなかつたのである。「その通りだ！」今まで無言のまま陰鬱な充血した目で、ちつとナウイモフを見つめてゐたアルブゾフが、出し拔

けにかう叫んだ。「あゝ、このばかげた地球に四方から火をつけて、風のまに／＼燃え擴がらせたら、さぞいゝ氣持ちだらうになあ……あき／＼しちやつたあ！……こんな世界なんか呪はれるがいゝゝ」

「それはたゞ言つて見るだけの事です。薄い唇を大儀さうに動かしながら、チージュが反駁した。「君方はみんな人生を呪つてゐるけれど、もしちよつと喉でも痛くなつたら、すぐ醫者のところへ駆け出すんですよ……そんな事なら、無駄なお喋りで時間潰しをする事はいらぬ。」

「僕の見るところでは、」メフィストのやうな眉を高く吊り上げながら、クラウゼ少尉補が冷や／＼にかう言ひ出した。「それは論駁にならないやうです……」

「無論です。」とナウーモフは疲れたやうに應じた。その目の中の輝きはもう消えてゐた。「僕はもうあのとき、死は恐ろしいと言つたぢやありませんか。それは自然の法則です。それがために、かつて以前極端に自分の思想に熱中して、人々に自殺の欲望を喚起しようと努めたときも……いや、自殺は餘り苦しいです、餘り惱ましい事です！……どうしても別な方法が必要ですが、それもやがて見つかるでせう……われ／＼現存せる人間としては、新しい不幸な人間を

作り出したたり、未來の黄金時代を約束して、他人を欺くやうな事をやめれば、それだけで澤山ですよ。」

チージュはまたもや論戰を始めた。丁度ナウーモフの言葉が、自分で自分に一生懸命かくしてゐた、痛い所へ觸れたかのやうに、彼は恐ろしく癩癢を起こして了つたのである。ナウーモフは黙り込んでゐる。クラウゼ少尉補は眉をびくびく動かしながら、チージュに辯駁を試みた。たゞ醫師のアルノルデイは、だぶ／＼した袋のやうな皺の中に隠れた、えたいの知れない惻巧さうな目で、二人の者をかはる／＼見較べてゐた。しかし一體どちらに同感してゐるのか、見當がつかかなかつた。

## 三三

ミハイロフは、ナウーモフとチージュとの論争を聞きながら、頻りに物おもひに耽つてゐたが、ナウーモフが口を噤んだとき、まるで腹を立てた鷲のやうに敵に食つてかゝる大學生と、クラウゼの議論に耳を假すのをやめて了つて、怪訝の念を抱きながら、とつぜん心の底に動き始めた憂愁に、耳を澄まし始めた。この奇妙な偏執狂が彼の心に、何かしら病的なある物を呼び醒ましたのである。それは恐ろ



しいやうな氣持ちだつた——緑の森や、明るい夕空や、靜かな川の蔭から、何か黒い幻影が不意にさし覗いたのである。論争せる人々の聲は鋭く無意味に、慄へをのゝく白樺の細い枝の下で響いた。

ミハイロフと並らんで坐つて、川の方を眺めてゐたミィシユカは、突然びくりと身慄ひして、體をもぞ／＼させながら、顔を赤くした。ミハイロフはその視線に引かれて、何げなく振り向いたと思ふと、忽ちすべての想念を掻き消すやうに、血がかつと頭へ昇るのを感じた。

白樺の幹の間から、まるで繪のやうにくつきりと、白い砂洲と、太陽の名ごりの光線を受けて薔薇色に輝く、滑らかな水の面と、砂の上に投げ捨てられたジェーネチカの赤い着物と、すつかり眞裸で岸の上につきくと立つた、彼女自身が見えたのである。

彼女は人に見られてゐる事を知らないらしく、夕日の光りに軽々と照らされながら、落ちつき拂つて砂の上に立つてゐた。そして、後頭部に束ねられた黒い髪の毛から、輕と水際みづぎに立つた足の爪まで、あり／＼と窺はれるのであつた。細く白い兩手は頭の後ろへ廻されて、指を黒い毛の中に絡ませ、眞ま中に柔かい肉感的な曲線を描いたしなや

かな背は、軽く美しい努力にぐつと曲がつてゐた。そして、頭はまるで向かう岸の遠い何物かを見つめてでもゐるやうに、うしろの方へぐいと反そらしてゐた。

ミハイロフはあたりがすつかり暗くなつて、何もかも一塊りに消えて了ひ、刹那の歡喜と興奮に燃える目の前には、たゞ彼女ひとりだけ——滑らかな砂洲の上に立つた髪の毛の黒い、薔薇色の體をした裸美人だけ——残つたやうな心持ちがした。

彼はふと皆が見てゐるのに感づいて、我に返つた。アルブゾフの黒い目は、何か妙な表情をして、彼を眺めてゐた。

「よう、畫家が見み惚ぼれてゐるぞ——わざと皆に聞かせるやうな大きな聲で、彼はかう言つた。

ミハイロフはかつとした。アルブゾフの聲の中に、何か人をばかにしたやうな調子を感じられた。なぜか皆が彼女を見るのが、厭なやうな心持ちがした。しかし、クラウゼとトレニョフが、彼の視線を辿つて振り向いた時には、もう岸の上に人の影も見えなかつた。川は靜かに消えるやうに暗くなつて、水面の波紋も次第に收まつて行き、遠い對岸は隴たかろに霞かんで來た。太陽は沒した。

間もなくジェーネチカが姿を現した。彼女はもう例の赤い着物を着て、冷たい水のために薔薇色になつた顔を、にこにこさせながらやつて来た。彼女の體からはすがすがしい匂ひが發散して、廣い着物の襟あきからは、さつぱりした、弾力に充ちたやうな胸の一部が覗いて、下の方は赤い布の中に柔かく消えてゐた。

「あゝ、こゝで水を浴びると、本當に何とも言へない、心持ちですわ、皆さんに知らせて上げたいやう！」まだ遠い所から、彼女は樂しげにかう叫んだ。「お茶を頂戴な、お茶を！」喉が渇いて死にさうなの！」

彼女の所へ茶のコップが運ばれた。エヴゲーニヤは卓の上に低く屈み込んで、小刻みに少しづつ飲みながら、黒い沾んだやうな目で、一同を額こしに眺めてゐた。

「あなた方は今こゝで、何をあんなに喧しく議論してらしたの？」

「人類の運命を論じてゐたのです！」とチージュは皮肉な調子でかう言つて、嘲るやうにナウーモフを振り返つた。

「へえ、人類ですつて？」とエヴゲーニヤは笑ひ出した。

「それは餘り大き過ぎるわ！……それよか、一つ自分の運命でも論じようぢやありませんか……ねえ、皆さん、わたし

の母はツプシイですから、わたし占ひが出来るんですの！……お好みなら、占つて上げますよ。」

「僕の方からあなたを占つて上げませう！」とダギヂェンコが言ひ出した。「手を貸してご覧なさい。」

「あなたお出来になるの？」

「そりや自分から言ひ出す以上、出来ないでどうしますか！」小さな爪を綺麗に磨いた、可愛い薔薇色の手を取りながら、大學生はかう言つた。一同は我ともなしに、妙な面白い線がふつくりと可愛く印せられた、小さい薔薇色の掌を眺めてゐた。

「結婚はしなざらんでせう。」ダギヂェンコは肩を擧げながら、まるで豫言者のやうな調子で言ひ出した。「百まで長生きされますね……戀ひもしなさるでせう……幾たりも良人をお持ちになりますよ。」

「幾たりも良人を持つとは、どういふ譯ですの？」ジェーネチカはからりと笑ひながら叫んだ。「だつて、結婚しない」と仰しやつたぢやありませんか！」

「それは結婚の話ですよ。」ダギヂェンコは小露西亞の訛りで、澄まし返りながらかう答へた。「しかし良人は幾たりもお持ちになりますよ……一人、二人、三人……四人……」

…七人……十人……十五人……二十二人……」

「それは失禮ですよ！」ジェーネチカは手を掻き放しながら、氣でもちがつたやうにから／＼と笑ひ出した。

「手の筋がさう出てるんですもの、僕が悪い譯ぢやありません！……」

ひよろ長いクラウゼは、無言のまま草原を歩き廻つてゐる、ナウーモフの傍へ近寄つた。

もうあたりは暗くなつて、以前はたゞ煙ばかり立ててゐた焚き火が、何か考へ込んだやうな白樺の下枝へ、ちらちらと飛び移るやうな光りを投げてゐた。この不規則な赤い反映の中に、少尉補の細長い蒼ざめた顔は、そのどす赤い半面で、妙な響めつらをしてゐるやうに思はれた。

「どうかお願いですから、」彼は冷ややかな聲で、ナウーモフに言つた。「あなたの理想をもつと悉く話して頂けませんか。」

ナウーモフは再び彼の顔を試すやうに見つめて、何やらちよつと思案した。

「一體なにが知りたいと仰しやるんですか？」彼はきつぱりと訊ねた。

「今ぢやありません……あとでまた……」と答へて、少尉

補は向かうへ行つて了つた。

ナウーモフは物思はしげにそのうしろを見送つた。次第々々に暗くなつて行つた。細い白樺は息の窒るやうな、無意味な一つの塊に溶け合つて、樂しげに無邪氣さうであつた林は、鬱鬱とした暗い森林のやうに見えて來た。

草の傍では、火に照らされた人々の顔が、奇妙にちらついて、黒い影法師が、硝子鉢の中で弱々しく燃えてゐる蠟燭の光りを蔽つた。

エヴゲーニヤは大きな聲で笑つたり叫んだり、男たちをからかつたりしながら、草原の中を駈け廻つてゐた。彼女の赤い着物は、物蔭に入つた時は黒くなり、焚き火の光りを浴びた時は、不意に燃え立つやうに見えた。笑ひ聲と叫び聲は、靜かな森の遠くまで響くのであつた。

「見給へ！ 見給へ！」といふミーシュカの聲が、どこからか闇の中に聞こえた。

彼の立つてゐる急な切り岸から村の焚き火が見え、大勢の人聲が川越しに聞こえるのであつた。それは何やら歌つてゐるのであつたが、その歌はこゝから聞くと、しめやかに美しく感じられた。何かしら黒い影が、遠い焚き火の焰の上でちら／＼した。焚き火は時に消えさうになつたり、

時にばつと明るく星のやうに燃え上がつたりした。

「あれは一體なんでせう？　まあ、何て綺麗なんでせう！」  
切り岸のすぐ傍まで飛んで行きながら、エザゲーニヤはかう叫んだ。

遠い焚き火の反映は、恐ろしいほど大きく、冷たさうに見える暗い川を越して、彼女の着物と、白い顔にきら／＼と光る黒い目を、微かに照らし出した。

「あゝ今日はクバラ（洗禮のヨハネ誕生 前夜の國民祭禮）ですよ！」とダギヂェンコが思ひ出した。「一つ僕らも焚き火を飛ばうぢやありませんか！　ミーシュカ、やらうよ！」

「いえね、それよりかうしよぢやありませんか……」闇の中でジエネチカがよく透る聲で、命令するやうにかう言つた。「ひとつ、あの村へ行つて見ようぢやありませんか……わたしまだ一度も見た事がないんですもの……ヨハネの晩の焚き火つても……」

「ぢや、川を飛び越しなさい。」おどけた調子でダギヂェンコが勧めた。「さあ、一……二……」

「渡し船で行けますよ。」とアルブゾフが陰鬱な聲で提言した。「こゝに渡し船があるんです。」

「行きませう、行きませう……あなたは本當に可愛い人ね

……わたしあなたを愛して上げるわ。歡喜の餘り夢中になつて、ジエネチカは彼の手を取つた。

「いゝですか、愛してくれなさいけませんよ……」アルブゾフは暗い微笑を浮かべながらかう言つた。「パーゼル！」と森ちゆうへ響き渡るやうな聲で叫んだ。「渡し船を呼んで来い！」

やがて、取者のパーゼルが足を踏み込らして、砂や小石を水の中へどぶ／＼落としながら、川の方へおりて行く物音が聞こえた。

「渡し船……おーい、渡し船！」と彼はどこか下の方で呟つた。

「ねーえ……え……」遠く川の上で木精が返した。

「ダギヂェンコ、一つ君やれよ！」とミーシュカが勧めた。

巨大な體をした大學生は、切り岸の端へのそ／＼出て行つて、兩手を口へ當てながら、向かう岸までわつと響くやうな聲で呟つた。

「おーい、おーい！……こつちだ、こつちだ！……」

「まあ、あなたは……耳が潰れさうだわ！」ジエネチカはから／＼と笑つた。

「あーあーあー」どこかで憎えたやうな木精が、はつき

りと響いた。

「どえらい聲だなあー」アルプーゾフは陰鬱な調子で、感心したやうにかう言つた。

向かう岸では依然として歌聲が靜かに響き、焰の舌が光つたり消えたりしてゐた。川は廣々とした曠野の冷氣と、謎のやうな力を吹き送りながら、音もなく暗澹として流れてゐた。何かしら黒いものが向かう岸を離れたと思ふと、何となく明るくなつたやうな水の表面を、靜かに切り始めた。

「なんて恐ろしい船でせうー」とエヴゲーニヤは言つた。

渡し船はだん／＼黒く形を現して、ちよつと見ると、動いてゐるやうに見えないけれど、次第々々に大きくなつて來た。そして、船と岸との間の明るい帯は、次第に狭まるのであつた。太い綱がぎし／＼軋んで、船頭の百姓たちの呼び交はずたい聲が聞こえた。

一同は水際の方へおりて行つた。エヴゲーニヤは大きな聲で笑ふ拍子に、危く傾斜から立ち落ちさうになつた。

「掴まへて頂戴……落ちるわー」と彼女は叫んだ。

「手をお出しなさい。」姿の見えないダヂヂェンコが太い聲でかう言つて、まるで熊のやうに彼女の方へ這ひ寄つた。

「え、こん畜生！」どこかでトレニョーフの叫ぶ聲が聞こ

えた。多分ずる／＼と立ち落ちたらしく、土がざら／＼と崩れて、石ころが水の中へ落ちる音がした。

渡し船の巨大な黒い塊りが、ぎし／＼綱を軋ませながら、岸の傍でゆら／＼揺れてゐた。一同は笑つたり、巫山戯たり、冗談を言つたりしながら、足の下でぐら／＼揺れる、腐つた板の上に乗つた。顔の見えない黒い百姓どもは、岸から岸へ渡した綱を手繰り始めた。渡し船はまたきし／＼と軋み出して、船と岸との間がだん／＼遠くなり、明るい水の帯が現れて來た。

「わたしたち沈みやしないでせうか？」息の窒りさうな好奇心をもつて冷たい水の底を眺めながら、エヴゲーニヤはかう訊ねた。水の上には赤い焚き火の影が慄へ、深い底の方では、蒼い星がくる／＼舞つてゐた。

歌聲はだん／＼高くなつて、ばかげた而も詩的な小露西亞の歌の文句さへ、聞き分ける事が出來た。低いバスが激むやうに響くと、溢れるやうな甲高い女の聲が、だん／＼高調子になつて行く。澤山の焚き火は物凄しい焰の舌を投げながら、炎々と燃え盛つて、薔薇色の光りを浴びた白い百姓家は、暗い水を見おろしながら、岸の上に立つてゐた。

一行が焚き火のすぐ傍へ近づいた時、とつぜん歌の聲は

びたりとやんで了つた。火のために奇怪に見える幾十かの顔が、どこからともなく不意に現れた旦那方を、四方からじろく眺めてゐた。そして闇の中いたる處に好奇に充ちた、といふより、寧ろ敵意を帯びた目が光つてゐた。

「まあ、これは何といふ事でせう……」失望したやうにエヴゲーニヤは言葉じりを引つ張つた。「みんなわたし達にびつくりしちやつたのよ！」

打つ棄られた焚き火は、見る／＼中に燃え盡きた。黒い枯れ枝はばち／＼はぜながら、身を跳いてゐた。色とりどりの冠を徴つてゐるために、恐ろしく可愛らしく、また同時に野性的に見える娘や若い男たちは、目を圓くして旦那がたを眺めてゐた。同じやうに華美な服装をして、野性的な夜の情景に紛れ込んだ一行は、どうしていゝやら分らないで、何となく手持ち不沙汰に感じながら、一塊りになつた。まづ第一番にダギチェンコが、言ふべき言葉を見つけた。「おい、何だつてお前たちはやめて了つたんだ……」と彼は叫んだ。「さあ、飛ばうぢやないか……エヴゲーニヤさん……さあ！」

若い婦人は笑ひながら男たちの後ろへ隠れた。輝かしい目を持つた彼女の美しい顔に、赤い焚き火の光りが落ちて、

同じやうに野性的な感じを帯びて來た。何だか赤い身幅の狭い着物をきて、つや／＼した鐵色の靴を穿いた都會の婦人ではなくて、一種不思議な美しい夜の女のやうに思はれたのである。

「さあ、皆どうしたんです……さあ……おいミーシユカ、やれよ！」とダギチェンコは叫んだ。

「君、始めろよ。」どこか後ろの方で、ミーシユカが音なしの聲で應じた。

巨大な體をした大學生は、一目散に駈け出して、ちよつと軽く飛び上がったかと思ふと、勢ひよく火の上を跳り越えた。と不意に思ひがけなく、小柄なミーシユカがどこからか浮かび出て、鳥の羽よりも軽く焚き火を飛び越した。

「さあ、エヴゲーニヤさん……本當にあなたどうしたんです！ それはいけませんよ！」どこからか闇の中から歸つて來たダギチェンコが、息を切らせながらかう言つた。彼女はから／＼と笑つた。その目は希望と羞恥に輝いてゐた。

ひよろ長いクラウゼが前へ進み出て、もの／＼しげな顔つきで焚き火に近寄り、けどんさうにメフィストじみた眉を吊り上げながら、まるで鶴のやうにのそりと火を跨いだ。

群集の中で笑ひ聲が起こつた。

突然うしろから誰かに突かれたやうに、エヴゲーニヤは黒い靴や、すらりと絹靴下が見えるくらゐ、高々と着物の裾をかまぐけて、軽々と火の傍へ駆け寄つた。赤い斑點がひらりと舞ひ上がつたと思ふと、焰があふりを食つて地に靡き、靴下の上の薔薇色をした細い腿が閃いた。と思ふと、もう火の向かう側の煙の中に消えて了つた。すると火は再び勝ち誇つた、楽しい笑ひ聲のやうに、ぱつと明るく燃え上がったのである。

「ひや、ひや、ひや！」ダギヂェンコや、トレニョーフや、ミーシユカや、その他の者はかう叫んだ。

それはちやうど何かの堰を破つたやうであつた。娘らは袴を風に煽らせて、あらはな足を殆ど腰の邊まで見せながら、かはる／＼ジエーネチカの後に續いて飛び始めた。誰かしら一人の若者も飛んだ。ダギヂェンコがまたもや重々しく跳り越えようと、まるで縛り付けられた者のやうに、髪を振り亂した小柄なミーシユカが、その後からひらりと身を跳らした。何かしら氣ちがひめいた歡喜の情が、一同を襲うたのである。顔を眞赤にして髪を振り亂し、何とも言へないほど美しく見えるエヴゲーニヤは、駆け出したり、飛び

上がったたり、きやつ／＼と笑つたりした。若者らは枯れ枝を投げ込んだ。と、火は高々と悦ばしげに燃え上がった。

二人のいたづら小僧が、兩方から一目散に駆け出して、眞ん中で鉢合はせをしたので、危く火の中へ落ちさうになつた。崩れるやうな笑ひ聲は、草原の上に絶えずとよめいて、煙と火花は盛んに空へ立ち昇り、一種異様な楽しい祭日の氣分が、闇の夜の中に充ち渡つてゐた。ぢつとして動かぬ冷たい星が、上の方からこのお祭り騒ぎを見おろしてゐると、下の方からは音のない暗い川が、濕氣を吹き送るのであつた。

やがて到頭みんな疲れて了つた。エヴゲーニヤは重々しく息をつき、目をきら／＼と輝かしながら、いきなり草の上へばつたり倒れて了つた。

「もう駄目！」と彼女は呻くやうに言つた。

### 三三

再び一行は渡し船に乗つて、暗く冷たい水を横切つた。焚き火の光りは次第に遠く鈍くなつて、明るい水の帯はだん／＼擴がつて行つた。もう一ど歌の聲が聞こえたが、すぐにだん／＼細くなつて行つた。

興奮、喧囂、激動、焚き火の輝き、火を飛び越える人々の妙に美しい野性的な姿——かういふ印象を経験した後の夜は、奇妙に美しく莊重に感じられた。星は靜かに瞬いて、川は神祕めかしく滑らかにひた／＼と騒ぎ、勝ち誇つたやうな、自由の氣に充ちた靜寂は、あたりを包んでゐた。

岸の上には、もう車に駕けられた、目に見えぬ馬が鼻を鳴らして、アルプーゾフの三頭立の鈴が、微かに音を立ててゐた。

「もうそろ／＼引き上げてもし、時分ですよ。疲れて幸福な心持ちで歸つて来た、若い人達を迎へに立ち上がりながら、醫師のアルノルチイはかう言つた。「どうでしたね……面白かつたですか?」彼はエヴゲーニヤに優しく聞いた。

「まあ、先生、そりやようござんしたわ!……どうしてあなたいらつしやらなかつたの?……え、全くよ!」

「なあに、わたしはこゝで麥酒を飲んでゐましたよ!」と肥えた老醫師は平氣な聲で答へた。

「わたし家へ歸りたくないわ!」若い婦人は、無理に寢床へ連れて行かれる子供のやうに、訴へるやうな調子でかう言つた。

「ねえ、どうでせう。」とダギヂェンコが言ひ出した。「馬は

後からぼつ／＼ついて來させて、われ／＼は少し街道つたひに、歩いて行かうぢやありませんか。」

闇の森、こしは骨が折れた。黒い木が思ひがけない所へ、亡靈のやうにぬうつと立ち塞がつたり、平地のやうに見えた所に變な穴があつたり、木の根に躓いたりした。その度に、一同は面白さうに笑ふのであつた。やがて森を出はづれて、野原づたひに歩き出した。廣野の風はそつと氣まゝに人々の面を吹いた。

「あゝ、何ていゝ氣持ちでせう!」エヴゲーニヤは、ダギヂェンコとミハイロフと一緒に、先頭に立つて歩きながら、絶えず聲高に笑ひ續けるのであつた。「もうこの上に申し分がないほどいゝ氣持ちだわ!」

「ねえ、ちよつと、」暫く考へた後、彼女は言ひ出した。「わたし達めい／＼で、今夜よりもつと面白い事を、話し合はうぢやありませんか……一ばんいゝ事を……一生の中にどんな事が一ばん望ましいかつて事をね。」

「僕は……」とダギヂェンコはどつしりした低い聲で言ひかけた。

「いえ、待つて頂戴、わたし自分で言ひますわ!」とエヴゲーニヤは彼を遮つた。「あなたに取つては……あなたは



世界ちゆうで誰よりも、一ばん強くなりたのでせう、つまりよく言ふやうに、何でも自分の双肩に背負つて立ちたいんでせう……」

「いや、これはどうも、」ダギチェニコは侮辱されたやうに言葉返した。「あなたは僕をすつかり、その……」

「あゝ、さうく〜！」ジェーネチカはからく〜と笑ひ出した。「勘忍して頂戴……あなたは革命の勝利と、人民の解放を望んでらつしやるんだわね？ さうでせう……當たつたわ。どうしてすぐに察しなかつたのでせう……」トレニョーフさんはその鬚が、丁度この白樺みたいに延びればいゝと、思つてらつしやるのよ。」

一同はどつと笑ひ出した。トレニョーフは困つたやうに、暗闇の中で自分の鬚を引つ張つた。そして、彼女の想像がどれくらゐ眞實に遠いか、といふことを考へたのである。

「アルノルチイさんは、皆が構はず打つちやつといてくれればいゝ、と願つてらつしやるし、チージュさんは、皆が社会民主黨になつてくれればいゝ、と思つてらつしやる。またアルブーゾフさんは、世界ちゆうの人間を生きたまゝ、丸呑みにしたいと思つてらつしやるんでせう……ミハイロフさんがほしいのは……」

「あなたです〜」やつと彼女だけに聞こえるくらゐな小さい聲で、思ひがけなくミハイロフがかう囁いた。

「それは失禮だわ〜」少しもきまり悪さうな様子なしに、ジェーネチカは早口にかう答へた。

「この人は何を言つたんです？」とダギチェニコは好奇の色を浮かべながら訊ねた。

「何でもありません……ばか〜しい事なの〜」とエヴゲニーヤは早口に答へたが、その聲の中には、何かしら奇妙なる物が響いてゐた。まるでミハイロフの言つた事が、嬉しいかなんぞのやうであつた。

「ナウーモフさんは……」とジェーネチカは語を續けた。

「人間が皆くたばつて了へばいゝと思つてゐます〜」チージュが闇の中から、嘲るやうな聲でかう引き取つた。

「ある程度までは眞實です。」とナウーモフは落ちつき拂つて口を入れた。

「まあ、それはあまり残酷すぎますわ〜」とジェーネチカは笑ひ出した。「生きてるのがこんなに面白いのに、何だつてそんな事を……」

「ところで、クラウゼは自殺したいと言つてゐます……」突然どこからかミーシュカが、ふざけた調子でかう叫んだ。

闇の中では人々の話し振りが奇妙に聞こえた。何だか他人の聲で他人の言葉を語つてゐるやうだつた。そして、妙に心持ちがうき／＼して、ふざけたり笑つたりしたかつたのである。誰やら議論を始めた。ある者は群れを離れて、あとの方になつた。あるものは先の方へ行つて了つた。遙か野の方で叫んだり、笑つたりする聲が響いた。

ミハイロフは、ダビデニコとジェーネチカの、少ししろに立つて歩いた。彼の前には、歩く度にゆら／＼と揺れる、彼女のほつそりした腰の邊が、闇の中で臍はらけに見透みかされた。赤い着物は今もうすつかり黒く見えて、黒い髪の下の頸筋のみが白々と浮いてゐた。彼女の體からは香水の薫りと、それから人を興奮さすやうな、いき／＼した何かの匂ひが發散した。

ミハイロフはこの白い頸筋と、細い腰のく／＼りを見てゐる中に、何だかちつと抱きしめたいやうな氣がした。この美しい大膽な女が胸を躍らすやうな、皮肉な言葉を掛けて見たかつた。彼は今なら色々な事が言へると直感した。ダビデニコがチージュと何やら議論を始めた時、ミハイロフはエヴゲーニヤに追ひついて、興奮のために思はず體を慄はせながら、小さな聲でかう言つた。

「エヴゲーニヤさん、あなたはもしや誰かが、水を浴びてる所を見やしなかつたかと、氣にかゝりはしませんか？」  
「まあ、何といふお訊ねでせう。」彼女はくるりと振り返つた。

黒い目は奇怪な表情を浮かべながら、まともにミハイロフをひたと見つめた。ミハイロフは目をそらさうとしなかつたので、ちよつと一分間ばかり、二人は無言のまゝ互にぢつと睨にらみ合つてゐた。やがて何かある物が、エヴゲーニヤの黒い目の中を、ちらと掠すめて走つた。きつと心持ち顔を赤くしたのだらう。ジェーネチカは男の目の中に、まるで鏡にでも映つたやうな自分自身の姿を認めたのであつた。それは彼の無恥な、欲望に燃える視線をまともに浴びた、眞裸な姿である。

「わたしなんにも氣に掛けやしませんわ！」不意に彼女は挑ひむやうな調子でかう言つて、ちよつと首を振つたかと思ふと、から／＼と笑ひながら、先の方へ駆け出して了つた。  
「先生！ どこにいらつしやるの？……何だつてわたしを打つちやつてお了ひになつたの！」かういふ彼女の恐ろしく響きのいゝ奇妙な聲が、ミハイロフの耳に入つた。そして、どういふ譯か、彼はジェーネチカの目がぎら／＼光つ

て、鼻の孔が擴がつてゐるやうに感じられた。

馬車の傍で誰と誰と一緒に乗る、といふやうな議論をしてゐる間に、ミハイロフはジェーネチカに追いついた。肥つた醫師は老人のやうに喉を鳴らしながら、二人の者にはまるで目もくれないで、馬車に腰をおろしてゐた。

「セルゲイ、君は僕と一緒にだよ……こつちへ來給へ！」向かうの方からアルブゾフが叫んだ。

「今すぐ。」とミハイロフは答へた。「ぢや、さよなら。」微笑を浮かべて兩手を差し出しながら、彼はエツゲーニヤにかう言つた。

彼女はこの男らしく美しい顔を、記憶に刻まうとでもするやうに、ぢつと彼を見つめてゐたが、やがてにつこり笑ふと、決然たる身振りで、同じく兩手を差し出した。

「さよなら！」

ミハイロフはこの小さな、しつかりした暖い手を、長い間、何やら物でも言ひさうな手振りで、ぢつと握りしめながら、闇の中でさへきら／＼光る、黒い目を見つめてゐた。

「しかし、とにかく僕はあなたを見たんですよ！」情の籠もつた聲で彼はかう言つた。

エツゲーニヤはさつと心持ち顔を赤めた。

「ぢや、恥づかしいわ！」弱々しい羞恥の情と戦はうとでもするやうに、彼女は挑むやうな調子で答へた。

大膽な勇敢な心持ちが、波のやうにミハイロフの胸に漲つた。

「少しも恥づかしい事はありません……少しも！」白い齒を見せながら、彼は言ひ返した。「あなたには分らないでせうが、あの時のあなたはどんなに綺麗だつたでせう……まるつきり……素裸で……」強ひて抑へつけた興奮のために、慄へる聲で彼は言葉を結んだ。

「さうお思ひになつて？」と若い婦人は眞面目な事務的な調子で訊ねたが、不意にから／＼と笑つて、取られた兩手を振り放しながら、馬車の踏み段へ飛び上がった。そしてまるで呼び招くやうな、謎めいた奇妙な聲でかう叫んだ。

「オイ、ラ、オイ、ラ！ さよなら！」

馬車は動き出した。

ミハイロフは目くるめくやうな力と、青春と、漠とした希望に充ち溢れ、體ちゆうの神経を一本々々はつきり感じつゝ、自分を呼ぶアルブゾフの方へ駆け出した。

## 二四

襟頸のあらはな軽い白衣を身に纏ひ、薄色の髪に紗のショールを掛けたリーザは、晝室の眞ん中に立つて、無邪氣さうに肩を吊り上げながら、ちつと晝を眺めてゐた。

彼女は始めてかうした場景を見、始めて一人で男の所を訪問したので、恐ろしくもあり、面白くもあり、きまりが悪くもあつた。リーザは出来るだけ眞面目な顔をして、ミハイロフに注意を拂はないで、晝の方はかり見ようと努めたが、その手は遠慮さうにショールの端をくるく／＼振ちて、頬の上には軽く興奮したらしい紅が、浮かんだり消えたりするのであつた。

ミハイロフは彼女のうしろに立つてゐたが、たゞ軽い半透明な絹一枚で蔽はれたばかりの、健康な、水々しい女の肉體が間近にあるといふ事が、彼を興奮さすのであつた。

軽く日焼けのした、あらはな、丈夫さうな、すんなりした彼女の頬筋は、ちか／＼と彼の目の前にあつた。そして着物の襟首を剝り込んだ所には、まだ日焼けのしてゐない健康な肉體が、白々と條を描きながら、神祕めかしく隠れてゐた。目は我ともなしにこの小さな裸身の一片を這つて行つた。そして、彈力に充ちた新鮮な全身の、青春美に包まれてゐるあたりが見えないために、耐へ難い惱ましさを

覚えるのであつた。リーザが身動きすると、着物の下で背中や、柔かさうな細腰や、圓つちい肩などの曲線が、あちこちと動き廻るのが見透かされた。ちやうど湯あみでもした後のやうな、爽かな若い女の肉體の薫りが、彼女から發散してゐた。

とき／＼彼の貪るやうな無恥な視線を背中に感じるらしく、リーザはくるりと後を振り返つたが、ミハイロフと視線が合すると、眞つ赤になつて顔をそむけるのであつた。さういふ時の彼女は、何ともいへないほど可愛く優しい娘に見えるので、彼はもういきなり、接吻してやりたいやうな氣がするほどであつた。

「どうです、氣に入りましたか？」とミハイロフは聞いた。リーザはきまり悪さうな蔷薇色の顔を、肩ごしに彼の方へ振り向けながら、無邪氣な歡喜の色を浮かべて答へた。「當たり前ですわ！……なんていふんでせう……本當にあなたは幸福な方ですわねえ！……」

ミハイロフは微かに動く、紅い、水々した彼女の唇を、間近で眺めた。と、甘く優しい接吻の願ひが、殆ど耐へないほどになつた。きつと彼の暗い目の中に、何か危険らしい火が燃え始めたに相違ない。リーザは、突然われともな

しに、彼の目と唇を見て、それから更に目を見やつた後、大急ぎで畫の方へ顔を向けて了つた。ミハイロフは、房々した薄色の髪に隠れた彼女の小さな耳が、赤くなつたのを見ただかりである。

「さあ、どうです……もう畫を見るのは澤山ぢやありませんか……お坐んなさい。」と彼は言つた。「でない、わたしは自分の畫にやきもちを焼きますよ。」

もし娘がこゝに、自分の部屋の長椅子に腰をおろして、あの襟巻を取つたら、一そう近づき易くなるだらう、とミハイロフには思はれたのである。リーザもやはりそれを直感したのであらう、妙に恐ろしさうな様子で、腰をおろさうともせず、彼の顔を見るのを避けるやうに、避けるやうにした。

「いえ、わたしはほんのちよつとお寄りしただけですから……もうお暇いとましなければなりませんわ……」防禦するやうな調子で、彼女はおづ／＼言つた。

「一體あなたは僕にそれだけの事を言ふために、やつて來たのですか？」ちか／＼と女の顔を覗き込みながら、彼は試すやうに優しく訊ねた。

リーザはきまり悪さうに笑ひ出した。

「いゝえ……だけど、家の人が氣がつくかも知れませんが……わたしすぐ歸ると言つて置いたんですの……」

「お父さんやお母さんが怖いのですか？」ミハイロフはからかつた。その優しい聲の中には、

「どうせお前はおれの傍を離れることが出來ないのだ、ばかな娘だなあ……さうとすれば、早い方がいゝぢやないか！」といつたやうな調子が響いてゐた。

「わたし誰も怖こわかありませんわ！」とリーザは言つて、顔を赤くした。

「誰も、そしてなんにも？」目を細めながらミハイロフは聞いた。

「えゝ、なんにも！」半ば子供らしく強情にかう答へると、娘はまた顔を赤くした。

「どうですかね？」同じく謎のやうに、ミハイロフは言葉じりを引いた。「あゝ、あなたは實に大膽なお嬢さんだ……ぢや、それを實地に證明して見せて下さい……ひとつ僕と一緒に坐つてご覧なさい！」

彼は手を差し伸べて、薄色の髪にかゝつてゐる軽い襟巻ショールに觸つた。すると、男の手が觸れるのを恐れるやうに、ちよつと間隔を置くだけうしろへ退りながら、リーザは手を

縛らせ縛らせ、自分で襟巻をはづした。

「これでいゝんですの？……とここで、これからどうするんでせう？」安樂椅子に腰をおろしながら、彼女はかう言つた。

彼女はたゞ何か言ふために、機械的にかう言つたに過ぎないので、ミハイロフがにたりと笑ひながら考へたやうな、暗い無恥な意味を含ませたのではないらしかつた。

彼は返事もなしで、並らんで腰をおろしながら、そつと彼女の手を取つた。熱い柔らかな手は、彼の貪婪な指の中で靜かに慄へてゐた。彼女はその手を振りほどかうと思つたが、さうするだけの勇氣もなく、自分でも男の手を取つた。

それは彼に愛撫を示すためともつかず、男の手を抑へるためともつかぬ身振りであつた。ミハイロフが執拗な力を籠めて、優しく彼女を抱き寄せた時、彼女はとつぜん身を跳き始めたが、一思ひに突きのける勇氣もなく、自分の微笑を含んだ新鮮な唇を求めてゐる、男の熱い唇を避けるやうにしながら、薔薇いろの顔を彼の肩に埋めた。この動作の中には、なんとなく頼りなげな、純潔な惻々として人を動かすやうなものがあつたが、ミハイロフはそんなものに動かされはしなかつた。たゞ一つの想念が、執念ぶかく彼の

心を領して、彼女に自分の顔が見えなくなつた時、彼は無恥な勝ち誇つたやうな微笑を浮かべて、自分で自分に笑ひかけた。彼はもう疾うの昔に、處女の羞恥に馴れきつた、貪婪な牡のやうな、この惨忍な微笑を押し隠しながら、そつと優しく彼女の首を持ち上げようと試みたが、どうしても駄目だつたので、薄色の髪の毛の渦巻いてゐる、丈夫らしい、あらはな頸筋へ、うしろから接吻した。

「あら、いけませんよ！」そつと深く男の肩に顔を埋めて、思はずその體に身を摺り寄せながら、彼女は途方に暮れたやうに囁いた。

「なぜいけないんです？」自分でもそれと氣つかず、同じく囁くやうな聲で、ミハイロフはかう聞いた。そして粗暴な貪るやうな口つきで、このあらはな頸筋を接吻し始めた。それは丁度ひやりとした、新鮮な皮膚に唇を接する事によつて、まだ自分の自由にならぬ裸身の味はひを、吸ひ取らうとするやうであつた。

「なぜでも……いけません……」とリーザは囁いた。

ミハイロフは熱くなつた。彼はリーザの接吻と匂ひのため、全身が緊張して、頭が燃えるやうな氣がした。彼の手はそつと氣のつかぬやうに（わざと氣のつかぬやうに）彼

女の肩をこつて、一そう強く抱きしめるやうな振りをしな  
がら、柔かな圓い乳の上の方に指で觸つた。

娘はこの接觸の意味を悟らなかつたが、ミハイロフがと  
つぜん大膽な粗暴な態度で、恥づかしげもなく指で彼女の  
體を握りしめたとき、リーザは急に身を振りほどいて、眞  
面目な悲しさうな聲で訊ねた。

「何のためにそんな事をなさるんですの？」

ミハイロフは彼女の強情なのが、いま／＼しくて堪らな  
かつた。この單純で無邪氣な娘は、彼の想像より以上に、  
長く抵抗を続けるのであつた。彼はいづれ遅かれ早かれ、  
ほかの女と同じ結末を見るに相違ない、と信じてゐたので、  
彼女が依然としてぐ／＼長引かせながら、自分を押し退  
けてゐるのが奇妙に感じられるのであつた。

「僕はあなたが好きなんです！」出来る限りの愛情と力を  
聲に含ませながら、彼はかう言つた。實際この場合肝腎  
なのは、言葉の意味ではなくて、聲の響きそのものだとい  
ふ事を、よく心得てゐたのである。

「なぜそんな事を仰しやるんですの？」ちらと男を見上げ  
ながら、一そう悲しげに、とはいへ臆病な希望の籠もつた聲  
で、リーザはかう言つた。「だつてそれは嘘なんではう！」

「いゝえ、本當ですよ！」女の臆病でいぢらしい表情には、  
一顧の注意も拂はないで、ミハイロフはかう言ひ返した。  
たゞ一つの想念、たゞ一つの欲望に捕へられた彼は、自分  
で自分が何を言つてるのか、分からなかつた。たゞ様々な  
言葉の響きに紛れて、再び彼女の肉體を領しようとして、それ  
のみに努めてゐたのである。

「あなたはたゞもう一つ、餘分な快樂がほしいだけなんで  
すわ……」と顔を隠しながらリーザは言つた。

「どうしてたゞそれだけなんでせう……」彼女の顔を持ち  
上げて、その唇を求めつゝ、ミハイロフはかう言つた。リ  
ーザがもう自分の手を恐れなくなつたのに氣ついて、彼は  
ひそかに残忍な悦びを感じた。やうやく女の顔を起こす事  
が出来たので、彼女が振り放す暇のない中に、熱い唇を新  
鮮な、沾みを帯びた女の口へびつたり押し當てた。リーザ  
は身をもがいたけれど、唇はぐつと強く女の口を壓し、逞  
ましい手はその體を抱へながら、搾め木のやうにしめつけ  
て揉み立てた。娘はこの力と執念に壓倒されて、抵抗しよ  
うとしなくなつた。そして兩の眼を閉ぢたまゝ、男の貪る  
やうな長い接吻のもとに、ぐつたりとなつて了つた。

唇で女の頭をだん／＼うしろへ反らせ、體ぜんたいを弓

のやうに曲げながら、彼はいつともなく

して了つた。娘はふと男の強いがつしりした體が、殆ど自分の上に

あるのに氣がつくと、名狀し難い恐怖に襲はれた。リーザは素早く身を振り放して、立ち上がった。ミハイロフは眞赤な顔をして、額に髪を粘りつかせたまゝ、同じやうに立ち上がった。

彼は目の中が暗くなつたやうな氣がした。そして、半分しめ殺した獲物を掻き取られた野獸のやうな、恐ろしい狂暴な表情が現れてゐた。

「わたしもう歸らなければなりませんわ……」突發的な身振りでシヨールを捜しながら、彼女はかう言つた。

ミハイロフは、餘り急ぎ過ぎたために、女が憎えて歸つて了ふかも知れない、といふ事を悟つた。

「ぢや、あなたは僕を愛してくれないんですね？」と彼は沈んだ聲で言つた。

リーザはちつと彼を見やつた。と、その灰色をした無邪氣な目の中には、何とも言へない従順な、優しい、悲しげな愛情が輝き出したので、ミハイロフはまたもや目がくらくらして來た。

「愛してないのです、無論、愛してないのです！」まる／＼

したあらはな手を握みながら、彼はわざとかう繰り返した。彼女は靜かにその手を掻き放して、なじるやうにぢつと相手を見つめた。が、やがて徐ろにシヨールを掛け始めた。

「何だか腹を立てたやうな風ですね？」と彼は言つた。

「だつて、自分の愛してゐない人を、接吻など出来る筈がないぢやありませんか！」彼女は傲然とかう言ひ放つたが、その瞬間、急に別人のやうになつた。今までのやうに無邪氣な若い娘でなくて、大人びた強い一箇の婦人になつたやうであつた。

ミハイロフは何と答へていいか、ちよつと分からなかつた。

「何だつてあなたは、あんな事を仰しやつたんですの？」やはり心を落ちつけて、侮辱を忘れることが出来ないといふやうに、娘はかう言葉を續けた。「それが嘘だつて事は、あなただつてご存じぢやありませんか！」

「ぢや、なぜあなたは僕を苦しめるんです？」復讐的にミハイロフはかう答へた。

「どうして？」とリーザは彼の方に無邪氣な目を上げた。「一體あなたには分らないんですか——男が一人愛するとなつたら、相手の女の全部を領有しようと望むのです



「…その肉體も…何かかも！」欲念のために齒を食ひし  
ばりながら、ミハイロフはかう言つた。「ご存じですか？」  
「知つてますわ…」首を垂れながら、娘は小さな聲で答  
へた。

「で？」ミハイロフは力を籠めてかう言つた。

リーザはすぐには答へなかつた。薔薇いろした唇の上で  
たゆたつてゐる言葉を恥ぢて、劇しい内部の争鬭を経験す  
るものゝやうに、彼女はさしうつ向いて了つた。

「で？」とミハイロフは繰り返した。

「で、その後は？」やつと聞こえるか聞こえないかの聲で  
かう訊ねると、娘はそのまゝ兩手で顔を隠して了つた。

ミハイロフは惨忍な貪慾な目で、彼女を眺めてゐた。そ  
の暗い目の中には、何か冷笑的なあるものが閃いた。もう  
幾ど彼はこの問ひを聞いたことだらう？

「あなたは恐ろしいのですか？」用心ぶかく彼はかう言つ  
た。

娘はうなづいて、一そう低く兩手に顔を隠した。

「もし僕がすまいと思つたら、そんな事はなくて済むんで  
すよ！」粗野な卑猥な調子で相手を慫慂させはしないかと、  
一語々々ためして見るやうな風つきで、彼は表情に富んだ、

露骨な調子でかう言つた。

娘は不意にせか／＼と落ちつかぬ身振りを始めた。ま  
るで堪らないほど暑く、息苦しくなつたやうである。

「わたし参りますわ…わたしとても…放して下さい…  
…」彼の傍を迂り抜けて、戸口へ行かうと努めながら、彼  
女は途方に暮れたやうに呟いた。

「ぢや、いらつしやい…歸つてお了ひなさい！」女が去  
つても、それは長い事ではない、と承知してゐるので、ミ  
ハイロフは殘酷にかう答へた。

「さよなら。」まるでどこかへ、何であらうと差別なしに、  
飛びかゝらうとするやうな勢ひで、リーザはかう言ひなが  
ら、戸の外へ出た。

ミハイロフは燃えるやうな目で見送つたが、やがてちよ  
つと考へて、彼女の後を追うた。

庭へ出ると、爽やかな空氣と緑の木蔭とが、二人の體を包  
んだ。空はさも自由さうに、美しく青み渡つてゐる。彼ら  
は何か堪らないほど息苦しく熱い爐の中から、外へ出たや  
うな心持ちがして、興奮も落ちついて來た。リーザはほゝ  
笑みながら、男の方を振り返つて、自分の強情を目で詫び  
るのであつた。ミハイロフも同様につこり笑つて見せた。

「ぢや、さやうなら、強情なお嬢さん！」と彼は優しく言ひながら、彼女の手を取つて接吻した。

すると、男の讓歩に對する報酬のやうに、彼女はいつもと違つて手を引かなかつた。

「お聞きになつて？」彼女は首を上げながら言つた。

ミハイロフは耳を澄ました。

「鐘が鳴つてゐますね！」規則たゞしく打ちかはす鐘の響きを聞き分けて、彼はかう答へた。

「哀悼の鐘ですわ……誰か死んだのですね！」一瞬間、目の中に莊重な色を閃かせながら、娘はかう言つた。

「なあに、勝手に死なせとくんですよ！……しかし、僕らはお互ひに生活しませうね！」なんの苦もない調子で、ミハイロフは答へた。

リーザは彼をちらと見上げて、ほれ／＼したやうに優しくほ／＼笑んだ。

「さよなら……」と彼女は囁いたが、まるで聞き取れないほどの聲で言ひたした。「愛しいミハイロフさん……」

それからくるりと踵を轉じて、頭に被つたシヨールを抑へながら、庭のくゞりをさして駈け出した。

## 二五

老教授イワン・イワーノヰッチは死んだ。

死ぬる三日ほど前から、彼はふつ／＼黙り込んで了つた。そして醫師アルノルヂイの來診も、びつくりしたポリーナ夫人の配慮も、彼を呼び醒ますことが出来なかつた。それは丁度、彼と生活せんたいの間に、何か目に見えぬ壁のやうなものが立つて、永久に彼を生者から引き離したやうな具合ひだつた。この壁の向かうで、誰ひとりとして理解することの出来ない、生と死の最後の戦ひが行なはれてゐるのであつた。

何か聞かれた時など、老人は殆ど言葉の間違ひもなく、極めて理路の通つた調子で、簡単に答へるのであつた。事によつたら、彼は始めて正しい意識に歸つて、漸くある何ものかを悟りながら、自分の本心を見抜かれまいと思つて、この恐ろしい祕密を胸に隠してゐるのではないか、と考へられるほどであつた。彼は幾時間も幾時間も、他人を煩はす事なしに、奇妙に化石したやうな、ぶる／＼と慄へる、まだら禿げの頭を兩手に載せて、ちつと目を閉ぢたまゝ、長椅子の上に坐つてゐるのであつた。

ポリーナ夫人はその傍を忙しさに動き廻つてゐた。まるで近い臨終を豫感したかのやうに、彼女は忽ち自分の想念も、疲勞も、すつかり忘れ果てて、愛情と憐愍に充ちた、つゞましい女になつた。そして、イワン・イワーノヰッチがよなく眞白な小さい體を起こして、寢臺の上になちよこなんと坐る時、彼女は寢たふりをしながら、夫を注視するのみで、一ことも物も言はなければ、寢かせようともせず、うるさく付き纏はうともしなかつた。

まるで永遠の靜寂の第一波が浸入したやうに、彼らの住まつてゐる小家の中では、息づまるやうな沈黙が、物々しげに凝結して行くのであつた。

ポリーナ夫人がちよつとでも身じろぎすれば、イワン・イワーノヰッチは、まるで盗むやうに、大急ぎで横になつた……そして、彼女が目を開ちて息を潜めるや否や、彼は再び起き上がつて、秘密めかしく妻の方を振り返りながら、床の上に坐り直し、落ち込んだ唇を恐ろしく早く動かし始めた。それは丁度せか／＼と忙しさに、いつまでも際限のない反芻をしてゐるやうであつた。

やつと暫かつた後ポリーナ夫人は、夫が祈禱をしてゐるのだと悟つた。それは實に思ひがけなく悲しい事で、彼

女は全世界が一變したやうな氣がした。

彼女はもう四十年間つれ添うてゐるけれど、イワン・イワーノヰッチが祈禱をしてゐる所など、まだ一度も見た事なかつたのである。彼はかつて教會へ行つた例がなく、宗教といふものを冷笑し、長老たちを愚弄し、辛辣な皮肉にみちた教會論を書いたものである。かつて餘り賢からぬ、信心ぶかい一婦人に過ぎなかつたポリーナは、神や宗教に對する夫の突飛な言行に、脅かされてしまつた。彼女は神罰を受けるに相違ないと信じて、夫と議論したものである。けれどその中にだん／＼馴れて來て、夫の影響のために自分も信仰の熱を失ひ、宗教といふものは長老や、教會や、十字架や、祈禱などと一緒に、二人の生活から離れ去つた——ちやうど彼らに取つて何の用もない、ばか／＼しいよその嫉みごとか何ぞのやうに。

以前ポリーナ夫人が病氣をした時も、親類縁者が死んだ時も、老教授の親友で世に知られた學者連がなくなつたときも、否、それどころか、この恐ろしいじり／＼病ひが始まつたときでさへ、纖細で冷靜な理智の持ち主たるイワン・イワーノヰッチが、祈禱だの、死後の生活だの、神だのといふ問題を考へようなどは、誰ひとり思ひ浮かべなかつたの

である。

けれど今はまるで別人のやうであつた。小つぽけな姿びきつた老人が、白い肌着一枚で、イワン・イワーノヴィッチの寢臺に坐りながら、夜のしよまの中で、誰ひとり生きた人間の目に入らぬやうに、不可思議な自分の思想と差し向かひで、一心に神に祈つてゐるではないか。

一度なぞポリーナ夫人は、夫がそつとあたりを見廻した後、手順を間違へながら、いそがしげに十字を切るのを見た。一べん十字を切つてかせ、ちよつと考へてまたもう一ど十字を切つた。それから何か合點したやうに、わな／＼と慄へる、死んだやうな、骨ばかりの指を、額と胸と兩肩に強く押し當てながら、頻りに十字を切り續けるのであつた。彼の唇はもぐ／＼動き、頭はふら／＼と慄へた。そしてポリーナ夫人は、忙しげな、祕密めかしい囁きを聞きつけたのである。

「神よ、汝の大慈大悲をもつて我を憫れみ給へ……神よ、何とぞ憫れみ給へ……」

きつと彼はこれ以上、何一つおもひ起こす事が出来なかつたのだらう。衰へた思想は力ない努力をしながら、記憶の表面を逸して了つた無邪氣な、熱烈な、子供らしい祈禱

の言葉を、過去の闇の中から呼び起こさうと骨折つた。けれども、それらの言葉は死んだもののやうに、忘れ去られて了つたのである。惱ましい心を抱いて、力ない老いの涙を流しながら、イワン・イワーノヴィッチは絶えず一つの事ばかり繰り返してゐた。

「神よ、汝の大慈大悲によりて我を憫れみ給へ……」

翌日、彼女は夫に何も言はなかつた。他人の手の觸れることを許さないやうな、一種不思議な神祕が、この夜半の祈りの中に感じられたのである。恐怖が彼女の全幅を領して、彼女はたゞ臆病げに夫を眺めるばかりであつた。

死ぬる二日前の晩にも、やはり同じ事が繰り返された。しかしそれには恐ろしい、不可思議なもの悲しい力が伴つてゐた。

もうだいたいぶ前から夜々消す事のない燈明が、薄ぼんやりと燃えてゐた。闇はほかの部屋々々に立ち罩めて、そこから息づまるやうな無氣味な目で、見張つてゐるやうであつた。ポリーナ夫人はそつと夜具の下で息を潜めてゐた。

二時間ばかりイワン・イワーノヴィッチは顔を上へ向け、重い頭を深く枕に埋め、死んだやうな骨ばかりの手を夜具の上へ載せて、まるで身動きもせずには臥てゐた。腹が落ち込

んで尖つた膝を立てた、瘠せてひよろ長い彼の體が、恐ろしくごつ／＼と毛布の下に描き出されてゐた。眠つてゐるのか考へてゐるのか、彼女には分からなかつたけれど、しかし何かある物がだん／＼近寄つて大きくなり、部屋を充たし胸を壓しつけるやうな感じがした。ポリーナ夫人は身じろぎさへ懼りながら、恐怖の餘り息を凝らしてゐた。一種の惡寒が彼女の足を傳つて心臓に近づき、ぐん／＼擦めつけながら、長い冷たい指で腦に觸るのであつた。彼女は聲を上げて、イワン・イワノギッチを呼ぼうと思つたが、言葉は喉の邊で消えて了つて、たゞ心臓ばかりが、もの狂はしいほど早く鼓動するのみであつた。

不意にイワン・イワノギッチは身動きした。ぶる／＼慄へる白髪頭が、まるで棺の中から出て来るやうにそつと持ち上がつて、ポリーナ夫人の方へ、鈍い死人じみた目を向けた。向けたと思ふとそのまゝちつとして了つた。燈明はまともに彼を照らした。何となく狡猾で意地わるらしい、どんよりしてゐるけれど、やはり生きた目を持つた、墓場から起き上がらうとするこの死人の顔は、何ともいへないほど奇怪に見えた。

ポリーナ夫人はみじろぎもしなかつたが、髪の前がざわ

ざわと騒ぎ始め、體が急にねば／＼と汗じんで、むづ痒くなつたやうな氣持ちがした。

イワン・イワノギッチは、ぢつと長い間ひと所を見つめてゐた。耳敏い靜寂は一刻々々を見守つてゐる。さうして、これがいつまでたつても果てしないやうに感じられた。やがて彼は靜かに顔を反けた。ごは／＼した毛の白い疎らに生えた彼の頭は、蠟人形の首のやうに徐ろに曲がつて、彼は寢臺の上へ起き上がつた。起き上がると、またあたりに耳を澄ましながら立ち竦んだ。あたりはしんとして、たゞ耳の中で何やらじん／＼鳴つたり、歌つたりするばかりであつた。

ポリーナ夫人は氣がちがひさうな氣がしたけれど、身を動かしたり、夫を呼び掛けたり、叫んだりする氣力がなかつた。

その時イワン・イワノギッチは、恐ろしい努力をもつて、關節の所が青みがかつて、指が死んだやうに黄色くなつた、細い骨だらけの足を持ち上げて、それを寢臺からおろした。紅や鈍の付いてゐる白い肌膚を纏つた、恐ろしくも滑稽な、瘠せた骸骨の上に載つてゐる死人のやうな頭が、無性に大きく思はれた。

彼は自分の足をどうかししようと腕うでいてゐたが、それがなか／＼出来ないらしかつた。彼は兩手を寢臺に突つ張つて、首を振りながら、わな／＼慄おそへて倒れさうになつた。到頭やつとの事で床を見つけて、力いっぱい立ち上がらうとした。このとき始めてポリーナ夫人は、彼がどこを見てゐるのか合點が行つた。一方の片隅には、疾はやうに忘れられてゐながら、過去の記憶として残してある聖像がかゝつて、その前には一度も火を入れた事のない、緑いろした切籠硝子の燈明が吊るしてあつた。ポリーナ夫人は、その中に埃がいつばい溜たまりまつて、死んだ蠅はがごろ／＼してゐるのを知つてゐた。

イワン・イワーノギッチは、慄おそへてがく／＼する足を踏みしめながら、背いつばいに立ち上がつて、もう一ど妻の寢臺を振り返つた後、そこへ膝を突かうとしたが、やはり持ちこたへる事が出来ないで、重々しくどつと下へ崩れた。そしてそこにへたばつたまま、骨立つた指で椅子に掴つかまりながら、ぢつとしてゐた。

前と同じ神秘な力が、ポリーナ夫人の喉のどもとで、叫びの聲を抑へつけた。どういふ譯か、これは誰も見てはならないものだと感じたやうに、彼女は固く目を閉とじた。

イワン・イワーノギッチは靜かに身を動かした。奇妙な骨立つた、こつ／＼い響ひびきが彼女の耳へ傳はつたが、彼女はなんの事か悟らなかつた。と、不意に半ば狂せるものゝやうな、熱烈な囁ささきが部屋の中に響いた。

「天にまします我らの父よ……汝のみ名を聖ならしめ、天に於けるが如く地に於いても、汝のみ國を來らしめ給へ……今日も我らにその日の麵麩めんぷを與へ、我らの負債おんがひを許し給へ……そは我らも……己れに負債おんがひあるものを許せばなり……父と子と精靈のみ名に於いて……神よ、汝の大慈悲に依りて我を憫れみ給へ……我らの債務おんがひを許し給へ……憫れみ給へ……神よ、憫れみ給へ……」

かうした言葉は奇怪に恐ろしく響いた。そして、老人めいた途切れ勝ちの囁ささきは、まぬかれ得ぬ苦しみの恐ろしい力と、耐へ難い苦艱くげんの響ひびきを帯びてゐるのであつた。

と、またもや奇妙な、こつ／＼した音が傳はつて來た。ポリーナ夫人は目を見開いたが、床の上にふわ／＼してゐる白いしみのほか、涙に遮られて何一つ見分ける事が出来なかつた。

イワン・イワーノギッチは黙り込んでゐた。白いしみは奇妙に伸び上がつて、ちやうど這はうとして腕うでいてでもゐる

やうに、もぞくと動いたけれども、今度はこそその音も聞こえなかつた。ポリーナ夫人はもう臥てゐないで、いつの間にか大きく目を見開きながら、胡麻鹽の髪を振り亂し、兩手を前へさし伸べたまゝ、寢臺の上に坐つてゐたのであるが、自分でもそれに氣がつかなかつた。

再び弱々しい骨ばつた音がこつりと聞こえて、更にまた繰り返された。イワン・イワーノビッチは幾度も幾度も、續けさまに不揃ひな禮拜をして、額を床にぶつゝけてゐるやうであつた。少し静かになつたと思ふと、またもや頭をがんといふほど強く床へぶつゝけて、思はず呻き聲を發した。と、その一刹那、ポリーナ夫人は電光の如く、明かに一切をさとつた。彼は起き上がらうと努めながら、それが出来ないで、空しい努力のうちに、頭を床板へぶつけては、もぞく身を跳いてゐるのであつた。

懸命な叫び聲を立てながら、彼女は夫に飛びかゝり、兩手に抱きしめて起き上がらせ、自分でも今まで知らなかつたやうな力をもつて、寢臺の上へ坐らせたのである。イワン・イワーノビッチは途方に暮れたやうに何やら呟いて、兩手をもぞく動かせながら、憐れつばい濟まぬやうな目つきで妻を眺めてゐた。

「わしはな、その……ちよつと祈禱して見ようと思つて……たゞちよつと冗談半分にな……もう長く祈禱をした事がないので……一遍ためして見ようと思つたのだ……」と彼は呟いた。その頭はがくりと慄へた。彼は堪らないほど恥づかしかつたのだけれど、以前の明晰な力強い理智の誇りは既に墮ちて、跡かたもなく溶け去り、彼の精神力は萎縮して、衰へ果ててゐた。そして、まるで小さな子供が保護を求めるやうに、妻に身を摺り寄せて泣くのであつた。

「わしは恐ろしい……恐ろしいのだ、ポレレチカ……わしは死にかゝつてゐる……」と彼は呟いた。

二人は並らんで寢臺に腰掛けながら、力ない老いの涙を流して泣いた。彼等は二人とも白い肌膚をきた、小つぽけな白髪の老人老女であつた。とつぜん熱烈な希望の波が、悦ばしい光りのやうに彼女を照らした。

「ねえ、あなた……明日あらたかなお像を家へお招きして……祈禱式を営まうぢやありませんか……さうすれば神様のお情で、全快なさるに相違ありませんよ……」と言ひながら、彼女は優しい愛と憐れみの籠もつた指で、ぶる／＼慄へる夫の禿げ頭を撫でた。

翌日は朝から彼らの家は、明るい期待で充たされた。一

同は部屋々々を綺麗に洗ひ浄め、イワン・イワーノヰッチに新しいフロックコートを着せて、臆病な希望をいだき、胸を躍らせながら、待ち設けてゐた。

鬪ずんだ嚴めしい昔の聖像が、白い卓布の上に安置され、その前に蠟燭が點じられて、焰がゆらくと揺れ、例のアルプーゾフに原中で馬車からおろされた赤毛の僧が、輝かしい袈裟を着て、讀經したり歌つたりし始めたとき、イワン・イワーノヰッチは肘掛け椅子から立ち落ちて、膝を突きながら、有り難涙に暮れたのである。

太陽は窓ごしに照らして、悦ばしく懐かしい金色の光りで部屋の隅々隈々を充たした。長老と助祭の聲は重々しく響いて、香爐の煙は靜かに舞ひ上がった。この日光と香煙の中に、時代がついて眞つ黒になつた、嚴めしい陰鬱な顔をした聖像が、ぼんやりと見えるのであつた。

ポリーナ夫人も泣けば、イワン・イワーノヰッチも泣き、姪娘のリーダまで泣いたが、その明るい涙の中には、悦びと希望が籠もつてゐた。今となつて、一同はやつと合點が行つたやうに感じた——あの偉大な太陽の輝きや、瑠璃色をした高い大空のどこからともなく、眞つ黒な聖像の顔へ靜かにくだつて来る、光明に充ちた萬能の力よりほかに、

なんの希望も庇護もないのであつた。

イワン・イワーノヰッチは涙の滲む目を大きく見開いて、鬪ずんだ聖像の顔を下から見上げた。と、涙が恐ろしい死人のやうな面の皺を傳つて、小川のやうに流れ下るのであつた。彼は燃え盡きんとする命の最後の力と、暗い夜ごとの恐怖と惱みを悉く、この祈るやうな無言の凝視に籠めてゐるやうであつた。この瞬間いかなる力も、雪白の卓布の上なる黒い奇妙なしみから、彼の目を搖ぎ放すことは出来なかつたであらう。

僧侶たちの聲が調子はづれに纏れ合つて、ひゞの入つたやうな怪しげな旋律を奏しながら、部屋いつばいに充ち溢れたとき、涙はいよ／＼繁く、イワン・イワーノヰッチの頬を流れ走つた。

この瞬間、彼は己れを欺いた今までの全生涯も、傲慢な理智も、科學も、經驗も、大膽な理性も、すべて否定することを辭しなかつた。悲しく明るい忍従の心持ちを感じながら、彼は言葉なしにたゞ涙ばかりで、自分を救ひかつ憐れむやうにと、この未知の力に祈るのであつた。

やがて聖像は運び去られた。赤毛のニコライ長老は、咳きしたり、袖を直したりしながら、ポリーナ夫人を相手に



市井の出来ごとを喋つた後、病人の全快を祈つて立ち去つた。蒼い煙は依然として舞ひ昇りながら、捲りのかゝつた細い糸のやうに、開け放した通風窓の方へ靡いてゐた。

さつぱりとしらへしたイワン・イワノギッチは、長椅子に腰掛けてゐた。彼の唇はまだ慄へてゐたが、涙ぐんだ小さい目の中には、緊張した、子供らしい、純な信仰の光りが輝いて、老人らしい顔せんたいが、内なる光りに照らされてゐた。日光は彼の頭の邊まで届いて、暖め、動りながら、祝福するやうな光りを投げるのであつた。彼は悦ばしげに意味もなくほゝ笑みつゝ、妻のポリナと娘のリーダを見やつた——まるで始めて彼らを見たかのやうに。

「まあ、これでよかつた……これからはあなたも、だんだんよくなつて行きますよ。」ちやうど幼い命名日の祝ひ主に言ふやうに、老婦人は優しくかう言つて、希望と愛情に満面を輝かせながら、夫の瘠せた両手を取つてさすつた。

イワン・イワノギッチは、明るい目で妻を眺めながら微笑した。その頬にはまだ純な子供らしい、透明な涙が慄へてゐた。彼はまるで内部から照らされてでもゐるやうに、全身あかるく見えるのであつた。

どつしりと重々しい醫師のアルノルヂイが、氣むづかし

げな、弛んだ顔つきでやつて來た。イワン・イワノギッチは彼に向かつてかう言つた。

「わたしはね、その……祈禱をして……なんといふか、その、聖餐を受けましたよ……え、先生、いゝ事でせうかな、え？」

「それは非常に結構ですよ」とアルノルヂイは言つた。そのどんよりした惘巧さうな目を見ただけでは、冷笑してゐるのか信じてゐるのか、見分けがつかかなかつた。

かうして、彼等は長いあひだ坐り込んで話しをしたが、實際のところ、話しをしたのは醫師と、リーダと、ポリナ夫人だけで、イワン・イワノギッチは、白い枕を並らべた長椅子に坐つて、嬉しさうな明るい目つきで、一同を眺めてゐたばかりである。

やがて疲れて、横にしてくれと頼んだ。醫師は注意ぶかく彼を見やつて、歸りしなに、リーダにかう言ひ残した。「わたしは四時まで家にゐますが、それから後は、ラズドリスカヤ夫人のとこへ行きます……もし何か用があつたら、その方へ使ひをよこして下さい。」

リーダは豫め警告するやうな、この言葉の恐ろしい意味を悟らないで、愉快さうに答へた。

「よろしうございます、よろしうございます。けれど、たぶん用などあるまいよ……お父さんはずつとよくおなりですもの。」

イワン・イワーノギッチはすぐ寝入つた。リーダとボリーナ夫人は次ぎの間に坐つて、小さな聲で話し合つてゐた。イワン・イワーノギッチは長いあひだ、二時間ばかりも寝通した。静かにきちんと掛け蒲團ぶとんの上に横たはつてゐた。リーダは父親が餘り長く寝過ぎる上に、寢息がまるで聞こえないのに氣がついた。漠とした不安が彼女を襲つた。

「起こさなくていいでせうか？」

「いゝよ……寝させて置きなさい……」

「わたし起こした事がいゝと思ふけれど……」

二人の女は途方に暮れたやうな顔をして立つてゐた。靜かに穩かな悦びは、跡かたもなく消えて了つた。しかし病人の顔は穩かで、さつき梳ときつけたばかりの白い髪はきちんと並らんで、頭のでつべんで妙に可笑しく突つ立つてゐた。胸の上では、フロックコートが少しも動かなかつた。

「これはどうしたのだらう……どうした事だらう？」自分で自分を信じ兼ねつゝ、ボリーナ夫人はかう聞いた。

「起こさなくちやいけないわ！」心配さうにリーダは囁ささい

た。「恐ろしいわ……お醫者を迎へにやらなくつちや。」

「お起こし、お起こし……」

「それとも構はないかしら？ 寝させて置ませうか？ ；

一體まあ、どうしたんでせう……わたし起こすわ。」

きちんと教授服を纏つて、身動きもせずに横たはつてゐる、小さな體のまはりに、恐ろしい混亂が持ちあがつた。恐怖と、恐ろしいあるものの豫感が、二人の女を攫さらんだ。女中は醫師を迎へに駈け出した。リーダはたうとう思ひ切つて、脈を見るために、青い死んだやうな手に觸さわつて見た。と、その手は冷たくなつてゐて、ゴムで作つたもののやうに、ぐたりとなつた。そのとき彼女は本能的な恐怖に襲はれながら、萎しぼびた小さな體を揺すぶり始めた。

「お父さん、お父さん……」と彼女は叫んだ。「お起きなさいよ……お父さん！」

沈黙がその答へであつた。

「イワン・イワーノギッチ！」

すると、突然イワン・イワーノギッチは目を見開いた。體も顔もちつとして動かなかつたが、たゞ目ばかり大きく、もの凄く見開いてゐるのであつた。それはもう生きた人間の目でなく、透き通つて内部の方を見つめてゐた。それは

何も見てゐるのでなくて、既に魂の去つて了つた未知の國から、無理やり引き戻されたかのやうであつた。リーダは慄然として、この恐ろしい視線から飛びのいた。

「あゝつ！」と彼女は叫んだ。「お母さん！」

「あなた、どうしたんですか！」まるで絶壁から落ちさうになつた人を抱き留めるやうに、飛びかゝつて夫を兩手で抱きしめながら、ポリーナ夫人はかう叫んだ。

死んだやうな目は、そつと靜かに妻の方へ向いて、何やら恐ろしいものでも見るやうな、透き通つた視線を彼女の顔の上に落とした。

「イワン・イワーノヰッチ！」もうこの恐ろしさを忍ぶ氣力がなくて、老婦人はかう叫んだ。

彼女は夫を揺り動かしたり、抱きしめたりしながら、死人の顔を涙で濡らすのであつた。

突然、またもや思ひ掛けなく、イワン・イワーノヰッチの口ががっくり開いて、黒い洞穴のやうになつた。こはばつた舌がびくりと慄へて、空しい最後の努力に吐き出された。

生ける者の名も知らぬ恐怖のために、彼の顔は歪み、目は眼窠から飛び出した。そして、彼は不意に笑ひ出したのである。

この笑ひが何とも言へないほど、奇怪でもの凄かつたので、二人の女は恐怖の餘り、うしろへ飛びのいた。

暫くの間、イワン・イワーノヰッチは恐ろしい速力で、く／＼と目を廻轉させながら、部屋の中を見廻したが、ただ表面を掠めて迂るのみで、物の象を捕へることが出来なかつた。やがて胸を張り出して腹を引つ込め、首をがくりとうしろへ投げて、しやゝ腹れた聲を立てると、そのまゝ靜まり返つた。

その刹那、彼の顔は一變した。死屍に特有の鈍いものもろのしさが、石のやうに唇へかぶさり、目を閉ぢ、鼻を尖らせたのである。下脛ががっくり落ちて、口は眞つ黒な恐ろしい洞穴を作りながら開いた。

もうどこにも——緑の木立ちの間にも、月光の中にも、風の中にも、碧い海の中にも、太陽の輝きの中にも、偉大な人間の都市の間にも、かつて、生き苦しみ、信じ、思索し、自ら愛した、イワン・イワーノヰッチなる人間は、存在しなくなつたのである。

死骸の傍では小さな白髪頭の女が、腕いたり叫んだりしたし、また大勢の人間があちこち駈け廻つたり、急を聞いて馳せつけたアルノルチイが動き廻つたりしたが、しかし死

骸はもの／＼しげにちつとしたまゝだつた。その頭は人々  
が意味もなく、滑稽に騒ぎ立てるのを、非難でもするやう  
に、ふら／＼と揺れてゐた。

中央寺院の鐘樓の鐘は、莊重に力強く鳴り出した。響き  
は陰鬱などす黒い餘韻を引きながら、擴がつて、遠く曠原  
の上に消えて行つた。家の中や庭にゐる生きた人々は、そ  
の一刹那、自分の心づかひや、會話や、笑ひや、爭論など  
をやめて、頭を上げながらかう言つた。

「誰か死んだ！」

その後から方々の小さな鐘が、メロチックな訴へるやう  
な調子で響き出した。と、中くらゐな鐘が、痙攣的な涙を  
流して訴へるやうに、響きをかはし始める……と思ふと、  
今度はまた大きな重々しい弔鐘がごとんと鳴つた。

二六

ひよろ長いクラウゼ少尉補と、小柄な大學生のチージュ  
は、ミハイロフの晝室の戸口に立つてゐた。その時ふと庭  
の徑のはづれに、せか／＼と歩むリーザの明るい姿が現れ  
た。チージュは一番に見つけて、それと氣がついたので、ち  
らとミハイロフを見やつた後、すぐに目をそらして、忙し

さうに言ひ出した。

「ぢや、とにかく左様ならだ。ところで、この氣ちがひの言  
ふ事なんぞは、無意味さ！ なんの事だか分かりやしない  
……さよなら。」

「君がさう言ふのは、」リーザの訪問にも、ミハイロフの興  
奮にも、チージュの奇妙な急ぎ方にも、一さい氣のつかなか  
つたクラウゼは、もの／＼しい調子で反駁した。「つまり、  
君がああ男の思想を理解しないからだよ……僕もそのうち  
に、二三の非論理的な點を認めるけれど、しかしあれは偉  
大な、立派な思想だと思ふよ……」

「まあ、いゝよ、いゝよ……後で話さ……行かう！」我  
ともなくうしろを振り返りながら、チージュは拙い遮り方  
をした。

「いや、まあ、待つてくれ給へ……これは非常に面白い問  
題だから。」とクラウゼは語を續けた。「もしあの男が自殺  
を認めないといふ點を除外すれば（僕に言はせれば、そんな  
事は狭量の見<sup>ミヤカ</sup>に過ぎないのだが）、さうすればあの男の思  
想は……」

「え、君は……行かうと云ふのに！」とチージュはいま  
ましげに嘔<sup>な</sup>鳴つて、急がしげにミハイロフに暇<sup>いとま</sup>を告げた。

こちらはちよつと顔を赤くして、目をそらした。

クラウゼはやつとの事で、何か様子が變なのにな気がついた。彼はチージュの間の悪さうな顔と、落ちつきなく動くミハイロフの目をもの／＼しく見比べて、眉をきゆつと高く吊り上げながら言つた。

「ぢや、行かう！」

ミハイロフは仰山に愛想よく別れを告げたが、心の中では、殆ど入り口の階段から、二人を突き落とさなればかりであつた。晝室へ引つ返すと、興奮して慄へながら待ち設けてゐた。外ではクラウゼが輕蔑したやうな、冷たい聲で何やら訊ねると、チージュが氣むづかしさうな調子で、小聲に答へるのが聞こえた。やがて小門がごとんと鳴つて、それきりしんとなつて了つた。リーザは隠れたか引つ返すかしたらしく、まるで聲が聞こえなかつた。

ミハイロフは時計を眺めた。ちやうど五時である。六時にはエヴゲーニヤが来る筈になつてゐた。二人の女が自分の所で落ち合ふのだと思ふと、残忍な肉感的の戦慄がミハイロフの全身を攔むのであつた。彼はわざと二人が落ち合ふやうに仕組んだのである。

この二人の女は彼をいら／＼させた。一人は若い無邪氣

な少女で、純潔な童貞心に守られて、最後の一步を恐れる

ために、彼に身を任せようとしなかつたし、いま一人は熱情的な經驗のある女で、何か譯の分からない強情のために、彼を苦しめ焦らすのであつた。あのいつも同じ「そんな事はいけません」といふ一方の決まり文句と、「オイ、ラー」と言ふいま一方の警戒するやうな冷笑的な言葉とは、もう女が手の中に入つたやうな氣がして、全身が耐へ難い欲望に緊張してゐる時、彼に背負投げを食はすのであつた。ミハイロフは今まで一度も、かうした長い抵抗に會つた事がないので、いら立たしくなつて來た。どうかすると、二人とも厭はしく思はれて、えゝ、どうでも勝手にしろ、といふやうな氣がした。けれど、多くの女に甘やかされた男性の自尊心が、一たん始めた仕事を放棄する事を許さなかつた。その時ミハイロフの頭に、慘酷な想念が浮かんだ——それは二人を面と面と突き合はす事であつた。この結果がどうなるかといふ事は、彼自身にも分からなかつたけれど、それが美しい、慘忍な、肉感的な遊戯だといふ事は、本能的に直感したのである。

リーザはやつて來なかつた。ミハイロフはもう庭へ出て見ようかと思つたが、そのとき入り口の階段に、臆病さう

な、小刻みな女靴の音が、こと／＼と聞こえて、戸をとんと叩く者があつた。

「おはいんなさい！」興奮のためにしゃべられた聲で、ミハイロフは叫んだ。

リーザが入つて来た。彼女は眞蒼な顔をして、途方に暮れたやうななじめな様子で、あたりを見廻してゐた。チージュとクラウゼが通りかゝつたとき、彼女は植ゑ込みの蔭に隠れて、顔をそむけたが、二人は彼女を見つけたのであらう。少尉補が厚かましい莫迦にしたやうな調子で、

「また新しいのだね？……うまくやつてるな！」と言ふと、「さう、うまくやつてるよ……さあ、行かう、行かう……」

こんなのが先生のところへうよ／＼やつて来るんだよ。」とチージュが間の悪いやうな聲で答へるのを、彼女ははつきり聞き分けたのである。

彼の聲の中には、リーザを脅やかすやうなあるものが含まれてゐた。チージュが自分に氣づいたかどうか、彼女ははつきり分からなかつた。最初の一瞬間、こゝを立ち去つて、もう二度と来まいと考へたが、それはやはり出来なかつた。で、彼女は眞蒼なじめな顔つきをして、息を切らせながら、ミハイロフの所へ駆けつけたのである。

リーザはたゞちよつと中へ入つて、こんな恐怖と恥辱を忍ぶことは出来ないから、もう二度とこゝへ来ないと、これだけの事が言ひたかつたのである。けれど、男の美しい目や、優しい額や、柔かい黒髪を見、心を躍らすやうな聞き馴れた聲を聞き、彼の手が自分のショールを脱がした時、リーザは急に身も心も萎えたやうになつて、わつと泣き出しながら、男に全身をびたりと押し當てた。それは丁度、「わたしもうこんな風で續けて行けません！ どうかこの恥辱や、恐怖や、自分自身に對する侮蔑をなくして下さい！……だつて、ほんの少しでも、わたしを愛して下さいでせう？……さうだつたら、わたしを可哀さうだと思つて下さい、わたしは苦しいんです！ あゝ、もしわたしがあなたを愛してゐるやうに、あなたがわたしを愛して下さいつたら！……一體わたしは永久にあなたと一緒にゐるのが、この上もない幸福だといふ事を、一瞬間でも疑つた事があるでせうか？……」

けれども、彼女はさう言ふだけの勇氣がなかつたので、ミハイロフが彼女の涙に濡れた目や、羞恥のためにぼろと赤くなつた顔を接吻した時、自分の弱さを詫びるやうに、つゝましくほゝ笑んだ。そして、やはり男の肩に顔を押し

當てながら彼の接吻を避けるのであつた。

ミハイロフは彼女を安樂椅子に坐らせて、隠れようとする顔を持ち上げて、目や唇を接吻しながら言つた。

「さあ、もう澤山ですよ……何もさう心配する事はありません……あの連中はあなたと気がつきやしなかつたでせう……僕のところへ来る者は澤山ありますからね……」

リーザは少し落ちついて来た。彼女は泣き濡れた顔を上げて、濟まぬやうな微笑を浮かべながら言つた。

「わたし本當にびつくりして了つて……でも、もし氣がついたらどうしませう……」

彼女は恐怖の餘り、再び両手で顔を蔽つた。やがて不意にその手を放して、情熱と歡喜に充ちた目で男を見上げた。そして苦悶のために息を切らせながら、かう言つた。

「あゝ……本當にいつになつたら、始終あなたと一緒にゐられるのでせうねえ……」

不確かな光りがミハイロフの目をちらと掠めた。彼は思はず身を屈めて、女の手を接吻し始めた。

「それはあなたの考へ一つですよ。」と彼は言つた。「僕はもう以前あなたに話した通り、よく知らない女と生活を結びつける事は出来ません……僕の考へでは、本當の愛は完

全な性的接近をまつて、始めて湧いて来るものだと思ひます……世の中に不幸な結婚が多いのは、お互に遠くの方から知り合つたばかりで、一緒になる人が多いいからです……」

「あなたはわたしを愛しちゃゐらつしやらないのね？」惱ましげに指を握りしめながら、リーザはかう言つた。

「いや、愛してゐます……けれど、僕は不具的な愛を認めません……僕は餘りに經驗を積み過ぎました……僕は餘りに多くの女を知り過ぎました……あなたもそれを知つてゐらつしやるから、前後を忘れて身を投じることが出来ないので……」

「どうしてわたしが……」ミハイロフが嘘をついてゐるといふ事を、本能的に直覺して、忽然と目醒めた誇を響かせながら、リーザはかう言つた。

「あなたはもう十九ですものね」とミハイロフは答へた。それは本當の辯駁でなかつたので、彼女を説伏するに足りなかつた。純潔な初戀ひの感情に充ち溢れた彼女は、いつか男が自分を愛しなくなるかも知れぬのだ、何かの疑惑のために、二人の永久に結合する幸福が阻まれるかも知れぬのだ、さういふ事を夢にも考へられなかつた。けれど、この問題を彼と論ずるのは具合が悪かつた。それはあま

りに卑屈である。

ミハイロフはこの惨酷な遊戯に興奮したり、快感を覺えたりしながら、言葉が続けた。つまり、リーザが強情を張るのは、彼を愛してゐないからだ、また自分は愛する女を完全に領有しつけてゐるから、彼女が反抗すればするだけ、男の心を遠ざけるばかりだ——などと言つて聞かせた。

「あなたのやうなやり方だと、結局、僕はあなたの事を忘れるために、行き當たりばつたりの女に飛びつくやうになつて了ひますよ！」

リーザはぼつと曇つた、侮辱されたやうな目を上げた。

「ぢや、あなたはわたしだらうと、ほかの女だらうと、同じことなんですね？」

「これはかなり穿つてるぞー」とミハイロフは考へたが、口に出してはさう言はなかつた。

「もしどうだつて同じ事なら、こんなに執念ぶかく言ひ張りやしませんよ！」

リーザは力なげに首をたれた。彼女は信じたやうな、信じないやうな氣持ちだつたが、心の中では、信じたくて堪らなかつたのである。

このとき、性急な、自信に充ちた叫の音が戸口にひびい

た。リーザは思はず飛び上がらうとしたが、ミハイロフは急いでかう叫んだ。

「お入りなさい！」

リーザは慄然として彼を見やりながら、座を立ち上がりとして、また腰をおろした。そして、危くミハイロフの手を取らないばかりであつたが、こちらは彼女の興奮に氣のつかないやうな振りをして、もう一ど繰り返した。

「お入りなさい！」と言つて立ち上がった。

薄色の帽子に裾長な赤い着物をきた、背のすらりと高い女が、鬨の上に現れた。リーザを見ると、彼女はちよつと立ち止まつた。けれど、ミハイロフはつか／＼とその傍へ寄つた。

「あゝ、あなたはエヴゲーニヤさんでしたか！」恐ろしく驚いたやうな調子で、彼はかう言つた。「何といふ廻り合はせでせう？」と彼は言ひながら、この邂逅が彼自身に取つて意想外だ、といふやうな目つきをして見せた。

エヴゲーニヤ・サモイロヴナは、ほんの心もち黒い目を細くした。嫉妬の火花がちらとその中に閃いたが、彼女は輕蔑したやうな冷たい表情をして、つか／＼と晝室の中へ入つた。



彼女はこの瞬間、まるで光榮のために恐懼おく能はざる、奴隸の所へ入つて行く女王のやうな、輕蔑し切つた表情を浮かべて、競争者なぞせん／＼存在し得ない、といふやうな態度であつた。ミハイロフが二人の若い婦人を引き合はせた時、リーザはまご／＼して途方に暮れて了つたが、エズゲーニヤは落ちつき拂つて、特に一步へりくだつたやうな親しさを現してゐた。

ミハイロフは緊張した顔つきで、二人を注視してゐたが、何ともいへぬ肉感的な慘忍な興奮が、彼を捕へるのであつた。彼は恐ろしく愉快で、まるで自分の娛みのために、二人の女を裸にしてゐるやうな氣持ちがした。けれど、エズゲーニヤは彼の方を見向きもしないで、さも年上らしく優しい調子で、リーザに向かつてかう言つた。

「あなたはこゝにお住まひのやうでございますね? ……お退屈ではありませんか? ……こゝの人達はみんな面白くない、灰色をした人ばかりですからね……」

「わたし馴れてゐますから。」手の置き場に困りながら、リーザは臆病さうに答へた。

エズゲーニヤは批評家の目つきで、彼女の姿や、着物や、手や、髪の毛などを見廻した。それは丁度、この單純らし

い田舎令嬢の臧してゐる危険の度合ひを、計量するやうな態度であつた。彼女は何やかやつまらない話題を拵へて、話し續けてゐたが、その調子がいかにも輕々と愛嬌がよくて、まるで助力と保護を來て來た田舎女に、わが家の應接室で接見してゐるやうであつた。ミハイロフはこの會話を聞きながら、どうして女といふものは、かう芝居が出来るのだらうと、心ひそかに一驚を吃したのである。が、やがて一種不満足之感じと、妙に間の悪いやうな羞恥の念が、彼をいら／＼させ始めた。彼はエズゲーニヤに、自分の畫を見るやうに勧めた。

「あゝ、さうですわね……拜見しませう!」例の殊さら遜つたやうな調子で、ジーネチカは賛成した。

彼女の平靜と芝居氣に感染したやうに、リーザも同じく立ち上がつて、畫の傍へ寄つた。二人は一緒にエチュードや、描きさしの畫などを眺めながら、親しげに評言を取り交はすのであつた。二人ともミハイロフには氣が付かないやうな風をしてゐた。やがて一同はまた席に着いて、五分間ばかり藝術談をした。と、そのとき始めてミハイロフは、自分の待ち設けたものを發見して、内心得意になつた。ほかでもない、話しの種はもう盡きかゝつてゐるのに、ふた

りとも何やら期待するやうに、努めて話しを續けてゐるのであつた。二人の女が互に見張りをして、どちらが先に歸るか、待ち構へてゐるのに、ミハイロフは氣がついたのである。

見受けたところ、リーザはもう歸らなければならぬ、かうしてゐるのは實に見苦しい上に、餘り腹の底が見え透いて了ふ、と感じたらしかつたが、何かある力が彼女を引き止めるのであつた。エヴゲーニヤは時々ちらりと彼女に視線を投げて、輕いちよつとした會話を續けた。リーザはこの視線を直覺したけれど、何だか足が立たないやうな氣持ちがした。

「さあ、わたしお暇いとまませう。」到頭エヴゲーニヤはかう言つて、立ち上がった。「さよなら！」わざとらしく誇大した、相手をばかにしたやうな慥慥な調子で、彼女はリーザの方へ振り向いた。

リーザも同じく立ち上がつて、途方に暮れたやうな拙い身振りで、手を差し伸べた。彼女は後に残るのが恥づかしくて堪らなかつたので、わたしもやはり歸ります、と言ひなかつたのであるが、どうしたものか言葉が喉のどから出なかつた。ミハイロフはその傍から、奇怪な貪婪な目つきで、

ちつと觀察してゐた。互に憎み合ひながら、愛想のいゝ振りをしてゐる二人の女——相手へ面當つらあてのためのみでも、自分に身を任せ兼ねないやうな心持ちである二人の美しい女が、互に手袋を箆はめた手を握り合つてゐるではないか。この瞬間、恭しく小腰を屈めた二人のしなやかな體は、彼の目にもう素裸のやうに映つた。それは何とも言へないほど美しく、刺戟的であつた。

一人の方は長い尾のついた、赤いきつちりした着物をつけ、細い手に黒い手袋を穿め、黒い毛に黒い目をした、敏活で、健康で、優美で、大膽な女性であり、いま一人は薄色の目に薄色の髪、途方に暮れたやうな眼まなこざしをして、頬に微かな羞恥の紅を浮かべた、弱々しく單純な、愛すべき善良な妻のやうな女性であつた。

ちよつと一瞬間、エヴゲーニヤはその黒い目を、リーザの赤くなつた顔の上に向けた。と、その顔は下の方へうつ向いて了つた。リーザは途方に暮れたやうに、紗のショールの端はしを指先で弄り始めた。エヴゲーニヤはついと横を向いて、妙に無關心な目つきでミハイロフを眺めた。

「あなた見送つて下さいな。彼女は無造作に肩かたごしに頷をしやくつて、自分の權力を裏書きしようとするやうに、す

ぐさま戸口の方へ歩き出した。

控へ室で彼女は立ち止まつて、軽く體を揺りながら、嘲るやうな冷たい調子で訊ねた。

「ぢや……もうどうやら、わたしは餘計なものになつたらしくございますね……これでわたしも落ちつけますわ!

あの人は全く綺麗ですものね……だけど、少し田舎ものらしくほんやりしてゐますわ。さよなら!」

この瞬間ほど、彼女の美しく見えた事はなかつた。抑へがたい領有の欲望が、ミハイロフの目をくらませた。彼女は女の手を引き止めた。

「あなたはいつも僕をからかつて苦しめるんですね、ところが……」

「ところが、あの人はさうでないでせう?……だけど、今こそ一切の苦しみはお了ひですわ。」と彼女は目を細めながら、深い同情の調子で言ひ返した。「さあ、見送つて下さいな!」

「あなたはもうこれきり来ないつもりですか?」實際この女が永久に亡り抜けて了ふかも知れぬ、かういふ内心の危険と欲望に體を慄はせながら、黒い手袋を箝めた手を放さないで、ミハイロフはかう聞いた。

「何のために?」とエツゲーニヤは冷笑的に言つた。

「何のためですつて?……だつて、僕はあなたを愛してゐるんぢやありませんか!」ミハイロフはかう言ひながら、ちかんと彼女の顔に屈み込んで、この黒く輝かしい、妙に冷たく見える目の中から、何かある物を讀み取らうと努めた。

彼女はやつと見えるか見えないかに首を振つて、押し黙つてゐた。

ミハイロフは、彼女の心が動揺してゐるやうな氣がした。待つてゐるのだ、大丈夫だと思つて、彼はそつと訊ねるやうに用心ぶかく、薔薇色をした爽やかな女の唇に、自分の唇を近づけた。

「オイ、ラー!」と彼女は首を離しながら、警告するやうにかう言つた。「さよなら!」

ミハイロフは、ぐつたり力抜けがしたやうに感じられた。憎悪に近い憤怒の情が彼を捕へた。女を撲りつけた上、引つ掴まへて揉みくたにし、草の上へ叩き付けてやりたい、といふ欲望に苦しみつゝ、彼はほんやりしたやうに、入り口の階段まで見送つた。

彼女は黒の手袋で赤い着物の裾をつまみながら並んで歩

いた。彼は今こそ女が永久に去つて行くやうな気がした。階段を一つおりた時、エッゲーニヤは不意に立ち止まつて、ばかにしたやうな狡猾らしい微笑を浮かべた顔を、彼の方へふり向けた。

「ミハイロフさん、あなたは莫迦な人ねー」彼女は出し抜けにかう言つたなり、くるりとそつぽを向いて、階段をおり始めた。

漠とした希望がミハイロフの頭を掠めた。

「何がです？……なぜ？……」彼は早口に聞いた。

けれどエッゲーニヤは頭を振りながら、

「オイ、ラー！」と謎のやうに言つただけである。「ばかだからばかなんですよー」彼女は挑むやうにからりと笑つて、足早に徑を歩き出した。

ミハイロフは女の姿が小門のかなたに消えるまで、ぢつとそのうしろ影を見送つてゐた。やがて彼は後へ引つ返したが、ふと向かうでリーザが待つてゐるのを、いま／＼しく感じてゐる自分自身に氣づいた。この瞬間、たつたいま立ち去つた、纖細で狡猾な女に比較すると、リーザは味もそつけないやうに思はれたのである。

彼女は鏡の前に立つて、シヨールを着けてゐる所だつた。

鏡に映つた影を見ると、彼女の頬は燃え、目は赤くなつて、まるで今まで泣いてゐたらしい。

「リーゾチカ！」瞬間的に欲望の眼醒めを感じつゝ、彼はかう言つて抱きしめようとした。

「わたしお暇します……」それに返事しないで、リーザは小さな聲でかう言つた。

ミハイロフは、その手からシヨールを引つたくつたが、リーザは別に逆らひもしなかつた。彼はシヨールを卓の上へ載せて、女の両手を取つた。その手はわな／＼慄へてゐた。彼女は彼の顔を見なかつた。

「え、一體あなたはどうしたのです？」まるで氣紛れな子供を相手にするやうな調子で、ミハイロフはかう言つた。「リーゾチカ！」

「なぜあなたはわたしをあの女と突き合はせたのです？」痛ましい聲で彼女は言ひ出した。「あれは何ごとです？……：……からかひなすつたんですか？」

「あれがどうしてからかふ事になるんでせう？」びつくりしたやうな振りをしながら、ミハイロフは言つた。「あなたに僕の友達を紹介しちやいけないますか？……それに、僕はあの女が来ようとは、思ひ掛けなかつたんですよ……」

リーザはちらと彼の方を見やつて、また顔をそむけた。

「なぜあなたは嘘を仰しやるんですの？……あれは……あなた……情婦です……」

ミハイロフは笑ひ出した。

「飛んでもない……僕はつい一箇月ほど前に、あの女と知り合ひになつたばかりですよ……あなたも随分やきもちやきですね。たゞの知り合ひですよ……僕はあなたを愛してゐます！」

彼は優しく女の両手を引き寄せたが、リーザはそれに逆らつた。そのしなやかな美しい體は、弱々しい努力にしんなりと攪つた。

「それは嘘です！」彼女は言つたが、その聲は希望に慄へてゐた。

「本當です！……」

彼女は再びちらりと男を見上げた。

「本當ですつて？……もつとも、わたしはどちらだつて構やしませんわ……あの女の所へいらしつてもよろしうございますよ。」

「あなたはやきもちをやいてるんですね？」彼女の目を覗き込みながら、ミハイロフは優しい冷笑を帯びた聲で訊ね

た。

「そんなこと考へてもゐませんわ！……わたしの知つた事ぢやありませんもの……そんな權利なんか持つてゐないぢやありませんか。」

惨酷な想念がちらと素早く、ミハイロフの頭を掠めた。

「無論、持つていらつしやらないですよ！」ぶつきら棒にかう言ひ放つて、彼は女の手を放した。

リーザは愕えたやうに彼の目を見上げた。

「え、無論……」急に萎れたやうな聲で、彼女はかう言つた。「わたしお暇します……もう時刻ですから……」と言ひながら、彼女は再びシヨールの方へ手を差し伸べた。

ミハイロフは素早くシヨールを向かうへ押しやつた。

「持つてゐないですよ！……」女に對する自分の權力を樂しみながら、ミハイロフはぶつきら棒に繰り返した。「あなたは僕のものになるのが厭だと言ふし、僕はまたさうしなくちやゐられないのです！僕はあなたを愛してゐます、が、僕は男ですから女の全部が必要なんです……あなたがそんなに近い所にあるのに、それを掴めないといふ事が、僕を責めさいなむのです……これがどんな苦しみかかつて事が、あなたには分からないのです！」

リーザは眞蒼な顔をして聞いてゐたが、その唇はわなわな慄へるのであつた。

「一體……そんな事なしには……濟まされないのでせうか？」彼女はやつとの事でかう言つた。

「僕には出来ません！」否應いはさぬやうな力をもつて、ミハイロフはかう言つた。「僕は夢にまであなたを見ます……あなたの體を……すつかり描き出して見て……抱きしめたり、撫でたりするのです……」

くれなゐの色がさつとリーザの顔一面に漲つた。彼女は両手で顔を隠さうと試みたが、どうしてもその手を上げることが出来なかつた。羞恥の念が彼女の心臓を、痛いほど締めつけるのであつた。彼女はもう眞裸で男の前に立つてゐるやうな氣がした。今までかういふ氣持ちで彼を愛した事は、かつてなかつたのである。

「われ／＼はもう結末を付けなけりやなりません！」彼女に押つかぶさるやうにしながら、ミハイロフはかう言つた。彼の黒みが、つた目は、女の魂の奥まで見通すやうであつた。彼の體からは、女の目を眩ませるやうな、一種の熱氣が發散して、何か破ることの出来ない膜のやうな物が、二人の間に張られるのであつた。

「僕はもうこれ以上、こんなにしてゐる事は出来ません……あなたが今日、今すぐ、」急にがらりと變はつたちぎれちぎれな聲で、齒と齒の間から押し出すやうに、ミハイロフは言ひ足した。「僕のものととなるか、それとも僕が……あの女はあなたのやうに僕を苦しめやしませんからね？」

誇りの最後の閃きが、一瞬間、彼女に力を與へた。

「どうでもご隨意に。」とリーザは誇らしげに言ひ放つた。

彼女はしつかりした手つきでショールを取つて、それを攜け始めた。彼女はミハイロフの方を見向きもしなかつたので、今にもすぐショールを掛けて、侮辱された純潔な冷たい婦人として、出て行つて了ひさうに思はれた。

ミハイロフは卓に腰を掛けて、おつと彼女を眺めてゐた。彼女の屈み加減になつた柔かい背や、ショールに絡んだ手や、屈んだ白い頸筋や、思ひ切りの悪さうな様子などが、彼の心に慘忍な鋭い欲情を呼び醒ますのであつた。

彼はリーザの舉動や、その柔かい體の肉感的なデテールを、燃えるやうな目で一つ／＼捕へながら、貪るやうに見つめてゐた。それは丁度この二つの目が着物の上から、ものを見通す力を得たやうであつた。一方には、女が行つて了ふかも知れない、試験が少し深入りし過ぎた、といふ危

虞の念もあつたけれど、ある一種の力が彼を引き止めたのである。彼はぢつと見つめながら押し黙つてゐた。

リーザは長い間——恐ろしく長い間、ショールを掛けてゐた。その動作は次第に緩くなつた。それはまるで、もつと何かする事はないか、何かも少しこゝに残つてゐる口實はないかと、捜し求めてゐるやうな風だつた。併しショールも被り、手袋も締められた。リーザは指を組み合はせて、それを唇へ押し當て、鏡の前に立つたまゝ、ぢつと考へ込んでゐた。惱ましいもの思ひに、屈み加減になつた女の姿には、千萬無量の手頼りない心持ちが含まれ、指を組み合はせて唇へ押し當てた様子が、いかにも美しく悲しげなので、ミハイロフの胸は憐愍の情にしめつけられて來た。けれど、彼は依然として目を放さずに、ぢつと坐つたまゝ押し黙つてゐた。

遂に彼女は靜かに身を動かして、二歩まへへ進み出た。そしてまたちよつと考へた後、思ひ切つた様子で、戸の方へつか／＼と歩き出した。ミハイロフはやはり黙つてゐた。彼自身も恐ろしい緊張のために、全身を慄はしてゐた。それはまるで彼の體の中から、祕密の力が發散してゐるやうであつた。

リーザは戸口に立ち止まつた。やがてちらりと振り返つて、彼を見やつた。ミハイロフは執拗に彼女を見つめたまま、黙つてゐる。それは残忍な遊戲であつた。彼は可哀さうでもあれば、恥つかしくもあり、また同時に、かつて覺えないほど面白くもあつた。

「さよなら——首を上げないで、リーザは小さな聲でかう言つた。

「さよなら！」まるで別人のやうに、がさついた、落ちつき拂つた聲で、ミハイロフは答へた。

彼女は後の句を待つてゐた。そして、やつとの事で身を支へてゐるやうな風情であつた。けれどミハイロフは一言も口を利かなかつた。

「さよなら！」彼女は男の胸がびりりと慄へるやうな、痛苦に充ちた聲でかう繰り返すと、そのまま戸口の方へ踵を轉じた。

が、それでも彼は押し黙つてゐた。

その時リーザは、もう戸の把手に掛けた手を、不意におろした。屈んだ双の肩がびく／＼慄へ出した。

一種の獸的な力がミハイロフの背を衝いた。彼は風のやうに彼女に飛びかゝり、ショールを引つたくつて、どこか

へ抛り出し、粗々しく、それと同時に優しく、彼女を引つ掴んで、部屋の中へ連れ戻した。リーザはびっくりとして、抵抗しようとしたが、その手は力なく垂れて了つた。彼はその唇、涙にぬれた目、肩、胸などを接吻した。リーザは争はうともせずに、おとなしく歩いて行つた。たゞが目に入つたとき、彼女は突然いま始めて気がついたやうに跳き出して、身を掻き放さうとしたり、男の両手を掴んだりするのであつた。

「後生ですから……よして下さい……後で……後で……」と彼女は氣ちがひのやうに囁いた。

ふと彼女は自分のあらはな腕、つゞいて胸、それから足を見て慄然とした。名状し難い恐怖の情に、彼女は一度身を跳いだ、やがてびつたり靜かになつた。

彼は野獸のやうな狂暴な勢で彼女を

て、を

かなぐり棄てながら、次第にその

して行つた。

彼女はたゞ兩手でしつかり男の手を掴んで、その邪魔をするのみであつた。彼はその手を引き放さうとする拍子に、足を這らして彼女の胸の上へ俯伏しに倒れた。と、優しい匂ひが彼のやうに彼の顔を襲うた。リーザは思はず手を放した。そしてもう一度掴まうとしたが、もう間に合はなかつた。

つた。恐ろしい狂暴な力をもつて、彼はしたのである。

その時はじめて萬事休した事を悟つて、彼女はぐたりと頭を後ろへ投げた。髪は寢椅子の肘かけを越してぱらりと垂れた。彼女はあらはな兩手でを痙攣的にしめながら、を立て始めた。

## 二七

リーザは立ち去つた。

ミハイロフは一人きりになつて、機械的に安樂椅子のクッションを正したり、床へ落ちた肘掛けを拾ひ上げて、もとの場所へ置いたりした後、もの思はしげに晝室の中を見廻した。

彼はすつかり疲れ果てて、幸福で、生に飽滿してゐた。

この待ち設けた、とはいへ思ひ掛けないあひゞきの場景が、彼の心を感動させたのである。リーザが歸りかけるのを戸口まで見送つた時、ミハイロフはもう早く歸つて了へばいいと望んでゐた。彼女の従順さと、娘らしさと、羞恥の表情に、物狂ほしいほど赤熱された愛撫と情慾のため、體が疲勞し切つてゐたのである。それに、心も強烈な緊張に疲



れてゐた。もう安息のほか何も欲しなかつた。彼女が再びやつて来て、同じ愛撫が繰り返されるなどといふ事は、考へるのも困難であつた。たゞもう一人きりになつて、煙草を一服し、香水と女の匂ひの滲み込んだこの晝室から、庭の清らかな空氣の中へ出たいばかりだつた。

けれどリーザは歸らなかつた。戸口に立ち止まつて、さつきのやうに指を組み合はせて唇へ當てたまゝ、ちつと考へ込んで了つた。ミハイロフはそのうしろに立つて、薄色の髪がくしやく／＼に亂れて、もの思はしげに傾けられた彼女の頭を眺めながら、たゞちつと待つてゐた。彼は羞恥と恐怖に押しひしがれた、この女の腦中に旋回してゐる、思想と恐怖と絶望の恐ろしい混沌を、自分の胸に感じる事さへ出来た。きつと彼女はこれから先どうなるか想像もつかないで、もう一切は終りを告げた、自分の生涯には異常な取り返しのかね轉化が生じた、といふ事を理解しようとして、空しく努力してゐるに相違ない。女が可哀さうではあつたけれど、しかし疲れた體は安息を求めてゐたので、ミハイロフは殆どじり／＼しながら、待ち兼ねてゐた。それにちつと女の後ろに立つて、無言の期待をもつてうなじを見てゐるのが、ばか／＼しく感じられたのである。

彼がもう何か言ひ出さうとした時、リーザはとつぜん肩ごしに振り返つた。その唇は弱々しい祈るやうな微笑に慄へた。

「何ですか？」彼女の表情を悟らないで、ミハイロフはかう聞いた。

けれど彼女は答へなかつた。たゞその目はとつぜん身も心も投げ出したやうな、従順な優しい光りに輝いて、顔せんたいがばつと明るくなるほどだつた。リーザはそつと身を屈めて、男らしい強い手を取つて接吻した。それはまるで、自分がこんな弱い女だからといつて、怒つてくれるなと願ふやうな、自分の身を運命と男の意志に任せ切るといふやうな、靜かな感謝をこめた、臆病な接吻であつた。

しかし不思議な事に、ミハイロフはその手をのけもしなければ、驚きもせず、また何一つ口も利かなかつた。かうする事が彼女に取つて必要なのだと、彼は感じた。つまり男が自分より強い人間で、あらゆる災厄から防ぎ守つてくれるものと、信じる事が必要なのであつた。

やがてリーザは立ち去つた。ミハイロフは疲れたやうに晝室を見廻した。

もう夕暮れが迫つてゐた。大きな晝室の窓は北に面して、

庭の向かうのはじの遠い木立ちは、まだ太陽の光りを浴びて金色に染まつてゐたけれど、こちらの蔭になつた所では、緑がエメラルドのやうに淡々しく、涼しさうであつた。畫室の中では物の蔭がやんはりりと濃くなつて行つた。その蒼みが、つた調子の中に、エチノドの鮮かな色彩や、掛布の友禪のやうな條紋が、朦朧として來た。煖爐の上に置いてある、大きな剝製の鼻が黒ずんで、まるで生ある物のやうに見え始めた。黄色い拵へもの目がちつと据わつたまま、息窒るやうな表情で上から見おろしてゐる。

ミハイロフは再びリーザの従順な、無言の接吻を思ひ出して、物悲しいやうな、可哀さうなやうな、自分自身が恥づかしいやうな氣持ちがした。

彼は女の愛撫と肉體に飽滿した後には、生まれて始めてかうした病的な、不吉な感じを抱いたのである。彼は突然、かうした刹那の領有の悦びも、それに對して支拂ふべき苦しみに價ひしない、といつたやうな氣持ちがしたのである。が、かういふ風に考へたのは、リーザを愛してもゐない癖に、たゞ動物的な欲望に狩られて、漫然と奪取したからである。もしこれがいまま少し趣きを異にしてゐたら——もしこれがかの愛と呼ばれてゐる、偉大な明るい感情であつた

ら、この事件は悦ばしく、明るい、美しいものと思はれたに相違ない。彼はとつぜん惱ましいほど、この愛がほしくなつて來た——永久にたゞ一人の女に身を捧げ、その中に全世界を眺め、その胸の上に安らひたくなつたのである——それは偶然の情人ではなく、永久に愛し愛される妻の胸でなければならぬ。「ばかな事を」とミハイロフはいましましさに考へた。「一體おれの目にほかの女の美しさが、映らなくなるとでも思つてるのか？　どんなに美しい女にしろ、一人のためにすべての者を見替へるなんて、そんな事が出来るものか？」

彼はエヴゲーニヤを思ひ出した。と、彼の目は暗い火に燃え上がつて來た。世の中には、かうしたエヴゲーニヤのやうな女が幾たりある事だらう——黒い毛をしたのや、薄色の髪を持つたのや、ほつそりしたのや、肥えたのや、しなやかなのや、情熱的なや、従順なや、わがまなのや、猫のやうに元氣なのや、牝鹿のやうに「まじしいのや、實に數限りなくゐるのだ。全世界が彼らの肉感的な美しい體に充たされ、彼らの愛撫するやうなあらはな手の綱で、地球ぜんたいが包まれてゐるのだ。これらのものに目を貸さないで、永久に一切を斷念してしひ、なぜか大勢の中か

ら一人の者を撰み出して、それに自分の一生を結び付けるのは、ばか／＼しい退屈なことである。それにも拘らず、唯一にして永遠なる戀ひを憶れる心は、次第に彼の心に生長し、擴がって行くのであつた。この融和がたい二つの感情は、出口のない混沌たる闇で、ミハイロフを包んだのである。

一種の恐ろしい事變カオスの豫感を含んだ、この奇怪な心の混亂は、非常に意想外でかつ病的だつたので、ミハイロフは神祕めいた黄昏に包まれた、大きな畫室にちつとしてゐられないで、帽子を取つて庭へ出た。

けれど出しながら、ちよつと自分の畫の前に立ち止まつて、次第に斷ずんで行く色彩に、ちつと見入るのであつた。

畫布の上には、夕暮れの野が柔かい調子で横たはつてゐた。軽い霧はもの思はしげな高い乾し草づみの間を縫つて、刈り倒された草の上へ帯を引いてゐる。そして地平線の上には、神祕めかしい赤い月が眞ん圓くさし昇つてゐた。

ちつと眺めてゐる中に、殆ど感激ともいふべき不思議な驚きが、ミハイロフの胸の中に生長した。誇らしい歡喜の情が、心臟をときめかすのであつた。

「これはおれが作り出したものぢやないか？」といふ想念

が彼の頭を掠めた。「實にいゝゝ……これこそ本當に幸福といふものだ……どこへ行つても醜汚と、憂愁と、倦怠ばかりだが、この偉大なしかも愛すべき藝術の中は、何といふ快さ、清らかさ、美しさだらう！」

と、なぜか彼はまたもやリーザが可哀さうになつて來た。「なぜあの娘はおれの手を接吻したのだらう？」惱ましい心持ちで彼はかう考へた。

彼は庭へ出て、靜かな沾みを帯びた木立ちの下を歩き始めた。こゝはまだ明るかつたけれど、もう夕暮れの濕氣があたりに匂つてゐた。彼は少しづつ落ちついて來た。體は休まつて、頭は澄み、靜かな憂愁も散つて行つた。

ミハイロフは木蔭のベンチに腰をおろして、歌を口ずさみ始めた。それからまた歌ひやめて、柔かく渦卷いた毛を手で一撫でした後、もうすつかり落ちついた氣持ちになつて、まだ少し疲れの残つた美しい目で、あたりを見まはした。

「しかし、何てつてもいゝなあ」と彼は考へた。

彼は誰かしら善良な明るいある者に向かつて、かうした夕空や、靜かな庭や、若い女たちや、青春や、深く美しい才能を與へてくれたのを、感謝してゐるやうであつた。

誰か青い袴を穿いて、頭巾を被つた見覚えのない娘が、徑つたひに家の方から、彼の方へ歩いて来た。きつと畫室へ入つて見たが、彼の姿が見えないので、庭へ捜しに出掛けたのだらう。

「これはまた何事だ？」とミハイロフはふざけた氣分で、自分で自分に滑稽なげんらしい聲めつらをして見せた。と、その途端に、これはエヴゲーニヤの逗留してゐる、マリヤの家の小間使ひだと思ひ出した。軽い好奇心を伴つた悦びが、彼の胸に躍り始めた。

「何用だね？」彼は立たないでから聞いた。

「お嬢さまがこの手紙をお渡し申すやうにと、さう仰しやいました。」新鮮な單純な聲で、娘は答へた。

ミハイロフは興奮と、好奇心と、漠とした勝利感を抱きながら、小さな堅い封筒を破つた。

「ミハイロフ様、早くあの田舎令嬢を追ひ出して（もしもだお宅にゐるのでしたら）わたしどもへ遊びにいらつしやいませ。一體あなたにはお察しがつかないのですか？ あなたがあんな鷲鳥のやうな女と一緒にゐらつしやるのを見ると、わたしの審美心が傷つけられるのでございます。そんな事はわたしに關係ないのですけれど、餘りあなたに不

似合ひなのですもの。わたしの愚かな友へ。」  
小間使ひは頭巾の端をひねくりながら、立つて待つてゐた。

ミハイロフはもう一度、ジェーネチカの手紙を讀み返した。ちよつとした冗談半分の女らしい嫉妬が、一語々々に滲み出てゐる。彼女の黒い輝かしい目、嘲るやうな微笑を含んだ赤い唇などが、この磊落な思ひ上がつた手紙の行と行の間から、さし覗いてゐるのであつた。ミハイロフはにやりと勝ち誇つたやうな、悦ばしげな薄笑ひを浮かべた。リーザの儂は東の間に色が褪せて、偶れなほうとしたものに感じられて来た。さうして媚びに充ちた、大膽で鮮かないま一人の方が、人を人とも思はぬ美しさに咲き誇りながら、彼の目の前に姿を現はしたのである。疲労はもうどこへやら行つて了つて、まるで冷たい春の水でも浴びた後のやうに、ミハイロフは爽やかな強健な心持ちを覺えた。

「ご返事がごさすかしら？」と小間使ひは訊ねて、なぜかにつこり笑ひながら、恥づかしさうな身振りをした。

ミハイロフはこの可愛い、強健らしい、單純な娘をちらと見上げた。白い無地の頭巾が、彼女の顔に恐ろしくよく似合つて、その蔭から櫻ん坊のやうに黒い目が、狡猾さう

に光つてゐた。彼は今まで幾度もこの娘を見たけれど、まるでその存在を認めなかつたが、いま不意に、これは女だと直感したのである。たゞ一瞬間の領有——言葉もなければ、思ひもなく、一さい策略などを必要としない領有の欲望が、軽くうき／＼と彼の心に閃いた。彼はこの娘を抱きしめて、強く接吻してやりたくなつて來た。

きつとこの欲望が、彼の目つきにあり／＼と浮かんだのだらう、娘はとつぜん恥づかしさうな様子をして、につこり笑つた。この女は　などしないだらう、かういふ感じはつきりした。

## 二八

それは暗い夜で、光りに顔を反けてさへも、どこで木立ちが終つて、深淵のやうに黒い空が始まつてゐるか、見分けがつかなくくらゐだつた。木立ちの頂きは、まるで目も及ばない高みへ隠れたやうに見え、それよりもつと高いところでは、明るい星の群れが輝いてゐた。ラムプが一つ、木立ちの下の卓の上についてゐて、夜の外氣の中にある時の常として、すべての物に並みはづれてうき／＼した、祭日めいた趣きを添へるのであつた。エヴゲーニヤとミハイ

ロフの立つてゐる處から、こちらへ背を向けて卓に向かつてゐる人たちの黒い影法師と、蒼白い顔に眉を吊り上げたクラウゼ騎兵少尉補や、肥つた醫師のアルノルヂイや、いら立たしげに兩手を振り立ててゐるチージュの、くつきり灯りに照らされた顔が見えた。興奮した大きな聲が響いて來た。彼らは何やら議論を闘はしてゐるのだ。

けれどこの木立ちの下には、闇と静寂が立ち罩めて、ただ木の枝が闇の中で、ぼつと滲んだやうな、毛むくぢやらな手を、ふら／＼と振つてゐるばかりだつた。

「わたし本當にしないわ、本當にしないわ！」とエヴゲーニヤは首を振つて、男をからかひながらかう言つた。その顔はラムプの光りの反映にぼろと照らされ、謎のやうに闇の中に白く浮いてゐた。

「だけど、あなたに取つては、どちらだつて同じ事ぢやありませんか！」ミハイロフは肩を縮めながら言ひ返した。

「現にあなた自身、僕と一生くらすのは厭なんぢやありませんか。これくらゐの事が、あなたに分からない筈はないです。あなたは僕などに欺されるには、餘り大膽で賢すぎますよ……一體どうして女つてものは、非常に大膽な獨創に富んだ人でも、すべて月並みなことを好くんでせうね？」

……まあ、かりにあの女が僕の情婦だとしても、それはただ感覚に辛辣みを添へるだけぢやありませんか！」

「わたしはモルモン宗徒風に、強烈な感覚の崇拜者ぢやありませんよ！」とエヴゲーニヤは冷笑するやうに言葉を扱んだ。

「もし僕があの方に關係するやうな事があれば、それはあなたの責任ですよ。」とミハイロフは狡猾な、からかふやうな調子で語をついだ。「あなただつて子供ぢやないから、今の世の中に、男が意味もなく女の足もとで、溜め息なんかつくものぢやないつて事は、ご存じの筈ですよ。悲しいかな、そんな事はとうの昔に過ぎ去つて、歸りつこはありません！……われ／＼は村の若い男女の牧歌など、復活させる柄ぢやないです。あなた自身だつて、勿論たゞ快樂のみを望んでゐらつしやるのだから、たゞ一人きりの仕合はせな領有者に、長くともまつてはゐないでせう。お互に欺き合ふのをやめて、われ／＼に必要なものだけ與へる事にしませう……あなたは大胆な婦人ぢやありませんか！」

彼の興奮した熱烈な聲は、彼女を愛撫したり、いざなつたり、包みきれぬ欲望となつてその體に絡んだりした。けれど、エヴゲーニヤは小首を振りながら、笑つてゐた。

「ねえ、ミハイロフさん、あなたはすゝのふん功を経たドン・ジアンね。」明らかに冷笑の調子で、彼女はかう言つた——相手の腹の中は充分見ぬいてゐる、といふ心持ちを示しながら。

「なぜですか？」ミハイロフはわざと驚いた振りをしながら、闇の中ぢよつと顔を赤らめた。

「オイ、ラ、オイ、ラー！」エヴゲーニヤは咎めるやうな、からかふやうな調子でかう言つた。「あなたご自身、わたしの事をもう子供ぢやないと仰しやつたでせう……餘り單純ですわ、ミハイロフさん！」

彼女の調子には、何とも言へぬ微妙なものが含まれてゐたので、ミハイロフの頭に、突然耐へ難い一つの想念が浮かんで來た。自分よりもつと巧みに、ありとあらゆる手管を傳授できる女を掴まへて、トリックを弄したり、騙さうとあせつたりしてゐる自分自身は、まったく見えるのではあるまいか？

「この女は事に依つたら、もう何遍となく、かうした文句を聞いたのかも知れない……」

といふ考へが彼の頭に閃いた。

「それはどういふ事なんです？」いよく／＼どうする事も出

來ないほど、ばかげた立ち場に置かれぬため、飽くまで強情を張り通さうと思つて、彼は依然たる調子でかう訊ねた。

「さう……」とジェーネチカは謎のやうに言つた。「もう少し前でしたら、その自由享樂主義の宣傳も、わたしにきゝめがあつたかも知れませんが……今はもう遅ござんすわ、ミハイロフさん……何かほかのやり口をお探ひなさいな、もつと手の込んだのを！」

ミハイロフは唇を噛み締めた。しなやかな、ふつくらした體を持つたエヅゲーニヤ——無量の狡智と、容易に近寄れない堅固さを含んだ「オイ、ラー」を口癖にするエヅゲーニヤが、限りなく美しいものに感じられたのである。彼はもういきなり彼女に飛びかゝつて、その場へ押し倒し、狂暴な愛撫をもつて、滅茶々に揉みしだいてやりたい氣がした。この瞬間、全世界は彼に取つて、非常に近いやうで、また同時に恐ろしく遠い、彼女の肉體に集中されて了つたのである。

「事によつたら、もつと簡単な方がいゝかも知れないね？」  
曖昧な、殆ど人を裏切にしたやうな調子で、彼は夢中になつてぞんざいに言つた。

「さうかも知れないわ」とエヅゲーニヤは謎のやうに答

へた。

女の目が無恥な期待に輝いたやうな氣がしたので、ミハイロフは齒を食ひしぱりながら、まるで狡猾な牝を抑へる野獸のやうな勢ひで、無言のまゝ女を抱き締めた。

彼女は忽ち兩手を男の胸へ突つ張りながら、うしろへ反り返つたが、別に身を搖ぎ放さうとはせずに、奇妙な輝かしい黒い目で、ひたと彼の顔を見つめた。

「かうですか……かうですか？」しなやかに屈伸自在な女の細腰を撓めながら、ミハイロフは息を切らせ切らせ、しや嘎れた聲で呟いた。彼の燃えるやうな唇は女の方へ差し出され、呼吸は殆ど呻き聲となつて、ちぎれ／＼に聞こえるのであつた。けれども、彼の唇が胸に觸つたとき、ジェーネチカは突然すこしの努力もなしに、軽々と彼の手を抜出しして了つた。

「もう澤山！」と彼女は冷やゝかに言つた。

彼はこの言葉を理解しなかつた。といふより、殆ど耳に入らなかつたので、再び彼女を捕へようとして手を差し延べたが、彼女は二足ばかりうしろへ飛びのいて、警戒するやうに「オイ、ラー」と言つた。

これはもう彼を氣ちがひのやうにしてしつた。彼は大地

が足もとから流れ去つたやうな気がした。欺かれた無益の緊張は、殆ど病的であつた。彼は體をふらくさせながら、まだ暖いしなやかな肉體の感觸の残つてゐる、貪慾な兩手をさし伸べた。彼女の裸身は上着の絹を通して、彼を愛撫したのである。かたく冷たい布の下で、柔かく膨らんだ胸の接觸感が、酒の酔ひのやうに唇の上に残つてゐた。

ミハイロフは、獲物を掻き取られた獸のやうに呻き始めた。

けれどエッゲーニヤは、もう二三歩はなれた所に立つて、落ちつき拂つた様子で、亂れた髪を正してゐた。

「だけど、」心もち慄へる聲で、彼女はかう言つた。「あなたはだん／＼危険になつて来るわね……もつとも、わたしそんなのが好きだけど……」彼女はから／＼と笑ひながら、輝かしい黒い瞳の一瞥を彼の顔に投げて、いきなり卓の方へ駆け出した。

ミハイロフはのろ／＼と後から歩き出した。その體は燃え慄へて、黒い木立ちは目の前でくる／＼舞ふやうに思はれた。

「いま／＼しいあまだ……」と彼は粗暴な下品な言葉で罵つた。

まだ大分はなれた所から、やゝ調子の高くなつた、鋭いナウーモフの聲と、竊走つたいら／＼しいチージュの聲が聞こえた。彼等はいつものやうに議論してゐるのだ。ミハイロフはだいぶ落ちついて來ながら、かう考へた。

「よくまあ、あの連中は飽きもしない事だなあ！」

しかしそれと同時に、彼はもうナウーモフの言葉に耳を傾けてゐた。この奇怪な男は、自分の言葉に傾聴せしめねばやまぬ、ある一種の力を持つてゐた。半ば氣ちがひめいた彼の言葉の中には、單に恠巧ぶつた人間のへぼ理窟以上の、何ものかが感じられたのである。けれどその時はミハイロフも、自分の魂を不吉な注意に集中させ、沈潜させるのが何ものなのか、自分でもはつきり分からなかつた。が、とにかく、いつでもナウーモフが話をする度に、この燃えるやうな、アブノーマルな目をした奇怪な顔から、少しも目を離さないで、耳を澄ますのであつた。

「ギクトル・ユーゴーが、」殆ど卓の傍まで寄つた時、彼はかう言ふチージュの聲を聞き分けることが出來た。「ユーゴーが防塞の上に立つたとき、誰かが彼の方へ鐵砲をさし出しながら、『ユーゴー君、君は鐵砲を持ってないぢやありませんか』と言つたものです。ところが、ユーゴーはそれ



に對して、「市民ユーゴーは、自由のために死ぬることなら出来るけれど、人を殺すことは出来ません！」と答へたさうです。」

滑稽ですね！」とナウーモフがずばりと言ひ放つた。

「さうかも知れませんが——毒々しい皮肉を帯びた調子で、チージュはかう答へると、明らかにわざとらしい、刺すやうな聲でから／＼と笑つた。

「勿論、」とナウーモフは語をついだ。「自由のために戦ふ、最後の血の一滴までも戦ふ、といふことは僕も分かるけれど、自由のために死ぬなんて、あんまり氣の利いた話してもありませんな！」

「しかし、それは偶然ですよ！」

「もし偶然だとしても、やはり同じ事ですよ！……自由のために殺されるといふ事は、自由のために死ぬのとは違ひますからね。革命だとか、戦争だとかいふものが存在し始めて以來、かつて一度も人間に幸福を與へた事のない——また與へる事の出来ない、この評判ばかり喧しい自由のために、どれだけの人が死に赴いたか知れません。僕はさうしたばかりしい言葉を、平クトル・ユーゴーのやうに、偉大な人間の口から聞くのが苦しいのです。」とナウーモフは言

つた。「無論、この言葉が群集の口から發せられるなら、僕だつて得心できます。かうした言葉も、大學生か何かの口から發せられた時には、寧ろ美しくさへ響くものです……すべての人と共に進むのは、羊の群れに取つては結構なことですよ！……もし一匹の羊が海へ飛び込めば、全群が續いて水の中へ身を跳らす——それは僕にもよく分かります。しかし羊の群れが水へ飛び込んだらと言つて、牧夫までがその後から飛び込むとしたら、それは氣の利かない見苦しい事、といふより寧ろばかげてみます！……」

「その論據にもとづいて、君は防塞に昇らないつもりですか？」憤怒の餘り身を慄はせながら、チージュは毒々しくかう口を入れた。

「いや、どうしまして。」とナウーモフは平氣な調子で言ひ返した。「防塞へ昇るのも厭はなければ、鐵砲を射つてのさへ厭ひません。たゞその發射によつて、天から月を射落とさう、などと考へるのは大間違ひです。」

「君は冗談ばかり言つてみますね。」とチージュは氣むづかしげに注意した。

ナウーモフはちつと彼を見つめた。

「僕は一度も冗談を言つた事がないし、また冗談など言へ

もしません。僕は自分の考へてる事を言ふので、いつも同じ事を繰り返してゐるに過ぎません。」

「何をです？　すべては空しい努力だといふ事ですか？」

「そんなことは繰り返す必要もないくらゐです。これは昔から言はれてゐる事で、君も心の奥底では、その眞實を認めてゐるでせう——君がそんな神経的な疲れた顔をしてゐるのも、これあるかなです。僕が言ふのは、もういゝ加減に合點しなければならぬ事です——つまり革命も、いかなる政治の形式も、資本主義も、また社會主義も、永遠の苦悶を宣告せられた人類に、幸福を授け得ないといふ事です。もし死がすべての人の背後に立つてゐるとしたら、もし我が一人のこらざる間の中へ去つて了ふとしたら、もし自分の大切な人が死んで行くとしたら、もし我々のする事なすこと悉く、永遠の苦痛と不満の胚子を含んでゐるとしたら、もし世界が何よりもまづ巨大な墓場であつて、我々はなぜかそれを大事さうに守つてゐるのだとすれば——その時は君らの主張するやうな社會組織が實現されたつて、我々に取つて何になりますか？　しかし死の事などは語らなくなつていゝです。結局、死といふものは、面と向かつて凝視できませんから、それより寧ろ、生活そのものを取つて考へて

見ませう。君がたは人々の境遇を、一つの水準線に歸結できるでせうが、欲望や性格や偶然の極まりなき變化を、同一線上に歸結することは到底できません。不死の靈藥は、君がたの頭を粉微塵にする石によつて、跡かたもなく叩き潰されて了ふだらうし、平等は達し難い欲望の苦痛の中で亡びるに相違ない。よし君がたが富みや、權利や、物質的満足の點に於いて、人間を平等にすることが出来たとしても、ばかを賢人と、醜婦を美人と、健康な人間を病人と、均しくする譯に行かないでせう。戀ひを持たない人は、戀ひに憧れて苦しみつゝ、せめて一人の女にでも愛撫されたらと、まるで最上の幸福か何ぞのやうに空想するでせう。また、一人の妻を持つてゐるものは、感情の單調に悲痛な生を送るだらうし、何百人といふ妻を持つた人間は、唯一の愛情に憧れる事でせう！　すべてがその通りなのです。人間はいかなる境遇にも、満足するものぢやありません。それどころか、不死さへも耐へ難いほど退屈なものに思はれるでせう。今日も不死、明日も不死といふやうになつたら、人間は死といふ事を、まるで最上の幸福のやうに祈り始めるでせう！……」

「ぢや、結局、どうしたらいゝのですか？」恐ろしい憤激の

色を浮かべながら、チージュはかう聞いた。

「勿論、死ぬるのが何より一番です……どうせなんでも、最後は要するにそれですからね。して見ると、早い方が氣が利いてゐますよ。」

「では、君もさう思ひますか？」突然ひよろ長いクラウゼが、メフィストのやうな眉を吊り上げながら聞いた。

ナウーモフは彼の顔を見つめた。

「さうです。が、しかしそれが全部ぢやありません！ 力のあるものは、もつと大きな範圍内で事を行ふべきです！ 人間の心に巢くうてゐる生の迷信を四散して、こんな無意味な喜劇をだら／＼續ける權利がないといふ事を、彼ら一同に合點させなければなりません。僕は妊娠した女を見ると殺したくなる。もしその結實が生長して、子孫が自然の順序を踏んで續いたら、その女一人の體から、何といふ恐ろしい苦痛の河が流れ出すか、想像するに餘りあるほどです。その子孫の中には、幾百萬の不具者、悪人、殺人犯、自殺者が生じるでせうし、また幾百萬といふ人間が競争で慘殺されたり、汽車に轢かれて死んだり、氣が狂つたりするに相違ありません！……彼女は生むといふ行爲によつて、何といふ恐ろしい犯罪を、未來の幾十億といふ不幸な人間に

對して行なつてゐるか知れない！……彼女は一人の小さな苦しめる人間を生んで、苦痛と疑惑の中に育て上げ、その子の呼吸一つ一つにも慄へ戦きながら、その將來を案ずる惱ましい思ひの中に死んで行くのです。この一つの弱々しい火を、自分の墓場まで運んで行つてから、それをこの世へ殘して置く、それは一體なんのためでせう？……それは單に數へ切れぬほどの子孫が、耐へ難い苦痛の中に叫喚しながら、彼女の記憶を呪ふために過ぎないのです。あゝ、母がおれを受胎した日は呪はれるがいゝ、おれを養つた乳房、おれを抱いた手は呪はれるがいゝ……おれは生まれぬ方がよかつたのだ！……」

「それは聖書の中にある文句です。」とチージュは氣むづかしげに注意した。

「いや、聖書の文句ぢやありません！」ナウーモフは名狀し難い興奮の體で叫んだ。「これは人生の眞理なのです。ところが、君がたは自身不幸な身で、何かしら到底あり得べからざる生活の轉換を夢想しつゝ、日に日に死んで行つてゐる癖に、なぜか多數の人間にそれを隠して、その愚かな頭腦に未來の人類とか、正義の黄金時代とかいふ空想を叩き込んでゐるのです！ そんなものはありやしない！

——正義などといふものは現在もなければ、將來にも出て来やしないでせう。なぜといつて、宇宙は我々の利害を考へて、我々を生み出したのでなくて、我々の苦しみが宇宙に取つて必要なからです。そのうちいつか君がたも、僕の言葉を眞理と悟つて、遅かれ早かれ、自分の生涯の總じめをするでせうよ……」

ナウーモフは口を噤んで、長いあひだ卓の端で、瘖せた指をもぞ／＼動かしてゐた。一同は黙り込んだまゝ、何やら待ち構へるやうな表情をしてゐたが、チージュは一座を毒毒しげに見廻しながら、甲高い聲で笑ひ出した。

「だが、君はみんなを脅しつけましたね！……ばか／＼しい、まるで明日にも、みんなが絞首になるやうだ！ 本當に何といふ量見の小さい事だらう！……君自身こそ恐ろしい犯罪を行なつてゐるんですよ。もし運命が、言葉で他人を動かす力と、才能を君に授けてくれたとすれば、君は人々を前へ前へと導いて、彼らの意氣沮喪したときに、よりよき未來に對する希望を與へて、彼らの戰鬥力を維持してやるべきぢやありませんか……それなのに君はばか／＼しい、まるで自殺俱樂部でも立てるやうに……聞いちやゐられない……本當に何といふ事だらう、ばか／＼しい！」

ナウーモフはぢつと彼を見やつた。その目は何とも言へぬ繊細な、毒々しい皮肉に充ちてゐるやうに、チージュには感じられた。

長い沈黙が襲うた。風が庭で／＼／＼鳴るのが聞こえた。一種漠とした不安が一同の心を領して、人々は自分の魂の聲に耳を傾けた。そしてみな一様に、暗い氣うとい響きを開き分けたのである。人生が何となく陰鬱な、暗いものに思はれた。醫師のアルノルヂイは氣むづかしく、重苦しい憂愁に沈んでゐるし、ひよる長い騎兵少尉補は、些かも人を生活へさし招くやうな空想を信じ得ないで、冷たい倦怠に惱んでゐた。チージュはいら／＼とした氣持ちで、何やら自分で自分に問ひ掛けたが、答へを發見する事が出来なかつた。ミハイロフは、次第に心中に擴がつて行く空虚を、奇怪な恐怖をもつて見つめてゐるし、家の壁の中には、蒼ざめた悲しげな女が死にかゝつてゐるし、生に壓し挫がれたネルリは、どこかへ隠れてゐた。たゞ一人エヴゲーニヤは、げげんさうにナウーモフを見つめてゐた。その輝かしい黒い目の中には、まだ恐怖に行き當たらぬ、無反省な本能的な生命が閃いてゐた。

「自殺俱樂部だ！」とチージュは呟いた。「大方この悪魔に

はそれが必要なのだらう？」

エヴゲーニヤは、重苦しい夢から醒めたやうに、ぶるつと身を慄はした。

「アルブーゾフさんはどこへ行つたのでせう？」と彼女は訊ねた。

醫師のアルノルヂイはクラウゼ少尉補と目交ぜをした。

「どうしたんですの？」二人の表情に気がついて、エヴゲーニヤはかう聞いた。ひよろ長いクラウゼはちよつと黙つてゐたが、

「今ではもう秘密ぢやありません。物々しげに眉を動かしながら、彼は口を切つた。「それに、將校會議がこの事件の審理をした以上、秘密であり得る筈がないです。」

「それぢや決闘が成立するんですの？」息づまるやうな好奇の念を抱きながら、エヴゲーニヤはかう聞いた。

「さうです。」とクラウゼは答へて、棒のやうにきちんと立ち上がった。

エヴゲーニヤは、大きな目を貪るやうに見開いて、ぢつと彼の顔を見つめた。

「しかしこの事件は、非常に悲惨な結果を見るかも知れないですよ。」決闘そのものも決闘家も、厭で堪らないといふ

やうな、氣難かしい憤懣の色を浮かべながら、チージュはかう口を入れた。

「そりやもうさうですとも！」クラウゼ少尉補は物々しげに同意した。「勿論です！ アウグストフは聯隊でも屈指な射撃の名人ですが、アルブーゾフは殆ど一度も拳銃を手にした事がないでせう。あの男はきつとアルブーゾフを殺しますよ……えゝ、きつと殺しますよ！ それに、冷酷で殘忍な男ですからね……」

クラウゼ少尉補はアウグストフ副官に、アルブーゾフを殺すだけの慘忍性があるかないかと、仔細に考量するやうに、ちよつと無言でゐた。一同は期待の情をもつて彼を見つめてゐたが、まるで彼の思想の流れを追つてもゐるやうに、ひつそりと静まり返つた。

「えゝ、それは疑ふ餘地もないです。」とクラウゼはまた言ひ出した。それは丁度、自分の想像を悉く撿覈して見たあげく、今度はいよ／＼きつぱり同一の結論に到着した、といふやうな風つきだつた。「あの男はアルブーゾフを殺します！」

彼はこの言葉を非常に物々しい、莊重な、深く思ひ込んだやうな調子で發したので、一同は思はず慄然と戦いて、

息づまるやうな悪寒があたりに漲つた。エヴゲーニヤは、この言葉を聞くと同時になぜかちらとミハイロフの方を振り返つた。それが衝動となつて、一同は機械的に彼の方を眺めた。

もう皆が席を立つたとき、ミハイロフはたゞひとり頭を垂れながら、卓に向かつて腰掛けてゐた。彼は眞蒼な顔をして、そのために暗色の目が、殆ど眞黒に見えるほどだったが、彼は執拗に布を見つめてゐたので、その表情を見分けることが出来なかつた。

このとき誰かわきの方から卓へ近寄つて、その上に手を突いた。その足音は恐ろしく軽くて、卓へ觸るのも極めてしとやかであつたが、一同はすぐそれに氣がついて、慥えたやうに振り向いた。

ネルリが兩手を卓の端に突きながら、立つてゐるのであつた。ラムプの光りは、眉を擡めた蒼くいかつい顔を照らしてゐた。ぢつとクラウゼを見つめてゐる彼女の顔は、丁度「わたしすつかり聞きましたわ……あれは本當なんですか？」とでも言ひたさうであつた。

それは緊張した一瞬間であつた。ミハイロフは殆ど慥えたやうに飛び上がった。彼はネルリがこゝにゐる事を知ら

なかつた。皆でエヴゲーニヤの所に集まる時、一度も出て来たことがないからである。ジェーネチカは、ネルリの方へ飛びかゝるやうな、突發的な身振りをしたが、ネルリが彼女の方を向いて、ほんの心もち細くそつた眉を動かしたので、エヴゲーニヤはその勢ひ込んだ身振りで體を屈めたまま、立ちすくんで了つた。

ネルリの薄い唇はびくりと動いた。

「決闘はいつですの？」落ちついた緊張した聲で、彼女はかう聞いた。

全く、クラウゼはこの事をまだ言はずにゐたのである。人々は、それを聞き忘れたのを、奇妙に感じた。背の高い少尉補は上の方から物々しい、冷淡な態度でネルリを見おろした。それはまるで、自分の答への効果を、計量してゐるやうであつた。ネルリは慥えたともつかず、威嚇するともつかぬ、ぢつと据わつた燃えるやうな目を、相手から放さずに待ち設けてゐた。

「明後日です！」突然クラウゼは簡単に物々しく言つて、ネルリに一禮すると、そのまゝ卓の傍を離れ、すぐ闇の中に消えて了つた。

ネルリは依然として、卓のはじに指を突いた姿勢のまま、

で、少尉補の消えた方を見つめながら、ちつと立つてゐた。ミハイロフは死のやうに眞蒼な顔をして、彼女の方へ一歩ずつみ寄せた。彼は自分でも、何をし何を言はうと思つてゐるのか、分からなかつたのである。けれどネルリが惨忍な、憎悪に充ちた目つきで、彼を見やつたので、彼は敗亡して、途方に暮れたやうに立ち止まつた。

一同は、ばかげた滑稽な様子で立ち竦んだ、ミハイロフを見ないやうに努めながら、臆病な心配らしい聲で急に話し出した。

「しかし實際のところ、」とダギヂェンコが言った。「いつも決闘では、射撃の上手なものが勝つとは限らんです。まるで射つすべを知らない人間が、折り紙つきの暴れ者を斃した例も、よくありますからね……」

「勿論ですわー」とエツゲーニヤは相槌を打つた。そして、一旦しかけた運動を無意識に完成させるために、ネルリの手を取つた。

ネルリはその場を動かうともしなければ、手を振り放さうともせず、依然として卓に凭れてゐた。

「あゝ、さうですともー」トレニョーフはまご／＼して鬚をひねりながら、まづい調子の合はせ方をした。「たゞ標的を

狙つて射つのと、自分に拳銃の口が向けられてる時に射つのは、まるで別ですよ。そこには非常な相違がありますからねー」

ばか／＼しい混乱が起こつた。一同は一齊にがや／＼口を切りながら、自分でも信じてゐないことを、ネルリに信じさせようと努める風であつた。不意にネルリは短い笑ひ聲を立てながら、つと卓を離れて、家の方をさして歩き出した。

沈黙が一座を襲つた。人々は妙にほんやりした様子で、暇を告げ始めた。

「ミハイロフさん、」とエツゲーニヤが言った。「わたしあなたに一口いひたい事がありますの……」

ミハイロフは首を上げないで、歩みを止めた。彼は女の言ひ出す事が、ちやんと分かつてゐたのである。ほかの人は急いで傍を離れた。餘り重苦しく不愉快だつたからである。エツゲーニヤは爪立ちで身をゆすりながら、ミハイロフの前に立つてゐた。彼女の顔は殘忍で冷笑的だつた。ミハイロフは黙つてゐた。何かしらある物が彼の喉もとを壓しつけた。彼は自分が何ともいへないほど小つぽげな、つまらないもののやうに感じられて、この瞬間はどんな不

作法な侮辱にも、どんな不遜な憶測にも、抵抗する力がないうやうな気持ちでした。

「ちよつとお訊ねしますが、エズゲーニヤは彼の立ち場を了解し、彼の無力を直感して、復讐的な快感を覚えながら、大膽な威のある調子で言ひ出した。この事件でああなたの役廻りは、餘り見つともいゝ方ぢやないやうに思はれませんか？」

一瞬の間に力が魁よびつたやうに、ミハイロフは全身をびくつと引つ吊らせた。血がさつと顔に漲みなつて、目の中が暗くなつた。

「僕は誰にもそんな……権利を與へない……」彼はしやゝ腹れた聲でかう言つた。

エズゲーニヤは大膽にからくと笑つた。

「だから、わたしもそんな物を下さいと頼んでやしませんよ！……あなた幾らでもお氣に入るだけ、そつくり返りなさるがよいわ、わたし驚きやしませんから！……わたしはあなたに言ひたい事があつたから、言つてるだけなんですの。あなたは……」

ミハイロフは彼女の方へ身を屈めた。彼はまるで氣ちがひのやうだつた。もし女が何かもう一口いつたら、彼はそ

の美しい大膽な顔を、撲りつけたかも知れない。けれどエズゲーニヤは、とつぜん急に後ろへ身を反らせ、彼に面と向かつて、からくと嘲るやうな高笑ひを浴びせながら、急にくるりと向きを變へて駈け出した。ミハイロフはその場に取り残されながら、何かねとくした悪臭の鼻をつく泥水の中へ、頭からすつぽり陥つたやうな氣持ちがした。肥えてずつしりした醫師のアルノルヂイが、ものうげに彼の胸をかゝへて、連れて行つた。

## 二九

トレニョーフ二等大尉とトーツキイ中尉とは、控へ室に立つて副官に暇を告げてゐた。トレニョーフは着い沈んだ顔をしてゐるし、中尉は威張り返つて、物々しい様子をしてゐた。もう一切のことは語り盡くされた。副官はゆらくと足踏みして、體をゆすりながら、明かに二人の歸りを待つてゐるらしかつた。トレニョーフもそれを感じたのである。彼は冷たい傲慢な顔をした副官を、いつもの如く憎んでゐた。その高ぶつた調子、金屬で作つたやうな目、がつしりした大きな下脛、かういふものが憎くて堪らなかつたのである。が、なぜか歸りにくかつた。



「さやう、ちや明日は正五時半にお訪ねします。」陰鬱な様子で鬚を抓りながら、彼はかう言つた。

「何より一番大切なのは臆しないといふ事です。そして手が慄へないやうに、よくぐつすりお寝みなさい。」とトーツキイ中尉はもの／＼しく注意した。彼の肥つた赤ら顔は豪爽さうに慄へた。彼はこの恐ろしい言葉を、いかにも男らしい、落ちついた聲で言つたのを、トレニョーフが聞いたかどうか確かめるやうに、ちよつと彼の方を振り返つてさへ見た。

「さう、よく寝るといふ事が一ばん大切ですよ……」歸るのを妨げる、奇妙な、譯の分からない心持ちに、自分で腹を立てながら、トレニョーフは機械的にかう呟いた。

下臑の廣い副官は無言のまま、ゆら／＼と足踏みしてゐた。彼の美しい傲慢な顔は、何ともいへぬ冷たい輕蔑の色を浮かべてゐるので、言葉が一さい喉もとに悶へて了ひさうであつた。

「さやうなら！」到頭トレニョーフはかう言つて、もう一ど手を差し伸べた。

「さやうなら！」と副官は落ちついた聲で答へた。  
トレニョーフとトーツキイは、戸口の方へ向かつた。そし

て、トーツキイが把手に手を掛けた。副官はもとの場所にちつとしたまゝ、蒼白い顔を夕やみの中に浮かせながら、二人のうしろを見送つてゐた。もう薄暗くなつた部屋の中に、彼はたつたひとり立つてゐた。と、不意にトレニョーフは、ぶすりと心臓を突き刺されたやうな氣がした。彼は突然はつきりと、明日はこのやくざな悪黨が死ぬに違ひない、といふ事を直覺したのである。かうして、自分の生涯の最後の晩に、彼はがらんとした暗い部屋の中に、全く一人ぼつち取り残されるのだ。トレニョーフは、この男を好くものが、町ちゆうに一人もないのを思ひ出した。それのみか、彼は親友といふものさへ持たなかつた。たゞ心中ひそかに彼を憎んでゐる、飲み仲間があるだけだつた。

ある一種の力が、トレニョーフを鬨の上に押し止めた。彼は急にくると引つ返して、副官に近づき、息を切らしながら、興奮した聲で言葉みじかに言つた。

「さやうなら、アウグストフ君！」  
彼はいきなり相手を抱きしめて、接吻したかつたのである。

「さやうなら！」こんども副官はその場を動かうともせず同じ事を繰り返した。トレニョーフは薄闇の中で、彼がにや

りと冷笑したやうに思はれた。

彼の心を暖めてゐた、慄へ戦くやうな同情は、つかの間に消えて、鋭い侮辱の刃がトレニョーフの心を貫いた。こんな感情を示す自分は、單に滑稽で、ばか／＼しく、センチメンタルに見えるばかりだといふ事が、突然はつきりと分かつたのである。

で、出がけにわざと粗末な言葉でかう考へた。

「犬には犬のやうな死にざまが相應してらあ！」

家へ歸る途々、まるで牡雞のやうに擬勢を張つて、滔々と辯じ立てるトーツキイを、いゝ加減にあしらひながら、彼はたゞ二つの事のみ考へ續けた。

「なぜおれは、殺されるのがアルブゾフでなくて、あの男に相違ないと、あゝまで固く信じ込んだのだらう。アウグストフは冷酷で残忍な男で、聯隊ぢゆうでも指折りの射撃の名人ぢやないか？……それに、あの男が悪黨だといふ事は、明瞭に分かつてゐながら、あゝしてたつた一人、暗いがらんとした部屋に立つて、我々のうしろを見送つてゐたのを思ひ出すと、なぜこんなに胸苦しい、痛ましい氣持ちがするのだらう？……」

「事によつたらあの男も、おれが本當に友達らしい態度で

握手して、暫く話して行けばいゝと、思つたのかも知れない……事によつたら、あの男は單に習慣的な豪傑氣どりのために、あゝして冷酷残忍に見せ掛けようと、努力したのかも知れない……が、或ひはまたあの男の傲慢も假面に過ぎないで、一生涯自分の本當の顔を、他人から隠さうと苦心してゐるのぢやあるまいか？ 何か非常に恐ろしい事のために、全人類に厭忌を感じるやうになつたのぢやあるまいか……」

「實際ナウモフのいふ通りだ……人間はみんな不幸なのだ！ あの男も不幸なら、アルブゾフもおれも不幸なのだ……我々はまるで狂犬のやうに、苦痛の餘り互に飛びかかつてゐる！……しかも、自分の苦しみを誰に話したらいいのだ？……一ばん近い人間であるべきカーチャは腹を立てて、早速やきもち騒ぎを演ずるだらうし、またほかの者は、女房を恐れる、意氣地ない亭主の氣紛れとしか、見てくれはしないだらう……ところがおれは………あゝ、生きるといふ事は、なんて苦しいことだらう！」

トレニョーフは沈んだ様子で町を歩いて行つた。彼は惱ましく、物淋しい、くさ／＼した氣分になつて了つた。明日にもまた恐ろしいやきもち騒ぎが持ちあがるのを承知し

ながら、門のすぐ傍まで来て家へ歸らずに、方向を轉じて俱樂部へ行つて了つた。そこで彼は朝までかるたを戦はし、酒をたらふく飲んで、まるで一睡もせず、朝の五時が打つと、トーツキイ中尉を迎へに行つたのである。

副官は一人きりになると、書齋へ引つ返し、卓に向かつて腰をおろした。そして、美しい白い手に首をもたせながら、ちつと窓外を眺め始めた。

彼は少しも明日を恐れてゐなかつた。自分が殺される筈のないことは、彼に取つて明瞭すぎるくらゐだつた。彼の心臓はなだらかに穩かに鼓動してゐた。たゞ深い心の奥底に、何かしら重苦しいものが横たはつてゐて、残忍な復讐的な焦燥となつて、彼をいら立たせるのであつた。ふと彼の心に冷ややかな、毒々しい想念が浮かんで來た。

「あのばか者を殺して了つたら、何とかしてあの娘を取つちめてやらなきやならない。」

彼はしなやかな女の姿や、弱々しい體や、細い肩や黒い目などを心に描いて見た。そしてこの女が彼の粗野な肉慾に従つて、哀れな姿勢ポーズをしてゐるところを、何の興奮も情熱もなく想像した。その心持ちの中には、冷たく焼きつくやうな物があつた。彼はネルリが早速あすにも決闘の後で、自分

に身を任せてくれればいゝと思つた。それはもう肉慾ではなくて、一種奇怪な、全く冷やかな嘲弄の欲望であつた。しかし、その欲望は非常に烈しいものだつたので、彼の廣い下脛は劇烈な勢で、丈夫さうな、大きく揃つた齒を食ひしづるのであつた。この動作には一種獸的なところがあつた。

誰やら部屋の中へ入つて來た。

「誰ですか？」と副官は落ちつき拂つて訊ねた。と、彼はその時はじめて、自分が暗い部屋に坐つてゐる事に氣が付いたのである。

從卒の黒い影法師が、鬨なげの上でもじ／＼してゐた。

「副官殿、あちらへどこかのお嬢さんが見えになつてをります……副官殿にお目にかゝりたいといふ事で。」

そのうしろから、いま一人の細い人影が出て來て、鬨の中でたゆたつた。

副官はびつくりして立ち上がった。

「何ご用ですか？」と彼は聞いた。

「ちよつとお話したい事があります。」と低い女の聲が答へた。

從卒はそつと戸を閉めた。

副官は卓の傍に、女は戸の傍に立つてゐた。彼は女の顔にちつと見入つたが、誰か見分けがつかかなかつた。

「何ご用ですか？」もう一ど彼は冷やゝかに訊ねた。

細い姿は靜かに身じろぎしたが、やはり戸の傍を離れなかつた。そのとき副官は傍へ寄つて、細い肩を嚴めしく響めた蒼白い顔を、屈み込むやうにしてちつと見つめた。

「あゝ」と驚いたやうに彼は叫んだ。「あなたですか！

……」

「わたしです……」とネルリは低い聲で答へた。

意地わるい嬉しさうな表情が、下腮の石のやうに固い、冷やゝかな、傲慢な顔の上に、ちらと閃いた。しばらく彼は踏つてゐたが、やがて一步ふみ出して、力なくだらりと垂れた、冷たい弱々しげな女の手を取つた。

「あなたですか……」と彼はまた繰り返して、口を嚙んだ。

つい今しがた、卓の傍に立ちながら考へた事が、とつぜん思ひがけなく、恐ろしいほど間近に迫つて來たのである。彼女が何のために來たかといふ事は、心に浮かばないで、たゞ殘忍な、冷たい、野獸のやうな感情が、恐ろしい力をもつて、彼のがつしりした強健な體を襲うたのである。ネルリもその瞬間、來た時のやうに無事にこゝを去ること

は、とても出來ないと直覺した。

けれども彼女は恐れなかつた。もうどうなつても同じことだつた。たゞ一つの想念のみが彼女の頭腦を壓迫して、すべてそのほかのことは、なんの價値もないやうに思はれた。

「わたしが參りましたのは……」と彼女は言つた。「わたしお願ひがあつて來たのでございます……」

「何ですか？」闇の中でさへ白く輝く、狼のやうに大きな齒を剃きながら、副官はかう訊ねて、いま一方の手を取つた。

ネルリは身を遁れようと、力ない努力をした。

「あとで……」まるで夢のやうに、彼の身振りに答へながら、彼女は言つた。「わたしお話ししたい事がありますの……」

「どうか話して下さい。」依然として彼女の手を放さないので、白い齒を輝かせながら、副官は言つた。

「あなたは明日、アルプーズフと決闘なさるのですか？」

「するかも知れません。」

「わたし知つてゐます……それはわたしのためです……」まるで睡いのかと思はれるほど、のろ／＼した調子でネル

リは言った。「そんな事をしないで下さい……」

副官は彼女の手を放して、笑ひ出した。

「どういふ譯か教へて頂けませんか？」

「だつてわたしはもとなんですもの……」

副官は笑つた。

「美しい婦人は始終い로운な事件のもとになりますよ！」

ネルリは嚴めしく眉根を寄せて、彼を見つめた。彼女は男の言つた事が分からなかつた、といふより、まるでその言葉を聞いてゐなかつたらしい。緊張した想念が黒い目の中に窺はれた。

「わたしが悪いために、あなたは……あの人をお殺しになるのです……」と彼女は繰り返した。

「大きにさうかも知れません。」嘲るやうに副官は同意を表した。

彼の殘忍で冷酷な目は、自信に充ちた、傲慢な表情をしてゐた。

「わたしそんな事は厭です！」ネルリは絶望的な力を籠めてかう叫んだ。その聲は家ちゆうへ高く響き渡つた。彼女は地だんださへ踏むのであつた。

「おゝ！」呆れたやうな冷笑の調子で、副官は言葉じりを

引いた。

ネルリは彼の前に立つてゐた。髪は崩れてだらりと垂れながら、彼女の片頬を蔽ひ、その蒼褪めた細おもてに、物凄く美しさを添へるのであつた。副官の金屬的な目は、銀がかつた灰色の火花を發して輝いたが、その微笑は依然として落ちついて、人を莫迦にしたやうであつた。

「わたし存じてゐます。」やつとの事でネルリは言ひ出した。「あなたはわたしの事について、大變けがららしい、卑劣な口をお利きになつたさうです。事によつたら、わたしはさう言はれても、仕方がないのかも知れませんが……でもあなたは決してあの人を……一體あなたは、それがどれくらゐ恐ろしい事か、お分かりにならないのですか……それは罪でございませう！ そんな事は決してあるべきぢやありません！」

副官は踵から爪先へ、爪先から踵へと重心を移して、體を揺りながら聞いてゐた。その様子はさも面白くて堪らない、といふやうな具合ひであつた。ネルリは惱ましげに指を揉みしだきながら、

「まあ、聞いて下さい、あなたも人間ぢやありませんか！」と疲れたやうに口を切つた。「もしなにか間違ひがあつた

ら……どんなに恐ろしいかといふ事は、あなただつてお分  
かりの筈でせうに！」

副官は無口のまゝ體をゆすつてゐた。まるで石の壁のや  
うに、少しも突き入る透き間のない冷たい沈黙は、ネルリ  
を壓迫するのであつた。彼女は言葉に間誤つて、何だか  
見當ちがひを言つてゐるやうな氣がした。こゝへ走つて來  
る時には、自分がたつた一こと言つたら、それでも何ごと  
も起こらずに濟むやうな氣がしたのである。彼女はこの男  
を憎んでゐたので、まるで赤熱した針金のやうに、憎悪に  
充ちた言葉で彼の顔をびし／＼と鞭うつて、思ふ存分いひ  
まくつてやらう、さうすれば彼もそれを聞かないだの、一  
ことでも抗辯しようだの、そんな大膽なことは出来る筈が  
ない——とかう考へてゐたのである。ところが、今は忽然  
として、さういふ言葉がみんなどこかへ消えうせて、何一  
つ言ふべき言葉もなければ、この男を屈伏さすべき方法も  
ない、たゞ泣いて頼むよりはかはないと直感した。

「それはあなたのお考へになるほど、そんなに恐ろしい事  
ぢやありませんよ。少し鼻へかゝつた聲で、ゆつくりと  
副官は言つた。

冷たい嘲笑が彼の灰色の目に閃いた。彼は明らかに、それ

を快しとしてゐるらしかつた。突然ネルリは、彼が自分を  
頭から足の爪先まで、じろ／＼見廻してゐる様子に氣がつ  
いた。すべてを裸にして味はひ楽しむやうな視線が、彼女  
の手から胸の邊を這るのであつた。

恐怖が彼女を襲うた。彼女は不意にはつきりと、彼の空  
想してゐることが分かつた。そして、自分が危殆に瀕して  
ゐるのを悟つた。忘られてゐた處女の羞恥心が彼女の全幅  
を領して、ネルリは今にも戸口へ飛び出さうとしたが、も  
し自分が去つて了へば、決闘が成立するだらうといふ想念  
が、彼女の足を止めたのである。「あの男は聯隊でも折り紙  
つきの射撃の名人だ」といふクラウゼの言葉が、まるで黒  
い壁の上に白い字で書いたやうに、鮮かにくつきりと目の  
前へ現れた。で、自分ながら何をしてゐるのやら分からず  
に、いよ／＼最後の方法に訴へようといふ本能に驅られて、  
ネルリは思ひ掛けなく、崩れるやうに彼の前へ膝を突いた。

「わたしお願ひします！」自分でも何を言つてるやら分か  
らずに、熱い指で男の手を握りながら、彼女はかう呟いた。  
奇怪な恐ろしい微笑が、副官の薄い唇を這つた。

「あなたお願ひなさるんですか？……そんなら話は別に  
なります！……しかし普通の場合ひ、願ひに對しては謝禮

といふものがありますよ。」と彼は聲を慄はせながらかう言つた。

ネルリは合點の行かない様子で訊ねた。

「え？……何ですつて？」

副官は冷ややかに微笑した。

「あなたは可愛いご婦人ですな……」肉感的な表情で彼はかう言つた。

ネルリはしづかに立ち上がった。その目は物凄く、顔は眞蒼になり、唇は慄へてゐた。

「それは卑劣です！」と彼女は息を切らせながら言つた。そして、ちやうど戸の把手を見つつけようとして、それが分からないうつたやうな手振りをした。

「さうかも知れません……」

ネルリは相手の冷酷な美しい顔から目を放さずに、一分間ばかりちつと押し黙つてゐた。副官は、信ずる所ありげな微笑を洩らしながら、待つてゐた。

「あなたは卑劣な人です！」とネルリはしや嘎れた聲で言つて、戸口の方へ一步ふみ出した。

やつと見えるか見えないかの癢癢が、廣い下脛を掠めて、しつかりした灰色の目は、思はずばかりと瞬いた。けれど

も彼は背を卓に凭せ、兩手を騎兵ズボンの衣囊へ入れたまま、何とも返事しなかつた。

ネルリは踵を轉じて、つか／＼と戸口の方へ歩き出した。

副官はその後を見送つてゐた。すると、この灰色の目の視線を受けて、ネルリは體が萎えて行くやうな氣がした。その動作は弱々しく自信がなくなつて、足はふら／＼して來た。彼女は把手に手をかけたが、戸を開けなかつた。何だか戸がすつかり鐵で出來てゐて、恐ろしく重いやうな氣持ちがしたのである。彼女は何とも譬へやうのない憂愁と哀願の表情で、うしろを振り返つた。

固い、冷酷な、残忍な顔は、彼女を見つめてゐた。副官はさも待ち遠しさに、足で床をこつ／＼鳴らしてゐた。

思ひがけなく、ネルリはまるで霧に包まれたもののやうに、無我夢中で幾足かよろ／＼と彼の方へ歩き出した。そして、よろ／＼よろめいたかと思ふと、まるで倒れるやうに再び膝を突いた。

「後生です！」彼の方へ兩手を差し出ししながら、彼女は乾からびた唇でかう囁いた。

副官は冷ややかに首を振つた。

ネルリはしほ／＼と立ち上がった。髪の毛は肩の上へ束

をなして落ちかゝり、肩は慄へ、目はまるで氣ちがひのやうにどんよりしてゐた。

彼女はまたもや戸口をさして歩き出した。

副官は手を上げて爪先を見つめてゐた。と、ネルリはしは腹れた不明瞭な聲で、何やら言ひ出した。

「何ですか？」と彼は訊ねた。

ネルリはちか／＼と彼の傍へ寄つて、細い蒼褪めた兩手を、だらりと下げたまゝ、立ち止まつた。その顔には一面しみが現れて、目は恐ろしい力の籠もつた憎悪を浮かべながら、ひたと相手の顔を見つめるのであつた。

「よろしうございます……」ちやうど何か恐ろしく重いものを轉ばすやうに、彼女はかう言ひ切つた。

突然、鐵のやうな二本の手が彼女を掴んだ。ネルリは燒けつくやうな羞恥の最後の閃きに打たれて、身を遁れようと跳いたけれど、二本の腕はます／＼強く抱き締めた。まるで絶壁から墮ちて行くやうな心持ちで、彼女は諦めて了つた。ちやうど夢に壓された時のやうに、彼女は男の冷たい、とはいへ、恐ろしく變はり果てた顔を見、その手の慄へるのを感じた。目の前に寢臺が現れたとき、彼女はもう一ど、嫌悪と恐怖の、無言の叫びを上げながら、身を動か

いたけれど、粗野で殘酷な力に投げ出されて、床の上に倒れたのである。

「になれ！」まるで恐ろしい憎悪の念でも感じてゐるやうに、彼はしや腹れた聲でかう叫んだ。

ネルリは目を閉ぢて、齒を食ひしばつた。彼女はしめつばい慄へる手の接觸を感じ、ちぎれ／＼の息づかひを聞いた。

「早く……早く……たゞもう少しも早く！」ネルリはかう考へたのか口走つたのか、自分でもわからなかつた。

突然、彼女は體が自由になつたのを感じた。

まるで打ちのめされたやうにぼつとなつて、ネルリは夢中で目を見開いた。そして自分の　　を見ると、びっくりと慄へて、膝に袴をかけ、身を起こした。副官は傍に立つてゐたが、その顔は途方に暮れたやうな、奇妙な表情をしてゐた。

「あなたは……あなたは妊娠なんですかね？」彼は慄へ聲でかう聞いた。

恐ろしい羞恥がネルリを襲つた。それはみじめな涙に充ちた、一種おもむきを異にした熱烈な羞恥であつた。彼女は兩手で顔を蔽ひながら、膝へ屈きさうなほど頭を屈めた。



解けた髪はばらりと下がつて彼女の顔を隠した。

「僕は……僕は知らなかつたのです！」としや噎れた聲で副官は言つた。

ネルリは泣き出した。彼女は侮辱されて、打ちのめされた不幸な子供のやうに、熱い手頼りない涙を流して、泣くのであつた。過去の苦い経験も、たよりない孤獨な身の上も、自分の力なさも、恐ろしい未來の心細さも、すべてがこの聲に出さぬ、絶望的な歎歎の中に籠もつてゐた。副官は途方に暮れたやうに彼女の前に立つてゐた。その廣い下腿はがた／＼慄へてゐた。やがて、彼は卓の方へ飛んで行つて、硝子壺を取ると、コップに水をついで、ネルリの傍へ持つて來た。

「氣をお鎮めなさい……これをお飲みなさい……さあ、お飲みなさい……」と彼は咄いた。その聲も今は前と違つて温かみを帯び、彼女を思ふ恐怖と憐愍と、自分に對する羞恥の情に充ちてゐた。

突然ネルリは首を上げて、さも親しげに彼の顔を見上げた。そして、親しい友達に自分の心弱さを謝するやうに、子供らしい手頼りなげな、はづかしさうな微笑を浮かべた。副官は顔をそむけた。と、熱い女の指が彼の手を取つ

た。彼はその手を掻き放して、二歩ばかりわきへ離れ、女に背を向けて立ちながら、かう言つた。

「僕はあなたに約束します……僕はあの人を射ちません……どうか赦して下さい……」

ネルリは大きく目を見開きながら、聞いてゐた。何だか本當にするのが怖いやうな氣がした。彼女の疲れ果てた心の中に、何かしら大きな、明るいものが生長して、次第に擴がつて行つた。

「お歸りなさい！」しや噎れた聲で副官は言つた。「僕お約束します……」

ネルリは立ち上がった。

「あなたは……」悦ばしげな明るい聲でかう言ひながら、彼女は男の方へ兩手を差し延べた。

「お歸りなさい！ 後生ですから、歸つて下さい！」さも苦しさうに繰り返して、副官は卓の傍へ腰をおろし、兩手に頭を載せた。

暫くの間あたりはひっそりしてゐた。ネルリは寢臺の傍に立つて、彼を見つめてゐた。涙に濡れた彼女の熱い顔は、びく／＼慄へるのであつた。やがて、彼女は音のしないやうに近寄つて、指の先で男の肩に觸つた。副官は振り向か

うともしなかつた。

ネルリは暫くちつと立つてゐたが、やがて屈み込んで、静かに優しく男の頭に接吻した。それからちよつと考へた後、しづかに踵をめぐらして、歩き出した。戸口の所で彼女はもう一度振り向いて、それから扉をあけた。

副官は扉がしまる音を聞いたが、身しろぎもしなかつた。従卒が部屋の中へ入つて来て、何やら取ると、そのまゝ出て行つた。副官は依然として坐つてゐたが、何か新しい偉大な感情の中に沈潜したやうな、恐ろしく緊張した心の中では、何ものが歌つたり、をのゝいたりしてゐた。その夜すべてが寝しづまつたとき、彼は莫斯科縣の妹に宛てて手紙を書き出したが、しまひまで書き終らないで、服を着たまゝ、長椅子の上へ突つ伏しに倒れて了つた。

### 三〇

太陽はまだ昇らなかつたが、あたりはもう明るくなつて、森の向かうの空が金色に染まつてゐた。遠い野の中では霧が溶けて、町の教會の上では十字架が輝き、そこから朝の爽氣に洗はれたやうに、澄み切つた、若々しい鐘の音が響いて來た。森の中では鳥が忙しげに囀つてゐる。白樺の木

は、まるで明るい花婿を迎へに出た花嫁のやうに、静かにつゝましく立つてゐたが、黒い櫛の木ばかりは、その永遠な平静を保ちながら、巨大な緑の頭を森の上へ差し上げて、あたりを見おろしてゐた。

なだらかな緑の草原の上には、あちこちと動く一團の人影が、不安げな模様を染め出してゐた。

アルプゾフはエナメル靴の踵を、柔かい土の中に深く埋めながら、草の上をあちこち歩き廻つてゐた。その足どりは大きく落ちついてゐたが、顔色はかつてないほど蒼白く、陰鬱な燃えるやうな目は、まるで寝の足りない人のやうだつた。

細い白樺の幹が、格子のやうに絡み合つた透き間から、遠い野と高い空の廣々とした、奔放不羈な景色が展開してゐる、森のはづれまで行き着くたびに、アルプゾフは歩みを止めて、長いあひだ沈んだ暗い目つきで、ちつと見つめるのであつた。けれど彼が眺めてゐたのは、もう薔薇色をした朝の光線に染まつた野でもなければ、晴れ渡つた空でもなく、足下の地面であつた。何か一種の耐へ難い力が、額の廣い大きな頭を抑へつけて、この美しく悦ばしい世界を見せまいと、上へあげさせないやうであつた。

ひよる長いクラウゼ少尉補は、鶴のやうに高く足を上げながら、同様に歩き廻つてゐたが、アルプゾフとは反對の側だつた。メフィストめいた眉は、惱ましい冥想でもしてゐるやうに吊り上がつてゐたが、その顔はいつものやうに、物々しげな威嚴に充ちてゐた。

第二の介添人たる小柄な若い將校は、切り株の上に腰をかけて、巻き煙草を吹かしてゐた。一本すひ終ると、白樺の幹へ當てようと骨折りがながら、遠くわきの方へ抛り投げて、すぐに新しい革の煙草入れから、別なのを取り出してゐた。彼は重苦しい心持ちがして、何やら痛ましいやうに思はれた。しかしそれは、殆ど知己のないアルプゾフでもなければ、自分の嫌ひな副官でもなく、何かほかの物だつた。事によつたら、玻璃のやうに脆い人間の命かも知れない。

始め一行が町から馬車に乗つて来る途中、若い將校はしきりに附け元氣を見せながら、努めて話をするやうにした。それは決闘の前に、ぜひ必要な事のやうに思はれたのである。けれど誰も返事をする者がなく、彼の言葉はなんの必要もない、空虚なものやうに響いた。いま一同は黙り込んで、めい／＼他人には分からない自分の事を考へて

ゐた。かうして、時は刻一刻と續くのであつた。

木立ちの間に、近寄つて来る將校たちの姿が、ちら／＼見え始めたとき、若い將校は胸がどきりとしたけれど、それでも嬉しいやうな氣がした。彼はすぐに立ち上がつて、膝頭が慄へるのを一生懸命に隠さうとしながら、仔細らしい顔つきをしながら、その方へ迎ひに行つた。赤い顔に白い鬚を生やした、肥えたトーツキイ中尉は、思ひ切つてもの／＼しい、腹立たしげな様子で挨拶した。かういふ重大事件に關與する者が、自分だけでないのが、彼は不快で堪らないらしかつた。見受けたところ、彼は自分の重大な任務の意識で咽せ返りさうになつて、この儀式がすべて規則どほり無事に済むやうにと、それはかり考へてゐるらしかつた。トレニョーフは暗鬱な顔つきで挨拶すると、すぐ長い鬚を噛みながら、わきの方へ離れて了つた。その様子は丁度、「勝手に好きな事をするが、いゝ！ おれは知らん！」とでも言ふやうだつた。

若い將校は慄えたやうに副官を見やつた。彼は白過ぎるほど白い騎兵服を着て、鼠色の長い外套の前をすつかりあけてゐた。その冷たい傲慢な顔は綺麗に剃り上げて、たつた今つめた水で洗つたやうに、さば／＼してゐた。金屬

で作つたやうな灰色の目は、澄んで明るかつた。その表情が若い將校を誇かした。勝隊中のすべての人と同様、彼はこの副官が嫌ひで怖かつた。けれど、この目はまるで別人の目で、ちやうど何かしら内なる歡喜が、その中に燃えてゐるやうであつた。

「事によつたら、あの男は殺されるかも知れない……いや、違ふ、きつとあの男は、相手を殺すものと思じてるに相違ない！」と若い小柄な將校は考へた。

太陽は徐ろに莊嚴な姿をして、地平線上に差し昇つた。白樺のつややかな幹は、薔薇色や紅の斑點に染め出された。空氣は一そり澄み切つて、森ぜんたいが、羞恥を含んだ若らしい歡喜を、吹き送るのであつた。

一同はどんな風に始めていゝか分らないで、ぐづく躊躇してゐた。誰もみな眞つ先に口を開くのが、恥かしいやうな風であつた。かういふ場合の常として、一ばん單純で愚かな人間が、眞つ先に言ふべき事を發見した。トイッキイ中尉は顔を眞赤にして、さも豪さうに面を脹らせながら、勝ち誇つたやうな大聲で言ひ出した。

「さあ……もうそろ／＼時刻だらうと思ひますが！」  
ひよろ長いクラウゼは前へ進んで、草原の眞ん中へ出る

と、さし昇る朝日を横に見ながら、鶴のやうな長い足で地面を計り始めた。一同はその様子を注意ぶかく見守つてゐた。彼が歩み始めた地點には、彈力に富んだ細い劍が、まるで蛇の鎌首のやうに、微かに揺れながら草の中に立つてゐた。この劍が綠色した濕つた土に、鋭く貪婪に突つ立つてゐるのを見ると、なぜか變な氣がして來るのであつた。クラウゼは計り終ると、うしろを振り返つた。けれど、誰ひとりその意味が分らないので、彼はメフィストのやうな眉を吊り上げて言つた。

「誰か貸してくれませんか……」

彼が了ひまで言ひ終らない中に、トイッキイ中尉は手早く劍をすらりと引き抜いて、彼に差し出した。クラウゼ少尉補はなぜか注意深く検査した後、足を草を押し分けて、切つきを土に刺し込んだ。第二の劍は、第一のものから二十歩はなれた所で、ゆら／＼と揺れてゐた。今度は二匹の蛇が、草の上に高く鎌首を立てながら、ずるい毒々しさうな目つきで、睨み合つてゐるやうに思はれた。二十歩の距離が餘り少いの、一同は慄然とした。

「ばかげてる。ばかげてる、ばかげてる！」とトレニョーフは獨りごちて、くるりとそつぽを向いた。

トーツキイ中尉はせか／＼し始めた。帽子の目庇の痕が白くついた額には、汗の玉がにじみ出してゐた。

「どうか規定の場所に立つて下さい！」何だか意地わるさうな、命令するやうな聲で、彼は叫んだ。それは當人たちがぼんやりしてゐるので、自分が何もかも心配しなければならぬ、といったやうな具合ひだつた。

アルブゾフはくるりとそつぽを向いて、どん／＼歩き出したが、副官は第一番に自分の拳銃を取つて、定めめの場所に立つた。アルブゾフは、暗い目つきでその方を横目に眺め、もの言ひたげに相手の明るい目を見ると、いきなり引つたくるやうに、若い將校の手から拳銃を抜き取つて、頭も上げずに、重々しい足どりで、自分の場所へ歩いて行つた。

別に誰もトーツキイ中尉に、指圖役を任せた譯ではないが、彼は小まめにそは／＼立ち働いて、萬事規則どほりに行くやうにと、一生懸命になつてゐるので、誰一人その邪魔をする者はなかつた。二人の敵手を向き合はせて、彼自身は二人の間を遮るやうに、眞ん中に立ちながら、ものものしい莊重な聲で言ひ出した。

「僕の考へるには、われ／＼介添人といふものは、全力を

盡くして……」

副官は明るい表情で彼を眺めながら、目だけでほ／＼笑んで見せた。アルブゾフは陰鬱な身振りで、痙攣的に頭をしやくつた。この身振りは恐ろしく斷乎たる表情に充ちてゐたので、中尉は本當に彼が、「え、こん畜生！……分かつてらあ！……ぐ／＼言ふな！」といったやうに思はれた。

それでもやはり、かういふ場合ひの附きものになつてゐる、溜め息とともに力なく兩手を攜げる事を忘れないで、中尉はちやうど二人の敵手の眞ん中の所から、二三歩うしろに飛びのいて、手を舉げた。

その他の介添人や軍醫が、興奮したやうに塊まつて立つてゐる場所から、彼の眞赤な豪さうな顔も、ばか／＼と長く拳銃を手にした、二人の不動の姿勢も、はつきりと眺められた。たぶん太陽が朝霧の中から出たのだらう、鳥の囀りが急に高くなつて、あたりが恐ろしく明るくなつた。そして、不思議に明るい副官の目の表情や、首を屈めて陰氣さうに眉を寄せたアルブゾフの顔さへ、あり／＼と手に取るやうに見えて來た。

「一！……」引つちぎつたやうに中尉は叫んだ。

アルブゾフは急に首を上げて、前方を見た。と自分のすぐ眞ん前に、恐ろしいほど近い所で、明るい目が瞬きもせず自分に見つめてゐた。そしてこの「一、二、三」と叫ぶ間の短い瞬間に、優しく、愛情さへ籠めて、眺めてゐるやうに思はれた。それどころか、この目は何やらもの言ひたげに、二すぢの光線となつて、自分の方へ慕ひ寄るのであつた。けれど、アルブゾフにはそれが何か分からなかつた。彼は一そう深く眉を蹙めたかと思ふと、とつぜん死の如く蒼ざめた。

「三！」と中尉はやけにかう叫んで、思はず一歩うしろへさがつた。

副官は火蓋を切つた。鋭い發射の音は白樺の幹に當つて、細かく碎けながら四方へ飛び散つた。細い白樺の枝はちよつと揺れて、また静まり返つた。鴉は不安げにがあがあと啼き出しながら、緑の椋の頂き高く舞ひ上がった。

その一轉瞬の間に、殆ど發砲を猶豫する暇もなく、幾千の想念がアルブゾフの頭を掠め去つた。

「外れた……あの男はわざとはづしたのだ……おれを莫迦にしたのかしらん？……さうとすれば、おれも狙ひをはづさなけりやならん！」

決してこの將校に對するものではないけれど、この二三日かれが心に抱いてゐた恐ろしい憎悪や、嫉妬と愛と憤怒の苦惱が、この一瞬間に、野獸のやうな狂憤の發作と化して了つた。

副官は、例の瞬きもしない明るい目を、彼から離さないで、徐ろに拳銃をおろしてゐた。

「あゝ……」嗤嗟の暇にアルブゾフはまたかう考へた。

「莫迦にしてるんだな？ 貴様は射撃の名人ぢやないか……よし、來い！」

そして、眞つすぐに白い騎兵服の胸を狙ひながら、彼は引き金をおろした。

轟然たる發射の音に紛れて、介添人らの立つてゐる傍の木蔭から起こつた、憎えたやうな叫び聲も聞こえなければ、相手がどうなつたかも見えなかつた。彼はたゞ皆がその方をさして駆け出しながら、蒼白い顔をして、驚いたやうに目を圓くしてゐる事だけに、氣がついたのである。

「あつ、當たつた！」恐怖の念と毒々しい悦びに、ぞつと寒けを感じつゝ、彼はその一瞬間にかう思つた。

副官は蒼白い顔をして、奇妙な微笑を浮かべながら、幾足か彼の方へ歩き出したが、まるで體が萎えたやうにぐつ

と身を屈めて、ぐたくと崩れながら、緑色の水々した草の上に坐つた。やがて、介添人たちの背中が彼を取り巻いて了つて、アルプーゾフはそれ以上にも見えなかつた。彼は長い拳銃を衣囊へ突つ込んだが、すぐ取り出してわきの方へ抛り出すと、そのまゝもと来た方へどん／＼歩き出した。彼は馬の方へ行つてゐるつもりだったが、實際はまるで反対の方角だつたのである。

誰やら追ひついて、彼の肩を抑へた。アルプーゾフは振り返つた。

「來給へ……君を呼んでゐますよ！」何だか妙に莊重な調子で、トレニョーフはかう言つた。彼の顔は眞蒼になつて、まるで寒さのためのやうに慄へてゐた。「來給へ……君はあの男を殺したんですよ！」

「犬には犬のやうな死に方が相應してるさ！」残忍な陰鬱な聲で、アルプーゾフはかう答へた。

「トレニョーフは自分自身の言葉を思ひ出して、目を伏せた。」

「もう今となつて、何をいふ事があるもんかね！ さあ、來給へ、さあ！」と彼は言つた。

アルプーゾフは哀願するやうな、途方に暮れた相手の目

を、げげんさうに眺めてゐたが、やがて肩を疎めて、くりと踵を轉じながら、足早にうしろへ引つ返した。

副官は兩足を投げ出して、草の上に坐つてゐた。ぶくぶくの軍服を着て、帽子を阿彌陀に被つた瘠せた軍醫は、しやがんで副官の腹部をどうかしてゐたが、その手の蔭から、赤く汚れたぐしよ／＼の襯衣が、まづアルプーゾフの目に入つた。

「腹へ當たつたのだ！」と機械的に彼は考へた。すると、急に背筋が慄へ出して、膝は何だかいゝ心持ちのやうな、また惱ましいやうな具合ひに、ぐつたり萎えてしまつた。

それから彼は顔を見た。

それはもう眞つ蒼になつて、紫がかつた陰影を帯び、薄色の鼻鬚の下から幅の廣い齒が、奇妙に病的に輝いてゐた。何だか愉快さうに見える透明な目は、近寄つて来るアルプーゾフを、ちつと執拗に見つめてゐた。トーツキイ中尉とクラウゼ少尉補が、彼の兩手を支へてゐたので、その手はまるで磔刑人のやうに上を向いて、わきの方へ突き出てゐた。アルプーゾフの顔を見分けると、副官はにつこりと笑つた。すると、その白い齒は一そう大きく、一そう病的に輝いた。けれど廣い下脛は跳るやうに、ひく／＼引つ吊つた。

「僕は死ぬる！」彼はしや嘎れた聲で、アルブゾフに言葉をかけた。「手を……もう今となつては同じ事だ！……」

アルブゾフは釘づけにされたやうに突つ立つてゐた。

「手をくれと言つてゐますよ……手を握つておんなさい……」誰やら横の方から彼にかう囁いた。

彼は驚いて振り返つて見ると、まるでもうみじめなとより言ひやうのない目に、涙を一杯ためた見知らぬ將校の、鬚のない顔が目映つた。

副官は彼の方へ身を伸ばすやうにしてゐた。そして明るい目は一そう明るくなつて、もう死の深みが滲み出たやうであつた。

「實はねえ、あの……君のネルリが……」依然として微笑を含み、齒を輝かせつゝ、彼は妙に不明瞭な調子で言つた。「きのふ僕の所へ來たんです……晚に……」

アルブゾフは、全身の血が頭へ突き上げたやうな氣がした。いきなりこの男に飛びかゝつて、犬のやうに片づけたりやりたいといふ、狂的な發作が目を醒ました。恐ろしい悪夢のやうな忌はしい映象が、幾つとなく彼の頭腦を掠めた。

「僕は君を射たないと、あの女に約束したんです！……」

副官は一そう低い聲で言つた。その顔はもう誰にも了解できない微妙な歡喜に輝いて、まるで内部から一面に照らし出されたやうであつた。

「僕は可哀さうになつたのです……あの女は不幸な身の上です！」副官はかう言ひ終ると、急に顔が紫色になつて、まるで兎のやうに、身を振り放さうと跳きながら、ひいひいといふ叫びを立て始めた。

深い紅の霧に包まれたアルブゾフは、どこかへ連れて行かれるのを感じた。クラウゼの冷たい聲が彼に向かつて、何やら言つてゐるが、なんの事か少しも分からなかつた。たゞその言葉の間々から、ワイルドな、恐ろしい叫び聲が聞こえるばかりだつた。

「痛い……痛い！ あつ！」

森のはづれへ來た時、太陽の強烈な光りは、痛いほど目を射た。あゝ、世界はいかに廣く、蒼空や、白雲や、光りの漲り溢れた緑の野は、いかに美しいことだらう！

### 三二

蒼褪めた夕焼けの帯は、地上に近く横たはつて、一つの黒い塊りに溶け合つた木立ちの間に立つてゐる、家々の黒



いシルエットの中には、ともし火が不安な星のやうに輝き出した。風——雷雨の前のやうな騒がしい夕風が吹いて、庭の木々は陰に籠もつた騒音を立ててゐた。

もう夏も終りとなつて、庭の騒音の中にも以前のやうな柔かい、落ちついた響きは聞かれなくなつた。木の葉はがさ／＼と息づまるやうな音を立て、冷たい空虚の氣を吹き送るのであつた。

ネルリはラムプを持つて露臺へ出ると、それを卓の上へ載せて、両手で頭を支へながら、腰をおろした。彼女の前には本が置いてあつたが、その殿つゝい目は書物の上を越して、庭の闇をぞつと見つめてゐた。まるで熟考を要するなものだが、その中に潜んでゐるやうな風つきであつた。

明るいラムプの光りのために、あたりはもうすつかり眞つ暗に見えた。たゞ光りにそむいた時だけ、空が地面より明るいことや、高い頭上を風に追はれる煙のやうな黒雲が、どん／＼走つてゐる様や、木々の頂きが憎えたやうに身を跳いてゐる様子などが、見透かされるのであつた。

とき／＼風がラムプに襲ひかゝると、灯りは憎えたやうにばつと燃え上がつて、ネルリの顔に油煙を吹き付けながら、闇の中へ沈んで行つたが、やがてまた晃々と、明るく

照らし出すのであつた。

ネルリは細い眉を顰め、両手でこめかみを抑へながら、眞面目ないかつい顔をして、闇の中を見つめてゐた。ちやうど空を走る雲のやうに、煙みたいに茫としたちぎれ／＼の想念が、彼女の殿んだ頭の中を掠めるのであつた。その顔は石のやうに緊張して蒼白かつた。

エズゲーニヤは家にゐなかつた。ネルリは、彼女がどこにゐるか、知つてゐたばかりでなく、實際以上に想像を逞ましようしてゐたけれど、それはもう以前のやうに、惱ましい嫉妬の念を呼び醒まさなかつた。どうだつて同じであつた。例の決闘があつて、冷たい傲慢な顔をした奇妙な副官が死に（彼はネルリの心に明るい神聖な記憶を残した）、アルプーゾフがどこかへ姿を隠し、正體なしに酒を啣りながら、淫賣婦を相手に暴れ廻り、明らかに我とわが身を亡ぼしてゐる、といふ噂が擴まり出した後、ネルリの心に一種の轉換が生じたのである。彼女は自分の心に深く沈んで行つて、まるで死んだやうになつて了つた。そして、もう鋭い苦痛もなければ、將來を思ふ不安もなく、たゞ暗黒と空虚のみが心を領してゐた。彼女はすつかり無關心な鈍い心になり切つて、人生が自分に對してどんな恐ろしい、破廉恥な、

礙ららしい事をしようとも、勝手放題にさせて置かうといふ氣持ちで、何かある終局を待つてゐるらしかつた。

誰やら重々しく階段を踏みながら、玄關口へ上がつて來るものがあつた。ネルリは頭を上げたが、ラムアの光りに遮られて、何も見えなかつた。

「わたしですよ。」醫師のアルノルヂイが、闇の中でかう言ひながら露臺へあがつた。

ネルリは無言のまま、彼に蒼ざめた細い手を差し延べた。巨大などつしりした醫師のアルノルヂイは、彼女の緊張した顔や、整めた肩や、ちつと据わつて動かぬ嚴つい目などを、注意ふかく見つめたが、何とも言はなかつた。

ネルリはやはり押し黙つてゐた。たゞ風の轟々と騒ぐ音のみ聞こえてゐたが、それは高い空を黒雲が、轟々たる音を立てながら、走つてゐるのではないかと疑はれた。醫師は卓の傍へ腰をおろして、杖を自分の前へ立て、その上に肥つた手を組み合はせた。

「先生！」不意にネルリが呼びかけた。

醫師は首を上げた。

「何ですか？」

「先生、教へて下さい……もし人生が縫れに縫れて、解き

ほごすことが出来なくなつたら……生きてゐることが出来なくなつたら、一體どうしたらいいのでせう？」とネルリは奇妙な死んだやうな聲で訊ねた。その調子があまり機械的だつたので、まるで問ひなどではなくて、別に答へを期待せずに偶然口に出した、思想の一部分のやうに感じられた。

「知りませんなあ！」とアルノルヂイは答へて、首を垂れた。

ネルリは一そう強く両手で膝谷を抑へながら、ちつと闇の中を見つめた。醫師は押し黙つてゐた。風は轟々と騒いで、動搖と混乱に充ちた闇の中は、いよ／＼不安げになつて來た。それは丁度、大地がある恐ろしい物を迎へる準備をしてゐるので、そのために煙のやうな黒雲は、名状し難い恐怖を抱きながら空を走り、木々は身悶へして哀訴し、風は安息の場所を見出し得ないで、飛び廻つてゐるやうであつた。

何か弱々しい音が、部屋の中で響き渡つたやうな氣がしたが、騒々しい物音に消されて、何かよく分からなかつた。醫師とネルリは首を上げて、耳を澄ました。同じ響きがあった。繰り返された。

「ネルリ。」といふ聲を一人は聞き分けた。

「マリヤさんがあなたを呼んでるんですよ。」と醫師のアルノルヂイはネルリに言つたが、なぜかその聲は慄へてゐた。ネルリは急いで立ち上がり、戸口の方へ近寄つたが、とつぜん立ち止まつて、ちか／＼と醫師の方へ身を屈め、妙にきつい聲で勢ひ込んで訊ねた。

「あの女は死ぬんですか？」

療養が肥つた醫師の顔を走つた。一分間ばかり、彼は何とも返事しなかつたが、やがて微かに唇を動かし、けれども、極めて簡単な一語すら發することが出来ないで、ただうなづいたばかりである。ネルリは長いあひだ彼の顔を見守つてゐたが、やがて突然おもひがけなく叫んだ。

「あゝ、何といふいま／＼しい人生だらう！」思はず慄然とするやうな、憎悪と絶望に充ちたこの呪詛の聲を、醫師の耳に残したまふ、彼女は聲のする方へ一散に駈け出した。病人は寢臺の上に横になつて、弱々しい手をネルリの方へ差し延べた。

「ネルリチカ、わたしは何だか恐ろしい……風がごう／＼いふものだから……少し傍に坐つて頂戴？ あなたいま向かうで誰と話してたの？」

「向かうに先生が來てらつしやいますの。」まるで、今あんな絶望的な聲で人生を呪つたのは、自分ではないといつたやうな、眞面目で單純な調子で、ネルリはかう答へた。

病人の目は大きく開いた。弱々しい瀕死の悦びが彼女の顔を照らした。その顔が急に美しく可愛くなつたので、ネルリは惱ましげに顔をそむけた。

「もしなんでしたら、こちらへお呼びませうか？」

「そりやもう呼ぶんですとも……先生！」病人は自分でかう呼びかけた。

と、重々しい足音が聞こえた。ネルリは部屋の眞ん中に立つて、扉と病人を交はる交はる見較べてゐた。マリヤは入り口から目を放さないで、靜かに悦ばしげにほ／＼笑んでゐた。醫師アルノルヂイの足音が、戸口のすぐ傍で聞こえた時、彼女はとつぜん兩手を舉げて、細い弱々しい指で髪を直した。

ネルリはそれを見て取つた。

醫師のアルノルヂイが入つて來た。

「ご機嫌よう、わたしの大好きな先生！ わたし先生がお見えにならなかつた間、ずる／＼退屈しましたわ！」と病人は言つて笑ひ出した。「人間てものは、もうあと三日しか

壽命がなくなつても、退屈なんて洒落たことを考へるものね……まあ、お掛けなさいまし、しばらく一緒にゐて下さいな。」

醫師のアルノルヂイは帽子と杖を置いて、椅子を寢臺の傍へ引き寄せながら、腰をおろした。

病人は明るい幸福げな目つきで、彼を見守つてゐたが、アルノルヂイが帽子を置いたためにちよつと横を向いた時、彼女は再び手を上げて、髪を直した。ネルリはそつと露臺へ出た。

彼女はまたもや両手でこめかみを抑へて、ちつと物騒がしい庭の闇を見入りながら、もの思ひに沈み始めた。

彼女が考へたのはほかでもない、マリヤは醫師を愛してゐるけれど、間もなく死んで行かねばならぬ。あゝ、彼女はどんな絶望を抱いて死なねばならぬ事だらう！　どんなに空しい努力を盡くしながら生のために闘ひ、生にしがみ付かうとあせる事だらう！　誰も永劫にこの苦悶を知る者もなければ、理解する者もないのだ。まるでこの世に存在しなかつた者のやうに墓穴へ去つて、年取つたものうげな醫師のみが、破れた心と、荒廢に歸した魂をもつて、この地上に残るだらう。ちか／＼と彼のかたはらを通り過ぎて、

永久に消え去つた幸福は、どれほど彼の心に昔物語りのやうな美に充ちた、明るいものに感じられる事だらう。それは丁度なに者か氣ちがひじみた殘虐性を弄して、彼のものうい哀れな魂を、擲擻したやうな鹽梅である。けれど、もし彼女が死ななかつたら、退屈で平凡な人間の生活が續いて、半年もたつたら二人は諍ひを始め、情熱も次第々々に消えて行つて、或ひは互に相手を荷厄介にし出すかも知れない……事によつたら、彼女は醫師を棄てて了ふかも知れない……幸福といふものは存在しない。あるのはたゞ幸福の幻影だけだ。それはちやうど傳説の海の王女のやうなもので、波の上にある時は美妙な歌をうたひながら、美しい両手を差し延べ、情慾に充ちた胸や、まどはし目をもつて男を招いてゐるが、陸へ上げられたところを見ると、魚の尻尾に蛙の腹をした、いとほしい怪物に變はつて了ふのであつた。

マリヤの部屋では、ラムブが濃い色の笠の下で輝いてゐた。寢臺の上にも、彼女の瘠せた弱々しい體の輪廓が、柔かく描き出された白い掛け布の上にも、蒼白い手の上にも、鮮かな光りが落ちてゐたが、彼女の蒼白い顔や、薄色の柔かい毛や、大きな目などは、影になつてゐた。この透明な

縁がかつた薄明りの中では、瘠せた頬も目の下の蒼い隈も見えないので、病人はまるで戀ひせる少女のやうに、若々しく美しく見えるのであつた。彼女は明るく輝やかしい目で、醫師を見守りながら、話すのであつた。

「わたしこのごろ大變よろしうございますの！ ねえ、先生、どうかすると、よくなるかも知れないやうな氣持ちがしますの……奇態ですわね、以前はちよい／＼よくなる事があつても、やがて死んで了ふに相違ないと、思ひ込んでゐましたが、今ではまるで子供みたいに弱くなつて了つて、ネリリやジーネチカの力を借りなくては、寢臺から起きることも出来ない癖に、それでも、全快の時が來さうに思はれてなりませんの。こんな事を白狀するのは、恥づかしうございませぬね、先生。」と彼女は遠慮さうには、笑んだ。そして涙の玉が彼女の目に光つた。「わたしこの間ある夢を見ましてね、それ以來、そんな事を頼みにするやうになりましたの……」

醫師は例の精巧さうな小さい目を見開いて、ちつと食ひ入るやうに彼女を見つめた。彼はもう疾うから、この病人は死ななければならぬ、そこには何の希望もない、といふ事を知り抜いてゐたので、今はもうすつかりこの想念に馴

れ切つてゐたが、それでも、彼の心臓はぎゅつと烈しく收缩して、危く叫び聲を上げないばかりであつた。白い寢床に横たはつた清らかな明るい女の姿や、その幸福さうな目つきを見、奇蹟を信じ切つてゐる。羞恥を帯びた、嬉しさうな聲を聞いてゐる中に、彼は忽然として明瞭に悟つた――この輝かしい目の光りや、幸福らしい微笑の中に、死がじり／＼と近寄りつゝあるのだ！

「もうだめだ！」と彼は考へた。

彼の老いたる心臓は、殆ど耐へ難いほどの新しい絶望感に、慄ましく動悸を打ち始めた。彼は始めてこの瞬間に、死が恐ろしく動悸を打ち始めた。彼は始めてこの瞬間に、死がこの世に存在しなくなる事や、自分が強く彼女を愛してゐる事を、痛切に感じたのである。緑色の笠の影は彼のたるんだ蒼白い顔に落ちて、この人間の顔が恐ろしい悲哀と愛情の痙攣に歪んで、物凄く假面のやうになつたのが見られなかつた。醫師のアルノルヂイは、人間わざと思はれぬ意志の力をもつて、ちつと自分の感情を抑へ付け、喉まで出た叫び聲を制しながら、靜かにかう言つた。

「どんな夢ですか？」

病人は再び靜かな、弱々しい、幸福げな微笑を浮かべた。

「こんな夢でしたの。わたしある晩、ジェーネチカやあなたに見られないやうに……まあ、あなたになんの關係があるのでせう？」と彼女は涙を滲ませながら笑ひ出した。「そつと家をぬけ出したんですの。まはりは恐ろしいほど眞つ暗で、しんとして淋しくて、息が窒るやうでした……それに、誰かに見つかりはしないかと、怖いんですの……けれど暫くすると……ほら、ね、よく夢でそんな事があるでせう、急にすつかりかるくした氣持ちになつて、あたりが不意に明るくなつて了ひました。もう夜ではなくて、輕やかな悦ばしい朝なんですの……空は一面にばつと明るくつて、何もかも光りに充ちてゐて、野は一面の花ざかりですの！赤いのや、黄色いのや、水色のや……ご存じでせう、單純な可愛い野生の花ですのよ……わたしは歩きながら考へました……もつとも、よくは分からないんですけど……」忙しげに醫師を見上げて、すぐ目を伏せながら、病人は急に間違つて、ばつと顔を染めた。

「何かしら、そりやいゝ事を考へましたの！……それから、かう言ふ事も考へましたわ——あゝ、何ていゝ氣持ちだらう！わたしはこの通り病氣ぢやないぢやないか……わたしは今までこんな輕やかな、いゝ氣持ちになつた事はない

つてね……かう思ふと、本當に霧みたいに輕くなつてゐるぢやありませんか。自分の着物を見ると、すつかり體が透き通つて、わたしの體を透かして花が見えるんですの……それから何だか變な風になりましたわ……何ともいへない感激が、わたしの全身を襲つて、心臟が張り裂けさうな氣がしましたの！わたしは嬉しさの餘り泣き出しながら、大きな花束を拵へて、胸へひと押し付けたかと思ふと、わたしはすつかり消えて了つたちやありませんか……野も花も以前のまゝで、朝の光りはあたりに漲つて、日はさし昇りながら、わたしだけがまるでゐないんですの……わたしはそこにゐて、すべてのものを見、すべてのものを感じてゐる癖に、わたしがゐないんですの……」

「何ですつて？」慄へる聲で、醫師のアルノルヂイは問ひ返した。

「何だか……わたしにも分からないんですの……たゞゐないんですわ……それでゐて、何とも言へない幸福な感じがするんですの！……丁度その場に誰かゐて、『さあ、これでお前は全快したぞ！見ろ、何といふさつぱりしたいゝ氣持ちだらう！』と言つたかと思ふと……目が醒めて了ひました。わたしは何ともいへないゝ心持ちがして、嬉しさ

の餘り泣き出しましたわ……そしてシェーネチカを起こして、すっかりびつくりさせて了ひましたの……そのとき以來、わたしは望みを抱き始めたんですの……可笑しいでせう、先生？」

「何が可笑しいのですか？」恐ろしい苦痛に齒を食ひしほりながら、醫師のアルノルヂイはかう言つて、椅子の背の上で組み合はした手に腮を載せた。それは大きにあり得る事です……あなたは本當によくおんなすつた……何しろ乾燥した申し分のない夏だし、こゝの空氣が素敵なんですものね……それに、かういふ靜かな生活ですから……」病人は有頂天の目つきで彼を見守つてゐた。彼女は醫師の言ふ事が、何かなみくならぬ賢明な言葉のやうに思はれたのである。

「先生、もしわたしが全快したら、どんなにいゝでせうね！」透き通つた手を拍ち合はせながら、彼女は明るい憧れの調子で言つた。「わたしはかうしてる間に、ずるぶん色んな經驗を得ましたわ……もう今わたしの體の中には、以前のは少しも残つてゐません……わたしはもうあんなに四方八方もがき散らして、自分の生活ばかりか、人の生活まで臺なしにした、ばかな墮落女ぢやありませんわ……」

今こそすっかり分かりましたの、先生……えゝ、わたしそりや俐巧な、俐巧な人間になりましたよ！」と彼女は笑ひ出した。

醫師のアルノルヂイは憂愁の念をもつて、彼女の言葉を聞いてゐた。彼女の聲に響く透明な、殆ど子供らしいほど無邪氣な、悦ばしい調子が、彼の胸を抉るのであつた。

「そして舞臺へもお戻りになりませんか？」と彼は訊ねたが、その聲もやはり同様に一變して、いつものやうに氣むづかしげな聲ではなく、無邪氣な響きを帯びてゐた。それは陰氣な老醫師のアルノルヂイではなくて、快活を裝つてゐる輕はずみな子供のやうであつた。病人はさも嬉しさうな、ぎよつとした表情で兩手を振つた。

「どう致しまして！」子供らしい悦びを響かせながら、彼女はかう叫んだ。「今こそわたしは、どうしたらいいかつて事が分かりましたわ！……ねえ、先生！ あなたは本當に優しいいゝ人ね……あなたお分かりになつて？ それがあなたにお分かりになつて？ お分かりになつて？」

彼女は兩手で彼の肥つた大きな手を取ると、いきなり引き寄せて自分の胸へ——白い薄絹の上着に隠れた、少女のやうに瘡せて小さい胸へ押し付けた。

醫師はこの接觸に思はずびくりとした。彼女が何といつても、若い美しい女だといふ事を、彼は始めて感じたのである。この感情が餘り意外で餘り強烈で、彼女の死といふ確乎不變の想念と、餘り調和しなかつたので、醫師は危く手を掻き取らないばかりであつた。羞恥と、喜悅と、それから何かまだ經驗した事のない（それとも疾うに忘れて了つたのかも知れない）感情が彼を攪んだ。

彼女は開けつ放しの明るい目で、まともに、ちかちかと彼を見つめてゐた。その目の中には、狡智も、惑亂も、恐怖も、羞恥もなかつた。彼女は大胆率直に、自分の戀ひを語つてゐるのであつた。

それが餘りに美しく、餘りに恐ろしかつたので、アルノルヂイは思はず身を屈めて、彼女の細い弱々しい手に顔を押し當てた。

「先生！ 靜かな幸福らしい、しかも疑ひを含んだ聲で、彼女は叫んだ。「あなたどうなすつて……わたしの言つた事がお氣に觸つたんですの？……あなたはわたしをあ……」

恐怖の情がアルノルヂイを攪んだ。彼女はこの最後の言葉を發するに相違ない、自分の生涯にかつて一度もなかつた幸福を、眞正面から名ざすに相違ない。かう彼は直覺し

た。この幸福は非常に近く寄つてゐながら、それでも永久に實現される事はないのだ。この一語が發せられたら、彼は到底それに耐へ得ないだらう。

「わたしはどうも……ちよつと待つて下さい……」忙しげに鈍い聲で、彼は遮つた。「今日は疲れて了ひましたよ……餘り神經を興奮させたものだから……けふ大手術をやつたのです……しかし、あなたがよくなりましたので、全く嬉しいですよ……どうも年を取つて、意氣地がなくなりました」と彼はふざけた調子で言ひながら立ち上がった。

彼女は依然として、醫師の手をちつと握つたまゝ、心もち自分の傍へ引き寄せた。その目は下から彼を見あげて、頬には微かな紅が燃えてゐた。唇は接吻でもしようとするやうに開いて、薄い掛け布の下には、不可能な愛撫の希望に攪みしなふ、細いすらりとした女の體が、はつきり描き出されてゐた。

「ちや、左様なら……早くよくなつて下さい！」醫師のアルノルヂイは忙しさうにかう言つて、彼女の手に接吻すると、どん／＼出て行つた、自分の背後に、愛情と撫愛に充ちた幸福な視線を感じながら。

入り口の石段で彼はエヴゲーニヤに行き當つた。彼女



は背の高い、すらりとした、華やかな體に、赤いゆつたりしたマントを纏ひ、帽子を被つてゐた。その體からは烈風と爽かな夜氣が、息苦しい部屋から飛び出した醫師の顔に吹きつけた。彼女は持ち前の連葉な微笑を浮かべて見せた。「あゝ、先生でしたか？……どこへいらつしやるんですの？……家のマーシヤはどんなですかしら？」と彼女は聲高に愉快さうに訊ねた。まだ何か鋭い強烈な印象が消えぬやうに、黒い目がきら／＼輝いてゐた。

醫師は立ち止まり、力を籠めて彼女の両手を取りながら、ぐん／＼壁の方へ押し付けた。それは丁度、彼女のいきいきとした騒々しい歡喜を、壓伏しようとするやうであつた。「死にかゝつてゐますよ！」殆ど叫ぶやうに彼は言つた。エヴゲーニヤはきよつとして、一步うしろへよろめいた。そして口をぽかんと開けたまゝ、一語も發する事が出来なかつた。黒い眉と目を持つた鮮かな美しい顔は、まるで壁のやうに眞つ着になつた。

「先生、何を仰しやるんですの？」

「死にかゝつてゐます……おしまひです！」と醫師は繰り返した。「それなのに……」

彼は了ひまで言ひきらないで、彼女の手を突き放すと、

ずしりと重々しく手摺りに突き當たりながら、風の吹き荒れてゐる闇の中に消えて了つた。

エヴゲーニヤは奇怪な目つきで、その後を見送つてゐたが、やがて不意に着物の裾を掴んで、病人の方へ飛んで行つた。彼女はもう病人が死んで了つて、部屋の中には、亡骸のみが横たはつてゐるやうな氣がしたのである。

マリヤは悦ばしげに叫びを上げて、彼女を迎へた。

### 三三

もう夏の終りの月夜の頃となつた。その明らかな光りの中には、間近に迫つた秋の冷氣が凍つてゐた。

大きな白い月は黒い木立ちの向かうにかゝつて、神秘的な冷たい光りの條を長く闇の中に引きながら、枝と枝の間から輝いてゐた。闇と光りとは相混じて、魔法めいた戯れを見せてゐたので、ミハイロフがエヴゲーニヤと連れ立つて、廣いならぬ並み木道を歩いて行く時、若い女の顔はとき／＼闇の中に沈んで了つて、たゞその狡猾らしい聲の響きによつて、彼女の笑つてゐる事が想像されるかと思ふと、時には一面に冷たい水色の光りを浴びて、黒い目が謎のやうに輝き、白い顔の土に眉がくつきりと黒く描かれる

のであつた。何かしら野性的な水精めいたものが、この顔の中に感じられた。そしてこの顔が招いたり、からかつたりするのであつた。ミハイロフは彼女が殆ど憎いやうな気がした。

彼は並らんで歩きながら、ステッキで拍子を取り取り、自分の足を叩いてゐた。生まれて始めて彼は自分の無力を感じた。この大膽不敵といつていゝくらゐ蓮葉で、華やかで狡猾な女性は、時に冷笑したり、時に殆ど身を任せさうにしたり、時に突き放したり、時にしなやかなすらりとした體を摺り寄せたりしながら、彼をまるで子供のやうに苦しめるのであつた。どうかすると、目的を達したやうに思はれる瞬間があつたけれど、いよゝといふ間際になつて、彼女は愚弄するやうな笑ひと、いつも決まりの警戒するやうな「オイ、ラー」と共に、彼の貪婪な手から巧みに、かゝるゝと迂り抜けるのであつた。

どうかすると、彼はうんと思ひ切り女を侮辱して、その傍を去つて了はうかと思ふほど、烈しい憤怒に捕へられる事があつた。

「あなたは多分この遊戯が面白いんでせうね？」と彼は不自然な、平衡を失した、冷笑的な聲でかう言つた。その聲の

中には、憤怒と欲望が慄へてゐた。「しかし僕はこんな遊戯の愛好者ではありません……僕はそんな事をする柄でもなければ、年でもありません！僕は不馴れですから……」「どんなことにも馴れなきやいけませんわ、ミハイロフさん！」エヴゲーニヤは闇の中から優しく答へた。

ミハイロフはちらと彼女を見やつたが、濃い蔭がその顔を隠して了つたので、彼はたゞ女が微笑してゐるのだらうと、想像したばかりである。

「僕はそんな必要を少しも認めません！」自分が滑稽に感じられるやうな気がして、彼は顔を眞蒼にしなが、齒と齒の間から言葉を押し出すやうにした。

「さうすれば、あなたもそんな自惚れやでなくなりませうよ！」

「僕そんな事は嫌ひです！」おなじやうな洒落と嘲笑に調子を合はさうと努力しながら、彼はやつとの事でかう言つた。

「なぜですの？」無邪氣なびつくりした調子で、ジェーネチカは叫んだが、その途端に胸のふつくりした、背のすらりと高い華奢な姿せんたいが、頭から足の爪先まで、月光を浴びて浮き出した。月は彼女の姿をくつきりと描き出して、

銀粉のやうに輝く道の白砂を踏む靴の爪つめまで、あり／＼と見えるのであつた。「わたし大好きよ……どうも仕方がありませぬわ……あなたは何でも自分の好きになるものと、考へつけてゐらつしやいますが、一つためしに、わたしの好きなやうにしてご覧なさいよ！　そこにまた特別な面白みがありますわ！　でも、厭で堪らないんですか？　……お可哀さうにねえ！　わたしあなたが氣の毒ですわ！」

ミハイロフは女の白い鮮かな顔をちらと見やつた。と、笑ひに慄へる薔薇色の唇が目に入つた。

「ねえ、ときに、」冗談はやめたといふやうに、突然ものしい眞面目な調子で、彼女は言ひ出した。「あなたはどうかすると、恐ろしく滑稽になる事があるわ……氣がおつきになつて？」

ミハイロフはぞつと冷水を浴びたやうな氣がして、齒は憤怒の餘りきり／＼と鳴つた。これはもう明らかな嘲笑だつた。

「あなたはどうかやら、僕を冷笑してる氣でゐらつしやるやうですね？」薄氣味の悪い聲ではあるが、しかし自己を抑へるやうな調子で、彼はかう注意した。

「わたしが？」エツゲーニヤはさも驚いたらしくかう叫ん

だかと思ふと、まるで水精ニムフのやうに、また闇の中に隠れて了つた。「一體わたしが女の征服者たる、ドン・ジュアンを冷笑するなんて、そんな大膽なことが出来ますか……わたしは今にもそのドン・ジュアンの抱擁に身を投じようとしてゐる、か弱い女ぢやありませんか？　……一體あなたはそんな氣の小さい人なんですの？　……あなたはもつと偉い人だと思つてゐましたわ、ミハイロフさん！」

彼女の狡猾らしい聲の中には嘲笑と、それから何か言葉に出さぬあるものが、捕捉しがたいほど微妙な交錯をしてゐた。彼女も、自分で自分がどうなつてゐるのか、分からなかつた。時々ミハイロフが大膽な氣持ちになると、ジェーネチカは目まひがして、頭がかつと燃えるやうになつて來た。足もとの土がふら／＼と流れ出して、からだ全體が焼けつくやうな衰弱感に襲はれた。けれども彼女の聲はその心持ちに逆らつて、依然として朗らかに狡猾らしく響く、からかふやうな侮辱の言葉を發した。時には好奇心と欲望が、異常な力をもつて彼女を掴み、體はぐた／＼と力抜けする事があつた。彼女はさういふ時、男がこの衰弱の瞬間を利用してくれ／＼ばいと、烈しい熱情をもつて望むのであつた。もうまるで抵抗する力がないやうな氣がした。け

れどミハイロフがちよつと體に觸るが早い、殆ど憎悪に近い一種奇妙な冷たい傲慢な感情が、彼女を突き放すのであつた。

白い月は暗い庭を冷たく照らしてゐた。どこか遠い處には町や、人間や、その他いつさいの生活があつたが、こゝはたゞ二人きりだつた——兩方から互に慕ひ合つてゐながら、楽しい危険な戯れのために苦しめたり、滑り抜れたりしてゐる若い男女のみであつた。男は僅か二歩しか離れてゐない所に、近くしてしかも及び難い女の肉體を感じていきなり引つ摺んで押し倒し、無理にも征服して了ひたい強い欲望を感じながら、それを抑へつけて一生懸命に隠さうと努めた。そして、まるで口の中が干からびたやうな、かさ／＼した毒々しい慄へ聲で、ものを言ふのであつた。ところが、女は黒い髪をはら／＼と亂して、欲望のために目を曇らせ、全身を弓弦のやうに緊張させながら、男ともまた自分自身とも、かたくなに戦ひつゞけて、自分の美しい體を護るのであつた。そして、否とも應ともつかぬ態度で、甲高い招くやうな聲で彼を嘲笑してゐた。

庭のはづれまで行き着くと、二人は立ち止まつた。こゝは木立ちが疎らに低く、月光に白く見える灌木がちつと立

つて、その下に黒い影が臥てゐた。廣々とした空は二人の上にひらけて、白い月は威あるもののやうに、晃々と萬物を照らしてゐた——金色の十字架を閃めかしてゐる遠い鐘樓の圓屋根も、蒼ざめて見える草も、暗い木立ちも、星をちりばめた空も、草原の上に黒く見える二人の姿も。

「さあ、そろ／＼歸らなくちや……マリーシャが待つてるでせう！」とエツゲーニヤは言つたが、別に歸らうともしなかつた。

ミハイロフは彼女の前に立つて、月の光りに白く鮮かに見える、目の黒い、眉のくつきりと浮き出した顔を眺めてゐた。再び彼女の全身は、薄色の輕やかな帽子から、低い草の上に並らんだ靴の尖まで、すつかり彼の目に映るのであつた。彼女のしなやかな細腰は、抱擁を乞ふやうに揺れ、胸は招くがごとき曲線を描き、鮮がないき／＼した唇は笑みを含んでゐた。

ミハイロフは單に女を興からせるに過ぎない、充たされざる欲望を抱いた自分が、堪らなく滑稽でみじめなものに思はれた。いつもの女性に對する優越權の意識は、この瞬間かれを見棄てて了つた。彼はもう以前のやうに、自分の強健な整つた體や、燃えるやうな目をした蒼白い顔を感じ

なかつた。

「ちや、どうも……さよなら」と彼はしゃべられた聲で言つた。「事によつたら、僕は大きいあなたを娯<sup>たの</sup>ませてゐるかも知れないが、しかし、これは到底僕の力に合はないです……もう澤山！ あなたは誰かほかの人を捜したらいいでせう。僕は退屈した女優さんの氣ばらしに、ご用を務める男とは少し人間が違ふんですから。」

エズゲーニヤは男の怒るのが面白くて堪らないやうに、謎めいた眼ざしで彼を見つめてゐた。月光を浴びた彼女の細い姿の中には、何かしら奇妙な緊張したところがあつた。「さよなら」とミハイロフは言つて、くるりと踵<sup>かかと</sup>を轉じた。

「あなたどこへいらつしやるの？ わたしを家まで送つて下さいな！ なんてお愛想のいゝ事でせう！」と彼女は呆れたやうに小さな聲で言つた。

「あなたは自分の家の庭にゐるんぢやありませんか？」ミハイロフは無作法に大膽な調子で言つた。「一人でも道は分かるでせう。」

彼は女をうんと侮辱して、全身が慄へ齒が痙攣的に食ひしぼるほどの、烈しい本能的な腹立たしさを吐き出したか

つた。彼は眞蒼<sup>まそう</sup>な顔をしてゐたが、一見したところ落ちついてゐるらしかつた。

エズゲーニヤは押し黙つてゐた。

ミハイロフはちよつと帽子を持ち上げて、もと来た方へ引つ返した。

彼女はまるで月光に釘づけにされたやうに、冷たい光りを全身に浴びながら、ちつと草の上に立つたまゝ無言である。男を止めさうな身振りなど、少しもしなかつた。ミハイロフはもう木立ちの蔭へ入つて了つた。

「お待ちなさい！」とつぜん奇妙ないかつい聲で、若い女は叫んだ。

ミハイロフは立ち止まつた。こゝからはもう女の目の表情が見えなかつたので、全身に月光を浴びた彼女の姿は、まるで満月の光りに誘はれて、森の中の草原へ、人を魅<sup>ま</sup>はしに出た魔女のやうに、ふはく々と輕やかに見えた。

「こつちへいらつしやい！」と彼女は呼んだ。

ミハイロフは應じなかつた。

「あなた聞こえないの？ こつちへいらつしやいてば……さあ！ わたしさうして貰ひたいの！ よくつて？」

熱烈な招き寄せるやうな響きが、權威ある低い聲の中に

籠もつてゐた。彼女は何のために彼を呼んでゐるのか、自分でも分からなかつたが、目前のものは悉くふはく揺れ動いて、胸が妙に息苦しかつた。月はちか／＼と草原に近づいて、白い魔法のやうな光りで、彼女を焼くやうに思はれた。

彼女もまたミハイロフも、いつの間に彼がエヴゲーニヤの傍へ立ち現れたのか、いつの間に彼の両手が女の細腰を抱いて、全身をうしろへ押し曲げながら、強いしつかりした胸へしめ付けたのか、少しも知らなかつた。二人はちかちかと互の目を見合つてゐたが、その目は相手の一舉一動をも遁すまいと、監視してゐるのであつた。まるで死にも狂ひの争ひに、掴み合つた敵同志のやうであつた。けれども彼女は屈しなかつた。蒼白い顔をして、目をぼうつと曇らせ、うしろへ身を反らせながら、彼女は両手で男の胸を突つ張つたまゝ、押し黙つてゐた。ミハイロフの目には女の表情が物凄く、殆ど毒々しいやうにさへ思はれた。

「さあ。」女を地びたへ投げつけないばかりの勢ひで、ミハイロフはしゃべられた聲でかう言つた。けれど彼女は猫のやうに體を蹴して、ちつと踏みこたへた。そして殆ど憎悪に近い頑強な態度で、相かはらず彼を傍へ寄せまいと、両手

を突つ張るのであつた。

「わたしはあなたが要るのだ……ほしいのだ！」自分で自分の言葉を聞きもしないで、ミハイロフはおし潰したやうな聲で言つた。「どうあ？」

「ところが、わたしはいやなの！」とつぜん彼女は毒々しい、ぶつきら棒な調子で言つた。「放して頂戴！ 何てあなたは失禮な人でせう！」

彼は殆ど彼女の言葉を聞いてゐなかつた。彼はもう何ものも意識しなかつた。たゞ自分の手の中に女の體を感じたのみである。彼はその體を押し曲げながら、粗暴な手つきで草の上へ倒さうとした。食ひしばつた齒の間からは、一種の呻き聲が洩れた。

が、彼女はするりと迂り抜けた。

「オイ、ラー」といふ勝ち誇つた警戒するやうな聲が響いて、女はもう再び自由な冷笑に充ちた表情で、彼から二歩ばかり隔つてた所に立つてゐた。彼の手は宙に取り残され、焼くやうな接吻を求めてさし延べた唇は、空を接吻したのである。

ミハイロフは目の中が眞つ暗になつた。狂憤の念が彼を瀾んだ。思はず前後を忘れて、杖を振り上げ、圓い形のい

い女の肩を見やつた。女はこの視線を捕へて、憐れな措えたやうな叫びを立てながら、防禦のために片手を差し上げた。女は打撃を待つてゐる、打たなければならぬと直感して、彼は一種の力に驅られながら、ひうとステッキを打ちおろし、彼女の華奢な圓々した肩を、いやといふほど撲りつけた。彼の目の前を、何か火のやうなものがちらと掠めた。

「あゝ」女は病的な憐れつばい叫び聲を立てると、よろよろしながら杖を搦んだ。「痛い……よして……」

その一刹那、彼はどこかへ杖を抛り投げると、萎えたやうにぐたぐたと倒れかゝつた女の體を引つ掴み、揉みしだくやうにして、した。そして奴隷のやうに従順な、弱々しいした。

白々した圓い月は、女の美しいあらはな足や、目を閉ぢ齒を食ひしぼつた、蒼白い顔を照らしながら、草原を眺めてゐた。

### 三三

その翌朝、エヅゲーニヤは遅く目を醒ました。そして豊麗な體を大儀らしく一杯に伸ばしながら、長いあひだ床の上に横たへてゐた。黒い髪は亂れ解けて、羽枕や露はなま

るくした肩を蔽うてゐた。緻くたになつた掛け布は床へ落ちかゝつて、白い寢臺の上には、すらりとした小さな足が、浅い黒みを帯びた薔薇色に匂つてゐる。ジェーネチカは両手を上へあげて、黒髪に絡ませた。奇妙な快いものうさに、體がぐつたりしてゐた。手足には甘い疲勞感がまつはつて、何だか長くなつて兩足を伸ばし、掛け布をすつかり投げ棄てて、無恥な眞裸のまゝで目を閉ぢながら、ぢつと臥てゐたいやうな氣がした。

彼女は昨夜の出來ごとを考へてゐただけれど、別に恐れもしなければ、くよくよもしなかつた。まるで何か當然取るべきものを取つたやうな氣持ちだつた。そして、誰ひとりこのある物を彼女から奪つたり、既に經驗した快樂の名ごりを樂しむのを、妨げたりなどする事は、出來ないやうに考へてゐた。

不思議にも、ミハイロフのことはいま彼女の想像にさへ上らなかつた。まるで肝腎な問題は、彼自身でないかのやうであつた。あの歡樂も自分だけのものなら、自分を征服したあの杖の打撃さへ、自分のもののやうな氣がした。もう一度戀ひ人に來てほしいとは思はなかつた。あんなことが今後も繰り返されるなどは、考へたくもなかつた。昨

日の日から自分は彼の情婦になつて、男が自分に對して一種の權利を持つてゐる、などと考へるのは厭なことだつた。たゞちつとかう横になつて、疲勞の感じに甘えながら、柔かいきれいな寢床の上に、豐滿な若々しい體を、出来るだけ自由に、のび／＼と投げ出したかつたのである。

「あゝ、何ていゝ氣持ちだらう！」一種の陶醉感に包まれながら、彼女は言葉もなく考へたが、その想念はこれといふ對象を持たないで、そつくり彼女自身の豐麗な肉體の中に含まれてゐた。

彼女は自分の美しさを感じてゐた。そして、このまるまるした淺黒い手足の感觸や、彈力のある胸の緊張感や、柔かい體のしなやかさや——すべて無恥な、罪深い、美しい裸體をぞんたいの中に、何もかも引つ摺むやうな、充ち溢れるやうな幸福が籠もつてゐるのであつた。

けれども漸く彼女が起き上がつて、薔薇色の足の指先から、輝かしいまる／＼した肩まで、全身がぎゅつと引き緊まるほど冷たい水で顔を洗ひ、氣入りの身輕な赤い着物をびたりと身に纏つて、自分の部屋から出て行つた時、エヴゲーニヤはいつもと同じやうに、快活で、身輕で、のん氣らしく、まるで何事もなかつたやうであつた。

太陽ははれ／＼しく輝いて、すべてのものが一杯にその光りを浴び、開け放した窓からは、さして暑くない、悅ばしい夏の日がさし覗いてゐた。ネルリが心配さうな、いかつい顔つきをして、食堂で彼女を出迎へた。

「マリヤさんの所へいらつしやいませ……様子が変わっていますわ！」何やら承知してゐるやうな目つきで、彼女のこ／＼した薔薇色の顔をちつと見ながら、ネルリはかう言つた。

「えつ、本當に？」とエヴゲーニヤは慥えたやうに訊ねたが、急に何だか恥づかしい氣持ちがし始めた。それはネルリの試すやうな目つきのためとも、自分が病人の事を忘れて了つたためとも、どちらともつかない氣持ちだつた。

マリヤは寢臺の上に坐つて、きら／＼光る黒い目で彼女を迎へた。見たところ、病人はいつもと變はりなささうだつたが、その奇妙な暗い目の中に、何か恐ろしいものが閃いたやうに、エヴゲーニヤには感じられた。

「あなたどうしたの？」と彼女は慥えたやうに訊ねた。

マリヤは歪んだ微笑を浮かべた。と、蒼白い微笑は見る見る中に消えて、苦しさを恐怖を帯びた目の中に溶けて了つた。



「気分が悪くなつたの？どこか痛むの？」とジェーネチカは途方に暮れたやうに訊ねた。

マリヤは音もなく唇を動かした。

「なに？」ジェーネチカは聞き取り兼ねて、問ひ返した。

「ご覧なさい……これ何でせう？」と病人は聞いた。

エヴゲーニヤは病人の視線を辿つて目を伏せた。と、病人のあらはな蒼白い足が目に映つた。それは奇妙な黄みがかつた蠟のやうに蒼白い色をして、皮膚は病的に不快な光澤を呈してゐた。しかも、全體にこの足の輪廓が、圓いぶよぶよした形に脹れ上がつて、何か薄氣味わるい袋を張つたやうであつた。

「これはどうしたのでせう？」エヴゲーニヤはまだ悟らないで、懼えたやうにこの恐ろしい足を見つめてゐた。

「わたし分らないの……」痙攣的な、意味のない手つきで、膀胱のやうにびんと張つた滑らかな皮膚を細い指で撫でながら、病人はまるで赦しても乞ふやうな、殆ど聞き取れないほどの聲でかう言つた。「これは水腫らしいわ……いよ／＼お了ひよ！」

「ばかな事ばかり！」とジェーネチカは叫んだが、ぞつと寒けが彼女の背筋を傳つて走つた。なぜかこの瞬間に、理智

ではなく自分の全存在によつて、これは本當にお了ひだといふことを、明瞭に感じたのである。

「いゝえ……もう何もかもお了ひよ……わたし死んで行くんだわ……」とマリヤは低い聲で言つたかと思ふと、いきなり仰向けに倒れて泣き出した。

「醫師でも呼びませうか？」恐ろしい頼りなさを感じながら、ジェーネチカは途方に暮れたやうに聞いた。「呼びませうね？……わたしすぐに！」

「もう先生を迎ひにやりました……」このとき部屋へ入つて來たネルリが、落ちつき拂つてかう引き取つた。「アルノルチイ先生は町にいらつしやらないで、夕方までなければお歸りにならないさうですから……ほかのお醫者を呼びにやりましたの。」

彼女は寢室に近寄つて、いかつい目つきでマリヤを見やりながら、靜かにその頭を撫で始めた。病人はぎくつとして彼女の顔を見上げたが、急に痙攣的な身振りで、兩の手に彼女の手を取りながら、しやくり上げて泣き出した。

「ネルリチカ……ネルリチカ！」苦い力ない涙の際から、彼女は囁いた。「わたしを殺さないで頂戴……わたしは生きたい……あゝ、恐ろしい、恐ろしい……ネルリチカ！」

「まあ、あんた何を言つてるの……」とジーネチカは途方に暮れたやうに言つた。「そんなこと言ふもんぢやないわ……わたしの大好きなマーシャ……泣かないで頂戴！」

「ジーネチカ」彼女の方へ両手をさし伸べながら、病人はさめ／＼と泣くのであつた。「これは何といふ事だらう？……わたし死にたくないわ……ねえ、救けて頂戴！ 助けて！……だつて、わたしはまだ若いんですもの、わたしは生きたい……一體なんの報いなんだらう？」

彼女の泣き聲は次第に烈しく高まつた。彼女はネルリとジーネチカの手を取つて、接吻したり抱きしめたりした。もし彼女にそれだけの力があつたら、病人は床へ這ひおりて、頭を床板へぶつ付けながら、二人の足を抱いて接吻したに相違ない、と思はれるほどだつた。想像も出来ないほどの恐怖と、恐ろしい臨終の惱みが、彼女を苛むのであつた。もうすべてが徒勞だといふ事も考へないで、手當たり次第の物に取りついて、あらゆる人に助けを求め、救ひを期待するのであつた。やがて再びばつたり倒れて、否應なしに追つて来る死から、姿を隠さうとするやうに、涙でぐつしより濡れた枕に、顔を埋めるのであつた。

「まあ、あんなに泣いていらしたら、今にも死んでお了

ひになりますわ！」とネルリは小さな聲でエツゲーニヤに囁いた。「お医者さまでも早くいらつしやればいゝのに……だいぶ前に使ひをやつただけれど……」

一時間ばかり、この恐ろしい悪夢のやうな状態がつゞいた。ネルリとジーネチカはたゞうろ／＼と、瀕死の病人の傍をあちこちするばかりであつた。彼女の悲鳴は、腸をかき捲るやうな笑ひに變はつた。輝かしい目を大きく見開いて、時にジーネチカ、時にネルリの顔を見守つた。まるで彼等の憎えたやうななじめな顔から、何やら讀み取らうとでもするやうだつた。病人の笑ひ聲はいよ／＼高くなつて、さながら死がこれほどまでに恐ろしく、しかも同時に、想像も出来ないほどばか／＼しいのを、あざ笑つてゐるやうであつた。ジーネチカはこの哄笑を聞いてゐられないで、兩手で耳に蓋をしながら、次ぎの間へ駆け出した。そして、壁にびたりと身を押しつけながら、目をつむつて息を凝らしてゐた。

「これは恐ろしい……これは恐ろしい……これは恐ろしい……」憐憫と恐怖のために、ぼうとして了つた彼女の頭の中で、かういふ考へが渦巻いてゐた。

哄笑は突然たえまない悲鳴と變はつて、それが次第に

高まりながら、物凄く刺すやうな叫びとなつたかと思ふと、不意にばつたり消えて了つた。ジェーネチカは棒立ちになつて、兩手をだらりと下げたまゝ、ぢつと聞き耳を立ててゐたが、いきなりまつしぐらに飛んで行つた。

病人は兩の掌を頬の下に敷いて、ぢいつと靜かに横たはりながら、視力のなくなつた目で、前の方を見つめてゐた。見受けたところ、彼女はすべての努力が無益で、誰ひとり助けてくれるものがないのを悟つて、この上はせめて、生の最後の瞬間を見のがさないやうに、息を潜めてゐるらしかつた。

「マーシャ」とジェーネチカは呼んだ。「マーシャ！」

病人は返事をしないで、依然として恐ろしい、不可解な目で彼女を見つめてゐた。ジェーネチカは氣がちがひさうな心持ちがした。このとき調子たよしい、靜かな足音が聞こえて、黒いフロックコートを着た、肥つて圓々とした姿が戸口に現れた。

「お医者さままだ！」絶望の歡喜を覺えながら、ジェーネチカは叫んだ。「マーシャ、お医者さまがいらしてよ！」

病人はびくつとして半ば身を起こしながら、緊張したものの狂ほしい希望に充ちた目を、醫師の方にそゝいだ。

「え、一體どうしたんですか？」一分の時をも貴ぶ人のやうに、そつけない事務的な調子でかう聞きながら、醫師は寢臺に近寄つて、病人の弱々しい手を握りしめた。その手は放されるとすぐ、ぱたりと落ちて了つた。彼は黒いフロックコートの裾をちよつと擴げて、ジェーネチカが大急ぎで押しやる椅子に腰をおろし、さて灰色の冷たい目を眼鏡の蔭から光らせながら、悠々と部屋の中を見廻した。

ジェーネチカは恐怖と希望を抱いて、病人の足もとに立ちながら、醫師と病人とを見較べてゐた。ネルリは窓ぎはへ離れた。

「ちよつと手を洗はして頂けませんか？」彼は命令するやうな調子で、ジェーネチカにかう言つた。

指の短い手を長い事かゝつて洗つた後、ゆつくりゆつくりと手拭ひで拭いて、それを丁寧に洗面器の傍へ懸けた。その間じじゆう自分の足もともつかず、部屋の壁ともつかぬ方を眺めてゐた。それが餘り長くて、不思議なほど平氣なので、ジェーネチカはたうとう憤慨し始めた。

「先生、この人の足に何やら……」醫師を急かすために、彼女はかう言つた。

「誰にかゝつておいでになりますか？」醫師は返事の代り

に、彼女の方を見ようとしてもしないでかう聞いた。  
「アルノルヂイ先生でございます。」

「は、あ」と言つて醫師は壁を眺めた。彼の顔は何の表情も浮かべてゐなかつた。

ジーネチカは到頭、「これは生きた醫者でなくて、何かしら無氣味なものを持つてゐる。生氣の通はぬ人形ではないか。」といふ氣がして來た。手を洗ひ終ると、醫師は寢臺に近づいてかう言つた。

「お起きなさい……さういふ襦袢を脱いで……」

ジーネチカは病人に手を貸した。脱ぎ棄てられた襦袢衣は、着いた骨張つた肩や、小さい洞びた胸を露はした。病人は寒い上に、恥づかしかつた。彼女は醫師の冷たい固い指の接觸に慄へながら、脊を圓くした。そして、もう何も恥づかしがる必要のなくなつた、小さな蒼褪めた乳房を、本能的に兩手で隠した。

「さう……息をしてご覧なさい……もつと……もつと……」  
引つ千切つたやうな冷たい調子で、醫師は言つた。「もうお寢になつてよろしい……お着なさい。」

それから掛け布を擡げて、恐ろしく脹れ上がった足を露き出しながら、何も腫に映らないやうな無關心な目つきで、

長い間ちつと眺めてゐた。やがて彼は掛け布をおろした。病人は大きなきら／＼光る目で、夢中になつて彼を見守つてゐた。その頬には不吉な紅が燃え、手はわな／＼と慄へてゐた。

醫師は聴診器を衣嚢へ藏つて、無言で彼女に握手すると、そのまゝ踵を轉じた。

病人はさつと蒼くなつた。

「いかゞですか、先生？」恐ろしい努力をもつて、やつと聞こえるくらゐな小さい聲で、彼女はかう言つた。

醫者はその冷ややかな顔を、靜かに彼女の方へ向けて、ざらりと眼鏡を光らせた。

「この場合ひ醫師を呼ぶより、坊さんと呼んだ方が順當ですよ！」平然として彼はかう言つた。

ジーネチカとネルリは、聞き違へしたと思つて、彼の傍へ飛んで行つた。けれど病人は叫び聲も上げなければ、慄へもせず、身じろぎさへもしなかつた。幾秒かの間、彼女は無言のまゝ緊張した目つきで、彼の平然とした冷淡な顔を見つめてゐたが、やがてひん曲がつたやうな微笑を浮かべた。

「でもねえ、先生、それは餘りひと過ぎますわ！」彼女は

不可解な表情を浮かべてかう言つた。

醫師は殆ど目に立たぬくらゐ肩を竦めた。

「そりや何とでも……わたしは本當のことを言つたままです。」と彼は沈んだ調子で答へると、ちよつと頷で會釋して、部屋を出た。

長い沈黙が襲うた。病人は目を閉ぢたまゝ臥てゐた。ネリとジェーネチカは、殆ど何事が起こつたのか、それさへも分からないで、事の恐ろしさ愚かしさを充分理解する力もなく、打ち挫かれたやうに、茫然と蒼い顔をして、寢臺の傍に立つてゐた。二人はこの恐ろしい沈黙の中に、幾時間かたつたやうな氣がした。ジェーネチカは泣かうと思つたが、それも出来なかつた。醫者の仕打ちに憤慨しようと思つたが、それもやはり出来なかつた。彼女の力に及ばなかつたのである。ネリリの亂れた髪の毛や、とき／＼と眼のびく／＼痙攣する閉ぢた目を、いかつい目つきでちつと見つめながら、今この死に瀕した力ない頭腦の中を、生きた人間に想像する事も出来ない恐ろしい力で、くる／＼渦巻いてゐるに相違ないと思はれる想念を、一生懸命に追窮しようとするのであつた。

「今この女は何を考へてるのだらう？」かういふ考へが彼

女の頭を廻轉しては、すぐ力なく消えて行くのであつた。とつぜん病人は微かに身を動かした。

「何がいるの、マーシャ？」ジェーネチカはその傍へ飛んで行つた。

病人は睨きもしない透明な目で彼女を眺めた。

「鏡を貸して。」とマーシャは落ちついた小さな聲で言つた。

ジェーネチカは合點が行かなかつたが、ネリリは素早く立ち上がつて、鏡をさし出した。病人は半ば身を起こして坐つた。その動作は自由さうで、いかにもかる／＼としてゐた。たゞ彼女の大きな目が、人間のものと思はれぬやうな、緊張した表情を浮かべてゐるのによつて、ネリリは「これはもう生の力ではない死の力だ」と悟つたのである。

病人は鏡を取つて、長いあひだ無言のまゝ、自分の恐ろしい、血の氣のない、半ば死んだやうな顔を見つめてゐた。

見受けたところ、彼女は何やらよく見分けて會得して、間もなく消えるべき運命を持つた自分の顔の追憶を、墓の中へ持つて行かうと思つてゐるらしかつた。

ネリリはいかつい顔をして、その様子を見守つてゐた。

ジェーネチカは恐怖と憐愍に消え入りながら、今にも泣き出しさうな氣持ちで待つてゐた。

遂に病人は溜め息をついて、手をおろし、靜かに鏡を返した。それから手水を使ひたいと言ひ出して、自分で顔を洗つた上、最後に纏れた弱々しい髪を梳して、壁の方へ顔を向けて横になつた。

かうして彼女は幾時間か、ぢつと横になつてゐたので、果たして眠りに落ちて了つたのか、それとも今は何人の理智にも及び難い、不可解な最後のあるものを冥想するために、他人が邪魔をしないやうに息を潜めてゐるのか、どちらともはつきり分からなかつた。恐ろしい沈黙が家ぢゆうに立ち罩めてゐた。ジェーネチカとネルリとは、身動きもせず寢臺の傍に坐つてゐるし、召し使ひも勝手の方で鳴りを澄めて、たゞ往來の物音が傳はつて來るのみであつた——それはこゝに立ち罩めてゐる死の恐怖と、まるで共通點を持たぬ別世界から來たやうな、靜かなよそ／＼しい響きであつた。

日暮れがたに病人は身動きし始めた。そして水がほしいと言つて、足りるだけ飲むと、また横になりながら、響きのない無關心な聲でかう訊ねた。

「アルノルヂイ先生はいらつしやらない？」

「先生はもうすぐいらしつてよ……もうお宅へ使ひがやつ

であるのだから……」次第に濃く部屋を包む、しんとした夕やみの中に、無氣味なほど高々と響く、自分自身の聲に慣えながら、ジェーネチカは急いでかう答へた。

「ぢやいゝわ。」と病人は小さな聲で答へて、また壁の方へ向いて了つた。

もうすつかり日が暮れて了つた時、彼女はしきりに寢返り打つて身を跳きながら、恐ろしいぎら／＼光る目で、戸の方を眺め出した。

「先生はすぐいらしつてよ……」といきなりジェーネチカは慌たゞしげに言つた。

臨終の恐怖は次第に近づいて來た。それは夕暮れの影と共に音もなく入つて來て、空中にぢつと立ち塞がつてゐるのであつた。何だか息をするのも苦しいやうな氣がして、大きな聲で叫びながら、足に任せて逃げ出したくなるくらいだつた。もうあたりが眞つ暗になつた頃、やつとどこか遙かに表の方で重々しい、忙しげな足音が聞こえ始めた。

瀕死の病人は、むくりと起き上がつて坐つた。目は、顔一杯になつたかと思はれるほど、擴がつた。彼女の内部に残つた僅かな生命が、この最後の視線の中に張り詰められたのである。足音はどん／＼近寄つて、醫師アルノルヂイ

の聲が入り口の石段で聞こえた。やがて階段つたひに登つて、部屋々々を横切りながら走るのが聞こえた。

とつぜん病人は不可解な絶望の身振りで両手を上げた。

その薄い唇は開いて、目は擴がった。そして、恐ろしい戦慄が體を傳つて走つた。

「さよなら、先生―」恐ろしい惱みと愛を籠めながら、彼女は氣うとい聲で家中へ響き渡れと叫んだ。

### 三四

蠟燭は高く晃々と輝いてゐた。その黄色い蠟は靜かに流れて、影は部屋の四隅をちら／＼と走つてゐた。組み合はされた生の通つてない手は、白い紗を透かしてちら／＼と映りながら、卓の上に高々と身動きもせず横たはつて、これこそ最後の物だといふやうに、痙攣的に十字架を握りしめてゐる。赤、紫、白などの花が、目も文にうづたかく積まれた間に、尖つた眞つ蒼な死顔が、半分かくれながら覗いてゐた。そして、永久に閉ざされた目が無言のまゝ、不可解な表情で上の方を見つめてゐた。

醫師のアルノルヂイは片隅に坐つて、ちつと前の方を見つめてゐた。彼の太い手はいつものやうに、杖の上に重なつ

て、帽子は膝の上に載つてゐた。その様子は、ほんのちよつと休むために坐つたのだ、と言ひたさうであつたが、時はどん／＼たつて、夜が更けたけれど、老醫師はたゞひとり同じ片隅に坐つたまゝ、次第に低く頭を垂れて行つた。

隣りの部屋にはネルリが坐つてゐた。エザゲーニヤは泣きくたびれて、自分の部屋で寝てゐるので、家の中はしんと靜まり返つてゐた。時々ネルリは眞面目ないかつい顔をして、眉を八の字に寄せながらそつと入つて来て、卓の傍に近寄り、何やらもの問ひたげに、死人の顔を長いあひだ無言に見つめてゐた。それから紗を正したり、花を置き直したりして、出て行くのであつた。彼女はまるで醫師の顔が目に入らないやうに、その方を見ようともしなかつたし、彼もネルリが入つた時、身動きさへしなかつた。

あたりのものは悉く凝靜まつてゐた。どこもかしこも暗く靜かで、とき／＼醫師のアルノルヂイは、たつたひとり死のやうな靜寂と、不動に充ちた世界に、取り残されたやうな心持ちがした。とき／＼蠟燭がばち／＼鳴ると、そのさゝやかな音もあたりが靜かなために、耳を聳するばかり、鋭く家ちやうへ響き渡つた。どうかすると、焰がゆら／＼と不規則に揺れる事があつた。すると死人の顔が微かに動いて、

目を見ひらきながら、微笑するやうに思はれた。半ば氣ちがひめいた悦ばしい感情が、老醫師の心を擱んだ。何だかマリヤがまだ生きてゐて、自分の恐ろしい無益な悲しみを感じながら、勵ましたり慰めたりするやうに思はれた。しかし時は移つたけれど、暗い横顔は依然として、白い煙のやうな紗の下にちつと持ち上がったまゝ、十字架を握つた手も動かかなかつた。

醫師のアルノルデイはぢつと見つめてゐた。あゝこれが彼女なのである——彼がもう生活は終りを告げて、無益で退屈なその日その日の死んだやうな運轉のほか、何一つ自分の將來には存在しないとあきらめてゐた時、突如として彼の生活圏内に現れた女なのである。彼女は色の褪せた、美しい、心の優しい婦人として出現し、自分の愛情をもつて、彼を暖めてくれたのである。それは悲しい愛慕のほか何ものもないやうな、死に行く女の清淨な戀ひであつた。

醫師のアルノルデイは彼女の言葉も、その視線も、弱々しい透き通つたやうな手の動きも、一切のデテールを思ひ起こして見た。時とすると、彼は今でも靜かな、優しい彼女の聲を聞いてゐるやうな氣がした。そして、一心不亂に死せるが如き靜寂に耳を澄ましながら、マリヤの言ふことを

聞き分けてゐるやうな氣持ちになつた。

「なぜわたしは死んだのでせう？……わたしはまだこんなに若くて、生きたり愛したりしたくて堪らなかつたのに……わたしはまだ……澤山の幸福を、他人に授ける事が出来たかも知れないのに……あのいき／＼した太陽は、今でもやはり美しく輝いて、生きた楽しい人達を暖めてゐるのに、わたし一人にはもう永遠の夜が来て了つたのです。どうかいつまでもわたしの事を思ひ出して、忘れないで下さい！……その中に年が移つて、わたしの記憶までがこの世から消えて了ひ、太陽の光りの中にも、緑の林の中にも、瑠璃色の海の中にも、わたしが生きて苦しんだり愛したりしたといふ事を、思ひ出させるものがどこにもなくなつて了ふのだ——わたしにも自分自身の悦びや、悲しみがあつたといふ事を、思ひ起こすよすががなくなつて了ふのだ——かう思ふと悲しくなつて來ます……あゝ、なぜわたしは死んだのでせう？ 人生の美しさが本當に分かつて、過去のすべてが誤りだつたと悟り、これからは靜かで熱烈で純潔な愛の中に、けがれも悲しみも失望もない、美しい明るい新生活を始めようと思つてゐる丁度その時、わたしは死んで了つたのです、あゝ……」



醫師のアルノルヂイはこの静かな聲を聞きながら、色々のことを考へた——もし彼女が死ななかつたら、この愛はとんなに美しいものとなつたか知れない——いつも自分を壓倒してゐた人生が、忽然として偉大な幸福を見せてくれたが、それはたゞすぐに奪ひ返して、一そう苦しい、悲惨な、長い無意味な年月の生存を、彼の双肩に負はすために過ぎなかつたのである。もう彼は反抗したり、呪つたり、泣いたりする氣力がなかつた。たゞ永遠な孤獨の寒さのために背が曲がり、悦びも意義もない長い生活の幻影のために、首が垂れるのみであつた。

夜は更けて行つた。どこか遠くの方で引き伸ばしたやうな、警戒するやうな鶏鳴の聲が聞こえた。

紗の窓掛けの向かうでは、灰色の朝が次第に目醒めて來た。死人の顔からは黄色い蠟燭の反射が消えて、その上に冷たい青みがかつた光線が、凍つて動かぬ緑いろの斑點を置いた。冷たい死骸は恐ろしいほど長くなつて、蠟燭の火は消えた。誰やら家の中でこそく動き始め、どこかで戸がことんと鳴つた。やがて誰かが一ことものを言つたが、その生きたものの奇妙な聲が細かく碎けて、部屋々々に響き渡つた。蒼い灰色の顔をしたネルリが入つて來て、言葉も

なく醫師を見やつた後、蠟燭を直して出て行つた。静かな話し聲が聞こえて、おもてで車の轆ががら／＼響き出した……新しい日が始まつた——それは彼女に取つて、地上に於ける最後の一日であつた。

そのとき醫師のアルノルヂイは、静かに立ち上がつて、卓の傍に近寄り、なき人の枕頭に立つた。さうして彼は最後にいま一度、自分に取つて少しも悲しくない、愛らしい、目を閉じた顔をちか／＼と見つめた。不意に弱々しい黄色い蠟燭の焰が、静かに渦巻き出して、一つの黄色い靄のやうなものに溶け合つた。そして、壁や窓はうしろへ遠のき、一切のものが姿を消して、たゞ彼女の顔のみが醫師の前に残つた。老醫師は低い呻き聲を立てながら、全身を屈めて、組み合された手の蒼白い、生の通つてゐない、冷たい指先をこの世の名ごりに接吻した。それから急にくるりと背を向けて、全身を屈めながら部屋を出て了つた。

窓の外はもうすつかり明るくなつてゐた。

### 三五

最後の馬車の響きが消えて了つた。番人が重い門の扉をしめる音が聞こえて、墓場はしんと静かになつた。それは

もう冷気に觸れた清らかな空氣の中に、近い秋の息吹の動いてゐる、晩夏の夕方にのみ見られる、透明なものの悲しい静けさであつた。十字架はちつと動かさずに立つて、忘れられた人々の悦びや悲しみを、數かぎりなく隠してゐる、土饅頭の列が青々とつゞいてゐた。忽布の蔓のからみ付いた鐵の格子は、薄い透明な織り物のやうに連なり、太陽の最後の光線がところ／＼に黄色い條を印して、誰にも用のない金文字の名前が、樅の蔭などで、思ひ掛けなくきらりと光るのであつた。

重々しい大兵の醫師アルノデイは、兩側に十字架や石碑の並らんだ淋しい徑を、黒いしみのやうにさ迷つてゐた。

とき／＼靴が敷き石の上で音高くこつ／＼と響き、重い杖は草に埋れた誰かの石碑の破片に當たつて、きい／＼靴むのであつた。

石と石の合はひには丈の高い雜草が、恐ろしい勢ひで青靑と茂つて、崩れ落ちた墓標や、勝ち誇つたやうに過去の腐屍の上へ、尖つた頂きを差し上げてゐる、無口な樅の若木の根などを、ぐん／＼押し分けて行くのであつた。静寂——永遠な死の静寂が聲もなく、醫師アルノルデイのうしろについて歩いた。

また充分によく落ちついてゐない赤土の上へ、枯れかゝつた芝を敷いた墓に、白い十字架が立つてゐて、そのおもてに金文字が光つてゐた。アルノルデイは重々しいもの思ひに沈みながら、その前に立ち止まつた。

「ハリコフ大學校教授イワン・イワーノキッチ・ラズーモフスキイの遺骸この所に安らふ。神よ、汝の王國に來り給ひし時、我を受け容れ給へ！」

老醫師の耳には、この聲のない言葉が無邪氣な哀願のやうに、秘たる希望のやうに響いた。そして、かたくなな運命に向かつて、泣いて訴へる聲が聞こえるやうな氣がした。

「神様、わたしは今あなたの前に立つてゐます！……苦痛と希望に充ちたわたしの生涯は、こゝで終りを告げました。あなたのお示し下さつた道を辿るのは、わたしに取つてなか／＼苦しく辛いことでしたが、やつと目的地に着きました……けれど永久の墓地の静寂を、わたしの運命としないで下さいまし、わたしは喜びと休息を願ひます！ 生きた人間の名も知らぬ苦しみに対しても、わたしはそれだけの酬いに償する筈でございます！ あなたお一人だけはお存じでございます！ あなたお一人だけはお照覽でございます！

す！ あゝ神様、一體わたしの聲は永久に沈黙し、わたしの思想はあれほど愛してゐた世界から消えて了ひ、明るいあなたの太陽も永遠に見る事なく、かつて存在した事のないもののやうに、暗黒と悲哀に埋もれて了ふのでせうか？ あゝ、神様、どうぞさういふ事のないやうにして下さいまし！

黄色い粘土の塊りは、聲もなくアルノルヂイの足下に横たはつてゐたが、その蔭から空しい哀願と、祈禱と、呪詛の静けさが、明らかに響いてゐた。全世界を充たすやうな恐ろしい苦悶が、膿と涙に充ちたこの土くれの中から、黒雲のやうに立ち騰つて、天日を蔽ひ蒼空に擴がり、生の悦びを壓し殺し、美しい鮮かな地を醜くした。そして生ける者はその朦氣に包まれて、呼吸をするのも難かしくいらふであつた。

太陽は明らかに、美しい月は優しく幻のやうに照らし、木々は緑に、海は碧く、山々は崇巖に、愛は悦ばしく、生呼吸は楽しい。これらの明るい生の悦びの間を、黒い死の霧は目に入らないやうに、祕かに這ひ廻つてゐるのだ。どんな瞬間にも誰かが死んでゐるのだ。輝かしい太陽や緑の野を眺めてゐる時には、すべての人類の眞理の中で唯一

つの單純なこの眞理が、人間の目に入らないで、暑い日の曠原の上に立ち迷ふ陽炎に似た、偽りの幻影のやうに感じられるのである。死は不可思議なもので、背むしのやうな格好をした棺が、黒い穴の中へ静かにおりて行く時でさへ、人間の思想は死を受け容れまいとする。けれど、もし地上の音をすべて一時に聞き得るやうな、超人間的に鋭敏な聴覺を所有してゐたら、様々なものを建設する機械の音や、幾十億人のざわ／＼といふ足音や、森のどよめきや、海鳴りや、戀ひ人たちの囁きや、産をする母の叫びや、發砲や、音楽や、叫喚や、口笛や、笑ひなどを通して、晝も夜も絶える事のない、憎い死の聲を聞き分けることが出來たに相違ない。窒息しかつた者は呻いたり、しは嘎れた聲を立てたり、熱病やみは恐ろしい火宅の苦しみに絶叫したり、殺されかゝつた者は悲鳴を上げたり、疫病に蝕まれる者は呻吟したりしてゐる。これ等すべての叫喚、呻吟、悲鳴、歎歎、それからしは嘎れた聲や、骨のめき／＼折れる音などは、一つの息つまるやうな絶え間のない音に溶け合つて、人生の基調となるのである。

醫師のアルノルヂイは墓の前に立つて、物思ひに耽つてゐた。彼の記憶は霧でも透かして見るやうに老教授の顔や、

その聲や、黒いフロックコートなどを廻らしたのである。で、今も彼は兩手を行儀よく胸の上に重ね、目を瞑り、例の古い大學教授のフロックコートを着、ひよろ長い鹿爪らしい姿をして、丁度この下に横たはつてゐるのである。醫師のアルノルヂイは、最後に彼の所へ診察に行つた時の事を思ひ出した。老教授はだいぶ病氣が快くなつた風で、記憶も明瞭に働き、腦も常人と同様に明晰であつた。やゝ弱々しげな風で長椅子に腰を掛けて、にこ／＼笑ひながら醫師の方を見やるのであつた。その傍には妻と娘が坐つて、笑つたり話したりしてゐた。あゝ、人間といふものはどうしてあゝ容易く自分の苦痛や、到底のがれ得ない最後を忘れる事が出来るのだらう！ 醫師も、妻も、老教授自身も、誰一人としてけふ三時間後に、この最後の瞬間が到来して、いま生きてにこ／＼してる老人の坐つてゐる場所に、たゞ恐ろしく醜い死屍のみが残らうなどは、夢にも知らなかつたのである。

「最後の瞬間にあの人は何を考へたらう？……呼び醒まされた時に一體なにを笑つたのだらう？」と醫師のアルノルヂイは思つた。

かうして彼は今こゝに、古い黒のフロックコートを着て、

行儀よく兩手を組み合はせながら臥てゐるのだ。これが地上に八十年間生きて、書物を著したり、講演をしたりして、同時代の誰よりも一ばん長生きし、革命も戦争も経験して、自分の生涯は太陽や地球と同じくらゐ、重要で偉大だと自信してゐた、老教授イアン・イアーノギッチなのである。

古いフロックコートはじめ／＼と脂じみて、骨にびつたりくつ付いてゐるし、糊をしたワイシャツの襟やカラーは、膿でべと／＼になつてゐる。腐敗しきつた膿は白い骨をあらはして了つた。人間の目では物の文色も分ち得ぬ、黒い脂ぎつた土の底深く埋もつてゐる、狭くるしい木造の房のなかで、白い蛆蟲が音もなくうよ／＼と蠢めてゐるのだ。肥えて脂ぎつた奴は、膿で一杯になつた腹部の穴や、脂の残つた胸の上で動いてゐるし、この恐ろしい墓の世界の賤民ともいふべき、瘡せてがつ／＼した小さいのは、無数の小さな環を作りながら、物狂ほしく纏れ合つてゐるのだ。まはりを食ひ取られた白骨は、一日々々と大きく露出されて行つて、髑髏が闇の中でにた／＼笑ひ始める。やがて蛆蟲は次第に少くなつて、しまひにはたゞそここゝで最後の墓の住民が、憎げのろ／＼這ひ廻るばかり、暫くたつと、いよ／＼眞裸かの乾いた骸骨になつて了ふ。最後の膿が

徐ろに土へ吸ひ込まれると、今度は强健な水々した緑色の草の芽となつて、土の外へ太陽を慕うて伸びて行く。そのうち静かに骨が動いて、胸へ押し當てられてゐた手がごとりと落ちる。丁度かうした運動の中に、生が甦つて来るやうな具合である。やがてもう一ど胸廓がそろりと動いて、堆骨を放れた頭蓋が揺らいだかと思ふと、嘗て愛する人の手が、死骸の寢心地のいゝやうにと差し入れた白い枕が、芥の山と化した上からころ／＼と轉がり落ちる。と、朽ちた棺板がめき／＼と鳴つて、一切を葬る土が徐ろに被さつて了ふ……その上にはまた新しい道がついたり、未知の建物が聳えたりする事であらう……

醫師のアルノルヂイは、重々しく老教授の墓を離れた。「ナウ・モフの言ふ事は本當だ！」異常な力をもつて彼はかう考へた。「人間の一切の思想一切の行爲は、たゞ一つの方向に向けらるべきなのだ！……しかし、人間の暗愚は不滅だから……もつとも……」

太陽はもう沈んで、遠くの十字架は迫り来る夕やみの中に没した。緑の椛は艶ずみ、格子の模様は溶け去つて、暗い石の角と一緒にたつた。醫師のアルノルヂイは杖を曳き摺りながら、今日さん／＼讚美歌をうたつたり香爐

を振り廻したりして、老醫師がその生涯に於いて餘りに遅く發見した貴いものを、永久に彼の目から隠して了つた場所へ赴いた。

マリヤ・パーヴロワナの墓は、墓地の一ばん遠い片隅だつたので、そこには商人たちの不死を氣取つた氣障な石碑などなくて、たゞ細い白樺が生えて、崩れた石の塀が立つてゐるばかりだつた。そして忘れられた墓標の間には、半ば腐つた足場の板が靜かに朽ちてゐた。緑いろした小鳥が塀の上から、ふら／＼と揺れる小枝へ音もなく飛んでゐたが、やがてふつくらと圓つちい塊りのやうに、どこか塀の向かうへ逆落として飛んで行つた。

もうあたりは黄昏れてゐた。塀外の空は暗くなつて、何だか少し低く下がつて來たやうに思はれた。小鳥は後から後から、聲もなく一匹づゝ消えて行つて、墓場の靜寂はこの世のものでないやうに、息苦しく濃厚になつて來た。十字架や、石碑や、木立ちなどは重苦しく、物凄しい一つの塊に溶け合つて、たゞどこか遠くの方で、誰かの常夜燈が神秘的な、小さい點のやうに赤く瞬いてゐた。

醫師のアルノルヂイはどつしりと重い體を、濕氣で柔かくなつた古いベンチの上におろして、杖の上に組み合せた

手へ腮を載せ 悲痛な目つきでちつと墓を見つめてゐた。緑いろの椛の木で飾られた灰色の土饅頭は もういつしか冷たい夕べの蒼みに溶け合つてゐた。それと一緒に、いとしく悲しい面影は、老醫師から離れて、消えて行つた。

「ねえ、先生、わたしが死んで、みんな歸つて了つたら……暫くわたしの傍にゐて下さいな。」何だかかう言ふ聲が、どこか近く耳もとで響くやうな気がした。

「ゐて上げますよ。」と醫師のアルノルヂイは、言葉に出さずにかう答へた。

編み模様のやうな白樺の小枝を透かして、緑がかつた夕焼けは遠く冷たく消えて行つた。闇は四方から迫つて來た。もうすつかり日が暮れて了つて、影と影とが流れ合ひ、古い十字架の間を黒い幻がさ迷ひ始めたとき、冷たい風が起こつて、物凄く木々の梢で騒ぎ出した。

## 後編

### 一

方々の水溜まりには、白い空がきれつ／＼に光つてゐた。濡れしよぼけたアカシヤは、枝を垂れて慄へながら、その中に影を映し、昨夜の雨に叩き落とされた黄色い葉は、風にもあそばされて、まるで生あるもののやうに、ふは／＼浮いてゐる。雨のやんだ後はあたりが殊に明るく、がらんとしてゐるやうに感じられた。

くたびれた古外套に、小さな上靴を穿いたチージユは、並木街を走りながら、口ぎたなく罵るのであつた。

「あのいま／＼しい肥つちよめ、金を寄越しやがらない！……こんな事をしてゐたら、肺炎にやられないとも限らない……ちよつ、何といふさまだ！」

自分が風邪を引いて病氣にかゝり、かね／＼一生懸命に空想してゐる生活から遠く離れた、この佗びしいじめ／＼した町で、たゞひとり死なないとも限らない——かう考へると、チージユは烈しい憂愁の擔となるのであつた。彼は自

分が實に小つげけな、手頼りない、不幸な者に思はれて、涙が喉もとに込み上げて来た。

「一生涯かうして……え、何が何だか分かりやしない！」

小柄な大學生は不思議な氣がした。全體この世に生まれ来て来たのは、何と言つたところで、こんな出稽古の口を駈け廻つて、破れた上靴でぬかるみをぐちゃぐちゃ踏み、役にも立たぬ惱ましい空想を續けながら、無意味に、跡かたもなく死んで了ふためではあるまい？ それでは何だか餘りばかりし過ぎる。實際、自分もやはり人間ではないか！

人生は思索したり、感じたりする、賢い人のために存在するなどと、なぜ世間では考へたり、言つたりするのだらう？ 現に彼は教育のある、思想人でありながら、饑えて凍えて、日々のパンのために戦々競々としなければならぬのに、すぐ傍には思ひ切つて愚昧な、人生に何の寄與もしないばかりか、かへつて人類に害をするやうな人間が樂樂と暮らして、すべての美しい理想に唾を吐き掛けようとしてゐるではないか！……一生涯の間チージュは思索したり、苦しんだりするだらうし、彼らは快樂を貪り續ける事だらう。かうして彼チージュに似た人間が、苦痛をもつて獲得しようと思つてゐる幸福は、まづ一番にこれらの厚

皮な獸に利用されて了ふ……實に簡單なものだ！ 全人類が殊勝らしく跪拜してゐる豫言者や、いかなる犠牲をも躊躇しない勇士や、かういふ優れた人々は後から後から亡びて行つて、愚鈍な獸の群れがその屍を傳つて、先へ先へと進んで行くのだ！ 優れた人達はたゞ自分の血をもつて、一般の幸福といふ建て物の煉瓦を固めるために、生きてゐるやうなものである。そして彼等の築き上げた建て物の一層々々には、得々として恩人に輕蔑の鼻を鳴らす、豚が住む事になるのだ！……全くその通りだ！

人類の歴史はことごとく思想と言葉の殉教者の滅亡史であり、そしてすべての時代々々は、勝ち誇れる凡俗の崇拜に限られてゐる！ 彼ら魯鈍なる動物は、富も、新しい發明品も、見事な建て物も、美しい女も、名譽も、奢侈も、すべてのものを與へられてゐるけれど、大小無數のチージュの運命は悲しみと、惱ましい思索と、貧困と、苦痛なのである！……過去もさうだつた、従つて未來も永久にさうだらう！……永久に？……これは恐ろしい言葉だ！ その中には一切の終焉と死滅が含まれてゐる！……しかし、さうだとすれば、すべてがノンセンスになつて了ふ！ さうだとすれば、基督とロスチャイルドと、果たしてどちらが正

しくて賢いかと聞きたくなる。

しかし小柄な大學生は勇氣を奮ひ起こした。彼はかういふ問ひさへ認容する事が出来なかつた。なぜと言つて、問ひは既に疑惑を意味するからであつた。もし一瞬間でも疑へば、今までの生涯も、これまで信仰し禮拜して來たのも、すべて抹殺されて了ふからである。

「いや、どうも仕方がない……」と彼は確信をもつて考へた。「勿論、豚はおれより幸福だけれど、おれはどうしても豚と交替などするのは眞つ平だ……」

けれど、すべてに對して無關心な内部の聲は彼に向かつて、お前がそんな事を言ふのは、たゞ自分の體に馴れて、やたらに自分といふものが可愛くなり、自分で自分を慰めるために、強ひて自己の偉大を信ずる事を覺えたからに過ぎない、とこんな言葉を囁くのであつた。が、チージュはこの意地わるな想念を追ひのけて了つた。

「こんな事はいつまでも續きやしない！」憂愁の念に屈しないで、彼は己れを勵まししながら、上靴で冷たい泥水をはね飛ばした。「いつかは必ず新しい時代が來るに相違ない……必ず全然ちがつた人間が現れるに相違ない……智慧と才能が人生の主となるに相違ない……その時はどんなにい

いだらう……是非さうなる、さうなるに違ひない……その時は、こんなに絶え間ない貧窮にいら／＼してゐる、餓ゑた不幸な大學生の存在などは、誰ひとり夢にも考へないだらう……その時はこんなふさぎの蟲も……そして、破れた上靴もなくなるだらう……その時は人間がみな自由な幸福な身になつて、顔つきも明るくなるに相違ない！」

まるで狂信者のやうな執拗さをもつて、ちつと齒を食ひしぱりながら、チージュは聲を出して繰り返した。

「さうなる、きつとさうなるとも……」

この美しい未來は高い自由な空の下に榮える、明るい日かなんぞのやうに、チージュの想像に描き出された。かうした新しい時代に雨や、寒さや、ぬかるみや、すべて純肉體的な苦痛が存在しようとは、考へられないほどであつた。悦ばしい日の遙かな輝きは、永遠の中からさして來て、彼の心を照らすのであつた。この光りの中に彼の憂愁も消えて、勇ましい戰鬪的な氣分がこみ上げて來た。

ぬかるみの飛ばつちりさへ上靴の下から、樂しげに散るやうに思はれた。

けれど小柄な大學生が頸の短い、額の狭い商人トレグロフと、藝術家と賢人を兼ねたやうな晴れ／＼しい顔つき



をした、未來の知られざる人間を並らべて、想像のうちに描いて見たとき、兩者の間の相違が恐ろしいほど明瞭に感じられた。まだ幾千年かの間、争鬪と苦痛の生活を續けなければならぬといふ事が、はつきりと彼の目の前に映じたので、チージュの心は、飛び上がった瞬間に射止められた鳥のやうに、急にはつたり落ちて了つた。

その時代は来る、勿論來ない筈はない……しかしそれはいつだらう？……いら／＼した小つぽけな心と、破れた上靴と、へな／＼の外套を持つた小柄の大學生は、一體どこにあるのだらう？……そんな者などはまるでどこにもあやしない。そんな奴の事を思ひ出すのさへ滑稽な位だらう！「滑稽なのだ！」

チージュは苦い非難の色を浮かべながら、切れ目のない灰色雲が、殆ど氣のつかぬくらゐに動いてゐる、白つぽい空を見上げた。ちよつと見た後で、ひん曲がつたやうな薄笑ひを洩らした。

と、不意に憤怒の念が、彼の心中にむら／＼と湧き上がった。

「だが、一體この美しい幸福や、黄金時代や、未來の人類などといふものが、一人の小さな、饑えて、虐げられた大

學生の、隠れたる苦しみに價するだらうか？……現に今も……生活難に追はれた、みじめで、不しあはせなこの大學生が、未來の人類の幸福を考へてゐるのではないか！……まるでその中に彼自身の唯一の幸福でも潜ひそんでゐるやうに、一生懸命に考へたり空想したりしてゐる。彼はまるで自分の事を心配しないでゐるが、もし未來の人類などといふものより、自分の事を餘計に考へたら、もつと／＼幸福になつたかも知れないのだ……あゝ、未來の人類よ、お前たちは何といふ幸福な人間だらう……それで、お前たちは本當にどんな人間になつてくれるのだ？……この小さな大學生に取つて、縁もゆかりもない、忌まはしい、人間になるのではあるまいか？……一體お前たちは彼の苦しみに價するだらうか？ 彼の空想を實現させてくれるだらうか？」

「あゝ、未來の人類よ、お前たちが生を楽しむためには、自分のやうに小さな隠れた空想家の生き血や苦痛が、まだまだどれほど必要なことだらう！……おゝ、幸福なる未來の豚よ、これはお前たちに取つて、餘りに高價な代價ではあるまいか？ 餘りに偉大な犠牲ではあるまいか？……」

この大膽不敵な思想が餘り突然に現れて、しかもそれが彼の心持ちと餘り懸け離れてゐたので、チージュは思はず

ぎよつとした。自分に取つて何より尊いものを侮辱したやうな、聖物を冒瀆したやうな気持ちだったのである。で、小柄な小學生は慌てて思想を後へ引き戻した。

「すつかりセンチメンタルになつて了ひましたな、チージュさん！　こん畜生、この湿けのために、魂までふやけて了つたと見える！　やつぱり人と同じやうに、僅かばかりの幸福のかけらを、自分の衣囊へも挟ち込みたくなつたんだな！……一つ何か小店でも開いたらどうだらう？　それとも、いつそ警保局へでも入つたらいかゞです？　こいつもなか／＼悪くありませんぜ！　そして、人類などといふ下らん理想は、もつと意志の強い、ものごとを億劫がらない人に任して了ふんですな……えゝ、こん畜生！……貴様らはみんな七生まで誑はれるがいゝ！」

この悲劇めいた呪詛は、誰に向けられたものか分らないが、小柄な大學生の心は、憤激のために恐ろしく慄へ跳き始めた。

水は上靴の中でびちゃ／＼鳴つて、忌まはしいねと／＼した湿けは、靴の中にも、頸筋の方へも浸み込んで来た。チージュは憤怒と侮辱感のために、泣き出したいやうな心持ちがした。

彼は並木街のはづれまで辿り着いた。濁つた小川はざざあ音を立てて渦巻きながら、黄色い木の葉を押し流しつゝ、この夏、大學生のミーシユカとダギチェンコが二人で住んでゐた、横町の方へ奔注するのであつた。もの思ひに耽つたチージュは、機械的にその方へ曲がらうとしたが、二人の友はとうにこの町を立つたのだと思ひ出して、眉を蹙めた。「しあはせな奴等だ！」苦い羨望の念を抱きながら、彼はかう考へた。

彼の頭には大都會の光景が浮かんだ。辻馬車の列、絶え間なく歩道に沿うて流れる黒い人の群れ、古い大學の建物、大劇場の車寄せ、電車の轟き、數百萬のともし火のいききした反射に照らされる夕空……これらすべてのものは、いかに遠く彼から離れてゐる事だらう！

足の下では冷たい水がはねを上げて、穴だらけの上靴はびちゃ／＼音を立て、風はみじめなアカシヤを吹き撓め、濡れた屋根や垣根は冷たく光つてゐた。

あまりの佗びしさに、せめて何かで自分を慰めたくなつた。で、彼は自分でもそれと氣がつかず、殆ど無意識にこんな事を考へ始めた。

「だが、實際のところ、それがどうしたといふのだ？……

一體どうしろといふのだ？……書物はこゝにもあるし、芝居だつて一つの氣晴らしだ。して見ると、退屈といふ事が問題ではないぢやないか！……人間かな？……しかし、どうせすべての人を見つゝし知りつゝす譯には行かないし……それに、そんな事をして何になるのだ、ばか／＼しい！」

チージュは心の中で自分の知つてゐる教授や、文學者や、大學生や、畫家などを一列に並らべて見て、その平凡で退屈な顔をちつと見つめてゐたが、やがて毒々しい罵言を浴びせ掛けた。

「えゝ、こんな奴、みんなどこへでも行つちまへ！……畜生！」

けれどそれは一そう倦怠の念を強めるばかりだつた。何だか世界中がまるで空虚になつたやうな氣がした。

「神經のねちが弛んだのだ。」とチージュは考へた。「一つ俱樂部へでも寄つて見ようかな？」

彼はせめて醫師のアルノルヂイとでも話をして、あの眠たさうな顔でもいゝから、生きた人間の顔が見たくなつて來た。別にさうしたくて堪らなかつた譯ではなく、ちよつとそんな氣がしただけの事である……とにかく、何かしなければならなかつたからである。

けれど、俱樂部の支關はがらんとして暗かつた。硝子づたひに濁つた雨水がざあ／＼と流れてゐるびしよ濡れの窓は、蒼白い光りを貧しく覺束なげに透かしてゐた。支關番の溜まりになつてゐる仕切り板の向かうから、兵隊式の野菜スープや、安煙草や、巻きゲートルや、古い汚らしい人間の匂ひがぶん／＼してゐた。外套かけには帽子が一つも見えなかつた。

これがまたチージュに、まるで一大不幸のやうな印象を與へた。彼は本當にする事が出來ないで、仕切り板の中を覗いて見た。支關番は、水色の花模様をついた汚い更紗の枕に顔を突つ込んで、黄色い曲がつた指の並らんだ、汚い足の踵を剥き出しのまゝ、チージュの方へ麗々しく突き出して寝てゐた。

チージュはまるで悪い事でもしたやうに、爪だちで仕切り板を離れ、そつと戸を開けて、そつと閉めた。支關番が目を醒して、自分を見つけたら、「この人は退屈で堪らないので、誰でも構はず總り付かうとしてゐるのだ」などと思ひはしないかと、恥づかしいやうな氣がして來たのである。

再びチージュは濕けが襟頸へ入らないやうに、兩肩を高く上げながら、ぬかるみの中をびちゃ／＼歩き出した。も

ら出稽古に行くより仕方がなかつた。

## 二

教室の中は暗くて汚よごかつた。子供等はい先ほどまで雨の中を駆け廻つてゐたのだらう、床の上にはまだ新しい泥の痕がついて、彼らの羅紗外套は濡れ犬みたいな匂ひを發散してゐた。チージュは煙草を吸ひ、頭を振りながら、自分にも子供らにもまるで要のない中世史を、大儀さうに言葉尻を引き引き講義してゐた。

とき／＼小柄な大學生は、自分の思想が千里エラスムスも先を走つてゐるのに氣ついて、思はず身慄おそひすると、しかつめらしく聲を高めながら熱くなつた。けれど鈍感な子供らが、いかにもまざ／＼と無關心な表情を示してゐるので、彼の熱心さはすぐいら立たしさと變はり、やがて間もなく以前の倦怠に歸つて了つた。

もしチーチュが十字軍遠征の大事件を述べてゐる所を、誰かがわきの方から聴いたら、この小柄な大學生は、よその佛に經を讀んでゐるに過ぎないと、考へたに相違なからう。まるで影のやうに靜かにしを／＼と、リーザが入つて來た。

「今日は。」チージュは彼女の訪問を悦んでかう言つた。「お退屈ですか？」

リーザは妙な憎えた目つきでちらと彼を眺め、力なくその手を握つて、いつもの席に腰をおろした。

チージュは講義を續けながら、窓の傍に無言のまま坐つてゐる娘を、そつと偷ひそむやうに眺めた。

水のやうな蒼白い光りが、彼女の瘠せた顔に落ちて、明るい無邪氣な目は、惱まじげに白い退屈な空を見つめてゐた。

「あゝ、だいが弱つてるな！」と小柄な大學生は考へた。

まるで何か眞裸の醜い恥ぢ知らずな不具者おぼろけもののやうに、意地わるく破廉恥に市中を横行濶歩して、リーザの心にも體にも、唾よだを吐き掛けんはかりの穢けがららしい風説が、彼の心に思ひ起こされた。つい今日も肥つたお引き摺りの癖に、若造りで淫亂な宿の主婦が、彼にこんな事を言つた。

「えゝ、そりやもうあの娘は姪ひま娘むすめなんですとも！ 恐ろしい事だわ……まだ若い娘つ子のくせに！……」

さう言ひながら、まるでリーザが自分の仇敵あだたでもあるやうに、意地わるい貪婪あふな微笑を浮かべた。

憤懣あふの情が小柄な大學生の心を掴んだ。何といふ愚鈍おろそで

不人情な人間どもだらう。不幸な娘を憫れむ代りに、彼女を頭から泥の中へ沈めて了はうと、あせつてゐるのだ。

「本當に沈めて了ふだらう！」憐愍と苦痛を覺えながら、チージュは考へた。

不思議なことには、小柄な大學生の眞底から輕蔑してゐる人間に、彼女が身を委せて以來——辯解の言葉を知らないやうな事をしてかして以來、チージュは以前の輕蔑的な、よそ／＼しい態度に打つて代つて、深い憐愍の念と一種の優しい尊敬の情を、リーザに對して感じるやうになつた。

まるで彼女は墮落したために、かへつて高い所へ上がったやうな具合ひだつた。以前はたゞばからしく見えた彼女の無邪氣な目つきが、今ではこの小柄な大學生に取つて、子供らしく純潔な、子供らしく悲しげな、殉教者の目つきのやうに、神聖なものに思はれるのであつた。

で、リーザの美しいけれども純潔でない體を、よからぬ目つきで見つめてゐるのに氣が付いたとき、彼は何とも言へない苦しい氣持ちがして來た。それは不思議な事だつた——彼は一切の偏見から放たれた聰明な人間で、今まで結婚した女をこんな目で眺めた事はなかつた。彼等はチージュの心にかうした不純な、破廉恥な好奇心を起こさない

のである。で、今かうした猥雜な想像に耽つてゐる自分自身を發見した時、チージュは羞恥の念を覺えながら、ことさらに注意して愛想よくしようと努めた。そのために、いくぶん誇張した尊敬をリーザに拂ふのであつた。

が、全體からいへば、何とかして不幸な娘を助けてやりたかつたのであるが、それが出來ないので口惜しかつた。

「ご機嫌いかゞですか？」と彼は聞いた。

リーザはびつくりしたやうに彼を見上げた。見受けたところ、彼女は今すべての人を恐れて、一言一行にも特別な、悲しい、破廉恥な意味を感じてゐる様子だつた。

「別に……」と彼女は慌てて答へた。

「いつそ冬が早く來て了へばいいですにね……このいまいましい雨天つゞきにや、厭になつて了ひましたよ！」何か彼女に氣持のいい事を言つてやらう、といふ希望を衷心から感じながら、チージュは言葉を次いだ。

「さうですな……」とリーザは小さな聲で答へて、どうか打つちやつて置いて下さい、と哀願するやうに、窓の方へ顔をそむけて了つた。そして、何か答へを求めるやうな悲しげな目つきを、白っぽい秋空の中へ隠すのであつた。

チージュは口を噤んで、やけに煙草の烟をぐつと吸ひ込ん

だ。微かな惱ましい絶望が、蜘蛛の巢のやうに彼の心を取り圍んだ。

「我々はお互に何といふ縁のない、かけ離れた生活をしてゐる事だらう……人を劬つたり、慰めたりする術さへ知らないのだからなあ！ みんな孤獨なのだ、みんな思ひ思ひの不幸を抱いて、その悲哀を他に傾かつ事が出来ないのだ。」

だぶ／＼に脂ぎつた顔が戸口から覗いて、歌でもうたふやうな聲が響いた。

「リーザ、お父さんが呼んでおいでだよ、おいで……」

この呼び聲の中には、何も變はつた所はなかつたが、なぜかチージュも、リーザも、二人のいたづら小僧までが、すぐに何かを直覺した。チージュはすつかり間諜ついで、巻き煙草を取り落とすし、子供らは自分の手帖をそつちのけにして、好奇の目を輝かせながら、姉をぢつと見つめるのであつた。リーザはその場を動かうとしなかつたが、たゞその手はわな／＼と慄へ始めた。

「早くおいでー」と母は繰り返して、戸の外へ隠れた。

暫く惱ましい沈黙の中に時が過ぎた。チージュは娘を見やるのが恐ろしい氣がしたし、子供らは好奇心に充ちた、

意地わるさうな目を姉から放さなかつた。リーザは恐ろしい内心の緊張を感じるらしい様子で、依然として白い空を眺め續けてゐた。窓の外ではまた雨水がちよろ／＼音を立てて、歪んだ線を描きながら、硝子を傳つて流れてゐる。やつと娘は身を動かしと思ふと、ちよつと一瞬間、思ひ切り悪げに息を凝らしたが、たうとう立ち上がつて、誰の顔も見ずに、やつとの事で足を運びながら、のろ／＼と部屋を出て行つた。

チージュはぼんやり彼女を目送してゐたが、何だか譯の分からぬいら／＼した氣持ちに襲はれて、凄しい勢ひで子供らを呶鳴りつけた。

「どうだね、分かつたかね？……僕は待つてるんだよ！」  
子供らはびつくりしたやうな目つきで、一瞬間に恐ろしく變はつた彼の顔を見上げた。その額には一撮みの髪の毛が、凄しい様子で突つ立つてゐた。彼等はあわてて手帖に顔をつつ込んだ。

長い間あたりはしんとしてゐた。やがてどこか三つ目の部屋あたりから、陰に籠もつた聲が聞こえ始めた。チージュは漠とした不安を抱きながら、耳を澄ましてゐた。そして、子供らが聞きつけないやうに、わざと大きな聲で次ぎの間

題を口授した。心が疼くやうな気がした。彼は恥づかしく堪らなかつたのである。まるで彼が子供の折檻に居合せながら、決然として子供を庇はなかつたかのやうであつた。

不意に何やら轟然たる物音が、家ちうへ鳴り響いた。何か一時ざわめいたかと思ふと、一瞬間しんとあつた。と、とつぜん恐怖と苦痛に充ちた。リーザの魂ぎるやうな叫びが、突き刺すやうに響き渡つた。

その刹那、一種の明るい力に掴まれた小柄な大學生は、自分でも何をしてゐるといふ意識なしに、いきなり部屋を飛び出した。二人の子供も本を抛り出して、一目散に駆け出した。

両手に顔を隠しながら、こちらをさして駆け出したリーザに、廣間でばつたり行き會つた。彼はまるで毒蟲に螫された雀のやうに、苦悶と憤激で胸を一杯にしなが、商人トレグーロフに飛びかゝつた。

「あなたは何をするんです！……よく恥づかしくない事ですわね？」憤怒と憂愁を聲に響かせながら、彼は突き刺すやうにかう叫んだ。

この瞬間、小柄な大學生の心は底から震撼されてゐたの

である。

上着なしに手垢のついたズボン吊りを剥き出しにした、肥えて頸の短いトレグーロフは、牡牛のやうに息を切らし體を揺ぶりながら、氣ちがひじみた血走つた目で、とつぜん目の前に現れた小柄な大學生を、鈍さうにちつと見つめた。

暫くのあひだ二人の者は、どうしてかういふ事が持ち上がったのか、合點が行かないで、互に睨み合つて立つてゐた。やがて商人の顔は紫色に脹れ、目は眼窠から飛び出して、唇は慄へたり引つ吊つたりした。

「たい貴様に何用があるのだ？」家中へ響き渡れとばかり、しゃべれ聲で呶鳴りつけた。「貴様もやはり彼女を……？ 出でうせろ畜生！ 貴様の匂ひがこの家にしても承知しないから……撲り殺すぞ！……」

チージュの鼻の先に、まるで悪夢の中で見るやうに大きい、紫色に脹れた氣ちがひめいた顔が、ぬつと突き出された。彼は本能的に肘で顔を防ぎながら、

「あなたは僕に對してそんな……」

と言つたか言はないかに、突然なものかうわつと唸つて、まるで雪なだれのやうなものが、彼の體を揉みくたに

した。小柄な大學生は、もう一ど兎のやうに憐れつぽい叫び聲を立てると、殆ど意識を失つて了つて、何ものをも見ず何ものをも理解しないで、名狀し難い恐怖に襲はれながら、支關へ飛び出した。氣ちがひめいた咆哮は、しじう彼の耳もとに響いてゐた。誰やら彼を小づいたり撼ぶつたりするので、手が巧く外套の袖へ通らなかつた。彼は打ち克つ事の出来ない力に擱まれてゐるやうな氣がして、仔猫のやうに誰かの手の中で跳いてゐたが、やがていつの間にか、庭の水溜まりのたゞ中に立つた。上靴を片足に引つ掛けて、片足はなぜか手に持つてゐた。と、その後を追ふやうに、彼の帽子がころ／＼と轉がり出て、びよんと一つ飛び上がるゝ、いきなりぬかるみの中へ落ちて了つた。戸がばたんと閉まつて、チージュはたゞ一人、白つぽい空の下に取り残された。そこからは冷たい小雨が絶え間なく、しとしと降つてゐるのであつた。

彼は我に返つた。

手足はわな／＼慄へて、全身はわな／＼き疼いた。恐ろしい恥辱と、醜態と、どうする事も出来ない手頼りなさの意識が、彼の心を充たしてゐた。小柄な大學生は生まれて以來かつて一度も、これほど鋭く痛切に、自分の體力の貧弱

さを感じた事がなかつた。なぜかダギヂェンコの逞ましい姿が、ひよつこり記憶に浮かんで來た。そして、何かの奇蹟でこゝへ姿を現してくればいゝと、胸の痛くなるほど願つたのである。

もうすつかり頭が茫となつた、見るも憐れなチージュは、慄へながら片々の上靴をいきなり水の中に置いて、やつとの事でそれを足に簀め、慄へる手で制帽を拾ひ上げ、へなへなになつた外套の袖で、長いあひだ泥を拭いてゐた。彼に取つてたつた一つのこの古帽子が、なぜか譬へ難い自己憐愍の情を誘つて、心臓をぐつと刺し貫いた。チージュの唇はびくりと躍つて、苦い涙はあたりの物をすべて蔽ひ隠しながら、目に湧いて來るのであつた。

彼は力なく拳を握りしめ、唇を食ひしりながら、一目散に庭を駈け出した。トレグロフの召し使ひ等は臺所の階段に塊まつて、意地わるげな笑ひ聲を立てたり、手を叩いたりしながら、彼を見送るのであつた。

### 三

リーザは涙に濡れた顔を枕へ埋めて、その上に薄色の髪を振り亂しながら、ちつと寢臺の上に横たはつてゐた。かた



かたの足からは上靴がぬげ、黒の靴下をきつちり穿いた足は、床まで届かないで、手頼りない美しさを見せながら、隣れげに寢臺から垂れてゐた。

濡れた黄色い庭に向いた窓が、たつた一つしかない小さな部屋は、何となく住み心地が悪く、貧しさうに感じられた。無邪氣にレースで飾られた鏡や、卓の上の本や、壁の繪葉書などは、滑稽な哀れな表情をしながら、彼女を眺めてゐた。それはすべて單純な物思ひと、空想と、單純な媚に充ちた、小さな娘らしい生活を物語る。質素なあり觸れたものばかりだつた。

無言の絶望に寢臺の上で身を跪いてゐる、しなやかな女らしい姿からも、恐ろしい悲哀が溢れて出てゐた。

誰も彼女の所へ入つて來なかつた。父親は氣分が悪いと言つて、眞赤な顔に汗をにじませ、しゃつの襟をぼろ／＼に引き裂いて、小山のやうに寢臺の上に臥せてゐたし、母親は憎えたやうな顔を一面に涙で濡らしながら、悲しみのためにすつかり悄氣で了つて、ちよつと戸口から覗いて見たけれど、すぐ兩手を擴げて行つて了つた。彼女は思ひがけなく降りかゝつた災難に、すつかり途方に暮れて了つて、何が何やら譯が分からないで、束ね髪の肥つた體を揺

りながら、意味もなく家の中を歩き廻つては、聖像に向かつて十字を切り、兩手をぱちりと鳴らして、小聲で歌ふやうに言ふのであつた。

「あゝ神さま、聖母マリヤさま、これはまあ何といふ事でございますせう！……これから一體どうなる事でございますせう！ リーザ、可哀さうなりサンカ！……」

と、彼女の目の前に、薔薇色をした小つちやなりサンカを生んで、乳を飲ませたり、抱いて歩いたりした時分の事が、あり／＼と浮かんで來た。幼兒は莫迦げた水色の目をこの世界に向かつて見はりながら、口から泡を吹いたり、小さな手を上げて、當時まだ若くて美しかつた、彼女の肥えた顔を叩いたりしたものだ。その時分こんな事を思ひ設けたらうか！……

「あゝ、神様！」

リーザは枕に顔を埋めたまゝ、周圍の事をまるで見もしなければ、意識もしないで泣き續けてゐた。彼女の顔は一面に濡れて、片頬は打たれたために摺り剝けてゐた。が、彼女は痛みなど感じなかつた。内部のものがすつかり死んで了つて、たゞ何かもの狂ほしい、悪夢のやうなものが充滿してゐた。そして、衰へた思想がその中で、くる／＼廻

轉してゐるのであつた。

ぢつとつぶつた目の前には、恐ろしく腫れ上がつて、まるで他人のもののやうな父の顔が、赤い霧の中に浮かんでゐたが、それは父の顔だと思へないほどだつた。リーザは先ほどの出来事を殆ど覚えてゐなかつた。どうして父親が知つたのか、それさへ合點が行かないくらゐだつた。彼女は恐怖と羞恥のあまり死んだやうになつて、父の言葉をまるで聞いてゐなかつた。たゞ自分が眞裸にされて、あらはな體をびし／＼鞭うたれるやうな氣がしたばかりである。それから父が憤怒の餘り息を窒らせ、ちよつと一瞬間鳴りを靜めて、娘をどうしたらいゝか分からないやうに、無言のまゝもの狂ほしい目を剥き出しながら、彼女を眺めたときも、リーザは身動きもしなければ、後へ引かうともしないで、縛られたやうにぢつと立つてゐた。この刹那たとへ彼女は殺されても、一ことも發しないだらうと思はれるほどだつた……けれど、突然けがらはしく恐ろしい一言が……醜惡な下司な罵詈の言葉が、彼女の顔を鞭うつやうに發しられた。娘は大きく目を見ひらき、あつと叫んで一歩うしろへたじろいだ。

「あゝ、よして下さい……」恐怖のために失神しながら、

彼女は途方に暮れたやうに、子供らしい叫び聲を上げた。この叫びが衝動を興へたかのやうに、彼は大きく無慈悲に手を振り上げながら、力いっぱい彼女の顔を打つたのである。

一瞬間リーザは殆ど意識を失つた。と、不意に両手で顔を抑へながら「あつ」と叫んで、自分でもどこといふ當てもなく、一散に駈け出した。うしろからは穢ららしい罵詈雑言と、もの狂ほしい叫び聲が、まるで泥の塊りのやうに追つ掛けて來るのが聞こえた。

彼女は自分の居間で我に返つた。けれど、それもすぐではなくて、たぶん一二時間は一種の鈍い自己忘却の中に過ぎたらしい。それからやつとの事で、さつきの出来事の恐ろしさを、始めて充分合點したらしく、リーザは氣うとい目つきであたりを見廻すと、いきなり兩手をばちりと鳴らして、もの狂ほしいヒステリーの發作に身を慄はせながら、枕の上にとんと身を投げた。彼女は寢臺の背にしがみ付きながら、全身をぐつと反らせたり、髪の毛を引き撚つたり、手や枕を咬んだりしてゐたが、やがてきやつと魂ぎるやうな叫び聲を立てると、そのまゝ急に靜かになつて了つた。

慟哭は彼女の心を荒廢させて了つた。彼女は恐ろしい靜

寂の中に、ちつと横たはつてゐた。まはりには霧が立ち罩めてゐた。そして、「もうすつかり駄目になつて了つた」といふ想念のみが世界ぢうでたつた一つ、彼女の心にまざまざと残つてゐた。

彼女は何も考へなかつたし、また先がどうなるかといふ事も分からなかつた。たゞもう自分は駄目になつた。平和な過去へ歸る方法はない、といふ事が見えてゐるばかりだつた。未來には死の如き空虚が立ち寒がつてゐた。

「もうこのうへ生きちやゐられない！」鈍い平靜な心持ちで、リーザはかう獨こちた。それは實に單純で、明瞭なことに思はれたのである。

ちつと閉ぢた目の前にどこからともなく、兩側の粘土の岸が水に洗はれて、雨で急に増えた黄色い濁り水が渦巻き流れてゐる、大きな川の景色が現はれた。自分の體がもう黄色く冷たい淵へ沈んだやうに、リーザはぞつと寒けを感じた。絶望の果ての静けさが彼女の心を領した。過去の一切——遠い太陽や、緑の園や、すべてさういふこま／＼した事が、幾千となく思ひ起こされた。その中にはもう二度と見ることの出来ない、何かある愛しいものも交じつてゐた……と、彼女は不意にミハイロフの事を思ひ出した。

恐ろしい衝動が彼女の心を撼ぶつた。リーザはもの狂ほしい哀傷に全身を疎めた。もう彼にも二度と會へないと悟つた。かう思ふと、全身を震ひ動かすやうな愛情と絶望が、リーザの心を駕擱みにした。彼女は痙攣的に兩手を胸へ押し當てて、殆ど耐へ難いほどの戀慕の發作に、ちつと息を凝らした。

「あの人のためだ！」といふ鮮かな、極めて明瞭な想念が頭を掠めた。戀ひしく愛しいあの人のために、こんなにまで苦しんで、不幸な身になつたのだといふ、恐ろしい悦びが彼女を震撼した。

それでも構はない！……まだ／＼もつと苦しむのも厭はない、墮落と汚辱のどん底まで行き着いても構はない、ただあの人のためでさへあればいゝ！……實際、自分はその人を愛してゐるのではないか！……それどころか、あの人の愛といふ偉大な幸福の代償として、自分の苦しみ方がまだ足りないやうな氣がした。もしあの人がこゝにゐて、一切の事を見てゐたら、あゝいふ事は起こらなかつたらうに、とさへ彼女は考へた。

すぐにも彼の所へ飛んで行つて、びつたりその傍に寄り添ひながら、自分の全身を彼の意志に任せたかつた。ほん

の一瞬間、彼女の心に無意識な希望が湧き起こつた。彼は自分を憫んで愛撫してくれた上、わが家へ引き取つてくれる——そして自分は永久に彼と一緒に暮らすのだ、たゞ彼とのみ暮らすのだ。自分の全身は彼のものだ、たゞ彼一人のものだ……リーザはからだ全體にしみ渡つて、魂を底の底まで開くやうな愛情を感じながら、彼に愛撫された時の事を思ひ出した。すると、慄へ動く小さな日光の斑點のやうに、臆病ではあるけれど、明るい想念が、どこか心の奥の方で動いた。それは二人の間に出来た子供といふ考へだつた。餘りの思ひがけなさに胸を締め付けられるやうで、甘く悦ばしい羞恥の紅を顔一面に漲らせて、リーザはしばらく一切のことを忘れて了つた。

けれどすぐに彼女は、こんな幸福を大膽に空想してゐるのが、空おそろしくなつて來た。彼はあんな美しい非凡な人間であるのに、自分はかうした小つぽけな、愚かしい單純な女ではないか……

何ともいへない偉大な愛情と、おとなしい諦めの悲しみに充ちた、彼女のつましやかな小さい胸は、ひし／＼と引き締められるやうであつた。そしてたゞ一つの想念が次第に擴がつて、盛り上がりながら大きくなつて行つた。

「なあに構はない……自分は一生幸福になれなくとも構はない……あの人が自分を愛しなかつたつて、また愛する事が出来なくなつたつて構はない……自分を捨てて了つたつて構はない……皆に唾を吐き掛けられて、堪らないほどの屈辱や打擲を受けたつて構はない……勝手にするがいゝ……あの人が捨てられたら死ぬまでだ。全く單純な分かり切つた事だ。けれど、自分が少しでもあの人に必要な間は、自分は生きて行つて、どんな事にも従ひ、どんな事をも忍んでゐよう……」

リーザは枕にひとしとがみ付いて、思ひ惱んで脹れ上がった顔に、涙をそそぎながら考へた。

「可愛い人 可愛い人……わたしの可愛い人！」  
それよりほか何ひとつ考へ出せなかつたのである。

## 四

チージュは、堪らないほどづきん／＼鼓動する胸を、抑へつけようと努めながら、何やら呟き呟き、息を切らせて並木街を走つてゐた。鳥のやうに尖つた顔は火のやうに燃え、目はそは／＼と動き、全身はわな／＼慄へてゐた。

もう黄昏れて來た。しとどに濡れた蒼い黄昏は、絶え間

なく小雨を注ぎながら、並木街を包んで了つた。そして瘖せざらばうたアカシヤは、まるで病みほゝけた憂愁の幻のやうに、灰色の靄の中にぼんやり滲んでゐた。ぐちゃぐちゃした泥水の中に沈んだ、廣場の向かう側にはともし火が輝いて、海のやうに廣い水溜まりに慄へながら映つてゐた。通行人は外套の襟に深く首を埋めて、上靴をびちやく言はせながら、時たま向かうからやつて来た。チージュは何一つ氣が付かなかつた。彼は誰にも用のない、侮辱された不幸な人間として、この廣い世界にたゞひとり存在してゐるやうな氣がした。

いつも考へ馴れた觀念は、すべて頭の中から飛び去つて了つた。まるで悪夢でも見てゐるやうに、四方から笑聲や、叱聲や、侮辱や、打擲が投げ付けられるやうに感じた。それは丁度、すべてのものが裏表にひっくり返つて、一切の意味を失つたやうな具合ひだつた。襟首を引つ掴まへられ、打ちのめされた上、まるで仔猫のやうに抛り出されて、あゝいふ英雄的な發作に驅られて飛び出した自分が、單にみじめで滑稽なものとなつて了つた——かういふ耐へ難い觀念のみが、鮮かに腦裏に映つてゐた。もし自分があの肥つちよの商人を壁際へ押し付けて、あのしやつ面を撲つてや

つたら……手が痛くなるほど打ちのめしてやつたら、どんなに堪らなくいゝ氣持ちだらう……自己の無力を意識する絶望的な心持ちと、あらゆる辭令や慰藉に對する、生理的な嫌惡を感じつゝ、彼はたゞ單純な腕力、逞ましい鐵拳を、惱ましいほど戀ひ慕ふのであつた。

この暴力は今まで幾ど彼の行く手を塞いだか分らないけれど、かう簡單に一つ二つの鐵拳で、彼の心から明るい衝動を叩き出した者は、これまで一人もあなかつた。

これは餘りに滑稽で、見苦しく、しかもばか／＼しい事で、不幸な娘を保護するために、彼を衝き動かした、かの美しい犠牲的精神と餘り不調和すぎて、一種の醜い失策談といつたやうな印象を與へる。

チージュは、あゝ息を切らしながら、まるで熱にでも壓されてゐるやうに、唇を噛んだり拳を握りしめたりした。そしてなんにも考へないで、たゞ意味もなく、

「顔を……顔を……おれの顔を……」と繰り返しながら、水溜まりの中をじやぶ／＼歩いた。

「あゝあゝ」絶望の餘り彼はかう呻いた。と、その瞬間、たれか彼に聲を掛けるものがあつた。

チージュはびくつとして立ち止まつた。そして自分の前

に立つてゐる、會計官吏ルイスコフのひよろ長い灰色の姿を、意味もなく長いあひだ見つめてゐた。

「今日は、キリール・ドミートリッチー！どこへいらつしやるんです？」濡れた鬚がしほ垂れて、目のしよんぼりした長い馬づらを、出来るだけ愛想よく見せようと努力して、白い歯を剃き出しながら、ルイスコフはかう聞いた。着いたやみの籠めた、ばか／＼しい防水外套の頭巾の下から、その顔は死人のやうにだらりと弛んで見えた。

「僕ですか？」とチージュは機械的に問ひ返した。「僕は……家へ……」

もしこれがほかの時だつたら彼はルイスコフが自分を引き止めたのを驚いたに相違ない。彼らはごく浅い知り合ひで、互に二言と物をいつた事がなかつた。けれど、今は彼に取つて一切が無差別だつた。彼はルイスコフの冷たい濡れ手を握りしめ乍ら、機械的に歩道の眞ん中に立ち止まつた。「ちよつと家へお寄り下さいませんか？……わたしの家はすぐその所ですが……」丁度いゝ機會だと悦ぶやうに、ルイスコフはせか／＼と言葉を續けた。

「これはまたどういふ譯だ？一體なにごとだらう？」しじゆう自分の事ばかり思ひ續けて、前後の事情など照らし

合せる餘裕なしに、チージュはかう考へた。

「もしおいで下されば、實に嬉しいのですが……それに母もまた……實際わたしとあなたとは古いお馴染なんですから……お茶でも一緒に飲みたいんですよ……全く！わたしはずつと前からさうしたいと思つてたんですが、お邪魔になつてはと心配したものですから……」

「何だつてうるさく付き纏ふんだらう？一體なんのためだ、こん畜生！」と小柄な大學生は惱ましい心持ちで考へた。彼の目の前にはしじう消える事なしに、同じ光景が立ち塞がつてゐるのであつた。自分をまるで犬ころのやうに、襟髪を掴まへて抛り出し、おまけに自分に取つてたつた一ツきりの、古い制帽を泥の中へ投げ付けたのだ。しかも自分は何一つ、本當に何一つ仕返しをする事が出来ない！……さうして皆がそれを見てゐたのだ。今に町ぢうの者が、自分の叩かれた事を知るに違ひない！……

「わたしは非常に……全く……あなたのご意見が伺ひたいので！」とルイスコフは語り續けながら、いつまでもチージュの手を、自分の冷たい濡れた指から放さなかつた。

チージュは急がしいと言はうと思つたが、奇妙な無關心な心持ちに囚はれて、殆ど機械的に同意した。

「どうぞ、わたしの家はすぐそこで、ほんの一足なので  
す……非常に嬉しいですよ、全く……わたしがどんなに  
悦んでゐるか、ご想像もつかないくらいです……」本當に  
チージュが呆れるほど嬉しさうな様子で、ルイスコフは急  
き込みながら言つた。

彼はルイスコフがこんなに機嫌を取るのが、なぜか恥づ  
かしいやうな氣がしたが、それと同時に、幾ぶん心が軽く  
なつたやうでもあつた。つまり、辱しめられ虐げられた自  
分をも、やはり一枚上の人間だと思つてゐる連中もある――  
といふ事が、とつぜん目に入つたやうな具合ひだつた。

二人は歩き出した。別に話しの種もなかつたし、それに  
チージュは話しをすることが出来なかつた。彼は繰り返して  
巻き返し自分の屈辱を、耐へ難いほど恐ろしい無数の微細  
まで思ひ起こすのであつた。この出来事は到底わすれるこ  
との出来ない、取り返しのできないものに感じられた。幾  
年たつても事實は事實として残るのだ――といふやうな氣  
がした。ほんの一分間だけの事ではあるが、自分をはじめ  
で滑稽な人間となつた。して見ると、自分はみじめで滑稽  
になり得る可能性があるのだ！ かう思ふともう堪らなくな  
つて、このさき生きて行けないやうに思はれた。しかし、

自殺といふ事は、彼に取つて全然縁のない思想だつたので、  
彼はこの先どうしようかと、考へるのさへ恐ろしかつた。  
たゞ何か霧のやうなものに包まれて、茫然自失して了つた。  
ルイスコフは、チージュが餘り遠すぎると思ひはせぬか  
と、一歩々々に氣を揉みながら、先に立つて駈け出した。  
そして、少しでも水のない所を、小柄な大學生に譲りなが  
ら、ばか／＼しくも水溜まりの中をじやぶ／＼歩くのであ  
つた。

二人が行き着いた時には、あたりはもうすっかり暗くな  
つて、蒼みを帯びてゐた。佗びしげな憐つぱい顔つきをし  
た、小さな傾いた離れ家は、海のやうな曲がりくねつた淋  
しい往來を、盲ひたやうな窓で見つめてゐた。濡れしよぼ  
けた垣根の下には、ぐしよ／＼の雑草が佗びしげにうなだ  
れ、雨はやみ間なくしよぼ／＼と音を立て、遠くの方には  
誰かしら、たつた一人ふら／＼歩いてゐる、濡れしよぼけ  
た姿が見えた。あたりは何もかもじめ／＼と貧しげで、倦  
怠に充ちてゐる。家々の暗い窓には灯りが見えないので、  
この通りにはまるで人が住んでゐないやうに思はれた。

チージュの頭には、彼の心持とは調子の合はぬ想念が、  
ふいと浮かんで來た。かうしたみじめな場末の通りで、垣

根や雜草に圃かまれた、雨のために陰氣な、天井てんじやうの低いぼろ家には、かういふ無意味な植物的の生活を宣告せられた、貧しい人々でなければ住む筈がない。つまりどこかの會計官吏とか、郵便局長とか、いつも顔を脹らしてゐる子澤山の役僧とか、月三ループリの恩給を買つてゐる罷職官吏の後家とか、何をして暮らしてゐるのか譯の分からないやうな町人どもばかりである……明晰な頭腦と偉大な情緒を持つた人間は、こんなところで暮らすよりも、どこか野つ原で、樽の中に住んだ方がましだと言ふだらう。

ルイスコフが絶えず何やら訛かたがびを言ひながら、あわててラムプをつけてゐる間に、チージュはびしよ濡ぬれの帽子を機械的に脱いで、それを何かの箱の上に載せ、さてどうしていゝか分からないで、部屋の眞ん中に突つ立つてゐた。

ラムプは靜かに燃えて行つて、煤けた闇の中から、色んなものが一種の威嚴をもつて、客に初對面の挨拶でもするやうに、徐ろに姿を現はして來た——更紗のクッションの破れた大時代の赤い椅子、埃つばい硝子戸の向かうに、けばけばしい模様をついた茶碗の見えるごろ／＼した小戸棚、花模様を染めた帷かたびら、窓の上の引き扱ひきあられたやうな花鉢、細い金箔の縁に飾めた茶色になつた大人數の寫眞……部屋の

中には羽蒲團や、ほこりや、燈明油の匂ひがむつと鼻を打つた。梁はりの上に煤けた受難の十字架を載せた低い天井は、頭のすぐ上に垂れかゝつてゐた。貧しいみじめな生活が、あたりにまざ／＼と浮き出してゐる。

「お坐り下さい、どうぞ。」とルイスコフはせか／＼した調子で言つた。「わたしもすぐ……たゞちよつと湯沸カモイを……ちよつと失禮します……」

彼はまつしぐらに駈け出した。チージュは依然として我に返る事が出来ないで、どうしてこゝへ來たのか合點が行かずに、窮屈らしく卓の傍に坐つて、あたりを見廻し始めた。彼は寫眞を覗いて見ようとさへしたが、その中にはどこかの官吏や町人が、手をきちんと膝の上に載せて、貧相らしい細君をうしろに控へた、恐ろしく色の褪めた單調な顔ばかりなので、小柄な大學生は本當に痙攣を浮かべながら、顔を反けて了つた。

ルイスコフは隣りの部屋で、誰かとひそ／＼話し合つてゐた。どこかで薄つべらな大きな音を立てながら、湯沸カモイの煙突が倒れて、木つばの燃える匂ひが始めた。チージュは胸が窒つぶるやうな氣がして、先ほどの出來事が一そつ痛切に、一そつ情なく思ひ起こされるのであつた。殊に思ひ出



す度に恐ろしいのは、外套の袖に手が巧く入らないで、抵抗しようとして試みなかつたばかりでなく、自分が人から叩かれたら、まるで手出しが出来ないのが當たり前のやうに、抵抗しようなどと考へもしなかつた事である！けれど、それより一そう恐ろしく、到底ぬぐふ事の出来ない恥辱のやうに感じられたのは、上靴を片手に持つて、水溜まりの中に立ちながら、泥の中を轉がつて来る帽子を、意味のない目つきでぼんやり眺めてゐた事である……いつもこの瞬間が記憶の中に浮かみ出す度に、小柄な大學生は、何とも言へない汚辱感に萎えたやうになつて、頭の中がぼうつとして了ふのであつた。

やつとの事でルイスコフが、緑青の浮いた、しゅん／＼煮立つ湯沸を持つて入つて來た。その後から顔の長い、魚のやうな無意味な目つきをした、瘠せひよろけた老婆が茶盆をもつて來た。

チージュははつと我に返つて、思ひ切り悪さうに立ち上がった。ルイスコフは湯沸を卓の上へ置きながら、間の悪さうな誤魔化すやうな調子で言つた。

「わたしの母です……つまり……」

一體なにが「つまり」なのか譯が分からなかつた。つま

り自分の母親はこんな女だといふのか、それともほかに何か意味があつたのかも知れない。

チージュはやはり思ひ切り悪く會釋した。手を出さなければならぬと思つたが、たうとう出さないうで了つた。老婆は憎えたやうに目を剥き出して、彼の會釋に答へながら、永久に驚いたやうな、奇妙な視線をチージュから放さないで、腰をおろした。

チージュはこの老婆に何か口を利かなければならぬと思つたので、

「今日は、ご子息の所へお邪魔に上がりました……」まるで雙でも相手にするやうに、なぜか仰山らしく大きな聲で言つた。

老婆は鈍い目をしよぼ／＼させた。

「おつ母さん、このお方が話をしていらつしやいますよ！」ルイスコフは母の方を見ないでかう注意した。

「まことに嬉しうございます、心からお禮申し上げます……」と老婆は顔を長くしながら答へた。

と、不意に思ひがけなく、彼女の目は何か意味を帯びて來た。一種の表情に似たものが、魚の目のやうな濁つた色の中に浮かんで來た。

「それに家のサーシ+も悦びますでせう。これは始終ひとりぼつちで、友達といふものがございませぬ あなたどうかご免なすつて下さい!……」

彼女は何ともつかぬ會釋をして、首を上げると、憎えたやうに目をしよぼ／＼させた。

「いや、どういたしましたして……僕もご同様で……」とチージは呟いた。

どんより／＼した魚のやうな目の中に、いき／＼とした輝きは、だん／＼明らかに燃え上がつて来た。老婆はもう貪り求めるやうな目つきで、小柄な大學生を眺めながら、まるで三時間くらの喋り続けさうな調子で語をついだ。

「わたし共は逼塞して暮らして居りますので、お客様にも餘り来て頂きませぬ。どうも致し方がありません。月給が少いのでございませぬからね……サーシ+は十一ルーブリしか頂いてゐませぬのでね。増給してやらうと、約束しては下すつたのですが、どうやらこれの勤め振りがお氣に召さないと思へまして……ところが、サーシ+はまことに天使のやうな人間でして、この年寄りを養つてくれるのでございませぬ。そりやあもう若い人間ですから、友達と一緒に遊びたいのは山々でございませぬが……體も弱うございまして

ね……まあ、かういふ暮らしなのでございませぬ! せめて饑死にしなければならぬのを、神様にお禮申さなければならませぬよ!……」

老婆はチージュの目をまともに見つめながら、まるで彼がやつて来たのは、自分たちの悲惨な生活の歴史を始めから了ひまで、聞き終るためでもあるやうな調子で話した。それを聞いてゐるのは辛かつた。チージュは、まるで自分が親子の窮乏の原因でもあるやうに、なぜか間が悪くなつて来た。ルイスコフは卓の傍に頭を垂れて坐りながら、客の方を見ようとしなかつた。

「なくなつた父は——なにとぞ天國に安らはせ給へ——三十七年間お役所へ通ひ続けたものでございませぬ……雨が降らうと凍が酷からうと、兩方の耳を頭巾で括つて（たくはよく風邪を引きますので）、勤めに出掛けるのでございませぬ……勤めの方に懸けてはそりや几帳面でしたよ。ですから、お上のお覺えも芽出たくて、なくなつた時には、月三留の恩給を下げて下さいました。」

老婆がこの三留の事を言つたのは、自慢のためか不平のためか、チージュは分からなかつた。實際それは會計官吏の一生に對して、多いだらうか少いだらうか……彼は三

十七年間、雨が降らうと凍が酷からうと、耳を頭巾で括つて同じ會計局へ通ひ、一生ひとつ椅子に坐り通し、それよりほかの運命などは夢にも見ず、痕かたもなく死んで行つた永久にみじめな一書記を、目の前にまざく／＼と見るやうな氣がした。たゞ滑稽雜誌を除いては、そんな人間なぞどこにもゐた事がないやうな鹽梅である……たつた一つの磨り切れた會計局の椅子の上に、全部すつかり納まつて了つたこの人間の（何と言つても人間である）生活の中には、何かしら一種おそろしいやうなものがあつた。

「まあ、かういふ暮らしてございます……ところが、今は諸式が高くなりましてねえ！……何を見ても、まるで手が出せませんよ！……何かサーシャにいゝ口がありますとねえ！……一つあなたでもお知り合ひの方に頼んで、骨折つて下さるとよろしいんですか！」

老婆はまたお辭儀をして、待ち構へたやうな貪婪な視線を、ぢつとチージュに据ゑた。チージュは骨折りませうと言ひかけたが、骨折つて見る所がまるでないのを思ひ出して、悪い事でもしたやうに、きまり悪げに目をそらしながら、大仰な同情した風つきで肩を竦めた。

思ひがけなくルイスコフが彼を助けてくれた。

「ねえ、おつ母さん、その……この方はそんな話しなぞ面白くないでせう……」彼は目を上げずに呟いた。

老婆は留えたやうに息子を振り返つて、それからチージュの方をちよつと見やると、目をしよぼ／＼させながら、口を噤んだ。ルイスコフはほんやり卓布の房を指でいちぢりながら、客の顔を見ようとしなかつた。

時には度はづれにぞつくばらん、時にはぼんやり鈍い彼の動作の中には、全體として何か奇妙な所があつて、いつも杖を振り振り並木街を散歩して、他人に理解せられない偉大な自己の高みから、輕蔑したやうに世界を見おろしてゐるルイスコフとは、まるで似ても似つかなかつた。見受けたところ、何か執拗な想念が胸にこびり付いてゐるらしかつた。

幾分かの間、彼らは口を噤んだ。チージュは薄い茶を匙で掻き廻して、ぐじや／＼したレモンをなぜか一生懸命にすくひ取らうとした。

到頭ルイスコフは決心したらしく、大仰に碎けた身振りをして、につこり笑ひながら、興奮にと切れ勝ちな聲で言つた。

「實はねえ、キリール・ドミートリッチ、あなたに一つお願

ひがあるのですが！」

「何ですか？」

「實は……わたしはこゝに……ちよつとかういふものを……一つ短い小説を書いたので、あなたのご意見を伺ひたいんですが……實はその、餘り暇なものですから、つまり……」

彼はさつと顔を眞つ赤にしながら、急に言葉を切つて口を噤んだ。チージュもなぜか急にどぎまぎして、同じやうに赤くなつた。しかしルイスコフの顔には、千萬無量の羞恥と、恐怖と、希望と、哀願が現れてゐたので、チージュはわざとらしいながらも、出来るだけ柔かな調子で答へた。

「いゝですとも……僕は悦んで……しかし、僕はずるぶん怪しい批評家ですからね。」

ルイスコフは急に活氣ついて手を振つた。

「いゝえ、どう致しまして……何を仰しやるんです！ あなたはたくさん本を讀んでいらつしやるし……それに大學の學生ですもの！……どうもほかに誰も頼む人がないんで……わたし自分の同僚に讀んで聞かしてやりましたが……皆はいゝと言つてくれました！……」

ルイスコフはちよつと言葉を止めて、チージュの顔をち

らと見たが、小柄な大學生が會計局の官吏の賞讃などに、少しも價値を認めないのに氣がつくと、あわてて語をついだ。

「實は、わたしは小さい時分からその方が好きでしたし……それに、何と言つても暇なものですから……是非あなたに……」

「ぢや貸してご覧なさい、一つ讀んで見ませう……」とチージュは拙い調子で同意した。

ルイスコフは一そり赤くなつた。特に力が籠もつてゐると思はれる所に、こまかい陰影を添へるために、自分で朗讀したかつたのである。彼はこの時が來るのを、長いあひだ待ち焦がれてゐたのだ！ それに、チージュが自分でこの小説を利用しはしないかといふ、まるで愚にもつかぬ想念が彼の頭に閃いたのである。

「ですが、どうでせう、今すぐでは？……ご免なさい、こんなに急ぎ立てて！……何なら、わたしが自分で讀んでもいゝです……わたしの原稿は餘り分かりよくないですから……實は勤めの身で、清書する暇がなかつたので……」

「ぢや、いゝです……」もうどうせ遅れつこはないと見て取つて、チージュは同意した。

ルイスコフは急にそはくして、背廣の釦をはづしながら、いつも肌身はなさず持つてゐる自作の小説を、内かくしの中から取り出した。それは青い表紙に四角な白い紙の貼り付けてある、薄い學校用の手帖だった。

チージュはこの手帖を一目見ると、なぜか恐ろしく取づかくしなつた。

「ちや、始めませうか？」依然として相手の許しを信じ兼ねるやうに、殆ど哀願の聲でルイスコフは訊ねた。

「どうぞ！」

ルイスコフは勢ひ込んでラムプを引き寄せ、卓布の皺を伸ばし、慄へる指で手帖を擴げ、幾度か唾を呑み込みながら、と切れ勝ちな聲で讀み上げた。

「愛……アレクサンドル・ルイスコフ作。」

小柄な大學生は急いで目を伏せた。そしていよく最後までその目を上げなかつた。

ルイスコフは恐ろしく興奮してゐた。聲は躍り、唇は乾き、顔の上には赤いしみやら、汗やらにじみ出すのであつた。見受けたところ、彼は目を霧に閉ざされて、よく讀むことが出来なかつたらしい。彼は始終まごついては、わざとらしい投げやりな様子で手を振つて、事もなげに飛ばし

て了ふのであつた。

「こゝの所はまだどうも巧く行つてないのです……」

それはかういふ筋だつた——一人の貧しい會計官吏があつた。彼は高く秀でた額に、柔かい栗色の髪を渦卷かせた、何とも言へない高潔な心を持つた青年だつたが、これがN伯爵の美しい令嬢に戀ひをしたのである。令嬢はどういふ譯か田舎の町に住んでゐた。高潔なる青年は二三度令嬢に出會つて、感激に充ちた容貌と、宏量な心をもつて彼女を驚かした。彼は痛烈な諷刺を弄して、令嬢の上流社會式な生活と、彼女を取り卷く貴族階級の俗悪さを痛罵した。チージュはこれらの貴族階級がこの町の名士——警察署長とか、會計局長とか、アルプゾフとかいふ人々を、すべて網羅してゐるのを何の苦もなく發見して、恐ろしく面喰つたのである。

美しい伯爵令嬢は、殆どこの高潔な青年を愛せんとしたが、しかし深い淵が二人を引き分けて了つた。この美しい青年の抱擁に身を投じたら、どんな幸福が待ち設けてゐるかを悟らないで、彼女は遂にNNといふ老公爵に嫁ぐ決心した。

ところが、あるとき美しい青年は、どういふ事情かはつ

きりしないけれど、伯爵家の晩餐會に招待を受けた。この席上で、伯爵は娘の婚約を披露したのである。伯爵令嬢は自分の美貌と、雪白の衣裳に光り輝きながら、未來の花婿を接吻して、主人公を振り向いて見ようともしなかつた。高潔なる青年の胸は、耐へ難い侮蔑と痛みに充ち満ちて、遂に堪らず張り裂けて了つた……そのとき始めて一同は、自分たちが偉大なる魂の傍を、少しも氣づかずに素通りしたのを悟つた。伯爵令嬢は後悔の涙を流しながら、不幸な青年の屍の上に倒れて、最初にして最後の接吻を與へた……それは作者が危く主人公を蘇生させ兼ねないほどの、悲痛きあまりなき接吻だつた。彼は涙のにじみ出た目をぼち／＼させてゐた。

物語りの結末はかうである。美しい青年の墓の上には、何だか恐ろしく急に枝垂れ柳が生長して、喪服を着た見知らぬ美人が、毎日墓前に花を捧げては、あり得べくして實現されなかつた幸福を回想して、泣くのであつた。

「さうして、柳は彼女に物悲しい歌を囁いた……」とルイスコフは慄へ聲で讀み終ると、まるで引き千切つたやうに口を噤んだ。

チージュは恐ろしく恥づかしかつた。

彼は頬が燃えるやうな氣がした。そして、物語りが終りに近づいてゐるのを見て、思はずぞつとしたのである。ルイスコフの聲が慄へて、緊張した目は何ものをも見ないやうにぢつと据わり、乾いた唇を頻りに嘗め廻してゐる様子から察すると、この創作は會計官吏に取つて、何か非常に大きなもの——つまり一生の破滅と勝利を分かつ、一種の試金石のやうなものだと悟つた。明らかに彼の心は恐怖と羞恥と、誇りと希望に充ちてゐるのだ……彼を九天の高みへ持ち上げるのも、奈落の底へ突き落とすのも、たゞ一ことで充分だつた。

見受けたところ、この物語りは胸の血をもつて書かれたもので、會計官吏の無意味でみじめな生活中に、今までかつてなかつたもの、また今後も決してあり得べからざるものに對する、當てのない熱烈な空想の具象化である。これは彼自身が汚い會計局で、五哥十哥の受け取りや、田舎長老の預金帳などに埋もりながら、何かしら美しい生活、堪らないほど詩的な戀ひ、輝くばかりの幸福を、ひとり心ひそかに空想した結實なのである。

かうした偉大で誠實な人間の魂の緊張が、かういふ貧弱な俗悪な結果しか生み得ないのかと思ふと、チージュは不

思議な心持ちさへするのであつた。誰が何といつても、この魂は苦しみ惱んで、腰辨生活の瑣末な悲劇から遁れ出ようとおせり、異常な緊張の中に貴重な空想を抱いてゐたのである……ところで、この魂は苦痛と歡喜をもつて紙の上へ流れ出た。しかもその悲劇ぜんたいが何といふみじめな、ばか／＼しいものとして現れた事だらう……

小柄な大學生は、何とか言つてやらなければならぬ、自分の沈黙の一分一秒はルイスコフを責めざいなみ、かつはこの場の事情を面倒にすると感じながら、何一つ頭へ浮かんで來なかつた。

「いま／＼しい、何の事だか分かりやしない」といふ想念のみが、頭の中を廻轉するのであつた。

ルイスコフが恐怖と希望に、消えも入りなん風情で、自分の宣告を待つてゐるのを、チージュは感じた。ルイスコフの今までの全生涯よりも、今の自分の一ことに、より多くの意味が含まれてゐるのだ——かう思ふと、彼に打撃を加へる氣力がなかつた。

彼は機械的に原稿を手にとつて……標題を讀み返した……たとへ一分間でも引き伸ばして、何か巧い言葉を考へ付かうと思つたのである……チージュは、是非とも一二箇所

讀んで見なければ、といふやうな振りをして、始めと終りにちらと一瞥を與へた。それから眞んなか邊をちよつと覗いて、また了ひの方を引つ繰り返して見た……が、何一つ頭へ浮かんで來なかつた。もうこれ以上ひき伸ばすことは、明らかに不可能だつた。もう全然無意味に頁をめくつて見て、想像も出來ないやうな努力をもつて、三度目に結末を讀み返した後、小柄な大學生は體ぢう汗びつしよりになつて、まるで硝子細工か何そのやうに、そつと原稿をわきへ置きながら、ルイスコフの方を見ないで、煙草に火をつけ

た。

そつと目尻の方で斜かひに様子を窺ふと、頬に赤いしみを浮かべたルイスコフの蒼白い顔と、薄い髪の毛をまつすぐに貼りつけた、汗みどろの額が目に映つた。

小柄な大學生が原稿をめくつてゐる間に、ルイスコフの心は恐怖と、羞恥と、誇りと、希望と、絶望と——すべて人間の體驗し得る、一切の心持ちを味はつたのである。始め朗讀を終へたときに、彼は何か取り返しのできない、恥づべき事が持ち上がったやうな氣がした……自分の書いた物語りが、何ともいへないほど莫迦げた、忌はしいものに感じられたのである。けれど暫くたつと、今度は突然、今

にもチージュが自分の偉大さを悟つてくれるに違ひない、といふ事がはつきり分かつて来た。大學生はこの物語りの主人公こそ、取りも直さずルイスコフ自分だといふ事を悟つて、言語に盡くし難い尊敬の念に充されるに違ひない。今すぐ客が興奮した、感激に充ちた調子で問ひかける言葉まで、ルイスコフの頭にはつきり浮かんで来るのであつた。

「これは一體あなたですか？」とか、または、

「これは一體あなたがお書きになつたのですか？」

とか言ひながら、小柄な大學生は（彼はこの世界でルイスコフを理解し尊重し得る、たつた一人の美しい敏感な人間である）、彼の手を握りしめるに相違ない。するとルイスコフは首を振つて、つゝまじやかな苦笑を浮かべながら、

「さう、今こそあなたもお分かりになりましたね？……けれども、これまでの生涯をどれだけ苦しんで来たでせう、どれだけ孤獨を忍んで来たでせう！……いや、どうも仕方ありません。我々は（我々のやうな偉大な人間——などとは勿論いはいだらう）、感謝と報酬を期待すべきぢやありませんからね！……」

ルイスコフの心臓は、誇りと幸福のために、張り裂けさうになつた……

と、チージュはまたちよつとぐづぐづして、別の場所を讀み返した……無論、彼は驚きに打たれて、茫然自失してゐるに違ひない……あゝまた先を讀み出した……もし驚きに打たれたのだとすれば、どうして先を讀むことが出来るのだらう？……して見ると、驚きに打たれたのではないのか知らん？……ルイスコフの心臓は、どこか下の方へどすんと落ちて、額には冷たい汗が滲み出した。彼はとろ火に掛けて焼かれるやうな氣がした。そして心はまるで時計の振り子のやうに、極度の歡喜と極度の絶望との間を彷徨した。

「さうですなあ……」曖昧な調子でチージュは言葉じりを引いた。

その聲の響きを聞くと同時に、ルイスコフは全身痲痺したやうに堅唾を飲んだ。が、すぐにありとあらゆる感覺を、恐ろしいほど緊張させながら、また活氣づいて来た。そして彼の身神は悉く、一ことの響きも一つの顔面表情をも遁すまいと、前の方へ乗り出すのであつた。

けれど、チージュは黙つてゐた。

「で、あなたは何とお思ひになりますか？」ルイスコフは痲痺した舌で、吃りながらかう聞いた。そして、恐ろしい羞



恥に驅られて、自分でも思ひ掛けなく、磊落な調子でかう言ひ足した。

「これは勿論ちよつとした……つまらないもので、いはゆる筆だめしなんですから……あなたの忌憚なき意見が伺ひたいのですよ。」

彼は平氣な顔つきをしようとなつたが、その顔はまるで生死の瀬戸きはのやうに、一面に赤いしみて燃えるやうだつた。

小柄な大學生はやけに煙草の烟をぐつと吸つて、言葉に盡くし難い努力をしながらかう言つた。

「さうですね……無論この中には、ちよい／＼いゝ所があります……」

ルイスコフの心は、ちよつとでも不用意に手を觸れたら、すぐ切れて了ふ絃のやうに、恐ろしく緊張して來た。

「例へばあの……主人公が散歩の途中、伯爵令嬢に行き會ふところだとか……また全體として……」

ルイスコフは勢ひ込んで首を振つた。彼はまぎ／＼とその場所を思ひ浮かべて見た……勿論、物語り中で最も優れた箇所である、言ふまでもない事だ！

「しかし全體として、この作は力が弱いです……」ほかに

適當な言葉が見つからないので、小柄な大學生はぶつ切ら棒にかう言つた。

ルイスコフは、目の前が急にく／＼廻り出して、體ぢうの血がさつと顔へ逆流するやうな氣がした、そして何だか冷たい深淵の中へ、まつしぐらに落ちて行くやうに思はれた。

「まあ、考へてご覧なさい。」どこか遠い所で、小柄な大學生のかう言ふ聲が聞こえた。

「文士となるには、まづ第一、文學的教養を受けた人でなければなりません。ところが、君は讀書さへ餘りしてゐられないでせう……君の書き方を見ると、まるで下品な通俗小説よりほか、何も知つてゐられないらしい。それに、こんな伯爵令嬢なぞ、何のために必要だつたのでせう？……作家は自分の知つてゐる事を書かなければなりません。ところが、君は貴族なんでものを傍へ寄つて見た事もないでせう……」

蒼ざめた灰色の影が、ルイスコフの長い黄色な顔へ、見る見る一面に擴がつた。小柄な大學生は出来るだけ柔かに、言ひ含めるやうな調子で話したけれど、會計官吏はもう一切を悟つて了つた——自分の小説は何の役にも立たぬ、や

くさなもので、自分も何の才能も持つてない。作家として立つ時なぞ永久に來ないで、依然たる貧しい、みじめな腰辨として、死ななければならぬのだ。長いあひだ彼の魂の命の糧となつてゐた一切の空想は、脆くも崩れ落ちてしまつて、平板で灰色をした眞實が、その蔭から顔を現したのである。この晩からルイスコフは、何かの奇蹟で絶壁のふちに支へられてゐた岩のやうに、とつぜん綱が切れて、一たまりもなく轉落し始めたのである。

彼はチージュの言ふ事がよく分からなかつたが、たゞ一つだけはつきりと意識してゐた——ほかでもない、今まで限りない誇を抱きながら、この物語りを衣囊に秘めて、つい鼻の先にどんな偉人があるか、それさへ知らない周囲の人々を、限りない侮蔑の目をもつて眺めてゐた……全體として、どれくらゐの希望、どれくらゐの空想、どれくらゐの計畫を胸に描いて見たか分からない——それがみんな糞餅に歸して、單にはか／＼しい滑稽なものとなつて了つたのだ！

ルイスコフは最後の努力を奮つて、自分でも何か分からずに、手當り任せのものにしがみつきなから、臆病な低い聲で訊ねた。

「でも、さつきあすこの所を褒めて下すつたちやありませんか……」

チージュは赤い顔をした。彼は自分が先ほどあゝして愚かにも、何の目的もなく、空世辭など言つたのが恥づかしくなつた。そして突然、自分も不幸な身の上だといふ事を思ひ出した。自分の生活も實に恐ろしいものだ。自分も今日あんなに手ひどく侮辱されたのではないか。

「僕があゝ言つたのは、たゞちよつとお愛想のためなんです……」まるでルイスコフに對して鬱憤を晴らさうとするやうに、彼はぶつ切ら棒にかう言つてのけた、「實際のところ、あすこもやはり、ほかの所と同じやうに拙いんですよ……いや、作家になるのは中々むづかしい事です……誰でも彼でもなれるといふ譯にや行きませんよ！ そんな野心は棄てて了つた方がいゝです……」

ルイスコフは低く頭を垂れた。

小柄な大學生は一種不可解な、いら立たしい氣持ちで原稿を掴み、容赦なくあちこち弄り廻しながら、ところ／＼聲を出して讀み上げた。そしてその貧弱さを説明するばかりでなく、冷笑さへ始めたのである。

ルイスコフは、小柄な大學生が自分の血みどろな心臓を

取つて、それを手の中で弄り廻してゐるやうな氣持ちがした。彼は眞蒼な顔をして無言のまま、長い黄色い顔を伏せながら聞いてゐたが、實際は何一つ耳に入らなかつたのである。今は彼も自分の小説がどうにも仕様のない、ばかばかしい、みじめなものだといふ事を悟つた。で、自分の書いた一言一句が、まるで鞭のやうに、びし／＼と彼の顔を打つのであつた。彼はたゞ時々びく／＼と身を慄はせて、ます／＼頭を低く下げた。

小柄な大學生はもう調子に乗つて了つた。彼はルイスコフの原稿を抛り出して、そんなことなど忘れて了ひながら、もう一般的な文學論を始めた。しかも熱烈な愛と、純な感激をもつて話すのであつた。

「ねえ、君！ 天才といふものは、實に非常な力ですよ！ 非常な美ですよ！」と彼は叫んだが、ルイスコフの様子が何となく變なのに、ふと氣がついた。

小柄な大學生は勢ひ込んでゐた話しの腰を折つて、ちつと注意ぶかく會計官吏を見つめた。

まるで血の氣のない、にきびだらけの、髪の毛の細長い彼の顔は、すつかり悄氣かへつて、だん／＼低く下がつて行つた。そして恐ろしい絶望の色が、一心に下の方を

見つめた目の中から覗いてゐた。兩手はちやうど何かにしがみ付かうとするやうに、癡癡的に卓布を拂つてゐた。

「君は何だつてさう悲觀して了つたのです、ばか／＼しい？」チージュは間違つて言つた。「一體まじめにそんな事を考へてたんですか……え……一たい文學よりほかに光明がないのですか？ だつて、皆がみな文士になる譯にや行かないぢやありませんか？ 人生にはそれよりつか仕事がない譯ぢやあるまいし、文學以外にまだ／＼いい事は澤山ありますよ……人生は恐ろしく豊富なものだから、どんな人でもそれ／＼違つた方法で、生活を面白くする事が出来ますよ。落膽しちやいけません……本當にをかしいですなあ。さうと知つてゐたら、僕は……」

ルイスコフは灰色した顔を上げて、チージュを見やりながら、さも落ちつき拂つてゐるやうな鈍い聲で言つた。

「わたしに……生活なんか……あるものですか！」

小柄な大學生はまた後句につまつた。

彼はまるで始めて見るやうに、ちつとルイスコフの顔を見つめた。そしてなぜかその顔に、にきびが澤山あるのにびつくりした。と不意に、人生の美とか意義とかいふやうな立派な言葉も、こゝでは全然不吊り合ひだと悟つた。ルイ

スコフのやうな人間に取つて、なんの美があり、なんの意義があらう！英雄に取つては、人生の名において亡びるのもよい。なぜといつて、滅亡の英雄的行爲の中に、一種の幸福があるからである。しかし未來の地面を肥すために、誰の目にも入らないで、じり／＼に朽ちて行く事は……たうてい他人に勧め得るものでない！……とはいへ、幾百萬の卑劣漢や小人や凡人も、英雄と同じくらゐ人生に取つて必要なのである、もし彼等の鈍い、貧弱な、無意味な存在がなかつたら、美といふものもないだらう！……英雄や指導者などは、彼等のみじめな死骸で、偉大な建て物を築き上げる！……彼等は自分の腐屍の上に、壯麗な人間の花を咲かせるために、朽ちて了はなければならぬのだ……かういふ風に、單に土を肥すためのみに生まれた者が、本當にどれくらゐある事だらう！……一體なにをもつて彼等に報ゆべきだらう？……さうだ、實際人生は偉大で美しい。けれど、それは決してルイススコフのやうな人間のためではないのだ。

チージュは憐愍と羞恥の念をもつて、ルイススコフを見やつた。と不意に、丁度はたから他人でも見るやうに、自分自身の姿が目に入つた……それは何のためか知らないが、饑

ゑ死にしまいと思ふ一心で、意味もなければ悦びもなく、汚穢の中を蠢いてゐる、何といふ特色もない、平凡な、饑ゑて寒さに慄へてゐる、小つぽけな一大學生である……ぞつと寒気がチージュの心を掠めて走つた。彼は荒膽を挫かれて、途方に暮れたやうに口を噤んだ。

ルイススコフもやはり黙り込んだまゝ、ちつと根氣よく卓布を見つめてゐた。青い手帖は無邪氣に頁を開いたまゝ、二人の前に横たはつてゐる。

「一體なんのためだらう？」と小柄な大學生は悲痛な心持ちでかう考へた。「なるほど、天才は美しい、指導者は力強い、巨人の戦ひは雄大である。しかし、我々みたいな小つぽけな人間でもやはり美しい、力強い、天才的な人間になりたいのだ！……一たい誰が我々の間に差別を設けたのだらう？ 誰が何の權利によつて、おれやルイススコフを偉人の土臺に使つたのだらう？……愚かな偶然だらうか？……しかし、我々は偶然なんかほしくない！」

小柄な大學生は息苦しくなつて來た。何ものか彼の喉をしめつけるやうな氣がした。

と、不意に一座の静寂を破つて、臆病なしかも貪慾な聲が聞こえた。

「それで、サーシエンカはこの小説で、澤山お禮が貰へるでせうか？」

チージュはびっくりとして振り返つて見た。

魚のやうにまん圓く無意味な、しかも貪婪な鈍い目を持つた、長い黄色な顔がまともに彼を見つめてゐた。

彼女は何も分からなかつたのである。

ルイスコフが朗讀してゐる間、彼女はうちのサーシエンカがよくこんなに書いたと思つて、びっくりしたばかりだし、チージュが話をしてゐる間は、この人の言つてゐる事はサーシエンカに取つて、いゝことか悪いことかと案じるばかりだつた。

チージュは一種の怪訝と恐怖を抱きながら、彼女を眺めた。その目が彼を驚かしたのである。わが子が空想して筆に現した一切の事も、彼女の周囲にあるすべての事も、星や神祕や壮美や悲劇を含んだ世界ぜんたいも、何もかも彼女から無限に遠く隔たつてゐる……しかしそれでも、彼女はやはり人間に相違ないのだ！

この事實の中に何かしら恐ろしい矛盾があつた。かういふ人間が一人だけでも存在すれば、それは人類が創造した理性と宇宙との調和に對する、死刑の宣告に等しいのである。

つた。何やらチージュの腦中でしづかに動いたが、それがどういふ意味を持つてゐるのか、考へる氣力さへもなく、たゞこの鈍い貪婪な魚のやうな目に對して、一種動物的な恐怖を感じながら、小柄な大學生は出しぬげに席を跳り上がった。

ルイスコフも同様にのつそり立ち上がった。

## 五

外はまるで墓の中のやうに眞つ暗だつた。雨はちよつと前にやんで、濕つぱい風が恐ろしい勢で吹き荒れてゐた。

目に見えぬ風はチージュに襲ひかゝつて、外套の裾を吹きまくり、冷たい雨の雫を顔へしぶかせ、町の角々で泥の中へ突き落さうとした。三步さきはもう何も見えなかつた。

どこか遙かに警察署の邊で、たつた一つ街燈が立つてゐたが、それはかへつて目を眩ますばかりだつた。家々は僅かにそれと闇の中に白んで、兩側には何かしら巨大な黒い幻影が聳え、もや／＼した手をもの狂ほしく振り廻してゐた。彼等は闇の中を走る小柄な大學生の上へ屈みかゝつて、その頭上で脅かすやうに首を振り立てながら、ごう／＼と鈍い響きを立てる。家々の屋根の上では、目に見ぬ妖精が走

り廻つて、鐵板をもの凄く鳴らしてゐた。

小さな町はまるで見えなかつた。目の前はまるで黒い幕でも引いたやうで、どうかすると自分の目が潰れたのではないか、と思はれる事さへあつた。あたりにはまるで生の蠟ろうといふべきものが見えない。その邊いたる所に人間があるかと思ふと、變な氣がするくらゐだつた。彼らは到る所に——息苦しい部屋の壁や天井などで、ごう／＼と風の吹きすさぶ、この暗い、物凄いや夜を避けて眠つてゐるのだ。

チージュは宿をさして走つてゐたが、大きな眞つ黒い地球の表面に、たつた一人ぼつちでゐるやうな、淋しい氣持ちがした。小柄な大學生は今はじめではつきりと、自分が走つてゐるのは、永久に固定した不動のものでなく、恐ろしい速力で永遠の空虚と闇の中をもの狂ほしく駛つてゐる、想像もつかぬほど巨大な塊りだ、といふことを感じたのである。

「あゝ何といつても……地球の上に生きてゐるのは恐ろしい！」どつと吹いて來る風の中で、汚よごい／＼した歩道に足を取られまいと、一生懸命に踏みこたへながら、なぜか彼はかう考へた。

と、不意に思ひがけなく、けさ新聞で讀んだ英國皇帝の

莊嚴な戴冠式の記事を思ひ出した。まはりには風と雨と泥濘で、足の下には巨大な土の塊りが疾驅し、空には眞つ黒な、無限の闇が蔽おほひ被おほさつてゐる……さう思ふと何だか妙な氣がした。どこか恐ろしく遠い所で、今なにやらざわざわ動きながら、しかつめらしく物々しげに何かしてゐるのだ……しかも、それが眞つ暗な闇の中なのである。なぜといつて、今どこかで太陽が照らしてゐるのだ、小さな明るい一點のやうな、狭苦しい、つまらない一塊の土地があるのだ、さういふ事は想像するのさへ困難だつたからである……そこではまるで人形芝居か何ぞのやうに、………  
……、王侯貴族や、印度の王様や、濠太利、ニュージラ  
ンド、加奈陀、阿弗利加植民地の總督などの、小つぽけな姿がしつ／＼と現れる。そしてその後からは輝やかしい寶石を鑲めめ、金箔を織り込んだ衣裳を着け、可愛い尾を引き摺り、針の頭ほどの首を反そつくり返りした、豆粒ほどの人形がぞろ／＼と行列してゐる……人形の顔は皆この瞬間の重大さを意識する、もの／＼しい表情に満ち溢れてゐる……人形どもは今すばらしく重大な事業をやつてゐるのだ。彼等は小つぽけな肘椅子の上へ、滑稽な豆のやうな……を頂いた、小つぽけな……を坐らしてゐる！ 向かうにある玩具のや

うな僧院の小さな鐘樓では、豆粒のやうな鐘が鳴つて、大砲は轟き、自分らは世界的國民だと自惚れてゐる小人の群集は、黒山のやうに押し寄せてゐる……ところが、ここはどちらを向いても量り知れぬ空間を、永遠の暗黒と一種不可解な偉大な運動が支配してゐる……それは實際どこかであつた事なので、小さな……はもう玩具のやうな……へ坐つたに相違ない。けれどこゝはたゞ風と雨と泥潭のみで、小さな……などに少しも關係がないのだ……地球は空間を廻轉してゐるが、英吉利人の……な儀式にも、闇の中を走る小柄な大學生にも、何のかゝはりもないのである……

「戴冠式……大ブリテン王……ちよつ、考へて見ると、何もかも實に……げてる？」泥の中で足を這らせて、帽子を一生懸命に抑へながら、チージュは一種不思議な憂愁を抱きつゝ、機械的にかう考へた。「だが、つまるところ、ばかげてゐないものが世の中にあるだらうか？……おれもばかげてゐるし、それに……しかしそんな事は問題ぢやない！ぢや一體なにが問題なのだ？……え、畜生、何がなんだか分かりやしない。だが、地球の上に生きてゐるのは恐ろしい……」

眞つ暗な闇の中で小柄な大學生の注意は、クラッセ少尉

補の住んでゐる小屋の、錠戸の隙間から洩れる灯りに吸ひ寄せられた。それは闇の中で、まるで大きい微妙な信號のやうに輝いてゐた。チージュの頭の中には、ばかげてひよる長い騎兵少尉補が、たつたひとり明るい部屋の中に坐つて、何やら考へてゐる姿が浮かんだ。

きつと今日はチージュの神経が、恐ろしく混乱してゐたのだらう。彼は急にこれすら恐ろしく思はれ出した……あすこに一人の男が、白い顔の上に吊り上がつた眉を、びくびく動かしながら……何やら考へてゐるのだ、何やら思案してゐるのだ。かうして地上の到るところ、隅々限々に、同じやうに白い面を被つた不思議な生物が、幾百萬となくうよ／＼してゐて、その面の隙間からすべての人に蘇のなき、謎のやうなある者に覗き込まれてゐるのだ。彼らはみな何か考へてゐるけれど、チージュはそれが何であるか、永久に知ることが出来ない……この不思議な生物どもの考へてゐる事は、極めて僅かな一部分しか言葉や文字で現されないで、その他の一切はたゞ一轉瞬の間だけ生きてゐて、すぐ永遠の祕密境へ去つて了ふのである……

「ちよつ、いま／＼しい！」チージュは奇怪な恐怖を感じながらかう罵つて、嵐と騒音に充ちた暗い深淵を覗いた。

それは闇の中をどこかへ走つて行く小つぼけな人間を、十二重二十重にひし／＼と取り巻いてゐるのであつた。

## 六

クラウゼ少尉補の住みかでは、二本の蠟燭が燃えてゐた。それは少し妙な置き方がしてあつた……丁度たつたまま歌留多の勝負を闘はしたやうに、蓋を開けたロムルベル用の卓の兩端に立てられてゐる。

主人のクラウゼは棒のやうに長い眞つすぐな體をして、卓の傍に坐つてゐたが、客のナウーモフは部屋の中を歩き廻つてゐた。そして頭を蓬々させた影法師は、壁を傳つてちよろ／＼動き廻るのであつた。彼は始終あかりの方へ横向きになつてゐたので、たゞ横顔だけしか見えなかつた。それが彼の顔に息づまるやうな、毒々しい表情を與へるのであつた。

「僕は君の言ふ事が分かります。」と少尉補は冷たい高慢な調子で言つた。「もし君が生きるのを可能だと思ふくらゐなら、ほかの人間だつて生きてゐられない譯がないぢやありませんか。僕は人生を無意味だといふ君の意見に賛成しますが、しかしどつちだつて同じことですよ……君だつ

てちやんと分かつてゐる癖に、さうして生きてゐるんだから、ほかの者だつて、たとへ分からなくなつたつて、勝手に生かしたいたらいゝぢやありませんか。」

ナウーモフは彼を見つめた。

「僕ですか！……僕が生きてゐるのは、僕の思想の方が僕より強いからです！」

「といふと、つまりどういふ意味なんです？」

「僕はつまり、自分の思想に支配されると言ふのです。」

僕は最後の一言を發するまでは、さう簡単に死んで了ふ譯に行きません。自分の思想を世界に普及するために、出来るだけの事をし盡くした後でなければ、死ねないので……もし單に僕の生活が苦しかつただけなら——人生が僕一箇を満足させてくれなかつただけで、一般に人生そのものは美しい可能に充ちてゐるといふのなら、それはぜんぜん別問題です。それなら、僕は確かに五分間と考へはしなかつたでせう！ 極めて大多數の人間は、人生がそれ自身うつくしいものだと思つて生きてゐるのです……彼等は『自分たちはたゞ廻り合はせが悪いだけで、人生が美しい可能に充ちてゐる以上、ひよつと運が向いて來ないとも限らない！』こんな事を考へてゐるのです……すべて



の人間は結局とゞのつまり、運か力かどちらに依つて悪を征服し、人生の幸福を獲得しようと望んでゐます。つまりこんなばか／＼しい、なんの根據もない希望で生きてゐるのです……一生漕ぐるしんどり訴へたりして、泥濘と生血の中に沈んでゐながら、今にも——今日明日の中にも事情が一變して、いきなり天國へ入るかも知れないと當てにしなから、いつまでもいつまでも生きて行くのです……」

「さう、それは本當です！」見受けたところ、何やら自分の心に印しるしをしてゐるやうな風つきで、少尉補は出し抜けに考へ深さうに言つた。

ナウーモフは彼の叫びに一顧の注意も拂はないらしく、一生懸命に隅から隅へと歩き廻りながら、言葉を續けた。

「かうして、その明日の日に希望を繋つなぎながら、死んで行くのです！……事によつたら、このよりよき明日の日に對する永久の希望の中に——人生は遅かれ早かれ、本當の美しい正體を現はすべき筈だ、といふ無意味な信仰の中に、不死とか天國とか、酬いむかひを授ける神とか、さういつた空想の説明が潜ひそんでゐるのかも知れませんが……だつて、遅かれ早かれ死ぬると分かつてゐるのだから、最後の瞬間にも、希望の抜け道を残して置かなきゃならないでせう。やがて

この最後の日がやつて来て、もう地上では何一つ當てにする事が出来なくなると、そこで始めてどこか『あの世』に於ける新しい明日の日が現れるんです……いや、『日』どころぢやない、無限の永世なのです！……だつて空想するくらゐなら、うんと徹底的に空想しなきゃまんからね。一日やそこらどうしませう、永世ですよ！……「たい人生の美しい本體とは何だ？（結局、人生はおれを騙だましやがつたのだ、いま／＼しい畜生め！）……今度こそはそんなものでなしに、永遠の姿だ、神だ、天國だ！……」といった氣持ちなんですよ！」

ナウーモフは何やら思ひ出したやうに言葉を切つた。

「さう、僕はわき道へそれて了つた！ 君のお訊ねがあつたんでしたね？……さう！……つまり僕が言ひたいのは、もし僕の生活が厭だといふだけの問題なら、僕は明日に對する甘い希望で、自ら慰めなどせず、手つ取り早くしかも音なしに、自分の額へどんと一發打ち込んで、その場にふさはしい書き置きも、遺言狀も残しはしなかつたでせう。全くこんな人生には唾よだでも引つ掛けて、それで安心して了つたに相違ありません！しかし僕は死ぬことが出来ません。なぜと言つて、僕は單に自分の生活のみでなく、人生

ぜんたいを憎むからです。この仇敵が生きてる限り、僕は人生を去るわけに行かない！……僕は最後の息をつくまで、これと闘はなけりやならない！……僕は叫びます、壁へ頭をぶつ突けます、呼びます、揺すぶります……」

「揺すぶるんですつて？」不思議なほど平然たる顔つきをして、なぜかクラウゼは問ひ返した。

ナウーモフは急にちらと彼を見やつて、立ち止まつた。彼の目は、少尉補の魂の底まで浸入しようとするやうに、急に鈍く輝き出したが、高慢な冷たいクラウゼの顔は、全く不滲透性のもののやうに見えた。彼はナウーモフの言葉にぜんぜん興味を持たないで、何やらほかの事を考へてゐるのではないかと思はれるほどだつた。ナウーモフは長い間ぢつと見つめてゐたが、やがてほんの心もち目を細めて、にやりと無気味な笑ひ方をした。それは傲慢な冷笑と言つては、いゝくらゐで、この會話の祕密な目的を隠さうとしないのではないか、とも疑はれるのであつた。

「勿論ですとも！」挑むやうな調子で彼は言つた。「僕は自分の思想に對する信仰と、決斷力を充分に持つてゐるから、殘酷な事だつて驚きやしません！……苦痛のために身を跳きながら、美しき人生に光榮あれと喚いてゐるやうな莫迦

ものを、一人でもあの世へ送つてやりたいのです。僕の手はびくともする事ぢやありません！……一人でも人間の數がへれば——一步まへへ進む事になるのです！……」

「しかし他人の生き血を自分に引き受ける權利を、誰がいたい君に授けたのですか？」少尉補は冷やかに聞いた。

「誰ですつて？ 僕自身ですよ！ たとへ全世界が人生にホザナを叫ぼうとも、『汝呪はれてあれ！』と一喝するには、これだけで充分だと信じます……僕はまだほかの者と同じ莫迦だつた時分、よりよき未來のために苦しい争闘を續けながら、この信仰を涙と血で育て上げたのです！……この思想が始めて僕の頭へ浮かんで來たのは（もつとも、漠然としたものでしたが、僕が免れ得ない死刑の宣告を待ちながら、牢獄の中に坐つてゐた時のことです……この思想は論理的結論としてでなく、單に結論の豫感として突然あらはれたのです。もういよ／＼お了ひだ、明日は絞首臺の露と消えるのだと、自分の全存在をもつてはつきり悟つたとき、僕は忽然として、少しも死が恐ろしくないので、氣づきました……それまでは非常に恐れたものです。死も事實だ、刑罰も事實だ、恐怖も事實だ、しかしそんな事はみな肝腎な點でない！ では、一體なにが肝腎なのだらう？……」

僕は監房の隅から隅へと歩き廻つて、考へました……一生涯の中でこの時ほど僕の脳髓が恐ろしく明晰に、迅速に働いたことはかつてありません……僕は自分の身に何か特別なことが起こつてゐるやうな気がしました。何だか自分がこの地上を離れて行つて、體がかるく透き通つて来るやうな具合ひです。そのために、すべての感情が極度に繊細になるやうな気がしました。僕は以前すこしも注意を拂はなかつたものを、聞いたり見たりするやうになりました。僕の目はありとあらゆる瑣末なものを見つけて、その中から今まで隠されてゐたものを發見するのでした……今でも覺えてゐますが、僕の注意は窓じきりの上にこびりついてゐる、死んで乾からびた蠅の方へ引き寄せられました。きつとそこには小さな隙間があつて、風が洩れてゐたのでせう。死んだ蠅は、寢返りを打たうとして出來かねるやうに、しじゆう拍子を取つて動いてゐるのです……その蠅は去年の枯れ葉のやうに、死んで乾き切つてゐましたが、まるで生きたもののやうに活潑に動くのです。それから、僕は隣りの要塞の屋根に止まつてゐる、一羽の鴉を見つめました……僕の目に入るのは、その屋根の小つちやな片隅と、白い空の一片だけなのです……僕は長い間ちいつとその鴉を見守

つてゐました……それは實に滑稽な鳥でした。屋根には雪が積もつて、急な傾斜をしてゐる上に、雪がふはくしてゐるのです。ところが、鳥は大きな無骨なやつでしてね……ちよつと飛び上がるとまた雪の上へおりて、さも得意さうに下へずるくつと下り落ちるのです。それからまたひよいと飛びあがつて、上の方へ行くと、またずるくつと落ちるのです……それがいかにもしかつめらしい、得意さうな顔つきで、さもく非常な大事業でもしてゐるやうな具合ひなんです！ 何だか知らないけれど、僕はその瞬間、死んだ蠅の中にも莫迦げた鴉の中にも、何かしら偉大なものを發見したのです……この二つを見守つてゐる中に、一たい何を考へたか、後になつて思ひ出せなかつたけれど、僕の思想の流れは驚くほど犀利で深刻で、人生ぜんたいがすつかり裏面を引つくり返して見せた……僕は下らない一匹の鴉を見てゐたのですが、幾千とない思想や、計畫や、想像や、考慮が、恐ろしい速力をもつて、僕の脳髓を貫いたのです！ 僕は自分の頭がまるで水晶で拵へたやうになつて、不可能な暗い汚點は一つもないやうに感じられました……もう一分間かういふ状態が續いたら、一切のものが啓示されて、すべてのものの始めと終りが、分かりさうに

思はれるほどでした……やがてさういふ状態も過ぎ去つて恐ろしい荒廢と疲労が襲つて來ました。しかし、かういふ異常な精神の高潮は、その後二とと經驗しなかつたです。僕は横になつて恐ろしく長いあひだ寢ましたが、自分が一種不可解な運動のために、機械的に動く死んだ蠅になつたり、是非どこかへ飛び上らなければならぬと思つてゐる、ばかな鴉になつたりしたところを、夢に見ました……そして目が醒めたとき、自分の中の古いものはすっかり死んで了つて、何か新しいものが生じたのを、自己の全存在をもつて感じたのです。僕はもう社會運動で殊勳を立てようの、自己を犠牲にしようの、革命が成功すればいいの、プロレタリアートが勝利を得ればいいの、そんな事を考へなくなりました！……僕はたゞかう悟つただけです——自分はあす首をしめられるのだが、その結果がどうなるかさへ知れないのだ。僕はそのばかりしさを恐ろしいほどはつきり悟つて、忽ち全世界から離脱して一人りになつたのです！……そして、この孤獨の中で最大限の嫌惡を感じながら、人間せんたいを憎んだのです！ それから、もう一つの瞬間を覚えてゐます——僕が監獄を出て、町の方へ通ずる橋の上に立つたとき、あたりを見廻してゐるうちに、ふとこ

んな氣がし出しました。自分が生きて自由の身になつたのは、たゞさういふ風に思はれるだけで、實際はもう死んで了つたのだ。なぜと言つて、自分はけさ石鹼を塗つた綱で首を絞められたからだ。それは幻イリュージョン 覺シヤクみたいなものでした。僕は頸のまはりにまざ／＼とこの綱を感じたくらゐです！ 僕は大きく目を見開いて、まるでわきから眺めるやうな氣分で、すべての物を見ながら立つてゐました……何もかも元のまゝでした。河の上には汽船が走り、春の空は青々として、若草は島の上に綠を綴り、人々は何かばかばかりしい意味を現した、平凡きはまる顔つきをして、徒歩で歩いたり馬車を驅つたりしてゐます……殊に僕が驚いたのは、みんな一樣に春と、太陽と、暖い陽氣と、綠の草を悦ぶ彼等の表情です！……まるで嬉しさの餘り、少々酔つ拂つてゐるやうでした！……ところで、僕が死んだといふ事は……石鹼を塗つた綱で忌はしい絞シヤクり首にされて、致死期の苦悶を経験した事は、まるでその痕さへ見られないぢやありませんか！ 僕の死は太陽の光りに燃えて了つたのです、生の悦びの中に溶けて了つたのです……つまり、僕は全然獨りぼつちで死んだ譯なのです！……僕が死んで了つたのに、人生はもと同じ姿の儘で残つてゐる！ かう感じ

たとき、頭のとつぺんから足の爪先まで、僕の全身を震撼した憎悪の念は、たうてい言葉であらばせるものぢやない！……僕はすんでのことで、その邊の人間に飛びかゝつて咬みついた上、地びたへ體を叩きつけて、泣き出さないばかりでした！ そのとき僕は一箇の人間を無視してつた、詭はしい傲慢な人生との争闘に、全力を捧げようと誓つたのです！……

「その争闘が成功すると信じますか？」とクラウゼは無關心に訊ねた。

「いや！ 僕自身からして信じてゐません。しかしそれでも、一たん一人の人間の腦中に、何かの思想が生まれ出た以上、もう滅びる譯に行きません。なぜと言つて、その思想は世界へ乗り込んだのだから、最後まで行き着かざるを得ないんですよ！」

クラウゼは彼を見やりながら、奇妙に眉をびくりと動かした。

ナウーモフはぢつと一ところに立つて、踵から爪先へ、爪先から踵へと重心を移して、身を揺すぶりながら、暫く黙り込んでゐた。偏癡狂のやうにぎら／＼光る彼の目は、ぢつと蠟燭の火を見つめてゐたが、何一つ認めてゐる様子

はなかつた。たぶん追憶に掻き亂された思想は、彼の頭の中で癡癡的に、恐ろしい勢ひで廻轉を續けてゐるに相違なかつた。とつぜん彼は笑ひ出した。クラウゼは不審さうに相手を見上げた。

「ねえ、クラウゼ君、この思想が僕の頭に現れた時、ある一つの反省が僕を押し止めましたよ……ほかではない、ちやうど君が今きいた事なのです、つまり自分に出来るだらうか、といふ疑ひなのです……たゞし、それがもつと深刻なのです。人生の巨大なのに對して、自己の矮小を意識する心が僕をさいなみ、束縛し、力を奪ひました！……僕は自分といふ人間が、暴風に運ばれてゐながら、それに對して叛逆を企てゝある、砂粒か何ぞのやうに思はれました。それは餘りに滑稽です——砂粒と暴風！……僕は自己の中に力を發見しなければならなくなりました。しつかりした據りどころを見つけて、自分の『われ』の偉大さを信じ、それを全宇宙に對立させなければならなくなつた！……宇宙といふか、世界的意志といふか、神といふか……まあ、何でも構ひません！……僕は長い間その力を發見することが出来ないで、おれは砂つ粒だ、それつきりだ、といふ意識に惱まされました。が、僕はそれにも拘らず、それは違ふ、

おれはつまらない人間ぢやなく、「我」なのだと感じました！……そのうちに、あるとき面白い思想を發見したのです！……」

クラウゼは眉を動かしたが、なんにも言はなかつた。

「今でも覚えてゐますが、丁度その前に、僕はこんな風に考へてゐたのです——勿論、現存せるすべてのものは、嚴密な不可分の關係を持つてゐる。なぜなれば、もしたゞの一箇所でも切れ目があると假定すると、それは既に空虚であるからして、その時は一切のものが崩壊して了ふ！……その時は一切がノンセンスになつて了ふ！けれどノンセンスなどはありません。なぜといつて、もし一切がノンセンスなら、その時はノンセンスなど全然なくなつて、再び調和が生ずる……つまり、宇宙一般のノンセンスの調和である！……従つて、すべては繋がり合つて、すべては相互關係になつてゐる。それゆゑ、一見して自由に見えるおれの魂も、おれの意志も、最も隱秘なおれの思想も、すべて一つの間斷なき鎖の一連環に過ぎない。こゝで與へられた衝動は、空間と時間の向かうのはじて反應を起さすべきだ。なぜといつて、一つ一つの連環はその兩側から、鎖の全體を引いてゐるから！……つまり、もし僕が呪ふとすれば、

その呪ひは取りも直さず、世界的必然から生じるのだし、祝福しても同じ事だ！……もし僕が自分の額へ彈丸を打ち込むとすれば、それは丁度、その時、その場所で、額に彈丸を打ち込まねばならぬ譯があつたのだ！……始めこの思想は、僕を絶望のどん底へ突き落として了ひました。なぜつて、神の奴隷といふよりも、寧ろ一種の超自然的な自働人形になつて了ふからです！……ところが、丁度そのとき僕の頭に例の面白い思想が浮かんで、すつかり僕を慰めてくれ、浮き立たせてくれたのです。ほかぢやありません、もしさうとすれば（と僕は考へました）、もう砂つ粒でもなければ暴風でもなく、結局おなじ事ではないか！おれも宇宙も、おれも神も、おれも永遠も、すべてお互に同等だ！なぜならば、もしおれが不可分の世界的必然の鎖の一連環に過ぎないとすれば、自然か神か知らないが、とにかく、さういふものがおれを創造せずにはゐられなかつたのだ！だつて、自然や神が過失や悪戯をした、などと假定する譯に行かないからね？ それでは餘りばかしく過ぎて、一切の尊敬といふものがなくなつて了ふ！……して見ると、おれは必要なのだ。して見ると、おれが宇宙なしで済まされないやうに、宇宙もやつぱりおれなしに済まされないの

だ。おれも、一切の祕密を藏した世界も、結局のところ等價なのだ！……そこには上もなければ下もなく、小さい物もなければ大きい物もなく、砂粒もなければ暴風もない！すべてはみな同等であつて、世界的法則もおれの痰唾も相等しい。なぜといつて、もしおれが唾を吐かずにゐられなかつたとしたら、世界的法則もおれの唾なしに濟まされなかつた譯だ！……え、どうです滑稽な思想でせう？」

ナウーモフは明らかに嘲笑の表情でかう聞いた。

「いや、君の説は少し牽強附會だけれど、しかしたいへん面白いですよ。」と、クラウゼは無關心な高慢らしい調子で言つた。

ナウーモフは笑ひ出した。

「いや、これはノンセンスですよ！……しかし何より一ばん恐ろしいのは、これが明らかにノンセンスでありながら、そのノンセンスを受け入れねばならないといふ事です！……一體これは何といふ事でせう——人間の論理が明瞭なノンセンスを受け入れねばならないなんて？……さうすれば論理もノンセンスだし、理智もノンセンスなのでせうか？」

「さうです。」と少尉補は答へた。

ナウーモフはちつと蠟燭の火を見つめながら、ちよつと

口を噤んだ。

「君は奇妙な人ですね、クラウゼ君！」まるで別な聲で、彼は思ひがけなくかう言つた。

クラウゼはちよつと身を動かして、眉を上げた。

「僕は君といふ人が分らない……君には何か一種特別なものがありますが、君は決してそれを口に出して言つてはないやうです！僕はね、クラウゼ君、君が非常に不仕合はせな人ぢやないかと思ふのです……たゞどういふ譯か合點が行かない。ちよつと見たところ、君は實に落ちついた、物ごとに拘らない人のやうですがね。」

「僕は大きな頭と小さな心を持つてゐるんです。」突然、クラウゼ少尉補がかう言つた。

「何ですつて？」ナウーモフはびつくりして問ひ返した。

「大きな頭と小さな心です。」丁度この驚くべき句を、もう一度聞いたがつてゐるナウーモフの希望を、お慈悲で叶へてやるぞといつたやうな、勿體ぶつた様子で、クラウゼは落ちつき拂つて繰り返した。「僕は始終さう思つてゐました、君は……たゞ僕は喋るのが嫌ひなので……君は餘り多く語り過ぎると思ひますよ！僕そんなに喋るのは面白くないです。僕もかつて同じやうに憎んだ事があるが、併し

「今ではどうだつて構はなくなりまして……ノンセンス？……構はないです。意味と美？……構はないです。何もかもあるがまゝに任せといたらいい……僕はどちらでも同じ事です！……けれど、かつて以前は、僕も人生のために非常に苦しんで、一切の苦しみはあまりに感じ易い人間の感情から起こるのだと決めました……どうも言ひ方が拙ちがいですがお分かりでせうね。そこで僕は、自分の内部にある一切の感情を枯死させて、すべての物に對する冷靜を養はうと決心したのです。かうして、僕は感情を滅して冷靜を育て始めました。始めのうちには中々むづかしくて、ちよつとの事に興奮してゐましたが……やがてそのうちに、一切無差別になつて了りましたよ。そして頭がだん／＼大きくなつて、心が小さくなつて來たのです……分かるでせう？今では頭が非常に大きくなつて、心がまるでなくなつて了りました。僕は何一つ感じないです……かうなつたら幾らかいゝだらうと思つてゐたが、結局どちらでも同じ事だと悟りました……たゞ空虚になつただけです、いや、以前よりもつと悪いくらゐるです——僕は死んで了つたと同時に、やはりまだ生きてゐる……ばか／＼しい話です！」

「ナウーモフは貪るやうな目で彼を眺めた。」

「君は本當にいつか自殺するつもりですか、クラウゼ君？」とつぜん彼は貪婪な表情を浮かべながらかう聞いた。  
「全くさうするかも知れません。」無關心な調子で、少尉は答へた。

ナウーモフは相手から目を放さないで、その顔面筋肉の運動を一つ一つ見守るやうに、ぢつと少尉補を見つめた。クラウゼはきつとその視線を不快に感じたのであらう、足を組み變へて、眞面目にナウーモフの顔を見据みまえた。一分間ばかり、彼は無言のまま肩を動かすのみであつたが、やがて思ひがけなく狡猾な、冷笑的なあるものが、ちらとその冷たい傲慢な顔を掠さらめた。

「ねえ、君。」恐ろしくゆつくりゆつくり言葉を切りながら、彼は言ひ出した。「君の思想はノンセンスです……そして、君も自分の思想を信じてゐません。君にはたゞ大きな自尊心があるだけです。君が世界を滅ぼさうとしてゐるのは、たゞこれまで誰ひとり考へた事もないのに、君が始めてそれを敢てしたからに過ぎません……」

ナウーモフの顔を一種の痙攣が掠さらめた。クラウゼは依然として落ちつき拂つて、語をついだ。

「君はまだかつて誰も考へなかつたことを、敢て考へたり



言つたりするのが面白いでせうが、それはたゞの言葉に過ぎないです！」

「君はさう思ひますか？」毒々しい皮肉を響かせながら、ナウーモフはかう訊ねた。

「僕はさう信じます……言葉だけですよ！……で……でもしそれを實際に施さうといふ段になつたら、君はきつとびつくりして、その思想を放棄するでせうよ。」

「君はさう思ひますか？」とナウーモフは目を細めながら、繰り返した。

「さうです……まあ、かりに僕が君に向かつて、わたしは自殺すべきものでせうかと聞いたら、一體君はどうします……今すぐ目の前で……」

ナウーモフは眉をしかめた。

彼はなんの事はない、たゞクラウゼがからかつてるやうな氣がしたので、煮えくり返るやうな憎悪の念が、心中に燃え上がった。

「僕が長い間しじゆう自殺の事ばかり考へて來たのは事實です。」とクラウゼは冷やかに語をついだ。「で、僕は君に一つ訊ねたいのです……實際、自殺した方がいゝでせうか？……君は僕に面と向かつて、それを言ひ切ることが出來ま

すか？……いま即座に！」

「出來ますよ！」とナウーモフは毒々しげに答へた。「それは立派な事です！」

「さうですか？……よろしい……」とクラウゼは言った。

「ぢや、僕は今すぐ……ちよつと待つて下さい……」

彼は靜かに落ちつき拂つて、ズボンの衣囊へ手を入れると、かた／＼の足をびんと伸ばして、黒い醜い拳銃を取り出した。ナウーモフはひん曲がつたやうな微笑を浮かべただけで、その場を動かうとしなかつた。これが眞面目な話しだとは、彼もまるで信じなかつたので、ばか／＼しい滑稽な立ち場に置かれたやうな氣がした。

「子供らしい悪戯ですよ、クラウゼ君！」と彼はわざとらしく落ちつき拂つて言った。

クラウゼは突然おそろしく眞つ蒼になつて、兩方の顴骨が鋭く突るほど、強く齒を食ひしぼつた。彼の落ちついた冷たい目の中には、突發的の眞剣な憤怒が輝いてゐた。

「僕は一度も冗談を言つた事はありません！」烈しい憎惡に充ちた目をナウーモフから放さないで、彼は食ひしぼつた齒の間から、しや嘎れた聲を出した。技師は少尉補が發狂したのではないかと思つた。

どつぜん彼は自分の全存在をもつて、クラウゼが巫山戯てるのではないといふ事を悟つた。ぞつと寒けが髪の毛を走つたが、彼は恐ろしい努力をもつて自己を制し、依然として不動の姿勢を保ちながら、うはべだけ平靜を装つた。

「そりやあ、もし君がさうしたいなら、やつたらいゝでせう。」と挑むやうに彼は言つた。

クラウゼは依然として不可解な憤怒をもつて、なほ一分間ばかり彼を見つめてゐた。二人はひたとまともに睨み合つてゐた。この二つの緊張した目が、恐ろしい力で溶け合つて、二人の體が頭から足の爪先まで慄へるほどであつた。けれど、突然クラウゼの目から光りが消えて、眉が下がつた。彼は痙攣的に拳銃を握つて差上げた手を落とし、椅子から立ち上がつて、くるりと壁の方へ向いて了つた。ナウーモフは依然として、眞つ蒼な顔をして慄へながら、鋭い目つきで相手の一舉一動を見守つてゐたが、やがて薄氣味の悪い笑ひ聲を立てた。

「さう、その方がいゝですよ」と彼は毒々しく言つた。「まあ、その拳銃を隠して、お寢なさい……もう遅いです！……いや、何でもするよりか言ふ方がやさしいからね！」クラウゼは返事をしないで、やはり壁に顔を向けて立つ

てゐた。

ナウーモフは依然として、毒々しげに唇を曲げながら待つてゐたが、クラウゼが自分の方へ注意を拂はないのを見ると、ちよつと肩を縮めて、外套を着はじめた。

「もう歸らなくちや。」と彼は言つた。「さよなら。」

ナウーモフは外套を纏ひ、帽子を被り、上靴を履いて戸口に近寄り、扉を開けた。けれど、戸の上で立ち止まつて振り返り、何か復讐でもするやうに、一語々々明瞭に罵りながら、恐ろしくゆつくり言ひ出した。

「ねえ、君、君の態度は、或ひは尤も千萬かも知れないけれど、しかし君はどうせ自殺しますよ！……自殺します！……ねえ、お聞きなさい！ 晩かれ早かれ、きつと自殺します……君はさういふ顔つきをしてる！ さよなら！……おやすみ。」

クラウゼは微かに身動きしたが、返事をしなかつた。ナウーモフは愉快らしい、勝ち誇つたやうな高笑ひをして、うしろ手に戸をしめた。

從卒が彼を支關口へ送り出す物音が聞こえた。新鮮な空氣が、彼のやうに部屋を流れ、蠟燭は一際あかるく燃え立つて、火先がちら／＼と動いたが、また死んだやうに黄色

い舌を上へ伸ばした。

## 七

ナウーモフが支關の石段をおりるや否や、依然として荒れ立ち騒ぐ黒い夜が、彼を迎へて抱き包んだ。

風はもの狂はしくあたりを飛びめぐつて、目に見えぬ雨粒を顔へ打ちつけた。ナウーモフはさぐり足で石段をおりると、闇の中をどん／＼歩き出した。氣ちがひのやうに頭を振り立ててゐる、木立ちのぼんやりした影法師のほか、何一つあたりのものが目に入らなかつた。

彼の前には依然として眉の吊り上がつた、長い白い顔が立ち塞がつてゐた。

「ばか」譯の分からぬ憤懣を抱きながら、ナウーモフはかう考へた。

彼の足はひとりでに泥の中をぐしや／＼歩いた。風は四方八方から襲ひかゝつたけれど、ナウーモフは何一つ氣がつかなかつた。頭は燃え、心臓は不安げに鼓動した。彼は今すこしも信じて疑はなかつた。クラウゼはあの瞬間、ふざけてゐるのか眞面目なのか、自分でもはつきりしなかつたに相違ない。それは人間の生命のかゝつてゐる、たゞ一筋

の髪の毛であつた。ちよつとでも何か拙い事を言つたりしたりしたら……例へばナウーモフが本氣になつて、拳銃を携ぎ取らうと飛びかゝつたら、その髪の毛はぶつりと切れて、クラウゼは火蓋を切つたに相違ない。それにしても、とにかくクラウゼは自殺する、今夜にも自殺するかも知れないといふ事が、一そうはつきりして來たのである。

「あの男には全く死の極印が捺してある……生まれながらの自殺者だ……大きな頭に小さな心か！ 事によつたら、小さな頭に、大き過ぎる心かも知れないぞ！」とナウーモフは考へて、闇の中で毒々しくにやりと笑つた。

彼は復讐的な憎惡に充ちた心持ちで、クラウゼの事を考へてゐるのも、あのばかげた騎兵少尉補が今夜にも本當に自殺すればいゝと念じてゐるのも、自分で氣がついてゐた。クラウゼは帷の一端をかゝげた。その帷の蔭には、ナウーモフ自身の魂が藏されてゐて、ナウーモフもその帷を上げる氣力がないのだ——それは彼にも分かり過ぎるほど分かつてゐた。さうだ、それは全くその通りなのだ！……彼の内部には二人の人間が潜んでゐた。一人は狂信者のやうな執拗さで自分の思想を信じ、滅亡と死を欲してゐるし、いま一人は死を恐れて、憤怒の餘り息をつまらせながら、す

べてのものに自分自身の臆病と、絶望の復讐をしてゐる。今も事によつたら、丁度この瞬間に、あのばか／＼しい騎兵少尉補が、拳銃をこめかみへ當てるかも知れないと考へると、彼はもと来た方へ駈け出さないばかりだつた。

けれど、それはほんの一瞬間であつた。次ぎの瞬間、ナウーモフは外套の襟を高く立てて、帽子を目深に被り、すたくと先の方へ歩き出した。

彼はたゞ一つの事のみ心に念じてゐた。ほかでもない、自分の思想と権力がほんの少しでも、勝利を得るといふ事だつた。もし出来る事なら、彼は自分からクラウゼの手へ、拳銃を押し込んだに違ひない。騎兵少尉補は彼の氣ちがひじみた思想と、限らない自爲心の最初の犠牲なのである。クラウゼが死ぬる。しかもその原因は自分だと思ふと、漠然たる勝利感がナウーモフの胸中に持ち上がった。彼はもう目の前に、世界ぢうの人間を見るやうな氣がした。その幾千萬の人々は、自分たちの間にどんな人間が生まれ出て、目にこそ入らね恐ろしい形相で、この闇の中を測歩してゐるか知らないのだ。不しあはせな愚かしい生きもの！ ナウーモフは自分がまるで黒い影のやうに、眠れる地上にぐんぐ伸びて行くやうな氣がした。ときどき自己の偉大

を感ずる心持ちが、惱ましいほどいき／＼として来た。それに誇らしい憤りの念も伴なつて、息が窒るやうな氣がした。彼は闇の中を見透かした。と、その中に誰かの和やかな神々しい顔が、宙にかゝつてゐるやうに思はれた。彼はその前に挑戦と冷笑をもつて立ち塞がった。

「本當にお前はおれより強いのか？」彼はびくともせず、毒々しく冷笑しながらかう聞いた。そして、神を信じない癖に、神と語つてゐる奇怪さを、自分でも意識した。

まるでどこか高い所から見おろしたやうに、彼は夜の闇の中で、人間どもがう／＼ひしめいてゐるのを見た——偉大な智者はちつと坐つて瞑想してゐるし、美女は新しい生を受胎する甘い悦びに、男に……してゐるし、數十億の逞ましい手は、未來の幸福のために働いてゐるし、そのほか天才的な書物が著はされたり、彫像や建築物が作り出されたりしてゐる……血をもつて塗られた人生の車は、呻き軋みながら、全速力で地球の周圍を廻轉してゐる……人生は煮えくり返つてゐるやうだ、否、將來も依然として煮えくり返つてゐるだらう……けれど、その中に誰かしら闇を行く者がある。それは彼である。たゞひとり人生に叛逆を企てたナウーモフである！ 彼は自分の偉大な恐ろしい

思想を抱いて進んでゐるのだ。そしてもう決して死ぬる事はない——死などといふ事はあり得ないのだ！……もしこの男の心中に、どういふ考へが蠢めいてゐるか知つたなら、さぞ恐ろしい叫喚の聲を上げて、美しい婦人たちが四方へ逃げ散る事だらう！ さぞ烈しい驚きに打たれて、賢人たちが両手を拍つ事だらう！ そしてみんなが慌てて彼に飛びかゝり、痕かたも残らぬやうに、彼を葬つて了ふことだらう！

「ばかものめらー」とナウーモフは毒々しく考へた。「あいつらはおれの言葉を聞いても到底わかりつこないだらう！……まるで、何か奇怪な、世迷ひごとでなければ、誇大妄想狂か何ぞのやうに考へて、研究したり、攻撃したりした擧げ句、冷笑で葬つて了ふに相違ない……ところが、彼等は自分でもそれと知らずに、おれの思想を未來へ運んで行くのだ。そして、いつかその思想が着袷めた馬のやうに、物凄く不吉な姿を背いつばいに伸ばして、ぬつと立ち上がる時が来るに相違ない！」

闇は彼の前にあつた。彼の奔放な思想は、世紀から世紀の頭上を躍り越えながら、暗い未來まで飛んで行く……その霧のやうに茫漠たる世界には、もの狂はしい人間の顔や、

高く差し上げた手のうよ／＼してゐる模糊たる血と涙の海が、彼の心の目に映つた。この茫漠たる海の上には、空しい争鬪に疲憊し盡くした世界に救ひを齎らす、大豫言者の悲壯な姿が龍巻きのやうに聳えてゐる！……つまり、それが彼ナウーモフなのである！

それは殆ど狂氣に近かつた。もしこのとき誰か夜の闇の中に、ナウーモフの顔を見る者があつたら、恐怖の餘り彼の傍から飛びのいたらう。それほどもの狂はしい歡喜と、狂人めいた誇と、動かすべからざる決心と憎惡とが、ひん曲がつた微笑に齒を剃き出した、蒼白い假面を持つた狂信者の目に輝いてゐるのであつた。

廊下で石油ラムプがいぶつて、支關番の居眠りをしてゐる、安つばい、とはいへ町ぢうで一番の宿屋の一室へ歸ると、ナウーモフは蠟燭をつけて卓に向かひ、何やら書き始めた。

## 八

ナウーモフの出た後で、戸がぱたんと閉まり、從卒が重い靴の音をさせながら、自分の小部屋へ入るまで、クラウゼはちつと身動きもせず立つてゐるが、やがて靜かに部

屋の中を見廻した。この顔も臆病な人間を驚かすに充分だつた。それはまるでポールド紙で拵へたやうな、長い眞つ白い假面で、その上には吊り上がつた眉が貼り付けられ、その切れ目からは誰かの生きた目が覗いて、恐ろしいほど緊張した表情で部屋を見廻してゐるのであつた。

それはまるで誰かクラウゼ少尉補の假面を被つたよその者が、そつと彼の不思議な居間へ入つて来たやうであつた。そこにはげばくしい華やかな絨毯や、輝かしい武器などが壁にかゝり、ギオロンセロが神祕めかしく片隅に頸を覗け、かるた机の上には、たつた今ひと勝負やつたやうに、蠟燭が二本立つてゐる……そこへ主の留守にそつと入つて来て、何かよからぬ事を企らむやうに、しづかに言葉もなく、一生懸命に一つ一つの細部を研究してゐるのだ。

ひよろ長いばかげた少尉補の姿は、部屋の中を動き廻つてゐた。あたりはしんとしてゐる。恐ろしいほどしんとしてゐる。まるで深い沈黙と、夜と、惱ましいほど單調な窓外の雨の音と、絶對の孤獨の中で、何かしら奇怪な、息つまるやうな儀式が行なはれてゐるやうだつた。

クラウゼは何かしきりに置き變へながら、壁の上の影法師に送られつつ、音もなくあちこち動き廻つてゐた——影

は彼の一舉一動を見守りながら、一々おなじ事を繰り返すのであつた。

どこかに多くの人達が生きてゐて、話しをしたり、歌つたり、互のいき／＼した顔を見合つたりしてゐるに相違ない。ところが、こゝではクラウゼ少尉補が、まるで自分の魂の底へ沈潜したやうに、全くの一人ぼつちで、深い沈黙の中に何やら考へてゐる。

この瞬間、彼の事を考へてゐる人間は、世界ちうに一人もなかつたが、彼はすべての人の事を考へてゐたのである。ちやうど眞理を發見するために、解剖物體を切り開きながら、ある大實驗を行なはうとでもするやうに、冷ややかな慘忍な心持ちで、クラウゼは一人々々の人間を思ひ起こし、ぢつとその顔に見入つては、すぐ冷やかに忘れ去るのであつた。その中には、彼の心に一點の光明さへ呼び醒ますやうなものがなかつた。彼の心はまるで氷の墓場のやうに、空漠として冷え切つてゐた。

この時クラウゼ少尉補は、本當に自分の心が小さくて、頭のみ恐ろしく大きいやうな幻像を、まぎ／＼と胸に描いてゐた。その頭の大きな事と言つたら、部屋いっぱいに擴がつて彼の心も、壁も、天井もぐん／＼押しつけながら、

蠟燭を消して了つて、部屋の圍とりひから外へ溢れ出すほどだつた……かうして夜の暗闇の中で、内なる光りに燃えながら、この妖怪めいた頭が、がらんとした黒い地上に立つてゐる——立つてちつと見つめてゐるのだ。

一切のものを見透みかすやうな、恐ろしい死んだ目は徐ろに廻轉した。そして、この目に見られたものは悉く死滅して、灰のやうに飛び散るのであつた。

この世界には、たゞクラウゼ少尉補の巨大な頭のみが存在して、そのほかには何も無いといふ事が、次第に明瞭になつて來た。彼がちよつと目を閉ぢると、すぐ一切のものが消え失せる。この奇怪な悪夢は二三分つゞいた。クラウゼは部屋の眞ん中に立つて、押し黙つてゐたが、やがて再びしづかに身じろぎした。

雨はまた烈しく窓外で音を立て始めた。少尉はセロを取つて部屋の眞ん中へ椅子を持ち出し、その上に腰を掛けて弾きだした。セロは長いあひだ穩かな莊重な聲で、奇妙な歌を續けた。勝手の方では從卒が目を醒まして、また少尉殿が氣まぐれを起こしたな、と思つた。雨はざあ／＼降り續けた。まるで果てしが無いかと思はれる、絶え間なき葉摺れのやうな雨の音と、穩かに莊重なセロの聲の間には、何

か共通な所があるやうに感じられた。

クラウゼは、自分だけに見えるやうな氣のする、一つの點から目を放さずに、ちつと片隅を見つめてゐた。吊り上がつた肩は少しも動かず、長い顔は面のやうに固定して、魂はまるで空なのであつた。彼の顔がこんな固定して、目が凝結したやうになつたのは、もう一つ同じやうに不可解な固定した顔——死の顔が——片隅から彼を見据えてゐるからだ、といふやうな氣もするのであつた。

セロは歌ひ雨は騒いで、二つの聲は胸を引き締めるやうな、息苦しいメロディに溶け合つてゐた。この莊重な二つの空虚の聲のために、何となく恐ろしくなるのであつた。

セロは鳴りやんだ。クラウゼはすぐ立ち上がつて、几帳面に樂器を片隅へ立て掛けた。それから卓の上にある二本の蠟燭を消して、寢室の寢臺ベッのそばへ一本ともした。黒い影はそつと忍び足で彼の後から、暗い部屋を出て寢室へ入り、彼のうしろの寢臺に坐つた。クラウゼは著替へを始めた。

長靴を脱いでから、彼は暫くちつと坐つたまゝ、小さな蠟燭の火を見つめてゐた。黄色い焰はちつと穩かに明るく燃えてゐたが、急にゆらく揺られてにじみ始め、橙オレンジ色をし

た輝かしい一つの環になつた……クラウゼは片隅の釘にかかつてゐる、長い灰色の外套へ靜かに目を移した。空しい灰色の外套は、ちつと動かずにぶら下がつてゐた。けれど彼の視覚が集中されるや否や、この長い灰色の一本物はゆるゆる揺れて……伸びたり縮んだりし始めた……クラウゼは顔をそむけて横になつた。一分間ほどちつと横に臥たたまふ、何か合點が行かないといつたやうな表情で、靜かに肩を動かしてゐたが、やがて蠟燭を消した。

と、その瞬間、闇が襲ひかゝつて、眉の吊り上がつた長い顔も隠れて了へば、一切のものが彼の目から隠れて了つた。雨のざあ／＼降る音を、闇の中で聞くのは恐ろしかつた。まるで雨が不意に窓の傍へ近寄つて、墓場から發する驟きの聲を、耳へ吹き込んでゐるやうだつた。息づまるやうな影は部屋の中を徘徊してゐたが、それはすべて死のやうな影だつた……彼等は闇の中を心配さうに、忙しげに歩き廻つて、何かしたり、集まつたり、別れたり、クラウゼの傍へ近寄つて屈み込んだり、また離れたりするるのであつた。クラウゼの所から見える三方の隅には、天井まで届きさうな高い黒い影が、ちつと立つてゐた。

大きく開いてはゐるけれど、何も見えぬクラウゼの目の

前には、見覚えのある幾つかの顔が、黒い霧の中をふはふは泳ぎ廻つてゐた。彼は注意ぶかく眞面目に見入り始めた。さうだ、彼らはすべて存在してゐる——生きて苦しんだり、悦んだりしてゐる。彼らは生活する人間だ！ が、一たい生活する人間とは何を意味するのか？……彼らは自分が太陽を見たり、その明るい慈光を感じたりしてると信じてゐるのだ。思索したり、互に愛し合つたり、大小無数の事業をしたりしてゐるやうに、思ひ込んでゐるのだ……しかし、それはすべて彼らが時の中に閉ぢ籠められて、時といふものをほかにしては、考へることも感じることも出来ないからである。彼らは空虚であり暗黒であるところの、永遠を理解することが出来ないのだ！ 時は單に彼らの心臓の鼓動であつて、もし心臓を沈黙せしめたならば、忽ち時も消滅して、永遠が到來し、それと共に、絶對の空虚が宇宙を領するのだ。もし時がなかつたら、何もものもなくなつて了ふのだ！……

現に今クラウゼ少尉補の前には、明るい點がちら／＼したり、何かの影が動いたり、誰かが部屋の隅々に立つてゐたりするけれど……しかしそんな物はまるでないのだ！ そんな謎のやうな存在は、この世界に住んでゐない。それ



はただ網膜の閃きに過ぎない。また今も何かしら妙な物音や、ひそ／＼といふ囁きや、果てしのない惱ましいメロヂイとなつて尾を曳く、長いもの悲しい響きなどが聞こえる……けれど、そんな物音など全然ありはしない。それらはたゞクラウゼ少尉補の鼓膜の神経が、慄へてゐるに過ぎないのである。が、事によつたらその正反對で、宇宙は絶え間のない恐ろしい響きの旋風に充ち、無数の暗い巨大な遊星が人間の知らぬ力で、ひう／＼唸りを立てながら、空間を切つて疾走してゐるのだが、クラウゼ少尉補の耳は、一定の振動数より以上に受け入れることが出来ないために、それらの音響を永久に聞き得ないのかも知れぬ……彼の心臓は鼓動してゐる、これが即ち時である。肉體組織は動脈の鼓動で時を量つてゐる……従つて、それは止めることが出来る。

「おれはもうこの事を考へたのだ！」

クラウゼ少尉補は惱ましげに身を動かした。

あゝさうだ……そこにクラウゼ少尉補の大きな頭が立つてゐる。その中に理性——彼の理性が生きて苦しんでゐる……この理性の中に、彼の不幸と彼の苦悶が含まれてゐるのだ！……もし理性を奪ひ去つたら、クラウゼは世界から

脱離してつて、彼ひとりしか見えもせず理解も出来ぬ、奇怪な幻のやうな小世界へ去る事になる。そして、宇宙はその大をもつてしても、なほかつ彼の注意を惹くことが出来ないのだ。しかし、クラウゼの理性はたゞ彼のみの理性である！……これはたゞ彼のみの脳髓の細胞組織である！もし偶然たつた一つの細胞が、破壊せられるか、保存されるか、それとも單に發育が不全であつたとすれば、もうそれは別の理性である！……そして、全世界はまるで別なものに映じるに相違ない！……賢者、愚者、健者、狂者の境界は消滅して、彼クラウゼは事によつたら、人間の中で一ばん賢い者であるかも知れず、また一ばん愚かな者であるかも知れないのだ、それは誰も知つた者がない。なぜなれば、それさへも無だからである。理智もなければ痴愚もなく、たゞ脳髓の組織があるのみで、それは所有者に取つて法則なのだ。もし全世界の者が某々の倫理を根據として、クラウゼは白痴であると言つたら、クラウゼはかう答へることが出来る——「それはたゞ諸君の脳髓細胞が、僕のと同じやうに組み立てられてゐないからだ……諸君に取つては、きちんと巧く諸君の細胞へ納まるものが、合理的に思はれるけれど、僕の脳髓にあつて諸君にない一細胞が、重

大なものではないとは、誰が言ひ得よう？……或ひは、その中にこそ眞理が含まれてるかも知れないぢやないか！さうすれば諸君の倫理も、諸君の整つた推理歸納の系統も、僕の無智に關する一切の證明も、單に諸君の脳髓細胞へびつたりと納まるがためのみに、論駁の餘地のない堂々たるものと思はれるに過ぎないので、その實、諸君の細胞の中には一つ餘分なものがあるか、一つ必要なものが足りないかだ！で、人が諸君に賛成して、クラウゼを白痴と呼ぶとすれば、それは諸君の論理が本質的に難攻不落だからでなく、たゞ諸君の意見を聽く人々の脳髓細胞が、諸君の持つてゐるのと同じであつて、諸君の論理がきちんとそれに嵌まるからだ。その時は諸君の理性もありやしない！それはナウイモフの言つたやうにノンセンスだ……もしこの假定をちよつとでも、ほんの一秒間でも許容すれば、もう一切は塵埃のごとく飛散して了ふ。なぜなれば、疑問を容れ得る事物は、既に眞理でないからである！これは單なる問ひであるが、しかし誰に答へを求めようとするか？……」

クラウゼは再び身じろぎした。彼の思想は頭の中で、もの狂はしい速力で廻轉した。何だかそれはもう脳髓ではなくて、赤熱して廻轉する玉のやうな氣がした。

またもや闇の中から、見覚えのある幾つかの顔が浮き出した。クラウゼ少尉補は冷ややかに怒りもなく、ちつとそれに見入るのであつた。

彼等は生きてゐるやうに思つてゐるけれど、實際はぜんぜん存在しないのである。永遠は測度など持つてゐない、たゞ測定されるものがあるばかりだ。永遠と無限は時や空間さへも侵蝕し、埋滅して了ふのだ……この黒い穴の中には何もものもない……たゞ恐ろしい謎があるだけだが、それは決して人間に知れる時が來ない。なぜといつて、彼らが見たり、聞いたり、考へたり、感じたりする事は、すべて實際に存在するのではなくて、たゞものを攝取し消化する、彼らの内部諸機關の産物に過ぎない。従つて、この内部機關の數に比例して、物の可能性も存在する譯である……

……犬は全然ちがつた内部機關を持つてゐるので、全世界が彼の目にはまるで別なものに映る……或ひは木立ちが薔薇色に見え、音響は駢け廻る獨樂のやうに思はれるかも知れない。永遠と無限のほか何ものもない、そしてその中には、人間の占め得る一定の場所がないのだ。

だからなんにも惜しくない、なんにもいらぬ。太陽も、愛も、人間も、理智も、生命も……これらはすべて自我で

あつて、自我とともに變化し、出現し、消滅するのである……世界の運命を思うて苦しむ必要もなければ、それを守護する必要もなく、またそれを破壊する事もいらぬ……破壊するものも建設するものも、たゞ自分の世界を破壊したり、建設したりすることが出来るのみで、本當の世界——量り知れぬほど大きい、永遠にして無限な世界は、彼らの外にあるのだ！……

人間？ 人類？……それが一體なんだといふのだ！

いま彼のかたはらを憎い人、いとしい人の幻が通り過ぎる……けれど、今クラウゼ少尉補はそれらの人々に、憎みも愛も感じてゐない……あゝ、あれはかつて世界ぢうの何より戀ひしいと思つた娘で、その人こひしさのために、彼の心は千々に碎けたものである……彼は戀ひの惱みに息を切らしながら、春の死で彼女を待ちこがれたり、彼女の着物の襜の一つ／＼に純潔と美を認めたり、彼女の體と心の一舉一動に、涙の出るほど感動したものである……けれど彼女が死んで了つて、愛は痕かたもなく消えて了つた。彼女は新しい太陽を創造もせず、この世界を照らしもせず、生き長らへもしなかつたのである……彼女の痕跡は細い病的な線となつてクラウゼ少尉補の心に残つてゐるのみであ

る……戀ひなどが何にならう？ 戀ひの前には歡喜がなければならぬ。けれども一人の男の心に残つてゐる、づきづきと疼くさゝやかな傷が、どうして歡喜など呼び起こすことが出来るよう！……

嘗てクラウゼ少尉補の憎んでゐた人々があつた。けれど、彼らはどこかへ姿を見失つて、憎悪は空しく溶けて了つた……單に忘れて了ひさへすれば充分なのに、強ひて骨折つて憎んだり、苦しんだりする必要がどこにあらう！

死！……今度は闇の中から、黒い棺がしづ／＼と浮き出して來た……假りにこれをクラウゼ少尉補の棺としよう。彼は餘りに大きな頭と、餘りに小さな心を持つてゐたために、拳銃自殺をしたのである。

棺臺からは黒い羽がふ／＼と飄つて、棺は靜かに動いて行き、隊伍たゞしい騎兵中隊は憂々の音を立て、嘯々たる喇叭はきら／＼と輝いてゐる……葬送の曲は悲しく莊重に響いて、人々は悲しげな顔をして進んで行く……やがて穴が掘られて棺は見えなくなつて了ふ。そして、丁度アルブゾフに殺された、アウグストフ副官の葬式の時のやうに（この葬式はクラウゼ少尉補がさし圖したのだ）、墓場の圍ひの外で告別の一撃射撃が、かさ／＼したそつけない爆

音を立てるのだ。

クラウゼはげんざうに眉を動かした。

かうしてクラウゼ少尉補は死んで行く。もう永久に太陽を見る事もなければ、生きた人間の聲を聞くこともなく、人がどんなに自分を哀悼してくれるか、それを知りことも出来ないのである……しかし、自分で自分が痛ましいだらうか？ 否である。

太陽？……彼クラウゼ少尉補は、二十七年間この太陽を眺めて来たので、もうあき／＼して了つた。人生？……人生は彼に多くの苦痛を齎らしたばかりで、その苦痛がやんだ時には、空虚と無意義に變じて了つた。人間？……彼らはクラウゼ少尉補と違つた脳細胞を持つてゐたために、彼らの方でも彼を理解しなかつたし、彼もまた彼らを理解しなかつた……彼らは愛に於いても、理智に於いても、感情に於いても、苦しみに於いても、たゞ／＼互に理解しようとのみ努めて来た、つまりそれが人生の全部なのである……彼らは何ものも彼に與へなければ、説明もしてくれず、苦悶と疑惑の中にあつても、彼を維持してくれなかつた……死ぬるのにも、彼は一人で死ななければならぬのだ。彼の頭を射ち抜くべき丸は、彼らの頭に觸れずに終るのだ

……彼の細胞は破壊されても、彼らのは無事に残るだらう……彼は孤獨に生き、孤獨に死んで行くのだ。

死んで行く？……さうだ。苦痛はないけれど、一切が無意味である。新しい日を始めるのも無意味なら、着替へをするのも無意味だし、飲んだり喰べたりするのも無意味、話しをするのも無意味、考へるのも無意味である……何もかも厭になつたといふより、たゞ言葉どほり無意味なのである。

いまに黒い小窓がしまつて、遂に闇が襲つて来るのだ。一體クラウゼ少尉補の手に拳銃があることを、誰か知つたものがゐるだらうか？……この闇の中では彼自身さへ、一たい自分といふものはゐるのだらうか、それとも結局のないのだらうか、まるで譯が分らないのであつた。

何か冷たい物が彼のこめかみに觸つた。クラウゼの記憶は黒い銃口を心に描いた……そして鋼の重みのもとに、薄い皮膚の収縮するのを感じられた。もう一擧手の後にはもう……

巨大な手に似た恐ろしい暗い影が、想像も出来ないほどの早さで闇の中を走り、クラウゼ少尉補の上で止まつた。恐ろしい妖怪めいた、鉤のやうに曲がつた指が持ち上がった

て、ちつと待ち設けてゐる……小つぼけなクラウゼは、玩具のやうな拳銃ピストルを手にしながら、小つぼけなこめかみへ銃口を押し當ててゐる。と、その上には全世界を握りしめるやうな、巨大な手がのしかゝつて、殺氣だつた貪婪な慾念に、黒い指をひん曲げてゐるではないか……暗黒と寒氣はどこか下の方から昇つて来て、彼を世界から隔離し、まはり空虛と恐怖に充たされて了つた……今にすぐ彼は姿を消して、この暗黒と空虛の中に溶けて了ふのだ。さうして本當にもう……あゝ、これがさうだ……これが死なのだ！

……  
「お！お！」クラウゼ少尉補はけたたましい、魂たまぎるやうな聲でかう叫んだ。

重い兵隊靴をばた／＼いはせ、蠟燭を手にして 黄色い光りのしみを壁に揺らめかし、まるで臆病な刺客の群れのやうに、あわてふためいて隅々へ逃げまどふ、醜い影を追ひ散らしながら、従卒が臺所から駆けつけた。

「少尉補殿！」

氣ちがひめいた顔に目を剥き出し、はずかひに眉を吊り上げた、部屋着一枚きりのひよろ長いクラウゼは、部屋のまん中に突つ立つて、お人よしの兵卒の慥まごえたやうな顔を

見つめてゐた。

「少尉補殿！……もし、少尉補……」

少尉補は無言のまゝ、恰も不可思議な憎惡をもちつて、相手の眞相を見分けようとするかの如く、執拗に従卒の目をひたと見つめた。彼の手には拳銃ピストルがあつた。そして、この手はまるで痙攣でも起こしたやうに、どこか上の方へ引つ吊つてゐた。暫く二人は互に睨み合つてゐた。蠟燭は従卒の手の中で慄へて、黄色い光りは陰氣らしく隅から隅へと飛び交つてゐた。とつぜん従卒は怵へ切れなくなつて、あつと叫んで踵を轉じ、そのまゝ一散に逃げ出して了つた。

少尉補殿が後を追つ掛けてゐるやうな氣がした。鈍い奇怪な恐怖が彼の暗い頭腦を充たした。この瞬間、彼はふとこんな氣がした——あれは少尉補殿ではなくて、何かしら恐ろしい不思議なものだ……悪魔なのだ！……

書齋で彼は卓にぶつ突かつて、いきなりそれにしがみ付きながら、危く蠟燭を取り落としさうにしながら、大聲でかう喚わめいた。

「あゝ、大變だ！ なんちふこつちや！……助けてくれえ！……」

けれども、寢室の戸口から、クラウゼ少尉補の物々しい、

高慢げな姿が現れた。部屋着一枚しか身につけてゐないその姿は、滑稽に感ぜられた。彼は冷ややかに従卒を見やつて、げんざうに眉を動かした。

「ひとつ着替へをさしてくれ。」と彼は落ちつき拂つて言つた。

そとはもう白み始めた。鎧戸の隙間から秋の騎が、細い縞めをなして覗いてゐた。

## 九

野、寒さ、灰色の光り。

雨はやんだが、高い白い密雲が、重々しく冷ややかな濕氣を放散してゐた。今にもすぐさまと降り出して、野は再び灰色に慄へる薄絹に閉ざされ、終日くらい長い夜へかけて、果てしもなく降り續くだらう、といふやうな氣がした。野の中はすべてがらんとして、誰にも見えない、また誰にも必要のない雨が、静かな囁きを立てながら、降つて降つて降りぬく事だらう。

はてしのない白い空のもと、目も及ばぬほど広い灰色の野の中に、小つぽけな淋しさうな兵士らが、奇妙な塊りとなつたり、不揃ひな線を描いたりして並らんでゐた。遠く

前方には小さな圓い標的が、色さまざまに入り交じつて、小さな黄色い火が、乾いた爆音を立てながら、ぱつと一瞬間ひらめいては、散兵線の端から端へ走つてゐる。乾かされたやうな發射の音が木精を返しながらか、引き千切つたやうにぱち／＼鳴ると、丸は短い歌ふやうな唸り聲を立てて、遠い標的へ當たるのであつた。時とすると、喇叭が簡單にもうげに、射ち方やめの合ひ圖を吹くと、遙かな土手の上に、小つぽけな信號兵が現れて、赤い旗で挨拶しながら、命申した丸の數を知らせた。

灰色をしたひよる長いクラウゼ少尉補は騎兵外套の裾に足を絡ませながら、濕つぽい原なかを眞つすぐにとん／＼歩いてゐた。そして、ところ／＼銀色の交じつた灰色の士官姿は、果てしもない風立つた野の中で、奇妙にくつきり浮き出しながらか、ふら／＼と動いてゐた。冷たい秋の風は外套の裾を吹いて、耳の中でざわ／＼鳴つた。

クラウゼはちつと目の前を見つめながら、なにか發見しようとするが、それが出来ないといふやうな表情で、げんざうに細い眉を動かしてゐた。

彼は射的場から遠く離れて了つたので、こゝからは兵士らの顔を見分けることが出来なかつた。彼らの馬はどうい

ふ譯か、このがらんとした原なかに並らべられた、玩具の馬のやうに思はれた。トレニョーフが(將校の外套でそれと見分けられた)、頻りに火花を立てる散兵線を、忙しさうに行つたり來たりしてゐた。信號兵は小さな赤い點のやうにちら／＼して、その先にはやつと見えるか見えないくらゐに、淋しげな哨兵が馬に乗つて立つてゐた。

昨夜の心持ちはまだクラウゼの頭にこびり付いてゐた。

最後まで押しつめて行つた思想——もう絶対に反駁の餘地がないやうに感じられた思想が、最後の一瞬間に意久地なく尻ごみしたかと思ふと、恐ろしくなるのであつた。生は無意味であり、死も恐ろしくない。しかも、引き金を引く時と、終焉の時の間に生ずる、一秒の百分の一ほどの時間が、たうてい征服し難いことが分かつたのである。動物的の恐怖が何より強い——といふ事が明かになつた。一切のものがボール紙の家のやうに崩れて了つた……彼は臆ぢ氣づいたのだ！

冷ややかな目は明瞭にしつかりと物を眺め、頭腦は攪みなく働き、意力はたゞ一つの方向をさして突進してゐたが、殆ど目に入らないくらゐの最後の、一線を、踏み越えるだけの力がなかつたのである。

して見ると、つまりあの論理の中には、何かの誤謬があつたのだ。つまり人生は貴重なものだつたのである……明らかに無意味に充ちた、空虚な、何の必要もない人生は、自分の内なる『我』より貴重だつたのである。かうして『我』は意久地なく屈伏して、臆病げに悲鳴を上げながら、自身自身の呪詛したこの人生に、一生懸命しがみ付いたのだ！

けれど、これが單に忌はしい、動物的な臆病心に過ぎないといふのは、到底あり得ない事である……して見れば、死の必然性に對する眞の信仰がなかつたのだ……さうだ、一切の事を始めから考へ直して、自分がうつつかり見のがした、極めて微細な、とはいへ、一ばん重大なある物を見つけてなくてはならない。

クラウゼは長い足を擡げながら、疾うに刈り取られて腐り始めた草の株を踏んで、濕つてぐちや／＼する原なかを歩いて行つた。風は歩みを妨げて、外套は足に絡みつき、耳の中ではどこかへ疾走する不安げな空氣が、ごう／＼鳴るのであつた。まるで曠原の眞ん中に投げ棄てられた、誰かの墓場のやうな小さい粘土の丘の上に、だいぶ前に火を焚いたらしい、黒く焦げた痕があつた。半ば焼けた棒切れや雜草の莖は、灰で鼠色になつた一方の端を丙がはへ向け

ながら、正しい圓を作つて横たはつてゐる。クラウゼは立ち止まつて、眞面目に注意ぶかくその場所を見つめてゐたが、やがて機械的に、靴の尖で残つた燃料を掻き集め、ささやかな薪の山を拵へて火をつけた。

乾いた紙は樂しげにばつと燃え上がつて、麥藁はばちばちと鳴り、濕つた棒きれはぶす／＼煙り出した。ちよつと一瞬間、火は消えたかと思はれたが、やがて下の方から、貪婪で残忍な火が、太い棒の周りに絡みついて、狡猾さうにちら／＼し始めた。時には臥たり、時には起きたり、黄色い焰の蛇や灰色の煙を吐き出したり、風の近づく度に、臆病らしく地にびつたり伏せつたりしながら、焚き火は遂に燃えついた。

長い足を廣く踏み擴げて、クラウゼはその傍に立ち、注意ぶかく眺めてゐた。

貪婪で残忍な火は、狡猾さうにちよろ／＼蠕つてゐる……そして、焰に食はれる枝は身をもがいてゐる……一たい火はそれを焼く必要があるのだらうか、ないのだらうか？それはある。なぜと言つて、その中に火の生命があるからだ。一たい火はどこからやつて來たのだらう？……枝は痛い……そして枝が燃えて了へば、火も死んで了ふのだ。な

ぜそんなに急ぐのだらう？ それより仕方がないのだ。なぜといつて、自然の法則が火をそんなものとして生み出したから……火は生を持つた残忍なものだ。彼は何がどうならうと構はない——たゞ食べるものさへやれば、すべてを呑み盡くす恐ろしい焰となつて、地球全體を焼き滅ぼすことさへ出來るのだ……さうだ、焼き滅ぼすことが出來る。けれど、決して最後の勝利を獲得することはない。なぜといつて、最後の木ぎれが燃え盡くしたその瞬間に、火も一緒に死んで了ふからである……征服しながら滅びるのだ！燃えて了へば、跡に空な場所が残るばかりだ……つまりほかのものなしに、一人で別に存在することが出來ないのだ。どうしても離れることが出來ないのだ。生と死も別々に存在することが出來ない……死は征服する、が、征服した後、自分でも消滅して了ふ。なぜなれば、死の恐怖はたゞ生の存する間ばかりだから！

「そりや勿論だ！」クラウゼは冷や／＼かに苦笑して、その傍を立ち去つた。

たゞそれつきりの事だ。もしこの恐怖がなかつたら、死そのものもない筈である……もし貴重でなかつたら、破壊する必要もない……恐怖は存するだらう、存在しない筈



がない。しかしそれを征服する必要がある、狡猾な手段を弄して、それを欺かなければならぬ……

それにはどうしたらいいだらう？ 恐怖が不可抗力を持つて君臨してゐる闇の中ではないけない——自分の周圍に生活を集めなければならぬ、生きた人間の顔と喧囂を集めなければならぬ……人々は生に於いてこそ何ものをも與へなかつたが、その代り死ぬるのを手傳つてくれるだらう……

「さうだ！」とクラウゼは自分で自分にかう言つた。

濕つた土に蹄をびちや／＼鳴らしながら、トレニョーフが大きな赤毛の牝馬に乗つて、彼の方へ近寄つて來た。射的はもう終つて、隊伍を整へた中隊が徐ろに列を伸ばしながら、町をさして街道へ出て行くのが見えた。

「クラウゼ君、歸るんだよ！」トレニョーフはまだ遠くの方から叫んだが、少尉補とそのばかり／＼しい焚き火を、奇妙な目つきで見やつた。「君はそこで何をしてるんだね？」

最近、彼は少尉補にしじゆう注目してゐた。この四五日といふもの、何だかクラウゼの様子が變だつたが、けふ彼の從卒がトレニョーフの所へ駈けつけて、何やら慥えた様子で頻りに間違つきながら昨夜の出來事を物語つたのである。クラウゼは氣が狂つてゐるのではないかといふ想念が、トレ

ニョーフの頭の中で病的に動いた。

「君はそこで何をしてるんです？」彼は少尉の傍へ近寄りながら、クラウゼの馬を曳いて來るやうに、そつと用心ぶかく兵卒に手で合ひ圖しながら、またかう繰り返した。

「何でもありません。」とクラウゼは答へた。「ほら、あの焚き火を……」

「何のために？」

「たゞちよつと……」少尉は合點が行かないやうに肩を竦めた。

トレニョーフは首を振つて、

「ねえ、君にお勧めするが……君の様子はどうも感服しない！……一つ休暇でも取つて、静養に出かけたらどうですか……もしお望みなら、僕ダギードイッチにさう言つて上げますよ。」長い灰色の顔と、不思議なほど透き通つた目を見入りながら、彼はかう言つた。

クラウゼは恐ろしくしかつめらしい眞面目な顔をして、鎮きながら、注意ぶかく聞き終つたが、やがて不意に擧手の禮をして自分の馬の傍へ行き、ひらりと鞍に跨がつて、速足で中隊の後を追つて駈け出した。

トレニョーフは怪訝の念を抱きながら、その後から馬を走

らせた。

「ダギードイッチに報告しなけりやならん！」と彼は聯隊長の事を心に思ひ浮かべた。

クラウゼは冷ややかな、勝ち誇つたやうな微笑を浮かべながら、いつの間にか駈け足に移つて、次第に早く馬を飛ばした。彼は一切をさとり、自分のなすべき事を發見したのである。

## 一〇

わが家の支關口で馬をおりながら、トレニョーフは不安げに窓の方を見やつた。いつも家へ歸るたびに、妻がどんな風に出迎へるか分からなかつた。耐へ難い女の怨みを秘めた、透き通つたやうな目つきをした、妻の冷ややかな毒々しい顔を見るのが、堪らなく恐ろしかつたのである。彼女が落ちついて愛想がいゝのを確かめたとき、彼自身も始めて快活に打ちくるぐのであつた。彼はかういふ時、自分が犬に似てゐるやうな氣がした。臆病げに尻尾を足の間へ挟みながら、主人の傍へ近寄つて、主人が自分を打たないのを確かめると、急にもの狂はしいほど夢中になつて、跳び上がつたり地びたへ倒れたり、喜びの餘り黄色い聲を立て

たりする、犬にそっくりなのである。これは實に卑屈きはまる事だつた。で、事によつたら、彼はかういふ隙間に、最も恐ろしい諍ひの時より以上に、妻を憎んでゐたかも知れない。

けれど妻の愛撫の要求が、彼の心と體に深く食ひ込んでゐるので、もうこの愛撫なしには生きてゐられないくらゐだつた。それは彼に取つて、空氣のやうに必要だつた。ただ彼女の温かみの中に入つた時だけ、彼はいき／＼と活動的になつて來るので、妻が優しくしてくれるためには——一分一秒も休みなしに彼女の近接を感じてゐるためには、どんな事をも敢て辭せないと考へるほどであつた。

けれど彼女は、機嫌を取るやうな夫の目つきを見て、「この人は自分を恐れてゐるのだ。これは愛でなくて恐怖だ」といふ風に考へて、まるで夫が自分を暴君扱ひにでもしてゐるやうに腹を立て、さういふ夫を輕蔑するのであつた。それが緊張した不自然な夫婦關係となり、果てしのない諍ひが起こるのであつた。で、愛が深くなればなるだけ、二人の體と心が離れがたくなればなるだけ、その關係はいよ／＼苦しくなつて行つた。二人は其中で息を切らせながら喘いでゐた。

「奥さんはどこだい？」彼の手から帽子と外套を受け取る従卒に向かつて、トレニョーフはかう聞いた。

「お家のご用をしてもらえます。」狡猾さうな、小露西亞人の従卒が、慰めるやうにかう答へた。彼は家庭の事情をよく知つてゐて、主人を氣の毒に思つてゐたのである。

トレニョーフは兵卒に慰められるのが、恥づかしくて堪らなかつたけれど、それでもやはりほつとしたやうに息をついた。そして、拍車を響々と鳴らしながら、のんびりした氣持ちで家へ入つた。

ちやうど前の晩に、二人は何かつまらない話しをしてゐるうち、急に思ひがけなく喧嘩を始めたのである。たとへどんな些細な事でも、意見がまち／＼になるといふ事は、二人に取つて耐へ難い苦しいことだからである。悲しい醜い光景が演じられた——それはトレニョーフが壁へ頭を打つつけるか、額へ丸を射ち込むか、それとも妻を殺すか、どうかせずにもられないやうな争ひの一つであつた。

それから、夜おそくなつて、いつも決まりの仲直りがあつた。かうした夫婦喧嘩は、いつでも二人がへと／＼になつて了ふまで、互に苦しめさいなんだ後に、仲直りをするといふ順序で、けりが付くことに決まつてゐた。何よりも

忌はしく感じられたのは、どうしても結局、仲直りしなければならぬ、といふ點であつた。どんなに二人が互に侮辱し合つても、憎み合つても、とにかく和解しなければならなかつた。さうしなければ、一つ寢臺に寝ることが出来なからである。それは思つただけでも胸の氷るやうな、決裂を意味する譯である。

で、トレニョーフは赦しを乞うたり、何やら誓つたり、自ら卑下したり、泣いたりしながら、たゞ／＼この苦しみが終つてくれさへすれば、どんな事でも辭せないといふ氣持ちになつた。たとへ顔に唾を吐き掛けられて、自分自身にさへ忌はしく感じられるほどになつても、たゞ心を落ちつけることが出来さへすれば、と思つた。彼は妻より以上に愛してゐたので、従つて妻より以上に苦しんで、妻より以上の恐怖をもつて決裂を想像し、自ら進んで讓歩したのである。ところが、彼女は自分の權力を感じてゐたので、絶えず執拗に、残忍に、最後まで夫を嘲笑し、復讐する力を持つてゐた。トレニョーフは幾度か寢臺に近寄つたが、彼女はいつも夫を突きかけて、涙に濡れた顔を枕に隠しながら、目の前に不倶戴天の仇でもあるやうに、何とも言へぬ憎悪を浮かべて、かたくなに繰り返すのであつた。

「打つちやつといて頂戴！……さつさと出て行つて頂戴！……一體わたしにどうしてほしいの、ばか！」

トレニョーフは襦袢とズボンだけで、部屋の中をあちこち歩き廻りながら、ちつと拳を握りしめてゐた。彼は氣がさがひさうな心持ちがした。顔は腫れて鬚はもじやく垂れ下がつてゐた。その様子がいかにも憐れで見苦しかつた。

時とすると、何とも言へない憎悪が彼の全幅を領して、トレニョーフは寝てゐる妻の傍へづか／＼と寄り、彼女の半ばあらはな背なかを、氣ちがひのやうな目で睨みつけながら、力任せに撲りつけてやりたいといふ、抑へ難い要求を感じるのであつた。彼の頭の中には、もう霧のやうなものが立ち昇つて、拳は握りしめられた。いま一瞬間このまゝで過ぎたら、もう取り返ししの付かぬ深淵へ飛び込んで了ひさうな氣がした……彼は両手で頭を抑へながら、呻き聲を立てて飛びのいた。

「これでは實に堪らん！……これは一體なんといふ事だらう！……いつそ死んで了つた方がましだ！……別れて了つた方がましだ！……」

「さあ／＼、どうぞ、わたしはたゞそればかり望んでゐますの！……あんたがそんな意久地なしでなかつたら、とつ

くにわたしの傍を離れて了つて、わたしを苦しめはしなかつたでせうよ！」と彼女は輕蔑したやうに答へた。

彼女はいつもかういふ事を口にしてゐたが、この一句は彼を惱ましい狂憤に陥れるのであつた。彼女、たゞ自分を苦しめんがためのみに、わざとこんな事を言ふのだ——それは彼も立派に承知してゐたけれど、彼ら二人の生活は餘り融合しきつてゐたので、たゞこれだけの言葉を聞くのも、氣ちがひさうなほど堪らなかつたのである。その上にはか／＼しい、氣ちがひめいた嫉妬までが彼の心を掴んだ。始めの中は、これほど自分の愛してゐる近しい女が、かうたやすく落ちつき拂つて離婚を口にしてゐる、しかも自分は恐怖の念なしに、そんなことを考へられなくらゐなのだ！ かう思ふと胸がどき／＼とする程度だつたが、やがて不意に、二人はもう縁のない他人になつて了つたやうな氣がし始める——妻はもう自分を忘れてほかの男を愛し、ちやうど自分を愛撫したと同じやうに、その男を愛撫するのである……かう考へると、忌はしい光景が露骨に浮かんで來るのであつた。誰かほかの男に抱擁されてゐる妻の體の一舉一動を、まざ／＼と目の前に見るやうな氣がして、本當に妻を殺し兼ねない心持ちになつて來る。

どうかすると、奇妙な疲労感が彼を襲つた。トレニョーフはもうどうでも構はなくなつた。この争ひは決して終る時がない、自分ばかりした耐へ難い拷問に、氣がちがつて了ふ、といふやうな氣がするのであつた。で、すつかりへとへとに疲れ果てた彼は、妻だつてやはり死ぬこともあるといふ事實を、惱ましいほどの快感をもつて考へ始める。その時妻はもう全くなくなつて、嫉妬といふものも消えて了ふ、そして自分は風のやうに自由になるのだ!……勿論、妻に關しては、極めて敬虔な記憶を保存し、かつ今後決してあゝいふ愛は経験しないだらう。しかしそれにしても、どんなに樂々と息がつける事だらう!……

が、一體それはいつのことだ? 妻は自分より年が若いではないか……事によつたら、自分の方が先に死ぬかも知れない……その時はどうなるのだ?……

彼女は一人きりになつたら、どんなに恐ろしく苦しい事だらう!……どんなに夫の事を思ひ出すだらう。そして、夫の生活を毒したといふ意識のために、どんなに苦しむことだらう!……それが堪らなく恐ろしいことに思はれたので、妻は自分の後に生き残るよりも、いつそ先に死んだ方がましだ、といふやうな氣がしたほどである。

それならいゝ……妻が先に死ぬ事としよう……すると彼は不意に、妻の冷たい死骸を目の前に見た。それは彼があれほどよく知り盡くし、強く愛してゐた、美しい、可愛い、暖い體と同じものである! もう彼女を胸へ抱きしめて、感じ馴れた暖みを感じ、愛撫の聲を聞く事が出来ないのだ……かう思ふと、トレニョーフは何ともいへない恐怖に襲はれて、頭の毛がざわ／＼と動き出すやうな氣がした。

しかし、それは遅かれ早かれ、いつか一度は来る事なのだ! 彼でなければ妻、どちらかが先に死ななければならぬ……それなのに、ふたり一緒に暮らした多くの夜と晝を、あゝして無意味に争つたり、互に苦しめ合つたりしながら、愚かに見苦しく浪費したと自覺するのは、どんなに恐ろしい事だらう!……もう二度とその日を返すことは出来ない! 急がなければならぬ、一瞬間たりとも通してはいけない。人生は短くて、二度と與へられないではないか!……それなのに、自分たちは争ひばかりして、互に苦しめ合つてゐる……あゝ、生活は刻一刻去つて行く! 一たい自分たちは何をしてゐるのだらう?……

「一體あれは一度もこの事を考へようとしないのか? 一體あれは自分でも残念でないのかしらん?……實際あれだ

つて考へなけりやならない筈だがなあー」トレニョーフは、心に絶望を抱き、痙攣的に肩を竦めながらかう考へた。

彼はすぐにも妻の傍へ寄つて、一切を闡明するやうな本當の言葉を發して、和解決したかつたのである。一體これがそんなに難かしい事だらうか？ 何といふ莫迦げた話じだらう！ 彼は自分を苦しめる意地わるな、忌はしい女を、苦しいほど愛してゐるではないか！……どうして彼女は自分の仕業の恐ろしさを悟らないのだらう？

しかしトレニョーフは、もし自分が傍へ寄つたら、妻は何か毒々しい言葉で彼を迎へ、再び突きなげたり、振り放したりしはせぬかと、それが恐ろしかつたのである。その時こそはいよ／＼自分の頭が、すっかり掻き亂されて了ふに相違ない、かう彼は感じた……けれども、彼はやはり傍へ寄つて膝を突きながら、彼女の冷りした滑らかな背に、用心ぶかく唇を當てた。

と、不意に彼はもう諍ひが終つたのを感じて、本當にならないやうな氣がした。妻は自分でも疲れて了つて、一生懸命に和解を望んでゐるのであつた。二人はよく互を知り抜いてゐた！ たゞあらはな肩がびくりと慄へただけで、たゞ彼女が返事をしなかつただけで、トレニョーフはもう妻

が赦した事を悟つたのである。

妻は彼を愛してゐる。どんな事でもしようといふ氣はある癖に、持ち前の女らしい、愛すべきかたくなな心持ちから、まだ強情を張つてゐるに過ぎない……ついちよつと前までは無意味なものに感じられて、恐ろしい狂憤の種となつてゐたこの頑な態度が、とつぜん涙くましいほど可愛い、興あるもののやうに思はれ出した。胸の痛くなるほど深い愛情を抱き、熱い涙を目の底に感じながら、トレニョーフは妻のあらはな肩一面に接吻を印した。

「さあ、もう澤山だよ、堪忍しておくれ、ばかな年寄りなんだから……」

なぜかういふ言葉が、彼の頭に浮かんできたのか、自身にも分からなかつた。とき／＼思ひ切つて烈しい喧嘩の最中に、かうしたばかり／＼しい道化た言葉が、頭に浮かんて來るのであつた。しかも反駁の餘地もないやうな理窟や誓言が、たゞ憤怒の火に油をそゞぐに過ぎないのに、その莫迦げた言葉が意外にも、本當のものだつたのである。

で、今あらはな二本の腕が不意に優しく、突發的に彼の頭に巻き付いた。彼は愛情と感激のために、涙が目頭に滲んで來るのを感じながら、もの狂はしい憤怒をもつて、涙

に熟して少し脹れぼつたい妻の唇に接吻した。そして、冗談が成功したのを悦びながら、繰り返した。

「この莫迦な年寄りを堪忍しておくれ！」

「莫迦な人ね！……まだそんな事を言つてるの！」と彼女は啼いた。そして後悔の涙を流し、もの狂ほしい愛撫に浸りながら、まるで剣き出しにされた二つの心臓のやうに、隔てのない心もちで和解した。

その夜、二人が疲れて、幸福感に充ち溢れつつ、闇を見つめながら並らんで横になつてゐた時、彼女は夫に向かつて、自分は夫の生活を毒したといふ意識のために、どれほど苦しんでゐるか分らない、どれほど夜々良心の苛責を受けてゐるか分らない、それといふのも、強く夫を愛してゐるからだ、と囁くのであつた。

「わたしは氣ちがひなのよ、堪忍して頂戴。」と彼女は言つた。

そして、前にも何百遍となく繰り返したやうに、これももういよ／＼お了ひで、今こそ一切は終りを告げたのだ、これからすつかり別人のやうになつて、何もかも夫に許し、決して咎めだてしないと云つた。

「もう何遍お前はその約束をしたか分らないよ。」といふ

惱ましげな言葉が、思はずトレニョーフの口から洩れた。

彼女は癡癡的に——殆ど自分で自分を信じかねるやうに、絶望的に彼を抱きしめた。二人とも是が非でも信じたかつたのである。

「さうしたら、どれくらゐの幸福になるか分らないんだがなあ——」トレニョーフは焼つくやうな愛情と、絶望的な愛愁の念をもつて、彼女の愛撫を受けながら言つた。

「だけど、何だつてわたし達は喧嘩なぞするのでせう？……どういふ譯でせう？……だつて、あなたは男ぢやありませんか、わたしより強いんぢやありませんか……あなたがわたしを引き止めてくれなきゃいけないわ——」と妻は絶望したやうにかう言つた。

トレニョーフも絶望したやうに肩を疎めた、彼はどうしてこんな事になるのか、自分でも分らなかつた。それどころか、つまらない會話が諍ひに移つて行く、その瞬間にさへ氣が付かなかつたのである。他人がある所では、議論もすれば反對することも出来るのに、どういふ譯で差し向かひになると、いら／＼した心持を感じないでは、相手の言葉を聞けないのだらう？……お互に飽きが來たのだらうか？……それだけの事なのか？……けれど、彼等は互ひに

相手がなかつたら、生きて行けないではないか！

かうして、自分でも合點の行かない悲劇の中に、力なく吸ひ込まれながら、惱ましい疑惑と絶望と、幸福を授け得ない愛を抱いて、二人はひしと體と體を摺り寄せた。そして、もの問ひたげに大きく見ひらいた目で、無言のまゝ闇の中を見つめるのであつた。

翌朝トレニョーフが床を出て、妻を起こさないやうに、そつと着替へをした時には、彼女は纏れた薄色の髪を枕の上へ擴げ、兩手を頬の下に敷きながら、暖まつた寢床の上に丸くなつて寝てゐた。

トレニョーフはちつと眺めてゐる中に、さん／＼自分を苦しめ抜いたこの女が、何ともいへないほど可愛い、無限に貴いもののやうに思はれた！……そのあらはな腕も、枕かけにこびり付いた生毛のやうな髪も、子供のやうに縮かめた足も——小さなあらはな足も……すべてが限りなく美しい、愛すべきものに思はれた。彼は妻を揺り起こして、睡りのために暖い、だらりとした柔かい體を兩手に抱き上げ、彼女の手、足、胸——何もかも滅茶々に、際限なく接吻してやりたい氣がした！……けれど、トレニョーフはさうするだけの勇氣がなくて、優しい愛情のために目を泊ほしな

がら、微笑を浮かべてそつと部屋を出た。

教練の間ちう、彼は妻のこのみ考へてゐた。いつも絶え間のない評ひではなくて、愛撫と平安がわが家で待ち設けてゐる、かう思ふと、悦ばしいかる／＼した氣持ちになつた。けれど、時々ひよつとまた何か起こりはしないか、といふ恐怖が頭を掠めたが、まるで薄皮の張つた傷に觸るのを恐れるやうに、なるべくそんなことを考へまいと努めた。

けれど、彼女は嬉しさうな微笑で彼を迎へた。そして肘の邊まであらはした、薔薇色の手を差し伸べながら、夫の傍へ寄つて來た。

食事の時トレニョーフは妻に向かつて、クラウゼのことや、經理部長とのちよつとした衝突や、第六中隊で牡馬が兵卒を殺した事など、話して聞かせた……自分たちがこんなたび／＼喧嘩するのは、つまり妻が退屈してるからだ。といふ考へが、よく彼の頭に浮かんで來た。で、彼は努めて、わざと快活らしく話すやうにした。彼らは全體に、あらゆる些事を尊重してゐた。なぜといつて、長い共同生活に心の底まで汲み盡くされて、話しの種が殆どなかつたからである。妻もまた努めて出来るかぎり、實に面白い話し



だ、といふやうな顔つきをしながら聞いてゐた。そして時時まるで自分を慰める夫の努力を謝するやうに、卓ごしにあらはな手を差し伸べて、愛情の籠もつた目で夫の手を撫でた。その時トレニョーフは身を屈めて、薰りのいゝ滑らかな妻の手を優しく接吻した。彼は自分ながら、こんなに妻の愛撫を悦んでゐるのが、少し恥づかしい氣がするほどだった。

それから、彼女は新しい市井しよせいの出來きことを話し始めた。

夫が自分に飽きて自分を邪魔物にし、ほかの女に心を惹かれてゐる、といふやうな氣がして仕方がなかつたので、彼女は自然と無意識に女の話しを始めた。彼女はすべての女を、自分の競争者となり得るものとして憎んでゐたので、口さがない市中の噂を、嫉妬がましい、小氣味こけいよささな調子で繰り返しながら、すべての女を惡わるざまに言ふのであつた。それがいつもトレニョーフをいら／＼させた。で、彼はすぐ抗辯し始める。始めの中は、諍いさかひを惹き起すのを恐れて、臆病おくびょうげな調子であるが、やがて、妻が一生懸命に自分を抑へながら、どうだつて構はないといった素振りを見せると、彼は次第に勢ひづいて調子に乗りながら、妻の批判の不公平なことを非難し出す。すると、とつぜん妻の目

は暗くなる。彼女は唇を食ひしばつて、たゞ諍いさかひをすまいと一生懸命に祈りながら、しばらく我とわが心を引きしめてゐるが、遂に諍いさかひが始まる。で、トレニョーフが彼女の憎惡にくしみに充ちた視線にはじめて氣がついた時、諍いさかひは一語ごとに募つて行きながら、さながら雪崩ゆきなげのやうにくづれ落ちる。もう何ものをもつても、抑へることが出來ないのである。

けれど、今日は彼も強いひて微笑を浮かべながら、妻に相槌あいきを打つて聽いてゐた。

彼女はリーザ・トレグーローワの事や、ミハイロフと一緒に去つたジェーネチカの事を話したが、その調子は憎惡と意地わるい悦よろこびに充ちてゐた。

「そりやわたしも分かつてゐますわ。一人の方は女優ですからね……品行のよくないのは當たり前ですけれど、あの娘には呆れるぢやありませんか！ どうしてあんな女に同情する氣になるのか、譯わけが分かりませんわ！ なんの事はない、たゞやくざな淫亂娘いんらんねうですわ！ だつて、あの女はまだやつと十七か、十八ぢやありませんか！」

トレニョーフは同意したやうに頷うなづいて見せたが、その實、彼はリーザが可哀あはれさうだつたし、またジェーネチカも好きだ

つたので、決して品行の悪い女とは思へなかつた。

「何でもあの娘は、妊娠ださうだね。」彼は妻を満足させるためにかう言つて、自分で顔を赤くした。

食後、彼らは公園へ散歩に行つた。公園の木立ちはもう黄色くなつて、餘り明るすぎるほど、がらんとしたやうに思はれた。小さい女の子は、澱んだ水溜まりにちら／＼影を映しながら、濡つた徑つたひに駈け出した。二人は色んなつまらない事を喋り續けて、穩かな悦ばしい、いゝ氣持ちになつた。

けれど、晩にはもう話す事がなかつた。話題は盡きて了つて、一方が何か話し出しても、それは相手にすつかり分かり切つてゐて、すぐ察しがつくのであつた。そして二人とも、いつもと同様、つまらなくなつて了つた。誰か來てくれるといふなあ、といふやうな氣持ちがしたけれど、トレニョーフは努めてそれを隠さうとして、一生懸命に平氣で、快活な振りをするのであつた。すると、妻はそれを感じていたやうに、頻りに俱樂部へ遊びに行けと勧め出した。けれどトレニョーフは、わざとらしく無關心な顔をして答へた。

「あそこへ行つて、何をしようといふんだね？ あき／＼

しちやつた……いつも／＼同じ事ばかりだ！ 氣が進まない！」

彼は實際、氣が進まないといふ事を、自分で自分に信じさせたいと思つたが、しかし馴染の深い、華やかに照らされた俱樂部の情景や、騒がしい物音や、かるた仲間の顔や、かういふものが何とも言へないほど自由な、なみ／＼ならぬ面白いもののやうに、目の前へ浮かんて來るのであつた。妻は疑はしげに彼の顔を見たが、これもやはり一生懸命に、夫は自分と一緒にゐるのが楽しいので、どこへもよそへ行きたくないのだ、かう信じようと努めてゐた。けれど彼女は、夫が俱樂部がよひの好きな事を思ひ出して、いま行かないと言ふのは自分のためだ、つまり自分が夫の楽しみを奪つてゐるのだと思つたので、彼女は夫に接吻しながら、出かけるやうに勧め出した。

これが長いあひだ續いた。彼女はかうした俱樂部がよひや、遊興や、かるた勝負が、厭で堪らなかつたけれど、一生懸命に夫に勧めるし、彼は病的なほど行きたい欲望を感じてゐる癖に、氣が進まないと言ひ張るのであつた。かうして、二人は互に嘘をつき合つて、押し問答をしてゐる中に、もうだん／＼苦しくいら／＼した氣持ちになつて來た。

そこへアルブリーゾフがやつて来た。

トレニョーフは飛び上がつて、嬉しさうに(その表情を妻はすぐさま見て取つた) 出迎へに行つた。

アルブリーゾフは青い外套に、エナメルの長靴を穿いて、頑固な歩き方で、大膽に部屋へ入つて来た。彼は目に立つほど酔つてゐたが、その態度はしつかりして、磊落だつた。たゞその憂鬱な目が充血してゐる上、度はづれに大きくなってうき／＼してゐた。

「やあ、ご機嫌よう！ 僕は君を誘ひに寄つたんだよ……：俱樂部へ行かうぢやないか、え？……仲間の連中がみんな集まるんだよ……：ミハイロフが歸つて来たんでね……：え、いゝだらう？」

トレニョーフは恐る恐る妻の方を振り返つた。アルブリーゾフはこの視線に気がついて、無作法な薄笑ひを浮かべたが、しかし何も言はなかつた。トレニョーフはこの薄笑ひを見て取つて、恥づかしさに思はずかつと赤くなつた。と、またしても彼の心中で、いま／＼しさの念が動いた——妻の厄介な性格のために、自分の體を自由にする事も出来ないで、くだらない有象無象の笑ひぐさになつてゐる！ ああそれが自分なのだ！ かつて何一つ恐ろしい事を知らな

つた、勇敢な將校たる自分なのだ！

「何だか氣が進まないんでね……」と彼は拙い調子で言葉じりを引いた。そして「そう強くそれを證明するために、のびさへして見せるのであつた。

「何だつて——氣が進まないつて？……まあ、出かけよう、さあ！」

「いや、全く、本當に行きたくないんだ……」

「いや、もう澤山だよ……出かけよう！」酔漢に特有の執拗な調子で、アルブリーゾフは相手の腕を取りながら、どこまでも言ひ張つた。「友達がひがないといふものだ！ 一つ大いに騒がうと思つてるのに……君はみんなを白けさせて了ふぢやないか！ 出かけよう！」それから意識してか偶然か、彼はかうつけ足した。「細君は出してくれるよ、二人が／＼で頼まう……この人はいゝ人なんだから！」

「わたし止めやしませんわ！」わざとらしく浮き立たぬ微笑を洩らしながら、彼女はかう言つた。

トレニョーフは顔を赤くした。

「妻なぞ何も關係はありやしないよ……たゞ氣が進まないんだ。變な事をいふ奴だなあ！……分かりの悪い！」

アルブリーゾフはもう明らかに冷笑を浮かべながら、毒々

しい充血した目つきで、高慢さうにびつたり彼を見つめた。「嘘をつき給へ、細君が怖いんだらう！」と言つて、彼はから／＼と笑ひ出した。

「どうして、あなた厭なんですか？」突然わざとらしい無關心な調子で、妻が口を入れた。「お出かけなすつたらいいぢやありませんか！」

トレニョーフはちらと彼女を見やつた。

「え、お出かけなさいとも、」勵ますやうに夫を眺めながら、彼女はかう言つた。

トレニョーフは彼女の目の表情を讀まうとしたが、その目は曖昧な透明な色をしてゐるのみで、何が何だか譯が分からなかつた。

「そりやあ、勿論、出かけたつていゝけれど……しかしどうも……」と彼は思ひ切り悪さうに、言葉じりを引いた。

「ぢや行かう」とアルブゾフは叫んだ。「さあ、早く……着替へでもし給へ！ 僕は待つてるから……」

トレニョーフは肩を竦めて、不安げな微笑を浮かべながら、依然として思ひ切りの悪い態度で、着替へに立つた。アルブゾフは食堂に残つてゐたが、その豪放な話し聲と、妻の控へ目がちな低い答へが、着替へをしてゐるトレ

ニョーフの耳に入つた。その控へ目な調子で、彼は妻が不満なのを悟つた。と、彼の心臓はぎゅつと縮まるやうな氣がした。けれども、家を出たいといふ望みが、極めて強烈だつたので、彼は自分で自分の弱さを輕蔑しながら、依然として着替へを續けてゐた。

彼はアルブゾフを先へ出して置いて、妻に別れを告げるために後へ残つた。彼は妻を接吻しながら、腹を立ててはゐないかと、おづ／＼その目を覗き込んだ……彼女はわざとらしく微笑を浮かべてゐたが、その目は妙に沈んで、よそ／＼しかつた。これが忽ち彼の心を苛々させた。「あゝ、一體おれが俱樂部へ行きたいと思ふのが、それほど罪惡なのだらうか？」

「何ならいつそ行くのをよさうか？」と彼は不確かな調子で訊ねた。

「どうして？」と彼女はわざとらしく言ひ返した。だつて、あなた行きたいのでせう？」

「でも、お前は留守に一人ぼつちで退屈しやしない？」彼女の心中にも、やはりいら立たしい感情が燃え上がった。無論、自分は退屈するに決まつてゐる、無論、夫はそんな事を聞かないで、家に残つてゐるのが當たり前だ……

なぜあんな空々しい事をいふのだらう？

「いゝえ、わたし本でも読んで寝ますわ……いらつしやい、いらつしやい！」

「でも、やめようかな？」と彼は見苦しうぐづ／＼してゐた。

「まあ、いらつしやいつたら、いらつしやい！」彼女は殆ど囁きつつけるやうに言つたが、すぐに微笑を浴びせながら言ひ足した。「行つて騒いでらつしやいよ！」

到頭トレニョーフは決心した。が、愉快の念はもうすつかり害はれて了つた。戸口の所で、ちやうど東縛に馴れた家畜のやうに、もう一ど思ひ切り悪く、振り返つて見た。と、彼女はすぐに暗鬱な顔つきを一變して、わざとらしくにつこり笑ひながら、芝居氣たつぷりで手を振つて見せた。トレニョーフは、まるで大地から身を投げ放すやうに、恐ろしい努力をしながら出て行つた。この一瞬間、彼は本當に行きたくなかつた。まるで一人きり取り殘される妻も可哀さうだし、自分を待ち受けてゐる諍ひも恐ろしかつた。けれどアルプゾフが待つてゐるので、今さら斷るのも具合ひが悪かつた。で、トレニョーフはたうとう出て行つた。

一一

晝室の大きな窓のそとでは、灰いろに濁つた庭が、濁つた霧の中にぼやつと滲んでゐた。秋の憂愁が、黄昏のどんよりした光りの中を漂ひ、青ざめた病人のやうに、部屋部屋を靜かにさ迷ふのであつた。

ミハイロフは今朝やつと停車場からわが家へ歸つた。そして一日寢とほしたのち、重くるしい頭と、故もない胸の悩みを抱きながら、夕方になつて目を醒ました。

つい一晝夜前まで、彼は大都會の中にゐたのであるが、今ではもう霞のかゝつた町々も、幌を上げた辻馬車の長い列も、冷たい電燈の光りも、知人の顔も、どこか遠いうしろの方にあるやうな氣がした。

それと同時に自分の晝室も、よそ／＼しい冷たいものに感じられた。彼がこの晝室を見捨てたのは、まだ太陽が晴れやかに照らして、庭の木の葉も、澄み渡つた秋の初霜を受けて、金色に染まりかゝつたばかりであつた。ところが今はその庭が濡れしよぼけて、小道々々にはもの憂げな落ち葉が散りしき、雨のために冷たい泥に叩きつけられてゐる。晝室の中にはうす闇が凝結して、あらゆるものの上に

薄い埃が、蜘蛛の團のやうに置いてゐる。まるで他人の空き家のやうに居心地がわるい。壁に並らんだデッサンや畫が退屈さうに見え、刺製のふくろふは主人の顔を忘れたやうに、得體の知れない憎惡の表情で、まるく黄ろい硝子の目玉を、彼の方へむけて見張つてゐた。

ミハイロフは何をしていゝか分からないで、隅から隅へと歩き廻りながら、もの憂い思想の流れにぼんやり耳を澄ましてゐた。なに一つ手につかなかつた、何もかも要のないもののやうに思はれた。そしてなんとなく、取り返しをつかない過ちをしたやうな感じが去らなかつた。

「なぜ僕はこんなところへ歸つて來たのだらう？」鈍い苛立たしさを感しながら、彼はかう自問した。

彼が秋の季節にこの町へ來たのは、今度はじめてであつた。それまでは金色の夏でなければ、喜ばしい新緑の春しか知らなかつた。

なぜこゝへ歸つて來ようといふ氣が起こつたのか、彼は自分でも譯が分からなかつた。妙な憂愁、すべて他人ばかりでなく、自分自身に向けてさへ感じられる、一種いはれない忿怒の情が、彼をこゝへ追ひ立てたのである。まるで誰かに對する面あてに、こんな事をしたやうな具合ひだ

つた。

「退屈だ。よし、それならもつと／＼退屈になるがいゝ！……莫迦々々しい、無意味だ。よし、それちやもつと莫迦莫迦しく、もつと無意味になるがいゝ！……」

彼の出發する二日前に、彼はジェーネチカを停車場に見送つた。彼女は一箇月ばかり莫斯科で暮らしたのち、西伯利のどこかへ立つて行つたのである。

別離の場景はまざ／＼と彼の記憶に残つてゐる。

ジェーネチカは薄暗い出入り口のところに立つて、薄闇の中でさへきら／＼光る黒い目で、ぢつとミハイロフを見つめてゐた。この大膽な生き生きした目の中に、深く秘めたもの柔かな憂愁が感じられた。

「それちや、行つて了ふんですね？」何を言つていゝか分からないうで、ミハイロフは器械的にかう言つた。

彼はすうりとした女の姿や、黒い目と眉をした、美しい鮮かな顔を眺めてゐた。そして、疲勞よりほか、なんにも感じてゐない自分が、われながら不思議に思はれた。彼は女が早く立つてくれ／＼ばい／＼と、そんな氣持ちさへするものであつた。しかし、この女は自分にとつてあれほど親しいものではなかつたか、とにかく自分の生活へ入りこんで、

あれほど多くの事を感じさせたのではないか。

もつとも、彼女は一度も彼を愛すると言はなかつた。ミハイロフがこの事を訊ねた時、ジェーネチカはたゞ謎めいた笑ひ聲を立てたばかりである。

「オイ、ラー……どつちでも同じことぢやありませんか、セルゲイ・ニコラエヰッチ。」

どちらでもいゝといふ事は、彼も知つてゐたが、それでも彼女が「愛してゐます！」と言はないのが、なぜか不愉快だつた。彼女の笑ひにも、明答を避けるやうな目の中にも、何かもの言ひたげなところがあつた。彼女の傲慢な心の奥底に、何かあるものが潜んでゐるのだけれど、それは決して打ち明ける氣つかひがない。彼はたゞ女が惱みもたえるのを、感じるばかりであつた……

「ぢや、行つて了ふんですね？」とミハイロフは繰り返した。

「えゝ、行きますわ……もういゝ潮しほときですもの！」とエヴゲーニヤは答へた。「どうも、仕方がないわ……さやうなら！ 悪く思はないで頂戴、もうお目にかゝらないんですから！……」「なぜ？」

彼がかう聞いたのは、たゞこれが永久の別れで、二人はもう一生他人なのだといふ事を裏書きするのが、あまり不愉快だつたからに過ぎない。エヴゲーニヤは何か見出さうと望むもののやうに、ぢつと彼の目を見つめた。そのばら色をした唇はひくりと動いたけれど、彼女はそのまま笑ひ出した。

「ねえ、セルゲイ・ニコラエヰッチ！……なんのためにまた會ふんですの？……これから先はもう退屈だわ。さうぢやなくつて？……え？……」

ミハイロフは無器用らしく肩をすぼめた。

「ところが、こんな風に別れたら、お互に氣持のいゝ夢のやうに、思ひ出すことが出来るぢやありませんか。」と若い女はまた朗かになつた聲で言葉をつゞけた。「それに必要もない事ぢやありませんか？……またほかの女が出来ますよ……いえ、ほかの女たちが、と言つた方が正確だわ！……」

ミハイロフの目の前には、この「ほかの女たち」の列が、ぼんやりと閃き過ぎた。どこからかやつて来て、彼に己れの愛撫を捧げる未知の女たち……するとなぜか退屈な、忌しい氣持ちになつて来た。一たい彼らはまだ澤山ゐるの

だらうか？　そして今まで接した幾十人の女のやうに、まるで要もない夢と同じく、生の霧の中に消えて行くのだらうか？……なんのためだ？……たゞその顔を忘れるためなのだらうか——以前の數多い顔を忘れたやうに、また目の前にあるこの顔も、やがて忘れるだらう——丁度そのやうに？……たゞそれだけのためだらうか？……

不意に彼は、ジェーネチカを立たせたくない氣持ちがした。なんといつても、彼女は愛すべき女である！……事によつたら、精巧でないかも知れない、空っぽな女かも知れない。けれど、彼女はもう近い人間になつてゐる、二人の間にはもう何か薄皮が張られてゐる……なぜそれを引き裂いて、新しいものを求めるのだ？……なぜ彼女は自分と一緒になつたのか、それは誰にも分らない。けれども彼女は何ものをも要求せず、また何ものによつても束縛せず、多くの快き瞬間を彼に捧げ、愛すべき享樂の友となつてくれた。優しい肉體的感謝の情が魂を暖めた。ミハイロフはジェーネチカの手をとつて、感謝の情をこめながら、手袋の上からひんやりした滑かな肌に、そつと接吻した。彼女は男を見おろした。その樂しさうな黒い目には、何か苦しうな影が閃いたけれど、この瞬間ミハイロフは、そ

れを見ることが出来なかつた。

「なんといつても……」とミハイロフは言ひかけたが、何かに慄いたやうに、了ひまで言ひ切らなかつた。

ジェーネチカは待ち設けるやうに、彼の顔を見てゐたが、やがてほつと吐息をついて笑ひ出した。

「まあ、それがいゝわ！」と彼女は曖昧な調子で言つた。

ふたりのそばをのべつ、人が通りぬけて、話しの邪魔をした。旅客は絶えず二人に、少々片よつてくれと頼むし、逆上したやうな荷擔きは、不恰好な鞆や包みを持つて、のこのこ入りこむのであつた。ジェーネチカは突き飛ばされたり、壁に押しつけられたりしたけれど、それでも彼女は中へ入らうとしなかつた。二人は互に無言のまま、顔を見合つてゐなければならなかつた。そのため、ばつが悪くて、なんだか莫迦々々しくさへ思はれた。

第二鐘がけたましく鳴つた。重苦しさはいよ／＼増して來た。二人を結び合はしてゐる絲が、だん／＼強く引きのばされて、一本づつ切れて行くやうな氣がした。そして一秒ごとに、二人はだん／＼遠ざかつて行くやうに思はれた。

今に二人は別れて了つて、二度とふた／＼會ふことがな



いのだ。彼女はどこか遠い地方の町へ運び去られて、そこでまた拍手を浴びたり、花や寶石を贈られたりして、誰かほかの者と一緒になるだらう。するとこの平凡な未知の男が、いまのミハイロフと同じやうに、彼女にとつて近しい人間となり、同じやうに彼女を接吻したり、裸にしたり、抱擁したりするだらう。ところが、彼はたつた一人、濡れしよぼけた辻馬車に乗つて、どことも知らず先を急ぐ、なんのゆかりもない群集に満たされた、雨の莫斯科の町々を揺られて歸るのだ。

ミハイロフは、そんな事がいよく無意味に思はれて来た。

彼はまたジーネチカの手をとつて接吻した。この瞬間、なんと言つたところで、この女より近しい人間は、彼にとつて誰もゐないのであつた！

「どうも僕は残り惜しい、あなたの行つて了ふのが。」自分でもそれが本當なのか嘘なのか、よくも分らないで、彼は窮屈らしい調子でかう言つた。人間の感情といふものは、奇妙に分裂するものである。

「どうですかねえ？」とエツゲニーヤは問ひ返した。すると彼女の黒い目の中に、また何か秘められた暖いものが閃

いた。

「むろんです……なんと言つたつて、僕はあなたを愛してゐましたよ！」とミハイロフは言つた。そしてこの「なんと言つたつて」の莫迦々々しさに、われながら苦笑した。

ジーネチカは首を振つた。

ミハイロフは過去のすべてを思ひ出した。

本當に彼女が自分の全世界を満たして、熱烈な優しい愛情を呼び起こした瞬間があつたのを感じた。しかも、それは單なる性慾ばかりではない！……今でさへ、もし異常な危険が彼女の生命を脅かしたら、彼は果たして自分の身を死地に投ずるのを躊躇したらうか？

「いや、なんと言つても愛してゐましたよ！」自分で自分の一言にしがみつかうとするやうに、彼は強情らしくかう繰り返した。

「違ひます。」とジーネチカは言ひ返した。彼女の黒い目は眞面目になつて、聰明らしい表情を帯びて来た。「ときどきさう思はれた事もあるでせうが、それはわたしを愛したのぢやなくつて、全體に女といふものを愛しなすつたばかりなのよ！……」

この言葉に含まれてゐるあるものが、ミハイロフをばつ

とさせた。彼は驚きの念と、一種不思議な尊敬を感じながら、ジーネチカを見つめた。不意に彼女は、今まで知つてゐた空虚で輕薄な女優と違つて、量り知れないほど高尚で、微妙な人間になつたやうな気がした。一たい自分は彼女の本當の顔を見過ごしたのだらうか？……あれほど小つぽけなものに思はれたこの奇妙な女性の深奥に、何かの神祕が隠されてゐるのだ。

「なるほど……」と彼はゆつくり言つた。「どうしてあなたは前に一度もそれを言はなかつたんです？」

不思議にも、彼女は男の考へてゐることを、瞬間的に直覺した。そして、唇をまげて微笑しながら、かう答へた。

「あなたに必要なのは、そんなものぢやなかつたんですよ、セルゲイ・ニコラエヰッチ！……あなたは……いえ、まあ、もうどうだつて同じことだわ！……」

彼女はしばらく黙つてゐた。やがてなんだか濟まないやうな微笑を浮かべて、深々と優しみの籠もつた、今までにない新しい聲で言ひだした。

「でも、わたし達は不仕合はせだわね、女つてもものは、なんと言つても……あゝいふ風なことが、みんなさう手輕には行かないんですからね……男の人みたいに……でも、こ

んなこと見當ちがひだわ！」と彼女は急いで我とわが言葉を遮つた。ねえ……本當にこれが一生の別れかも知れないんだから……今ならなんでも言ふことが出来る譯ぢやありませんか……聞かして頂戴、あなたは自分を幸福だと思つて？……まあ、ほんの時々でも……つまり、わたしと一緒に暮らした時でも、また誰か……わたしと同じやうな女の人と一緒に時でも？」自分自身に對する惱ましげな嘲笑を聲にひよかせながら、彼女はかう言ひ足した。

ミハイロフは目を上げて彼女を見た。

「いや、決して！」胸の底からほとぼり出るやうな深い眞實の聲で、彼はかう答へた。するとその瞬間、不吉な惡寒を心に感じた。

エヰゲニーヤは長いあひだ無言で見つめてゐた。その鮮やかな美しい顔を、なにかの影が掠めた。

「さうでせう……わたし分かつてたわ……」しみじみとした表情で彼女は言つた。「あなたは不幸な人ね、セルゲイ・ニコラエヰッチ！……あなたにはもう何もかも……」

第三鈴がけたましく執拗に響き渡つた。群集は汽車へなだれ寄つた。ミハイロフが手に接吻するかしないかに、ジーネチカは群集にへだてられて、出入り口の壁に押し

つけられた。彼女はその場所を譲るまいと、しなやかな體をくねらせながら、笑ひつゞけてゐた。ミハイロフは彼女の言つた最後の一句の了ひを、はつきり聞き分けることが出来なかつた。彼は人々の頭ごしに女を眺めてゐた。一人の肥つた將校が踏み段へあがつて、大きな瑠璃色の帽子をかぶつた大柄な婦人に、呶鳴つてゐた。

「お父さんにさう言つておくれ、クリスマスにはぜひ行くからつて、たとへほんの二日でも……」

誰か接吻してゐるものがあるかと思へば、また誰かこんなことを呶鳴つてゐるものもあつた。

「手紙をください！ お宅のみなさんによろしく！……お忘れにならないやうに！……道中ご無事で！……」

群集はいつともなくだん／＼と遠く、ミハイロフを汽車から隔てて行つた。もう彼とジェーネチカの間には、何か冷たい、よそ／＼しい、ほとんど敵意さへ含んだやうなものが立ち塞がつた。名ごりの愛情をこめた黒い目が、もう遠いところから彼を眺めてゐた。唇は依然として微笑を含んでゐたが、目は悲しげな色をして、言葉に發しられなかつた——また永久に發しられさうもない——あるものを語つてゐた。もう言葉を交はすことは出来なかつた。ミハイロ

フは間の悪さうな微笑を浮かべながら、しきりに頷くのであつた。彼はなるべく女の出發が延びればいゝと思ひながら、またそれと同時に、このやりきれないほど莫迦々しい首振り、すこしも早く了ひになればいゝと願つた。

汽車はほとんど目に立たないくらゐ、用心ぶかく動き出したが、突然ぐいと力を入れて、一のしと思ふと、急にどん／＼と速力を早めた。あたりの群集がざわ／＼して來て、手巾や帽子を振りはじめた。

黒い眉と黒い輝かしい目を持つた鮮かな顔が、靜かに遠く流れ去つた。その隣りには肥つた將校のまるい見つともない顔が、ぬつと突き出てゐた。彼は相變らずでつぶりした細君に、同じことを呶鳴りつゞけてゐた。

「ぢや、お父さんにさう言つておくれ……忘れないでね！……」

ジェーネチカはその頭ごしに、ミハイロフを見ようと思つて、爪先だちになつてゐた。彼女はいつまでも微笑してゐたが、その輝かしい目が涙を帯び、唇が惱ましげに慄へてゐるのを、ミハイロフはもう見分けることが出来なかつた。

もう一度プラットフォームの柱の蔭に、彼女の顔がちら

と閃いて、白い手巾が打ち振られたが、もう彼女のものかどうか、見分けることが出来なかつた。遠くかなたに、無数の垂直線と交じり合ひながら、汽車の窓や昇降段が見えてゐた……列車の尾灯がちらと光つたと思ふと、停車場の柱がすべてを永久に隠して了つた。白い煙りがアーチの下で、静かに消えて行く。はるかな轟きが次第にかすかになつて、やがてすつかり静まつて了つた。

「行つちやつた！」

何か心の中でぶつりと切れて、空虚になつたやうな氣がした。ミハイロフは暫く佇んでゐたが、やがて出口へ向けて歩き出した。前にも、うしろにも、兩側にも、人がうよよ歩きながら、話しをしてゐたけれど、彼は自分がまつたく孤獨な、誰にも用のない人間みたいな氣がした。火花のやうな電燈の輝きに溢れ、辻馬車の黒い幌に埋まつた、濡れた大廣場へ出たとき、この感じはいよ／＼募つて、ほとんど病的なほどになつて來た。電車のベルや馭者の呼び聲が、奇妙によそ／＼しく響いてゐた。

ミハイロフは辻馬車を僱つて、宿屋へ歸つて行つた。

## 二二

その晩よつびで、彼は當てもなく自分の足もとを見つめて、心の底に行はれてゐる神祕な作用に耳を傾けながら、宿屋の一室を隅から隅へと歩きつゞけた。

大きな宿屋は静まり返つてゐた。どこかで休みを知らぬ鋪道が、重々しい轟きを立ててゐるのが、厚い壁を通して聞こえた……ミハイロフにとつてなんの用もない、どの誰とも知れぬ人々が、絶えずどこかへ馬車を驅つてゐるのだ。

ぼうつとした果てしもない人間の海が、彼の心に浮かんた。その海は地平線のあたりで、霧のやうに揺れ動く蜃氣樓に溶け合つてゐる。なんとといふ人数だらう……しかもそれがみんな生活して、繪や本を書いたり、女を領有したり、家々を満たしたり、めい／＼思ひ思ひに愛したり、苦しんだりしてゐるのだ。彼らはめい／＼、自分の愛や、自分の苦痛や、自分の生活が、何よりも重大な、何よりも意味のある事だと思つてゐる……

ミハイロフは合點が行かぬと言ふやうに、ひよいと肩をすくめた。

彼はなんだか妙な、落ちつきのない氣持ちになつてゐた。すこしも早く何かしなければならぬやうな氣がした。無

益な時の歩みが病的なほどはつきり感じられて、何かもう永久に取り返しのできない、想像も及ばぬやうなある貴重なもの、一秒毎に逃げて行くのを直覺した。けれども、それと同時に不思議な倦怠が、心も體も完全に包んで了つた。働くことも、話しをすることも、どこかへ行くことも、人の顔を見ることも、何もかも氣が進まなかつた。すべてが厭はしく、無益な事に思はれた。ミハイロフは自分が一體どうしたのか、何が自分に必要なのか、この疼くやうな憂愁がどこから來たのか、まるで譯が分からなかつた。

彼は無理に自分を働かさうと試みた。けれど働きもしないで鮮かなきつぱりした顔に、黒い輝かしい目と黒い眉を浮き出させた、女の首の水彩デッサンを取り出した。そして、靜かに落ちつきなく疼きつゞけてゐる心中のあるものに、絶えず内部の耳を澄ましながら、いつまでもぢつとそれを見つめてゐた。

「一體どうしたと言ふんだらう？」ほとんどいら立たしげに、彼はかう自問した。「ジェーネチカが行つて了つたのが、残り惜しいのか？」

ミハイロフは一つ眉をしやくつて、デッサンを卓の抽斗へ抛りこんだ。

「あんなものがさう珍らしいのか……あんなものならどこにでもうよく／＼してらあ……」まるで誰かに當てつけるやうに、わざと厚かましい調子で、彼は聲高にかう言つた。

夜の靜寂のたち單めてゐる、大きな建て物の空虚な一室で發せられた、自分自身の聲の響きが、並みはづれて奇妙な、不愉快なものに感じられた。なんだか息づまるやうな氣持ちさへした。彼は卓をはなれて、長椅子に身を横たへ、兩手を頭の下にかひながら、目を塞いだ。

するとたちまち彼の目の前に、ジェーネチカの顔が現れた。何かもの問ひたげな、底に何か秘めてゐるやうな目で、ぢつと彼を見たかと思ふと、急にぐらりと揺れて、ふはふは流れながら、どんよりした霧の中に溶けて了つた。と、こんどはその代りに、別の女が現れた——見事に發育したものの憂げな體に、恐ろしく明けつばなしな、何もかも知りつくしたやうな、灰いろの目を持つた、大柄な女である。

ミハイロフは官能的な満足の豫感を抱きながら、見事な流行の髪や重々しい肩から、優美な細い足の裏にいたるまで、彼女の全身を心に描いて見た。

それは彼がこんど莫斯科で知り合ひになつた、ある辯護

士の夫人であつた。何かの慈善會の晩に、彼女は自分の夫をも紹介した。それは人の好きさうな、やゝ滑稽な感じのする男で、黒い燕尾服の釦穴に、赤いカーネーションを一輪さし、見事な黒い頸鬚を生やしてゐた。彼は物質臺のそばに立つて、薄い細足のコップでコニヤクを飲みながら、金縁の鼻眼鏡の下で近視の目を、さも親しげに細めてゐた。彼女は絹の網をかぶせた白い着物に、どつしりとした美しい體を包んで（この網に透かすと、着物が裸體に見えるのであつた）、明けつばなしの透き通つた目で、落ちつき拂つて二人を眺めてゐた。きつと彼女は、自分の夫と未來の情夫が、親しげに話してゐるのを見て、一種の満足を感じたに相違ない……ミハイロフはもうその時から、彼女が自分に身をまかす事を承知してゐた。

この部屋で、つい昨日までジェーネチカの黒髪が、不安げに枕の上でうねり亂れたあの寢臺に、彼女は恥づかしげもなく岡々しく自分の體を投げ出して、前に女が幾たりこのベッドに寝たか、それさへ聞かうとしないに相違ない。

そしてまた同じことが繰り返されるのだ、同じデテール、同じ接吻、同じ口説……たゞ黒い髪の代りに、薄色の髪が振り亂され、締まつた淺黒い體の代りに、もの憂いばかり

肉感的な、豪奢の皿のやうに白い、大きな體が投げ出される……たゞそれだけの違ひだ！

昨日はこの椅子の上に、ジェーネチカの赤い着物が抛り出されてあつたが、その同じ椅子に彼女は自分の下袴や、絹のコレットを投げ出すだらう。彼女もやはり同じやうに、スナップや紐でぐづぐづ手間どるだらうし、やはり同じく解放された見事な肩が、勝ち誇つたやうな素肌を輝かすだらう……

ミハイロフは病的な表情で、氣むづかしげに顔を擡めた。「で、それから先は何？」と彼は自問した。

それから先は何もない……軽い、ばつの悪い氣持ち、欲望を満たされた後の冷ややかな感じ、それから例によつて、いつになつたら女が着物をきて歸つて行くかといふ、じれつたいやうな期待の情。歸つて行く、それは女のなし得る最上のものである——出来るだけ早く、永久に！

ミハイロフは目を閉ぢて横になつたまゝ、追憶に耽つてゐた。

なかば忘れられた女の顔が、ぼやけたやうな列を作つて彼の前に現れた……なんといふ數だらう……白つばい髪をした女、黒い髪をした女、情熱的な女、冷たい女、瘡せ

た女、肥つた女、すべてを知りつくした女、憎えたやうな目に羞恥の涙を浮かべた臆病な少女。その中の多くは、名前さへ覚えてゐないらしかつた。

この事實が不意に彼を、つとさせた。恐怖さへ感じさせたやうな具合ひであつた。

彼は思ひ出さうとして、空しい努力をはじめた。けれども結局、すべてがこんぐらかつて了つた。はつきり完全に思ひ浮かべられるのは、一人もなかつた——たゞ箇々の瞬間を覚えてゐるに過ぎなかつた。第一の女の肩、第二の女の胸、第三の女の體の曲線……體も言葉も名前もない素裸な體が、過去の中からいくつも浮かび出して、沼の上の幻のやうに、ぼつと霧の中に溶けひろがつた。

それはほとんど耐へがたい憂愁を呼び醒ました。とつぜん旅路の終りに立ち止まつて、うしろを振り返つて見たとき、自分がどこへ何しに來たのか分からなくなる——丁度さういふ感じであつた。

「しかし、これがつまり人生なのぢやないか。印象と體驗の轉換だ、不斷の快樂の連續だ！」心の奥に潜んでゐる誰かと争つてもゐるやうに、ミハイロフは我ともなしに、自暴自棄な調子でかう考へた。「だがそれなら、どうしてこ

んな惱ましい氣持ちがするんだらう、なぜこんなに病的なほど厭な氣持ちがするんだらう？……一體あは間違ひだつたのか？……一生涯が間違ひだつたのか？」

氷のやうな冷氣が彼の心をさつと流れた。

「こんな事はもう澤山だ、一生涯なんて事はない！……おれはそればかりで生活してゐたのぢやない……藝術といふものがあるぢやないか？」

「藝術！」とミハイロフは繰り返した。けれど魂はそれに反響しなかつた。心の中は死んだやうに空虚だつた。

「一體おれは藝術を愛してゐないのだらうか？……いや、愛してゐる。しかし……人間もの、べつ、繪を塗りたくつたり、本を書いたり、石膏をこねたりしてゐると、いつか飽きる事があらうぢやないか……」不意に思ひがけなく、ナウーモフの豫言者めいた不吉な聲が聞こえた。すると彼は、發狂した技師の言葉が木だまのやうに、自分の心に響くのを感じた。

ミハイロフは目の前に開けた空虚に、思はず慄然とした。彼の想像は展覽會の會場へ飛んで行つた。つい今朝ほどそこへ行つて見たのである。そこにはかの清らかに冷たい『白鳥湖』が掛けられてゐる。

幾百人といふ人が集まつてゐるにも拘らず、會場は妙にがらんとし、居心地が悪かつた。人々は出たり入つたり、感激したり冷笑したりしてゐたが、實際はどうだつて構はない、といつたやうな氣持ちが、あり／＼と感ぜられた。めい／＼が自分自身の生活を營んで、無数の仕事を持つてゐた、それは永遠な藝術と比較したら、ぜん／＼無價値なものかも知れないけれど、彼ら自身にとつては遙かに親しみのある、重大なことだつた。

色とり／＼な無数の頭が下で渦巻いてゐると、上の方からはげ／＼しい畫布がそれを見おろしてゐた。多くの繪は互に溶け合つて、華かな一つのものになつてゐた。これは一人の人間が註文によつて、この日のために壁を繪の具で塗り上げたのでなく、幾十人といふ人が、自分のしてゐることは量り知れないほど重大神聖な事業だと、ナイーヴに心の底から信じながら、一刷毛ごとに眞剣な苦しみを續けたのだと思ふと、不思議な心持ちがするのであつた。

あるものは牛小屋の印象、あるものは白鳥の泳いでゐる湖、あるものは日没、あるものは日の出、あるものはノヴゴロッドの群集を描いてゐる——かういふものの印象を聯想させるやうに、繪の具をませ合はせるのが、量り知れないほ

ど神聖で、重大な事業なのである……しかも翌日になると、荒れた庭、その翌日は——初雪、更にその後は——ストレーリツイの死刑や、女の裸體や、花束などの印象を、表現しようと思はせるのだ！……

開闢この方、人々は自分の周圍にあるすべてを描寫して、その描寫が、ほど正確に近いといつて、得々としてゐる……何百年、何千年たつても、彼らは永遠の子供のやうに、彼らの努力の上に巖然と輝く自然を、依然として模倣しつづける事だらう。

いや、よく／＼ナイーヴな信仰を抱いてゐなければ、さういふもので生きて行くことは出来ない。しかし、木の切れつばしでも信仰することは出来る……で、人々は信じた、信じてゐる、また信じて行くだらう。なぜといつて、忽然と空虚の中に目醒めて、すべてはたゞ幻であり、精神の消耗に過ぎないといふことを悟るのが、あまりに恐ろしいことだからである！……

「しかし、現に存在してゐるといふ事は、すでに立派な事實ぢやないか！」とミハイロフは考へた。「さうだ、事實だ。しかしその事實といふのは、現在生きてゐる人間や、疾うの昔に死んで了つた數千の人間が、畫布や粘土や紙の



端くれに、忘れられた自分の生活經驗の痕跡を、おぼろげに残しただけのものぢやないか……この臆げな痕跡によつて後世の人々は、磨滅した古代文字でも讀むやうに、人類の歴史を讀みとつて、今まで一度ならず想像してゐた眞理を、最後の頁に觀破するかも知れない。それはほかでもない、人生が無意義なもので、人間は永遠の風に弄ばれる塵切れに過ぎない、といふ事なのだ。」

「さうだ、遅かれ早かれ、彼らは最後の一字まで讀み終つて、心に死のやうな空虚を感じながら、無關心に『大團圓』と書き添へるだらう……」

ミハイロフは自分をどうしていゝか分からないで、恐ろしく惱ましい不安を抱きながら、立ち上がった。神經が一本々々、絲のやうに緊張して、今にも切れさうなほど惱ましい氣持ちで、彼はしばらく部屋の眞ん中に佇みながら、みじめな手頼りない様子であたりを見廻してゐた。やがて思ひ切つたやうに寢臺へ身を投げて、電氣を消した。

すると窓のそとが早速あかるくなつた。しのゝめが近よつて、病人の息のやうなねつとりした霧を、汗ばんだ窓硝子に置いた。

ミハイロフは早く寢入らうと空しい努力をした。ときど

きは重苦しい、どんよりした半醒半睡の状態で、忘我の境をさ迷つたのかも知れないが、しかし彼は、いつも目が明いてゐたやうな氣がした。そして、さまざまな想念は秋の雲のやうに、絶えず惱ましげに頭の中を去來するのであつた。

やがて新しい日が訪れて、新しい逢遭、新しい思想、新しい感情が生じるだらう……彼は多くの星霜を過ごして、黒髪には霜を置き、目の光りは鈍り、手は慄へ始めるだらう……老いたる畫家は、手車に縛りつけられた囚人のやうに、空虚な魂を抱いて死なないために、手を休める勇氣さへなく、どこまでも繪を描きつゞけるだらう。生涯の終りの幾年かが、佗びしく灰色に續いて行く……女も次第に離れて行つて、月の夜はたゞ寒く濕つぽいものに感じられ、日光に満ちた日もうす暗い長いものに思はれ、貪婪な生活慾に満ちてゐた生活も、徒に惱ましい重荷となり、藝術も飽き飽きした習慣に變はつて了ふ。その中にやがて最後の病ひが訪れ、苦痛と死が襲つて来る……そして、自分になんの必要もない墓前の弔辭で、一切が終りを告げる……すべては單純で退屈きはまるものである。それはまるで全生涯が、この避けがたい恐るべき終焉に對する、準備に

過ぎなかつたやうな氣がするくらゐである。

寝られぬ夜の鈍い忘我の状態で、ミハイロフは始めてこんな事を考へた——もし新しい日がぜん／＼始まらなかつたら、どんなにいゝ氣持ちだらう。繪も、女も、苦痛も、快樂も、一切なにもほしくない。

彼は平安の世界が、甘く懐かしいものに思はれた。

一三

翌日は郷里へ歸つた。

なんのために出掛けたのか、自分でも分からないで、ミハイロフは汽車に乗つてゐる間ちう、依然たる惱ましい焦燥を感じつづけた。

彼は横になつて見たり、起きて見たり、入り口のところへ出て見たり、食堂車で酒を飲んだり、幾時間も當てなしに窓のそとを眺めたりしてゐた。

涙を滲ませたやうな窓のそとを、濡れしよぼけた野原が佗びしげに走つてゐる。とき／＼土の中へめり込んだやうな、腐つた堆み肥えに似た村や、營養不良らしい林や、慄へ戦く小川や、どこかへ飛んで行く濡れた鴉などが目を掠めた。一面にどんよりした雨の幕に閉ざされた、この果て

しもない灰色の佗びしい空間を眺めてゐるうち、ふとからいふ奇怪な想念が頭に浮かんだ。

「一體こんなところにも人が住んでゐるのだらうか？……彼らは何を考へてゐるのだらう？ 長い長い毎日の日を、どうして暮らしてゐるのだらう？ そして、なんのために生きてゐるのだらう？……」

すべてのものが悄然として、貧しく灰色に見えた。ぬか雨が果てしなく降りつづけて、天も、地も、森も、村も、飛んで行く鴉も、荒廢した通過驛に立つて、鈍さうに汽車を見送つてゐる、濡れしよぼけた灰色の百姓らも——すべて何か貧しい永遠の悲しみに、泣いてゐるやうに思はれた。不眠の一夜を明かしたために、ミハイロフの頭には霧のやうなものが詰まつてゐた。とき／＼彼はなんにも考へないで、たゞ何か恐ろしい最後のものが、自分の身に起こりかゝつてゐる、といふ事を感じるばかりであつた。

わが家へ歸り着いて、まる一日重くるしい鈍い眠りを貪つたとき、ミハイロフはやつと始めて、正氣に返つたやうな氣がした。埃の積もつた冷たい書室に一瞥を投げ、窓外の濡れた庭を眺めたとき、彼は慄然としてかう自問した。「なんのためにこゝへ歸つて來たのだ？……だつてこれは

もう一切の終りぢやないか!……」

彼はとつぜん妙に途方にくれて、長い間まつたく當てなしに、部屋の中を歩き廻りながら、道に迷つた人のやうに、きよろ／＼あたりを見廻してゐた。

黄昏は次第に濃くなつて來た。ミハイロフは器械的にラムプをともした。すると、たちまち窓のそとが眞つ暗になつて、晝室の中では金縁の額がきら／＼光り出した。そして剝製のふくろふは、天井の上に、もの凄く翼を擴げた黒い怪鳥を生み出した。

あかりがつかくと、なんだか気が輕くなつた。ミハイロフは茶を飲んでから、旅装を解き、俱樂部へ出掛けることに決めた。彼は、誰かに會ひたいやうな氣持ちさへして來た。そして老醫師アルノルヂイを思ひ出したとき、多少の満足感さへ覺えた。

この時リーザがやつて來た。

彼女はほとんど駆けこむやうに入つて來た。雨で全身ぐしよ濡れになつて、興奮のために息を切らせ、頭に被つた妙な鼠つばい布の下から、濕氣のために溶けた髪を覗かせてゐた。彼女は途方にくれたやうな、何か悪いことでもしたやうな様子をしてゐた。彼女は自分で自分の大膽さに慥

えた風で、男がどんな態度で迎へてくれるかと、びく／＼してゐるらしかつたが、そのナイーヴな目は喜びに輝いてゐた。

ミハイロフは帽子を手に持つたまゝ、晝室の眞ん中に立つて、やゝ暫くけんさんさうに女を見つめてゐた。彼は一別以來、一度もリーザのことを思ひ出さなかつた。彼女との關係はもう終りを告げて、リーザは自分の生活から永久に去つて了つた、かういつたやうな氣持ちがしてゐたのである。ところが、とつぜん彼女が姿を現した——その臆病らしい様子には、抑へつけたやうな激情が感じられ、そのもの問ひたげな目は、愛と喜びに輝いてゐる。

女は部屋へ入ると、そのまま戸口に立ちとまつて、何か悪い事でもしたやうな、同時に喜ばしげな微笑を浮かべてゐる。

ミハイロフはその祈るやうな、身も心も投げ出したやうな目つきをちらと見て、急にばつ、の悪さを感じた。これはさう單純なことぢやない、自分の目の前には何か偉大な、惱ましいあるものが控へてゐて、これからまだそれを乗り越して行かなければならないのだ——彼はとつぜんこれをはつきりと悟つた。

「あゝ……あなたですか？」彼は愚しく言葉尻を引きながら、自分でもこれから何をし、何を言はうとするのか知らないで、一步、女の方へ踏み出した。

この動作がリーザの目にどう映つたのか、彼女の顔はたちまち限らない歡喜と、言葉に盡くしがたい愛情に輝き渡つた。彼女はミハイロフに飛びかゝつて、例の風つぽい頭巾を床へ落としながら、兩手を男の首へ廻した。そして、その目を見上げる勇氣もなく、ちつとそのまま立ち竦んだ。

一分間ばかり、二人は部屋の眞ん中に立つてゐた。ミハイロフは女の暖いしなやかな體が、慄へながらひしと寄り添ふのを感じた。彼はそのとき始めて、この短衣コウイと小さな風つぽい頭巾のほか、何一つ彼女の身についてゐないのに氣づいた。そとは寒くて、針のやうな雨が横しぶきに降つてゐる。何かしら暖い優しいものが、彼の内部でかすかに動いた。彼は女の顎に手をかけて、しきりに隠さうとする顔を持ち上げた。と、明るい涙を一杯たゞへた、ほとんど幸福に慍おぼえたやうな、大きく擴げられた目が網膜に映じた。彼は女の唇に接吻した。

リーザは全身をびくりと慄はした。

ちよつと一瞬間、彼女は身をよけるやうな恰好をしたが、

ちらと男の顔を見上げたと思ふと、いきなり前より一そう強く兩手を締めて、夢中に唇を押し當てた。やがて再び體をもぎ離して、自分の幸福を信じるのが出来ないものやうに、もう一ど男の目をちらと眺めたのち、その顔、額、髪、目などを接吻しはじめた……彼女は自分で自分が何をしてゐるか、意識しないやうな風であつた。

と、不意に泣き出した。

「え、どうしたの……一體どうしたの、可哀さうに！」とミハイロフは慄へを帯びた聲で訊ねた。そして、何か鋭いあるものを胸に感じながら、まだ濡りけを帯びた薄色の髪を撫なではじめた。

「わたしそりや苦しみましたわ！」とリーザは憐れつぽく呟いて、また泣き始めた。

女のうな垂れた薄色の頭を見おろしながら彼は無言のままその髪を撫でつづけた。瞬間的な愛情の發作が過ぎて、たゞ刺すやうな哀憐の情と、惱ましい罪の意識ばかりが残つた。彼は父親がいたはるやうな態度で、女の頭を撫でてゐるのに、自分でもそれと氣がついた。

剃製のふくろふは意地わるさうな黄色い目で片隅から彼らを眺めてゐた。そしてなぜかミハイロフはこの不快な、

氣味の悪い、死んだ鳥の瞳に注意を向けた。

思ひがけなくリーザは頭を上げて、涙の下からほゝ笑んだ。

「わたし真迦ねえ！」と彼女は言った。「可愛い、可愛い、可愛い人！」

つまり、彼女はこの言葉で男のことを、毎日毎晩おもひつけてゐたのである。

彼女は両手で男を突き放して見たり、また接吻したり、またすこし自分の體から押しやつて、幸福と愛情に狂つたやうな目で、しげ／＼と眺め入るのであつた。彼女はどうしたらいゝのか、苦痛と幸福で自分の若々しい體を満たしてゐる愛情を、どんなに表現していゝか、もうまるで分らないらしかつた。

ミハイロフはばつが悪くもあれば、恥づかしくて堪らなくもあつた。

「あなたはわたしの神さまよ！」とリーザは情熱の溢れる聲で言つた。この月並みな言葉が痛いほど彼を刺した。

「さあ、もう澤山……」と彼は言つた。「お坐んなさい、なんだつてお互に突つ立つてるんでせう……」

けれども、リーザはその聲が耳に入らないやうに、抱き

締めた手を放さうとしないで、歡喜に満ちた目でいつまでも眺めつゞけた。この瞬間、彼女は自分の經驗したすべてのもの——惱みも、嫉妬も、町ぢうの蔭口も、屈辱も、絶望も——こと／＼く忘れて了つて、たゞ彼を——若き神のごとく、輝くばかり美しい、愛する男の姿のみに見とれてゐた。

彼女の胸は偉大な愛情に満ちてゐたので、一切の暗黒なものはその中に沈んで了つて、これから後はたゞ喜びばかりが残つてゐるやうに感じられた。

「どうして分かつたんです、僕の歸つた事が？」とミハイロフは聞いた。

「あなたつたら、わたしに一言の便りもくださらなかつたのね……たゞの一言も……わたしそりや……」リーザは返事の代りに、柔かい非難を帯びた調子で、さも悲しげにかう言つた。

「僕は非常に忙しかつたもんだから……」とミハイロフはまづい言ひ譯をした。

けれど、リーザは今度ももう聞いてゐなかつた。そして、幸福のためにもの狂はしくなつた目を、大きく見開きながら、男を見つめてゐた。もう戀ひ人がこゝにゐる以上、過

ぎ去つた事などはどうでもいゝではないか！

「さあ、坐りませう？」ほとんど苦しきやうな聲で、ミハイロフはかう繰り返した。

彼女は憚おどろえたやうにちらと男を見上げて、音なく長椅子の方へ歩き出した。けれど腰をおろすが早い、いきなり床へ滑すべり落ちて膝をつき、ミハイロフの息が苦しくなるほど、しつかり両手で彼を抱きしめた。

これが彼には芝居じみて、滑稽に思はれた。どうしてこんな下品な町娘と、關係することが出来たのだらうと、不思議に思はれるくらゐだつた。まつたくこの「下品な町娘」といふ粗野な言葉が、彼の頭を掠かめたのである。たとへどんなに愚かな莫迦々々しい事であらうと、一切を蔽おほひつくすやうな偉大な愛情を、ミハイロフはもう理解する力がなくなつてゐたのである。

彼はほとんど力づくで、リーザを起き上がらせ、そばに並らんで坐らせた。そして、二度と逃がさないやうに、長椅子の肘かけへ女の頭を押しつけながら、接吻しはじめた。リーザはその接吻のもとに身を　ながら、目を閉ぢて了つた。この瞬間、彼ははじめて彼女を女として感じたのである。

彼女は彼のものとなつてゐたけれど、ミハイロフはまだ一度も彼女から、官能的な反應を感じなかつた。彼女はすでに女となつたにも拘らず、依然として處女のごとく純潔であつた。

ところが、いま男の接吻につままれながら、彼女は妙に全身を慄おそはせ、身を起こさうともがきはじめたが、やがて低い呻うき聲を立てて、ぢつと目を閉ぢたまゝ、痲痺しびしたやうになつた。彼女の頬は燃え、火のやうな若々しい體は、無意識的に、男の方へ吸ひ寄せられて行つた。今もう彼女は　をあげて、みづから男に捧たげてゐるのであつた。

この始めて目醒めた　は、まるで強い酒のやうに、ミハイロフの頭をくらました。彼の目は貪婪おんぼんな輝きらきを放ち、膨ふくらんだ薄い小鼻はびく／＼と慄おそへはじめた。彼は女の閉ぢた臉おもてや怪しく慄おそへる睫まぶ毛まゆげや、沾ぬみを帯びて力なげに半ば開かれた唇くちびるや、燃えるやうな頬や、惱おこましげに萎しえもだえる體かたぜんたいを、貪るやうに見つめてゐた。

あたりはぼうつと霧きりに包まれて、ふは／＼と動き出した。彼は女を長椅子へおろし、　をもつて、　め

彼は生まれてまだ一度も、かういふ充實した壓倒的な感じを、経験したことがないやうな気がした。

リーザは幸福げな輝かしい目を見開いて、ふと我に返つたやうに、喜ばしげな驚きの表情で、あたりを見廻した。それから一聲さげびをたてると、幸福に燃える顔を男の膝に埋めた。

けれどミハイロフはもうだるさうな、馴れつこになつたやうな目つきで、彼女を眺めてゐた。これはすべて何度も見たことである、何もかも知りぬいた事である。彼女は當然こんな風に叫び聲をたてて、體を隠すべき筈なのであつた。彼は急に退屈になつた、胸の悪いほど厭な氣持ちになつた。

「またか！」といふ惱ましい考へが彼の頭を掠めた。ミハイロフは彼女を突きつけて立ち上がり、煙草を吸ひつけながら、どこかへ行きたくなつた。

「さあ、お坐んなさい、リーザ……僕はあなたに話しをしなければならぬ事がある……」彼はやつとのことでもかう言つて、じれつたさうに彼女の肩を持つて抱き起こした。「わたしあなたを愛してるのよ！」リーザは返事の代りに、氣でも狂つたやうにかう言つた。

ミハイロフは手頼りなげに押し黙つてゐた。

「さあ、言つて頂戴、何か言つて頂戴！」まだ男の顔を見上げる勇氣がなく、彼女は濟まなさうに早口にかう言つた。見受けたところ、彼女は自分の内部に行はれた偉大な新しいものを、まだ味はひつゞけてゐるらしく、よく前後の判断がつかないやうな風であつた。

それは明るい歡喜でもあれば、情慾に甦つた肉體に充ち溢れる、波のごとくに純潔偉大な力の潮來でもあり、處女らしい羞恥でもあつた。彼女の體と魂を作りなしてゐる、一つ一つの原子が幸福に溢れてゐた。が、それと同時に、彼女は自分といふ人間が、墮落した忌はしい、穢れきつたもののやうに感じられた。

「實はね、」とミハイロフは言ひ出した。「前からあなたにさう言はうと思つてゐたんだが……あなたが僕をそんなに愛してゐるのは、そりや間違ひですよ……」

「あなたはわたしの神さまです！」この一語でもつて、相手の言ひ得るすべてを蔽ひ盡くさうとするやうに、リーザは前後を忘れた執拗な歡喜の聲で、またかう繰り返した。

ミハイロフは肩を竦めた。

「ぢや、言ひませんわ、言ひませんわ！」とリーザは子供

のやうに、急いで打ち消しながら、さも喜ばしげな、濟まなささうな表情で、男の目を下から覗きこみながら、その両手を取つた。

「一體どんなお話しですの？」もう落ちついて注意ぶかく聞いてゐる、恐ろしく注意ぶかく聞いてゐる……といふ事を見せようと努めるらしく、彼女は滑稽なほど眞面目に問ひ返した。

「なぜ間違ひなんですか……だつて、あなたは立派な人ぢやありませんか……わたしの大好きな人だわ……」

恐ろしい重石が次第に強くミハイロフを押しつけて来た。彼はこの一切を認めず、一切を顧みない愛に面して、すつかり間違つて了つた。

「あなたは才能のある美しい人ですわ……わたしの神さまだわ！」

この言葉はミハイロフをもの狂はしい気持ちにした。彼はそれが堪らないほど俗なものに思はれたのである。慘酷な毒々しい決心が、腹の底に生まれて來るのが感じられた。「こんなことは一思ひに片づけなくちやならない！」齒を食ひしげりながら、彼はかう考へた。

「僕は決してあなたの考へてるやうな人間ぢやありません

よ、リーザ！」ミハイロフは唇を歪めて、微笑しながら言つた。「あなたのなし得る最善のことは、すこしも早く僕と別れる事ですよ！」

リーザは突然まつ青になつて、恐怖の表情で彼を見つめた。その明るい目の中には、何か恐ろしい深淵が開けた。

「そんなことが出来るのですか！」氣うとい驚きの聲で、彼女はかう言ひ返した。

ミハイロフは言ふべき言葉を知らなかつた。

リーザは急に生氣のなくなつたやうな目を、大きく見開きながら、長いあひだ彼を見つめてゐた。その視線に押されて、ミハイロフが思はず顔をそむけるに従つて、彼女はだん／＼青くなつて行つた。

「あなたはもうわたしを愛してくださらないんですの？」とリーザはゆつくり言つた。さういふ場合ひがあり得るといふ事さへ、信じられない様子であつた。

「僕は誰も愛しません！」ミハイロフは氣むづかしい調子で、にべもなくかう答へた。

沈黙が襲つて來た。リーザの唇はびくりと慄へた。それは何か聞かうと思ひながら、思ひ切つて言葉を發しかねる様子だつた。



「あゝ、リーザ」女の不思議な視線に耐へきれなくなつて、ミハイロフは悲痛な聲で言ひ出した。「僕がどんなに苦しいか、それがもし分かつて貰へたらなあ……」

「あなたはほかの人を愛してゐらつしやるの？」相變らずゆつくりと生氣のない聲で、リーザはかう尋ねた。「ちや、わたしは？……」

彼女は明かに理解できなかつたらしい。彼女にはすべてが極めて單純明瞭に思はれたのである——一たん彼に身を任せた以上、自分の命よりも、世界の何よりも強く彼を愛してゐる以上、今のやうな事があつた以上——彼が自分を愛しないと云ふ事は、あるべき筈がない。もしさうでなかつたら、その時は一體どうなるのだらう？

「僕はもうさう言つたぢやありませんか、誰も愛しちやわないつて——」とミハイロフは病的に繰り返して、いきなり立ち上がった。

彼女は腰かけたまゝ、下から彼を見上げた。それはこの懐かしい、しかも不可解に慘酷な男の顔を、今はじめてはつきり見定めて、本當にすることが出来ないやうな表情であつた。

「まあ、お聞きなさい、リーザ。」ミハイロフは平靜になら

うと努めながら、女の顔を見ないでかう言ひ出した。「僕はあまり大勢の女に接しすぎたので、すつかり自分を消耗してしまつた、なしくづしに使つてしまつた。だから、あなたのやうな愛し方は出来ないのです……あなたはたゞ女として僕の氣に入るだけなんです……あなたが傍にゐると、自分のものにならないではゐられないけれど、愛するなんてことは出来ません……力に及ばないので……」

リーザは無言のまゝ、身動きもせずには彼を見つめてゐた。「あなたにとつて必要なのは、あなたの純潔さに價するやうな、さういふ愛し方の出来る人間です……あなたは實に愛すべき、優しい、美しい人だから……あなたのやうな人は、健全な、本當の愛をもつて愛さなくちやなりません……ところが、それは僕にとつて不可能なのです……僕には官能以外に何ものもありません……僕にとつてあなたはたゞ大勢の中の一人に過ぎないんです……一體あなたは承知なさいますか、同時に存在する幾たりかの女の一人となる事を？……」

リーザはまるで顔でも叩かれたやうに、ぎくりとして、一步あとへよろめいた。きつと何か合點が行つたのであらう、唇をもぐぐ動かし始めた。

「ぢや、あれは本當なんですね、あなたがあの女優と……關係してゐらしつたといふのは？」恐ろしくのろ／＼と、非常な努力をしながら、彼女はやつとこれだけの事を言つた。

ミハイロフは思はず目をそらした。彼女に比べれば、自分が取るにも足らぬ、穢れた、みじめな人間に感じられた。

「それでも僕はあなたに對して、べつだん悪いことはしないですよ……」彼は返事の代りに、へどもどしながら言ひ譯を始めた。「僕は今まで一度も、あなたを愛してゐるなんて言はなかつたから……」

この瞬間、彼はそれが本當のやうな氣がした。なぜといつて、彼が「愛してゐる」と言つたとき、その言葉は心の内部になかつたので、別に氣にもとまらず、記憶にも残らなかつたからである。

「わたしと一緒に？」リーザは相手の聲に耳を貸さうともせず、かう言葉をつぶけた。

ミハイロフは肩を竦めた。

リーザは靜かに立ち上がった。そして途方にくれたやうに、何やらあたりを捜しはじめた。彼女の唇は慄へ、生氣のない目は、氷に閉ざされた二つの深淵のやうに、恐怖を

浮かべながら、ぢつと見据ゑてゐた。その中では、一切のものが死に盡くしてゐた。

ミハイロフは器械的に女の動作に従ひながら、鼠色の頭巾を手渡した。渡したあとで、はじめて彼は自分の行爲にぞつとした。

彼女は氣うとい目つきで、ちらと頭巾を見やると、癡癡的に引つ摺んで、頬に押し當てながら、理解力を失つたものの狂はしい目で、ミハイロフを見つめてゐた。やがて我とわが頭を摺んで、あつと一聲たてると、そのまゝ部屋を駈け出した。

「リーザ！」とミハイロフは狼狽したやうに叫んで、あとを追ふやうに一步ふみ出した。

けれど、彼女は引つ返さなかつた。

彼は長いあひだ、部屋の眞ん中に立ち竦んで、明け放された黒い戸口を見つめてゐた。

耐へがたい自己嫌惡の念が彼を摺んだ。何もかも一時に打ち碎かれて、崩れ落ちたやうな具合であつた。心の中には哀憐も憂愁もなく、たゞ恐ろしく無關心な疲労と、嫌惡の癢癢があるばかりだつた。けれどもこの瞬間、彼はこの事件の恐ろしい意味を、まだ充分に悟らなかつたのであ

る。

劉製りゅうせいの梟ふたかぶはまるい黄色な目を無氣味に、毒々しく彼の方へ剥むき出してゐた。

一四

がた／＼と騒々しい物音や鈴の響きなどが、ミハイロフを正氣に返らせた。

一群の人々が聲高こゑたかに話しながら、足音たかく入り口の階段を上がつて來た。幾秒かたつた時、戸口の黒い四邊形の中に、肩幅の廣い、凄まじい形相かたちをした、アルブゾフの姿が現れた。鉦かねをばづした外套の下に、眞つ赤なルバーシカを着こみ、はねだらけになつたエナメルの長靴をはき、目庇めびつきの帽子を威勢よく阿彌陀あみだにかぶつてゐた。

「さあ、ゐたぞー」どつかと部屋の中へ踏みこみながら、アルブゾフはかう喚わめいた。「よう、セルゲイ！……君ひとりなのか？……おれたちは君を迎へに來たんだよ……行かう！」

「どこへ？」まだはつきり正氣に返りきらないミハイロフは、器械的にかう問ひ返した。

アルブゾフの後から、どや／＼と騒々しく入つて來た

のは、長い騎兵外套を着たの、つぼの少尉補のクラウゼと、口髻くちびの見事なトレニョーフと、肥つたイワノフ中尉と、それからみんなの後に控へた一人のなま若い將校と、臆病おそさうにもじ／＼してゐるルイスコフであつた。

「俱樂部さ！……大いに飲んで騒がうぢやないか、死に神がやつて來たら死ぬまでだ！」とアルブゾフは兩手を振り廻しながら喚わめ鳴つた。「おい、セルゲイ、僕はもう三週間飲み通してゐるんだ、どうしても素面しよふでゐられねえ！……ほかにこの世で何をする事があらう、つて言ふのは本當だね……誰もかれも繪かきや色事師いろしにやなれないからね！……人はそれ／＼自分の樂しみがあらあね！……ときに、あの女優はどこへやつたい？」

「君は今でも酔つぱらつてゐるぢやないか！」とミハイロフは唇を歪ゆがめながら、苦笑くわくごひした。「出たらめはいゝ加減にしろよ！」

「出たらめだつて？……本當だ！」もうすつかり有頂天になつた様子で、アルブゾフはかう喚わめいた。「女優も出たらめなら、ほかの女もみんな出たらめだ！……おい、セルゲイ、さうぢやないか、違つてるかい？……」

彼は眞まつ青あおな顔をして、額ひたいには大粒の汗が滲み出してゐ

た。

「さうだよ、さうだよ……」いゝ加減に相手をはづすために、ミハイロフは無器用らしく相槌を打つた。

彼はアルブゾフがなんとも言へないほど不愉快な、重くらしい人間に思はれた。

「あなたは莫斯科から歸られたんですか？」不意にひよろ長いばか丁寧なクラウゼが、前へのり出して來た。「あちらの陽氣はどうです？」

ミハイロフはびつくりしたやうに彼を見やつた。そして、この少尉補もやはり酔つぱらつてゐるのだな、と思つた。そのとき彼は前より注意して一行を観察した。ナウモフ一人をのけると、みんな負けず劣らず酔つてゐるのに氣がついた。ついでに言つて置くが、ナウモフの出現は、なぜかミハイロフにとつて不快だつた。まるでこの技師が、何か厭なことを思ひ起こさせるやうな具合ひだつた。

アルブゾフはしきりに喚きながら、兩手を振り廻してゐた。クラウゼは無言のまま、注意ぶかく眉を動かしてゐるし、トレネيوفは氣取つた様子で鬚を捻りながら、何が可笑しいのか高笑ひしてゐた。アルブゾフの氣紛れで、この仲間に引きこまれたルイスコフは、まだよく勝手が分

からないらしく、自分の體をもて扱ひながら、みんなの後に小さくなつてゐた。

ふとミハイロフの頭に、自分も酒を呷つたら、さぞいゝ氣持ぢだらう、といふ考へが浮かんた。胸の中のもだくをどこかへ吹き飛ばしてふほど、前後不覺に酔つぱらつて見たい。不思議な透き通つた目をしたリーザの顔が、依然として彼の前に立ち塞がつてゐた。

「そりやいゝさ……」と彼は言つた。「行くのなら早く行かう！」

「ブラブロー」氣うとい黄色い目をした剝製の鼻が、不安げに身慄ひするほど、アルブゾフは大聲に喚いた。

アルブゾフはその方へ視線を向けた。足を大きく踏み擴げ、強情らしい廣い額の下に、充血した黒い目を輝かしてゐる頭を垂れて、彼は長いあひだ陰鬱な表情でちつと見つめてゐたが、やがてさも忌はしさうに眉を蹙めた。

「なんだつてこんな厭らしいものを置いてくんだ？……こんなものより熊を屈けてやらう。」

「一體どこへ置くんさい？」

「熊の方がいゝよ。」

「一體そんなものをどこから取つて來るんだい？」

「おれんとこに熊がゐるんだよ。」

「さう、お宅には生きた熊がゐりましたね。」とイワノフ中尉は分別らしく口を入れた。「しかし、生きた熊を部屋の中で飼ふ譯に行きませんぜ！」

アルブゾフは、酔つぱらひらしいげんんな表情で、その方を見やつた。それは生まれてから始めて、生きた熊は家の中に置けない、といふ考へが頭に浮かんだやうな鹽梅だつた。

「それもさうだなあ……モデル女をみんな殺して了ふだらう！……だが、冗談はさて置いて、殺して皮を剥いだ奴を進呈することにしよう！」

「殺しちや可哀さうだ、なか／＼いゝ熊ぢやないか！」何やら笑ひながら、トレニョーフが口を入れた。

アルブゾフは暗い表情で彼を見やつた。全體に彼の目つきには、何か妙なところがあつた。すべての人を迂散くささうに、見透かすやうな具合ひだつた。

「可哀さう？……何をくだらない！ 何も可哀さうなものはありません！……叩き殺したら、それで済んだ！」と彼は狂暴な聲で言ひ返した。「どいつもこいつもみな殺しにしてやる！……熊なんかなんだ！……熊なんてくだら

ない……セルゲイのためなら、なんだつて惜しかあないや！……おれはこの男が好きなんだ！……セリョージャ、熊がほしいかい？」

「うるさいよ！」とミハイロフは氣むづかしげに答へた。

またしても始めて會つた時と同じやうに、彼はアルブゾフが心にもない事を言つてゐるやうな氣がした。彼の酔つぱらひらしい、突拍子もない言行には、何か今までになかつた毒々しい、向から見ずなるものが感じられた。

「まあ、取つて置けよ！」

「出掛けようぢやありませんか、諸君！」とイワノフ中尉が言つた。

「ぢや、いゝよ……ほしくないのなら——無理にや勧めないさ！……ほしけりや自分で取るだらう！……さうぢやないか、セリョージャ、え？……」

ミハイロフはちらとアルブゾフを眺めた。と、思ひがけなくその酔ひどれた暗い目の中に、恐ろしい露骨な憎悪の色を見てとつたので、彼は思はず顔をそむけた。

「どうも豪氣に酔つてるね！」と彼は氣むづかしげに繰り返して、その美しい首を傲然とそらした。「それでも、まだ監獄へぶち込まれた事はないのかい？」

「金を拂つたよ！」とアルブローツフは陰鬱な聲で答へた。クラウゼ、トレニョーフ、その他のものはもう出かけてゐた。ミハイロフは外套を着て、あかりを消し、晝室に鍵をかけて、みなその後から出て行つた。

はじめ闇の中で、何ひとつ見分けがつかなかつたが、やがて庭の暗い木立ちの間が、うす白く透いて来て、三臺の馬車の影が黒く浮き出した。暫くこつた返して、冗談半分の悪口を投げ合つたのち、一同はそれ／＼席についた。そして轟然たるどよろきと、鈴の音と、人々の叫び聲と共に、馬車は泥をはね飛ばし、犬を驚かしながら、往來に沿つて疾驅しはじめた。

「引つばたけ！」とアルブローツフは先頭の三頭馬車の上で、荒々しく嗷鳴つた。

イワノフ中尉は傳説の山賊ソロゴイのやうに、口笛をひう／＼吹き立てた。

すべてが速く静まりはてた時、ミハイロフの庭に立つてゐる古い林檎の大木から、鼠色の布をかぶつて、濡れた髪をおどろに振り亂した、闇の中にやうやくそれと見分けられる女の姿が、現れた。

晝室から駈け出したリーザは、入り口の階段に足をとめ

た。彼女はどこへ行くところがなかつた、また行くべき用もなかつた。優しい愛情と愛撫の中に花を開かうとして、若々しい強健な肉體とともに、力強く生長してゐた本質的のものが、こと／＼と探みくたになつて投げ捨てられ、泥濘の中に踏みにじられたのである。

痛ほど甘い空想に浸つてゐた月の夜も、ほんの申し譯に布で蔽つた肩や若々しい胸に、日光の暖かみを感じながら、詩的な喜ばしい氣持ちで庭を駈け廻つたらう／＼かな日も、花も、庭も、雲も、すべてを抱擁する全世界が、不意に汚らしい雑巾みたいに、もみくたになつて了つたやうな氣がした。すべてのものが崩れ落ちて、彼女の周圍も内部も、恐ろしい空虚に領せられたのである。

門に近よる馬車の轟きや、鈴の音や、酔つぱらつた人々の喚き聲が、彼女を正氣に返らせた。彼女はどこへ身を隠していか分らないで、入り口の階段をうろ／＼してゐた。よしミハイロフの家にあるところを見つけられても、決して恐ろしいとは思はない——今となつて人がどんな事を言はうと、どんな風に考へようと、同じことであつたが、彼女は自分がいかにも虐げられ、辱づかしめられた、不仕合はせぬ人間のやうに思はれて、こんな姿を人に見られる

より、いつそ死んだ方がましだと思はれるくらゐだつた。

彼女は器械的に、家の中へ駆け戻らうとしたが、不意に一切のことを思ひ出すと、さつきこのやうに兩手で頭を握み、着物に足を纏らせながら、庭へ駆け出した。

くどりから入つて行く男たちの黒い姿が、今にも自分の存在に氣が付きさうに思はれたので、リーザは庭の一ばん遠い片隅に入りこんだ。

そこはまるで森の中のやうに暗かつた。周囲の木立ちは、眞つ黒な無言の茂みに溶け合つて、息づまるやうな闇が、一本々々の植多込みの蔭から、底のないやうな目でリーザを見守つてゐた。

雨はやんで、空のところどころ雲切れがしてゐた。上方は眞つ黒で、隙間もる光りも見えないくらゐであつたが、それでも芽えた秋らしい星が、枝の間から光つてゐた。リーザの頭の眞上に、大きな輝かしい星が一つ、謎のやうに長い光線を揺り動かしてゐた。

ふと肩で小枝に觸つたので、大粒な冷たい滴が、闇の中で彼女の全身を濡らした。濡れた薄い着物が、べつとり肩にねばりついた。彼女は寒さに總身を慄はせてゐるのにも氣がつかないで、濕つばい茂みの中にすつかり消え盡くさう

とするやうに、立ち木の幹にびつたり身を寄せたまゝ、闇の中に立ち通してゐた。

やがてアルプーゾフの一行が、笑つたり吠鳴つたりしながら、支關へ出て來た。長いあひだ門のそとで、馬車の席を決めてゐる物音が聞こえた。リーザはアルプーゾフがかう叫ぶのを聞いた。

「セルゲイ、おれと一緒に坐れ！」

ミハイロフの名前を聞くと、彼女は無言の恐怖に全身を縮めた。

小鈴の不揃ひな響きが、往來にけたましく鳴り渡つたと思ふと、一行は見る見る遠ざかつて行つた。大地が鈍く慄へるのが感じられる。人達はだん／＼低くなつて、やがてあたりはひとつそりして了つた。静寂は四方八方から忍び出て、息づまるやうな沈黙が、暗い庭に魔術をかけた。量り知れないほどの高みでは、黒雲のかけから、星くづがきら／＼と冷たくまた／＼きはじめた——更に遠く、更に高く。

リーザはまるで幽霊のやうに、そつと庭から出て、家の前の空き地の眞ん中に、失神したやうに立ち止まつた。

「これからどこへ行かう？」と彼女は考へた——といふよ

りむしろ直感した。

家へ？……なんのために？……そこでは屈辱が待つてゐるばかりだ、そこへ歸ると、彼女は生活を傷つけた汚いしみに過ぎない。周囲のものが何もかも空虚になつた。彼女はどこへ行つても、誰にも用のない人間なのだ。

リーザはのろ／＼と入り口の階段を通り過ぎた。つい一時間まへは、あれほど耐へがたい喜びに、胸を踊らしながら駆け登つた階段、彼女は思はず振り返つて見た。

びつたり締め切つた戸が、闇の中にぼんやり白く見えてゐた。家は黒い塊りのやうに、ずつしりと恐ろしく聳え、暗い窓々には一點の火も見えなかつた。

まるで家を追ひ出されたもののやうに、リーザは立ち止まつて、あたりを見廻した。と、不意に玄關の方へ飛んで行つて、酔ひしれた群集に踏みにじられた、泥だらけの階段に頭を載せ、そのまま死人のやうにぢつとしてゐた。

青ざめた星の光りが、階段に身を縮めてゐる彼女の哀れな姿を、やうやくそれと照らし出してゐた。自分の戀ひの亡びたこの家を去つて、どこへ行く當てもないのを感じながら、彼女はなんにも考へないで、身動きせずぢつとしてゐた。

彼女ははつきりさう考へた譯でもないけれど、自分もろ氣が違つたのだと、體感したいでさう感じてゐた。彼女の偉大な他念のない愛は、彼女にとつて全世界を満たし、かつ照らしてゐたのである。とき／＼リーザは、この愛が恐ろしく大きなものに思はれて、こんな大きな感情が小さな體に盛られてゐるのを、空恐ろしく感じる事があつた。とても心が持ちきれないだらうと、心配なくらゐだつた。

ところが、不意にこの地球よりも大きい、星までも屈きさうな偉大な感情が、誰にも不用なものだといふことが分かつた。それは恐ろしい苦痛であり、奇怪な驚きであつた。

彼女は泣くことさへ出来ないで、ねば／＼した冷たい泥に腕と肩を汚しながら、まるで死人のやうに、鈍い忘却の霧に包まれたまゝ、ぢつと身を横たへてゐた。何か柔かく暖かい、毛のもちや／＼したものが、彼女の足を滑つて、熱い犬の鼻つらが、彼女の耳へまともに突きつけられた。番犬が闇の中で尾を振りながら、彼女の顔を見つめてゐた。

その黒い伶俐さうな目には、不思議なもの悲しい愛撫が光つて、滑稽な無言の口で語り得ないあるものを、その目に言はせてゐるやうに思はれた。

リーザは毛のがさ／＼した首をぐつと抱き縮めて、犬く



さい濡れた毛に顔を押し當てた。

犬は喜ばしげに身を蕩播きながら、彼女の手を振りほどかうとした。そして、熱い息をふう／＼耳に吹きかけてゐるかと思ふといきなり彼女の鼻を大きくへろりと舐めた。リーザは器械的に身を引いて、あたりを見廻した。と、暗い庭や、高い星や、汚い階段でよその犬を抱き締めてゐる、誰にも用のない、小つぼけな、みじめな自分自身に氣がついた。

恐ろしい自己憐愍の情が彼女を震撼した、彼女はつひに一切を悟つた。何もかも終りを告げて、もうミハイロフに會ふことさへ出来ない。リーザは胸が破れたやうな氣がした。彼女は男を責めなかつた。彼女の心には不思議な悲しい諦めがあつた。さうだ、自分は今でも彼を愛してゐる、かへつて前より以上に愛してゐるくらいだ。だから死ななければならぬ、なぜといつて、彼なしには生きて行けないからだ。それは當たり前だ！……もう生きて行く當てがない……父はもう自分のところを、ちゃんと知つてゐるに相違ない……死んだ方がましだ！……どうも仕方がない……自分の愛は彼に必要がないのだ、自分を愛さないからといつて、何も男の知つた事ではない。だけど、なぜ彼は自

分を愛撫したり、接吻したりしたのだらう？……たゞ女としてか？……さういふ事があり得るだらうか？ 自分は單に女であるばかりでない。自分は彼の言ふ「肉體」を持つてゐるばかりでなく、この胸の中に、まるで小さな太陽みたいな、明るい何ものかがあつたのだ。けれど今ではそれも空しく冷えてゐる。そして苦しい、堪らなく苦しい……：一たい彼は自分が可哀さうでないのだらうか？ だつて、自分はこんなに彼を愛してゐるではないか！……

彼女は不思議な氣がした——この一語、これほど偉大な美しい一語が、かくも力ない響きをたてて、何ものをも證明することが出来ないとは！ さうだ、自分は愛してゐる、けれど彼には自分の愛が不要なのだ。たゞもう用がないのだ！……あれほど美しい偉大なものが、單にこの「不要」といふ一語のために、何かしら空虚な、愚かしい、みじめなものになつて了ふのだ。

して見ると、自分が毎日每晚、戀ひしい涙に目を濡らしながら、男のことばかり思ひつゞけ、幸福に息を切らしながら、その顔や愛撫を思ひ起こしてゐる間に、彼はほかの女を自分と同じやうに、接吻したり愛撫したりしてゐるのだ！ リーザはエツゲーニヤ・サモイロヴナの事を思ひ出

した。鮮やかな赤い着物に包まれた、優美で、敏捷な、すらりとした彼女の姿や、美しい大膽な顔などを、まぎろくと生けるがごとく目の前に見た……彼女は心臓を引き締められるやうな気がした。さうだ、あの女の方がいゝ、自分などよりずっとずっといゝ……あの女の愛撫を受けたあとで、自分などの愛撫はどんなにみじめな、貧弱なものに感じられたらう？……ところが、自分の體が男の氣に入つたと思つて、なんとも言へない誇りを感じてゐた……男の愛撫を受けながら、自分が相手に偉大な快感を與へてゐると思つて、それを幸福に感じてゐた自分は、どんなにみじめで滑稽だつたらう！……

耐へがたい屈辱の情がリーザを壓倒した。自分のみじめな、誰にも必要のない體を、星にさへ見られまいとするやうに、彼女は階段の上で身を藻掻いた。

と、不意に最後の場面が思ひ出された。彼女は情慾に燃えるやうな顔をした、自分自身の姿を見た。愛撫を乞ふやうな卑屈な目つき、その目のどんよりした汚みは、そのとき自分にも感じられた。自分はどんなに男の愛撫を求めた事だらう！まるで卑しい賣女のやうに、自分で自分の體を押しつけながら、どんなに男の愛撫に憧れた事だらう！

一體あるとき自分はどうしたのだらう？……どうしてあんな風になれたのだらう？……きつと自分はあの瞬間、見るも厭らしい女だつたに違ひない！……しかも、男は自分を欲しなかつたのではないか、自分を喜びもしなかつたのではないか。彼女が自分の方から持ちかけて行つたので、男はたゞお情に手を出したに過ぎない。

自己嫌惡の恐怖が、リーザの心を突き揺るがした。手も、足も、胸も、肩も、すべて自分の全身が、蟲唾の走るほど汚らしく思はれた。彼女は傷ついたもののやうに、身を藻掻きながら飛び上がったと思ふと、そのまゝぱつたり入り口の階段に倒れた。と、また跳ね起きて、まつしぐらに表へ駆け出した。

## 一五

俱樂部では嵐のやうな亂醉の喧噪に満ちてゐた。食堂からは、まるで喧嘩でもして、皿小鉢を割つてゐるやうな、耳を聳するばかりの騒々しい物音が聞こえる。常連はアルブゾフの仲間が暴れてゐると聞いて、たいいてい俱樂部から歸つて了つた。一同は見苦しい騒動を覺悟してゐた。肥つた當番幹事は、どうしたらいいか分からないで、食堂の

周りを臆病さうにうろ／＼してゐた。

二三人の人達は歸りしなに、彼に失敬なことを言つた。中學校長の夫人は憤慨したやうに、

「百萬長者なら、何をしても構はないんですか……あれは醜態ぢやありませんか！」

音なしの善良さうな小男の幹事は、途方にくれたやうに両手を擴げた。

「わたしなどぢやどうもしやうがありませんーやがて總會がありますから、そのとき問題を提起することにしませう……」

「總會なんか！」と校長夫人は蔑むやうに言つた。「一體あなたはアルブゾフに、ほんの一口でも注意することが出来ないんですか？ 見てらつしやい、今にみんなの横面を擲り出すから！」

「擲る擲らないはさて置いて、今に芥子を塗りまくりますよ！」と若い國語教師が言つたが、しかし、それは幹事に聞こえないやうな聲だつた。

夫人は毒々しい聲でから／＼と笑ひながら、傲然と首をそらして出て行つた。幹事はぼつとした様子で食堂へ飛んで行つて、なんの理由もなく出し抜けに、ボーイ達に食つ

てかゝつた。

アルブゾフは今までかつてないほど、ぐでん／＼に酔つぱらつてゐた。彼は何やら喚き散らしながら、さかにシヤンパンの壺を倒しては、あとからあとから新しく取りよせてゐた。その顔は死人のやうに青ざめて、目はほとんど氣ちがひのやうに据わつてゐた。

彼の仲間になしく二人の將校が加はつた。一人は胡麻鹽の頭をした韃靼人の騎兵大尉で、いま一人は血色のいゝ顔をした美少年の見習ひ士官だつた。彼はアルブゾフの富みと、大膽放縱なやり口に度膽を抜かれて、すつかりこの男に惚れこんでゐた。小柄な大學生のチージュも、圖書室の方からやつて來た。

この晩は、ナウーモフまでが飲んでゐた。もつとも、大して酔つてゐるやうな風も見えなかつた。

華々しい豪遊ぶりに面くらつて、ぼつとなつたルイスコフは、百萬長者のアルブゾフや、將校の仲間に一坐してゐるのを、恐ろしく得意に感じながら、卓の隅つこに臆病らしく坐つてゐた。そして、盃や料理を手にとる前に、必ずチージュの方を振り向くのであつた。

ミハイロフは續けさまに、幾杯かぐい／＼呷つて、恐ろ

しく眞つ青な顔になつた。彼の頭はつきり澄み渡つてあらゆる物音や、動作や、言葉などが、格別はつきり脳に刻みこまれるのであつたが、同時に彼は泥酔してゐた。そして、自分でもこれを感じてゐた。彼は熱病にでもかゝつたやうな具合で、目をぎら／＼光らせながら、まるで始めて見るやうに、一同を見廻してゐた。どこか意識の遠い片隅で、まるで尻尾の長い、臆病な、灰色の小さな獸に似た、忌はしい想念がちら／＼動いてゐた。それはある穢らはしい記憶だつたが、どんなに骨折つてみても、それを捕らへることが出来なかつた。

チージュは片隅に坐つて、やはり惱ましげに一同の顔色を窺つてゐた。彼はトレグロフとの一件が、みんなに知れてゐるかどうか、はつきり分からなかつたので、當てこすられはしないかとびく／＼しながら、勢子に追ひ立てられる獸のやうに、しじゆう警戒してゐた。彼はなぜか、アルブーズがそれを言ひ出しさうな氣がした、しかも思ひ切つて人を莫迦にした、癪にさばる言葉で、言ひ出しさうな氣がしてならなかつた。で、彼はしじゆう歸らうとあせつてゐたが、どうしてもそれが出来なかつた。惱ましく淋しい物思ひと憂愁に満ちて、むき出しの壁をぼんやり一本嚙齧

に照らされた、小さな自分の部屋を思ひ出すと、ほとんど恐怖に近い感じが湧き出すのであつた。

トレニョーフは誰よりも一番よく飲み、一番よく嘔吐してゐた。彼は、すこぶる上機嫌だつた。家は穩かで、妻は自分から氣晴らしに出て行けと勧めた。で、トレニョーフは優しい愛情を感じながら、彼女がいそ／＼と愛想よく、自分の歸りを迎へるものと考へた。彼は再び妻に戀ひを感じた。そして、自分が妻を愛してゐる事や、妻がどんなに立派な女かといふ事を、誰かに話したくて堪らなくなつた。彼は始終うるさくクラウゼにつき纏つてゐた。

ひよる長い少尉補はあまり酒を飲まないで、まるでポール紙で作つた人形のやうに眞つ青な顔をしたまゝ、すつかり黙りこんで了つた。はずに吊り上がつた眉は、メフィストのやうな顔の上を、特別ぎくしやくと動いてゐた。見受けたところ、何か緊張した想念に心を奪はれてゐるらしかつた。

「クラウゼ、飲みたまへ」とトレニョーフは酒を注ぎながら嘔吐した。「君はなかく／＼念入りの變人だが、しかし愛すべき同僚だ！……怒つて貰つちや困るが、まつたく變人だよ！……しかし僕は君が大好きだ、本當に！……なんだ

つてそんなにいつも考へこんでるんだね？ それより一杯乾さうぢやないか！……考へたつて始まらんよ……何もかも残らず考へ盡くす譯に行きやしまいし……それに、こんな男の言ふことを聞かない方がいよ……」

彼はナウーモフを指さした。

「あいつは始終ほらばかり吹いてるんだ、まつたくだよ！

……おい、君は始終ほらばかり吹いてるだらう、先生、え？」酔つばらひらしい人なつつかさで、いきなり「君僕」言葉になつて、陰氣な顔をしてゐる技師に話しかけた。

ナウーモフは冷ややかに口を曲げて、にたりと笑つたきりで、なんにも言はなかつた。

トレニョーフはミハイロフの方へ向きを變へて、いかにも秘密らしい顔つきをしながら、みんなに聞こえるくらゐ大きな聲で言ひ出した。

「利巧な男だ、まつたく……だが、いつもほらばかり吹いてゐる……あれはたゞ面當てに言つてるんですよ。可哀さうに、先生自分がこの世で運が悪かつたもんだから、それで人類を撲滅しなくちやならないなどと、嘔鳴り立ててゐるのだ！……僕は眞つ平だ！……なんのためにさ？……人生つて愛すべきものぢやないか！……」

トレニョーフはすつかり有頂天になつて、両手を振つた。「しかし、なかく穿つたところもあるよ、まつたく！……なんといつても偉い男だ、僕はあの先生が大好きだよ……おい、ナウーモフ、僕は君のことを言つてるんですよ……え？」

ナウーモフはもう露骨に毒々しい薄笑ひを洩らしたが、今度もやはり黙つてゐた。

「誰がほらを吹いてるんだつて？……自分こそほらを吹いてるんぢやないか！」卓ごしに言葉尻を捕へて、不意にアルプーゾフが挑みかゝつた。「この男の言ふことはことごとく眞理だ！……人生なんてやくざなものさ、それつきりだよ！ おれに言はせれば、哲學も思想もいりやしない、たゞ人生そのものがやくざなんだ！……なあに、吹つ飛ばしてさへ！……君はどう思ふ、セリョージャ？」

ミハイロフはきら／＼光る目で彼を見やつた。何か言ひたさうにしたけれど、片手を振つただけでやめて了つた。彼の美しい顔は、まるで子供のやうに楽しげな、優しい表情をしてゐた。彼は何もかも氣に入つた。何もかも驚くばかり興味あることに思はれた。

「いや、君こそほらを吹いてるんだ！」とトレニョーフは拳

で卓を叩いた。「人生にはなんといつても、いゝところが澤山ある！」

「それで？……何が？」とアルブゾフは皮肉に聞いた。

「何がとはなんだ？……さうさ、澤山あるさ……まあ、女とか、愛とか、友達とか、自然とか……いくらでもあるよ！」

「ちよつ」とアルブゾフは暗い聲で毒々しく叫んだ。

「幸福な戀ひは俗悪だし、不幸な戀ひは苦しみだ！……それだけの事さ！……手帖に書きつけとくがいゝ！……それに友達だつて……そんなものを君はどこで見た、え、大尉？

……友達も親友も、みんな不幸に見舞はれるまでの事だ！

……一緒に飲むのはいゝさ。しかし、腹の中でどんな事を考へてるか知れたもんぢやない！……決して分かりつこはありやしない！……腹の中も分らないで、友達も何もあつたものかね？……こつちは親友だと思つてゐても、向かう

はおれの一生を叩き毀さうとしてるかも知れないんだ……おい、セリョージヤ、君はなんと思ふ？」思はずミハイロフ

があたりを見廻したほど、彼は出しぬけに無氣味な、ほとんど威壓するやうな聲でかう訊ねた。

けれど、アルブゾフはもう彼の方を見てゐなかつた。

なぜカリスコフだけを見つめながら（こちらはそれを酷

く光榮がつてゐた）、言葉を續けるのであつた。

「もし誰か立つてゐれば、そいつを突きのけない限り、その場所に立つことは出来ないんだ！……友人だつて！親友だつて！……ねえ、君、おれが君のことをどう思つてる

か分かるかい？……早い話しが、このクラウゼの考へてる事が分かるかい？……分かりつこありやしない。えゝ、このひよろ長の獨逸つぼめ！……まるで假面だ、顔ぢやない

や……あの鼻を見ただけでも氣味が悪くならあ！……とこゝろで……愛と言ふのかい？……おい、兄弟！……」

アルブゾフは片手を一振りして、嘔鳴り出した。

「こゝにヲートカがある、これなら話しが分かる！……おれは葡萄酒やヲートカぢやない、自分の血を飲んでるんだ、自分の血で悲しみを消してるんだ！……畜生！この世が樂

しかつたら、やけ酒なんか飲みやしない、仕合はせな人間が氣ちがひ水で、頭をくらましたりなんかしやしない！……人間はどうにも怖へ切れなくなつた時、はじめて酒を浴

びるんだ！……」

トレニョーフは猛烈な勢ひで、相手の攻撃を拂ひのけようとした。

「いや、君がなんと言つたつて、人生にはいゝところがあ

る……さうでせう、キリール・ドミートリッチ？」

チージュは氣をむつかしげに一つ鎖くわいた。そのくせ彼はこの瞬間、何ひとついゝ事など頭に浮かんで來なかつた。それどころか、なんともいへないほど厭な、淋しい重苦しい氣持がしてゐたのである。彼は何かつる／＼した茸きのこを、皿の上でフォークに突き刺すと、それを口へ入れて顔を曇くもめた。

「僕の言ふことは本當でせう？」無言の同意に満足できないで、酔つぱらつたトレニョーフはしつこく追及した。

「むろん本當ですとも……」と小柄こがらな大學生は相槌あいきちを打つた。

アルブーヅフは毒々しく高笑ひした。

「もし誰かに罪があるとすれば、それは人間自身なんだ……」とトレニョーフは言葉を續けた。

「どんな人間なんだ？」とアルブーヅフは目を細めながら遮つた。「擲なるやつなのか、それとも擲なられるやつなのか？……君はその點をどう思ひます、キリール・ドミートリッチ？」

チージュは全身の血が顔へ昇るやうな氣がした。彼はまごまごして、訴へるやうにあたりを見廻した。

「莫迦々々しい！」と彼は言つた。

「なにい？」とアルブーヅフはうす氣味悪い調子で問ひ返して、ちよつと腰を持ち上げた。その充血した黒い目は、もう狂はしい火に燃え出した。彼はまるで、鎖を千切つて飛び出す口實を得たのを、喜んでゐるやうな風であつた。チージュはそれを横目にちらと見て、眞つ青になつた。

「君はあんまりわがまゝが過ぎるやうですな……」彼は立ち上がりながら、妙にやにつこい、鏝くわ子このやうな聲でかう言つた。

「わがまゝが？……えゝ、この野郎……」とアルブーヅフは叫んだが、ミハイロフがその手を抑へた。

「ザハール、何をするんだ！」と彼は叫んだ。

「打つちやつとけ！」とアルブーヅフは氣ちがひのやうに身を蕩う撞かいた。「君の知つたこつちやない！」

「よせよ……でないと、僕は歸るよ！……よく恥づかしくない事だね？」とミハイロフは言葉をつゞけた。

アルブーヅフは急にくるりと彼の方へ體を向けて、暫くちつとその目をまともに見つめた。

「まあ、坐つて飲めよ！」

アルブーヅフは無言のまま、ちつと見据みた目を放さな

かつた。ミハイロフも急に押し黙つて、アルブゾフの手を掴んだまゝ、おつとその目を見つめ始めた。その手は次第にはげしく慄へて来たが、振り放さうともしなかつた。と、なぜかミハイロフは、もしこの手を放したら、アルブゾフが自分を擲りさうな気がした。彼はさつと青くなつたが、前より強く手を握りかへた。

急に手は慄へやんで、ミハイロフの指の中で力なくぐたりとなつた。アルブゾフは器械的にその手を放して、相手の顔を見ずに言つた。

「もう二度とこんな事はよしてくれ……おれは嫌ひだ……それから、倶楽部ぜんたいへ響くやうな聲で喚いた。

「さあ飲みたまへ、諸君……構ふもんか……キリール・ドミートリッチ、盃を乾さう！……おれはこんなに……おれは酔つぱらつてるんだ！……さあ……握手だ！」

チージュは手を出さなかつたが、人々は彼を取り巻いて、宥めにかゝつた。アルブゾフは人のいゝ微笑を浮かべながら、自分の方から傍へよつた。

「さあ、澤山ですよ……一體、どうしたといふんです……和睦させよう！」

「いゝ加減にしてお置きなさい、キリール・ドミートリッチ、

氣にするだけの價値はありやしない……あいつは酔つぱらつてるんぢやありませんか！」と心配さうに、トレニョーフはチージュの耳に囁いた。

チージュは目を上げないで、恐ろしい努力をしながら、手をさし伸べた。

「さあ、これでいゝ！」とアルブゾフは言つて、チージュの手を強く一振りしたが、すぐにその事を忘れて了つた。暫くのみだ、彼は自分の内部でも見つめるやうな、不思議な目つきをしたまゝ、黙々として飲んでゐた。

トレニョーフはチージュのそばへ腰をおろして、さも親しげにその肩を抱きながら、こんな事を言つた。

「あなたはあんな事を氣にするからだめですよ……誰だつて狂犬に飛びつかれる事はありますからね……」

アルブゾフは不意にから／＼と笑ひ出した。

「その狂犬といふのはおれの事かね？……ブラービー、大尉殿！……その通り！……妻君によろしく！……」

トレニョーフはその方を振り返つたが、またチージュの方へ向きなほつて、人のいゝ調子でかう言つた。

「まあ、ご覽なさい……なんといふ奴でせう？……みんなに食つてかゝつて……だが、僕はあの男が大好きなんで



すよ！……」

「ところが、大尉、僕は君が大嫌ひだ！」とアルブゾフが横あひから口を出した。

彼は全身が痙攣してゐるやうだつた。明かに彼は争論の口實を求めてゐるのだ。

「え、どうです、」相かはらず穩かな調子でやはり馴れ馴れしくチージュ二人だけに向いて、トレネコフはかう言つた。「僕の言つた通りでせう？……先生まるで僕なんか眼中にないんだ……莫迦！」

アルブゾフは莫迦に音なしの様子で頭を掻いた。

「なあに、構はないよ……みながみな君のやうな惻巧ものになる譯にや行かないさ！……」

と、不意に全身を揺すつた。

「どうです、諸君、僕らの中にも未來の文豪があるんですよ！……それこそ大した頭なんだ！」

ルイスコフはぼつとなつた。アルブゾフはその顔をまともに眺めながら、毒々しい微笑を洩らしてゐる。

會計官吏は黄色い顔を急に眞つ赤にした。そして、肉の切れを喉に詰まらせながら、かう呟いた。

「ザハール・マクシムイチ、あなたは誰にも言はないと

……」

アルブゾフはびつくりしたやうな顔をした。

「いまの話が君のことだなんて、どうしてそんな事を決めちやつたんだ？……事によつたら、大文豪といふのは僕のことかも知れないぜ？……へえ、それちや君だつたのかい？……僕は知らなかつたよ！……いや、自分から名乗りを上げるからにや、なるほど君なんだらう……諸君、わたくしは、未來のトルストイを紹介するの光榮を有します！……諸君、この先生がたゞの會計官吏で、あまり風采も上がないからといつて、どうかそんな事に迷はされないでください！」

ルイスコフは兎のやうにうろたへ始めた。

「いえ、わたしがあゝ言つたのは、さういふ意味ぢやありません……それどころか、あなたは何をおつしやるんです？」

アルブゾフはそれに耳も貸さなかつた。

「諸君、お望みなら、わが文豪の近作を朗讀しませうか？え？」

「そりや面白い！」と肥つたイワノフ中尉が應じた。彼はこの酒もりの始めから、會計官吏風情の同席が不快で堪ら

なかつたのである。

「読んでください、読んでください、ザハール・マクシームイチ！」と美少年の見習ひ士官が叫んだ。

アルブゾフは静かに、もの／＼しく衣囊へ手を入れて、青い表紙のついた薄い手帖を取り出した。チージュはすぐそれに気がついた。

「さあ……諸君、謹聴したまへ……『愛』短篇、アレクサンドル・ルイスコフ作……」

「ザハール・マクシームイチ、どうか……なんだつてそんな事を……お願ひです……なぜ人を擲擻ちやくふんです？……」  
「からかつてなんかないよ、僕はみんなの耳を慰めたいんだ！」

「ねえ、お願ひですから！」青白い顔に赤いしみを浮かべ、額に汗をにじませたルイスコフは、立ち上がつて手帖に腕を伸ばしながら、かう呟ごやくのであつた。

「だめだよ、君。書いたものは書いたものさ……」

ルイスコフは、さし伸べた手を帖面に觸れる氣力もなく、力なげに指先を動かしてゐた。アルブゾフは、さし伸べられた手に氣のつかぬ顔をして、わざとその指に近く手帖を支へてゐた。

「それぢや、諸君、開きたまへ。『アレクサンドルは静かに公園の並み木道を歩いた……柔かい栗色の毛を秀でた額にうねらしてゐる彼の青白い顔は……』」

「ザハール・マクシームイチ！」絶望の勇氣を振るひ起こして、ルイスコフは手帖を握にぎんだ。「わたしは読んで貰ひたくないんです！……」

アルブゾフはもの思はしげに、そろ／＼と彼の方へ顔を向けた。

「厭なのかい？」と彼は一語々々、はつきり發音した。「許可してくれないのか？……どうも残念だ！……朗讀したいんだがなあ！」

「いけません！」みじめな微笑を浮かべながら、ルイスコフは言つた。

「いけない？……ぢや勝手にしやがれ……そら！」とアルブゾフは氣ちがひのやうに叫んで、いきなり手帖をルイスコフの顔へ叩きつけた。

ルイスコフは一步あとへよろけながら、扇のやうに頸へ當たつた手帖を、器械的にひつ摺すりんで、くしや／＼に胸へ抱きこんだ。彼は途方とほうにくれたやうにあたりを見廻したが、その顔つきは、『なんだつてこんな事をするんです？……』

と聞いてゐるやうであつた。

彼の顔はいかにもみじめで、腹を立てたり言葉を返したりする勇氣がないのは、見えすぎるほど見え透いてゐたので、一同は妙にばつが悪くなつた。イワノフ中尉さへそつぽを向いて了つた。たゞアルブゾフだけは相かはらず暗い表情をして、目の中に意地わるい喜びの火花を散らしてゐた。

「これがお前たちの人生だよ……作家！」彼は一種の快感を覚えながら、齒の間から押し出すやうに、譯わけの分からぬ事を言つた。「やあ……技師先生……君の健康を祝さう、君の思想を祝さう。もつとも、君も氣力がひなら、君の思想も氣力がひじみてるがな……さあ、飲め……」  
ナウーモフは自分のコップをちよつと持ち上げた。

アルブゾフはまるで新しい犠牲でも授すやうに、陰鬱な視線を一座に投げた。

「クラウゼ！」彼は叫んだ。「獨逸つぽ……お前はやがて自殺するのかね？」

「今すぐだ。」少尉補は冷たい傲慢な調子で答へた。

あまり思ひがけない返事だつたので、一同は思はずぎくつとなつた。

「こいつは驚いた！」とアルブゾフは度膽どたんをぬかれて叫んだ。「今すぐとはどういふんだ？ こゝでかい？……」  
「こゝで、今すぐ……」依然として冷たい傲慢な調子で、クラウゼは繰り返した。

けれどその瞬間、彼の顔がすつかり不愉快なほど青くなつて、妙な痙攣けいれんが突つた頸を引きつけたのに、一同は氣がついた。

「冗談を言ふな！」不意に慄へ聲でアルブゾフは叫んだ。「僕は決して冗談なんか言はない。」とクラウゼは、恐ろしくがらんとした、不明瞭な聲で答へた。

かういふや否や、彼の圖まはぬけて長い、眞つすぐな細い體が、背丈いつばいに立ち上がった。人を莫迦にしたやうなフェイストじみた顔には、はずに吊り上がった肩がくつきりと黒い。

その時はじめて多くの人々は、クラウゼが盛装してゐるのに氣がついた（その時は誰もそんな事を考へなかつたが、あとで非常に重大な點として追想したのである）。彼は目の醒めるやうな新しい制服を着て、銀飾りの佩囊はくわうをさげ、洒落たエナメル靴をはいてゐた。人々ははつきり考へこそしなかつたけれど、この些細な點によつて、全く冗談でない

といふ事を、忽然と直覺したのである。

場や、コップや、汚れた皿が一面に亂れて、赤い酒が血のやうに流れた卓の周りに、怪しい混亂が生じた。誰かが何やら叫んだらしい。チージュとミハイロフは、まつたく無意識に椅子から飛び上がった。ナウーモフは何か言はうとしたが、クラウゼが氷のやうに冷たい莊嚴な目つきでじろりと彼を見やつたので、ナウーモフは一言も口を利かなかつた。アルプーゾフは笑ひに紛らさうとした。

「よう／＼！ 獨逸人！」

クラウゼは依然として冷ややかな威嚴を保ちながら、アルプーゾフにも一瞥を投げた。そして不思議なことには、妙に眉の吊り上がつた、假面のやうに凝結した顔を向けられたものは、誰でもそのまゝ口を噤んで、その場に立ち竦んで了つた。何か氷のやうなものが彼の體から流れ出て、すべての人を凝結させるのであつた。

「さうです、僕はこれから自殺します。」幾分こもつた聲ではあつたが、まつたく落ちつき拂つて、クラウゼはかう言つた。「これはずる／＼ふん奇妙に思はれるかも知れない……しかも、場所が場所だから……しかし、これには相當の理由があるのです。僕は丁度かういふ瞬間を待つてゐたので

す、恐ろしくなくて、滑稽に莫迦々々しく思はれる瞬間を……それが必要なんです。そつと目立たないやうにやれない事もないが、しかし一こと言ひたいのです……悲劇だなどと思はれたくない……僕には生きて行くことが不可能だ。しかし、それはこの人の説を聞いたからぢやない……」

クラウゼはナウーモフの方を頷でしやくつた。

「僕は血が川のやうに流れようと、人類がどうならうと、そんな事はどうだつて構はない……生きてゐられる人は勝手に生きるがいゝ……だが僕には出来ない。僕は自分自身のためにそれを欲しない。なんとなれば、單に興味が無いからだ。それだけの事なんです。悲劇でもなければ、恐怖でもなく、無意味でもない、たゞ面白くないのです。自然も美も小つぽけなもので、飽き飽きして来る……戀ひも小つぽけだ……人類などと來たら、たゞもう莫迦々々しい……」

……宇宙創造の祕密は不可解だが、それも闡明されよば、面白くなるだらう！ 一切のものは既知の事物と同様に、こと／＼く無興味だ……永遠の中には大も小もない。だから一本のマッチもやはり神祕であり、奇蹟である……しかしわれ／＼はマッチを知りぬいてゐるので、そこに興味を感じない。すべてがみなその通りなのだ……何が發見されたつ

て變はりはない。神も正體が分かれれば、面白くないに違ひない。神なんか何になる？……そんなものは不要だ。たゞ僕はかう言ひたかつたのです——僕はあの人のやうに宣傳なんかしません……この時クラウゼはまたナウモフを指さした。「たゞ僕自身に興味がないのです……ほかの人はさうぢやないかも知れません……それからまた、僕はさやうならを言ひたかつたのです……多分もうお互に會へないことと思ひますから……たとへまた會ふとしても、やはり退屈なばかりでせう……なぜ、そんな必要があります？……不死なんて退屈なものです。そんなものはいつそない方がましだ……澤山です！……」

この引つ吊つたやうなもの狂はしい一場の演説の終るころには、みんながもう總立ちになつてゐた。誰ひとり本當にしなかつたが、同時に誰もかれも本當にした。卓を圍んだ人々の顔は異様に見えた。それは恐ろしい豫感を底に潜めたぎら／＼光る瞳と、青ざめた斑點の連鎖であつた。一切のものが恐ろしい、死のやうな緊張に凝結して、一座を領した静寂の中に、少尉補の聲が冷ややかに、無關心に響くのであつた。

と、不意に絹を裂くやうな恐怖の叫びが起こつた。美少

年の見習ひ士官が、痙攣的に両手で卓を掴み、目を大きくむき出しながら、しじゆう同じ調子で喚きつづけた。

「あの人は本當に自殺します、自殺します、自殺します……」  
あたりのものがごとく／＼動揺し、どよめき始めた。椅子がばたん／＼と倒れた。誰か両手をさし伸べながら、クラウゼに飛びかゝつた。けれど、死人のやうな少尉補の顔はその方へ向いて、驚愕ともつかなければ、權威を有する人の命令ともつかない表情で、吊り上がった眉をちよつと心持ち動かした。飛びかゝらうとした男は、両手をさし伸べたまゝ立ち竦んだ。一同はこの瞬間、クラウゼが彼らのそばを離れて、一種の空虚に包まれながら、もう恐ろしく遠いどこかから、幻のやうな顔をこらへ向けてゐるやうに思はれた。

少尉補は恐ろしく手早く、騎兵ズボンの衣囊から拳銃を取り出して、いきなりたしかな手つきで筒先を口へ入れた……

不思議なことには、誰も發射の瞬間に気がつかなかつた。たゞ多くのものは本能的に後ずさりして、目をつぶつただけである。あまり思ひがけない、醜い、莫迦々々しい事だつたので、意識に收め入れることが出来なかつたのである。

たゞ少尉補のひよる長い體が椅子をひつくり返ししながら、うしろ頭を壁へ鈍く打ちつけて、重々しく床へ棒倒しになつたとき、はじめて一同は我に返つた様子で、突き刺すやうな氣うとい恐怖の叫びを上げながら、彼の方へ飛んで行つたのである。

## 一六

倶楽部の明りはすつかり消えて、四方から駈けつけた將校たちが、うす闇の中を途方にくれたやうにまご／＼してゐた。間もなく聯隊長もやつて來た。彼は白髪 of 美しい將校だつたが誰にも挨拶しないで、帽子と外套のまゝ、いきなり死骸の方へ心配さうに歩いて行つた。

食堂の臺のうしろで、黄色いつや消しのほやをかけたラムブがたつた一つともつて、めちやく／＼に荒らされた大きな部屋を、死んだやうな光りで照らしてゐた。依然として汚れた皿や、盃や、壺などが狼藉を極め、居酒屋のやうに葡萄酒やフォートの流れた卓は、慌てて片隅へ寄せられた。その後の空いた場所にクラウゼの死體が、吸ひ殻や塵だらけの床に横たはつてゐた。

ちつと動かぬひよる長い體は、食堂から取つて來た綺麗

な卓布で蔽はれてゐた。その下からエナメル靴の裏が、爪先を開きながら、ちつと動かずに突き出てゐる。頭のあるべきところには、黒い斑點がしみ出て、生氣のない横顔がそれと見透かされた。

將校の一人が前へ出て、卓布の一隅を持ち上げた。すると聯隊長は思はず身慄ひした。眉の吊り上がつた、見覚えのある長い顔を無意識に期待してゐた所に、血と妙な灰色をしたものが捏ね合はされた、胸の悪くなるやうな醜いものを發見したのである。血はだら／＼と床へ流れ落ちて、頭の周りには黒い水たまりがべつとり擴がつてゐた。死骸が倒れる拍子に頭を壁にぶつつけた所には、何か小さな塊りがこびりついて、その一つ一つから黒い筋がほつそり床まで着いてゐた。

聯隊長は帽子をとつて、十字を切つた。その美しい段鼻の顔は、急に痛みでも感じたやうに皺をよせ、唇が慄へはじめた。

「これは恐ろしい！」彼は誰にともなくかう言つた。「實に意想外だ！……」

肥つた中隊長は手頼りなげに兩手を擴げた。

「私に言はせれば、こいつあ……こいつあ……単にアブノ

「マルなんですよ！……分かんらん！……まるで分かんらん！」  
聯隊長はじれつたさうに肩を蹴めて、そのそばを離れた。戸口のところ、彼はもう一度ひよろ長い、白い死體を振り返つた。クラウゼの顔にはもう卓布が被せられてゐた。

「いや、これは恐ろしい！」と聯隊長は繰り返して、そのまゝ出て了つた。

部屋々々は言ふまでもなく、支關の控へ室にまで、青白い顔に興奮した目つきの將校連が、四五人づつ塊まつてゐた。クラウゼの態度が尋常でないと言ふことは、絶えず聯隊ぢうの噂になつてゐたが、それでも誰ひとりとしてはつきり合點が行かなかつた。今となつて見ると、この恐ろしい結末を豫言するやうな詳細が思ひ起こされた。そして、誰もこの事を豫見しなかつたのが、一同にとつて不思議に感じられた。ありふれた軍人らしい楽しみから、遠く離れてゐた彼の孤獨な生活、毎晩のセロ演奏、博讀、それから最近かれの様子がいよ／＼奇妙になつて、教練中に原なかで焚き火をしながら、幾時間も幾時間も火を見つめてゐる不思議な病癖が生じたこと——こんな話しをし合つた。

聯隊のほかの同僚より、多少クラウゼと親しかつた、小柄のすばしつこい黒髪の將校が、一塊りの將校連にこんな

話しをして聞かせた。一同は緊張した息づまるやうな好奇心を浮かべながら、ぢつとその口もとを眺めてゐた。

「昨日もう二時すぎた時分に、僕が先生のところへ寄つて見ると、先生まだ着物も着換へないで、寢臺の上に坐りこんだまゝ、靴を片足手に持つてゐるぢやないか……僕が何か見つけたのかいと聞くと——『なんにも見つからないから困るんだ！……』と言ふのさ。それから急にか／＼と笑つて、靴をぼんと投げ出すと、そのまゝ横になつて了つた。『飽き飽きした。』と言ふから、何が飽き飽きしたのかと聞くと……『何もかも。』と言ふぢやないか！……まつたくその顔といつたら、本當に何もかも死ぬほど厭になつた、といふやうな具合ひなんだよ！……まつたく……僕はすぐその時に、こいつはいけない、と思つたよ！」

「いや、實際あき／＼して了つたよ！」何やら思ひつめたやうな氣むづかしい顔をした、もうかなりの年配らしい將校が、思ひがけなくかう相槌を打つた。「何もかも同じことだ、いつもいつも一つ事ばかりだ……教練、昇進、それに歌留多とヲートカ！……これで飽き飽きせずにはゐられるものかね、まつたく！……せめて戦争でもあればいゝんだがなあ！……どうかすると、なんとも言へない變な氣持ちに

なつて、自分で自分の額へ彈丸を撃ちこんで、それでけりをつけたくなるくらゐだ！……さうしたらいゝ氣持ちだらうなあ、本當に！……」

一同は貪るやうにその一語々々を捕へながら、好奇の色を浮かべて彼を振り返つた。すべてが奇怪で、薄氣味わるかつた。隣りの部屋には謎の死體が横たはつて、誰ひとり歌留多を戦はすものも、酒を飲むものもなく、部屋といふ部屋は驚き騒ぐ人で一杯になつてゐる。わづか一時間はかり前までは、みんな當たり前の馴れた生活をして、周圍のものは悉く單純で平凡だつた。ところが、不意に鳴り響いた一發の銃聲が、すべての人を軌道から跳ね飛ばしたやうな驟撃である。そこには惱ましい疑惑と狼狽が、人々を擱んで了つた。誰も何ひとつ分からなかつた。どうしたらいいか、何を言つたらいいか、まるで見當がつかなかつた。眠つてゐるやうなもの憂い人々の間に、青白い幻が突然すつくと立ち現れた。彼らは惱ましい不安に身を蕩擻きはじめた。クラウゼといふ名は急に消え失せたやうであつた。人々はこの人間のことをたゞ「彼」と呼んだ。そしてこの言葉を發する時には、ほとんど囁くやうな低い聲で、一種の不思議な、敬虔に近い尊敬を示すのであつた。

中年の將校の言葉は、多くの人々の胸をはげしく打つた。この瞬間、彼らの目の前には、輝かしい色彩もなければ意味もない、自分たちの生活の灰色の連續が、ちらりと掠めて通つた。あるものはすつかり途方にくれて了つたが、多くのものは何かものに摺えた様子で、妙にげんざうな、しかも、侮辱されたやうな顔つきをしながら、この懷疑論者のそばを離れた。

「なに、僕に言はせれば、そりやたゞ小心の結果なんだよ、それつきりさー」と洒落ものの中尉が熱くなつて口を入れた。彼は陸軍大學へ入學を空想してゐたので、聯隊の仲間よりずつと高尚な人間だと自惚れてゐた。

「小心なんて事が、この問題にどんな關係がある？」と中年の將校は暗い聲で言ひ返した。

「だつて、こんな事は誰にでも出来るぢやありませんか……自分の額に彈丸を撃ちこんで済ましてゐる……そんな事はあまり無造作すぎます……人間はすべからず戦はななくちやならない、意氣沮喪しないで、前途に邁進しなくちやなりません！……」

「無造作だつて？」と中年の將校は皮肉に目を細めた。「ぢや、やつて見たまへー」と言つて、ふいと向かうへ行つた。



中尉は輕蔑したやうにその後を見送つて、まづ頭へ浮かんだ事を口に出した。

「露西亞陸軍の將校としてこれは……實にあるまじき事だ……」

中年の將校は片手を振つて、クラウゼの憤たはつてゐる部屋へ入つた。彼は何か合點しようとするやうに、暫くの間ひよる長い白い體を見つめてゐたが、やがて一つ溜め息をついて、盜むやうに小さな十字を切ると、慌てて俱樂部を出て了つた。

それに續いて、ほかの連中もそろ／＼散りはじめた。それからまだ長いあひだ、將校たちの高い聲が、眠れる町々の静寂を破つてゐた。

俱樂部はがらんとして了つた。そここゝに小さなラムプが淋しさうに燃え残つて、佗びしい薄闇が塵だらけの唐間や客間を、冷や／＼かに領し盡くした。

食堂のうしろの小さな一室に、ミハイロフと、アルプーゾフとナウーモフだけが残つてゐた。

ボーイが小卓せきだを据ゑて、蠟燭をともした。ミハイロフは美しい頭を兩手にのせて、輝かしい目を蠟燭の炎にそゞぎながら、ぢつと坐つてゐた。アルプーゾフは重々しく隅か

ら隅へと歩き廻つてゐた。ナウーモフは暗い蔭に坐つてゐたので、顔の表情が見えなかつた。

彼らは三人とも、押しつけられたやうな氣持ちになつてゐた。誰ひとり正氣に返ることが出来ないで、どうかすると、こんな事はあり得ない、これはすべて奇怪な悪夢にすぎない、何かしら不可解な、思はしい出たらめに過ぎない、といふやうな氣がした。

轟然たる銃聲はなほ彼らの耳に残り、眉を吊り上げて、不可解な恐ろしい目つきをした長い白い顔が、目の前にちらつてゐた。最後の一瞬間この目の中には何か恐ろしく痛いほど心を刺すものがあつた——けれどそれが何かといふ事は、誰にも分からなかつた。

全體として、思想は意味も秩序もなく、混沌として荒れ廻つた。すべてが奇怪で重くるしく、どうかすると、息が出来ないやうな氣持ちがするほどだつた。誰ひとり思ひ切つて口を利くものがなかつた。

最後に引き上げて行く將校たちの聲が玄關に消えて、騒擾と、喧噪と、動搖の後の、不思議に無氣味な澄み切つた静寂が、空しい部屋々々を惡寒あくせうのやうに飮ひみ流れたとき、はじめてアルプーゾフは、目に見えぬ重荷を振り拂はうと

するやうに、ぶるつと一つ身慄ひした。そして何か心中の想念を追ひのけるやうに片手を振つて、わざとらしい磊落な調子で言ひ出した。

「たうとう大詰めまでやつて了つた！……驚いた獨逸人だ！……思ひもかけなかつたよ！……第一、なんのきつかけもないんだからなあ……僕は最後の一瞬間まで、冗談だと思つてゐた！……ところが、どうして！……可哀さうな奴だ！……だが、どうもしやうがないさ……結局みんなあすこへ行くんだからなあ！……今日死なうと、明日死なうと、要するに五十歩百歩だ！……莫迦々々しい！……」

「そりやさうさ。」まるで催眠術でもかけられたやうな目を、蠟燭の火から放さないで、ミハイロフは濁つたやうな聲で答へた。「だがなんと言つても……實に意外だ、奇妙だ……なんと言つても恐ろしい！……」

アルプゾフは重々しい首を垂れて、部屋の中を歩き廻つてゐたが、やがて歩みをとめると、無造作に頭を一振りして呶鳴つた。

「え、畜生！……どうだね、諸君……お甲ひに一杯やらうぢやないか……くさくさする！……」

彼は頸をぐいとしやくつて、襯衣の襟に手をかけると一

氣にびり／＼と引き裂いて、牡牛のやうな逞しい頸を現した。

「飲まう！」

ミハイロフは心持ち一方の肩を疎めた。それはもうどうだつて同じことだ、といふやうな身振りだつた。

アルプゾフは食堂へ出て行つたが、間もなく引つ返した。まるで無關心な表情をした寝ぼけ眼のボーイが、その後から二本の壺とコップを持つて來た。

アルプゾフの顔は青ざめて、奇妙に引つ吊つてゐた。「臥てゐやがる！」ひん曲がつたやうな薄笑ひを浮かべながら、彼はかう言つた。そして、慄へる手でみんなのコップに酒をつぎはじめた。

ミハイロフは急に顔を上げて、ちらとその方を見たが、また蠟燭に視線をそゝいだ。

「さあ。」とアルプゾフは勧めた。「取れよ、セリョーヂャ！」ミハイロフは器械的にコップを取つた。

「ところで、君は、技師先生？……飲めよ！」とアルプゾフは叫んだ。「なんだつて君はそんな所に隠れたんだ？それとも、顧みてやましいところがあるのかい？」

彼はかう言ひながら、にやりと笑つたが、なぜかナウ

モフの顔を見なかつた。ところが、ミハイロフはその反對に、ちらりと技師を見やつて、またすぐ顔をそむけた。

ナウーモフは片隅から身を起こして、卓に近づつた。あかりの中へ出て見ると、彼の顔は青ざめて、びく／＼引つ吊つてゐたが、目は斷乎とした、毅然たる表情を浮かべてゐた。

「よこしたまへ！」と彼は鋭く言つた。

アルブーゾフはコップを押しやつた。技師はそれを手に取つたが、飲まうとしないで、コップを手にとつたまゝ、毒毒しい冷笑的な目つきで、アルブーゾフを見やつた。

「君はなんだね……かう言ひたいんだらう——クラウゼが死んだのは僕のせんだつて。」彼は肯定の言葉を疑はないで、打撃でも受けるやうに待ち設けながら、かう問ひかけた。

アルブーゾフは挑戦でも受けるやうに、血走つた黒い目で陰鬱に相手を見据ゑた。

「お前のせゐさ！」と彼は亂暴に答へた。

痺擧の影がナウーモフの顔を掠めた。彼はしばらく無言でゐた。ミハイロフは顔を上げて、下から彼を見上げた。「僕はかういふ名譽を取て拒むものではないが、」わざとら

しい薄笑ひを浮かべながら、技師はかう言ひ出した。「しかし遺憾ながら、僕はこの事件に無關係なのだ。」

「どうだかね？」とアルブーゾフは皮肉に頭を振つた。

「さうさ、」ナウーモフはきつぱりと言葉を續けた。「人間が生を欲してゐる時、死ぬる必要があるなどと信じさせることは、不可能な業だからね……どんな雄辯も、どんな思想も、その場合ひなんの役にも立たない。そんなことは不合理だ。もしクラウゼが久しい前から、あゝいふ思想を胸に抱いてゐなかつたら……」

「だがね、君、」とアルブーゾフは遮つた。「丁度その場合に嵌まつた事を、ちよつと何か一口いふのも、なか／＼利き目があるからな！ あゝいふ思想を抱いてゐたにはゐたらうが、しかし……」

「ぢや僕が最後の一滴をつぎ込んだと言ふのかね？……なに、いゝさ！……さうかも知れない。かへつてその方がいい……」と技師は殘忍な調子で言葉を結んだ。「そんな事ぢやびくつかないよ。」

「まあ、お聞きなさい！」思ひがけなくミハイロフが、熱情的に言ひ出した。「そりやいゝでせう……さうとしときませう……しかし、あなたの理論や主張は暫く措くとして

……一つずつくばらんに、人間として言つて下さい……せめて一生に一度だけでも……あなたは恐ろしくないんですか？……可哀さうでないんですか？……あなたは自分の言つてる事を信じますか？……理智でなく心で信じてみますか？」

ナウーモフはちらりとす早く彼を見た。

「恐ろしくもない、可哀さうでもない……僕は信じます！」  
まるで叩き切るやうに鋭くはつきりと、彼はかう答へた。

ミハイロフはなんとなく手頼りなげに首を垂れた。アルブゾフは歩きやめて、陰鬱な目を技師の方へそゝいだ。

ナウーモフは不意に酒がこぼれるほど烈しく、かたりと卓の上にコップを置いて、ヒステリックな表情で早口に言ひ出した。

「いゝですか！……一つお訊ねませう……まあ、自分自身の生活を、まともに見つめてご覧なさい……眞つすぐに恐れる事なく、また出来合ひの概念に捕はれることもなしにね！……一體あなたは幸福ですか？　いつそ生まれなれば好かつたといふやうな考へが、一度もあなたの頭に浮かばなかつたですか？……本當にもう一ど経験して見たいと思ふやうな時が、たゞの一瞬間でもあなたの生涯にあり

ますか？……そりやまあ……ちよつと氣持ちのいゝ瞬間はあつたでせうが、ちよつと氣持ちがいゝくらゐぢやしやうがない、その一刹那を繰り返したいばかりに、もう一ど生涯を新規蒔きなほしにするのを厭はないやうな、さういつた種類のものですか？……さあ、どうです？……」

彼は卓ごしに身を乗り出しながら、ちつと穴の明くほど、ミハイロフの顔を見つめた。その目はぎら／＼光つてゐた。ミハイロフは再び頭をあげて、その視線を迎へた。すると、まるで黒い鏡にでも映つたやうに、自分の全生涯のぼんやりした幻が、目の前を掠めて通つた。それは始めもなければ終りもなく、宵ざめた灰色の一日々々とともに、模糊たるかなたへ去つて行く何ものかであつた。何か日光の斑點のやうなものも、眼の前に閃いたけれど、その數はすくなかつた、實にすくなかつた……

「いやー」この病的な悪夢から遁れようとするやうに、彼は頭を一振りしてかう言つた。

アルブゾフは空虚な笑ひ聲をたてた。

ナウーモフの顔には熱病やみのやうな、意地わるい喜びの活氣が現れた。それはまるで、内部から陰鬱な光りで照らされたやうであつた。

「それぢや、一たい諸君は僕から何を要求するんです？……諸君にとつて、この人生が何になるんです？……あの不幸なクラウゼにとつて、何になつたのです？　喘ぎながら死んで行く、數十億の欺かれたる人々にとつて何になるんです？……なんのためです？……僕にはこの果てしもない退屈な筋骨が見え透いてゐる……石器時代から現代にいたるまで、ただ／＼争闘あるのみです！……民族は亡び、文明は崩壊し、藝術は消滅して、町々は地球の表面から拭ひ去られる。ところが、我々は絶えず先へ先へと進んで、倒れたり、喘いだり、呪つたり、凄ましい死人のやうにお互同志かみ合つたりしながら、地上ぜんたいを血と涙に溺らしてゐる！……豫言者を擔ぎ上げるかと思ふと、またそれを十字架にかけて見たり、信仰するかと思へば、こんどは呪詛の聲をあげ、香を焚いて祭るかと思へば、すぐまた泥足で踏みこじる……まるで氷の上の魚みたいに、藻掻き廻つてゐるのです……一體それはなんのためです？……」

ナウ・モフの聲は權威を帯びて鋭くひびいた。それはまるで恐ろしい裁きの訊問官のやうであつた。

「よりよき未來に對する信仰のためですか？……それはどんな未來です？……そんな事は滑稽ぢやありませんか！……」

……一體そんなものがあり得ると思ひますか？……實際のところ一人々々の人間のみならず、人生全體の唯一の原動力は——苦痛なのです！……この世に動くすべてのもの、われ／＼の作る一切のもの——科學、哲學、宗教、藝術、すべてわれ／＼がバビロン塔のごとく、得意になつて築き上げたものは、みんな苦痛がわれ／＼の内部から絞り出したもので、ちやうど腐つた體から流れ出る膿のやうなものだ！……もし人類がたゞの一分間でも自分を幸福に感じ、満足を感じたなら、すべてはその瞬間に崩壊するに相違ない。なぜと言つて、その時は誰一人として、神祕や社會問題に頭を悩ますことはおろか、指一本動かすものさへなくなるからだ！……一切は苦痛と永遠の満たされざる悩みによつて動いてゐるのだ！……それがなければ人生はない、つまりこれが人生なのだ！……では、なんのためにこんなものが必要なんです？……一つ聞かしてください！」

ナウ・モフは本當に答へを待つやうに、ちよつと口を嚙んだ。彼はそのぎら／＼光る目を、一座の人々の顔から顔へと移して行つた。誰も返事をするものがなかつた。ミハイロフはちつと火を見つめてゐるし、アルブゾフは兩足を廣く踏みひろいて、額の大きな重々しい頭を垂れたまゝ、

ぢつとナウイモフの顔から目を放さなかつた。

「誰も返事が出来ないでせう！」と技師はまた言ひ出した。「よし出来るとしても、それは嘘なんだ。だつて分かつてもゐないし、また分かる筈がないのだから。おれは知つてゐる、信じてゐると、どんなに自己を説伏しようとしたつて、そりやだめです。人間は臆病と迷ひの爲に遠近さま／＼な神や、高遠な言葉や、曖昧な理想を考へ出したが、かうした無力の生み出したげ／＼しい武器の倉も、支那兵が佛蘭西の大砲にさし向けた、紙張りの龍に類したものです！……人生は榴弾のやうに、紙の怪物も、支那兵自身も、粉に吹き飛ばして了ふ。すると彼らは、一體これはどうした事だ、こんなに立派に恐ろしく出来たものを、誰ひとり怖がらうとしない、かう言つて呆れてゐる！……可哀さうな野蠻人！……これがたゞ紙張りのか／＼しに過ぎないといふ事を、夢にも考へるが出来ないんです！……神も見たものがない、天國も想像することが出来ない、靈魂の不滅も夢にさへ見られない！……一體どうしたらいいのでせう？……思ひ切つてか／＼しを抛り出してさふべきでせうか？……ところがさうでない、こんどは違つたか／＼しを作らなくちや濟まないのです。黄金時代、プロレタリアートの勝利、

社會主義的未來！……かういふ新しい張り子の怪物をもつて、戰場へ押し出して行くのだ！……眞理をまともに見つめて、たゞひとり赤裸々な事實に面して立つのを怖がつてゐる、鈍感で臆病な人間どもは、到頭かういふものに嘸りついたのです！……」

ナウイモフの聲には、心からの憎悪が響いてゐた。

「社會主義もプロレタリアートも、限りなき未來の一瞬時に過ぎない、黄金時代も三日と續くことは出来ない、なぜと言つて、矢も楯も堪らないほど厭になつて、飽き飽きするに違ひないからだ。黄金時代にだつて、やはり不可解の未來はあるのだから……やはり解き難い疑問はあるのだから。彼らにはこれが分からないんです。だが、それもいゝとしませう……黄金時代が來たとして……さてそれから先は？……その後は？……やはり『なんのために？』といふ疑問が起こる、結局、『なんのために？』に歸着するんだ……」

ナウイモフは緊張のあまり息をつまらせ、拳を握りしめたが、こんどはすこし落ちついた低い聲で言ひ出した。

「この疑問は永久に絶え間なく人間を苦しめるでせう。だが、もしその苦しみがやんだら、もしいよくすべてを知

ることが出来たら……アルツイバーシエフといふ作家に、『偉大なる知識について』といふ短篇があります……半ば架空的な皮肉な作品です……ある男が一切を知るために、自分の魂を悪魔に賣つて……その目的を達した……ところが、その翌日彼は家を出て、溝に頭を突つ込んで死んで了つた、とかういふんです……アルツイバーシエフは、その男がなぜ死んだのか、何を知つたのか、それについてはなんとも書いてゐませんが、しかし實際その通りです、當然さうあるべきです。もし何もかもどん底まで、最後の一語まで知りつくしたら、その時は最後の恐怖が襲つて来るでせう、それこそ完全な無意義に對する恐怖です！ その時こそもうまつたく、永久に生の目的がなくなります……本當に溝の中でもなんでも、行き當たりばつたり頭に突つこんで、何も見ないやうに、聞かないやうに、感じないやうに、知らないやうにする——それよりほか仕方はないんです！……」

ナウイモフは唇を咬んで、奇妙に視線を走らせながら、再び口を嚙んだ。

「まあ假りに、」と彼はまた言ひ出したが、こんどはもう當たりまへの聲だつた。「それは間違つてゐるとしませう。や

がてが開けて、上帝がその光榮ある姿をわれ／＼の眼前に現し、人類がすべての事を知り得るときに、はじめて我の豫想し得なかつたやうな意味が啓示せられ、はかない人智で想像もできなかつた目的が明瞭になる。かうして忽ちすべてが闡明されて、なんの目的もないけれど、完全な事實上の幸福が當來するのだ……しかし「その時」そんな幸福が何になるだらう？……だつて、僕は人間的な理智でそれを拒否する……僕は人間として無意義の中を彷徨したので人間としては決してそこから遁れ得ない！ 自分が無意義と苦痛の穢土に、犬のやうに喘いでゐる時、魂だけが曉天の星のごとく輝いたつて、それが一體なにになるんだ！……まして不死なんてものが、まるで面當てのやうに、全然ないといふ事になつたら、誰かがいつか、どこかで、燦然と輝き出さうと、出すまいと、僕にとつては没交渉だ！……第一、僕はその燦然と輝き出す人を、想像する事も出来ないぢやないか！……そんなものなんか呪はれるがいゝ！……どこかのイワン・イワノビッチが、四千億世紀にコバルト色の袈裟を着て歩き、棕櫚の枝を振り廻すからつて、それが僕にとつてなんだらう？ なるほど彼はコバルト色の袈裟を着、棕櫚の枝を手に持つて歩き廻るだらうが、僕

は今こゝで犬のやうに、泥濘と醜汚の中に死んで行くのぢやないか？……いや、そんな事は眞つ平ごめんだ！……そんなイワン・イワーノヴィチのために、苦しみながら生きて行くのが厭なばかりぢやない、そんな人間なんか勝手にくたばりやがれだ！ 棕櫚の枝と幸福をもつて、とつとと消えてなくなるがいゝゝ……もし僕がそいつに對して何か望むとすれば、それはたゞ始めから生まれて來ないやうに、といふ事だけだ！……」

ナウーモフは毒々しく笑ひ出した。

「神祕の啓示などで、僕を釣らうとしたつてだめだ……もう手遅れだ！……神さまも計算を誤つた！……それに、神さまが自分の神祕を開いて見せるにしても——わづか一點の光明でも見出さうと、闇の中を悩み求めながら、苦痛と絶望に倒れたわれ／＼人間をさし招いて、この神祕を見よ、わが榮光に浴せよ、とかう言はれるにしても、われ／＼はそんなものから顔をそむけて了ふだらう！……われ／＼は神の仕業を赦すわけに行かない！……われ／＼はかう言ふだらう——どうかもとの闇冥界に歸してくれ。われ／＼はそれよりほかのものを見ないから、闇の世界が好きになつたのだ。暗い地上にそゝいだ涙や血を忘れることが出來ない。

罪なくして肩に擔はされた苦痛に對して、報いを受けたくない！……實際、これがどうして赦せるものか、忘れられるものか！……われ／＼は犬ころと違ふから、きれの肉のために、一切を赦し、一切を忘れる譯に行かない！……僕ナウーモフが生きてゐる間は、一箇の自我としてこゝに嚴存してゐる。そしてこの遲壽きの幸福を拒絶する！……して見ると、諸君は憎悪以外の何ものを、僕から期待することが出來ます？……僕がクラウゼを死へ突き落としたといふんですな？……いや、たしかに……僕です！……僕は諸君も突き落としますよ。もし出來ることなら、世界ぢうのものを、喜んで突き落としたでせう！……しかも、僕は自分の憎悪を癒やしたばかりでなく、どこか永遠の霧の中で、苦痛の盃に唇を觸れる順番を待つてゐる、數十億の不幸な人々に、偉大な恩恵を施したことを悟るでせう！」

ナウーモフの聲は急にぶつ切り切れた。彼は明かに自分でも苦しんでゐるらしかつた。自分自身と二人の聞き手の眼前に描き出した、かの耐へがたい痛みを體驗しながら、苦痛の快感を享樂してゐるのだ。彼を見てゐると凄いやうであつた全世界を瀕らすまでに、思ひ切つて吐き出すことの出來ない、憎悪と毒念の恐ろしい力のために、彼の胸は



さも苦しく惱ましげに、高くもち上がつては擴がつてゐた。彼はコップを取つて、ほとんど咽せ返りながら、いつまでも赤い葡萄酒を飲んでゐた。

「ふうむ、」とアルブゾフは言つた。「よくも喋つたない……いつとお前自分で自殺したらいいだらう、この忌々しい技師め！」不意に彼は恐ろしい忿怒の調子で叫んだ。「悪魔にさらはれて了へ……さあ、もう歸らう……かうしてゐたつて始まらない……さもないと、僕は誰かをやつつけるか、でなければ、自殺でもしさうだよ……行かう！……」

彼は帽子を擱んで、戸口の方へ歩き出した。けれど戸口のところで、不意に立ち止まつて、引ん曲がつたやうな薄笑ひを浮かべながら、振り返つた。

「おい、われ／＼の友人を見舞つてやらないか、え？……先生あすこで何をしてるか、行つて見ようよ！……」

ミハイロフは器械的に立ち上がった。彼の頭は何かぼんやりした偉大な形象で、霧のやうに一杯になつてゐた。それはある偉大な恐怖の青ざめた幻だつた。彼はすつかり酔ひが醒めてゐたけれど、青白い顔色をして、酔つばらひのやうにふら／＼してゐた。

彼らは食堂の方へ行つた。ナウモフは依然として目を輝かし、唇をひく／＼させながら、二人の後について行つた。

## 一七

青みがかつた薄白い曉が、もう窓からさし覗いてゐた。荒らされた空しい部屋々々は、居心地が悪くて寒かつた。かるた机の上にはまだ白墨や歌留多の札がちらばつて、玉突き臺の青い羅紗の上には白玉がちつと凍りついてゐる。たつたいま誰かが立ち上がつて出て行つたやうに、椅子の位置が亂れてゐた。埃つぽい床には吸ひ殻が投げちらされて、乾いた泥のあとがあり／＼と見えた。

クラウゼの死骸はやはり白い卓布に蔽はれたまゝ、床の上に横たはつてゐた。そして青ざめた朝の光りの中で、一そり長細く見えた。まるで一晩の中に伸びたやうである。アルブゾフと、ミハイロフと、ナウモフとは、白い卓布を見つめながら、長いことその傍に立つてゐた。布の下からは死體の角ばつたところや、でこぼこしたところが、ちつと無氣味に突つ張つてゐた。

クラウゼは、白い經帷子の下で息を潜めてゐるやうに、

身動きもせず横たはつてゐた。これはもうクラウゼでなく、たゞその死骸にすぎないと思ふと、妙に不可解な感じがした。なんだか白い布を透かして、白い死んだ目が無言のまゝ、狡猾に注意ぶかく、生きた人々を注視してゐるやうに思はれた。

彼は夜つびでこの冷たい汚れた床に臥<sup>ふ</sup>とほして、指一本うごかさなかつたのだと思ふと、不思議な氣がした。どういふ譯かミハイロフの頭に、ふと氣ちがひめいた考へが浮かんた。クラウゼは夜中に起き上がつて、もの凄く頭を撃ち碎かれた、眞つ白な、ひよろ長い姿で、戸口に近寄つたのではないだらうか、そして白い死んだ目で、自分たちを隙見<sup>すきみ</sup>したのではなからうか？

彼は本能的にうしろを振り返つた。と、思ひがけなく、ちやうど戸口の際<sup>きわ</sup>まで、血の痕がついてゐるのを認めた。無意味な恐怖の悪寒<sup>あくかん</sup>が、彼の背筋を流れた。ミハイロフは神經質に笑つて、さつさと部屋から出て了つた。

ナウーモフは、その笑ひ聲が聞こえなかつたやうに、すこしも注意を拂はなかつた。アルブーゾフは不眠のために赤くなつた目で、戸口のところまで見送つた。

「さあ、どうだね……僕らも出掛けようぢやないか、技師

先生。」と彼は言つた。

ナウーモフは振り返つた。その疲れた目は悲痛な、深刻な表情でアルブーゾフを見た。アルブーゾフはその顔を見違へたやうな氣がした。技師はどこか奥深い自己の内部を見つめてゐるのだつた。柔かい憂愁が、引きしまつた唇の周りに漂つてゐる。それは丁度この瞬間に、あらゆる狂暴な毒々しい想念が、忽然として消え失せて、たゞ美しく優しい人間的悲哀のみが、残つたやうな具合であつた。

「君、どうしたんだ？」とアルブーゾフは問ひかけたが、その聲はかすかに慄<sup>おそ</sup>へた。「どうも仕方がないぢやないか！……これが君の思想の結果なんだよ！……クラウゼが可哀さうだ！……いゝ男だつたがなあ！……しかしそれだけの事だ。行かう！」

そとで馬車に乗るとき、アルブーゾフは青ざめた灰色の顔をミハイロフの方へ振り向けた。こちらは出口のところ、二人に別れを告げてゐた。

「どうだい、セリョージャ？」と彼は訊ねた。なんと言つても、最後のものとも重大なあるものを聞きたくて堪らない、といつたやうな調子だつた。

ミハイロフは苦しさうに片手を振つて、板張りの歩道を

こつくと足早に歩き出した。

三頭馬車は彼を追ひ越して、町の角を曲がると、遙かか  
なたに響きを消した。

町はもう目を醒ましにかけてゐた。女達は籠や壺をもつて、  
市場へ出掛けてゐるし、黒つばい頭巾をかぶつた老婆が、あ  
け放した教會の支那に佇んでゐる。薪を積んだ荷車が通る  
と、灰色をした田舎らしい犬がその後から走る。百姓らは  
ぼんやり眠さうにミハイロフを見やつた。

もうどこもかしこも朝だつた。

## 一八

棺臺に飾つた鳥の羽は静かに揺れて、群集の頭上に遠く  
から見えてゐた。

聯隊長を頭で大勢の將校が、だらしなく一塊りになつて、  
棺のあとに續いた。黒い喪中の馬衣をかぶせられた故人の  
馬が、二人の兵士に轡を取られて進んだ。尖つた耳が二つ  
突き出て、敏感さうにひくく動き、眞ん丸い音なしさう  
な目を、不可思議に覗かせてゐる黒い馬衣は、この馬に謎め  
いた薄氣味わるい感じを與へた。たつた一匹かういふ奇妙  
な衣裳をつけた馬は、故人にとつて唯一の親しい生物のや

うに感じられて、見てゐるとしをらしく、もの悲しい氣持  
ちになる。

白馬に跨つた喇叭手は、眞鍮の喇叭を弱々しく光らせて  
ゐる。その後から銃の林が揺れ、馬の頭が規則たゞしく動  
いてゐる。かうして騎兵の一箇中隊が、力強い足踏みに大  
地を轟かしながら、肅々と進んで行つた。

葬儀はなみ／＼ならず莊重で、悲痛を極めてゐた。町ぢ  
うのものが道の兩側に垣を作つてゐたが、靜かに揺れて遠  
ざかる棺を、いつまでも見送つてゐる人々の青ざめた顔に  
は、何か恐怖のあまり一ところに集中したやうな、一種特  
別な表情が浮かんでゐた。葬送マーチはいと嚴かに、通り  
の端から端へ響き渡つた。眞鍮喇叭の金屬性の聲は、男ら  
しい峻嚴な悲しみを罩めながら、隊の將校の恐ろしい最後  
の道を弔ふやうに歌つた。

軍樂隊の響きがやむと、鼻にかゝつたやうな低い合唱が  
起こつて、遠く道路の向かうへ伸びて行つた。その合唱が  
靜まりかゝると、墓場の鐘のひびの入つたやうな響きが、  
次第に近くはつきり聞こえた。

やがて遂に、黄色い十字架の傾いた白い門や、黄ばみ始  
めた木立ちや、墓標や、記念碑などが、深い堀をめぐらし

た、崩れかゝつた石の圍ひごしに見えて來た。棺は最後に一つゆらりと揺れて止まつた。

司祭たちの黒い袈裟と、奇妙に裾の長い唱歌手の長衣は、いかにも自分の領分へ來たといふやうに、足を止めようともしないで、大きく明け放された門内へ堂々として入つた。それに續いて群集は、まるで漏斗の中へ吸ひこまれるやうに、目まぐるしくちら／＼しながら流れこんだ。

樂隊は鳴りを止め、鐘も靜まり返つた。かうして急に襲つて來た靜寂の中で、人々の足が地面をこする忙しさうな響きと、棺を臺から取りおろす將校たちの低い話し聲が、奇妙にはつきり耳だつのであつた。誰もやり方を知らないで、無意味な慌たゞしい混雜が持ち上がった。將校たちは棺のこつち側へ來たり、また向かう側へ駈け出したりした。りきんで赤くなつた顔や、力をこめてかゝめた背中などが見えた。棺は人々の頭上で、重々しく不規則に揺れたと思ふと、急に下へおろされた。將校たちは人によつ突かつたり、棺を四方八方へ揺すぶつたりしながら、さつと道を開いた群集の間を、並み木づたひに急ぎ足で運んだ。道は格子や記念碑にかこまれて、黄色い木の葉が散り敷いてゐた。誰かしら若い見習ひ士官が、花環を手に持つて駈け

出しながら、一行に追いついた。そして、歩きながら花環を棺へ引つけようと苦心した。誰かいま／＼しさうに何やら注意したが、そのとき急に花環が棺へ引つかゝつた。骨が折れたのと同じで、見習ひ士官は眞つ赤になつて、一行から遅れて立ち止まつた。花環のリボンが地面を引きずつて、棺を運んで行く將校たちの足に踏まれたが、それでも見習ひ士官の顔は満足さうであつた。

柱の傾いた教會の入り口階段で、棺は背むしのやうに意地悪く背中を丸くした。そして、がくりと一つ揺れたと思ふと、あけ放した黒い戸口へ潜りこんで了つた。

小さい教會の中はがらんとして、足音が木だまを返した。石疊みの上を歩く人の足音と、棺の圍りに置かれる高い金屬性の燭臺が、重々しくことりといふ音ばかり、なんだか度はずれにはつきり聞こえた。

何もかもひつそりと鳴りを靜めて、嚴かなもの／＼しい沈黙があたりを領した。と、不意にも柔かな老人らしい聲が、低いけれどはつきり響き渡つた。

「神よ、汝に祝福あれ！」

群集はちよつと身動きして、前の方へ身を乗り出したが、すぐにまた靜まつた。聯隊長は、偉大な言葉の重みをもと

ごとく引き受けたやうに、胡麻鹽の頭を莊重に垂れた。かうしてもう最後まで、それを上げようとしなかつた。

合唱は互に入り交じる音波で、がらんとした教會をかき亂しながら、奇妙な高い聲で歌ひ出した。それがまた静まりきららない中に、今度は別のがさ／＼した大きな聲が、雷のやうに容赦なく響き渡つた。

「われら主に祈らん」

「あーあん……」高い圓天井の下で木魂が慄へて滑つた。

「主よ、憐みたまへ」と合唱がおづ／＼と静かに應じた。

「あーあえ」といふ反響が、あるかなきかに入り交じりながら、隅々に消えて行つた。

「汝のみ手われを作り、われをこの世に送り、われ汝の掟をば守らん……」また老人らしい聲がほかの聲にすこしも構はず、落ちついた調子ではつきりと唱へた。

「主よ、汝の僕を憐みたまへ……」と合唱は消え入るやうに呻いた。

けれど、老人らしい聲は誰の言葉も聞かないで、歌聲を遮りながら唱へつゝけた。

「汝を恐るるものは我を見て心たのしまん。なんとなれば、汝の言葉を頼めばなり……」

「汝の僕を憐みたまへ——あ——へ……」

將校たちは頭を垂れたまゝ、黙然と聞いてゐた。押しよせて来た群集は、しきりに溜め息をついた。香爐から昇る細い煙りは、鳩羽色の霧のやうに、高い蠟燭に絡みついた。薄黄ろい炎は、その中でばつと燃え上がつたり、また消えさうになつたりしてゐる。棺の蓋があけられた。屨氣樓のやうな白い紗の下に、誰かの恐ろしい横顔が見えた。唇を嚴かに結んで、冷たい骨張つた額に小さな花環をちつと戴せた、誰にも見覚えのない不可思議な顔……

「……狭き道を歩めるもの、悲しめるもの、この世において十字架を軛の如く負へるものよ……」やはらかい老人らしい聲がゆつくりゆつくり、讀すやうに讀み上げた。「來たりて汝らのために調へられたるものを受け樂しめよ……」

「主よ、光榮あれ！」と合唱が答へる。

「……われは土より作られたるものなれば、再び土に返したまひぬ……」

息をするのが重苦しかつた。奇妙な言葉は息づまるやうな憂愁を吹き送り、甘つたるい香の匂ひは目まひを感じさせた。冷たい白い光りが窓から流れ込んで、高い圓天井の下に青白く溶けて行く。そこには恐ろしいエホバの神がま

しますのだ……老人らしい聲はもの柔かに、はつきりと唱へ續ける。

「……まことにすべては空の空にして、この世は夢なり、また影なり。地に生まれしものはすべて空しく狂ひ騒ぐのみ。聖書に言はずや、この世のすべてをわがものとせば、たゞちに墓に入るべし……かるが故に、主基督よ、世を去りたる汝の僕を安らはせたまへ……」

「どうも變だ！」わきの方で蠟燭の炎を見つめてゐた、若い見習ひ士官が考へた。それは棺に花環をかけようと苦心した、例の將校である。「もしすべてが空の空なら、なんのために我々は生きてゐるのだ？ それに、この世のすべてをわがものとせば、たゞちに墓へ入らんだつて？……なんのこつた、どうも譯が分からない……もつとも、たゞさういふ事になつてゐるだけなんだらう……」

「人みなこの赴くところに、墓上の號泣はハルレヤの歌を奏せん……」

「基督よ、もろくの聖者とともに安らはせたまへ……」  
「この世のいかなる喜びか、悲しみを知らざらん、地上のいかなる榮えか、常に變はらであるべき……ものみなは影よりはかなく、夢よりも頼みすくなし……たゞ東の間に死

は來たりてすべてを奪ふ……」

人々の聲は、言葉に盡くしがたいほどの悲しく奇妙に纏れて、溶け合つたかと思ふとまた別れ、呻きながら消えて行くのであつた。若い見習ひ士官は急に胸が塞がつて、泣き出したくなつた。

「……主を思ふとき嘆き悲しむ。神の姿に型どり作られたる人の美しき姿も、面影うせて、醜く淺ましく棺の中に横たはるを見る……」

「あゝ、これは恐ろしい！」若い見習ひ士官は惱ましい心持ちでかう思つた。彼は鼻の中がくすぐつたくて堪らないやうな氣がした。

人々の聲はいつまでも果てしなく續き、合唱は消えなんとして、それに應るのであつた。とき／＼何か喜びでも約束するやうに、高い調子で何か長いものを歌ひ始めたかと思ふと、また誰かの無關心な聲が一人きりで、なんの望みもないやうに侘びしく經文を唱へはじめる。もう立つてゐるのが苦しくなつて、こんな事が無限に續きさうに思はれて來た。

「あゝ、なんといふ長つたらしい事だ！」若い見習ひ士官は惱ましげにかう考へた。「だが不思議だなあ。あの男はあ

あして横になつたまふ、何ひとつ聞こえないんだからなあ……我々はくさくさしてゐるのに、あの男はもう平氣なのだ……せめて早く終つてくれ、ばい、ばい……一體あの男はなんにも感じないのか知らん？……それこそまるきりなんにも……もうなんにも感じないといふ事さへ、感じないのか知らん？……」

若い見習ひ士官は、煙りのやうな紗の下にぼんやり輪廓を見せてゐる、高く聳えた死人の横顔に見入つた。彼は耳の端つこに、例の不可解な文句と合唱の歌のもつれを聞いてゐたが、しかし彼の想念はぼやつと滲んで来た——彼はすつかり考へこんだのである。

彼はこんな事を想像してゐた——自分もやはり遅かれ早かれ、あんな風に白い小さな花環を額にのせ、両手を胸の上に組み合はせながら、白い紗に蔽はれて横たはるのだ……周りではやはりあんな風に歌つたり、香を燻らせたりするだらう。窓からはやはり冷たい白い光りが流れこんで、高い圓天井の下にはやはりエホバの神が、祝福するとも呪ふともつかず両手を擴げて、ゆらくと泳ぎ廻るだらう……けれど自分はもうなんにも見ず、何にも聞かないのだ……それは来る、必ず来るに相違ない。昨日ナジーモフのとこ

ろで一騒ぎして、ユルバコフ中尉に歌留多で五十ルーブリ負けたことも、まるで無意味なのだ……いま自分が生きて立つて、聞いたり考へたりしてゐるのも、やはり無意味なのだ……昨日カーチャを接吻しようとする、女が怒つて彼の手を叩いた事も、やはりなんの意味もない……可愛いカーチャ……しかしそれでも、自分はちつと横になつたまふ何ひとつ見も聞きもしないだらう！……恐ろしい事だ！……どうして誰一人この事を考へようとしないのだらう？ 實際のところ、たゞこの事だけ考へなければならぬ筈ではないか。なぜと言つて、結局やつて来るのは、たゞこの事ばかりではないか！……一たい本當にさうなのだらうか？」

若い見習ひ士官は、一體どんな風か試して見ようと思つて、兩の目を閉ぢたが、すぐ慥えたやうに見開いた。

「……はらからよ、友よ、肉親よ、知り人よ、聲もなく息もつかぬわが姿を見て、我を嘆き悲しむべし……されど我を愛するすべての人々よ、來たりて臨終の口づけをなせ！……」

「可哀さうな、可哀さうなクラウゼー」と若い見習ひ士官は考へた。すると、涙がその睫毛に宿つた。

あたりが急にざわ／＼と動き出した。最後の接吻の式が

始まつたのである。將校たちは一人づつ棺臺の梯子へ登つて、忙しうに十字を切りながら、嚴かに唇を引き結んだ、まるで見覚えもないほど醜い死人の顔を、憎えたやうに一目見るなり、寒氣を催すやうな骨張つた手を、やつこのことと接吻した後、やはり忙しげにそこを離れるのであつた。

人聲は静かになつた。またもや石疊みをこする足音と、燭臺を取りのける騒がしい音が聞こえた。指のごつ／＼した誰かの手が、群集の中からぬつと出て、蠟燭を消した……細い煙りの筋がわきの方へ渦巻いた……

また慌たゞしい、ぼつが悪い混乱が始まつた。新しい木材の中へ柔かく沈んで行く釘を、こつ／＼打ちつける金槌の響きがはつきりと、頻繁に聞こえ出した。やがて棺が持ち上がった。まるで吐息でもつくやうに、ゆら／＼と揺れて、また下へおりた。群集はどや／＼教會を出はじめた。古びた鐘樓は、ひゞの入つたやうな響きで棺を迎へた。「聖なる神よ、聖なる岩よ、聖なる永生よ……」とまた合唱が歌ひはじめた。僧たちの黒い袈裟は、もうはるか土饅頭や、十字架の間に見えてゐた。

白々とした明るい日であつた。すき通つたやうな秋の冷氣の中に、しをれ行く木の葉の

かすかな匂ひが、あるかなきかに漂つてゐる。空は高くのんびりと擴がつて、その冷たい反映が黄色い木立ちにも、赤みがかつて来た草にも、袈裟の黒天鵝絨にも、將校たちの銀色をした肩章にも、深い赤土の穴のすぐ傍におろされた、背むしのやうな棺の蓋にも——すべてのものに照りはえてゐた。木の葉はもう殆んど散つて了つて、墓場は不思議なほどがらんと、明るく感じられた。遠く連らなつた十字架や木立ちの間から、眞裸な野が透いて見えた。そこには廣潤と憂愁に満ちてゐて、はるかな青い地平線の方から、限らない曠野の悲しみが流れて来た。周圍の青ざめた自然は静かに亡びて行き、木々は音もなく黄葉を落としたから、身じろぎもせずに立つてゐた。

もの柔かい老人の聲が不明瞭な調子で、何やら忙しげに唱へてゐたが、限りなく高い白々とした空のもので、その聲は驚くばかり弱々しく聞こえた。

「わが同胞よ、汝の思ひ出は永遠なれ……」

「永遠なれ……永遠なれ……永遠なれ……」まるでやけになつたやうに、合唱が大きな聲で喚きはじめた。幾つかの鐘が互に遮つたり、交じり合つたりしながら、ひゞの入つたやうな聲を立てはじめた。混乱が持ち上がった。どこか



らかシャベルを持つた兵隊が現れて、人々はざわ／＼と動き出した。棺の蓋が靜かに揺れて、ゆら／＼と穴の中へ匍ひおりました。そこには光りもなく生命もなく、たゞ永久の死あるのみだつた。

圍ひそとで、短いかさ／＼した一齊射撃の音が、はぜるやうに聞こえた……肥つたイワノフ中尉は緊張した赤い顔をして、帽子を阿彌陀にずらせながら、そこでしきりに號令をかけてゐた。

一同はびくりとした……木の枝が心持ち揺れたと思ふと、さながら大地の告別のやうに、幾枚かの葉がくる／＼と舞ひながら穴の中へ落ちて行つた。崩れた石垣の向かうには、忙しげに持ち上げられる細い銃身と、さも心配さうな兵士の顔が見えた。また一齊射撃が起こつた……それからまた一度……僧たちは、一そう聲を高くして歌ひ出した。と、思ひがけなく鈍い響きをたてて、土がばら／＼とつぶせられた。

「むらのないやうにしろ、ステューバーノフ……そつち側からかけろ！……」不思議なほど平凡に生き生きした、さも氣づかはずな聲が聞こえた。

萬事をはつた！ もうあの莫迦げた少尉補はゐなくなつ

た。もう二度と彼の姿は見えなくなるのだ。

つい昨日まで、彼はわれ／＼と談笑して、太陽を見たり、生きたものの聲を聞いたりして、世界の一角を一種獨特の、不可解な生活で満たしてゐた。數千のこま／＼したものの――軍服、姓名、馬、奇妙な部屋、エナメルの長靴、セロ、かういふものが彼の精神で生かされてゐたのだ……彼は自分の思想、自分の喜び、自分の苦痛を持つてゐた……ところが、不意に死の訪れに會つて、この一角が空虚に歸した。

永久に金色をした太陽も、人間の仕事も事業も、再び歸ることなく隠れて了つた。闇と腐蝕に委ねられた、彼の孤獨な見ぐるしい死骸は、大地の暗黒裡に隠れて了つた。

彼の足跡はこの世の騒擾の中に飛び散つて、時は遠慮なく過ぎて行くだらう。そして彼の顔を見、彼の聲を聞いた人は、一人もこの地上に残らなくなる。生きて苦しんだ上、恐ろしい最後を遂げたクラウゼ少尉補の記憶は、新しい人の間に、新しい日の新しい光りの中に、再び甦ることはないのだ……

土饅頭は掻きならされて、どぎつい匂ひをたてる樞の緑葉に蔽はれ、新しい白い十字架が手早く埋められた。かうしてひよろ長い謎のやうな十字架は、古い土饅頭や十字架

に交じつて、地上たかく立ち上がった。

僧たちは歸つて了つた。聯隊長も馬上で立ち去つた。將校たちはこれからどうしていゝか分からないやうに、なほ暫く墓前に佇んでゐたが、急にざわ／＼と散りはじめた。群集はてん／＼ばら／＼に墓場から出た。低い話し聲が聞こえはじめた……誰か綺麗な令嬢が、友だちを追つて駆け出した。將校の一人がその後から皮肉を投げた……誰やら聲高に笑つた。ちよつと束の間、墓前に鳴りをひそめて、妙に考へこんでゐた生活は、再びのん氣らしく周圍に動きはじめた。

騎兵中隊は憂々の響きを立てながら、道いつばいに伸びて行つた。兵士らは何やら笑つたり、罵り合つたりしてゐた。喇叭手の白い列は、もうはるか町の往來へ入つて、次第に死の場所から遠ざかりながら、自分たちの温い既や兵營に向かつてゐた。

墓場には誰ひとり残らなかつた。静寂は目にこそ見えぬ、青白く墓の上に頭を持ち上げた。古い灰色の十字架は、眞つ白な新來の友を、黙然と見つめてゐた。小さな赤土の山の上では、椏の緑葉が萎れながらうな垂れてゐた……

何かしら鳩鴉色の小鳥が、黄色い木叢の中から飛び出し

て十字架にとまつた。そしてあたりを見廻して、首を一つひねると、氣つかはしげにちいと一つ鳴いて、體を脹らませた。

## 一九

チージュはまるで熱くて堪らないやうに、外套の釦を外したまゝ、せか／＼と町の方へ歩いてゐた。

彼の心は濁つて重苦しかつた。彼とルイスコフのほか、クラウゼの親友の中で、墓場へ行つたものは一人もなかつた。小柄な大學生は、さながら不幸なクラウゼが、早くも一同に見捨てられたのを、自分の目で見る事が出来るやうに、故人のために憤慨したり悲嘆したりした。

「あの時、あのアルプゾフの莫迦が言つたのは本當だつた。」とチージュは悲痛な氣持ちで考へた。「友だちだの親友だのつて、みんなある時が来るまでだ……いつそ死ぬまでと言つたら、それこそ間違ひなすだ……死後いつまでも忘れられなかつた者なんかありやしない！……ブーシキンのやうなのは覚えてゐて貰へるが……それもブーシキンその人ぢやなくて、ある文學上の偉業を覚えてゐるのだ……いやになつちまふ！」

彼の頭はめちやくちやになつてゐた。チージュは自分の思想や感情を、整然とした一つのものに、どうしても纏めることが出来なかつた。彼は今でもやはり、壓倒されつくしたやうな氣持ちで、夜もろく／＼眠れなかつた。轟然たるピストルの響きや、死骸の倒れる音を夢の中で聞いた。彼はなんだか本當にならないやうな氣持ちさへした。一體あんな事が事實あり得るのだらうか？……妙に肩の吊り上がつた青白い顔は、寸時も離れず彼の前に立ち塞がつてゐた。「可哀さうな男だ。」と彼は考へた。「なんのためだらう？……あのナウーモフは悪黨だ！……相手がどんな人間かといふ事は、あいつだつて知らない筈はないんだ！」

人生は小柄な大學生にとつて疑ふ餘地のない、絶對的價値のやうに映つてゐたので、彼はこのナウーモフがどんな思想を持つてゐたか、それさへ忘れてゐたほどである。たとへ事情がどうであつたにもせよ、もしナウーモフが自分の言説の結果を正確に知つてゐたら、あゝいふ事は言はなかつたに相違ない——彼はこんな氣持ちがした。クラウゼ少尉補が自殺したのは、まさにナウーモフの影響を受けたからに相違ない、かうチージュは信じて疑はなかつた。で、彼はあの技師に會つて、悲痛な眞實を面と向かつて浴びせ

かけてやりたかつた。

「實際あれは、自分の手にかけたも同じことだ。」心臓を抓られるやうな氣で、彼はかう考へた。「さうだ、手にかけたのだ！」

「キリール・ドミートリッチ、待つてください！」と言ふルイスコフの聲がうしろで響いた。

小柄な大學生は待ち合はせた。やがて二人は並らんで歩き出した。

ルイスコフもやはりこの出來事に壓倒されてゐるらしくつた。彼は放心したやうに自分の足もとを見つめ、心配さうにステッキを振り廻しながら、無言のまゝに歩いてゐた。

「さう……」たうとうかうチージュが切り出した。「ねえ、君はこんどの事をどう思ひます？」

「そりやもう……」とルイスコフは憂鬱らしく答へた。「僕自身もあの事はしじゆう考へてゐます……まつたく、いつまでかうしてゐたつてしやうがない……あんな風にやれば、すくなくとも一思ひにけりがつきますからね……僕は全然ナウーモフ氏と同感ですよ！……」

チージュは歩みを止めた。

「君は何を言ふんです、ルイスコフ君！」彼は奮然として

叫んだ。「そりやまあ一體何といふ事だ！ さういふ忌々しい時代が来たんだらうか、そんなパチルスが空中を飛んででもゐるのか知らん？……それはもう莫迦々々しい事だ、意久地のない卑劣なことだ、一體それが君に分からないんですか？」

「ふうーん！」とルイスコフは憤慨したやうに言葉尻を引いた。

「ふうーんぢやない、その通りですよ！……自殺する人間は生に降伏して、臆病にも背中を見せて逃げ出すやつですよ！ 第一、人間は生を中絶する権利を持つてゐない、自分が創造もしないものを、破壊する権利など持つてゐないです。」

「そりやなぜです、キリール・ドミートリッチ？」とルイスコフは自信のない調子で反問した。

この單純な短い質問のために、小柄な大學生はちよつと間諜ついた。それと同じやうに短い、單純な答へがなかつたからである。ルイスコフは彼の狼狽を見て、曖昧な身振りステッキを振り廻した。

「奇妙な質問ですな！」とチージュは憤慨したやうに言つた。

「なぜ奇妙なんです？」ほんの心持ち冷笑の響きさへ聞かせながら、ルイスコフはかう言ひ返した。「僕の考へでは、何より當然の答へですよ、あなたが権利を持たないと言はれるから、僕はなぜと聞いているんです……」

「それはつまり、生を創造したのが君でないからですよ！ 自分の答への不十分なのを意識して、小柄な大學生はいらしながら繰り返した。

ルイスコフは見えるか見えないかの薄笑ひを浮かべた。

「僕が創造しないからつて、それがどうしたと言ふんです……」と彼はいくぶん容赦するやうな調子で言つた。「だつて、そんなものを押しつけてくれと、僕の方から、頼んだ譯ぢやなし、またそれを保存する義務も負つた覚えがありません……それはたゞさう言つて見るだけで、本當は……單なる言葉に過ぎませんよキリール・ドミートリッチ……もし僕が生に飽きたとしたら？ もし生が僕にとつて苦しかつたら？」

「苦しいつて！……そりや人生にはいろんな事がありませうさ！ 君は人生が謝肉祭の連續ならいゝ、とでも思つてゐるんですか？……人生は慰みぢやなくつて、義務なんですよ、ルイスコフ君。だからどんなに苦しくつて、闘はね

「ばなりません、意氣沮喪すべきぢやないです！」

「キリール・ドミートリッチ、あなたはのべつ『ねばならぬ、ねばならぬ』と言はれますが、なぜ——ねばならぬのです？」

「なぜつて、さうしなかつたら、人類は消滅して了ふか、獸類になつて了ふよりほかないからです。四つん匍ひになるよりほかないからです！」

「なあに、勝手にならしといたらいゝですよ！」

「チーヅは毛蟲に刺された雀のやうに飛び上がった。」

「そりや勿論ですとも、もしそんな考へ方をすれば——」彼は吐き出すやうに言つた。

「暫く無言のち、彼は嘲るやうに言ひ出した。」

「どうやら君までが、もうナウーモフ主義にかぶれたやうですな、ルイスコフ君！」

「かぶれたのぢやありません、たゞ……あの人に賛成なんです……もつとも、無論、一から十までといふ譯ぢやありませんがね……」

「チーヅは横目にじろりと彼を見て、いら立たしげに鼻を鳴らした。」

「一から十までではないつて？　ぢやどういふ點が不賛成

なんですか？」

ルイスコフは曖昧な様子でステッキを振つた。

「いや、なに、全體として……僕はむしろクラウゼの側なんです……つまり、もし人が……僕が言ひたいのはかうです。人は自分一箇人で問題を決すべきで、他人の問題にまで立ち入るべきぢやありません……そんな事は單なる思想で……莫迦げてる……」

「莫迦なことを言ふのはおよしなさい、ルイスコフ君！」とチーヅは我慢しきれないで遮つた。

ルイスコフはかすかに顔を赤らめて、ステッキを振り廻すのをやめたが、しかし人がなんと言はうとも、腹の中の確信は變へないといふ表情が、依然として彼の顔を去らなかつた。チーヅは一目で見ぬいて了つた——ナウーモフは彼と會談したに相違ない。で、憐れなルイスコフは、もう新しい教義の使徒のやうにうぬ惚れて、他人の思想や他人の言葉を大事さうにかゝへながら、凡人には不可解な自分自身の思想であり、言葉であるやうに思ひこんでゐるのだ。

「君のナウーモフは、」と小柄な大學生は憤然として言葉を吐いた。「たゞもう——悪黨なんですよ！　あゝいふ人間は、狂犬のやうに首を締めてやらなくちやいけなんだ！　あ

いつが陰險な悪事を働いてゐるのは、自分でもよく承知してゐる癖に！……本當になんといふ事だ！」

ルイスコフは、自分の理解してゐる事を分かつたらしい小柄な大學生を、憐れむやうな目つきでちらと見やつたまゝ、やはり押し黙つてゐた。

かなり長いあひだ二人は黙つて歩いた。ルイスコフは癖のない髪を勢よく後へ拂ひのけた、色つやのない頭を傲然と反らしてゐた。チージュは神經的に體をひく／＼させてゐた。彼は腹の中が煮えくり返るやうであつた。彼は數千の言葉を浴びせかけて、相手を粉碎してやりたかつたが、ルイスコフのやうなつまらない人間の前でむきになるのが、いさゝか恥づかしいやうな氣がした。けれども、やはりいら立たしさの方が勝ちを制した。

「一つ合點してください……ルイスコフ君……」あぶなく「莫迦」と言ひかけたのを抑へて、彼はかう口を切つた。「あんな悪性の世迷ひごとは、單に現在のやうな過渡期の産物に過ぎないですよ……社會一般を支配してゐる類廢的精神が、あゝいふものを生み出したんです。いまに新しい波が襲つて來たら、あんなナウーモフ的思想なんか、淀んだ沼の泥みたいになく、痕かたもなく洗ひ流されて了ひますよ！……」

君はまだ自己殲滅を宣傳するのが、叡智の頂上かなんぞのやうに思つてゐますが、いま二三年もたつたら、君自身も嫌惡の念を感じながら、あんな慕掘りどもから顔をそむけて了ふでせう！」

ルイスコフは信じかねるやうに薄笑ひして、ステッキを振り廻した。

「もちろん」と小柄な大學生はやつきとなつて言ひ續けた。「目下のところみんなつまらない、苦しいといふ感じを抱いてゐます……生の目的がないやうな氣がしてゐます……君は僕が苦しくないと思つてゐるんですか？ おゝ……それどころの騒ぎぢやない！……しかし、しやうがないぢやありませんか。苦痛と鬭争なしに、たゞで得られるものは何ひとつない。人生は犠牲を要求します。ことによつたら、我々はよりよき未來を見ることが出来ないかも知れない。さう、我々は滅亡しなければならぬ。」とチージュは輝かしい表情で、きつぱりと言つた。その顔には執拗な狂信者らしい歡喜の色が、絶望と鬭つてゐた。「しかし我々の屍を踏んで、ほかの人たちが進んで行くでせう！ もう新しい勇敢な聲が聞こえます。意氣銷沈の時代は過ぎて、社會は目ざめつゝある！ ナウーモフやクラウゼの輩は、明

け行く夜の影に過ぎない……われ／＼は臆病に生を避けたりなどしないで、鬨はなくちやなりません、働かなくちやなりません——すくなくとも、人類といふ言葉を空虚な音と感じない人々にとつては——

ルイスコフは注意ぶかく聴いてゐた。もうステッキを振り廻すのをやめた。

「臆病ものや厭人主義者は、勝手にこの世を去るがよい。しかし誇りの高い強者は、最後まで己れの部署に立ち通すでせう。未来はもう遠くない！……それは民衆のもので、勝利は疑ふ餘地がない！ たゞ未来のためにのみ、來たるべき明るい日の勝利のために、人類の黄金時代のためにのみ生きる、これこそ有意義な喜ばしい事です！」

チージュはもうこの瞬間、勝利を祝ふ無数の民衆や、風に翻る赤旗を目の前に見たに相違ない。彼は急に顔を燃え立たせ、兩眼をきら／＼輝かしながら、古ぼけた制帽をうしろへずらせて、往來いつばいに響くやうな聲で叫んだ。しかしあたりは灰色の塀や、町人じみた小家や、菜園や、がさ／＼した藁麻や、見事に伸びた鬼あざみの茂る空き地ばかりであつた。往來の眞ん中を一匹の豚が、一切に無關心な表情で、小さな尻尾を振りながら歩いてゐた。

はじめルイスコフの心に何かあるものが動いた。けれど「未来、民衆、人類などといふ漠然たる言葉は、たゞ憂愁の氣を吹きかけるばかりだつた。熱くなつて呷鳴る小柄な大學生さへ、いま／＼しく思はれて來た。

「一體それがこの男にとつてどうしたと言ふのだ？ 何をうれしがつてるんだらう？」とルイスコフは考へて、かう言ひ出した。

「しかし、そんな事は君にとつて同じことぢやありませんか、キリール・ドミートリッチ？……そんな事はいつ來るか分かりやしない！」

チージュはとつぜん足をとめた。

「ルイスコフ君、まさか君はあの豚ぢやないでせうな？」立ち止まつて歩道の柱で體を搔いてゐる豚を指さしながら、彼は腹立たしげにかう訊ねた。

ルイスコフはちよつと度膽を抜かれた。

「ねえ、豚はたゞ自分だけのために生きてるが、人間は全人類との連結を意識せずにはゐられない、つまり、そこが豚と思索人の相違ですよ。あんな厭人主義者の言ふ事を聞いちやいけません。彼らは自分が何をしてるのか、自分ながら分らないんです！」

小柄な大學生は、なぜか人間は人類を愛さなければならぬものと、固く信じきつてゐたので、厭人主義とか無關心とかいふ非難ほど、手痛い打撃はほかにないと思つてゐた。彼はまだ何か言ひ足さうとしたが、このとき思はず豚に突き當たつた。豚は柱で體をこする快感に夢中になつて、歩道をすつかり寒いでゐたのである。

豚はけたまゝしい悲鳴を上げながら、また往來の眞ん中へ逃げ出した。そして耳を立て、尾をくるく／＼廻しながら、自分の安靜を亂した小柄な大學生に、ちつと視線をそゝいだ。

「こん畜生！」とチージュはいま／＼しげに叫んだ。

ルイスコフは思はず微笑したが、すぐに眞面目な表情に返らうと努めた。チージュはこの微笑に氣がついて、突然、自分の言葉がむなしく空中に飛び散るのを感じた。そしてあゝ夢中になつたのが急に恥づかしくなつた。

「莫迦！」と彼は考へた。そして肩を響め乍ら言ひ出した。「いや、まあ、いゝです！……またいつか遊びに来てください……ゆつくり話させよう……いま僕は急ぐから……これで失敬します！」

二人は別れを告げた。小柄な大學生は、行き當たりばつ

たりの横町へ曲がつて、重苦しいいま／＼しさを心に抱きながら、たゞ一人しよんぼりと、果てしない垣根つたひに歩き出した。ルイスコフはステッキを振り廻し、眞つづくに前の方を見つめながら、のろ／＼と往來を先の方へ進んだ。

向かうから來る通行人は、もの珍しげに彼をじろ／＼見廻した。彼がクラウゼ自殺の現場に居合はせた事は、もう町中に知れ渡つてゐたので、それが彼を一種の際物的英雄にしたのである。

ルイスコフはその視線に氣づいて、それを自己一流に解釋した。で、いかにも誇らしげな、謎めいた顔つきをした。彼は自分の顔が浪漫的な美しい表情をしてゐて、姿せんたいに神秘的運命の影が宿つてゐるやうに思はれた。なぜさうなのか、自分でも分からなかつたが、とにかく本當に英雄氣取りなのであつた。で、我ともなしに、自分をクラウゼ少尉補の位置におきかへて、微動だもせぬ手にピストルを握りしめ、悲痛みと諷刺に満ちた最後の言葉を吐いてゐる、自分自身の姿を心に描いた。もつとも、彼は一ことも考へつく事が出来なかつたけれど、なぜかそれには氣がつかなかつた。



「その時こそみんなが見て、理解してくるらだう！」悲痛な快感を覚えながら、彼はかう考へた。

何を見、何を理解するのか、これもやはり正確なところは分からなかつたが、みんなが見て理解してくれるに相違ないと、彼は確信してゐた。大づかみに言へば、何人にも理解されなかつた彼の偉大な魂と、なみ／＼ならぬ悲劇的な運命を理解するのである。

自分の死んだあとで、みんながどんなに哀惜するだらう！ 單なる會計官吏であるがために、今まで自分の存在を認めなかつた若い娘たちが、どんなに興味を抱くことだらう！ 自分の最後の言葉が、どんなに町ぢうへ擴がつて行くことだらう！

さうだとも！……彼らは自分をつまらない會計官吏だと思つてゐるが、自分は一個の英雄なのだ！ 悲劇的性情の持ち主なのだ！……萬人を慄然として立ちすくませる一線を、恐れずもなく傲然と踏み越えるのだ。さうだ、自分はこのみじめな生活を——この莫迦げた道化芝居を無視して、死を選んだのだ……美しく誇らかな死を！

ルイスコフは誇りのために、ほとんど息がつまりさうになつた。

彼は「青ざめた顔」を高くそらして、全世界を蔑視しながら、往來を歩いて行つた。彼の頭は溢れるばかりの空想に燃えた。誰かしらなみ／＼ならぬ美しい娘が、彼の死んだ後で、偉大な苦痛と死のために彼を愛してくれる——さういふ情景さへ心に描いた。娘はかう言ふだらう。

「あの人は戀ひを知らないで、一生懸命戀ひに憧れてゐました……あなた方はあの人を理解しなかつたのです、理解することが出来なかつたのです。かうしてあの人には死にました！ わたしは墓の彼方であの人の花嫁になります！」  
ルイスコフの目の前には、秋の墓畔と、悲しげな女の姿が凜然と描き出された。女は全身を白衣につゝんで、なぜか髪を長くたらし、墓の上に秋の花を靜かに落としてゐる……

けれどそのとき彼は自分の創作を思ひ出した。薄い血の色が彼の黄ろい頬に、さつとにじんだ。ルイスコフは隣きして、臆病げにあたりを見廻した……いや、娘なんか一切いらぬ！ 一人で生きて来たのだから、一人で死んで行かう。いつそその方がいゝ、その方が美しい！……いま自分は棺の中に横たはつて、縁もゆかりもない冷たい人たちに圍まれてゐる。顔は青ざめて厳めしく、たまらないほど

美しい……まはりには將校たちが、うなだれながら立つてゐる……ルイスコフは自分が將校でないことを忘れて了つた。華送行進曲さへ聞こえるやうな氣がする。やはり今日と同じやうに、眞鍮の喇叭が陰鬱にもの／＼しく響き、告別の一齊射撃がとどろく……

ルイスコフは自己憐愍の情のために、鼻の中がくすぐつたくなつた。彼は家へ辿りついたのに氣がつかないほど、空想の世界に没しきつてゐた。まるで酒に酔つた人間のやうに、子供の時分から見慣れた貧しい離れを、しばらくはげんさうに見つめてゐた。家は剝げまだらの佗びしい顔つきをして、二つの小窓を目のやうにしよ／＼させてゐた。

と、不意に、自分がクラウゼ事件にかゝり合つたのを、會計局長が恐ろしく不満に思つてゐる事や、明日は運わるく事務上の大きな過失のことで、局長に釋明しなければならぬ事を、急に思ひ出した。ルイスコフはぞつとして、體を縮めた……もし本當に務めを迫られたら、一體どうなるだらう？

彼の心は絶望の底に沈んで了つた。だめだ、自分など英雄でもなんでもありやしない！……

ルイスコフは内庭を抜けて、家へは入らずに菜園へ出た。憂愁の俘になつた彼は、自分の佗びしい部屋や、臭い臺所や、年ぢう口ごとばかり言つて、取りこし苦勞してゐる母親を見たくなかつた。

この通りの庭や菜園は、みんな大きな沼に面してゐた。そして、なかば崩れかゝつた編み垣は、その中へ吸ひこまれさうになつてゐた。向かう岸には、佗びしい田舎町のバノラマが、霧の中にぼやけてゐる——曲がりくねつた横町、薬ぶき屋根、低い鐘樓、市場の赤く塗つた小店、もう黄色くまばらになつた貧弱な庭——白い空は大地の上に低く垂れて、しだれた枝や、高い穂を心配らしく振る枯れ葦の中で、秋風が低く唸つてゐた。何か絶えず呻くやうな響きが、沼せんたいに立ち置めてゐた。葦の向かうに沼の開けた水が白く見える。さゝ波がしつきりなしに走つてゐたが、いつも一つところから離れないやうに見えた。それを見てゐると、うそ寒くなつて來るのであつた。鋼鐵のやうな灰色をしたさゞ波の眞ん中へんで、何かの黒い點が輪を描いてゐる。あれは鴨だな、とルイスコフは器械的に想像した。「仲間からはくれたんだな……凍え死んでしまふだらうに！」

あゝ、まだくるく／＼廻りながら泳いでゐる！ いつそ一  
思ひに沈んで了へばいゝのに。あゝして生きてゐたら……  
やがて氷がやつて来て、水は一日々々と周りから押しせば  
められる……そのうちに鴨は氷の中でもがきながら、なん  
のためか知らないが、足で水を擴げようとものがく……けれ  
ど水は依然として黒く冷たい……そして夜、鴨が眠つて  
ゐる間に、氷はすつかりその體を縛つて了ふだらう……  
「莫迦な鳥だ！」

これがもし彼ルイスコフなら、それをべん／＼と待つて  
はゐないだらう！ チージュなんかには、好きな事を言は  
して置けばいゝ。あの男は太平樂も言つてゐられるだらう。  
大學生で、本もたくさん読み、どんな事でも知つてゐるか  
ら……しばらくこゝにゐたら、やがてどこかへ行つて了ふ  
だらう。ところが自分は……あいつだつて、ものの五年も  
會計局にこびりついてゐたら、人類のなんと大きな事は  
言へまい！……

ルイスコフは憎々しさのあまり、聲に出してまで笑つた。  
「人類……そんなものが一體どこにあるんだ、畜生……  
みんなやくざ者ばかりだ、それつきりぢやないか！ あん  
な風に口先だけなら、どんな事でも言へるが、實際はやく

ざ者よりほか、何ものもありやしない！ そりや百人に一  
人くらゐ、本當の人間が生まれるかも知れないが、人なみ  
に人類がどうのかうのつて、笑はせやがる……現にさう  
言ふご當人だつて、トレグーロフに横つ面をはられたとい  
ふ話しぢやないか……それでもやはり人類なのか？ そん  
なものが一體どこにある？……會計局長か？……商人か？  
……町人どもか？……無學な百姓か？……官吏か？……ち  
よつ！……一人々々別つこに見ればみんなやくざ者だが、  
それが一緒になると人類なのだ！ えゝ、みんなくたばつ  
ちまへ！……いま／＼しいがらくため！……行き當たりば  
つたりどこかの楊の木で、首でもく／＼つて了へばいゝん  
だ……それが貴様らの譚ふ人類だ！……」

この人類といふ言葉は、ルイスコフを氣が違ひさうにし  
た。これは本當になんの事だらう？ 自分をからかつてで  
もゐるんだらうか？ 彼はどうしても合點が行かなかつた  
……どちらを見ても豚のやうな面ばかり、そして新聞では  
お互同志に惡黨よばはりをしてゐる。もし誰か一人でも、  
運よくましなものが出來ると、まるで奇蹟かなんぞのやう  
に騒ぎ立てて、聖者あつかひにしてす……どこへ行つて  
も酷いやくざ者ばかりで、人間といふ言葉に對して恥づ

かしくらゐだ。ところが、このやくざ者を一つに合はせると、早速それに對して、頌歌を唱へはじめるとは、ないか！

「人類！」

ルイスコフは憂愁の虜になつた。また彼の目の前を、棺臺の白い羽がゆら／＼と動き、軍樂隊が響き、一斉射撃の轟きが聞こえはじめた。そして棺の中には堪らないほど美しい、高潔な誰かの顔が横たはつてゐる！……

けれどその瞬間、彼は自分が將校でない事を、ふと思ひ出した。樂隊も一斉射撃も、美しい顔も何もなく、彼の全生涯と同じやうに、みじめで不幸な、ぜん／＼別なものか彼を待つてゐるのだ。

死の中にさへ美や莊嚴が與へられないとは！

ルイスコフはなんとも言へない厭な氣持ちがした。いきなりこの沼に頭を突つこんで、そのまゝ身動きもせずにおつとしてゐたい……

彼は不意に踵を轉じて、忿怒と憂愁に顔を眞つ青にしたがら、家の方へ歩みを運んだ。

事によつたら、彼はもうこの瞬間に、自分の決心を知つてゐたのかも知れない。この日から翌日にかけて、彼の身

の上に生じた一切の事は、たゞこの最後の決心から生じた結果で、絶望と憎惡の最後の痙攣に過ぎなかつたかも知れない。

彼が部屋へ入つたとき、葱と油の焼けすぎる、むつとするやうな臺所の臭氣が、いきなり彼の體を包んだ。汚れた肌着類を熱湯に浸した盥からは、脂つこい甘たるい湯氣が、もう／＼と天井へ向けて立ち昇つてゐた。床の上には泥足の跡がついて、踏みへらした床板の凹みには、石鹼水がしこたま溜まつてゐた。窓は汗をかいて、まるで冬の日のやうに微くさくて息苦しく、おまけに薄暗かつた。母は兩方の袖をたくし上げて、黄色い骨ばつた手で食卓の用意をしてゐた。彼女は無意味な魚のやうな目で、毒々しくわが子を迎へた。

「え、局長さんのところへ行つて来たかえ？」

ルイスコフは何かに喉を締めつけられるやうな氣がした。

「行かなかつた。それに決して行きやしない！ あんな奴、くそ喰らへだ！」と彼は齒をむいて、そのまゝ傍を通りぬけようとした。

母は皿を押しつけて、氣うとい目をちつと見据ゑた。

「お前どうしたんだい？……氣でもちがつたのかね？……いまにお役所を追ひ出されるんだから……莫迦！」

ルイスコフは憎悪の目をもつて彼女を見つめた。と、さながら憎悪が彼の目を明けてくれたやうに思はれた。母親がどんなに汚らしく、意地わるな、うるさい莫迦女かといふ事が、忽然まざくと彼の目に映じた。黄色い落ちこんだ頬、脂じみた裾、魚のやうに丸い貪慾な鈍い目。

「見る……腐れかますにそつくりだ！」といふ考へが彼の頭に閃いた。

「あゝ、行くよ！　うるさくしないでください！……それでも、いゝ加減くさくしてらんだ！」病的に口を歪めて、胸の中に煮えくり返る、氣ちがひじみたいら立たしさを、やつとの事で抑へながら、彼はかう言つた。

「くさくするつて？……へえ、これは聞きものだ！……一體わたしはくさくしないでも思つてるのかい？」老婆はいきなり躍り上がった。年よりらしい無意味な忿怒をさらけ出して、息子にむしやぶりつく口實が出来たのを、喜んででもゐるやうな具合ひだつた。

ルイスコフは片手を振つて、食卓に向かつた。二分間ばかり、二人は無言のまゝ喰べてゐた。やがて老

婆は匙を置いて、思ひがけなくすゝり上げ始めた。

「神様がどうしてもお迎へに来てくだらない！……お前はわたしが樂をしてもでもお思ひなのかい？……乳を飲ませたり、ものを喰べさせたりして……」

「ふむ、また始まつた！」とルイスコフは憐ましげに、ずばりと言つた。

「何が始まつたんだつて？」と老婆は憎々しげに言葉じりを抑へた。「何が始まつたつて？……わたしはお前の母親なのか、さうでないのか！」

ルイスコフは母に注意を向けぬやうに努めながら、皿の上に低くかゞみ込んで喰べつゞけた。けれど彼女はやめようとしなかつた。

彼女の目は毒々しく輝き、その聲には何やら軋むやうなものがあつた。本當に、錘そのまゝだ。

「お前の事を心配すればこそだよ！　だつてお役所を追ひ出されたら、頭の下が干あがつて、垣根の下で野たれ死にしなければならぬぢやないか！……さんくやきもきして……やつと身の收まりをつけてやつたから……これで一人前の男になれると思つてゐたのに、まあ、どうだらう、空威張りなんか始めやがつて！……お前なんかそんな事の

出来る柄だと思ふのかい？……莫迦！……わが身が可哀さうでないにしても、せめて年よつた母親くらゐ氣の毒だと思ふがいゝ……だつてわたしはお前を生んだんぢやないか、莫迦めが！

ルイスコフは疾うから母の愚痴に馴れてゐたので、それが人生の必然的條件のやうな氣がしてゐた。人生がこの愚痴と同じやうに、じめ／＼した無意味のものに感じられた。母親は年ぢうくど／＼と愚痴を並らべ立て、一日々々の生存に對して、戰々競々としてゐた。それはまるで、誰かの特別なお情で生きてゐるので、いつなん時この誰かが彼らの事を思ひ出して、草履蟲のやうに足で踏みつぶすか知れない、といつたやうな幽極だつた。毎日、息子が務めから歸つて來ると、彼女は局長の機嫌がよかつたか、何かお上の首尾を損じるやうな事はしなかつたか、務め向きの事はきちんとしおほせたかと、おづ／＼尋ねるのであつた……もし何か變はつた事があると、恐怖のあまり氣が遠くならないばかりで、息子にありたけの非難を浴びせかけ、涙ながらにくどき立てた。そして頭に布を引つかぶると、簿記係りの主任のところへ哀願に駆けつけた。局長自身のところへは推參を憚つた。それは彼女にとつて、もう及びもつか

ない雲上人なのであつた。彼女はすべての人を恐れ、すべての人に身を低うしてゐたので、息子をいぢめたり、意地の悪い愚かな蔭口を町ぢうへ觸れ廻したりしながら、やうやく胸の鬱をやるのであつた。

ルイスコフが物心ついてこの方、母親の愚痴はやむ時がなかつた。彼女は自分の夫までこれで苦しめ抜いた。で、嚇しつけられた不幸な見る影もない小男は、言葉ひとつ返すでもなくちつと辛抱して、小さくなつて縮こまつてゐた。たゞとき／＼喉を鳴らすくらゐが關の山だつた。

ルイスコフは父親を覺えてゐる。罪のない微笑、慥えたやうにぼち／＼する小さな目、剃刀を當てない頬、紫色になつた鼻、すぐ小腰をかゝめて頭をかしげる癖……醜い意地わるな老婆と連れそつた、長い單調な一生、隠れ遊びの酒、垣根の下に酔ひ倒れる癖、肘のぬけた版、のべつ出て來る持病の頬腫れ、自分の尻でへこませた椅子、蠅、會計局長や簿記係りの主任や、檢閲官ばかりでなく、すこしでも自信のある態度で聲高に話す人の前に出ると、必ず戰々競々とせずにはゐられない性質……恐怖と、缺乏と、ヲトカと、痰唾を吐き散らされた會計局よりほかには、全く何ひとつない……戀ひも、信仰も思想も、絶望さへもない

——たゞ何かどんよりしたものがあつたか……

「恐怖がルイスコフを攫んだ。實際これは彼自身の運命ではないか！ これ以外には何もない、あり得ないのだ。」

「せめて母親でも可哀さうだと思つたらいいに！ だつてわたしはお前を生んで、育てて、大きくしたんぢやないか……」老婆は單調な鈍い調子で、くどくどと果てしのない繰り言を續けてゐる。

不意にルイスコフは匙を投げて飛び上がった。

「一たい誰がそんな事を頼んだんだ？」と彼は野獸のやうな聲で呶鳴りだした。「ふむ、どんなお慈悲を垂れた氣であるんだらう！ 生んだつて……人なみのことを言つたらあ……誰も頼みもしない命を授けた奴なんか……みんな呪はれるがいよ！ 親といふ親は……」

彼は拳を固めて、目を剃き出し、聲を震らしながらかう喚くと、いきなりまつしぐらに部屋を飛び出した。

老婆は恐怖のあまり顔を紫色にして、口をほかんと明けたまふ、その後をちつと見送つてゐた。彼女は長い間われに返ることが出来なかつた。そして、何事が起こつたのか合點が行かないやうに、身動きもせずに坐つてゐた。やがて彼女の黄色い馬面がひん曲がつて、大粒の涙が皺をつた

つて流れはじめた。

「まあ、現在の母親に向かつて……生みの母親を呪ふなんて！ あゝ、恐ろしい！」彼女はかう叫ぶなり、兩手で床を叩いた。

「サアーシエンカー！」

ルイスコフは力まかせに部屋の戸を後手にしめて、長いあひだ隅から隅へと走り廻つてゐた。彼の腹の中はすつかり動揺して了つた。その長い顔は眞つ白になり、目は救ひのない憂愁の表情を浮かべてゐた。彼ははあ／＼息を切らせながら、のべつ誰かを拳で嚇す眞似をしてゐた……それは母親ではない、本當に誰にも必要のないぼろ布を、犬にでもくれるやうに投げ與へて、これが人生である、すべからく感謝せよと言つた、ある何ものかに對する威嚇なのである。

「だが……どうして……どうして！」部屋の中を駆け廻りながら、ルイスコフは嚇かすやうに呟いた。

青い表紙の手帖が、ふと彼の目に映つた。ちよつと一分間、ルイスコフは何か合點が行かないやうに、鈍い目をちつと据ゑて眺めながら、器械的に讀み返してゐた。

「愛、アレクサンドル・ルイスコフ作……愛、アレクサン

ドル……」

と、不意に躍りかゝつて引つ掴むと、ばり／＼と小さく引き裂いて、一塊りに握りつぶし、それを壁の面に叩きつけた。白や青の紙きれが、隣れつぼくさら／＼と鳴つて、部屋ぢうに飛び散つた。ルイスコフは我に返つて、兩手で頭を引つ掴み、窓ぎはの椅子にどうと腰をおろした。そして、曇つた硝子ごしにどんより滲んでゐる沼へ、何ものをも映さぬ絶望の目をそゝいだ。

かうして彼は長いあひだ坐り通した。霧が彼の頭を包んで、心臓は救ひなき静寂の中に凝結した。なぜかしじゆう同じはやり歌の一節が、無意味にしつこく頭にこびりついて離れない。

隣れなる少女はこゝに安らへり

肺をば病みてみまかりぬ……

「いけない、こんなもの糞いま／＼しい！……ちよつ、糞いま／＼しい！……」とルイスコフは器械的に繰り返したが、またいつの間にか心にもなく、同じはやり歌を——もうこれで百遍くらゐ——繰り返してゐるのであつた。

青き瞳の光りは消えぬ

經帷子の白きが下に……

どんよりした窓の彼方に、荒れた菜園が灰色に擴がつて、キヤベツを切り取つた後の腐つた莖が立ちならび、その先には冷たさうな沼が白く見えた。そこでは愚かしい一羽の鴨が寒さうに足掻きながら、あちこち泳ぎ廻つてゐる。

ルイスコフの胸は静かになつた。それは救ひのない静けさである。もの狂ほしい衝動は過ぎて、光明の影すらない、ぐつたり疲れきつた憂愁のみが残つた。

夕闇は次第に濃くなつて來た。

ルイスコフは誰かの隣れつぼい、静かな呻き聲を聞きつけた……まるで蜘蛛の巣にかゝつた蠅が、どこか近くで唸つてゐるやう。彼は頭を上げて耳を澄ました。

「あれはお母が泣いてゐるのだ！……」

すると彼は、誰かそばへ寄つて、強く喉を締めつけるやうな氣がした。

「うーうー」目をとち頭を抑へながら、ルイスコフは惱ましきあまり、身をもがき始めた。「一體なんの報いだらう？……あゝ……」

けれど、その誰かは耳を貸さうともしないで、依然として強くちり／＼と喉を締める。そして、手をゆるめようとせず、呻くやうな細い聲で果てしのない歌を、すぐ耳



もど歌つてるやうな氣がした。

隣れなる少女はこゝに安らへり

肺をば病みてみまかりぬ……

## 二〇

日はやうやく暮れかゝつて、何か青みがかつた濁り水のやうなものが、光りに變はつて畫室の窓から俯ひこんだ。

もうだいたい前から、調色板の繪の具の色が見えなくなつてゐた。けれどミハイロフはそれに氣がつかなかつた。たゞ偶然ふり返つて、四隅に立ちこめてゐる息づまるやうな薄闇を見て、はじめて繪筆を措いたのである。

もう幾時間畫布の前で過ごしたのか、ミハイロフはそれさへも知らなかつたが、調色板を置くや否や、背中がめきめき痛んで、足が疲労のために慄へるのを感じた。

彼は反對側の隅へ行つて、やはり熱病やみのやうに光る目で、ちつと畫布を見つめてゐた。彼は前にも繪から離れて見たけれど、その時は製作中だったので、目が妙に色と溶け合つて、背景が充分に遠く感じられないとか、何かの形がはつきり浮き出してゐないとか、前景を強くする必要があるとか、さういふ風の事を感じるだけで、繪そのもの

を見てゐなかつた。今やつと今日の仕事が片づいた時、忽然と内面的に仕事から離れて、全體としての畫面を認めたやうな具合ひだつた……

周圍はまつたく暗かつた。壁にかけたスケッチは色彩を失ひ、その線は一緒に溶け合つて、妙に曲がりくねつてゐた。風景の代りに、畫面の斑點が繋がり合つて、歪んだ體に見えたり、恐ろしく醜い顔に見えたりする。たゞ描きかけた繪の大きな畫布だけは、まだ弱々しい窓明りを受けて、畫面が薄氣味わるく闇の中から浮き出してゐる。

ミハイロフはそこに立つたまま、まだ仕事を續けてゐるやうな感じのする指を、放心したやうに細かく動かしながら、貪るやうな緊張感をもつて、ちつと見つめるのであつた。

それはいつものごとく、どこか不可思議な心の奥底から、まつたく思ひがけなく浮かんで來たのである。初め彼は、豪奢な料理屋の別室の内部を寫した、小さなスケッチを拵へた。まだ片づけられない環入りの水盤、果物、皿、盃――、紗のカーテンを垂らした窓からは、曉まへの弱々しい光りがかすかに滑り込んでゐる。そして肘椅子の上には、力なく両手を垂らした、自殺者の屍が横たはつてゐる。彼

は幾度か器械的に畫稿を描き變へて見た。自殺者の姿勢を變へたり、椅子や卓を動かしたりして、恐ろしい謎のやうな死の靜寂と不動に滿ちた、この奇怪な部屋の主人顔に振る舞つてゐた……と、不意に何かあるものが彼の魂を照らして、彼とこの描かれた死人の間に、何か薄皮のやうなものが張られた。まだ漠然とした一種の映像が、熱した腦の中に燃え上がつて、彼の心身にかの惱ましい内部の戰慄が始まつた。彼はこの戰慄をよく知りぬいて、愛しもすれば恐れもした。なぜと言つて、それはほとんど耐へがたいほどの快感と、永久に滿たされざる耐へがたき憂愁を齎すからであつた。

打ち勝つことの出来ない衝動にかられて、ミハイロフは畫稿を投げ出すと、熱病やみのやうな性急さをもつて、大きな畫布と枠を引き出した。そして釘や、金槌や、釘ぬきなどを捜しはじめた。これらはすべて不可思議な興奮と、いら立たしい病的な焦燥の中に行はれたのである。釘がどこかへ見えなくなつたり、畫布がうまく張れなかつたり、枠が歪んだりして、いきなり仕事にかゝれないのが、堪らないほど惱ましかつた。やがてやうやく畫布が張れたかと思ふと、今度は調色板の繪の具が足りなかつた。ミハイロ

フは手あたり次第にさまざまの繪の具を、うづ高く盛りあがるほど押し出した。それと同時に繪筆をかき集めたり、空になつた壺を毒々しく抛り出したりした。絶えず何かの間に合はないやうな氣もちだつた。一分毎に、ある貴重なものが、遠ざかつて行くやうな氣がして、彼の神經はこの病的な感覺を、ほとんど持ちこたへる事が出来ないほどだつた。

つひに一切の準備がととのつて、平らに張られた弾力のある大きな畫布は、ほとんど畫室の長さいつばいに立てられた。ミハイロフは調色板と繪筆の大束を握つて、二三分間はぢつと畫布の前に立ちつくした。それは丁度、誰にも見えぬ何ものかを眺めてゐるやうな具合ひであつた。と、不意に思ひきつて、一刷毛さつと豊かな筋を引いた……坐りの悪い臺が、大きな畫布の動搖にはづれて、枠はうしろの方へのめつた……また調色板を置いて、すつかり始めからやり直さなければならなかつた。ミハイロフはいま／＼しさといら立たしさに、ほとんど泣き出さなればかりであつた。

やがて忽然として、彼は時に關する一切の觀念を失ひ、恐ろしい魂の緊張に凝結したやうであつた。

彼は無言に齒を食ひしりながら、一生懸命に色をつけて行つた。時には物體の輪廓を浮き出させる太いしなやかなタッチ、時にはみづ／＼しい粘りつくやうな斑點、時にはこすりつけるやうに塗りつぶされた影——彼は畫布の向かうの端へ行つたり、またこちらへ歸つたりしながら、ぐい／＼繪の具を叩きつけて、何ひとつ修正したり、細工を加へたりしなかつた……畫布はゆら／＼と揺れ慄へて、がらんとした家には靜寂が立ちこめてゐた……ほとんど混沌に近い、しかも同時に美しく目ざましいものが、繪の具の斑點の中から滲み出しはじめた……ミハイロフは固く齒を食ひしり、重々しく烈しい息づかひをしながら、製作を續けて行つた。

彼はもう無数の體驗や氣分や感情を持つてゐて、笑つたり飲んだり話したりする事の出来る、いつものミハイロフではなかつた。彼の魂の力はこと／＼と、緊張のために燃えるやうな目に集中された。奇妙に細めてゐるかと思ふと、急に大きく開くその目の中には、何もかが燃え動いてゐた。彼はもう繪の主題など覺えてゐなかつた。クラウゼの事も、自分の體驗も、狂せる技師の言葉に呼び醒まされた漠然とした偉大な幻像も、恐ろしいリーザの目も、懐かし

いジェーネチカの顔も、自分の知つたすべての女の青白い幻も、彼はこと／＼と忘れて了つた。たゞこれらすべてのものを繋ぐ漠然とした連鎖が残つて、もの凄く無意味な塊りにこんぐらかつた。そして靜かに溶けほぐれて行きながら、彼の畫面の上で、不吉な幻じみた形象になつて行つた……

彼の美しい顔は眞つ青になつて、なんとなく肉が落ちたやうに思はれ、目はぎら／＼と光つてゐた。彼は興奮のために乾く唇を、絶えず痙攣的に舐め廻してゐた。

正午時分に、彼は釘づけにされたやうな視線をそゝいだまゝ、繪のそばから離れた。そして髪をくしやく／＼に掻き亂し、頸には青繪の具のしみをつけたまゝ、手から調色板を離さないで、立つたまゝ何か喰べた。けれど、それはすべて器械的な動作だつたので、自分でもこの中絶に氣がつかなかつたほどである。やがて最後まで喰べ終らないうちに、彼は食ひさしを卓の上へ抛り出して、また繪筆を引つ擱んだ。そしてまづ一つ斑點を置き、長い線を引き、コップの縁に青い光線の反映を軽くつけた。それからもう日が暮れるまで、すこしも手を休めなかつたのである。

けれど最後に繪のそばを離れて、深い溜め息とともに、

思ひきつて調色板を置くと、急に我に返つた。

荒々しいタッチ、思ひがけないほど大膽な無技巧の斑點、まだ白く透すいて見える畫布キャンバスの地色せいしよく——完成した作品には求め得られない力と、清新な美をなしてゐる、デッサン獨特の無造作な混沌みの中に、彼の内部にあるものが、感じてゐるまゝに表現された。

霧ふかい都會の朝の青白い光りは、流行の料理店レストランの贅澤な別室に掛けられた、透明な紗のカーテンを通して、おづおづと忍びこんでゐる。電燈は消されて、青ざめた不愜ふけんな曉の光りの中に、亂暴な騒がしい酒宴の名ごりが、妙に幻めかしく浮き出してゐる。椅子は位置が亂れて、卓かけは酒に浸され、色さまざまな壺つぼや、盃さかずきや、コップなどが一面に並らんでゐる。葉巻きの煙りが冷え塊かたまりつたやうに漂ひ、青白い銀盤には、濡れたナブキンに包んだ壺つぼの口が覗いてゐる。一本の壺が卓の端はしへころがつて、血のやうに赤い酒が卓かけを傳つて流れ落ち、床の上に大きな水滴まりを拵へてゐる。曉の光りはコップの角々に碎けて、青白い斑點をなして卓かけに落ち、卓に近い肘椅子の上で、力なげにもの凄く不動を守つてゐる、青ざめた死人の顔を滑る……

自殺者は放蕩と不眠の夜に疲憊ひんぱいしつくした青年である。

口もとに老人めいた筋のあるその細い死に顔は、げつそりと肉が落ちて了つて、その上に印せられた青い影は、女と酒と、歌留多かろうたに浪費された、無意味な、放埒な一生を描き出してゐるやうであつた……血は靜かに青ざめた頬を流れて、白いカラーや、洒落た黒い燕尾服の胸を汚してゐる……ピストルは力なく垂れた、細い弱々しげな手から落ちて、床の上に横たはつてゐる……しかもこの靜かな恐ろしい部屋は、女に満たされてゐるのだ……この青い、血の氣のない、都會の朝の生んだ幻のやうに、彼らはほんやりすき透すきつてゐる……そして死骸の周りに集まりながら、兩手をさし伸べて、泣いたり、愛撫を送つたり、威嚇したりしてゐる……彼らの引ん曲がつたやうな顔は、あるひはもの狂はしい情慾に燃え、あるひは冷酷の氣に満ち、あるひは哀願を現し、あるひは憎惡の色を浮かべながら、ことごとく死骸の方へ向けられてゐる……こゝには贅澤な身なりをした、高價な花のやうな、青白く美しい上流の婦人もあれば、目の下に青い輪のある、血を塗つたやうに唇の赤い、脂粉に色どられた、ものごしの俗惡な、恐ろしく濃艶な女優もあつた。短い紗のスカートをはいて、ばら色の肉襦袢ひきこしに足をびつたり包んだバレエの踊り子が、あらはな細い兩手を死

骸の方へさし伸べてゐるかと思へば、ジブシイ女のくつきりした淺黒い顔が、焼きつくやうな憎しみの目で彼を威嚇してゐる。片隅では白いエプロンを掛けた若い小娘が泣いてゐる。灰色の貧しい着物をきた、悲しげな顔つきの女が、いかめしく肩をよせながら、ぢつと立つてゐるかと思へば、凄いほど美しい、傲慢な、半裸體の娼婦は、あらはな肩に青い曉の光りを受けながら、飲みさしの盃を男にさし伸べてゐる……彼らは亡びたる生活の思ひ出と、病的な都會の朝の薄青い霧から織り出された、青白い幻のやうに、泣いたり、哀願したり、威嚇したり、呪つたりしてゐる……

もし誰かがミハイロフに向かつて、この繪は何を現してゐるのかと聞いたら、彼は恐らく説明が出来なかつたらう。それは彼のすさみ切つた魂なのであつた、いたづらに浪費されて、運命的な恐ろしい終焉に近づきつゝある、彼の生活そのものであつた。彼の憂愁、ある輝かしい幸福を目ざす熱情的な努力、失望、クラウゼの死、リーザ、ネルリ、ジェーネチカ、氣ちがひじみたナウーモフの言葉、忘れられた過去の思ひ出——これらすべてのものが、憂愁と最後の創作慾の烈しい衝動によつて、この繪の中に溶け合つてゐるのであつた。

それは言葉で現すことが出来なかつたが、ミハイロフの魂を壓迫してやまなかつた。それは荒みきつた心の底から吐き出された、恐るべき眞理であつた。

たそがれは次第に濃くなつて行つた。カンアスの上なる幻は次第々々に幽霊じみて、恐ろしくなつて行つた。自殺者の青ざめた顔は、永遠の闇に消え去らうとするものものやうに、いよ／＼青白く溶けて行つた。

ミハイロフは、一切が漠とした謎のやうな霧に閉ざされるまで、身動きもせずに佇みながら眺めてゐた。やがて溜め息を一つついて、繪のそばを離れ、兩眼をどちて長椅子に腰をおろした。

終日彼を繪の前に立たせた恐ろしい緊張も、たちまちどこかへ行つて了つた。柔かい倦怠が彼の全身を包んだ。彼は長椅子のクッションに背をもたせ、力なく兩手を垂らしたまゝ、身動きもせずに坐つてゐた。去り行く日の最後の反映が、彼の顔に青白く印せられて、その顔は美しい憔悴してゐる繪の中の顔に、髣髴としてゐるやうに思はれた。

ミハイロフはもう自分の繪を見てもゐなかつたし、そのことを考へてもゐないやうに見えたけれど、彼がカンアスの上に創造した人物は、青ざめた列をなして記憶に甦る、

その他の人物と溶け合つてゐた。あるひはつい昨日のやうに鮮かな、あるひは半ば忘れられた遠い過去の思ひ出のやうに幻めいた、とり／＼見覚えのある人々の顔が、彼の目の前を通り過ぎながら、あるものは悲しげな、あるものは腹立たしげな、あるものは愛と憎みに満ちた目つきで、彼の魂を覗いたのち、幻のやうに霧の中へ溶け込みながら、静かに遠ざかつて行つた。なんとなくもの悲しい、なんとなく名ごり惜しい。それは疲れきつた悲しみであり、力ない絶望の哀惜である。

まる一日誰にも會はず、生きた人聲を聞かなかつたのを、ミハイロフは急に思ひ出した。誰ひとり彼のことを考へたものもないと見えて、誰も訪ねて來なかつた。彼が何を考へついで、どんな繪を描かうと、そんな事は、誰にも一切風馬牛なのである。

彼の繪がほかの數百點の繪とともに、展覽會場に並べられた時、それを見にやつて來る人たちが、どこか遠いところにあるのだ。彼らはこの繪を見て、感心したり嘲罵したりするだらう。事によつたら、この繪を見ながら、もの思ひに沈む人も大勢あるかも知れない。けれどいま彼らは、畫家ミハイロフの事など考へもしないで、無限に遠くかけ

離れた、自分自身の生活にかまけてゐる。その生活は彼などの割り込む餘地のないものである。彼は一人ぼつちで暮らして、魂が苦惱と疑惑の中にはぐくみ育てたものを、彼らに捧げなければならぬのだ。すると、彼らはそれを土足で踏みじつたり、あるひは臺座の上へ擔ぎ上げたりするのだ。

そこには何か莫迦々々しいものがあつて、一種不可解の感情を呼び醒ました。その感情はさらに一切のもの——世間の人々、自分の繪、自分自身、自分の生活——などに對する漠然たる抗議と、嫌惡の念を生むのであつた。

ミハイロフもすぐにはこの感情を理解することが出來なかつた。なぜかうもの悲しく、惱ましく、厭はしいのか、まるで合點が行かなかつた。

すると不意に、彼はかういふ事を思ひ出した——非常に深く自己に沈潜して、そのために苦惱してゐるらしい、ある青年作家が、彼にかう言つた事がある。

「きのふ、僕は窓に近よつて、硝子ごしに町を眺めはじめた。僕の住まひは四階にあつて、なか／＼高い……斷つて置かなければならないが、僕はその前に、長いあひだ創作に没頭してゐた……そこで僕が窓のそこを見ると、あたり

が非常に白く見えるのだ、不思議なほど白っぽい……ねえ、よく明るい空が低く垂れて、白い雲が一面に擴がり、太陽が見えないで、乾いた風が吹いてゐる時……つまり秋によくあるやうな、あゝした白っぽい日なのだ。風のために往來は祭日の前かなんぞのやうに、綺麗に吹き清められてゐる。けれど人通りがすくなくがらんとして、なぜか知らぬの悲しい氣がする。たとへて言へば、すべてのものがこの祭日の用意をして、一生懸命に、いそぐと、喜んで準備をしたやうな鹽梅しほばいなのだ。ところが、一切の準備がととのつて、何もかも綺麗に取り片づけられ、もう何もする事がなくなつて見ると、急に空虚な倦怠を感じはじめ、もう祭日といふものにすこしも興味がない……まあ、こんな風に僕はそれを見ながら、祭日の事だの、何もかも取り片づけられてがらんとしてゐる事だの、家も往來も空も一面に白っぽい事だの、そんなことを考へてゐた……すると、ぜんぜん無意識ではあるけれど、それと同時に明瞭な思考力を働かせながら、これはみんな役に立つ、忘れないやうにしてどこかへ「挟ま」なくちやならない、主人公が往來を眺めながら、あたりががらんとしてゐるのを感じた云々、といふ風な場面を描くために、これらの印象を心に藏ひこ

んでゐる自分を省みた、と言ふより直感したんだ……直感すると同時に、自分の感じた事をすぐに意識した。すると即座に、チェーホフのトリゴリン(中曲の人物)が、不快な感觸とともに思ひ出された。ピアノのやうな恰好をした雲を見ると、「ピアノのやうな雲が浮かんでゐた」と、短篇のどこかに使つてやらうと考へる——こんな事を言ふあの一節さ——これを思ひ出すと同時に、嫌惡の念を感じながら、自分で自分を説き伏せようとした——そんな事は決してない、トリゴリンはたゞ假空の人物で、本當の作者はまるでそんな事を考へてゐない。けれどすぐその瞬間に、これはまつたくその通りだと肯定する、自分自身に氣がついた。白い光りも、白い往來も、人通りのすくない事も、四階の窓から硝子びつごしに見てゐる事も、祭日の譬喩ひよを考へた事も、「覺えて置いてどこかへ挟まう」と思つた事も、トリゴリンの事も、自分の不快な感じも、チェーホフがトリゴリンを拵こしらへ上げたといふ事も、こんな事を考へてゐる自分に氣がついた事も、これらの言葉そのものも、今ではまつたく誠實で、ほとんど無意識になつて來た、微細な感情や言葉の流れ全體も——すべて悉く記憶して、適當な場所へ挿入するに相違ない！すると不意に、堪らないほど厭はし

い氣持になつた！ 僕は長いあひだ、この感情を闡明する事が出来なかつたが、やがてつひに悟つた。さうだ、實際これはすべて紛れもない僕自身の感情だ、僕の偽らざる内心の體驗だ、僕の赤裸々な魂だ！ 感情も、苦痛も、疑惑も——それどころか、自分自身の誠實まで、まるで何かの寶石みたいに、拾ひ集めて隠しながら、それで自分の創作を光らせようとしてゐるのだ、自分はこんなに繊細な感情と、こんなに惱ましい體驗と、こんなに深刻な誠實みを持つてゐるといふ事を、世間に承認させて、喝采を博したいのだ！——これは實に忌はしい、やくざな、莫迦々々しい、滑稽な事だが、しかしなんと言つても、それが事實なのだ！ こけ嚇しの輕蔑的言辭で、みづから慰めるのは澤山だ！——それはどんなに偉い藝術家でも、誠實無比な思想家でも、神興ゆたかな詩人でも、誰でもみんなさうなのだ！——これがなかつたら、藝術といふものもなくなる譯だ！——なぜと言つて、體驗はすでに體驗され、その體驗されたといふ事によつて、充實せられた譯だ。だから、それを具象化する必要はすこしもない。どんなに偉大な思想でも、もしそれが本當に自分だけのためなら、具象化されようがされまいが、それはもう大した重要な問題ではない。もし僕が自分

の思想を體驗したとしたら、他人が一人もそれを知らなくたつて、僕にとつてその思想は存在してゐるからだ！——自我の魂を赤裸にして街頭へ持ち出し、みんなに知られよう、評價されよう、理解されよう、などといふ事に氣をもむ我は、すべて悉く賣笑婦でなければ、伊達つきか職人なのだ！——いや、賣笑婦と言つた方がより正確だよ。なぜと言つて、われ／＼は自分の感情の美によつて、己れの生活を辯護する權利を買ふために、さういふ事をしてゐるんだからね！——

ミハイロフはそのとき興味をもつて、彼の言葉を聞いたけれど、よくは理解する事が出来なかつた。それに實際のところ、その表現がきはめて漠然として、首尾一貫してゐなかつた。彼はたゞ腹の中に意地わるい冷笑を隠しながら、この小説家先生、今でも現に自分の言葉に聞き惚れながら、自分の苦しみをひけらかしてゐる、とかう考へたばかりであつた。作家自身もさう感じたと思へて、惱ましげに顔を赤らめながら、心からの苦痛を目に浮かべて、彼のそばを去つて了つた。

けれど、いま死んだやうな黄昏の靜寂と孤獨の中で、ミハイロフは不意にこの會話を思ひ起こした。そして鋭い病



的な嫌惡の念を感じた。彼は今すぐ飛び上がつて、ナイフを引つ擲み、自分の繪を上から下まで切り裂いて了ひたくなつた。この欲望はきはめて烈しいもので、ほとんど耐へがたいほどだつたが、しかしすぐにその下から、もしそれを實行したら、たちまち痛ましさをあまり泣き出して、この繪を葬り去つた自分自身を、永久に赦す事が出来ないだらう、と感じた……ミハイロフは本當に「葬り去る」と考へた。まるでそれが彼を離れて存在してゐる、生あるものやうな具合ひだつた。

彼は心の中が混沌として來た。誰か近しい人間に會ひたくなつた。優しい母性的な親しみを藏した人に會つて、何もかもすつかり話し盡くし、もし理解されなかつたらなどといふ心配なしに、魂を底の底まで打ち開いて、その親しさの中に胸を温め、自分を壓迫し惱ましてゐるものを、悉く沈めて了ひたい。

また彼の目の前に、黒い眉と黒い輝かしい目を持つた、鮮かなすが／＼しい顔が閃いた。けれどちらと閃いたかと思ふと、鋭い痛へを残して消えて了つた。突然すべてが思ひ起こされたからである——モスクワの宿屋の一室、もみくたになつた變床、眞裸な體、敵意をもつてゐるかと思は

れるほど殘忍な肉慾……完膚なきまで歪曲せられ、燃焼せられ、侮辱せられ、不具にせられた肉慾！

では、リーザは？……

彼はほとんどこの少女を追ひ出したではないか。けれど、それはなんでもない……それはまだ恢復する事が出来る！が、すぐそれと同時に、恢復する必要はないと感じた。「わたしの神様！」と言つた女の言葉を、ミハイロフは思ひ出したのである。

可哀さうな、滑稽な娘！一體あんな娘の愛で満足できるだらうか？ それに、自分の心がかもう空虚で無力なのに、何をもつてこの愛に報いようとするのか？

惱ましきはいよ／＼増して來た。誰かが彼の體から魂を抜き取つたやうに、完全な空虚が彼の心を領した。

粗暴な變態的愛撫でなしに、春のやうな優しく喜ばしいもの思ひに満ちた、何かぜん／＼別なものが、堪らないほど戀ひしくなつた……何ごとかを空想したい。期待の情に胸を躍らせた。祈禱を捧げるともつかず、甘い冒瀆を犯すともつかぬ氣持ちで、恐怖と、慄慄と、無限の感激をもつて女に觸れたい！

「ちよつ、莫迦な！」不意にぞんざいな調子で、ミハイロ

フはかう獨りごちた。

そんな事はもう決してあるまい、あり得ないのだ！ かうした春のやうな愛は、たゞ刹那のものに過ぎない。例へて言へば、日影うららかな朝ねむりから醒め、目を明けるが早いか、太陽、太陽……と叫ぶ一瞬間に似てゐる。すぐにも飛び起きて、笑ひながらどこかへ駈け出し、金色の光りと、緑の木々と、喜ばしい朝の空氣の海に沈んで、心ゆくばかり身を浸したい……けれどその後、生活を始めて見ると、埃埃つばい熱い日が惱ましいほど長く續いて、飽き飽きするほど下界を苦しめた太陽が、やつとの事で西に沈む、たゞそれだけの事だ！……もし愛が耐へがたいほどの歡喜の中に終りを告げて、晴れ渡つた青空に浮かぶ一片の雲のやうに、人が全世界と融合しながら、その輝きの中に溶けて行くものなら！ しかしそんな事はない。たゞ短い刹那——最初の愛情、最初の情熱があるばかりで、それから後は——反覆の習慣と、過去に對する憧憬に過ぎない。

ミハイロフは多くの女が言つた事を思ひ出した。

「わたし達は一緒に働きませうね。わたしあんたのお手傳ひするわ！」

彼はいつもなんだか恥づかしいやうな氣持になつた。

一たい生きたり感じたりするのを、手傳ふことが出来るものだらうか？ 煉瓦を運んだり、赤ん坊の守りをしたりする事なら、手傳ひも出来るだらうが、これは魂の奥底に行はれる、神祕なプロセスである、誰にも開いて見せる事の出来ない生命そのもので、いかに愛のこもつた手でも、そこへ侵入する事は出来ない！ もしそれがないとすれば、もし完全な一心同體の連結がないとしたら、つまりなんにもない譯譯である！ たゞ粗野な動物的快感があるばかりだ。それは人を夢中にする事は出来ても、生活を充實させる譯に行かない。なぜと言つて、快感には限界があつて、希望の力が制限されてるからである！ それは切れ目のない輪のやうなものであつた。一方には、未知のものへとさし招く力強い呼び聲に反して、強制的に融合しようとする恐怖があり、魂を吸ひこんで行く泥沼がある。そしていま一方には、個性を持たぬ瞬間の空虚があつて、その中で靈魂が小鏡に兩替へされるのだ。

生活を満たし得るやうな女性を發見できなかったのは、彼自身の罪なのだらうか？……無選擇にあさつたすべての女たちの間で、己れを消耗しつくしたのだらうか？ いや、こんな世まひ言は澤山だ！……どんな選擇が出来るといふ

のだらう。一人々々の人間は神祕だ。どんな莫迦や凡俗の生活でも、偉大な賢人や世界一の美女の生活と同じやうに、

解きつくす事の出来ない謎である、しかも無意味な謎ではないか！

弱々しいと同時に、思ひきつたやうなノックの音が響いた。ミハイロフは頭を上げた。そして突然、ある本能的な不安に心臓を鼓動させながら叫んだ。

「お入んなさい！」

戸は靜かに開いて、また閉まつた。すつかり暗くなつた部屋の中へ、誰かのしなやかな黒い影が滑りこんだ。滑りこんで、さながら幻のやうに、闇の中に立ちどまつた。ミハイロフは飛び上がった。

「誰です？」と彼は稽えて問ひかけた。

不意にきつと顰めた細い眉と、愁はしげなともつかないれば、もの凄いともつかぬ、黒い大きな目の光りに氣がついた。

「ネルリー！ほとんど恐怖を帯びた聲で、彼はかう叫んだ。

「さうです。」とネルリーはいかつい調子で答へた。そして戸のそばから身を放すと、部屋のまん中へ進み出た。

## 二一

ミハイロフは心の底から震撼を感じて、靜かに後ずさりした。

「お前なのか？」

ネルリーは黙つてゐた。

ミハイロフは何か妙な手つきをした。なんと言つていふか分からなかつたらしい。

ネルリーは長いあひだ彼をぢつと見つめてゐた。その深い目の上に並らんだ二匹の黒い毒々しい蛭は、ひく／＼と怪しく動いた。と、不意に彼女は恐ろしくぶつきら棒な、意地の悪い調子で口をきつた。

「わたしがあなたの所へ来たのは決して……なんのためぢやありません……まあ明りをおつけなさい！ なんだつてあなたは暗闇の中に坐つてゐらつしやいますの？」

彼女は「あなた」と言つたり、「あなた」と言つたりした。けれど二人ともそんな事には氣もつかかなかつた。

ミハイロフはラムプをつけに飛んで行つた。けれども不意に、心臓が喜ばしげな不安に鼓動してゐるのを感じた。まるで長い別離ののちに、誰よりも一ばん親しい人が、思

ひがけなく入つて来たので、嬉しさのあまりに、何を言つたらいいか、何をしたらいいか、分からないやうな具合ひだつた。

彼がラムプをともさうとして、そは／＼してゐる間に、ネルリはきつと眉を顰めて、晝室のまん中に突つ立つたまま、何もかも別れた時のまゝかどうか、確かめようとする様子で、あたりを見廻してゐた。

やつとの事でミハイロフはラムプをともした。

ラムプはだん／＼大きく燃え上がりながら、晝室ぜんたいを明かに照らし出した。壁の上には、金縁の額や、繪の具や、裝飾用の布類が鮮かに輝きはじめた。そして細い眉を顰めて、怪しい目つきをした、瘦せぎすの毒々しい青ざめた顔が、あかりの中にくつきりと浮き出した。

「これは一體どういふ譯だね？……まあ、外套でもぬいだらいゝぢやないか……帽子でも取つてさ……僕は實に嬉しいよー」とミハイロフは呟いた。彼は自分ながらどうしたのか分からなかつたが、何か知ら明るい清らかなものが、不意に魂を照らしたやうな氣がした。

彼はほとんど「可愛いネルリ」と言はないばかりで、その細いしつかりした手を取つた。

ネルリはそつと氣づかれないやうに、取られた手を放して、ぢつと相手の顔を見まもつたが、その目つきはいよいよ不思議な光りを帯びて来た。きつと顰めた眉の間を聲が走つた。彼女はかういふ事を期待しなかつたので、突然ある毒々しい決心に、動揺を感じたやうな風であつた。けれど、ミハイロフはなんにも氣がつかなかつた。彼は女の周りをせか／＼動き廻りながら、帽子や上着や手袋をぬぐ手傳ひをしたり、嬉しさうにこ／＼笑つたりした。そのために彼の美しい男性的な顔が、急に子供のやうに可愛く單純になつた。

ネルリは彼に帽子と上着を渡して、いつもの姿になつた。そして、もとの場所から動かないで、部屋の中をぐるりと見廻した。

「わたし随分ながくこゝに來なかつたわね！」と彼女はもの思はしげな、沈んだ調子で言つた。

この言葉は痛いほどミハイロフの心を刺した。不意に彼は自分の騒々しい喜びやうが、この場に不吊り合ひなのを感じた。けれど彼の目は主の意志に反して、歡喜の色を浮かべながら、彼女の全身を見まはしてゐた。彼女はあの時分とそつくりそのまゝだつた。恐ろしく瘦せた、脆さうな

體つき、青ざめた細い手、黒い着物、あらはな淺黒い首すぢ、やゝもつれた髪。

「だけど、どうして來たんだね？」興奮のためにほとんど慄へ聲で、ミハイロフはかう尋ねた。

「ほら、かうして來たんだわ。」まづたく平然たる調子で、ネルリは答へた。

ミハイロフは輝かしい目を大きく見開いて、ぢつと彼女を見つめてゐた。この女がなんとも言へないほど親しい、愛すべき、懐かしいものに思はれて、たゞもう優しく抱きしめたい氣がするほどだった。

ネルリはそれを感じたらしく、身を動かして男のそばを離れ、部屋の中を歩き出した。

「あの間になすつた仕事を見せて頂戴な……すつかり！」と彼女はいかつい聲で言つた。

けれどこのいかつい調子も、ミハイロフを驚かさなかつたばかりでなく、かへつて彼を感動させたくらゐである。彼はラムプをとつて、高く頭上にかゝげながら、ありたけの晝布を照らして見せた。

『可愛い女！』彼の心はかう歌つてゐた。そして、彼女の細つそりした體の一舉一動、その髪かたち、あらはな首す

ぢ、詰問するやうな嚴めしい顔の表情——すべてのものに歡喜の情を覺えながら、彼はネルリから目を放す事が出来なかつた。

ネルリは無言のまま繪やスケッチを見てゐたが、その一つに集中したやうな表情は、まるで自分と別れて何か仕事をしたらうか、自分の興へた時と自由を空費しはしなかつたかと、それを調べに來たやうな隠微だつた。

「これはいゝわね！」と彼女は二度ばかり言つた。ミハイロフは、彼女の賞讃がかくまで喜ばしく感じられるのに、われながら呆れるほどであつた。

ラムプの光りを受けて一そう深みを増し、いよく幻めいて來た大作の前で、ネルリは歩みをとめた。そして一生懸命に理解しようと努めるらしく、細い眉を動かし始めた。「これはなあに？」と彼女は威のある聲で尋ねた。

ミハイロフは返事をしなかつた。と、不意にあるものに對する憎えを感じた。

ネルリは長いあひだ無言に見つめてゐたが、やがて悪夢でも追ひ拂ふやうに、奇妙に頭を一振りした。このちよつとした身振りによつて、ミハイロフは彼女がすべてを悟つたのに氣がついた。彼自身も狙つただけで、晝面に對す

ことの出来なかつたものさへ、理解したかも知れない。彼女の顔は悲しさうになつた。

「これは大變よく出来てるわ！」とネルリは言葉みじかに言つた。それからやゝ無言のち、また言ひ足した。「けれど、これは恐ろしいわ。」

ミハイロフは依然としてラムプを頭上に捧げながら、やはり目を放さずに、自分の繪を見つめてゐた。突然その繪は、彼が今まで自分でも氣のつかなかつた、新しいあるものによつて魂を打ち、不思議なくらゐる恐怖の威力をもつて、ぐん／＼と惹きつけるのであつた。彼はこの瞬間ネルリのことさへ忘れて了つた。

けれども、ネルリは足早にそのそばを離れた。ミハイロフははつと我に返つて、その後について歩き出した。彼女は布をたらし仕切つてあるミハイロフの寢室へ、いきなりづか／＼と進んで行つた。そして寢臺、書物を載せた小卓——かういふインテメートな場景を、不可解な表情で見廻すのであつた。

突然ミハイロフは、彼女がそこを覗いて見るのを、苦痛に感じた……それは自分のためでなく、彼女のために苦痛を感じたのである。リーザ、ジェーネチカ……不意に彼女

たちがこの寢臺の上に現れたやうな氣がした。それはかつてネルリも、彼に身をまかせた寢臺なのである。眞裸な肉體が

合ふ……深い深い嫌惡

と、羞恥と、絶望に似た感情が、ミハイロフの心を撞んだ。彼はネルリを連れ去らうと思つて、その身がまへさへした。けれども、彼女は自分でそこから出て來た。彼女の顔は少しも變はつてゐなかつた。たゞ軽い瘰癧が肩のあひだを滑つて下へ流れ、引きしめた唇の片隅に隠れただけである。

この時ネルリは、始めてミハイロフの顔をまともに見た。彼はさながら宣告でも待つもののやうに、この嚴めしい、ほとんどの凄いほどの視線を浴びながら、羞恥と恐怖と愛情のために痲痺したやうになつた。

思ひがけなくネルリはにやりと笑つた。

それは奇妙な微笑であつた——そこには憂愁と、思ひ出と、愛撫と、宥恕と、それからまだ何ものかがあつた。その何ものかは、ミハイロフに分からなかつたけれど、そのために彼の魂を惡寒が走つたほどである。

「まあ、いゝわ！」まるで自分に答へるやうに、ネルリは不可解な調子で言つたが、とつぜん突發的な身ぶりで、彼の頭を兩手で抑へたかと思ふと、その額に接吻した。

ミハイロフは思はず身ぶるひした。そしてあぶなくラム  
プを落としさうにしながら、一方の腕をネルリの體に廻し  
た。

けれど彼女は依然として、いかつい謎のやうな目つきで、  
ちよつと彼の頭を押しやるやうにしたが、出しぬけに額や  
目や唇を、幾度も幾度も接吻した。

彼女の唇は乾いて熱かつた。彼女がそれを男の唇へ押し  
當てたとき、ミハイロフは彼女のうるみを帯びた齒の冷た  
さを感じた。彼は目のくらむやうな氣がした。

けれども彼が我に返る暇もなく、ネルリは彼を突きつけ  
て、ほとんど憎惡に近い一瞥を與へ、惱ましい表情で言つ  
た。

「さあ、これでお了ひー」

かう言ひながら自分の黒い帽子を取つて、縛れた黒い髪  
をピンで止めにかゝつた。

ミハイロフはラムプを置いて、部屋のまん中に立つた。  
彼は足もとの床が靜かに揺れるやうな氣がした。なぜ女が  
帽子をかぶつたり、上着をきたりするのか分からずに、幸  
福に酔つたやうな微笑を浮かべてゐた……

「一體お前はもう歸るの？」と彼はまごついたやうに叫ん

だ。

ネルリは振り返つた。彼女は長く鋭い帽子のピンを啞へ  
てゐたが、それが彼女の顔に毒々しい、殘忍な表情を與へ  
るのであつた。

「歸るのよ！」と彼女は食ひしめた唇の間から言つた。

口からピンを取つて、その長く鋭い針を、帽子と髪に突  
きさし始めた。ピンは乾いた固い軋みを立てた。

「いや、そんな法はない……僕あんなに喜んだのに！お  
前なんだつてやつて來たんだい？」何が何やら譯が分から  
ないで、やはり途方にくれたやうな、手頼りない調子でか  
う言ひながら、ミハイロフは彼女に飛びかゝつた。と、不  
意に見る見るまつ青になつた。

ネルリは彼の方へ振り向いて、両手をおろした。その時  
はじめてミハイロフは、彼女の目の表情に氣がついた。そ  
の中には殘忍な、ほとんど情熱的な復讐の表情が浮かんで  
ゐた。とは言へその口の隅には、苦痛の線が鋭く刻まれて  
ゐたけれど、彼はそれに氣がつかなかつた。

「まあ、なんのためにですつて？」ネルリは不自然らしく  
驚いて見せた。「會ひに來たんですわ！……だつて、わたし  
達は古い友だち同志ぢやなくつて……いえ、友だち以上な

のよー」

「ネルリ！」何かどす黒い冷たいものの中へ、魂が沈んで行くのを感じながら、ミハイロフは絶望的にかう叫んだ。

「ぢや、なぜお前はいま僕を接吻したんだい？」と彼は愚かしく尋ねた。

ネルリは謎のやうな微笑を洩らした。

「あれはお別れのつもりだったのよ……だつて、わたしは今日立つて行くんですもの、すつかり……」

「どこへ？」なほ一そう絶望的にミハイロフは叫んだ。

「アルブゾフのところへ……工場へー」ネルリは鋭く引つちぎつたやうに、ぞんざいな調子で答へた。目の中の復讐の表情は一そう鋭くなり、うすい引きしまつた唇に浮かんだ苦痛の線は、いよ／＼瘡癩的に歪んで來た。

「アルブゾフのところへ？」とミハイロフは鸚鵡がへしに言つた。

「えゝ……それから、まだあなたに知らせを持つて來たのよ……よくつて、わたし是非ともまつ先きに知らせたいの……」一語々たしかめるやうに、ネルリはゆつくりとかう言つた。そして、何かを享樂するやうに言葉をとめた。

彼女の目は、最後の一躍をする前の野獸のやうに、ぎら

ぎらと輝いてゐた。

「知らせつてなんだい？　なぜまつ先きに？」け／＼さうにミハイロフは問ひ返した。

ネルリは男から目を放さないで、ゆつくりゆつくり明瞭に言つた。

「それはね……あなたのリーザが……今日身を投げたのよ？」

ミハイロフは一步あとへよろめいた。一瞬間に霧が彼の體を包んで、たゞどこか遠くの方から、誰かの復讐に燃える黒い目が、乳のやうな靄をすかして、ぎら／＼光つてゐるやうな氣がした。

ネルリはひらりと身を返して、部屋のととへ駆け出した。彼女は入り口の階段で立ちどまつて、何かに耳を傾けたが、やがて兩手で頭を抱へながら庭へ駆けおると、まばらな遠い明りを輝かしてゐる、暗い往來へ走つて行つた。

### 三三

アルブゾフはネルリの部屋で彼女を待つてゐた。それはかつてマリヤ・バヴロワナが住み、かつて死んだ家の一室である。



女優の死後、彼女の従弟がやつて来た。それは釘穴に麝香燻子を挿して、恐ろしく香水の匂ひをぶん／＼させてゐる、快活で輕薄な安俳優であつた。これは後で分かつた事だが、故人は彼にネルリの事を手紙に書き送つて、そのまゝ家へ殘して置くやうに頼んだのである。安俳優はこの家をどうしたらいいか、まるで見當がつかなかつたので、この遺言をかへつて喜んだほどである。そして少しばかりネルリの機嫌をとつて見て、すこしばかり荒ら臍をひしがれた。彼は三日ばかり逗留したのち、行つて了つた。ネルリはそのまゝ自分の部屋に居残り、それ以外の部屋はすつかり閉めきつて、釘づけにして了つた。

この釘づけにされた、死んだやうな部屋々々に取り巻かれてゐるために、ネルリの部屋までなんとなく無氣味な感じを帯びてゐた。夜になつて、木の葉の落ち散つた暗い庭に風が騒ぎ、古い家が濕つぽくさう／＼しい闇に沈んだとき、彼女の窓にだけたつた一つ小さな明りが光つて、そばを通るものに氣味の悪い、迷信じみた感情を呼びさますのであつた。

アルブゾフは片手を卓に載せ、一束の黒い髪が廣い額にたれた、重さうな頭をうつ向けたまゝ、ぢつと腰をかけ

てゐた。とき／＼燃えるやうな黒い目を上げて、死んだやうな家の静寂に耳を澄ましながら、野獸めいた視線を周圍に投げた。それからまた頭を垂れて、身／＼ぎもせずに坐つたまゝ、膝からたれたいま一方の手の指を、やうやくそれと氣づくくらゐ動かしてゐた。

卓の上の蠟燭は、ほんやりと黄色く燃えてゐた。うす闇の中には黒い椅子や、箆筒や、白い毛布で蔽はれた、ネルリの細い髪鬘が見える。何もかも小ざつぱりして、あまりきちんとして過ぎてゐるほどであつた。嚴肅な禁慾主義の烙印が、あらゆるものの上に捺されてゐた。情慾の風、微塵に碎かれた戀ひ、妊娠、流産、かういふものを經驗した若い美女が、こゝに住んでゐる事を聯想させるものといつては、箆筒の上の小さな鏡よりほか、何ひとつないのであつた……けれど事によつたら、この嚴肅な禁慾主義の雰圍氣も、幅のせまい尼寺じみた寢臺も、いかつい夜具も、小さな固い枕も、この燃えつくした情熱と、碎かれた戀ひと、石のやうになつた胸を、もの語つてゐるのかも知れない。家の内部へ通ずる戸口は釘づけにされて、卓や椅子で塞いであつた。この椅子にアルブゾフは腰をかけてゐたのである。しめきつた扉から、重くろしい死の沈黙が襲つて

来る。その向かうにがらんとした部屋々々が續いて、そこには誰にも用のないピアノや家具が置かれ、相かはらず埃だらけのカバーに包まれた、鏡やラムプの掛かつてゐるのが感じられた。それには闇と空虚があつた。どこかにはまだ鬘蒲團も枕もない、鐵の寢臺が置かれてゐる筈だ。それは生活と愛を望んだ不幸な存在が、生き、苦しみ、死んで行つた寢臺である……がらんとした片隅の白いあらはな壁ぎはに、用もなくむき出しに置かれてゐる……

アルブゾフはちつと坐つて、聞き耳を立ててゐた。何かしらさまざまな異様なもの音が傳はつて來た。まるで誰か爪立ちで戸のすぐそばまで忍びよつたやうな、用心ぶかい軋みが聞こえるかと思ふと、今度は何か裂けるやうな、けたまゝしい音が響き渡る。窓のそとでは風が陰にこもつた唸り聲を立てたり、雨が單調にぼそ／＼と呟いたりする。とき／＼急がしげに鎧戸を打つ音も聞こえた。

アルブゾフは全然しらふで、綺麗に頭を撫でつけ、顔も洗ひあげてあつた。帽子と外套は入り口の椅子の上に置かれ、彼自身は赤い絹のルバーシカを着てゐた。卓の上の蠟燭、うなだれた頭、力なげに垂れた兩手、燃えるやうな赤いルバーシカ、それらはまるで翌朝の訊問と死刑のこと

を考へてゐる、ヨアン雷帝時代の大膽不敵な山賊めいた面影をしのばせた。

とき／＼彼は憂鬱に頭を振つて、苦笑を洩らした。それは自分で自分を笑ふやうであつた。彼はほとんど筋道の立つたことを考へられなかつた。考へるのが怖かつたのである。彼はとろ火に炙られるやうな氣持ちがした。不意に木戸がかたんと鳴つて、せか／＼した軽い足音が入り口の階段に聞こえた。アルブゾフはいきなり頭を上げた。目が急にきら／＼光り出した。もし誰かこの瞬間に彼を見たら、不斷の亂醉と遊蕩にたゞれた、この黒い目に現れてゐる不吉な恐ろしい表情を、たうてい理解することが出来なかつたに相違ない。

戸が明いてネルリが入つて來た。

「あゝ、やつとの事で！」いやな薄笑ひを洩らしながら、アルブゾフはかう言つた。

ネルリは無言のまゝ帽子と上着を取つて、部屋のまん中に突つ立つた。彼女はアルブゾフの調子が耳に入らなかつたのか、それともそんなものを氣にも留めなかつたらしい。

「さあ、これでお了ひだ！」と彼女は獨りごとのやうに言

つた。

彼女は何か自分自身の想念に答へたのか、それともアルブーゾフを慰めようとしたのか、それはなんとも分らない。彼女の言葉は、同時にこんな事を言はうとしたらしく響いた。「さあ、これで終りだ、最後の絲も切れて、何もかも死んで了つた……」あるひはそれでなければ、「さあ、それつきりの事よ、あんたも氣のもみ損だつたわね！」とでも言ふやうであつた。

アルブーゾフは信じかねるやうな、憂鬱な目つきで彼女を見た。

「お了ひだつて？」と彼は唇を歪めながら聞いた。

ネルリは眉を蹙めたが、なんとも答へなかつた。

「いや、まあいゝよ……なあ、ネルリ。」とアルブーゾフはやゝ無言のちに口を切つた。「お前は約束を守つて、なんにも邪魔をしなかつた……だが、こゝに一人で坐つてる間に、いろ／＼の事を考へたよ、だが……おい……おれはどうも本當に出来ないよ！」

ネルリは無言のまま細い眉をよせて、彼の顔を見つめてゐた。

「出来ないよ！」とアルブーゾフは繰り返した。

「ぢや、本當にしないがいゝわ！」と彼女はそつげなく答へた。

アルブーゾフはす早く頭を上げた。と、そのたゞれたやうな目に、もの狂ほしい表情が閃いた。

「ぢや、お前はどうかだつていゝのかい？ いや、仕方がない……つまりおれの考へた通りだ！」彼はさも苦しやうに、やつとの事でかう言つた。

ネルリは眉を蹙めた。

「さうかも知れないわ！」

「ネルリ、冗談はよせ！」とアルブーゾフはもの狂ほしく叫んだ。がすぐに自分を抑へた。「お前だつて分かつてくれなけりやならん筈だ……おれはお前が出掛けたときに、一口もぐ／＼言はなかつたぢやないか……どうもやたらに恥づかしくて、氣まりが悪かつたんだ……だが、今となつては言つて了ふ。お前がなんと言つたつて、おれはぢやんと承知してる——お前はいまだにあの男が好きなんだ！」

「違ひます！」とネルリは言つた。

「好いてるよ！ 前と同じやうに、いや、前より餘計に好いてるかも知れない！」

「違ひます！」強情に毒々しくネルリは繰り返した。

アルブゾフはしゃべりながら腹を笑ひ出した。

「いまお前が言ったことを、自分で聞くことが出来たらなあ……お前は自分で自分を納得させようと思つてるんだが……そんな事はつまらないよ！ お前がああ男のところへ出掛けたのは、たゞの悲劇を打つたためばかりぢやあるまい？ たゞ見得を切るためばかりぢやあるまい！ おい、よすがい……好いてるんだ、たゞそれだけの事さ。ある男が言つて聞かせたが、女つてものは、始めて自分から惚れて身をまかせた男の事は、決して忘れる事が出来ないさうだぜ。どんなに憎んで呪つてゐるやうに見えても、殺しかねないほどに思ひつめても、男がまた指の先でちよつとでも『おいでおいで』をすれば、すぐにいきなり駆け出すんだ……おれもいま自分でそいつが分かつたよ！」

自分で自分を嘲笑し苦しめながら、アルブゾフはかう言つた。

ネルリは黙つてゐた。

「え、どうだね、さぞ悲痛な別離だつたらうな、おい？」  
病的なうす笑ひを浮かべて、アルブゾフは尋ねた。

ネルリはちらと男を見やつた。

「え、そりやもう！」と彼女は復讐の語氣で答へた。

アルブゾフはさつと青くなつた。

「お前がおれをからかつてるのは、ちやんと承知してるよ、ネルリ！」  
乾いた唇を痙攣的に紙めずりながらかう言つて、輕蔑の笑ひを立てようと試みた。「お前はわざと面あてに言つてるつもりなんだらうが、しかし本當に悲痛の別れだつたんだらう……ちやんと見えてるよ！」

「見えてるんですつて？」とネルリは目を細めながら問ひ返して、から／＼と笑ひ出した。「ぢや、かへつて都合がいいわ！」

アルブゾフは息を切らせはじめた。

「それぢや、お前はお名残りに身を任したんぢやないか？最後の思ひ出に？」自分で自分の冷笑に耐へきれない氣持ちで、彼はかう言つた。

「もちろんよ！」とネルリは挑むやうに答へた。

アルブゾフは顔に霧がかゝつたやうな氣がした。ネルリはいまにも男が飛びかゝりさうに思はれた。實際彼はさういふ身ぶりを見せたのである。アルブゾフは頭の中が一ゆれ揺れたやうに感じられた。彼女はわざと面あてにある事を言つてるので、自分の皮肉や邪推は、たゞ女をこじれさすばかりだ、それは自分でもよく知りぬいてゐる癖

に、彼はさういふ嘲笑を我慢しきれなかつたのである。それに、一たんミハイロフに身をまかせた彼女が、たとへ意地づくにもせよ、この言葉の口にする事が出来るといふ事實だけでも、彼を氣ちがひのやうにしないでは置かなかつた。

「ネルリ、どうかおれを苦しめないでくれ」と彼はほとんど唸るやうに言つた。「おれは本當にしやしない……お前が面あてに言つてる事は分かつてる……だが、おれはそんな事を聞いてゐられない、堪らないのだ」

ネルリはからりと笑つて、帽子を箆箭の上へ抛り出し、彼の傍へ寄つた。

「もう澤山……おやめなさい」と彼女は驕いて、アルブゾフの頭を抱へると、そのまま自分の胸へ押し當てて、亂れた剛い毛を優しく撫でるのであつた。「わたしあんたを愛してゐるのよ……大事なゾリリ、可哀さうに」

手綱を切つて放したやうな、氣ちがひめいた幸福感がアルブゾフの喉をしめつけた。彼は女の小さな胸に——下の方で柔かい心臓の響きの聞こえる胸に、びつたりと寄り添うて、そのまゝじつとしてゐた。ネルリはやつとそれと知れるくらの、優しく彼の髪を撫でた。

「あゝ、苦しい目にあつた……」と彼は睨れつばい調子で呟いた。「なぜお前は出掛けたんだい？」とまたもや嫉妬めいた響きが、その囁きの中に聞こえた。ネルリは手を放して、ちよつと心持ち身を引いた。アルブゾフは頭を上げて、疑はしげに彼女を額こしに眺めた。「つまり、すつかりあの男を忘れたつて譯ぢやないんだね？」

ネルリはとつぜん彼を突き放して、兩手を揉みしだき始めた。

「あゝ、何といふ退屈な、重苦しい、いま／＼しい事だらう——そんな事はもう／＼あき／＼しちやつた」と彼女は惱ましげに、呻くやうに言つた。

「ネルリ、ネルリ」はつとして後悔したらしい様子で、アルブゾフは彼女の方へ身を乗り出した。けれども、ネルリはもうそこを離れて了つて、箆箭の傍に立つた。その眉は險しく八字に寄せられて、目は斷乎とした陰鬱な表情を帯びてゐた。

「ねえ、ザハール・マクシムイチ。」彼女は奇怪な引つ吊つたやうな聲で言ひ出した。「あなたはいつまでもわたしを苦しめるつもりなんですか？」

「僕が？ お前を……ネルリ」なじるやうな調子でア

ルブーツフは叫んだ。

「え、あなたが、わたしを！」とネルリは固い聲でかう口眞似をした。「あなたは一體わたしにどうしてほしいんですの！……ねえ……わたしはあなたを戀ひして、それからまた戀ひが醒めました……いえ、醒めたと思つて、あなたに背きました……ところが、今度またあなたが好きになつたのです……ねえ、それがどうなんですか？ もつとも……ねえ、ザハール・マクシムイチ、どんな人だつて自分でも知らないやうな、譯の分らない心の祕密を持つてゐます！ わたしはあの人に會はなければならなかつたんです！ つまりそれは、あの人を愛してゐないつて事を、自分で自分に確かめるためなんですの！ 何だつてあなたはそんなにわたしを見るんですの？……え、事によつたら、わたしは卑劣な、墮落した、穢ららしい女かも知れませんが……事によつたら、自分でも自分が分からないのかも知れませんよ……まあ、それで結構だわ！ 一體あなたはどんな權利があつて、これよりもつと違つた女になれと、わたしに要求なさるんですか？……わたしは別にあなたを騙しちやゐません、本當と違つた女のやうに見せ掛けてもみません！……それなのに、何だつてあなたはわたしを苦しめるんで

すの？」

「ネルリ！」

「何がネルリです！ あなたはわたしの言ふ事を信用して、あれはもうお了ひだと思つたら、いゝぢやありませんか！……どうしてわたしに證據が見せられます？ あなたは信じなきやなりません。だつて、わたしの方からあなたの所へ行つたんぢやありませんからね……わたし別にお詫びなんかしやしませんからね！ そりやわたしが悪いんです。そしてその罰は充分に受けました。けれど、わたしにはまだ意地がありますから、あなたの所へお詫びになんか行きやしません。だつて、かういふ事は赦す譯に行かないつてことを、自分でよく知つてゐますものね！……わたしは悦んであなたに膝も突いたでせうが、そんな事をして何になりませう？……あなたは決して忘れやしません、また忘れる事なんか出来ないんですよ！ ねえ、覚えてゐらして？ あなた以前わたしの所へ来て、もう何もかもすつかり赦す、忘れて了ふと言ひながら、すぐその後で、わたしを絞め殺さうとなすつたでせう……ほら、丁度この床の上で……覚えてゐらして？」

アルブーツフは頭を垂れた。

「わたしはあれでお了ひだらうと思つてゐました……もう死ぬつもりだったので……ところが、あなたは、またぞろやつて來ました！　ねえ、白狀なさいよ、ザハール・マクシムイチ、あなたがおいでになつたのは、赤ん坊が死んで生まれたといふ事を、聞きつけたからでせう……ね、本當でせう？……でなかつたら、おいでになる筈がありません！」

アルブーゾフは無言であつた。

ネルリは語をついだ。

「ねえ、ご覧なさい！……こんな……露骨な……」ネルリはやつとの事にてりと笑つた。「お話しはとでも我慢が出来ないつて事は、もうご自分で知つてらしたんですわ……これが一たい赦罪といふものでせうか、これが一たい愛といふものでせうか？……」

「でも、やつて來たかも知れないよ！」

ネルリはちらと彼を眺めた。

「さう、來たかも知れないわね……事によつたら……さう、ちやんと見えてるわ、來たに相違ないわ……だけどそれはたゞ、も一ど逃げ出すためのよ！」

「僕はお前を愛してゐる、ネルリ！」アルブーゾフは絶望したやうに遮つた。

ネルリはぼきりといふほど烈しく指を握りしめた。

「分かつてるわ、それはちやんと分かつてるわ……だけどそれにしても、わたし達は永久に別れた方がいゝのよ！」

「ネルリ！」

「いゝのよ、いゝのよ、その方がいゝのよ！……あなたは忘れやしません、忘れることが出来ないのよ。そして、わたし達は際限なしに、お互同志くるしめ合ふばかりだわ！」

「おれは忘れるよ、ネルリ！」とアルブーゾフは臆病さうに呟いた。

「だめよ！……赤ん坊……わたしは今さう言つたでせう！——こんな露骨な話しは、とてもあなたに我慢できないつて。だけど事によつたら、かへつてあんまり露骨すぎるために、あなたは早く諦めるかも知れませんわ！　それより下らないこま／＼した事の方が、あなたに色んな事を思ひ出させるに相違ないわ！　わたしあなたを接吻したり、もつと優しく撫でて上げたりするのは、恐ろしくつてとても出來ませんわ。なぜつて、わたしが一口ものを言つたり、ちよつと身動きしたりする度に、あなたは心の中で『あゝ、かういふ風にあの男にもキスしたんだ……あの男にもかういふ優しい言葉を掛けたんだ……』と考へるに相違ない

から。わたし、ちやんと分かります……ね、本當でせう？  
……ね？……え無論さうですとも！……今夜わたしは不意  
にあなたが戀ひしくて戀ひしくて、堪らなくなりましたの。  
あゝ、あの人が傍にゐればいゝ、とかう思ひましたの、恐  
ろしいくらゐ、苦しいくらゐ……」

ネルリはとつぜん眞つ赤になつた。すると、彼女は前にも  
まして素直に可憐になつた。アルブゾフは急に身を伸ば  
して、悦ばしげな熱情のこもつた様子で、彼女の方へ身を  
進めた。

「待つて頂戴……わたしまだ了ひまで言やしないんですか  
ら！ それほね、そのとき、夜なかに考へたんですの……」  
とネルリは急いで言つた。「わたしかう考へましたの——  
もう何もかも了ひだ、あんな事は下らない事だ、なんに  
もありはしなかつたのだ！……わたしがあつてゐるのは、  
あの人だけだ。あの人ひとりだけに身も心も捧げたい！  
かういふ風にあの人を撫でて上げよう、かういふ風にあの  
人の胸に頭を載せよう……とかう思つたんですの……」

ネルリの聲はさながら音楽のやうに、優しい熱情に充ち  
て響いた。彼女は自分の小さな柔かい胸に、手まで當てて  
見せた。アルブゾフは彼女を憎やかすまいと、身動きさ

へも憚りながら、歡喜に充ちた目を放さずに、ぢつと聴い  
てゐた。

「ところが、不意にわたしはまるで、何かに觸りつけられ  
たやうな氣がしました。まあ、本當にわたしの熱情が強け  
れば強いだけ、それだけ餘計に、恐ろしいことになるのだ  
……あ的人是々はつきりと、わたしが丁度こんな風だつ  
たに違ひないと、想像するに決まつてゐるつて、さう考へまし  
たの……ね、當たつたでせう？ 本當でせう？」

「本當だ！」アルブゾフは籠もつた聲で答へて、立ち上  
がつた。

ネルリの目は絶望に輝いた。

「いや、事によつたら、お前のいふ通りかも知れないよ、  
ネルリ！」放心したやうに微笑しながらアルブゾフは相  
手を見ないでかう言つた。「お前は全く鮮かに描寫して見  
せてくれたよ！」とつぜん限りない憎悪を浮かべながら、  
彼は言ひ足した。「その愛撫の話も抱擁の話も……」こ  
んな風だつた！」か……實に鮮かだ！ さて、それではど  
うしたらいゝんだらう？ もうすつかり永久に別れて了ふ  
かね？」

「えゝ。」ネルリはぼうつとした無表情な調子で答へた。



アルブゾフは黙つてゐた。

「でも、もし僕にそんな事が……出来ないとしたら？」も  
うまるで聞こえないくらゐな聲で、彼はかう聞いた。

ネルリは手を振つた。

「出来ませよ！ そんな氣がするだけですよ！」と彼女は  
言ひ返した。

アルブゾフはまた黙つてゐた。重々しい白い額をした  
彼の陰鬱な顔は、死にも狂ひの執拗な表情を浮かべてゐ  
た。まるで幾千の想念が風に追はれる黒雲の如く、この額  
の下で走り廻つてゐるやうに、怪しい影がその上を掠めた。  
「そればかりか、わたしこんな事さへ言へませすわ。」見受け  
たところ、だいぶ氣の張りが弛んだやうな風で、ネルリは  
かう言ひ足した。「あなたにそんな氣がするのは、わたし  
まだあなたのものになつてないからですわ、たゞそれだけ  
よ……」

「ネルリ！」まるで斧でむね打を食らつた牡牛のやうに、  
アルブゾフは頭を振り出した。

「ところが、わたしがあなたに身を任すが早い、あなた  
は別れることが出来る——平氣で出来るつてことがお分か  
りになりますよ！」とネルリは語を續けた。「あなた方は

みんな同じやうなものですよ。何と仰しやつたつて、何と  
感じなすつたつて、結局はあなた方の求めてゐらつしやる  
のは、たゞそれだけです、たゞ／＼それだけなんですわ！」  
憎悪と、苦痛と、嫌悪を聲に含ませながら、彼女はヒステ  
リックにかう言ひ足した。

アルブゾフはすぐに返事をしなかつた。例の影は依然  
として、彼の顔の上をちら／＼してゐた。

「ねえ、おい、ネルリ。」彼はゆつくり／＼言ひ出した。「も  
しかしたら、お前のいふ通りかも知れない……あゝ全くそ  
の通りだ……お前は決して忘れやしない、忘れることが出  
来ないのだ！ いつまでも考へたり、想像したりするだらう  
よ！ 仕方がない、それは分かり切つた話だ。おれはお  
前にすつかり魂を捧げてゐるんだからね。ところで、おれは  
自分の魂が大切だ！ おれは誇りのつよい男なんだ、ネル  
リ。たかが商人の小件に過ぎないし、まだ別に取り立てて  
能もない男だけれど……もしあの男がおれと同じやうにお  
前を愛してゐて、お前を棄てたのが、あの男の過ちだつた  
ら……もしあの男が苦しんだのなら、おれも忘れて了つた  
筈なんだ！ さうすれば、我々は双方とも五分五分になる  
譯だ。おれは魂をすつかり投げ出して、一生涯を代價とし

てお前を買ふのだし、またあの男だつてその通りだ……構やしない！　ところが、本當はさうでないんだ。おれはお前の足もとに身を投げ出してる、お前はおれにとつて神聖なものだ。それなのに、あの男はお前を一時の慰みものにして、それから用のないぼろ切れみたいに棄てて了つた！　かう思ふと我慢が出来ない！　一體あの男はおれにくらべて、そんなに豪い人間なんだらうか？……やがてわれ／＼三人がどこかで落ち合つたとき、あの男は心の中で——あらはに言ふ元氣こそあるまいが……いや、事によつたら、言ふかも知れない——『ばか！……おれが通りすがりに拾つて棄てたものを、一生を犠牲にして買ひやがつた！』と考へるだらう……かう思ふと、實に堪らないのだ！　その時おれはあいつも、お前も、自分も、一緒にやつつけて了ふ！——

アルブーツフは両手で頭を掴んで、耐へ難い苦痛に身を揺すぶり始めた。ネルリは目を伏せたまゝ聞いてゐた。

突然アルブーツフは帽子をとつて、戸口の方へ歩き出したが、急に立ち止まつて、

「ネルリ、これだけはいつも覚えてゐてくれ。」物凄く重々しい調子で、彼は言ひ出した。「おれはお前を愛してゐた。」

今でも愛してゐるし、またこれから先も愛して行くだらう！　おれは行つて了ふ筈ぢやなかつたんだが、どうも仕様がな！　お前はあの男を愛してゐる。愛してゐるのも！　それはちやんと見えてるよ。そればかりはおれを騙すわけに行かないぜ！　もつとも、こんな事は下らない事だ。が、本當にあの男に愛想を盡かしたといふ、お前の言葉信じたら、こんな事くらゐ何でもないのだが……どうも信じられない！——と彼は叫んだ。「なぜお前あの男の所へ行つたんだ？　別れにかい？　へん、冗談ぢやないよ！　おれは赤ん坊ぢやないからね！……お前が行つたのは別れのためぢやない。いよ／＼本當にけり、が付いたのかどうか、もう一度最後に確かめるためなんだ！　ひよつと考へ直しやしなかつたか。もう一度よりを戻してくれないかしら。とかう思つたんだらう。黙れ！　嘘をつくな！……自分で本當だつて事を知つてる癖に！……そりや別な事を考へたかも知れないが、心の底にさういふ氣持ちはあつたのだ。いや、まあいゝわ！　せめてたつた一度でも、本當の事を言つてくれ——お前はお別れにあの男をキスしやしなかつたかい？」

アルブーツフの聲は急につゝ抜けて、ぱつたり落ちて了

つた。彼ははあく息を切らして、見るのも憫れに恐ろしいやうだつた。彼は返事を待つてゐた。

ネルリは祈るやうな目を上げて、微かに唇を動かし乍ら、細い蒼白い手を胸へ押し當てた。彼女の姿せんたいは、男に身を投げようとする努力を表はしてゐた。彼女は跪かうと思ひながら、思ひ切ることが出来ない風であつた。アルプーゾフは悲痛な表情で頭を振つた。

「さうか……ちや、さよなら！ もう二度と来ない！ 少くとも……少くとも、あの男が生きてゐる間は……さよなら！」彼は力任せに戸を足で蹴飛ばして、闇の中へ没して了つた。戸はが、たと壁に當たつて、家ちうどよめき渡るやうな音を立てて閉まつた。

ネルリは男が歸つて来るのを當てにするやうに、閉ざされた戸を見つめながら、長い間ちつと身じろぎもせず立つてゐた。やがてその頭は垂れて、限りない惱みに歪んだ蒼白い顔の上を、涙がはら／＼と流れた。胸の上に押しあてられた手は、力なく體の兩わきにだらりと落ちた。

### 二三

町ぢうは恐ろしい震撼を受けた。騎兵少尉補クラウゼの

葬式の後わづか一日おいて、局長の譴責に大膽な反抗を敢てしたため、役所を追はれた會計官吏のルイスコフが、首をくゞつて了つたし、また更にその翌日は町人出の野菜作りが郊外で鐵砲自殺をした上に、商人トレグーロフの娘リーザが入水した、といふ噂が擴まつたのである。

よく以前にも、眠つたやうな町の平和な静けさを、一發の銃聲が／＼と、馳せ集まつた人々は、どこかのつまらない人間が世を辭した事を知る——さういふやうな事件もあつたけれど、そんな男のことなど、誰ひとり考へようともしなかつた。またさびれきつた町の一隅に、誰ひとり夢にも考へなかつたやうな、到底ほんたうに出来ないやうな、一大ドラマが暴き出されることもあつた。死骸の傍へ四方から大勢の人が馳せ集まり、息づまるやうな好奇の色を浮かべながら、化石したやうなマスクの下に何やら祕密の藏されてゐる死に顔を眺めて、かうしたカタストロフを豫想しなかつたのを、怪しみ合つたこともあるが、しかしすぐに忘れて了つた。生活は依然として淺い河床を流れ續けて、たゞ違ふのは墓地に土饅頭が一つ殖えたのと同じやうな、誰にも用のない、無興味な新しい人間が、その空いた場所に巢をくつて、一定不變の習慣に従つて、音なく／＼と

そ動き廻る、たゞそれだけのことであつた。

けれども一時に市中に勃發して、しかも社會の各階級に觸れた多くの自殺事件は、町の生活を根柢から動搖させた。臆測や風説は殆ど際限がなかつた。市中は煮えくり返るやうだつた。そして町に溢れる無意味な混雑の中には、いつもと違つて、單なる好奇心以上の何ものかがあつた。

勿論、郊外の町人の事については、餘り話しがなかつた。よしあつても、おもに市場<sup>いちば</sup>くらゐのものであつた。それは恐ろしい飲んだくれで、死を迎へるのさへも素面<sup>しよめ</sup>ではなかつた。事實その前の晩、彼はビーヤホルで何やら喚<sup>わめ</sup>き立て、拳<sup>こぶし</sup>を固めて我とわが胸を叩きながら、誰かを呪つたといふ事だけれど、そんな酔興のヒステリイ騒ぎには、誰も一顧の注意さへ拂はなかつた。酔つ拂ひの職人仲間では、珍らしくもない現象だからである。

ルイスコフの自殺は、初め一同を迷宮へ導いた。もつとも、彼の局長に對する思ひ掛けない、度はづれに大膽不敵な行動は、すでにこのカタストロフを豫言してゐたので、別に局長を責めるものはなかつたが、しかしこんなつまらぬ會計局の書記などに、かうした飛躍や悲劇的な結末が出来ようとは、誰にしても思ひ掛けない事だつた。いつで

も、自殺者は一種不思議な尊敬の念を呼び起こすもので、どんな人でも自殺者は運命の手に指ざされた、一種特別な人間のやうに感ずるものである。ところが、とつぜん顔色の悪い、藥のやうな髪の毛をした、思ひ切つて平凡なつまらない小官吏が、この役割りを演出したではないか。それは何だか癪<sup>さか</sup>に觸<sup>ふ</sup>るやうな氣持ちがするほどだつた。けれど市中では當時の事情を思ひ出して、すぐさまルイスコフの死を騎兵少尉補クラウゼの自殺と結びつけて了つた。やがて人々は自殺の傳染力といふ事だの、壯麗な葬式や、一般社會の同情は、感じ易い人達を同じ道へ突き入れる——といふ事などを話し出した。誰かが何げなく傳染病といふ言葉を口から吐かせた。と、忽ち思ひ切つて莫迦げた噂が生み出された。それはほかでもない、まだこれ以外に、十八人の者が自殺しなければ濟まない、といふ豫言だつた。同時に技師のナウーモフの名が、ぼんやりと浮かび出した。

しかし誰もはずきりとは言へなかつた。それに、たとへナウーモフがクラウゼや、ルイスコフに感化を與へたとしても、郊外の町人やリーザ・トレグーロワに、影響を與へるなどといふ事は、斷じてあり得ない、それは分かり過ぎるほど分かり切つた話である。とはいへ、人々は頻りに彼

の事を、執拗く話し出したばかりでなく、警察のことさへ聯想したのである。

かうした風説に懼やかされた警察署長は、なぜか本當にナウイモフのところへ飛んで行つたが、技師は工場の方へ行つてゐた。その後しばらくたつて、彼が全くどこかへ行つて了つたといふ噂が立つた。町の事務所で署長を出迎へたのは、恐ろしくだらしない恰好をして、正體なく酔ひ潰れた、アルブーツフ一人きりだつた。彼は陰氣な顔つきで、署長の言葉を聞き終ると、沈んだ調子でかう言つた。

「くだらない……どこへなとさ、つさ、と失せやがれ！」

市中の動搖は次第に大きくなつて行つた。そこには何かしら不安な期待があつた。多數の人は突飛な豫言を冷笑したが、内心みな壓迫を感じてゐた。

誰よりも一ばん興奮したのは、若い人達である。上級の中學生や女學生は、よく一つ所に塊つて、熱くなつて自殺論をやり始めた。すると、意外にもナウイモフの思想の熱心な信者が、彼等の中に幾たりもある事が分かつた。どうしてさういふものが彼らの耳に入つたのか、全く不可思議であつた。

令嬢達は本當に花をもつて、クラウゼとリーザの墓詣り

をした。たゞ不幸なルイスコフの空想は實現されなかつた。

彼の葬式には母親のほか、誰ひとり會葬するものがなかつた。彼は一ばん遠い墓場の隅の溝に近いところへ埋められた。そして、花や喇叭の響きがなかつたばかりでなく、殆ど僧侶さへないほどだつた。尤も、大學生のチーヅムが一ど彼の墓へ寄つたが、二分ばかりけんさうに立つてゐた後、ひよいと肩を疎めると、極めて曖昧な心持ちで行つて了つた。

中學校の校長は朝の祈禱の後、職員や僧侶のゐる所で、なぜか全校の生徒たちに向かつて、一場の訓示を試みる必要を感じた。彼は自殺が恥づべき淺慮の行爲である事を證明し、國家と皇帝と神に對するこの罪惡に陥らぬやうにと、生徒達を戒めたのである。生徒らは注意ぶかく聞き終つたが、誰ひとり感心したものはなさうだつた。たゞ多數の親達はこの訓示があつた後、子供から一切の武器を隠すやうになつた。

町ぜんたいに瀾漫した、この途方に暮れたやうな心持ちには、何かしら奇妙なところがあつた。つまり人々は心の深い奥底で、生の誘惑がいかに微弱なものかといふ事を知つて、數世紀に互つて建設された知識も、ほんの一突きで崩されて了ひ、人間は群れをなしてこの世を去り始めるか

も知れない、といふ事を恐れるやうな具合ひだつた。

市中で一ばん噂にのぼつたのはリーザ・トレグロワであつた。彼女の不運な戀ひはあらゆる人々の所有となり、人々は好奇心に咽せ返りながら、その話しばかりしてゐた。そして自分でも氣がつかないで、彼女の墓穴に忌はしい汚水を注ぐのであつた。もつとも、中には心からこの娘を憐む者もあつたが、この事件の有する刺戟的な味は、憐愍や公憤に打ち勝つた。

一同は憤慨したり、興奮したり、家から家へ飛び廻つたり、驚いたり、恐れたりした。不安は次第に増して、町は本當に性質も豫防法も分らない、恐ろしい病氣に襲はれたやうであつた。

## 二四

ネルリが最後にミハイロフの所へ行つた晩、老醫師のアルノルディは一人で家に坐つて、茶を飲んでゐた。

ラムプはきら／＼光るサモワールの横腹と、肥つた醫師の手を照らすのみで、部屋は薄闇の中に沈んでゐた。窓には鉛戸もカーテンもなかつたので、冷ややかな青い晩が、氣むづかしげに外から覗き込んで、年取つた獨身者の住ま

ひに、一そう落ちつきが悪いさびれた感じを與へた。

ドクトルは櫻ん坊のジャムを機械的に匙で掻き廻しては、重々しくルビーのやうに流れ落ちる雫を眺めながら、何やら、ぢつと考へてゐた。

彼は毎晩々々まつたく獨りぼつちで、こんな風に坐つて茶を飲みながら、何かの一點をぢつと見つめて、重々しい用もない想念を機械的に轉がしてゐるのであつた。それらの想念はまるで野の上の黒雲のやうに、濁つてのろ／＼と這つて行つたが、彼自身は殆どそれに氣づかなかつた。

マリヤ・パーヴロヴナの死後、全體に彼は一時に年を取つて、だらしなくなつて了つた。頭は恐ろしく白くなつて、唇はだらりと垂れ、手は目に見えて裸へ始め、着物はだらしなく汚らしくなつて來た。

彼の心中に遅蒔きながら、一瞬間もえ上がった小さな灯は、もう永久に消えて了つた。そして彼の魂は、風に揺れる道ばたの枯れ木のやうに、あてもなく侘びしく生きてゐるのであつた。

とき／＼彼の目の前に、長い死病で明るく透き通つた小さな顔が現れて、愁はしげな目が遠くの方から、『ドクトル……わたしの好きなドクトル、あなたわたしをお忘れにな

りはしなくつて？」と言つてゐるやうに思はれる事があつた——さういふ時でも彼はたゞ身慄ひして、目をぼち／＼させながら、少しも早くいつもの死んだやうな、癡痺の状態に連れ去らうと努めるのであつた。

彼の心の中には希望もなければ、反抗もなく、絶望もなかつた。それどころか、『もしマリヤが死ななかつたらどうだらう？』と空想して見る氣持ちさへ、まるで起こらなかつたのである。彼はもうすつかりこの佞びしい、孤獨な生活に馴れて了つたので、意地の悪くない蛭むしが靜かに血を吸ふやうに、そろ／＼と心を吸ひ盡くす一種の惱ましい快感さへも、その中に見出したかと思はれるほどだつた。彼に取つては考へる事が苦しくて、しかもぜん／＼不必要であるにも拘らず、考へずにゐることが出来なかつた。また追憶がただ惱ましいばかりなのに、思ひ出さずにゐられな——それがいら立たしかつた。

「人間はこんな事にさへ、意志を與へられてゐないのだ！」と彼は惱ましい氣持ちで考へたが、すぐに諦めて了つた。「同じことだ！」この一語の中に一切が消えて行つた、ちやうど霧が魂を包んで了つたやうに。

こんど爆發した變事さへ、彼を愕おどろかしても、驚かしても、

恐らせもしなかつた。彼はそれより何か何も豫期しなかつた、とでもいふやうにこれらの事件に對した。たゞ一ばん問題にならなかつた町人の死だけが、なぜか彼の心いきいきとした想念を呼び醒ました。もつとも、それは自殺そのものでなくて、當日ふと耳にした一つの言葉だつた。

「飲んだくれだつて！」不思議ないら立たしさを覺えながら、彼はかう考へた。「飲んだくれだつて？……人生がそんなにいゝものだとするれば、どうして飲んだくれなんぞになつたのだらう——たゞ飲んだくれといふものだけに？ 本當の人生はこゝでなくて、どこか『あの世』にあるなんて、それは人間が自分で考へ出した事だ……それとも、その男はこの世に安住の地を見出さなかつた、とでもいふのかな？ それは全體なぜだらう？ 見出すのを望まなかつたといふのか？ それは奇妙な話だ！ この世に安住の地を見出すことを望まないものが、どこにあるものか？……それとも、見出すことが出来なかつたのかな？……さうだ、それなのだ……出来なかつたのだ！……實際、事によつたら、あの飲んだくれの町人は、豪放偉大な精神力を持つてゐたのかも知れない。みんなは與へられた生活と妥協してゐるが、あの男はそんな妥協をしなかつた！ 或ひはあの男も

トルストイや、ナポレオンなどに劣らないほど、叡智に充ちた偉大な強者になりたかつたのかも知れない。それなのに誰かがあの男を、小つぽけな、無能な、ばかな人間に生みつけたのだ！……勿論、皆が皆秀才や天才になる譯に行かないが、それにしても、一たい誰が人間に向かつて、自分のみじめな運命を諦めると、要求する権利をもつてゐるのだ？ 汚い暗い穴のやうな、自分の生活に満足して、その中に潜り込んだまゝ、とき／＼生活を創造してゐる偉大な幸福ものを、遠くの方から敬虔の目で眺めろ……そして、自分はこんなにつまらない存在だけれど、あの人たちは立派なものだと言つて悦べ——などと要求する権利がどこにある？ それはあんまり多分な自己犠牲を、人間から要求するといふものだ！……飲んだくれだつて！……」ドクトルは匙を持ち上げて、どろ／＼した甘いジヤムの流れが小皿へ垂れるのを、長い間ちつと見つめてゐた。

「さうだ！」筆だ一つぼたりと落ちたとき、彼は大きな聲でかう言つて、匙を置いた。

「しかもおまけに、彼等はこの役にも立たない、誰の目にも面白くない生活が、最も偉大の幸福であり、貴重品であり、理解を絶した聖物であるのだから、お前らは感謝の念

をもつて、それを守り通さなければならぬ——とこんな風に信じさせようとするのだ！……（もつとも、幾ら大切にしたらところで、要するに墓場までなのだ！）その癖、彼ら自身がかういふ生活を、英雄や天才の本當の人間らしい生活と對照して、心の底から輕蔑してゐるではないか！」

「さうだ！」彼はもう一ど大きな聲で繰り返して、ちよつと考へたのち、微かに慄へる肥えた手を、サモワールの陰に立つてゐる水さしの方へ伸ばした。

けれど丁度この瞬間、誰か急がしげに戸をこつ／＼叩いた。アルノルヂイは手をおろして振り返つた。

「誰です、そこにゐるのは？……おはいんなさい！」と彼は落ちつき拂つて言つた。

戸が開いて、鬨の上にミハイロフが姿をあらはした。

「あゝ！」ドクトルは言葉じりを引いて、なせか重々しげに體を持ち上げながら、出迎へようとしたりした。

ミハイロフは中へ入つた。そして挨拶もしないで、外套と帽子を着けたまゝ、いきなり手當たり任せの椅子に腰をおろした。醫師のアルノルヂイは賢さうなどろんとした目で、注意ぶかく彼を眺めた後、ゆつくりと自分の席へ尻をおろした。



かなり長い間、ミハイロフは背中を丸くして、ぢつと目の前の床を見つめたまま、無言で坐つてゐた。恐らくどこへ、何のために来たか、忘れて了つたのだらう。アルノルヂイは注意ぶかく彼を觀察してゐた。

突然ミハイロフは體を動かして、頭を上げた。そしてドクトルと視線が出會ふと、にやつとひん曲がつたやうな笑ひを浮かべた。この笑ひの中には、何かしら馴れたやうなものがあつた。死病にかゝつて、自分の運命に諦めをつけた人が、よくこんな風に同情を乞ふともつかねば、自分の意久地なさを詫びるともつかぬ、笑ひを浮かべるものである。「ときに、どんなご用ですか？」と肥えた醫師は息苦しさうな聲で言つた。「お茶はいかゞですか？」

ミハイロフは見受けたところ、何か言ひ出さうとしてゐるらしかつたが、この思ひ掛けない單純な質問が、彼を間違つかせたのである。彼はたゞ片手を振つた。

「どう。」まるきり表情のない顔つきで、アルノルヂイは言つた。「どうも大變なことで！」

ミハイロフは惱ましげに身悶えしたが、すぐに押しこたへて目を伏せた。彼は幾度か言ひ出さうと試みたが、たゞ療養的に口を開いたり、閉ぢたりするばかりだつた。見當

違ひの言葉ばかり頭に浮かんで來るらしい。

醫師は相手が氣の毒になつて來たらしかつた。彼は半ば身を起こして、勵ますやうにミハイロフの肩を叩かうとしたが、こちらは殆ど嫌惡の色を浮かべて、身をかはして了つた。アルノルヂイは手を引つこめて、唇を噛みながら、腰をおろした。

ミハイロフは依然として、身動きもせず床を見つめてゐた。醫師は次第に不安らしく身を動かし始めたが、たうとう口を切つた。

「まあ、本當にどうしたといふんです！ それほどまでに意氣沮喪するつて法があるのですか！」

ミハイロフは黙つてゐた。

「それは勿論、恐ろしい事に相違ないが、どうも仕方がないぢやありませんか！ 出來たことは取り返しがつきやしません……それに、わたしに言はせれば、君はこれに對して、それほどの責任はないですよ……」

「どう思ひますか？」がらんとした聲でミハイロフは訊ねた。

醫師は目をそらして、何とも答へなかつた。

ミハイロフは素早く頭を上げて、好奇心とも冷笑とも、乃

至は敵意ともつかない、奇妙な目つきで彼を眺めた。と、不意に思ひがけなく、極めて不自然な聲で、から／＼と笑ひ出した。

「ドクトル、どうやらあなたは、僕が自分を悪人か人殺しと思ひ込んで、あなたの所へ懺悔に來た、そして我とわが胸を拳で叩き出すだらう——といふやうな事を、眞面目に考へてゐらつしやるんですね？……どうぞ安心してください！……決してそんな事はありせんから……」

ミハイロフの唇は奇妙に躍つた。醫師はそれを横目に見やつた。

「僕は何ひとつ後悔してもゐなければ、自分を悪人とも人殺しとも思つてゐません。だから、あなたの……あなたも……あなたもそんな目で僕を見るのは、失敬ぢやありませんか！」

ミハイロフは不意に跳り上がり、帽子を引つたくるやうに取つて、いきなりそれを出たら目に抛り出した。彼は全身を裸はせてゐた。顔は白墨のやうに蒼ざめ、唇には小さな唾が、玉になつて現れては消えた。彼は息を切らしてゐた。醫師はびつくりして飛び上がらうとしたが、すぐに事の真相を察して、眞面目になつた。

「氣をお落ちつけないさい、氣をお落ちつけないさい！」と彼は醫者らしい諭すやうな調子で言つた。

ミハイロフは顔ぢうひく／＼痙攣させ、奇妙に目を引つ吊らせながら、野獸のやうな表情で彼を見つめてゐた。この瞬間の彼は醜く、また哀れであつた。

「さあ、お掛けなさい……氣を靜かに！」威を帯びた、とはいへ落ちついた聲で、醫師はかう言つて立ち上がり、彼の兩肩へ手をかけて、無理に椅子へ坐らせた。

ミハイロフはすぐ靜かになつて、みじめな慫えたやうな目つきで、老醫師を下から見上げた。

「ドクトル、」どうか怒らないでくれと哀願するやうに、小さな聲で彼は呟き始めた。「僕はすつかりへ、と／＼になつて了ひました！」

「いや、まあ／＼……そんな事は何でもないですよ！……そんな事はすぐ濟んで了ひます！」まるで相手を見もしなければ、聞きもしないやうな調子で、醫師はかう言つた。

「まあ、それより、お茶でも注いで上げませう……何よりも落ちついて、氣を強く持つのが肝腎ですよ。それぢや本當に仕様がなない！」

彼は馴れた手つきでコップを皿の中で洗つて、まるで年取

つた女中頭のやうに、肩へ掛けた布巾フキで拭きあげた後、茶をなみく〜とついだ。そして、ジャムを入れた小皿と一緒に、ミハイロフの傍へ押しやりながら、またいつもの自分の席に坐つた。

ミハイロフはぎら／＼光る目で、ぢつとそれを注視してゐた。彼はコップを取り上げようとしたが、すぐにもとへ戻して了つた。

「ドクトル、あなたはあの女をご覽になりましたか？」恐ろしい努力をもつて、彼は小さな聲でかう言つた。彼の顔は歪ゆがんだ。

醫師は無言のまま肩の布巾をはづして、几帳面に疊み始めた。ミハイロフは口を噤つぶんで、まるで催眠術にかゝつたもののやうに、ぢつと彼を眺め續けた。

もつとも、とき／＼彼の目は、あてもなくさ迷ふやうな表情になつた。見受けたところ、彼は頭の中を縦横に荒れ廻る想念を、どうしても一つに纏まとめる事が出来ないらしかつた。それどころか、何を話していゝか、それさへ充分に分からなかつたのかも知れない。

「あゝ、ときに、ドクトル……」奇妙なほど事務的な調子で、彼は訊ねた。「一體あの女は……すぐ溺れたんでせう

か？」

醫師は驚いて彼を眺めた。けれど、ミハイロフはすぐ自分の莫迦モカげた問ひを忘れて、惱ましげな集中した表情で、何やら思ひ出さうと努めるやうに、片手で額をこすつてゐた。まるきり別な事を聞かうと思つたものらしい。

醫師はふと、ある狂人がこれと同じやうな莫迦モカげた問ひを發した後、これと同じやうな手つきをした事を思ひ出した。彼は靜かに首を振つた。

「ねえ、ドクトル……あの女が死んだのは、結句いゝ事なんですすよ。」またミハイロフは言ひ出した。「僕がずつと前から、その事を考へてゐたのです……いや、さうぢやない、その……僕は何だか氣がちがひさうだ……妙に氣まりが悪いくらゐです！」

「茶でもお飲みなさい。」どこまでも落ちつき拂つた調子で、肥満した醫師はかう言ひながら、またもや彼の方へコップを押しやつた。

ミハイロフは素直にそれを両手で取り上げたが、またもとへ返して了つた。しかも、それに氣も付かないらしかつた。

「ドクトル、本當に僕が發狂しかゝつてると思ひますか？」

とつぜん彼は意識的な、落ちついた調子でかう聞いた。「いや、僕は眞面目に言つてるんですよ！ 本當にリーザは死んでいゝ事をしましたよ！」

ドクトルは無言で彼を見つめてゐた。

「何だつてあなたはそんなに僕を見るんです？」急にはつと一瞬間燃え上がつたやうに、いら／＼した調子でミハイロフはかう言つた。「僕は本當の事を言つてるんですよ！ 僕はあんな女なぞ少しも可哀さうぢやありません！」彼はもうすつかり憎々しげな聲で叫んだ。「もつとも、本當に僕は……しかし、それはどちらだつて同じ事だ！ そんな事は恐ろしくも何ともありやしない！……いや、まあ、よろしい……あの女がまだ四十年も生きのびて、誰かのところへ嫁入りするとしませう……なに、相手は悪魔だらうが、世界的天才だらうが、少しも相違はありやしない！……そして、うんと子供を生むとしませう。でなければ、書間學校へ通つて、その後百姓や田舎女を治療するやうになつたとしてもいゝ……それが大した、えらい、興味のある事だと言ふんですか！……なあに、そんな事はたゞもう莫迦げてゐますよ、ドクトル！ もしあの出来事に何か恐ろしい點があるとすれば、それはつまり何も恐ろしい事がない、少しも

同情すべき點がない——といふことなんですよ！ 倦怠と俗悪のほかには、何もないし、またあり得ないのです！

なに、死んだだけです……もし人間がみんな不死の者で、あの女だけが死んだとすれば、そりや或ひは可哀さうで、恐ろしいかも知れないけれど……誰でもみんな死ぬぢやありませんか！……たゞまあ、あの女が少し先に死んで、我々がちよつと後になる、たゞそれだけの事ですよ！……いや、事によつたら、あの女は僕やあなたなどより、千倍も幸福かも知れませんよ！」まるで醫師が議論でも吹き掛けてゐるやうに、いら／＼した調子で、ミハイロフは叫んだ。

けれどもアルノルヂイは、垂れ下がつた唇をもぐ／＼させながら、無言のまゝで聞いてゐた。その肥つてだぶ／＼した顔を見ただけでは、彼がこの事をどう考へてゐるのか、見當がつかなかつた。

ミハイロフは飛び上がつて、部屋の中を歩き出した。

「あの女は少くとも、一時に燃え盡くしたのです。事によつたら、自分を犠牲だと觀念しながら、寧ろいゝ氣持ちで水へ飛び込んだかも知れませんよ！……それに、一たい運命は何のためにあの女を僕に突き合はしたのでせう？……

あの女には別な人間が必要だつたのです、夫とか、父とか……永久の愛とか、まあ、さう言つたやうなものです……ところが、僕は自分を實際と違ふものに見せ掛ける事が出来ない……またそんな必要もありません！」

醫師は返事をしなかつた。

「まあ、假りに僕が下品で放縱な人間としても（何とでもご勝手に名前をつけて下さい）、しかし僕がこんな人間でもつと違つた人間でないからつて、どうも仕方がないぢやありませんか？……何のために僕は自分を改造しなけりやならないんです？ 譯が分からない……誰かが僕をこんな人間に造つてくれたのだから、たとへそれが間違ひだとしても、決してその間違ひを正したいと思はない……一體僕はなんだつて、誰かの失敗した創作を完成するために、自分を強制したり苦しめたりするんです？……第一そんな事は厭だ、それだけのこつてす！ まつびらご免です……僕は一さい完成なんてものを辭退します。現在のまゝで通すのが僕の希望なんです！……どうなと勝手にしやがれだ！……」

醫師のアルノルヂイはちつと彼を見つめたが、また押し黙つてゐた。

「僕はあなたがたのいふ愛が分からない。また分かりたいとも思はない！……僕にやそんなものなんかないのです！……僕に必要なのは女です、たゞ女だけです、たとひ世界ぢうの女が、みんな身投げしたり、首を縊つたりしても、僕は……」

ミハイロフは極度の緊張に息が窒つて、急にぶつりと聲を途切らした。彼はちよつと口を嚙んだ。

アルノルヂイは重々しく吐息をついて、惱ましげに椅子の上で身を動かした。

「ねえ、ドクトル、」ミハイロフはまた言ひ出したが、今度ほもう奇妙に抑へ付けたやうな調子だつた。「僕はひよつとしたら、本當に懺悔をして申し開きをするために、あなたの所へ來たのかも知れません！……結局のところ……これは本當に恐ろしい、穢らしい、卑劣なことかも知れませんが！ 僕には分からない！……僕はリーザが可哀さうなのです……始めてあの知らせを聞いたとき、僕は頭がぐらぐらつとしました！……つい今しがた僕の言つたことは事實です、僕はちやんと知つてゐます。しかし僕は理性で一つの事を知つてゐると同時に、また心では別な事を感じるのです！……現に今かうして色んな事を言つて、論證しては

ゐるものの、しかしもうあの女はゐない、もう二度と見ることは出来ない、あの女はすべての人に辱しめられ、卑しめられて、一人淋しく死んだのだ——かういふ事を思ひ出すと、心臓が縮まるやうな気がします！ 僕はとてもこれを忍ぶことが出来ません！……あれは實に若々しい、ナイーヴな、信じ易い娘で……全く素直に心から愛してゐたので……僕は決してあの女を忘れることが出来ません……何で讀んだのか忘れたが、かういふ事がありましたつけ——何よりも一ばん恐ろしいのは、愕れむべくして愕れまなかつたといふ事を、忽然と自覺しながら、しかも時すでに遅しといつたやうな場合ひです。僕は今でもやはり、これはたゞ何かのいやな夢に過ぎない、といふやうな気がして仕方がない……でも、これは事實なのです、赤裸々な事實なのです！……僕は一人でちつとしてゐられなくなりました、恐ろしくなりました……それで、かうしてあなたの所へ駈けつけた譯わけなんです……あなたに慰めて愕れんで貰はうと思つて！「ミハイロフは惱ましい皮肉を響かせながらかう言ひ足した。

「ときに、ドクトル、リーザが身投げしたつて事を、誰から聞いたと思ひます？」とつぜん彼はかう聞いた。

アルノルデイは不審さうに彼を見上げた。

「ネルリからなんです！……あの女は第一番にこの出来事を知らせるために、わざ／＼僕のところへやつて来たのです！……えゝ本當にさう言つたんですよ、出来事だつて！……それはつまり、僕に對する復讐だつたのです、ドクトル！ しかも公平に見て、うまい復讐と言はなければなりません！ 彼は氣違ひなんですよ、ドクトル！ もつとも、われ／＼はみんな氣違ひです。われ／＼の心は混沌こん沌です、悪魔の謎なぞです！……實はねえ、僕はこゝへ走つて来る途中、始終クラウゼの事はかり考へてゐましたよ……なぜクラウゼの事など考へるんでせう？……リーザのことも、ネルリの事も、まるで考へないんですからね……あなたと、それからクラウゼの事を考へたばかりです！ もつとも、僕はこの頃あの男の事を、のべつ考へてゐるんですがね！」

醫師は首を上げて、何だか妙な目つきで彼を眺めた。ミハイロフは不自然にから／＼と笑つた。

「ドクトル、心配しないで下さい、僕はたうてい自殺しさうもありませんよ！……」醫師の視線に答へるやうに、彼はかう言つた。「僕のやうな人間は自殺なんかしやしません。もつとも、ネルリが歸つた後で、僕はまづ第一番に、

おれはもう自分で自分を片づけなくちやならん、それで一切のもつれを解いて了はなくちやならん、とかう思ひました……そして、ピストルさへ手に取つたのですが、後でそれを抛り出して、逃げて来たのです……もし逃げ出さなかつたら、本當に自殺したかも知れません。いや、しかしそれも怪しい……どうして僕なんかに出来るものですか！……それも別に僕が臆病なせみぢやありません。たゞ自殺をするには、なんと言つても、斷乎たる決心がつかないやならない。ところが、僕は何ひとつ——自分自身さへはつきり見極めが付かないんですからね……僕は結局そんな事が必要なのか、それともまるで不必要なのか、それさへ分からないんです……ところが、クラウゼは分かつてゐました……リーザも知つてゐました……あの女は戀ひをした、ところが、戀ひが彼女を欺いたので、彼女は生きてゐるのが厭になつた！ 實に簡單明瞭です……きつと自殺するには強烈な感情が必要なのでせう。ところが、僕の心中にあるのは、たゞがらくたばかりなんです！ ドクトル、僕の口からこんな事を聞くと、あなたは變な氣がするでせうね？」

醫師は肩を竦めた。

「いや、何も……」と曖昧な調子で呟いた。

「ねえ、ドクトル、よくさういふ瞬間があるもんですよ……人間が長い長いあひだ、生活を續けてゐるうちに、ふとろしを振り返つて見て……思はずぞつとするやうな瞬間がね……實際どんな人間でも、眞面目に自分の生活を振り返つて見たら、徒らに空費した多くの時、忘れられた感情、空しく抛棄せられた精力、自分のやくざなけち臭い行爲——かういふもののために、ぞつとしないではゐられない筈です！……かうして、僕も振り返つて見たのです……前にもとき／＼振り返つて見る事がありました、いつも何かほかの事が邪魔をして、またすつかり掻き廻されたものです……しかし、今度こそはいよ／＼最後の回顧らしい……」

「ミハイロフはやみ間なく早口に話した。見受けたところ、彼は何かある發作に驅られて、思想も言葉も混亂させながら、我とわが身をさいなみ、魂を掻きむしるやうにして、話してゐるらしかつた。

「僕は實際いつもいつも、こんな風の間ぢやなかつたんですよ、ドクトル……以前は僕もまるで別な目で、もの事を見てゐたのです。藝術でも、人類でも、愛でも、何でも

信じてみました！しかし、それはずつと前の事です。實はね、ドクトル、僕の生涯には一つの轉機がありました。やつと十九か二十くらゐの時でした。まだ美術學校で勉強してゐる頃に、醫者が僕を肺病と診斷したのです。で、自分は今もう何箇月かたつたら、死ななければならぬと思ひ込みました……僕は別に驚きもせず、平然として、寧ろ皮肉な態度でこの事實に對しました。たゞ一切が無興味になつたのに、氣がついただけです。例へば、試験までに習作を仕上げなければならぬといふ時でも、なに、試験が済んだら死んで了ふのに、誰がばか／＼しい、そんな事をするものかと思ひました……その當時ある美術保護者の資金で、伊太利觀光團が組織されてゐましたが、僕はやはり行かなかつたです……何のためにそんな所へ行くんだ？もしロームを見たら、死ぬのが樂になるとも言ふのか、と考へましたね……何でもその通りなのです……あるお嬢さんの後をつけ廻した事もあります、すぐやめて了ひました……まあ、かりにあの女が、おれを戀ひしてくれたとしても、それから先はどうなるんだ？……どうせ死ぬんぢやないか！……とかう考へた譯なんです。丁度その時分、僕は始めて人生といふものを考へて、たとへ人間はヘルクスほど丈

夫であつても、實際のところ、皆おれと同じやうな病人なのだ、といふことを悟りました。ある人がこんな事を言つてゐます——病氣の中で一ばん恐ろしいのは生だ、なぜと言つて、百人が百人まで死をもつて終りを告げるからだ……肺病は全快する事もある、ベストや癩病も癒ることがある、けれど生は絶対に不治だ！とかういふのです。これは勿論、月並みな思想だけれど、しかしわれ／＼はそれを一度も、眞面目に考へた事がないんですからね……ちよつと氣の利いた警句としては、よく繰り返されますが、まるで冗談に言つたものやうに、すぐ忘れられて了ふのです……けれど、僕は自分が死にかゝつてる事を知つたから、もう決して冗談どころぢやなかつたのです！まあ、かういふ譯で……それまで藝術といふものは、僕にとつて一生の事業でしたが、そのとき僕はまづこの藝術に疑ひを抱き始めたのです！……今でも覺えてありますが、僕はクラムスコイが死ぬる前に書いたといふ、未完の肖像畫を偶然に見たのです。ところが、この肖像が幾晩も幾晩も、僕を寢させてくれませんでしたよ……いつも、暗闇の中に横になつたまゝ、いろんな事を考へるんです。あのエチニードはまだ完成する暇がある、またあの分も仕上がるかも知れない。



しかしどれか未完のまゝで残るのが出来るに相違ない……もつとも、僕は依然として制作をしてゐたし、畫室へ通つてもゐましたが、以前のやうに神聖視しなくなつて、たゞ當分のあひだ氣を紛らす、といつたやうな態度でした。畫家たちが自分の繪を得意さうにひけらかしたり、大事さうに秘藏したり、時がたつても黒くならない繪具を使はうと苦心してゐるのが僕をかしくもあれば、忌はしくもありました。あるとき、レオナルド・ダヴィンチが自作の『最後の晚餐』に龜裂が生じたのを見、この力作も百年後には滅びるかも知れないと悟つたとき、非常に煩悶したといふ話を讀んで、不思議な氣持ちがしたくらゐです（そのときレオナルドは五十より下ぢやなかつたのですからね）。一たい畫かきといふ者は氣ちがひなのかしらん？ 畫よりも早く自分の方に龜裂が入るのぢやないか！……實にをかしな話しだ！……二十年後に人間ひとり腐るのは何でもなくて、その人の描いた畫が四百年残るべきところを、二百年しか存在を續けないといふ事實が、それほど恐ろしいことなんでしょうかねえ！……何といふ奇怪至極な事だ！……丁度その時分（今でも覺えてゐますが）、ルーヴル博物館の何とかいふ名畫が、偷み出されたことがあります。すると、恐ろしい

騒ぎが始まりました。新聞は叫喚の聲を上げるし、議會は質問をするし、中には悲しみのあまり、嘘でなく本當に氣のちがつた人も幾たりかあつたくらゐです！……ところが、僕はその時もやはり滑稽なばかりでした。僕はかう思ひましたね。かりに悪魔がありとあらゆる繪や、書物や、彫刻を盗んだとしたら、その時はどうだらう？ 『永遠の』藝術と騒ぎ立てる人間どもは、どんな間拔けな面をするのだらう？ だつて、これは全く滑稽ですものね！ まるで莫迦が彩色をした袋でも貰つたやうに、有頂天になつて擔ぎ廻つてゐたものが、急にころりと痕かたもなくなつて了ふ！……まるで始めからなかつたもののやうに、綺麗さつぱりなくなつて了ふ。これがあなた方の永遠の藝術なんですよ！……何よりも恐ろしいのは、つまり實際その通りだといふ事なんです——ほんの少しづつ、そつと、目に見えないやうに、時といふやつが繪も、建築も、文明も、大陸も、遊星も、一つづつ盗んで行つてゐるんです！」

ミハイロフはひん曲がつたやうな薄笑ひを洩らした。

「そのとき、『時の盗み』といふこの思想が、かくべつ烈しいショックを與へました。僕は感受性の鋭い子供でしたから、まだ皆がするやうに思想上の歸納を實生活と分離する

すべを知らなかつたのです。で、かういふ事をはつきりと心に思ひ浮かべたとき、何とも言はれない魂の空虚と、一切の理想の破滅を感じたので、遂に自殺を圖るまでになりました。しかし僕があまりに若くつて、内部の生活本能があまりに強かつたので、自殺する代りに、生の肯定を生そのものに求め始めました。」

「ハイロフは考へ込んで、暫くちつと立つてゐた。彼の顔はやゝ落ちついたが、しかし哀愁の色は次第に深くなつた。見受けたところ、烈しい感情の勃發は次第に収まつて、静かな惱みに代はるらしかつた。

「さうです。」ぐつたりしたやうに、卓の傍に腰をおろしながら、彼は又言ひ出した。「僕は快樂を求め始めたのです——なぜと言つて、たゞ快樂のみが自分自身の目的をもつてゐるからです。そして勿論、女の中にそれを具體化したのです。なぜと言つて結局、情欲の快樂が何より力強いものですからね……」

アルノルヂイは頭を垂れて聞いてゐた。

「始めは愛を求めました、本當の、大きな、永遠の愛を求めました……ところで、僕は一つ面白い觀察をしました。ほかでもありません、當節では『永遠の愛』といふ言葉が、

誰の耳にも滑稽に聞こえるやうになつた。だから、みな一種冷笑的な調子でこの言葉を發音して、それによつて、自分は『永遠の愛』を信じてゐない、といふ事を裏書きしようとしてゐます。が、それにも拘らず誰一人として、自分は期限つきで戀ひをしてゐると、きつぱり言ひ切るものはありません……いや、言ふものもあるけれど、あまり短い期限を指定するものではありません。だから、何と言つても、その愛は永久に終らないやうな印象が残る。従つて、戀ひ人同志がどんなに約束して置いても、一方が冷めると、いま一方は心から欺かれたやうに感じるのです！ あなたも氣がついたでせう？」

醫師は疲れたやうに頷いた。

「ね、さうでせう……僕もやはり冷笑の調子で、この言葉を發音しましたが、本當はつまり、永遠の愛を求めてゐたのです。たとへ永遠の愛でないまでも、やはり大きな、眞面目な愛を求めてゐた！……これは實に驚くべき事です。だつて、もし永遠でないとしたら、もうどんな愛だつて同じ事ぢやありませんか！ 結局、感情の力とか、眞面目さとかいふものは、つまり時によつて測量される——といふ事になります。なぜと言つて、三日間だけでも、ほんの一瞬間

だけでも、ぜん／＼不眞面目に浮は氣をすることが出来るからです。また時とすると、一瞬間の印象のために、火の中へでも飛び込み兼ねないくらの夢中になりながら、その翌日は自分ながら滑稽になる事もありますからね！しかし、僕は今そのことを言つてるんぢやない……その時分、僕は本當に愛を信じてみました。だから、それを發見したと感じたときは、それこそ何とも言へない幸福でした！今でも思ひ出すと、心臓が縮まるやうな、烈しい憂愁を感じます！僕らはお互によく理解し合ひ感じ合つて、ふたり一緒にさへゐればもうこれ以上なにもいらぬ、といふやうな氣がするほど嬉しかつた。けれど、たうとう關係がついて了ひました。しかもさうなるまへ長い間、二人はもうその事よりほか、殆ど何一つ話もしなければ、考へもしないくらゐでした……二人のあひゞきは結局いつも／＼、僕が要求し女が防ぐ、といふだけの事で盡きておました！もうそれが目的となつて、しつこく腦の裏にこびり付き、心を焼くやうに悩ますのでした！僕は今でも覚えてゐますが、さういふ事を考へるのは冒瀆はぶとくのやうな氣がして、僕は自分で自分を輕蔑したけれど、どうも仕方がありませんでした！……精神的な會話も、未來の計畫も、空想も、藝

術も、その他すべてのものが、後ろの方へ追ひ込められて了つたのです！……で、やつとそれが成立したとき、今でも覚えてゐますが、僕は朝早く海岸の並木街へ出ました……それは何とも言へない靜かな、明るい、神々しい朝で、海は果てしなく連なり、透明な星は朝の幸福に慄おそへながら、その上で輝いてゐるのです……呼吸は何とも言へないほどかる／＼として悦ばしく、まるで空氣や何かではなく、朝の光りを胸の中へ吸ひ込んでゐるやうな氣持ちでした。僕は悦ばしさのあまりに、おれは生きて感じてゐる、とかう叫び出さなればかりでした！そして、かういふ幸福を與へてくれた女に對して、非常な感激と感謝に充ちた愛情を覺え、まるで聖女でもあるやうにその前に跪ひざまづいて、着物の裾に接吻さへし兼ねないくらゐでした！僕は自分の愛が朝の光りのやうに、あたりに充ち溢れてゐるやうな氣がしました……そして戀ひ人といつたら、さながら淡い明け方の星の光線で織り出されたやうに、あくまで純潔無垢じゆんけつむこに感じられたのです……ところが、僕はまだ體ぢう汗ぐつしよりで……手足はたつた今經驗した興奮に慄おそへてゐました……然しその時、さういふ事には少しも氣がつかなかつたのです……たゞ幸福感があるのみで、それが何に基づくの

かといふことは、考へもしませんでした。これがたゞ肉體的な輕快感に過ぎないと考へるのは、あまりに奇怪な恐ろしい事だつたのです。」

醫師は耳を傾けながら、ほんの心持ち頷いてゐた。これは彼の目の前を清らかな朝の追憶が流れるのか、それともたゞ年寄つたために、頭が慄へるのか、何とも想像がつかなかつた。

「さういふ譯で、僕ら二人は同棲することになりましたが、一年後に別かれて了ひました！ しかもまるで、敵同志のやうな別かれ方でした！ 後になつて見ると、あの明け方の幸福感、永久に二度と繰り返されることのない、たゞの一刹那に過ぎなかつたのです。間もなく異性の愛撫もまるで家庭生活に缺くべからざる一つの快樂が、一種の退屈さましといつた具合ひに、珍らしからぬ習慣となつて了ひました！……實際、毎日々々繰り返される出来ごとを祝ふために、いち／＼外へ駈け出して、自然を呼び招く譯に行きませんからね！ 情慾は退屈な室内用品と化し、もう歡喜も何もなくなくなりました。だからいつも心の奥には漠とした、けれども鋭い憂愁が潜んでゐました……僕等は勿論、互に愛し合ひもし憐れみ合ひもし、喜怒哀樂も、共にしました

が、しかし二人はもう戀ひ人同志ではなくて、單によき友達に過ぎませんでした。かういふ譯で、僕は美しい女を見る度にまるで何のためやら好きこのんで、永久の情慾の祭日を辭退したやうに、淋しい心持ちになつて來るのでした……たぶん女の方でも同じ事を感じたのでせう、だん／＼癩癩を起こしたり、嫉妬したり、つまらながつたりし始めました……僕らはおたがひ同志退屈で氣まづくなり、二人の間に誰か第三者が交じるやうな時には、心ひそかに悦んだものです。そして了ひには喧嘩をしたり、互に苦しめたりするやうになりました！ で、たうとう別かれる事になりました……それは恐ろしい、苦しい破裂でした……今でも覚えてゐますが、始めは夜中に目が醒めたときなど、あれはもうゐないのだ、あれは今どこか遠い所でほかの人達と一緒にゐるのだ、もうこれからは二度とあれの生活に關與できないのだ、とかういふ風に感じて、ぞつとするほど恐ろしかつたのです！ 僕は何だか台點が行かないやうな氣持ちさへしました。もしあんな偉大な感情が消滅するとしたら、一たい何か消滅しないものがあるだらうか？ 一たい何が重要なものだらう、何が本當のものだらう？……けれど半年もたつ中に、僕はその女がゐなくても、依然たる

暮らしを續けて、前と同じやうに平氣で寝たり、食つたり、ほかの女を追ひ廻したり出来ることを悟りました……まるでそんな女なんか、始めからあなかつたやうな具合合ひなんです！……その中にすつかり忘れて了ひました！……そのとき僕は經驗の迅速な轉換と強烈味ばかり求めながら、女から女へと移り始めました。それは實に華々しい時代でした。幾年かの間、僕はこんな風に暮らして、自分に必要なものを發見したつもりでゐました。が、それは虚偽だつたのです！……忽然として同じやうな漠とした、けれど耐へ難い憂愁と、同じやうな空虚感と、無要感が湧き出すのに氣がつかました！……たゞもうつまらなくなつたのです！女の傍へ寄つても、まるで歡喜の念はなく、肉體を領有する時にも悦びはなく、棄てる時にも別に興奮を感じない、それに氣がついたので……始めの中は、新しい戀が二三箇月くらゐ、僕の心を牽きつけてゐましたが、やがてそれが二三週間になり、二三日になり、遂には——たゞ領有の瞬間までになつて了ひました！……もう女の肉體を得るまでの忍耐も、またそれを得たいといふ希望もなくなつて、抵抗したり、ずる／＼長びかしたりすると、もういら／＼して來るのです……僕はどうかすると、純潔無垢の優しい少

女に向かつて、出来るだけ亂暴に露骨な調子で、『さあ、どうです……何と言つたつて……どうせお了ひはこれなんですよ！』と嘯鳴りつきたい氣がする事があります。さういふ時の忌々しさは、とても口で現す事が出来ないくらゐです……僕は極めて微細な點まで、分かつてゐます。相手がどんな女であらうと、どういふ風に始まつて、どういふ風に終るか、すべて最初から見えてゐます。何十人といふ女から同じ言葉を聞き、同じ愛撫を見せられました……そして倦怠と、憂愁と、嫌惡の情のほか、何一つ胸に残つちやゐない！……僕は自分の魂を荒らして了つたのです、感情を小出しにして了つたのです……」

「ミハイロフはまた立ち上がつて、部屋の中を歩き始めた。「ねえ、ドクトル、愛などと昔話してみたいな物を考へ出すなんて、實に非人間的な、ばか／＼しい、下劣なことぢやありませんか？……みんなが、愛の描寫を實に見事にやつてゐるけれど、それはたゞ戀人同志が肉體を交し合へる瞬間までです……それから先はどうなんぞせう？……それから先はフリモンとパウキダです、アフナーシイ・イワーノフとプリヘーリヤ・イワーノフナです、『戰爭と平和』のナターシャ・ロストローワが見せる、緑色の代りに黄色いし、

のついた襦袢です！……ところで、一方には自由な性慾の快樂がありますが、これは變化が多ければ多いほど、ますます淫賣宿の穢らはしき、冷たさが混じるのです！……」

「ハイロフはちか／＼と醫師の傍へ近寄つて、ぎら／＼光る目でその顔を見ながら言つた。

「だめです、ドクトル、もし信じる事が出来なければ、もし何かのために生きることが出来なければ、その時はとても生きて行くことが出来ません！……情慾——これもやはり空な昔話しです。快樂なんかで魂を充たすことは出来ません！……残る所はナウ・モフ式の氣違ひめいた思想を信じるか、それともクラウゼのやうに一切を拒むかどちらか二つに一つです！……あの男がマッチの話をしたのを覚えてみますか？……妙な人間でしたね！……僕はあの男が巧妙なのか莫迦なのか、それさへ分らないくらゐです。」

突然ミハイロフは、思ひがけない憂愁の發作に驅られて我とわが言葉を遮つた。

「ねえ、ドクトル、聞かして下さい、一體なんのために生きてるんでせう？」

「知りません……」

「しかし、あなた自身は何のために生きてるんです？」殆

ど憎惡を聲に響かせながら、ミハイロフは訊ねた。

「わたしですかね？」と醫師は驚いたやうに問ひ返した。

「わたしはたゞ疲れたんですよ……」

「何ですつて？」

「疲れましたよ。」と醫師のアルノルヂイは言つた。この姿ひだ老人のほやけたやうな聲には、本當に心臓の底まで滲み込んだ、深い深い疲勞が響いたので、ミハイロフは不意に一切を悟つて了つた。

さうだ、それはその通りなのだ……人間は極度まで疲勞し盡くした結果、かへつて休息などといふ事を考へないで、どん／＼先へ先へと歩いて行つて、遂には力つきてそこに倒れたなり、もう再び起き上がらなくなる、さういふ事はあるものだ！……

ミハイロフは醫師のだぶ／＼とした、何の表情もない顔に何か讀み取らうとするやうに、ぎら／＼と光る目でちつと彼を見つめた。

「さうなんですよ……」と彼は言つて、そのままぼつりと言葉を切つて了つた。

丁度その時だしぬけに、サモワールがごと／＼とこつと言つて、しうと鳴り出したかと思ふと、またそのまま止んで

了つた。

「ねえ、ドクトル」魂の底の何ものかに耳を澄ますやうな様子で、ミハイロフはまた言ひ出した。「なるほど、あなたは疲れたでせう、それは僕にも分かります。しかし、僕は疲れなどしませんからね！ 僕の内部は海のやうに荒れ狂つて、魂は不斷にをのゝいてゐるのです。僕は世界ぢやを搦んで引つくり返すことさへ出来さうに思はれるのですが、それと同時に僕は生きて行くことが出来ないのです！ これは空な麗句ぢやありません、ドクトル。僕は本當に自分の足下に地盤がなくなつて、行く手に何一つないのを感じてるんです！……僕は昨日なにかあつたつて、またあす何が起ころうと風馬牛です！ 僕は生きて行くことが出来ません。が、それかと言つて、死ぬることも出来ないのです！ 僕は毎日自分で自分に向いて、もう澤山だ、おれはたとへ死んで行つても、何ひとつ失つて惜しいと思ふやうなものはありませんかと言つてゐるんですが……しかし、まあ假りにあなたでもない、あなたや、この椅子や、太陽を見るのも今日がお了ひだ——かう考へると、何とも言はれない淋しい氣持ちがして、僕は恐ろしさのあまり目を閉ぢて、一般に死といふものが存在してゐる、といふ事さへ忘れよ

うと努力するんです！……僕は誰一人可哀さうだなどと思やしませんよ、ドクトル。僕はリーザが死なうと、クラウゼが自殺しようとして、戦争で何千人といふ人が殺されようと、きのふ誰かが絞り首にならうと、そんな事は平氣の平左です。しかし、もし誰か僕の目の前で齒痛でも起こさうものなら、僕は一緒に轉つて痛がるでせう！……あゝ、僕はどこかその邊の社會民主黨なぞといふ連中が、羨ましくて堪らないですよ。あの連中は自分のプログラムを信じ切つて、自分たちは第四十二世紀に、すべての人が雞肉入りのスープを飲むために、せひ生きなくちやならないと、確信してゐるんですからね！……僕はまた自分の憎惡を信じてゐるナウモフが羨ましい！……僕の魂には何一つないんです！……いいですか、何一つないんですよ！ それどころか、世間の人々が何であらうと、とにかく信じてゐることが出来るのが、僕は不思議でたまらないんです！ で、僕はかう思ふんです、ドクトル……」

「何です？」まるで夢でも見てゐるやうな聲で、醫師のアルノルヂイは言つた。

「僕はね、實際のところ、誰ひとり信仰をもつてゐるものはない、とかう思ふんですよ！……神も、惡魔も、人類も、

美と眞の理想も、何一つ信じてはゐらないのです！　そして誰ひとり人生も愛してゐなければ、自然や人間を愛してもるません……そんなものはみんな終焉に對する恐怖の生み出したものです。死にもの狂ひの、氣違ひめいた臆病の所産です。實際さうでもしなければ、どんな美や眞理をもつて來ても、人間を三日と生きさせるだけの、魅力も持つてやしません。なぜつて、人生はたゞもう面白くないんですものね！……かういふ譯で、ある者は何か別の生活を考へ出すし、またある者は萬人のために生きようと努力するし更にある者は、現在の事實として生に頌歌を唱つてゐます。がその實、これはみんな眞つ黒な陥し穴に對する恐怖に過ぎない。この恐ろしい陥し穴に比較すると實際のところ何の奇もない、寧ろ却つて莫迦げ切つてる太陽でさへも丁度黒い天窓絨の上では硝子玉もダイヤモンドに見えるやうに、光りと美の輝かしい源とか、何とかいふ事になつて了つたのです！……所が、僕は……僕もやはり皆と同じ臆病者です！……自ら欺いたつて何になるもんですか！……」

誰かが重々しく入り口の階段へ駈け昇つて、力任せにどしんと戸を叩き付けた。ミハイロフははつと淵め息をついて、言葉を切つた。醫師のアルノルヂイは頭を上げた。

「誰だ、そこにゐるのは？」とミハイロフは呶鳴つた。と戸ががたんと壁に突き當たつて、體ぢうは、ねだらけになつた。鬚の白つばい兵隊が、眞つ蒼な顔をして、部屋の中へ駈け込んだ。

「先生、どうか至急に來て下さい……大變であります……大尉殿が自殺されました！」

「誰が？」とミハイロフは叫んだ。と、急にトレニョーフの從卒だと氣がついた。

「トレニョーフが？　自殺した？　どうして？」

「剃刀で！」まるで氣ちがひのやうに兵士は答へた。

ミハイロフは奇怪な目つきで彼を見つめた。アルノルヂイは急いで外套を着はじめた。

## 二五

その日もトレニョーフは、將校になつて結婚してから以來、幾百とも知れぬ日々と同じく、絞切り型の生活を始めた。彼はごく早く起きて、がらんとした冷たい食堂で、たつたひとり茶を飲むと、すぐに本部へ出掛けた。そこで色色な話しの間に、ルイスコフの自殺の報を聞いて、それから中隊へ行つた。



兩足を踏ん張つて、煙草を吹かせながら、庭の眞ん中に突つ立つて、暖かさうな威の匂ひのする、つや／＼した馬を引き出す兵士らを眺めたり、曹長を嗷鳴りつけたり、御用商人と談判したりしたが、とき／＼一種の漠とした不安を覚えるのであつた。

ルイスコフの死は別に彼を驚かさなかつた。彼は實際のところ軍服着用の光榮を持たない、官吏だとか教師だとかいふ連中を輕蔑し切つてゐたので、ルイスコフが首を吊つたのは、當然すぎるくらゐに思はれた。もし自分も運命の神にあんな存在を宣告されたら、やはりあれと同じ事をしたに相違ないと彼は感じた。トレニョーフはふだん軍隊勤務の優越を信じてゐたし、それに將校仲間の満ち足りた、高く構へ込んだ陽氣な生活に馴れてゐたので、あのルイスコフのやうに、一生どこかの會計局で、こつ／＼と書類をいぢり廻すべき運命を宣告された人間が、どうして生きてゐられるのか、いつも不思議に感じられるくらゐだつた。

ところが、クラウゼの自殺となると、話しはまるで別だつた……彼は「かうしたやうな哲學」にまるで縁のない、單純な騎兵將校であるからその中から何の結論も引き出しはしなかつたが、この事件はまるで雷の如くトレニョーフを

打つたのである。少尉補の恐ろしい最後に呼び起こされた最初の恐怖感が過ぎ去つたとき、トレニョーフはたゞ良き同僚を失つた事を惜しみ、クラウゼが單にアブノーマルな人間であつたといふ説に、一も二もなく同意したのである。そればかりでなく、自分が最初に死んだ少尉補の奇行を發見して、すぐにそのとき「どうもこれは、いかん。」と思つた事を、一種得意な調子で話したほどである。

トレニョーフもすべての人と同じやうにクラウゼとルイスコフの自殺の間に、ぜん／＼不可解ではあるけれど、疑ふべからざる關係の存する事を感じた。それが何かしら不快な、無氣味な感情を彼の心中にゆり動かしたのである。トレニョーフは、自殺が傳染力をもつてゐるといふ話しを思ひ出して、急に不可思議な恐怖を感じた。よく妻と喧嘩をしたとき、自分で自分の類へ彈丸を打ち込みたい、といつたやうな氣がしたのだが、さういふ瞬間がぼんやり記憶に浮かんて來た。かうした瞬間がまた繰り返されるかも知れないといふ想像が、一種内部的な弱さともいつたやうな、厭はしい感じを伴なつて彼の胸にちらと閃いた。何だか自分がしつかり土を踏んで立つてゐないやうな氣がした。それが實に何とも云へぬ厭な心持ちだつたので、トレ

ニョーフは馬の検閲をやめ、曹長に自分で御用商人と話しを附けるやうに命令して、わが家へ向けて歸つて来た。途中、陰鬱な二等大尉が彼を呼び止めた。これはクラウゼ自殺の晩に、自分もよく同じ事を考へると言つた當人である。彼はなぜかこの遭遇が不愉快だつたが、その癖、自分の方からルイスコフの事を言ひ出した。

「さやう、」二等大尉は洗んだ調子でかう言つた。「世間には、自分でも氣の付かない人が多いけれど、人間てものは随分危かしい足つきで人生に立つてるんですよ。だから時とすると、ほんのちよつとした衝動を受けただけで、何もかも眞つ逆さまに、けし飛んで了ふ事があります……世間では、ナウーモフがクラウゼに影響を與へるなんて事はない、などと言つてるけれど、わたしは『ある』と信じてをりますよ!……かういふ問題になるとね、ちよつと一言うまい拍子に口を挟むとか、それとも適當な瞬間にピストルが目に入るとかすれば……どんな陽氣な人間でも知らず知らず、どんとやりますから!」

トレニョーフは先の方へ馬を進めた。しかしこの「ふと目に入つたピストル」といふ一句が、病的に脳髓へ滲み込んだのは、彼自身も驚くほどであつた。この一句が途中たえ

ず頭の中を廻轉して、そのために自分自身の不安定さ、内部の弱々しさ、不思議な危惧——さうした感じが一そう明瞭になつたのである。

食事の間に彼は妻に向いて、ルイスコフの話をした。けれど、妻はもうその話しを知つてゐたので、會計官吏の死に對しては、極めて冷淡な態度を見せた。會話は妙にちぐはぐになつたので、トレニョーフはやはり漠とした不快を心に抱きながら、食後ねむりに就いた。

かなり晩くなつてから、彼はもうすつかり落ちついた、健康な氣分で、充分ねむりと休息の足りた肉體に、ものういやうな甘い感觸を覺えながら、目を醒ました。

まだ床の中に身を横たへながら、彼は食堂の朗かな話し聲と、茶器のがちや／＼鳴る音を聞きつけた。細い光線の筋が、びつしやり閉まつてゐない戸の隙間から落ちて、暗い暖かな部屋に一種特別な、ぬぐもちのよい感じを添へてゐた。

トレニョーフは起きたくなかつた。彼は筋肉の一本々々に、ものうさを誘ふ柔かい寢床の肌觸りを感じながら、のびをしたり欠伸をしたりした。と、食堂の高い笑ひ聲が彼を奮起させた。彼は決然と愉快さうに飛び上がつて、着換へをし、冷たい水で顔を洗ひ、刷毛で頭を掻きつけた後、

洗面と睡眠のためにやゝ赤らんだ、すがすがしい顔つきをして、きりつと引き締まつた體ぜんたいから、オデコロンの匂ひを發散させながら、食堂へ出て行つた。

妻はサモワールの前に坐つて、肥えた露はな手を高く上げながら、銀の袴をつけた彼の大きなコップに、濃い茶を注いでゐた。彼女は寢室で水のばちや、くゝいふ音を聞いて、夫がもう起きた事を察したのである。卓の向かうの端にはちよつと器量のいゝ、はでな身なりをした、小柄な婦人が坐つてゐて（それは第五中隊長の細君だつた）、通りのいゝ大きな聲で何やら話してゐた。

トレニョーフは、かなり尻輕の評判の高いこの婦人の後を、一時ちよつと追ひ廻したこともあつた。で、その姿を見ると、彼は一そう元氣ついて、いかにも敏活な華々しい將校のやうな心持ちになつた。ちよつと通りすがりに、妻の肥えたあらはな手の肘に接吻して（彼女はわざと急須を持つたまゝその手を空中に支へてゐた）、トレニョーフは客の手に軽く唇を觸れ、いつもの自分の席に腰をおろした。彼は全くこのうへない上々の機嫌になつてゐたので、自分の好きな濃く熱い茶を、かくべつ満足さうに手もとへ引き寄せた。

「あなたご存じ、大變な事が持ち上がったのよ。」と妻は快活な調子で言つた。

「何が？」

「あなたリーザ・トレグーローワを知つて？」

「そりや知つてるさ……」茶を一口のみ下しながら、トレニョーフはげんきさうに言つた。房々した薄色の髪と無邪氣な灰色の目をもつた、可愛い顔が彼の眼前を掠めた。

「あの娘が身投げしたんですよ！」この報知で夫の度膽を抜いてやらうといふ、恐ろしい望みに息をつまらせながら、妻は忙しげにかう結んだ。

トレニョーフは合點が行かないやうに、二人の婦人を見較べた。

二人とも活氣ついて、興奮したやうな顔をしてゐた。そして二人とも、この報道がどんな印象を與へるか、見のがすまいと意氣ぐんで、一生懸命に彼の口を見つめてゐた。

トレニョーフは思はずコップを下へ置いた。

「そんな事があつて堪るものか……一體いつ？」機械的に彼はかう訊ねた。

「今日、あなたがやすんでらつしやる間に！」

「そして郊外の方では、どこかの町人が鐵砲自殺をしたん

ですとさ！」同じく嬉しきうないきくした調子で、女客はつけ足した。

トレニーフはぼんやりしたやうに肩を竦めた。

「本當に何のこつたか譯が分からん！……これはもう全く……で、あの例の畫かきは知つてるのかね？」彼はミハイロフの事を思ひ出した。

「さうだらうと思ひますわ！……もう町ぢうこの話して持ち切りなんですもの……と……ところで、あなたご存じ、あの娘はたゞならん體だつたんですつて！」

またもやトレニーフの眼前を、薄色の髪をした、目の明るい顔がちらと掠めた。

「全く可哀さうな娘だ！」と彼は言つた。

「何が可哀さうなんですか？」妻は肩を竦めながら、輕蔑したやうに言ひ返した。「だつて、始めつからどうなるか知つてたんですもの！」

「いや、さうは言つてもない！」

「それに、何だつてあの連中は誰も彼も、ミハイロフの首つ玉にぶら下がるんでせう、譯が分かりませんわ！」と客が言つた。「わたしあんな男大嫌ひ……あんな自惚れの強い『好男子』なんか、義理にも我慢できない！……」

トレニーフは、何でも二年ばかり前、聯隊で野遊をしたとき、この婦人が少し酔つた紛れに、すぐその場で——森の中で、ミハイロフに身を任せたいふ、噂があるのを思ひ出して、少しばつが悪くなつた。

「さう……しかしさうは言ふものの、やつぱりあの娘が可哀さうだ！……大事な命を下らなく棒に振つたんだからなあ！……そりやリスコフなら分かつてる……食ふ事が出来ないんだからな！ またクラウゼは……思想から來た事なんだ！ ところが、あの娘はどうだ？……あんな若い、綺麗な子だつたになあ！」

不快な影が妻の顔を掠めた。

「え、さうなのよ」と彼女は皮肉に言つた。「男の人つたらいつでも綺麗な女が可哀さうなのよ！」

トレニーフは悟つた。たとへ死んだものにもせよ、ほかの女が夫に綺麗だと思はれるのが、妻は妬ましいのである。彼は顔をしかめた。

「なぜ男なんだい？……たゞ人間として可哀さうなだけなのさ！」

「え、え、そりやさうでせうとも！」挑むやうな皮肉を隠さうともせず、妻はわざとらしく相槌を打つた。

女客は狡猾さうにトレニョーフを見つめてゐた。彼女は彼と「芝居うつて」見たくて堪らなかつたので、いつもトレニョーフに向かつて、あなたは奥さんを恐れてゐますねと、ちく／＼針をさすのであつた。

トレニョーフはかつとなつた。

「いや、ほんたうに可哀さうなのだ！」彼は不満げに言つた。

「ええ、さうよ……だから、わたしも同様と言つてるんぢやありませんか！」いよ／＼冷笑的に妻はまた相槌を打つた。

トレニョーフは顔まで少し赤くして、話題を變へようと努力した。

「これは何だか知らんが、恐ろしい事だ！ 全く何かの傳染病だ！……今いたるところに自殺が流行すると、新聞でも書き立ててるが……僕に言はせれば、本當に何とか處置を講じなくちやいかんよ……」

「ねえ、あなたご存じですか？」と女客が遮つた。「何でもナウーモフが自殺俱樂部を拵へたさうでしてね、まだ十八人の人が自殺しなければならぬんですつて。さうすれば、始めてこの騒ぎもお了ひになるつて事ですわ！ いかゞで

す、面白い人ですの、そのナウーモフつていふのは？」

「人間としてですか、男としてですか？」ちよつと一瞬間ふざけた調子に落ちながら、トレニョーフは訊ねた。小柄な婦人は罪つくりらしい頭をうしろへ反らせ、まるで絲で縛つたやうに、むつちりした頸をトレニョーフに見せながら、朗らかな聲でから／＼と笑つた。

「ぢや、男としてでもよござんすわ！」

「い、いや、あまり大して！……しかし、たいへん賢い男ですよ！」意味ありげな顔をしながら、トレニョーフはかう言つた。

「わたし是非その人とローマンスを拵へますわ！」小柄な婦人はから／＼と笑つた。「自殺俱樂部！ 面白いわね！……きつと恐ろしい人でせうね？」

「と言つて、つまり、面白いの言ひ間違ひぢやないんですか？」とトレニョーフは意味ありげに駄洒落を言つた。

可愛い女客は指を一本立てて、ずるい嚇かすやうな眞似をしながら、わざとらしく口を尖らせた。

「まあ、まあ、まあ！……」

トレニョーフは、妻のゐる前であまり調子に乗りすぎたたと、不意に氣がついたので、眞面目な顔をしながらかう言

つた。

「ですが、冗談はさて置いて……ナウイモフがこの事件に深い關係があるのは、疑ひもない事實です。勿論、自殺俱樂部なんてものがある筈はない、それは莫迦げた噂ですが、クラウゼに及ぼした彼の影響は、決して……」

「でも世間の噂では、あなたもこの俱樂部に關係してらつしやるさうですわ！」と女客は笑つた。

「莫迦々々しい!……」

「この人はね、主に酔ひどれ騒ぎの方に關係してゐるんですの!」と妻は言つた。彼女は女客の媚態と夫の遊戯的態度に、いら／＼してゐたのである。

トレニョーフはむつとしたが、しひて笑ひに紛らせようとした。

「何も立派な仲間と一緒に、一口やつてならんといふ法はないからね!」

「ずるぶん立派なお仲間ですこと!」と妻は皮肉に言つた。

「いや、どうして!……みんな面白い連中だよ……アルプゾフは豪放な性格だし、ミハイロフはなんと言つても才能のある藝術家だし、チージュは大学生……ナウイモフは……とにかく、あの連中と一緒にゐると面白いよ!」

「えゝ、えゝ、」と妻は片手を振つた。「あなたは誰であらうと一緒に飲んでさへゐれば、みんな面白い人にしてさふんですわ……しかも、十杯くらゐ、盃が重なるとなほ更ね!……あなたの好きなナウイモフなんか、わたしに言はせれば、たゞの悪黨ですわ、えゝ、それつきりよ!」

「なぜ悪黨なんだね?」

「だつて、あんな事を宣傳するくらゐなら、他人を突き落とすやうな眞似をしないで、まづ自分から自殺するのが本當ぢやありませんか!」

トレニョーフはちよつと間違つた。彼自身もさういふ氣がしたのである。けれど、それでもやはり言ひ争つた。

「お前は妙な女だね、カーチャ! 一人人間の頭に何かある思想が浮かんた以上、そのものは義務として……」

「わたしさう思ふのよ! だつてさうでなかつたら、まるでお話しにならないぢやありませんか!……そんな事は卑怯ですよ!……だつてクラウゼは自殺したのに、あの人は平氣の平左で生きてるぢやありませんか! わたしあの人と知り合ひでなくて残念だわ。さうだつたら面と向かつて言つてやるのに……卑怯ものつて!」

「これは妙だ! だつてあの男は何も眞正面から、みんな

自殺しなけりやならないと、言つてる譯ぢやないんだけ。そんな事はめい／＼の勝手だよ！……あの男は人生せんたいの事を言つてるんだ。ところで、人生が無意味だといふ事は、僕もぜん／＼あの男と同感だ！」

「それは前から？」自分でもなぜか分からずに、だん／＼胸をいら立たせながら、妻は嘲るやうにかう言つた。

「いつも同感だつたよ！……それによくとつくり考へて見ると、同意せざるを得ないぢやないか……ちよつと自分の生活を振り返つて見たゞけでも分かる。一たい本當に何かあるのだ？……いつもいつも一つ事ばかりだ……教練、進級、兵隊……毎日あけても暮れてもこれなんだからな！……」

「でも、まんざら兵隊ばかりでもないぢやありませんか？」夫婦の争ひにだん／＼強く響きはじめた、いら立たしげな調子を、さも満足さうに聞き澄ましながら、女客は笑ひ出した。「あなたには奥さんも、お子さんもおありになるぢやありませんか……」

「ふむ、女房や子供がなんですよ！」妻子なしの生活は想像きできない癖に、トレニョーフは喧嘩に夢中になつてかう言ひ返した。實際この瞬間、そんなものなど少しも面白くない、つまらない事に感じられた。「女房や子供ばかりで、生

活を満たす譯に行かないぢやありませんか！……」

「そりやさうでせうとも！」と妻は憎々しげに口を入れた。トレニョーフは我に返つた。

「僕は何も文字通りの意味で言つてるんぢやないよ……一般的な話しのさ……みんなたゞ死ぬために生きてるんぢやないか。さうとすれば、一體なんのために生きるんだ？」  
「それぢや、生きてるのをおよしなさい！」もうすつかり自省心をなくして、妻はかう答へた。

夫の一語々々が彼女の心を焼くやうな氣がした。自分は一生をこの人に捧げて、つひぞ愚痴らしい事も言はないのに、それだのにこの人は！

「おい、カーチャ、」トレニョーフは途方に暮れたやうに、言葉尻を引いた。「そんなに言ひ合つてちやだめだよ！」

「だから、言ひ合ふのはおよしなさいよ、ご遠慮なく！」  
「お前はなんだか怒つてるやうだね？」トレニョーフは、わざとらしく微笑した。

「あなたに？」と妻は齒の間から押し出すやうに聞いた。  
「その目は惱ましいほどの憎悪をもつて彼を眺めた。いよ／＼本當の喧嘩になりかゝつたのを見て、女客は暇を告げた。」

「あなたはあんな恐ろしい事を仰しやるんですもの、」と彼女はトレニョーフに挨拶しながら言つた。「わたしもこれからはあなたを恐れますわ。」

「でも、僕とのローマンズはやはり始めますかね？」もう争ひは避けられないのを感じて、惱ましい不安を覺えたトレニョーフは、一生懸命に前と同じ落ちつき拂つた、ふざけた態度をとらうと努めながら、かう問ひかけたのである。

女客は思はず妻を振りかへつて見た。が、すぐに氣がついて、指で相手を嚇す眞似をしながら、から／＼と笑ひ出した。けれど、トレニョーフは妻が客の目色を察して、顔を引つつらせながら、眞つ青になつたのを見てとつた。

女客が控へ室外套を着てゐる間、二人の女は何かと言談を交はしながら、袴の型のことや、新しい裁ち方の話しなどしてゐた。けれど、トレニョーフの耳には、もうなんにも入らなかつた。妻が何ものも認めぬやうな目つきで、彼の顔を一瞥した時、その乾ききつたやうな複雑の表情によつて、争ひはもう始められたから、どうしてもやめることは出来ない、かういふ意味を讀みとつたのである。

「またか」と彼は惱ましげに考へた。「一體おれがどんな事を言つたんだらう？ あゝ、いつになつたら、こんな事

がお了ひになるのかなあ？」

彼は何ごともなかつたやうな振りをして、妻の衣裳道樂を冷やかさうと試みたが、彼女は氣がつかないやうな顔をして、さものん氣さうに客とお喋りをつゞけてゐた。トレニョーフは話しの腰を折られた。そして女客の嘲るやうな同情の目に氣がつくと、自分が耐へがたい屈辱を受けた、不幸な人間のやうに感じられた。

戸がぱたりと閉まつたとき、彼はまた妻に話しかけようと試みた。妻を喜ばすために、わざと女客のことで皮肉を言つたのである。けれど、妻はまた聞こえぬ振りをして、食堂へ引つ返し、本を取り上げて卓の前に腰をおろした。

トレニョーフはいきなり傍へ寄らうと思つたが、そのとき小間使ひが入つて来て、食器を片づけ始めた。トレニョーフは體ぢう慄へるのを感じながら、部屋の中をあちこちし始めた。小間使ひのゐるところで、言ひ譯をするわけにも行かない、それが彼を惱ましたのである。

「今日はいゝ氣持ちにぐつすり寝たよ！」平凡な家常茶飯の言葉に紛らして、譯ひを未然に防がうと努めながら、彼はこんな事を言つた。「お前はどこへも行かなかつたかい、カーチャ？」



妻は両手で頭を支へながら、強情に本から目を放さないで、なんとも返事をしなかつた。トレニョーフにはたゞ彼女の髪と、鼻の先しか見えなかつた。小間使ひがちらと彼の方を見た。トレニョーフは顔を紫色にして、髭を捻りながら、部屋の中を歩きつゞけた。小間使ひはいつまでも際限なくこそ／＼やつてゐた。匙を一本々々丁寧に拭いたり、コップをすゞぎ茶碗の中でくる／＼廻しながら洗つた上、それを順々に明りにすかして見るのであつた。トレニョーフは彼女を擲り殺してやりたい衝動を感じた。コップのがちや／＼いふ響きは、痛いほど彼の神経をいら立たした。やつと小間使ひは食器をすつかり戸棚にしまつて、麵麴の屑を卓かけから拂ひ落とし、椅子の位置を正したのち、部屋を出て行つた。

妻は頭を上げなかつた。

不思議なことに——小間使ひが部屋にゐる間は、たゞ彼女の存在が邪魔になつて、ざつくばらんに妻のそばへ近寄り、簡単に了解を得ることが出来ないやうに思はれたが、小間使ひが出て行つた時、妻の不自然に緊張した姿勢や、うつ向けた顔や、卓かけに肘つきした、ばら色のあらはな手を一目みると、トレニョーフはぐたつと氣落ちがしたやう

に感じられて、體までが弱々しく萎えて來た。そしてそばへ寄る代りに、無言のまゝ隅から隅へと歩きつゞけた。

「カーチヤ、お聞き！」と彼は腹の中で妻に話しかけた。腹の中だと誠實みもあり、力もあり、品位と正義の意識に満ちてゐた。「お前はくだらない事に腹を立ててゐるのが、自分で分らないのかい？ あんな事はたゞその場の勢ひで言つただけのものぢやないか。おれがあつたやぐざ女とあんな話しつゞりをしたのも、結局お前が自分で悪いんだよ。

おれはお前のやきもちを焼いてゐる事や、おれがお前を憎がつてゐる事を悟られないために、あゝいふ態度を取らざるを得なかつたのだ！」

「いや、それとも……」とトレニョーフは腹の中で自分の言葉を遮つた。「やきもちなんて事はやめた方がいゝかな。怒つて了ふだらう！……簡単にかう言はう——よしておくれ、おれはこんな莫迦げた痴話喧嘩を、もうこれ以上我慢できない！ どうかおれを苦しめないでくれ！……それとも、本當におれがいつか自殺するのを、お前は望んでゐるのかい？ おれがナウモフに同感だなどと言つたのは、お前がおれをさん／＼いじめるので、いつそ額へ彈丸を撃ちこまうかといふ考へが、とき／＼心に浮かんで來るから

だよ！ さあ、やめておくれ、可愛い大切なカーチャ！ 實  
際、おれはお前を愛してるんぢやないか！

妻は頭を上げずに讀みつけてゐるので、とき／＼どう  
かすると、あれは本當に本で夢中になつて、夫の事をまるで  
考へてゐないのではないか、といふ氣がするくらゐだつた。  
けれど、なぜか彼女のそばへ行くのを妨げるものがあつた。  
トレニョーフは彼女が争ひを始めて、容易に和睦しようとし  
ないだらうと、かう直覺した。彼女は思ふ存分夫の油をし  
ぼつて、彼がいたづらをした子供のやうに、みじめな恰好  
で赦しを乞はなければ、承知しないに決まつてゐる。内心  
の矜持が奮然と目醒めて來た。

「なぜおれは妻の不快さうな顔を、平氣で見つてゐられない  
のだらう。なぜおれは妻からちよつとでも優しくされると、  
たちまち侮辱も何も忘れて了ふのだらう。ところが、妻は  
おれと言ひ合ひしながら、まるでおれなんかには用がない  
といつた恰好で、澄まして本など讀んでゐられるのだ！  
おれが苦しんでる事は、あれの目にだつて見えさうなもの  
ぢやないか。まあ、氣にかけないでゐるのが一ばんの上策  
だ。あれの氣まぐれを重大視するのが、あれを悪くする原  
因なのだ！」

トレニョーフはもう今まで、百度くらゐかう考へたのであ  
る。妻のする通りに、自分も知らぬ顔をしながら、妻の  
腹の蟲がをさまるまで勝手に怒らせて置いて、自分は男ら  
しくどつしりした態度をとらう——彼はいつもかう蓄ふの  
であつたが、彼の魂はすつかり妻の愛撫と溶け合つてゐた  
ので、たとへ一時的な決裂でも、忍びきれないのであつた。

彼はもうすんでの事で口を利かうとしたが、思はず唾を  
飲みこんだ。そして苦しんだり、業を煮やしたり、憎んだ  
り、惱ましいほど戀ひしく思つたりしながら、部屋の中を  
歩きつづけた。彼は器械的に煙草を取りだして吸ひはじめ  
た。

魔睡性の煙りを一のみすると、彼はいくらか落ちついた。  
トレニョーフは更に深く吐息をついて、かう考へた。

「なに、無事にをさまるさ！……始めての事ぢやなし！……」  
「どうか煙草を吸はないでください！……わたし頭痛がする  
んですから！」トレニョーフが思はずぎくりとするほど、出  
しぬげに思ひがけなく、妻のかさ／＼した意地わるさうな  
聲が響いた。

トレニョーフは堪忍の緒を切らした。いつもは一日煙草を  
のんでゐても、平氣でそれを我慢してゐる癖に、いざ喧嘩

となると、すぐに――吸はないでください、頭痛がしますと来る！……なんだつてそんなしら／＼しい眞似をするんだ？ 頭痛なんかするものか！ たゞ人を侮辱して、自分の權力を示すために、わざと面あてに言ふのだ！

ちよつと一瞬間、なんといつても妻の氣やすめに、煙草を捨てようかといふ考へが起こつたが、自尊心といら立たしさが勝ちを制した。

「お願ひだから、そんな言ひ草はよしてくれ！ お前なんかどこも痛かありやしない……變な話だ！ おれは煙草が吸ひたいんだよ！ どうしてやめる譯がある？」

妻は返事をしないで、頁をめくつた。

トレニョーフは頭がぼつと濁つて來るのを感じた。

「なんだつてそんな芝居をするんだ？」自分自身でさへ思ひがけなく彼はかう聞いた。

妻はかさ／＼に乾いた憎惡の目を上げたが、また本に顔をうづめた。トレニョーフはもう吸ひたくもなかつたけれど、強情に煙草を放さなかつた。

不意に彼女はさう／＼しく立ち上がつて、本を引つ摺み、彼の方を見ようとせすに、さつさと寢室へ行つて了つた。トレニョーフは部屋のまん中に突つ立つてゐた。腹の中は

煮えくり返るやうだつた。これはもう本當の喧嘩である。しかも、何がもとのだらう？……自分が妻を理解しないのか、それとも妻が自分を理解しないのか？ 彼は器械的に煙草を投げ捨てた。そして、あの時すぐにさうしなかつたのを、つく／＼後悔した。しかし後悔しながらも、かうした永久の屈辱に忿懣を感じた。

寢室の戸が閉まつた。

「いや、これは片をつけなけりやならん！ あれのところへ行つて、まつすぐにさう言はう……」

トレニョーフは急ぎ足に寢室の戸口へ行つて、ドアを突いて見た、戸には鍵がかゝつてゐた。それは頬打ちに等しい効果を彼に與へた。

して見ると、妻は自分が後を追つかけて來るものと確信して、わざとこの新しい屈辱を用意して置いたのだ！

彼は目の前が暗くなつたやうな氣がした。トレニョーフは氣ちがひのやうに、部屋の中をくる／＼歩き廻つた。

「これはなんといふ事だ！……これはなんといふ事だ！」

途方にくれたやうに兩手を擴げながら、彼はかう呟いた。これはもう幾度くり返された事だらう！ もう幾度かれは子供のやうに、この締め切つた戸の前に立たされた事だ

らう！

「あゝ、さうか……」とトレニョーフはしや嘸れた聲で言つた。「よし、いまに見てゐろ！」

彼は狂氣のやうに戸口へ駆けよつて、力まかせに揺すぶつた。妻は聲をかけなかつた。

「カーチ、お明け！　なんといふ莫迦げた事だ？……お明け、でない、おれは……お明け！」召し使ひにすつかり聞かれるといふ事も考へないで、全く自制力を失つたトレニョーフは、かう喚き立てながら、力任せに足で戸を蹴つた。

錠前がかちやりと鳴つた。妻が錠を廻したのである。けれど、戸を明けるだけの親切はなかつた。これはまた新しい侮辱である。トレニョーフは戸を突き飛ばすやうにして、忿怒のために前後を忘れ、眞つ青な顔をして中へ入つた。

妻は化粧臺のそばに立つて、よそ／＼しい冷たい目で彼を眺めた。

「何ご用でいらつしやいます？」と彼女は尋ねた。

「いらつしやいますだつて？……なんだつて錠をかけたんだ？……一體これはなんといふ事だ！……本當に何をさうぶり／＼してゐるんだらう！……恐ろしい事ぢやないか！」  
彼女は冷や／＼かに顔をそむけ、化粧臺の隅に窮屈らしく

本を載せて、またそれを讀みにかゝつた。

「さあ、聞かしてくれ……お前は一體どうしてほしいといふのだ？」とトレニョーフは惱ましげに喚いた。

妻は見むきもせず、ひよいと肩を疎めた。

トレニョーフはそのまる／＼した柔かい肩や、見事な束髪をちらと眺めた。すると彼女のせんたいが、なんとも言へないほど憎々しく思はれて、力まかせに頭を擲りつけてやりたいほどだつた。

「聞かしてくれ、頼むから！……おれが……何かつまらない事を言つたつて……それがどうしたといふんだ……なぜお前は黙つてゐるんだ、畜生！」とトレニョーフは唸るやうに言つて、我とわが頭を引つ擲んだ。

「一體わたしになんの用があるんです？」と彼女は憎々しげに繰り返した。

この問ひに對する無意味な問ひが、トレニョーフの頭を掻き濁したやうな具合ひだつた。彼はちよつとの間、痙攣的に空氣を呑みこむやうな口つきをしながら、目を剥き出して妻を見つめてゐた。彼女は落ちつき拂つたやうな振りをしてまた本を讀みはじめた。

トレニョーフは力まかせにその本を引つたつた……彼

女は慄えたやうに一歩うしろへよろめいて、顔を眞つ青にした。ちよつと一瞬間、なにか合點の行かないやうな、はじめな表情がその顔に閃いた。けれど夫の顔を見ると、彼女はすぐにたけくしくなつて、今までの恐怖の表情が、たちまち野獸的な輕蔑に滿ちた憎惡に入れかはつた。「なんといふ下司な眞似でせう……本を返してください！」と彼女は冷やかに言つた。

トレニョーフは愚かしく書物を胸に抱きしめて、奇妙に目をくるく／＼させてゐた。その恰好はみじめで滑稽だつた。彼は自分でそれを承知してゐたが、もう自制力がなくなつてゐた。

「莫迦！」彼女は齒の間から押し出すやうにかう呟いて、いかにもわざとらしい笑ひを立てながら、戸口の方へ歩き出した。

丁度この瞬間、いつもトレニョーフがあれほど恐れてゐた、かの恐ろしい事が起こつたのである。彼が言葉に盡くせぬ苦しみをしながら、どうか正氣に返つて憐んでくれと、心の底から祈つてゐるとき、彼女の示したこの無慈悲な動作と笑ひ聲は、トレニョーフの意識を狂忿の霧で包んで了つた。

彼は依然として本を抱へ、全身を慄はせ、息を切らしながら、妻が戸のそばへ行くまでちつとしてゐた。けれど、妻が平然とハンドルに手をかけた時、彼はかう悟つた——彼女は子供部屋へ行つて、召し使ひの保護のもとに隠れるだらう、さうすれば自分は何ひとつ言ひ出す勇氣もなく、自分自身の苦しみとさし向かひに取り残されるのだ。かう考へるや否や、トレニョーフは書物を抛り出して、妻に追いつき、抱擁の力で屈伏させるために、力まかせに抱き締めようと思つた。と、不意に惱ましい悪夢のやうな快感を覺えて、半ば無意識に自暴自棄の拳をかため、妻の背中を刺りつけた。

「あつ！」と妻は短い叫びを立てて、空しく両手で虚空を掴みながら、薙ぎ拂はれたやうに後へ倒れた。

その瞬間、いやな霧のやうなものが、トレニョーフの頭から消えて了つた。

「おれは何をしたんだらう？」野獸的な絶望と恐怖ととともに、かういふ考へが彼の頭を掠めた。

本當と思はれないほど變はり果てた、妻の眞つ青な顔と、苦痛のためにむき出された目と、口の代はりに大きく開かれた恐ろしい黒い穴が、彼の目に映つた。

「殺して了つた！」

「カーチャ、カーチャ、赦してくれ！……赦してくれ！」哀憐と、絶望と、羞恥と、愛情の入りまじつた、耐へがたい發作にかられて、倒れかゝる妻の體を支へながら、彼は喚きつ泣きつした。

突然、彼女は猫のやうに全身をくねらせた。その顔にはすつかり人間らしいところがなくなつて、目は丸く曇り、口からは唾が流れ出した……彼女は無言のまゝ、ひたと夫の顔を見つめながら、いきなり兩手でその髪にしがみついた。そして氣うとい憐れな悲鳴とともに、嚙んだり引つ掻いたりして、身をもがきながらも、その手を放さうとしなかつた。

トレニョーフは自分が發狂したやうな氣がした。もう今度こそは取り返しをつかない事が起こつた、もうすべては永久に終りを告げたのだ、とかう悟つた。

今朝ほど感じたのと同じ、奇妙な厭はしい衰弱感が彼をとらへた。しかも、今度は何かしら悪夢のやうな感じだつた。

ふと奇怪な想念が、瞬間的に彼の頭を掠めた。ますます偶然に剃刀が手もとに見つかるに相違ない——かう思つた

その刹那、化粧臺の剃刀が彼の目に入った。

たまぎるやうな叫び聲がまだ彼を追つてゐた。惱ましいほど快い、まるで氣ちがひじみた復讐の感情が、彼を捕らへつくした。さし伸べられた妻の兩手を見、祈るやうな眞んまるい目に湛へられた恐怖の色を見ると、彼はいきなり剃刀を引つ摺んで、もの狂はしく我とわが喉をさつと切つた。

「そらの通りだぞ……この通りだ！」といふ考へが彼の頭に閃いた。と、すぐさま恐ろしいほどはつきりと、自分のした事を了解した。これはもう取り返しがつかない、これは死なのだ！

「カーチャ、おれはそんな氣ぢやなかつたんだ……カーチャ！」と彼は叫んでゐるやうな氣がしたが、實はたゞしや嘎れた音を出したばかりで、小さな飾りや、壺や、小箱を、自分の體と一緒に化粧臺から引きずり落としながら、のろのろと床の上へ倒れた。

なぜ椅子の脚が自分の顔のそばにあるのか、彼はもう合點が行かなかつたが、それでも癡癡的にその脚にしがみついて、起き上がらうとした。そして血にむせ返りながら、兩手で恐ろしい傷口を抑へようとしてゐる妻の目を、名狀

しがたい恐怖をもつて眺めてゐた。

何かしら黄色っぽい眞つ暗な闇が、見る見るうちに彼の目にかぶさつて來た。

「カーチャー」と、やるせない絶望をこめて彼はかう叫んだが、それはもう死の境界のかなたから發せられたもので、生きてゐる人には聞こえなかつた。

## 二六

ミハイロフは雨が降つてゐたか、風が吹いてゐたか、家へかへる途中で誰かとお會つたか、まるで氣がつかかなかつた。たゞ濕氣と、闇と、どこか遙かにちらつくともし火と、耳の中でがう／＼いふ響きと、それらのもの入りまじつた漠然たる印象しか残つてゐなかつた。周圍の一切が恐ろしいカタストロフの中に崩壊して、一人だけ瓦礫を浴びながら、驚愕のあまり生氣を失つて飛び出した人間——彼はさういふ状態になつてゐた。しかし、それはすべて茫漠としてゐて、まるで平和な町で、夜明けの地震に襲はれたやうな具合ひだつた。まだ明るくもならないが暗くもなく、倒れ崩れる周圍のものが、すべて悪夢か幻のやうに思はれる。それは恐ろしかつた。けれど目を明けたまゝ見る悪夢

のやうに、病的な青ざめた恐怖であつた。

彼はアルノルヂイの住まひから自分の家まで、恐ろしく早く駆けつけたに相違ない。ほとんどずつと駆け通しにしたかも知れない。なぜと言つて、苦しやうに息を切らせて、心臓が槌のやうに胸の中を叩いてゐるのを感じたからである。

自分の家の入り口に立つた時、彼はいくらか我に返つた。そして不意に愕然と足をとめた。びつたり締まつてゐない鎧戸のすきから、ぼんやり明りが洩れてゐたからである。誰か彼のところへ來てゐるのだ。

第一に浮かんだのは、ネルリといふ考へであつた。しかも、それが極めて強烈なものだつたので、ミハイロフは思はず一步よろめいて、入り口の階段に足をとめた。幾秒間か、彼は自分の考へを纏めて、女の歸來をもの狂ほしいほど喜んでゐるのか、それとも憎えてゐるのか確かめようと努めた……けれども、心の中は恐ろしい混沌が領してゐたので、ミハイロフは自分で自分を理解することが出来なかつた。彼は戸を開けるのが恐ろしかつた。ネルリが歸つて來たのは、自分の家で自殺するつもりだといふ、まつたく氣ちがひじみた想念さへ、漠然と夢のやうに彼の頭を掠め

たほどである。もし女の死骸を見たら、自分は發狂するに相違ない——こんな事を感じる餘裕すらあつた……と、不意に動物的恐怖を感じながら、氣ちがひのやうに戸を押し開けて、部屋の中へ飛びこんだ。

大きな畫室の中は、ほとんど眞つ暗だつた。たゞ大きな畫布のうしろに明りが見えて、そのラムブのそばに坐つてゐる人の巨大な影が、天井の方へ折れ曲がりながら、ちつと壁の上に映つてゐた。

戸のあく音がすると、影はゆらりと一つ動いて、またちつと凍りついたやうになつた。きつとそこに坐つてゐた人は、ちよつと頭を振り向けただけで、別に立ち上がりなかつたらしい。

ミハイロフはなぜか恐ろしく靜かに、ほとんど爪先だちで部屋を横きつた。そして、暗い畫布の蔭になつた明るい一隅を覗いて見た。そこには裏むきになつた古い繪や、筒型にまいた畫布や、埃つぼい色のものや、その他種々雑多ながらくたが押しこんであつた。そこに腰かけが一脚おかれて、その上にはいつも小さな臺所用のラムブが載つてゐた。このがらくたの中から何か捜し出す必要のある時よりほか、決してつける事のないラムブだつた。

ところが今、いぶつた細いほやのついてゐるこの小ラムブがともつて、その傍にあるもう一つの腰かけに、赤いルバーシカを着た男が坐つてゐた。黒い頭の毛をくしやくしやに亂し、黒い充血したやうな目で、ミハイロフを額ごしに眺めてゐる。

「アルブゾフ」全身に不可解な震撼を感じながら、ミハイロフはかう叫んだ。

アルブゾフは一こともそれに應じないで、身うごきさへしなかつた。たゞきら／＼光る奇妙な目で、見はりでもするやうに、陰鬱に睨みつけけるばかりだつた。

ミハイロフも不意に口を噤んだ。しばらくの間、二人は互にじろ／＼相手を見やつてゐた。この沈黙の中に、日常關係の假面が靜かに落ちて行つた。アルブゾフは漫然とやつて來たのでなく、何か恐ろしい想念を秘めてゐるのだ、かうミハイロフは不意に感じたのである。

丁度この晩ミハイロフが、眞つ黒な空虚に向かつて開かれた戸口の、闕きはに立つてゐる自分自身を發見したとき、思ひがけなくアルブゾフが、剣き出しの、恐ろしい素のまゝの顔をして現れたといふ事は、まるで最後の打撃のやうに思はれた。それからのち彼はもう自分の行爲を、明瞭



に意識することが出来なかつた。それはまるで莫迦げた、恐ろしい悪夢の威力に捕へられたやうであつた。

ちよつと一瞬間、これはまるでアルブゾフと違ふ人間ではないかと、いふやうな氣さへした。彼は幻でも追ひのけるやうに、思はず片手で目をこすつた。

アルブゾフは身じろぎもしなかつた。ラムプに近く、恐ろしく低い腰かけに坐つたまゝ、額ごしに彼をじろく見まはすのであつた。その窮屈らしい、妙にちぢこまつた姿勢には、なにか野獸的のものが感じられた。もしミハイロフがこの瞬間、なにか考慮する力があつたら、彼はアルブゾフが自分を殺しに來たのだと考へたに相違ない。しかし、彼の頭を掠めたのは思想でなくて、その思想の漠とした感觸にすぎなかつた。ミハイロフは不意に青ざめた微笑をもらして、かう聞いた。

「君は前からこゝへ來てるのかい？」

アルブゾフは返事をしないで、依然たる目つきで彼を見つめてゐる。

ミハイロフは一步ふみ出したが、そのとき不意に、まるで毒蛇を目の前に見つけた人のやうに、今までの恐怖の念が、盲目的に慄へ駭く狂憤に移つて行くのを感じた。

「一たい何用なんだ？」と彼は叫んだ。

もしアルブゾフが今度も黙つてゐたら、ミハイロフは彼に飛びかゝつて、喚いたり擲つたりした上に、發狂さへしたかも知れない。けれどアルブゾフは返事をした、

「なんでもないよ……たゞちよつと、君を見に來ただけなのさ！」明かに憎惡に満ちた嘲笑を浮かべて、彼は姿勢も變へずにかう言つた。

「なんだつて？……なぜ？」依然として兩の拳を握りしめ、身を慄はせながら、ミハイロフは聞いた。

「たゞちよつと……もの好きにね！」とアルブゾフはなんともつかぬ返事をして、黒い鼻鬚の下から、見事な白い齒を光らせた。

「畜生、とつとと失せろ！」新しい狂憤の發作に襲はれてかう叫ぶと、ミハイロフはいきなり片手を振り上げた。

彼はその瞬間に直覺した——アルブゾフがやつて來たのは、たゞリーザが身投げしたので、自分を嘲弄するため過ぎないのだ。

「おい、おい、おい！」アルブゾフは威嚇の調子でゆつくりかう言つたが、席を立たうとはしなかつた。

ミハイロフは力なげに頭を垂れた。

アルブーゾフはまた齒をきりりと光らせた。  
「さう、さう、それでいゝ……おれに拳固で来るのは、君の方が損だらうぜ！……まあ掛けた方がよからう。おれは君に話したい事があるんだ……掛けるよ！」と彼は叫んで、妙にしやくるやうな身振りをした。

この叫び聲のために、ミハイロフの暗くなつてゐた心が、急に目ざめたやうな風になつた。彼は後ずさりして目を細め、青ざめた美しい顔をうしろへ反らせながら、さげすむやうな薄笑ひを洩らした。

「呶鳴るなよ！……お互に何を話すことがあるんだ？……いつそ歸つた方がいゝぜ。その方がずつと上分別だらう！」  
「上分別だつて？」毒々しく口を歪めながら、アルブーゾフは鸚鵡がへしに言つた。「そりやだめだよ、君！……今おれは分別どころぢやないんだ！それに、君もいつからそんなに分別がよくなつたんだい？……分別なんて事は、もつと早く考へりやよかつたんだ。今となつちやもう遅い。おりや今さら歸りやしないよ……なんの、巫山戯ちやいけない！」と彼は意地わるく言葉を結んだ。そして、わざと居ずまひを崩すやうな恰好までした。そのためになんだか一散財して、から元氣のついた商人の息子といったやうな、

づう／＼しい下品な感じを帯びて來た。「おれは友だちと胸襟を開いて話しがしたいのだ……今までどうしたものかそれが出来なかつたけれど、しかしおれ達は親友ぢやないか……え、親友だらう？」

ミハイロフは慥蔑したやうに眉を竦めた。

アルブーゾフは返事を待ちながら黙つてゐた。彼の顔は見る見るうちにさつと青ざめて來た。

「おれはもう充分に分別を見せた筈だよ！……もう充分に道を譲つたよ……君もせめて一度くらの譲つていゝ時分だぜ……君だつて何もみんなに道をよけさせるやうな、そんな大したお人柄でもないぢやないか……おれたち凡人どもと、別に變はりのない人間ぢやないか！」

彼の嘲笑は粗暴で平凡だつた。彼はそれを自分でも感じたので、一そう狂憤に落ちて行くのであつた。

「君は喧嘩を賣りに來たのかい？」とミハイロフは蔑むやうに、嫌惡の色さへ浮かべながら言つた。「まあ、それもいいさ……だが、どうしてさう下品な言ひ方をするんだ？どうもあんまり商人風になりすぎるぢやないか！いつそ掴み合ひでも始めたらどうだ！」

「掴み合ひを始めようとしたのはおれぢやなくて、どうや

ら君らしかつたぜ。」とアルブーゾフは注意した。「ところで、商人風といふ事になると、どうも仕様がなからうぢやないか？ おれは實際たゞの商人の息子なんだからな！ どうかそのおつもりで！」

ミハイロフはかうして妙な芝居を打つアルブーゾフを、厭はしげに眺めてゐた。彼は自分の腹の中をさらけ出すやうに、わざとらしく磊落れいらくに碎けて来て、不自然な胸間むねま聲こゑで喋るのであつた。

「まあ、どうでもいゝ！」ミハイロフはかう言ひながら椅子を取り、アルブーゾフの前に腰をおろした。「さあ、言ひたまへ、僕が聞いているから……一たい僕にどうしてほしいと言ふのだ？」

「いや、それは暫く言ふまい！」とアルブーゾフは狡猾らしくから／＼と笑つた。「それにおれは自分の事ぢやない、君の事を話したいと思つてるんだ！」

「どうだつていゝさ！」とミハイロフは肩を竦すくめながら繰り返した。

アルブーゾフは暫くの間ちつと彼の目を見つめてゐた。

「おれは一つ君に聞きたい事がある。」と彼はゆつくり言ひ出した。「君は知つてるのかい——あの君の女が……トレ

グーロフと言つたけ……身投げしたのを？」

「トレニョーフは喉のどを切つた！」相手の言葉が、聞こえないやうに、ミハイロフは出しぬけにかう言つた。アルブーゾフはびつくりして顔を上げた。

「なんだつて？」

「トレニョーフが喉のどを切つたよ。」とミハイロフは大儀たいぎさうに繰り返した。

「こりやどうだ！」偉大な疑惑を聲に響かせながら、アルブーゾフはかう言つて、ひうと口笛を鳴らした。「なんだつてそんなにみんな……こりやはやり病ひが始まつたんだ！……いや、あんなやつ勝手にしろ！ 喉を切つたら切つたでいゝさ……莫迦まかがひとり少なくなつたつて、大した災難ぢやあるまい！ まだ後にうんと残つてるよ！……あんな奴にかゝづらつちやみられない。そりやさうとして、例の君の女が身なげした事さ、知つてるかい？」

ミハイロフはちよつと青くなつた。

「それが君にどうしたんだい？……なんだつて君は……」

アルブーゾフは愉快さうにから／＼と笑ひ出した。

「あゝ、ぢや知つてるんだな！ ならいゝさ……なぜだつて、君、おれがやつて来たのは……」

「僕を苦しめるためかい？」苦い譴責の調子ではあつたが、妙に弱々しい聲で、ミハイロフは尋ねた。

アルプーゾフの目はいよ／＼烈しく光りはじめた。

「苦しめるためだつて？　だが、なぜさうしちやいけなんだ？　おれがどのくらゐ苦しんだか、君も知つてるだらう？」不意に顔をちか／＼と相手に突きつけて、焼きつくすやうな憎悪に満ちた、血ばしつた目を離さずに、彼は低い聲でかう言ひ足した。

ミハイロフは返事をしなかつた。

「どうだい！……それとも、こんなことは君の関係した事ぢやないのか？　人の痛いののは百年でも辛抱できるかね？　……おれは全く不思議で堪らない——よく世間には、こんな事を信じ切つてゐる人があるぢやないか。他人は自分に對して、優しく憐れみぶか／＼なくちやいけなが、自分の方は……だめだよ、君！……騙されるもんか！……さあ、今度こそ君がもがく番だ、おれの方が見物に廻つてやらあ！……それとも君は本當に一生を鼻唄で暮らせると思つてたのかい……面白をかしく暮らすつもりだつたのかい……花を摘み摘み行く目算だつたのかい……おい？……なんだつて黙りこんでるんだ？」

「君なんかにも何も言ふ事はないよ！」

「何も言ふ事がない？　ふむ……あつさりしてゐるな……だが、君は生きた人間を踏んで來てたのを知つてゐるかい？……今はどうやら分かりかけたやうだな！……さうだらうとも！……おい、僕はカルイマーク人の説を聞いた事があるよ。幸福の花は血で育てる譯に行かないと言ふんだ！……ところで、君はそれをやつて見た……どうだね、君の花は開いたかい、え？……」

ミハイロフは黙つてゐた。

「おれがどんな事を言はうと思つてゐるか、君わかつてゐるかい。」心から相手のことを心配してゐるやうな調子で、アルプーゾフはかう言つた。「かうして見たところ、どうやら君もあんまりうまい都合に行かないらしいな！……大分いぢめられたと見えて、すつかり瘦せて了つたぢやないか……まあ、見るがいゝ……ときに、君は葬式に行くかい？　こいつはちよつと面白さうだなあ！」まるで蔭からそつと引つばたくやうに、彼はかう言ひ添へた。

ミハイロフは躍り上がった。

「なんて失敬な！」高く響き渡る聲で彼はかう叫んだ。アルプーゾフは陰鬱な快感をもつて、ぢつと相手を見つ

めた。

「どうだ、すっかり眞つ青になつた！」と彼は獨りごとのやうに言つた。「どうもいけない、君も萬事不如意らしいやうだ！……まあ、坐るがよい、坐るがよい！」

彼は席を立たないで兩手をさし伸べ、らく／＼とミハイロフをもとの席につかせた。

「おれは君が氣の毒だよ。そりやまつたく嘘いつはりのないところだ！ 君は自分で自分がどうなつてゐるのか、まるで分からないやうな風だからな！……なんと言つても、セリョージ、おれは君を愛してゐたんだぜ！」病的な憂愁を聲に響かせながら、彼は思ひがけなくかう言葉を結んだ。

ミハイロフはびくりとした。

「ねえ、ザハール」なんだか恐ろしく早口に、興奮して咳きこみながら、彼はかう言ひ出した。「僕は君に對して罪はないんだよ！……あれはなぜか自然にさうなつたんだ！僕はあるとき非常に苦しんだよ！……」

彼はほとんど祈るやうに手をさし伸べた。

アルブーゾフは頭を垂れて、注意ぶかく聞いてゐた。

「あのとき君は旅行に出て、ネルリが一人だけ残つた……そして、遊びに来てくれと言つた……君も自分で頼んだぢ

やないか……僕にはそんな氣はなかつたんだ 誓つて言ふよ！……あれはたつた一晚で、なんだか思ひがけなく、急に出来て了つたんだ……まるで霧にでも包まれたやうな氣持ぢだつた！……それは何かの呪ひなんだよ！ 君は知らないだらうが、僕はあとでどんなに後悔したか知れない。なんにもなかつた昔に返るためなら、どんな高い價でも拂つたに相違ない！……僕とネルリがあんなに早く別れたのも、つまり、二人のあひだにいつも君が立つてゐたからだ！……僕はそんな事を望んでゐるなかつたのだ！」

「ちよつと風に煽られた拍子かな！一音なしく首を振りながら、アルブーゾフは細い甲高な中音で遮つた。と、不意にその顔がたうてい融和しがたい、絶望的な憎惡に歪んだ。ミハイロフは思はず一歩うしろへよろめいた。

「さあ、なんだつてやめたんだ？ 續けてやれよ！ なかなか面白いや！……」やゝ嘲笑を含んだ、依然として甘つたるい聲で、アルブーゾフは言葉を續けた。「さあ、續けてくれ！……そんな氣はなかつた、望まなかつた、ひとりでにさうなつた、おれが自分で頼んだ……ふむ、それから？……貴様はやくざ者だ、人間の屑だ、それつきりさ！」と彼は氣ちがひのやうに叫んだ。「貴様を殺すくらゐ、虱を潰す

のも同じことだ。ところが貴様は……」とアルブゾフは息を切らしながら、しや嘸れた聲で言つた。「まだお情を願つてる……赦しを乞うてる……卑怯なもの！」

ミハイロフは相手の嘲罵にも威嚇にも、まるで注意を拂はなかつた。たゞさし伸べられた片手が力なく垂れて、惱ましさうな色が顔に浮かんだばかりである。

アルブゾフは我に返つた。

「おい、君！……知らなかつたなんて、そりや嘘だ！……君はわざとあんな事をしたんだ！……つまりおれが自分で君に頼んだから、それでやつたんだ……おれが君の親友だつたからやつたんだ！……単純な道樂はもう飽きるほどし盡くしたので、何かもつと洗練された、心理的なやつをやつて見たくなつたんだ！……丁度こゝに無二の親友の許婚がある。あの男はおれを自分自身のやうに信用して、おれに許婚の事を頼んで行つた……女はあの男を愛してゐるので、おれの方は振り向いても見ない……おれに對してそんな失敬な眞似をすると、どんなものか思ひ知らせるぞ……アルブゾフなんてくだらない商人の息子でさへ、幸福を得ようなどといふ望みを起こしたが、おれは何ものだと思ふ？ 才能のある藝術家で、美男子で、賢い人間だ！……

……何もかもみんなおれのものとなるべきで、お前たちはお餘りで澤山だ！……なんだつて生娘らしく様子ぶつてるんだ？ おれがその氣にさへなれば、一、二、三！……それでもうお了ひだ！……どうだ、おい、あの女が何やら分らないで、ぼうつとしてゐるところを、自分のものにしてつた時は、さぞかくべつ愉快な事だつたらうな！……あれの帯を解きながら、君はあれの事でなしに、おれの事を考へたに違ひない——あいつ莫迦なやつだ、どこかで戀ひに惚れながら、女神のやうに崇めて信じ切つてゐるが、おれはあいつの愛も、信仰も、神體も、こんな風にしてやつてるんだ！……なあ、君は多分かう考へて、ます／＼夢中になつたんだらう！……」

「ザハール、それは違ふ、そんな事はない！」とミハイロフは絶望の聲で叫んだ。

「黙れ！……それに違ひないんだ！……おれは君の腹の中をちやんと見通してゐるんだ！……長いあひだよく見て來たから、今ぢや君の魂はまるで掌をさすやうなものだ！……君は一體なものだ？……君はわれ／＼凡人と違つて、飾り立てられてこの世へやつて來たんだ！……才能、美貌、纖細な魂！ 超人だ！……一體あれは誰だつたつけな——

動物には雌一匹でいゝが、人間にはすべての女が必要だと言つたのは？……君だ！……君はむろん、自分といふものを、その他の有象無象と比べものにならないと思つてゐたんだ！……自分の華々しさの前に出ると、ほかのものはみんな蠱けらだ——かう思つてゐたのだらう！……自分のやうな人間には、すべてが許されてると思つてたんだらう！……この世界はたゞ君の快樂のために作られたもので、それを取らうと取るまいと心のまゝだ！……しかし、この華華しさのために、血の涙を流してゐる人間があることは、夢にも君の頭に浮かばなかつた！……そりやさうとも、君が樂しみをする以上、君から受けた苦痛は、みんな幸福だと思はなくちやならない譯さ！……何しろ超人だからな！……だが、さうは行かない！ 君はやつぱり、みんなと變はりのない人間だよ！……生活といふやつが、君の首も同じやうに締め上げたんだ！……誰だつて人間の生きた心臓を踏み石にして渡りながら、罰を受けずにゐられるもんぢやない！……それを心得とくがいゝ！……いや、今ぢや分かつて來たらしい！」

ミハイロフは慄へる唇を動かしながら、無言のまゝ手をさし伸べた。アルブゾフは荒々しくそれを撥ねのけた。

「ザハール！」

「なにがザハールだ？……君、もう遅いよ！……人の魂を微塵に碎いて、唾をはきかけて置きながら、今となつてザハールだ！……」

「ザハール！」

「おい！……今さらお慈悲ねがひかい？ 參つたのかい？……やり切れなくなつたのかい？……もう遅いと言つてるぢやないか！……」

アルブゾフはミハイロフの顔をちらと見て、不意に口を噤んだ。人間と思はれないほどの苦痛が、その顔に現れてゐたのである。

しばらくはひつそりと靜まり返つた。アルブゾフは額ごしにミハイロフを見つめてゐたが、その顔には目から唇へかけて、一種の痙攣が走つてゐた。何か彼の心中で惱ましい争鬭を續けてゐるのであつた。

「堪忍してくれ！」とミハイロフは言つて、彼の手を取つた。

アルブゾフは身ぶるひして、その手をもぎ放した。

ミハイロフは頭を垂れた。

「ふむ、さうか……」憐愍とも復讐ともつかぬ不可解な調

子で、アルブリーツフはかう口を切つた。「こんな事は覺悟して置かなくちやならなかつたんだ！」

「ミハイロフは一そう低くうな垂れた。」

「おい、」とまたアルブリーツフは言ひ出した。「一つ君に……ある檢事補の話をして聞かせよう……」

彼は夢中になつて了つて、なんのためにこんな話しを始めたのか、自分でもはつきり分らないらしかつた。

「いゝかい……かうなんだ……おれがまだ餓鬼の時分に、この町にある檢事補がゐた……おれはこの男を夢のやうに覺えてゐる……背の低い、乾いた感じのする男で、顔といつたら紙で作つたやうで、頬鬚を生やしてゐるのだ……一口に言へば、いかにも檢事らしい男だつた！……町でもたゞ檢事檢事と呼んでゐた。この男もやはり人なみの生活をして務めに出る、酒をのむ、歌留多をやる、そして道樂もときどきやる、といふ風だつた……親父がその後この男の事を、いろ／＼話して聞かしてくれたよ！……なか／＼教育のある讀書家で、こんな田舎にはちよつと敵ふ人がないくらいだつた。賢い男だつたが、しかしその賢さは自分ひとりだけを信じて、他人を輕蔑するといふ種類のものなんだ……この男には一つの癖があつた。そのために嫌はれて、怖が

られてゐたけれど、しかし尊敬はされてゐた。この男の前で誰かの噂が出ると、檢事は必ず何か一こと二こと言葉を挟む。しかも、それはみんなが何かいゝ事を噂して、高潔な行爲を褒めてゐるやうな時なんだ……一ことぼつりと言つて、にこりともせず、また黙りこくつて了ふ。別に何も格別のことを言ふ譯ぢやないが、この一ことが出たあとでは、高潔な行爲も妙にけちがついて、なんだか、いやあな感じがするやうになるんだ！……かうして、檢事は自分一流の楽しみをしてゐた譯だ。それがさ、たゞ自分より頭を高くもち上げるものを、なんでもかでも抑へつけようとする、慢心のためだつてことは、もちろん誰ひとり氣のつくものがなかつた！……この檢事には、もう一つ奇妙な癖があつた。一年に一度か二度、いや、それよりもつと少なかつたかも知れないが、不意にこの男が鎖でも引つ干切つたやうに、恐ろしい放埒を始めるのだ。がぶ飲みをやる、女を相手に醜態はまる眞似をする、三頭馬車を飛ばす、鏡を叩き毀す、ボーイの顔に芥子を塗る、いやはや大變な騒ぎなんだ。その醜態といつたら、その後一二箇月は、みんながこの男をよけるくらゐだつた……ところが、當人はまたけろりとして、澄ましこんで、几帳面な、わる丁寧な人



間になつて了ふ。そして、歌留多などやつてゐるぢやないか……もちろん、その騒ぎもだん／＼忘れられて、みんなはまた前々どほり檢事を尊敬するやうになる。たゞその冷笑が一そり毒々しくなつて、ほとんど憎悪に近くなるんだ。それは言つて見ると——おれはお前たちの前で、體ぢうの鉦を一つ残らずはぶつて了つて、ありつたけの穢らはしいものを、お前たちの掌へぶちまけてやつたのに、お前たちは平氣でそれをべろりと食つて了つた！……まあ、こんな氣持ちで威張つてるんだ！……この男の放埒時代の十八番は、淫賣どもの中から誰か一人おとなしさうなのをより出す事なんだ。それは良家の子女でありながら、貧のために泥水へ落ちたやうな連中の一人で、つい近ごろ浮氣稼業を始めたばかりだから、まだ怒つたり恥づかしがつたりしながら、今日明日にも足を洗つて、地道に戻る氣であるんだ……こんなのに目ぼしをつけて、それからそろ／＼始めるんだね——優しく婉曲にいろんな事を聞いて、同情したり切つたり、何もかも信じ切つて、同情のあまり涙までこぼしながら、すぐにその場で、足を洗ふやうに力を貸さうと言ひ出すのだ……すると、女は心から感動して、まるで神様から不幸な女に送られた救ひ主のやうに、手を合はせて拜

まないばかりになる、その時そろ／＼正體を現すんだ……親父がよく話してゐたが、顔の様子まで變はつて来るさうだ。頬髯がびつたり臥て、こめかみが引つこんだやうになる。そして唇がゆるんで、こまかい齒が覗く……檢事ぢやなくて、まるで颯だ！……さも同情したやうに、もの柔かく忍びよつて早速あすからでもせひ新生活を始めなくちやならない……おれがすつかり盡力して、手順をつけてやる、併し、今日はどの道同じ事だから、お名残に一つ……とこんな風に持ちかけるんだ……その調子がいかにももの柔かだ目に立たないやうに甘く言ひ廻すものだから、女もあゝいふしんみりした話しのあとで、少々だしぬけたとは思ひ乍ら、本當にそれが當り前のやうな氣になつて来る。事によつたら、特別の満足を感じたかも知れないさ……かういふ救ひ主であり恩人である人に、心から感謝の意を表さなければならぬ順序だからね！　そこで女を別室へ連れこむんだが、十五分もたつと、女はけた／＼ましい聲で、泣くやら、喚くやら、助けを呼ぶやら、大騒ぎさ！……先生そこで何をしたのか知らないが、人の話しによると、思ひ切つていやらしい、洗練された方法で、女を責めさいなむんださうだ！……それから、極端まで侮辱され苦しめられて、へと

へとになった女を突き出して、仲間の慰みものにするといふ段どりだ！……そのやり方が實に微妙で、巧妙をきはめてゐるので、女はその後まるで半氣ちがひのやうになつて、人間を恐れ出す。そしてむろん、二度と匍ひ上がる事の出來ない墮落のどん底へ落ちて行く！……ところが検事の方は、もう何もかも一切の約束を踏みにじつて、何より神聖なものにまで唾を吐きかけたのに満足して、綺麗に撫でつけた頭を光らせながら、すつきりした恰好で歩き廻つてゐるのだ！……一度なぞはさういふ女の一人が、心の激動に耐へかねて首をくゝつた事さへある、事件はもちろん揉み消されて了つたよ。ところが検事は……」

「なんだつて僕にそんな話をするんだね？」とミハイロフは惱ましげに聞いた。

「何も譯はないかも知れないさ！」とアルブゾフはもの思はしげに言つた。「ことによつたら……いや、分からない……たゞちよつと、なぜかその検事のことか頭に浮かんで來たんだ……僕はこゝに一人で待つてゐる間、始終その事ばかり考へてゐた。事によつたら……まあ、待つてくれ、了ひまで話すから。結局かういふ事になつたんだ……女が首をくゝつた時ぢやない、まだずつと後の事だが……検事

が急に退屈を感じ出したのさ……酒もふつつりやめて了つて、だいぶ長いあひだ、この男のさうした藝術的創造について、まるで噂が聞かれなかつた。そして、あるお嬢さんの所へせつせと通つてゐたが、急に結婚を申し込んだ……ところが撥ねつけられたんだ……両親の方は大して異存もなかつたけれど、お嬢さんが劍もほろゝなんだ！ 検事はそれから餘計しづみ込んで、しじゆう考へてばかりゐたが、やがて十六になるみなし子を養女に貰つて、いろんなものを買つてやつたり、可愛がつたりしてゐたが……逃げられて了つた！……その後噂によると、検事は昔さいなんだ女の一人を見つけ出して、結婚を申しこんださうだ……女も始めは承知したけれど、やがて男を慰みにかゝつて、たうとうみんなの前で頬打ちを食らはせた上、戸のそとへ突き出して了つた！……検事は親友をほしがらるやうになつた……氣だてもずつと優しくなり、誰にでもお愛想を言つたり、誰のことも褒めるやうになつた……ところが、誰も先生のところへ行かないで、避けるやうにばかりするのだ……検事はもがき出した！……あるとき、何かの豫審から歸りしなに、町の修道院のそばを通りかゝつた……こゝに小さな見すばらしい修道院があるんだ……聖者の遺骨もなければ

ば、あらたかなお像もなく、たゞ鐘乳洞があるだけなんだよ……先生が何を考へ何を感じたか、そいつは分からないが、しかし馬車をとめて、院主のところへ行つて話をした。それから町へ歸ると、退職願ひを出して、事務の引きつぎを済ましたのも、修道院の僧になつて了つた。なんだかばかに早くいろんな階級を飛びこして、隠者の稱號を許されたさうだ……ほら穴の一ばん深いところへ庵を結んで、その中で完全に沈黙を守りながら、十七年間ひと足もそとへ出ないで暮らしたさうだ。いつも錘を體につけて、たゞ供へ餅ばかり喰べてゐたものだ。そして、誰にもなんにも言はずに死んで了つた。たゞ死ぬるすぐ前に院主を呼んで、曲がりくねつたほら穴の小道を通つて、棺をそとへ擔ぎ出すのは、ほかの僧たちに骨が折れるだらうから、ほかの場所へ移して息を引きとらせてくれと頼んだ、たゞそれきりだつたさうだ……」

アルブローツフは口を噤んだ。

ミハイロフは絶えず募つて来る憂愁の念を感じながら、ちつと彼を見つめてゐた。

「つまるどころ、君は何を言はうとしてゐるんだね？」と彼は神經質に尋ねた。

アルブローツフは重々しい青ざめた顔を振り向けた。奇妙な深いものの思ひの影がその上に宿つてゐた。彼は自分でも、なんのためにこんな話を始めたのか忘れたらしく、悲しげなもの柔かい目つきをしてゐた。

「今年おれはこの修道院へ寄つて見た。相手の間ひが耳に入らなかつた様子で、彼はかう言ひ出した。「そして、ほら穴の方へ行つて見た。坊さんに鼻薬をかゞせて、一人ぼつちにして貰つてさ、三時間ばかりその檢事の庵にぢつとしてゐたよ……それは小さな庵室で、いきなり岩を切り取つて作つたものなんだ。大きなくすんだ聖像が掛かつて、小さな蠟燭が燃えてゐた……窓はなくて、小さな息ぬきが一つ石に明けてあつたが、それも何ひとつ見えやしない……まるで死んだやうにひつそりして、頭の上には何萬貫といふ山が押つかぶさつてる譯だ……そして空氣は重くるしい。始めの三十分は面白かつた。ほかに誰もゐない、まつたくの一人ぼつちで、蠟燭が燃えるのをぢつと見てゐたよ……それから退屈になつて、くさくさして來た……いつそ死んで了ひたいと思ふほど氣が減入つて、今までして來たありとあらゆる穢ららしい事が、底の方から浮き上がつて來るやうな具合なんだ……胸が悪くなつて來た……」

れども、おれは坐りなほしただけで、出て行かうとしなかつた……するとこの静けさが魂をじり／＼吸ひはじめる。すべてのもの思ひが、靜かに深く沈んで了つた……人生なんてものはすつかりどこかへ遠のいて了つて、記憶も薄くぼんやりして來た……なんにもいらぬ、なんにも考へたくない。たゞ目の前に蠟燭が燃えて、聖像の顔がかすかに動くばかりだ。なんだか忘我の境に入つて行くやうな氣持ちさへした……と、不意にそれは出來ると感じた……十七年間ひとりぼつちで、土の下に坐り通すことが出来る……なぜと言つて、魂は自分ひとりで生きながら、自分の生活を創造して行くからだ、とかう信じて了つた……今まで大切なもの、なくてはならないもの、苦しいものと思はれてゐた事が、みんな急にわざとらしく感じられて來た！……言はば誰にも用のない遊びかなんそのやうな氣がした。人生といふものは、人間が歩いたり、話したりしてゐる、そんな事ではなくて、魂そのものにあるのだ、何か一つの點の中にあるのだ、かういふ事を妙にはつきりと、明瞭に感じたよ、その一點は恐ろしく偉大なもので、自分で自分を充實させ、自分で自分を抱擁してゐるのだ……やがて坊さんがやつて來た時、出て行きたくないほどだつた！……そとへ

出て太陽を見たとき、何もかも奇妙に思はれた。まるで本當のものでなくて、繪の具を塗りこくつたボール紙みたいなぢやないか……聲も顔もまるでボール紙で作つたものやうな氣がした……太陽もそつげなく照らして、やはり描いたものみたいなのさ！……おれはそのあとでむちや、飲みをやつて了つた！」アルプゾフは出しぬけにかう結んで、また黙りこんだ。

ミハイロフはぢつと彼を見つめてゐた。

「それでね、」恐ろしく低いもの思はしげな聲で、また言ひ出した。「この庵室のことが、どうしてもおれの頭を離れないのだ！ 飲んでも、醜態を演じてても、愛しても、憎んでも、始終この庵室が目の前に立ち塞が<sup>ふさ</sup>つてるんだ！……一切のものがたゞ彩色した幻燈みたいなもので、本當のものはあの地の下にある——誰でも必ず魂の奥に持つてゐる、生活の響きも傳はらないやうな一點にあるのだ、こんな氣持ちがして仕方がない……おれは隱者<sup>ひんしや</sup>になつて了ふよ、セリョージャ！」出しぬけにアルプゾフはかう言ひ足した。その顔はやゝ暗くなつた。

ミハイロフはぎくりとした。

「さつきおれが嘔<sup>ど</sup>鳴つたり嚇<sup>おど</sup>したりしたのは、氣にかけな

いでくれよ、セリョージャ……」とアルブゾフは悲しげに言つた。「あれはたゞつい悲しさ餘つての事なんだ……あんまり苦しく堪らなかつたものだから……おれは今日ネルリと綺麗に手を切つたよ、セリョージャ！」

ミハイロフは頭を上げた。

「へえ……でも、あれは君と一緒に工場へこれから行くと言つたぜ！」と彼は叫んだ。

アルブゾフは片手を振つた。

「なんの、どうしてそんな事が……なんだつてそんなことが！」

ミハイロフは無言のまま、憐愍と哀愁の表情で、いつまでも彼を見つめてゐた。

「ねえ、」と彼は低い聲で用心ぶかく尋ねた。「一たい君は忘れる事が出来ないのかい、赦す事が出来ないのかい？」

アルブゾフは、強情らしい額をした重々しい頭を、ゆつくりと力なげに振つた。

「なあに、君、聖書には赦罪といふ事が、うまく書いてあるけれど、實際のところ、赦すといふ事は、つまり値打ちをつけない事なんだぜ！……」

ミハイロフは黙つてゐた。彼の顔には鋭い内部の痛みと

闘争が、鮮かな襲となつて浮かんてゐた。

「しかし、それは残酷ぢやないか、ザハール！……僕としてこんな事は言ひ憎いが、しかしネルリが悪いんぢやない、悪いのは僕だけだ……あれはたゞ過ちをしでかしただけなんだ！」

アルブゾフはにやりと笑つた。

「僕は君の氣持ちが分からない。」とミハイロフは惱ましげに言葉をつゞけた。「だつて君にしても、夫のある女を戀ひすることが出来さうなものぢやないか……でなければ、未亡人でも！」

「未亡人！」アルブゾフは奇怪な調子で繰り返した。と、不意に、ちらと頭を掠めたあるものを隠すやうに、目をわきの方へ反らした。

「君、どうしたんだい？」とミハイロフはびつくりして尋ねた。突然、悪夢のやうな想念が彼の心を打つた。

彼はさつと青くなつた。そして、額には汗さへにじみ出た。

「ザハール？」相手の腕を掴みながら、彼はかう叫んだ。

アルブゾフは返事をしなかつた。

「ぢや、君は……本當に？」なんとも譯の分からない調子

で、ミハイロフは静かにかう聞いた。

アルプーゾフは無言のまま、相かはらず奇妙な表情で横目を使つてゐる。

ミハイロフもやはり口を噤んだ。

部屋の中は恐ろしく静かだつた。雨もやみ風も落ちたと見えて、外ではこそその物音もしなかつた。小さなラムプはぼんやりともつて、大きな二つの影法師が、大きな黒い頭を突き合はせながら、ぢつと壁の上に映つてゐる。もうだいふ夜が更けて、闇とした深夜の静寂が、壁ごしに浸みこんで来た。

「ぢや、君にすつかり言つて了はう！」アルプーゾフは頭を上げないで、とつぜん聲だかに言ひ出した。「君と話しをするのも、これが最後かも知れないから、今となつてはもう同じことだ！……おれは君を殺さうと思つたのだ！……もしあの……將校、アウゲストフがゐなかつたら、たしかに殺したに相違ない！……あの男が君の命を救つたのだ！……君、人間ひとり殺すのは、そんなに樂なものぢやないつて事が分かつたよ！……あの男の姿が、今だに目の前にちらちらしてゐるよ！……まあ、そんな事はどうでもいゝ！……とにかく苦しい、いやな氣がする！……さうなんだ！……」

おれは今日もそのつもりでやつて来たんだ！……しかしだめだ、やれない！……君の顔を見ないと、やれさうな氣がするんだ！……そばへ寄つて行つて、手あたり任せのものでやつつける——なんの造作もないやうな氣がするんだ！……頭がぼうつとなつて、血が燃え立つ……ところが、顔を見ると出来ないんだ！……手が上がらない！……殺すことも出来なければ、赦すことも出来ない！……あゝ！……いやになつて了ふ！……」

アルプーゾフは、鞭の中でもがく牡牛のやうに、やけに頭を振り散らした。

「だが、一たい君はそれほどまでに……」ミハイロフはかう言ひかけた。

「何がそれほどまでにだ？……おれは何につけても、中途半端といふ事の嫌ひな人間だ。おれは一たん考へはじめたら、本當に隠者の仲間に入つて了ふし、憎むとなつたら、殺さずにや置かないし、愛するとなつたら、死ぬまで愛するんだ！……さうとも！……おれの辛いところは、君を愛してもゐれば、憎んでもゐるといふ事だ！……一たい君はなんで僕をこんなに惹きつけるのか、譯が分からない！……もしたゞ愛してゐるだけなら、疾うに忘れて赦したらうし、

もし憎んでゐるだけなら、犬のやうにぶち殺して了つたらう！……さうとも！……」

「しかし、それもみんな過ぎて了つた事だらう……」惱ましいまでの無力を感じながら、ミハイロフはかう呟いた。

「過ぎて了つた？……何が過ぎて了つたんだ？……一たい君は知つてるのかい、ネルリはいまだに君を愛してゐるんだぜ！」

「ザハール、君なにを言ふんだ！」

「本當の事を言つてるのさ！」アルブローツフは強情らしく首を振つた。

「ネルリは君を愛してゐる！……君を！……いつも君ひとりだけを愛してゐた。あのとき僕と……」

「よしてくれ！……言つちやいけない！」

ミハイロフは思はず口を噤んだ。

「君はおれを莫迦だとも思つてるのかい、君よりも？」とアルブローツフは嘲るやうな、陰鬱な聲で言ひ出した。「そりやおれも自分で知つてるよ。たしかに愛してゐる、それがどうしたんだ！……」

「どうしたとはなんだ？」

「なに、別に……おい、君、女にはある一つの秘密がある

んだ。」

「どんな秘密が？」

「ほかにやない、女が始めて身をまかせた男のことは、もう一生わすれる事が出来ないんだ！……自分からその男を捨てて、ほかの男を愛するやうになつても、憎むやうにさへなつても、忘れる事だけは出来ないんだ！……その男が指一本で招いただけでも、女は何もかも忘れて、またそちらへ返つて行くのだ！……われとわが身をさげすみながらも、出かけて行くに相違ない！……それもつともな話しさ。何分はじめて一切を犠牲にするんだもの、一生涯の分かればなんなんだもの……その時は恥ぢも、恐れも、貞操も、何もかもすつかり棒引きにしてふんだからな！……それはもう二度と経験の出来ない事なんだ！……心の方にして、體の方にしても、もう経験する譯にや行かない！……自然はあらゆる場合ひに對する感情を、一つづつだけしか人間に授けてないので、同じ感情は二度と味はへない！……あまり度々あることは、つまりなんの感情もないのと同じで、そりやたゞ穢らはしい、醜惡なものに過ぎないのさ！……もちろん、もしおれがネルリをあれほど愛してゐなかつたら、こんな事なぞ考へもしなかつたらう……君が

考へなかつたのと同じやうにさ！……ところで、おれはあの女に一切を捧げつくしてゐるんだ……かういふ譯だもの、熱烈この上ない愛撫の最中にも、あの女がわれ／＼二人を比較してゐるな、といふ考へが起こつたら、おれは生きてゐる瀬がなからうぢやないか！……」

「君は氣がちがつたんだ！」

「君以上ぢやない！……それはその通りだよ。どんな人間でもそれを承知して、それに感づいてゐるのだ。たゞ口に出して言はないで、自分で自分を欺きながら、忘れようと努めてゐるだけだ。つまりさうでもしなかつたら、生きて行けないからさ！……」

アルブーゾフは口を噤んだ。

「いや、こんな事を言つたつて仕様がな！……ねえ、君、おれは神様を信じてゐないので、お祈りといふ事も前からやめて了つた。だが……かういふと可笑しいけれど……毎晩のやうに、君が死んだ時のことや、何かの拍子で殺された時のことを考へてゐると、ついこんな言葉が口に出て来るんだ……神様、ほかの人だつて死んで行くのに、どうしてあの男は死なないんでせう？……どうかあれが死ぬるやうにしてください、神様！……こんな風に涙ながら祈つた

ものだ！……滑稽だらう。滑稽だといふ事は、自分でも承知してゐる。だから、誰にもこの話しはしなかつたのだから、今となつちや同じことだ！……」

「なぜ君は『今となつちや同じことだ』なんて、のべつ言つてゐるんだね？」不意にミハイロフがかう聞いた。

アルブーゾフは、相手の悟りが悪いのに驚いたといふ風に、奇妙な嘲るやうな目つきで、ちらと彼を見やつた。

「譯があるんだ！」と彼はぞんざいに答へて、目をそらせて了つた。

「だつて、君はたつた今さう言つたぢやないか、僕を殺すことは出来ないつて……」

「君は殺せない！」とアルブーゾフは籠もつた聲で答へた。

ミハイロフはぢつと彼の顔を見つめた。

「君は……君は自殺しようと思つてゐるんだな？」と彼は憎えたやうに叫んだ。全身の血が一時に心臓から、どつと引いて了つたやうな氣がした。

アルブーゾフはなんとも答へなかつた。

「ぢや、本當なんだね？……さあ、言つてくれ！」とミハイロフは叫びながら、彼の肩を揺すぶつた。



アルプーゾフはのろ／＼と重々しげに、彼の方へ目を轉じた。

「どうだつて同じだよ！」彼は聞こえるか聞こえないかの聲で言つた。

ミハイロフは抑へてゐた手を放して、一歩うしろへよろめいた。

「そんな事があつて堪るものか、ザハール！……君は氣ちがひだ！……なんのために？……そんな事をしてどうしようと言ふのだ？……」

「ぢや、僕はどうすればいゝんだ？」陰鬱な皮肉を帯びた聲で、アルプーゾフは尋ねた。

ミハイロフは途方にくれたやうに、ぼんやり相手を眺めてゐた。

「それ見ろ！……ぢや、もしネルリが自殺したらどうする？」病的に顔を歪めながら、アルプーゾフは低い聲で言ひたした。

「ネルリ？……なぜネルリが？……」

アルプーゾフは肩を竦めた。

「ぢや、君はなんと思つてたんだ？……」と彼はいやな薄笑ひを洩らした。「一體あれは……踊りでも踊つてればい

いのか？……そりや自殺するとも！……事によつたら、もうしてるかも知れない！……なに、君にして見りや同じことだらう、一人だつて二人だつて！……」

「ザハール！」とミハイロフは叫んだが、急にそのまゝぶつりと切つた。

彼はなんだか妙な氣持ちになつた。とき／＼夢ではないかといふ氣がした。アルプーゾフの熱病やみのやうな語言が、氣うとく奇怪に響いて、その重々しい頭が、悪夢のやうに目の前で揺れてゐる。心の中がすつかりこんぐらかつて了つた。ネルリ、アルプーゾフ、リーザ、クラウゼ……白つぽい口髭をしたトレニョーフの従卒が、不意にどこからか記憶に浮かんで来る……アルプーゾフは自分の死を願つてゐる！……あれは氣ちがひだ！……自分を死へ突き落とすために、わざ／＼やつて來たのだ！……モスクワの宿屋の空虚な一室ではじめて感じた、かの恐ろしい救ひのない憂愁が、突然ミハイロフの胸に迫つて來た。何かしら大きな惱ましい結びめが心の中に纏れて、まつたく一思ひに斷ち切つて了ふよりほか、出口がないやうな氣がした！……さうすればもう一切が終りを告げて、明日といふ日もなくなるのだ！……明日の日！……今日ネルリがやつて來

た。それから自分が醫師アルノルデイのところへ行つた。それから従卒が駈けつけて、いまはアルブゾフが自分の部屋に腰をかけてゐる……しかし明日はもう誰もゐなくなるのだ。ネルリもアルブゾフも、リーザと同じやうにゐなくなるかも知れない……リーザ……彼はまだほとんどこの女の事を考へなかつた、しじゆう記憶を追ひのけるやうにしてゐたのだ。考へたくないと思つて、人から人へとさ迷つてゐたのだ……彼はまだ一切のことを理解してゐないやうな氣持ちさへした。しかし明日になれば、無關心な白日の光りの中で、一切が理解されるだらう。恐怖がその全容を現して、目の前に立ち上がるだらう……リーザ……

「だが、繪は？」不意に彼はかう思ひついた。鋭い憂愁が彼の心臓をしめつけた。彼はもう自分の繪を完成することが出来ないのを、ちゃんと知りぬいてゐるやうな風だつた。明日は人々がやつて来て、すべてのデッサンや作品を運び出すだらう……畫室は傷だらけの壁を剥き出しにして、眞裸になるだらう……次ぎの展覽會には自分の繪が出ない……たゞ『白鳥湖』だけが大理石の墓碑のやうに、冷たくどこかの博物館に残るだらう！……どうならうと同じ事では

ないか！……なぜこんなに痛ましいのか、なぜこんなに淋しいのか？……なぜ誰も自分を憐れんではくれないのだ？……なぜアルブゾフはあの検事の話しなんかしたのだらう？……あの検事もいよくといふ最後の瞬間に、誰一人ゐなかつたのだらう！……しかし、検事はみんなを憎んで、輕蔑してゐたのではないか！……ところが、自分は？……憎みもしなかつた、輕蔑もしなかつた、たゞ自分よりほか誰も愛しなかつたのだ！……「他人の血で幸福の花を育てるものぢやない！……」一たい自分はそれを望んだのだらうか？……リーザ、リーザ！……

「君は何を考へてるんだ？」といふアルブゾフの聲が、どこか遠くの方から、霧を透かすやうに聞こえた。

「うむ？」とミハイロフは器械的に問ひ返した。そして突然はじめて見つけたもののやうに、奇妙な日つきで彼を見つめた。

あゝ、この男が自分の死を欲してゐるのだ……死を欲する人間は、なんとといふ奇妙な顔をしてゐる事だらう……誰の死を？……おれの死だ！……なんて莫迦々々しい話だらう！……では、ネルリは？……さうだ……この男は赦す事も忘れることも出来ない。しかも、さうする権利を持つてゐる

るのだ!……だが、なぜこんなに亂暴な、殘酷な仕打ちをするんだらう?……一體おれが可哀さうではないのか?……どういふ譯で?

アルブゾフは顔を上げて、げんざうにミハイロフを眺めてゐた。瘦せて青白い歪んだやうな顔、どこか内部を見つめてゐるやうな目。

「セルゲイ!」とアルブゾフは聲高に言つて、彼の手に觸つた。

一分間、ミハイロフは何か合點の行かないやうな鈍い目つきで、アルブゾフを眺めてゐた。

「セルゲイ!」こんどはもう漠とした恐怖を感じながら、アルブゾフはやゝ聲を高めて、もう一度呼んだ。

ミハイロフは全身をくるりと彼の方へ向けた。そして不意に、青ざめた哀願するやうな微笑を洩らした。

「ねえ、君、まるで人のもののやうな聲で彼は言ひ出した。「君がこの今日といふ日にやつて來たのは、實に妙だねえ……」

「それがどうして妙なんだ?」

「まるで前から知つてたやうだ……」

「何を知つてたんだ? 君は何を言つてるんだい?」

「なに、ちよつと……」とミハイロフはもの憂げに手を振つた。「言ふほどの事はない……また後で!」

「何があとでだ? 君は酔つてでもゐるのかい?」とアルブゾフは不安げに尋ねた。

彼の大きな黒い影法師は、天井で瘻撃的に動いた。

「いや……實はね、けふ新しい繪を始めたんだ。」まるで何かに縛りつくやうに、ミハイロフは急に生き生きとした早口で言ひ出した。「なんなら見せようか?」

「見たよ。」とアルブゾフは氣むづかしげに答へた。「おれは繪どころぢやないよ。」

「あゝ見たのか?」とミハイロフは力ぬけのした聲で問ひ返し、ほんやりした表情で額を一なでした。

「僕は今日いちんち描き通したんだ……」

「時もあらうに!」とアルブゾフは毒々しく言ひ返した。「丁度けふといふ日に繪を塗りたくるなんて!……」

ミハイロフは兩手で頭を擱んだ。

「君、一たいどうしたんだ?」奇妙にいら立たしげな表情で、アルブゾフは、かう繰り返した。「病氣ぢやないのかい?」

「いや、僕は丈夫だ……たゞ……君はあの檢事のことを面

白く話したね……」

「君は氣でもちがつたのかい？ それともおれを冷やかしてるのか？」とアルブゾフは毒々しく言つた。何か得體そとにの知れない恐怖が、心臟を締めつけるやうに感じたのである。

「さうかも知れない……實はね、丁度けふ僕は自殺しようと思つたんだ……ピストルまで取り出した……だが、自殺しなかつた！」

「そりや顔で分かる！」とアルブゾフは言つて、神經的に笑ひ出した。

不意に何かしら無氣味な、ほとんど無意識の想念が、彼の充血した黒い目に閃いた。彼はざるざるに目を細めて言つた。

「いや、君……そんな事はよすがいゝ……君のやうな人間は自殺なんかしやしない……やめてくれ……いゝ氣持ちで一生を送るだらうよ！ ふむ、君なんか……」

ミハイロフは不意にちつと目を据ゑて、不思議なほど意識的な表情で、彼の顔を見つめた。

「おい、ザハール、もし僕が自殺したら、君は本當に喜ぶだらうな！」彼はゆる／＼とかう言つた。

「莫迦なことを！」アルブゾフは曖昧な調子で言ひ返して、立ち上がった。「君は氣がちがつたな！」

「おい！」相手に顔を突きつけながら、ミハイロフは言ひ出した。

アルブゾフは彼の奇妙な、すつかり野獸化した目をちらと見て、たじ／＼となつた。

「よせよ！」

「いや……聞いてくれ！」相かはらず曖昧な調子でかう言つて、ミハイロフはいよ／＼顔を相手の方へさし伸べた。

氣うとい恐怖の念がアルブゾフを擱んだ。

「なんだ！」不意に青くなつてかう言つた。

ミハイロフは立ち上がった。その顔は緑がかった、ねばねばしたやうな青白さに包まれて、唇はわな／＼と慄へはじめた。

「おい！」適當な言葉が見つからないやうに、やつとの事で彼は三度めに繰り返した。

アルブゾフは思はずもう一步あとへすさつた。

「セルゲイ！」とつぜん、彼は甲高く響く聲でかう叫んだ。

ミハイロフは何か言はうと思ひながら、それが出来ないらしかつた。たゞ唇はいよ／＼烈しく慄へて、ぼう／＼た

る髪の亂れかゝつた青白い顔を、もの凄く引き伸ばすのであつた。

「セルゲイ、やめてくれ！……おれは歸るよ！」恐怖の餘り相手から目を放さないで、アルブゾフはかう呟いた。

「どうだね、君は……事によつたら本當に……僕を……」

「おい、しつかりしろ！……一體どうしたんだ！」とアルブゾフは叫んで、力まかせに相手の肩を掴んだ。

けれどミハイロフはもの狂はしい身ぶりで、それを振りはなした。

「歸れ！」と彼は野獸のやうに叫んだ。「歸れ、でないと殺すぞ！……貴様はおれがなにした時に……わざとやつて來たんだ……貴様は望んでるんだらう、おれが……いや、いさ、いゝさ……いゝつて事よ！……」

彼は全身を慄はしてゐた。その姿はもの凄くもあれば、みじめでもあつた。アルブゾフは氣うとい目つきで彼を見つめてゐた。突然ミハイロフは突發的に畫室の奥へ行つて、何やら床の上へ倒した。そしてぶつ／＼言つたり吃つたりしながら、卓の抽斗を何やらせか／＼と捜しはじめた。

「いゝさ、いゝさ……構はないさ！」と彼はつゞまりもな

い事を、口の中でぶつ／＼言つてゐた。

アルブゾフは身うごきもせずに見つめてゐた。彼は自分まで氣がちがひさうに思はれた。これは恐ろしいヒステリーの發作で、もし止めないで置いたら、ミハイロフは今この場で、自分の見てゐる前で、自殺するに相違ない——かういふ事を彼は不意に察したのである。クラウゼ少尉補の血みどろの顔が、忽然と彼の目の前に浮かんで來た。彼は動物的な恐怖と、壓倒的な嫌惡の情を感じた。一瞬間、アルブゾフは躍りかゝつてミハイロフを引つ掴み、あり合はせのタオルで氣ちがひのやうに縛りつけようとしたが、それと同時に、意識で捕へる事の出來ない、しかも恐ろしくはつきりした想念が、彼を押しとどめたのである。

ミハイロフは依然として抽斗の中を掻き廻しながら、手に當たるものをもの狂はしく床へ抛り出し、熱病やみのやうな早口で、譯の分からぬ事をぶつ／＼呟きつゞけてゐた。

「いゝさ……いゝとも……いゝとも……」

アルブゾフは彼の捜してゐるもの——ピストルが、卓の上に置かれた汚い調色板の下にあるのを見てゐた。まだそれを取り上げる暇はあつたが、アルブゾフは一足もその場を動くことが出來なかつたのである。

「おれは何をしているのだ？……早く！……早く！……早く！」といふ考へが頭に閃いたが、譯の分からぬ不思議な衰弱感が、とつぜん彼の全身を掴んだ。體ぢうがしびれたやうになつて、全生命がもの狂はしく見開かれた目に集中されて了つた。その目は汚い調色板の下に隠れた小さな光るものに釘づけにされたのである。

彼はミハイロフがすつかり抽斗を引つこぬいて、床の上へ抛り出したのを見た。そのはずみに調色板がずつて、ピストルの銃口が覗いた。その瞬間ミハイロフはそれに目をとめた。

まだアルブゾフは、彼を突きつける一瞬間の餘裕を持つてゐた。

「セルゲイ！」と彼は甲高い聲で叫んだが、急にくるりと身を轉じて、胸を戸にぶつつけながら、部屋のととへ飛び出した。

自分の逃走がこの瞬間、何を意味してゐるか、彼ははつきり意識してゐたけれど、その意識を信じなかつた。なんだかミハイロフが後から叫んだやうな氣がした。まるで掴まつた鬼のやうに、みじめな聲で叫んだやうな氣がしたが、アルブゾフは足をとめないで、入り口の階段まで駆け出

した。

寒さと光りが彼の體を包んだ。もう朝になつてゐたが、太陽はまだ昇らなかつた。たゞ透明な光りが、あたり一めに滲んでゐるばかりだつた。夜のあひだの千切れ雲は、地平線のあたりで一條の帯に溶け合つて、その上には、まるで洗ひ上げたやうに美しくほがらかな空が、一片の雲翳もなく擴がつてゐた。下界の木立ちの蔭は、まだじめ／＼して寒かつたが、庭のはづれにたつた一本立つてゐるポプラの梢は、もうばら色の光りに燃えて、金色をしたまばらな葉が、光りと暖氣の期待に慄へてゐるのが見えた。

しかし、アルブゾフはなんにも見なければ、なんにも分からなかつた。青ざめた顔に氣ちがひじみた目を剝き出し、帽子もかぶらない取り亂した恐ろしい形相で、彼は往來をひた走りに走つた。もし後に何か聞こえたら、もういよ／＼氣がちがつて了ふに相違ないと、たゞそのみを意識してゐた。

## 二七

それは晩であつた。ネルリはたつたひとり自分の部屋に坐つてゐた。

彼女はもうミハイロフの死を知つてゐた。彼はリーザ・ト  
レグロアの死に亂心して、發作的に自殺を遂げたらしい。  
それは自殺の現場に居合はせたアルブゾフが、朝はやく  
警察へ届け出たのである。

彼女はこの報知に驚かなかつた。ネルリはまるでそれを  
期待でもしてゐたやうに、冷淡と思はれるほど不思議に落  
ちついて、この報知を受けとつたのである。たゞ魂の中か  
ら急に何かが逃げて行つて、空虚に歸して了つたやうな氣  
がした。

ネルリは葬式に行かなかつたけれど、町ぢうの人が墓地  
へ行つた事や、おびたゞしい花が供へられた事や、葬式の  
當日が晴朗な秋びよりだつた事や、彼の墓がクラウゼ少尉  
補と、剃刀自殺をとげたトレネコーフの墓から、ほど遠から  
ぬ事を知つてゐた。

この晴朗な日和と、名ごりの金色に染まつた木の葉と、  
身にしみる秋の寒さと、赤々と照らしながら暖かみのない  
太陽が、なぜか彼女の想像に浮かんだ。

そのために、彼女のすさんだ魂の暗い奥底は、一そう暗  
くなるのであつた。そして、彼女が前から取つてゐた恐ろ  
しい決心は、一そう峻烈な動かすべからざるものとなつた。

彼女は落ちつき拂つた明澄な氣持ちで、この事を考へてゐ  
た。死の事を考へても恐ろしくなかつた。たゞ細い肩が一  
そう強情らしく鑿んでくるばかりだつた。まるで意志の力  
をもつて、完全な意識を保つたまゝ生を去らうと、己れを  
強ひてゐるものやうであつた。

ネルリは冷靜に、理智的に一切を考慮した。彼女はピス  
トルを持つてゐなかつた。偽りものらしい緑いろをした川  
の淵は、なぜか厭はしく思はれた。で、彼女は毒藥自殺を  
決心した。長い致死期の忌はしいデテールを経験せずに死  
ねるやうな、劇藥を手に入れる事ばかり考へてゐた。この  
決心は極めて單純な、避くべからざるものに思はれたので、  
彼女の心には疑惑さへないくらゐだつた。ネルリは醫師の  
アルノルヂイに手紙を書いて、さし向かひで會へる時間の  
指定を乞うた。するとその返事に、今夜九時ごろに来てほ  
しい、それまでは往診が忙しいから、と言つてよこした。  
ネルリは老醫師の藥棚に、埃だらけな塵や罐に交じつて、  
シアン加里の入つた壺のある事を知つてゐた。そして、放  
心家の老醫師が氣づかぬやうに、この壺を盗むことが出來  
ると、見こみをつけてゐたのである。

もう七時すぎだつた。ネルリは指定された時間を靜かに

待つてゐた。

彼女は兩肘を卓の上に突いて、顔を掌に載せたまゝ、身動きもせずに坐つてゐた。青ざめた細おもての顔には、黒い目がぢつと握わつて、眉がいかめしく寄せられてゐた。彼女はげつそり瘦せて、乾いた唇はきつと結ばれ、目はもの凄く、一心不亂の表情をしてゐた。ネルリはほとんど何も考へてゐなかつた。たゞ青ざめた追憶の斷片が、目の前を掠めては、跡かたもなく消えて行くばかり。何ひとつ惜しい事も、悲しい事も、恐ろしい事もなかつた——心の中はまつたくの空虚で、暗澹としてゐた。アルブゾフの事を思ひ出したとき、その眉はいよいよ烈しく蹙められたが、目はやはり斷乎たる表情をしてゐた。あれはすつかり永久に終りを告げたのだ、かう決めて了つた彼女は、そんな事を思ひ出したくなかつたのである。

けれど、入り口の階段に重々しい足音が響いたとき、彼女はぎくりとなつて、顔を眞つ青にしなから、卓から一歩うしろへよろめいた。前から彼の來ることを知つてゐて、そればかり恐れてゐたやうな風である。

アルブゾフは部屋へ入ると、ネルリの方を見ないで、戸口に立ちどまつた。

彼はこの二三日で恐ろしく面がはりがした。まるで重い病氣が癒えて、やうやく床あげしたばかりのやうに、美しい陰鬱な顔が瘦せて黄色くなつてゐた。黒い焼けつくやうな目は、疑りぶかさうにあたりを見まはすかの如く、鋭く額ごしに光つてゐた。彼はだいたい前から剃刀を當てないの、小さな黒い鬚鬚が、瘦せた顔を取り巻いてゐた。

「またやつて來たよ……思ひがけなかつたかい？」やつとの事で口を動かすやうに、恐ろしくしは覆れた自信のない聲で、彼はかう言つたが、傍へよろうとしなかつた。たゞ帽子をぬいで、兩の手を垂らし、眞つ黒に渦卷いた頭をうつ向けながら、そのまゝ立ち竦んで了つた。

ネルリは卓を背にして、その上に兩手をつきながら立つてゐた。そして一分間ばかりは、無言で彼を見つめるのであつた。

この瞬間、彼女が何を感じたか、それは自分でも言へなかつたに相違ない。男がやつて來たのを、別に不思議とも思はなかつた。ほとんど狂ほしいほどの烈しい喜びが、彼女を包んだけれど、しかし以前の決心を變へようなどとは、夢にも思ひ寄らなかつた。それどころか、醫師アルノルヂイのところへ行くのが遅れはしないかと、壁の時計を見あ



げたくらゐである。それはちやうど死刑を宣告された人間が、もういづれにしても二度と會ふことの出来ない、懐かしい愛人と最後の會見をする、さういふ場合ひの氣持ちに似通つてゐた。

男の惱みぬいた熱病やみのやうな目と、妙な見なれぬ顔と、恐ろしく面がはりのした瘦せた顔——かぎりなく懐かしい尊い顔を、彼女はいつまでも貪るやうに見つめてゐた。するとその刹那、ある神祕な内部の力によつて、この二三日の間に男の経験した事を、急にすつかり見ぬいて了つた。彼とミハイロフの間に起こつた事が、痛いほど明瞭になつて來た。すると、絶望に似た恐ろしい憐愍の情が、彼女の魂を震撼したのである。

「ゾーリヤ、ゾーリヤ！」と彼女は悲しげに叫んで、二歩ばかり前に進みながら、兩手をさし伸べた。

アルブゾフはほとんど慥えたやうな、氣うとい目つきで彼女を見やつた。そして涙と、憐愍と、愛情にみちた目を見ると、いきなり帽子を取り落として、ネルリを抱きしめた。こちらはほとんどその手に倒れかゝつた。

「ゾーリヤ！」男の胸に顔をうづめて、細いしなやかな腕を、痙攣的にその頸へ巻きつけながら、彼女は低い聲でか

う呟いた。

と、不意に逞しい手が、自分を宙に抱き上げるのを感じた。

アルブゾフが経験した一切のもの——嫉妬も、怨恨も、絶望も、あの恐ろしい一夜の悪夢も、たえず耳の中に響いてゐる兎のやうな細い叫び聲も——何もかも消えてしまつた。魂を震撼するやうな歡喜と、熱情と、愛の發作の中に溶けて了つた。彼はネルリを子供のやうに揺すぶりながら、部屋ぢう抱いて歩いた。そして胸、腕、膝などに接吻しながら、氣ちがひのやうにたゞかう繰り返すのみであつた。

「ネルリチカ……おれのネルリチカ！……お前はおれの太陽だ！……」

ネルリは彼よりも背が高くくらゐだつたので、兩手に抱へてゐるのは勝手も悪いし、少々滑稽でもあつたけれど、アルブゾフはそれに氣がつかなかつた。

「わたしのところへ來てくれたの？……たうとう來てくれたわね！……可哀さうな人、優しい人——ネルリは男の耳にかう囁いて、乾いた熱い息でその顔を焼いた。女の髪と肌の匂ひを感じ、その體を抱き上げると、幸福のあまり狂暴になつたアルブゾフは、いよ／＼烈しく彼女を兩手に

抱きしめるのであつた。

「ぢや、わたしを愛してくれるの?…愛して?…」

嚴肅に見えるほど純白な、處女のやうな感じのする

の の上へ、アルブゾフが女をおろした時、彼女はすこしも しようとししないで、幸福に輝く大きな目で、彼を見つめるばかりであつた。

二八

それは思ひがけなく急に終つた。まるで乾いた薪がばつと燃え上がつたかと思ふと、たちまち跡かたもなく燃え盡きたやうな風だつた。二人はどうしてかうなつたのか、自分でも分からないで我に返つた。

ネルリは の上に はつてゐた。乾いた髪が枕いちめん乱れて、顔は暗い影を帯び、目は靜かな幸福らしい疲勞を湛へてゐた。

アルブゾフは妙に窮屈さうな緊張した姿勢で、寢臺のはじめに並らんで腰かけてゐた。黒い髪は額にわばりつき、胸は重々しく不揃ひに呼吸してゐた。

彼の心には何か奇怪な事が生じた。急にがらんとした胸の中に、ある恐ろしい破滅の意識を抱きながら、彼はすつ

かり途方にくれたのである。

何もかもお了ひになつた。あれほど長いあひだ苦しみ求めてゐたもの、彼の心も魂も満たしてゐたもの、そのためにはいかなる障害にも躊躇しなかつたものが、今やつひに成就せられた。體はずき／＼と疼き、心臓は烈しく鼓動して、不思議な嫌惡の念がねば／＼と、忌はしく全身に湧き起こつた。幸福も、歡喜も、情慾も、彼の内部に殘つてゐなかつた…疲勞と嫌惡、女のそばを離れてどこかへ行きたいといふ、矢も楯もたまらぬ欲望、取り返しつかぬ、名狀しがたい内部の破局を意識する心、それよりほかには何もものもない。

この 灼熱のために、あれほど苦しんだり憎んだりしたのが、奇怪な愚しい事に感じられた。實際、あとには何ひとつ残つてゐないではないか。

アルブゾフは、ネルリの方を見るのが怖かつた。自分の目の中に嫌惡の色を讀まれたくなかつたのである。

けれど彼女はなんにも氣がつかないで、男の大きな汗ばんだ掌を、熱い両手で自分の胸へ押し當てながら、甘い幸福の疲勞感に目をとちてゐた。

まだ肉感的な表情をして、頬を赤くほてらせ、汗で髪を

こめかみに粘りつかせた、彼女の燃えるやうな顔が、彼には厭はしく感じられた。烈しい心臓の鼓動が感じられる、彼女の柔かい胸の手ざはりが厭はしかつた。急に紅がゆるんでぐたりとしたやうな、自分自身の體が厭はしかつた。女と自分の

が、胸のわるくなるほど厭らし

かつた……  
アルブゾフは周囲の空氣までが、何か厭らしい匂ひに浸みこんでゐるやうな氣がした。病的な嘔吐感が喉もとへこみ上げて来る。

「これは一體どうしたのだらう……なんだらう？」どこか深い深淵へまつさかさまに落ちて行くのを感じながら、アルブゾフは恐怖の念とともに、途方にくれたやうに自問した。

と、不意に細いみじめな兎のやうな叫び聲を、耳のすぐそばでまざくと聞いた……

「セルゲイ！」限りない絶望と、悔悟と、哀愁とともに、かういふ想念が彼の頭を掠めた。「おれはなんといふ事をしたんだらう……！」

ネルリは身を起こした。細いしなやかな二本の腕が彼の頸に巻きついた——さきほど彼女が男の胸に、彼ら兩人に

とつてすら思ひがけなく、身を投じたときと同じやうに——けれど、これはもう別のものだつた。限りなく優しい、親しみと感謝をこめた抱擁だつた……アルブゾフはまるで毒蟲に觸られたやうに、思はず身ぶるひした。

「わたしのものだ、わたしのものだ！……今こそもうあなたはわたしのものよ、いつまでも！」ネルリのものと思はれない、羞恥を忘れた露骨な聲が、やはらかく響いた。「もうわたしの所にゐてくれるわね、ねえ？……もう今度こそあんたをどこへもやらないから、どこへも！……」

彼女は男の髪、顔、新しく生えた可愛い頬髯などを、優しく撫でさすりながら、に打ち負かされた燃えるやうな柔かい體を、男の方へすり寄せるのであつた。

「うむ、うむ……むろん……」とアルブゾフは呟いた。そして恐怖の念を覚えながら自問した——これからどうしたらいいのだらう、何を言つたらいいのだらう、自分でさへ理解できない事を、どう説明したらいいのだらう？

ちよつと一瞬間、彼女に悟られないためにそ知らぬ顔をして、再び愛撫を繰り返さうかといふ考へが起こつた。けれど、すぐにそれは不可能だと感じた。彼の全身は冷ややかな嫌惡の痙攣に收縮して、強制された不自然な抱擁は、

もの狂はしい憎悪を呼び起こし、いきなり女の喉を掴んで、締め殺したいやうな気がするほどだった。

「みてくれて？……歸りやしないわね？」とネルリは羞恥と喜びを響かせながらかう聞いた。

「うむ、うむ……」とアルブゾフは呟いた。それから急に愚かしいまで事務的な親しみの調子で、いかにもまづい言ひ譯をはじめた。その奇妙な誠實みのない聲は、彼の本心を暴露して了つたのである。「どうも分からないよ……：……實はね、今日はどうしても工場へ行かなけりやならないんだ。だつて、ナウーモフが行つて了つたもんだから。知つてらだらう……」

「おれは何を言つてるんだ！」といふ考へが彼の脳裡に閃いた。けれど、もう自分を制馭することが出来なくて、彼はいよ／＼間誤つて行つた。

けれど、ネルリはまだ気がつかなかつた。

「工場へ？……どんな工場だつてだめよ！……放しやしないから！……飛んでもない！」と彼女は媚びを含んだ命令の調子で叫んだ。それは胸の悪くなるほどわざとらしい、氣まぐれな調子で、彼女に似つかはしくないやうに思はれた。

「いや、本當に行かなくちやならないんだ！」いよ／＼ふかく深淵に落ちて行きながら、アルブゾフは言ひ返した。今度こそ彼の聲に、憂愁と、嫌悪と、いま／＼しさが、あまりにもまぎ／＼と響いたに相違ない。ネルリは突然しづかに手を放した。その手は死んだ蛇のやうに、男の肩から滑り落ちた。大きく見ひらかれた黒い目は、靜かに遠く離れながら、驚愕と不審の表情で、まともに彼の魂を見つめた。

この視線の重みに押されて、アルブゾフは伏し目になつた。頭の中には霧のやうなものが立ち罩めて、耳の中はがん／＼鳴つてゐた。その耳鳴りに交じつて、またもやみじめな兎のやうな叫び聲が、遠くぼんやりと、無意識的に聞こえはじめた。

「ゾーリヤ？」頭に閃いたある想念に慄えたやうに、ネルリは自信のなささうな、響きのない聲で呼びかけた。

彼は女の視線を避けながら、惱ましげに身をもがいた。

「いや、本當に……それに世間體も悪いから！……」

彼女は何か喜びを感じた様子で、その顔は一瞬間あかるくなつた。

「ゾーリヤ……もうかうなつたら、なんと言はれたつて構

やしないわ……平氣よー」

「いや、まつたく……具合が悪い……それよりまたいつか……日を變へて」と彼は呟いた。なぜか思はず口を滑つた最後の愚かしい一句のために、彼は急に心の中が空虚になつたやうな氣がした。

「お了ひだ！」といふ考へが彼の頭を掠めた。アルブゾフは足もとの床がどこか下の方へ、靜かに落ちて行くやうな氣がした。

「え……また日を變へて？」次第に遠く身を離しながら、ネルリは途方にくれたやうに問ひ返した。

彼女の目は大きくなつて、顔せんたいを蔽ふかとはかり思はれた。そして、恐怖の情を浮かべながら、男を見つめてゐたが、次第に深くその魂に浸み入るやうに感じられた。

アルブゾフはどうしていゝか分からないで飛び上がった。彼は苦痛と絶望に、悲鳴を上げなければかりであつた。

「おい、なんだつてそんなに？……おれは本當に行かなくちやいけないだよ……可笑しい女だなあ！」まるで他人のやうな聲で、彼は心にもなくかう言つた。それははめをはづして酔つぱらつた商人のやうに、妙にさう／＼しく下品な聲だつた。

それはもう本當に一切の終りだつた。ネルリはとつぜん直覺の光りに照らされた目を、いよ／＼大きく、いよ／＼恐ろしさうに見ひらいたが、いきなり頭を兩手で擱んで、枕に突つぶして了つた。

アルブゾフは彼女のそばへ飛んで行かうとしたが、思ひ切つてそれが出来なかつた。彼はしばらくの間、途方にくれたやうな、愚かしいうす笑ひを浮かべながら、彼女の周りをうろ／＼してゐた。彼は自分でも自分の醜い澁面を感じて、無意味に兩手を擡げるのであつた。

やがて盗人のやうにそつと外套を取ると、爪立ちで戸口の方へ行つた。そして、ちよつと後を振り返り、ひん曲がつたやうなみじめな苦笑を洩らすと、いきなり戸のそとへ飛び出した……

## 二九

星はあるけれど、暗い夜だつた。頭の上には、不可思議な輝かしい模様を描きながら撒きちらされた、數かぎりない星がきら／＼と光つてゐたが、下界は何もかも眞つ黒で、一つの大きな塊りに溶け合つてゐた。

アルブゾフはやつとの事で、自分の三頭馬車を見つけ

た。

長く待たされるものと、覺悟をしてゐた馭者は、馭者臺からおりて、馬車の踏み段に腰をかけながら、手巻きの煙草を吸つてゐた。煙草の火は闇の中に間を置いて光りながら、赤い顎鬚と、鼻の頭と、厚い唇を照らし出した。

アルブーゾフは馬車に駆けよつた。

「誰だ？……旦那さま、あなたでゐらつしやいますか？……」飛び上がつて煙草を遠く抛り出しながら、馭者はかう聞いた。「もうお出かけで？」

アルブーゾフは返事もせず、つか／＼と彼のそばを通りぬけ、いきなり馬車の中へ入ると、そのまゝそこに身を縮めて了つた。彼はこの間の晩のやうに帽子を忘れたが、それには氣もつかないのであつた。

馭者はちよつとびつくりしたが、うるさく聞かない方がいゝと考へて、ゆつくりともの／＼しく馭者臺へ昇り、手綱をさばいて馬をためして見た。小鈴は闇の中で不揃ひに鳴り出した。

アルブーゾフは黙つてゐた。

「どちらへ参りますので、旦那さま？」馭者はうしろへ振り返りながら、たうとうかう尋ねた。

答へはなかつた。アルブーゾフの黒い姿は、馬車の隅にちぢこまつたまゝぼんやりと見えてゐた。

「どこへ参りますので？」と馭者は驚いて繰りかへした。

「勝手にしろ、畜生！」とアルブーゾフは氣ちがひのやうに喚いた。

この氣ちがひじみた、野獸のやうな咆哮に、馭者はどきりとした。彼はあぶなく手綱を落とさうにしたが、逆上して馬に鞭をくれた。

アルブーゾフの體は、急にうしろへ投げつけられた。大地が彼の顔へむけて突進して來た。周圍で何やら唸つたり咆えたりし始めた。家や垣根や木立ちが、しみのやうにち／＼する。

曲がり角で、誰かが苦しげな呻き聲をたて、馬車は烈しくぐらりと揺れたが、もう馬を止めることは出来なかつた。死人のやうに青ざめた馭者は、帽子もなくして了つて、殆どアルブーゾフの膝にもたれないばかりに反り返りながら、張り切つた手綱を引きしめようとあせつてゐたが、闇の中で何ひとつ見分けがつかなかつた。たゞ馬車を往來の眞ん中からそらさないやうに、歩道の柱にぶつつけないやうにと、そればかり考へてゐた。

「さあ、飛び出したぞ！ 大變だ……もうだめだ！」といふ考へが彼の頭に閃いた。

アルブゾフはなんにも気がつかなくつた。彼は背中を丸くして、目をとちたまゝ坐つてゐた。體が馬車の兩側に交はる交はるぶつつけられて、風のために息がつまり、髪が千切れさうなのを感じてゐたが、妙な鈍い忘我の境から醒めることが出来なかつた。

たゞ恐ろしい一つの想念が、赤裸々な眞實として、彼の頭にはつきりしてゐた——たゞ一點に向かつて突進しようとする、異常な努力によつて支へられてゐた全生活が、不意に不思議なほど他愛なく拗れ歪んで、轟然と崩れ落ちて了つたのである。

例の兎のやうなみじめな叫び聲が、よく夢の中で感じられるやうな恐怖を誘ひながら、絶えず彼の耳に響き續け、もの間ひたげな絶望に満ちたネルリの瞳が、目の前に立ち塞がつて、次第に大きく擴がりながら轟々と鳴り響く夜も、恐ろしい眞つ黒な大地も、頭上に輝く星の模様も、ことごとく蔽ひつくすのであつた。

一たい何ごとが起こつたのか、彼は合點が行かなかつた……けれど、ネルリがいま自殺するに相違ないといふ事や、

彼女の生涯も自分の一生も破滅させて了つたといふ事や、彼女とミハイロフと、この二つの亡びた命の重みに耐へ切れないといふ事は、はつきり分かつてゐたのである。

髪をむしり、目をくらませ、息をつまらすもの狂はしい風と同様に、動物的な恐怖が闇の中で彼を包んだ。

一瞬間、彼は馬をとめて街道へおり、すこし脇の方へはなれて、無造作に自分の頭を射ちぬかうかとも思つた。けれど、彼にはそれが出来なかつた。が、それと同時に、一切を失つて破滅しつくした彼アルブゾフが、生きながらへる事が出来ようとも、考へられないのであつた。

「とめろ！」と彼は甲高い氣うとい聲で叫んだ。

馬車はもう市外へ出てゐた。そして、繼ぎめといふ繼ぎめをみりく、めきく言はせながら、いきなり夜と闇の中へ向けて、街道をまつしぐらに走つてゐた。

この叫びの中には、何か特別なものがあつたと見えて、すつかり逆上しきつた馭者が、ちよつと前にはどうしても馬をとめる事が出来なかつたのに、馬がはずみを食らつて膝を折るほど、人間わざと思はれない力で手綱を締めた。目の前の大地が黒雲のやうに舞ひ上がつて、アルブゾフは馭者臺の上へ投げ出され、馭者はどこか下の方に——べ

たりと坐つた馬の尻の邊にけし飛ばされてゐた。

鈴はまだまる一分間ほど鳴り騒いでゐた。馬具の革紐にもつれた馬が、闇の中でもがいたり、鼻を鳴らしてゐるのが聞こえた。

「右へ曲がるんだ……修道院へ」とアルプゾフはやけに呶鳴つた。

血の出るほど手をすりむいて、唇を裂いた馭者は、やつとの事で、馬の蔭から匍ひ出すと、馭者臺によち昇つた。そして、恐怖のあまり前後を忘れて、再び全速力で馬を走らせた。

「氣がちがつたんだ！」彼は一ことも口をきく勇氣さへなく、恐怖の念を抱きながら、アルプゾフの事をかう考へた。

一めん滑かな暗い曠野は、恐ろしい勢ひで馬車の窓を掠め流れた。ときどき境の畔道がちらく目に入る。風はいつも同じ太い調子で耳の中に鳴りつゞける。すべてのものは巨人の環のやうに、後へ後へと走つて行くが、たゞ永遠の模様を描きながら光る星のみは、いつも一所にちつとして、高く輝いてゐた。

## 三〇

雨は絶え間のない急流のやうに降りつゞけて、濡れしよぼけた見すばらしい町は、秋の日の濁つた水つぼい光りの中に、ぼんやりと滲みながら隠してゐた。濡れた黄色い落ち葉の散亂してゐる家々の庭は、がらんとして寒さうだつた。往來にはほとんど切れめなしに、水溜まりが續いて、慄へながら光つてゐるし、板の朽ちて壊れかけた歩道に沿うて、濁り水が氣ちがひみたいに流れてゐた。曠野は雨のかなたに洗んで、その向かうは虚無のやうに思はれた。町は廣い世界にたゞ一つ取り残されて、なぜかみじめな最後の日を送つてゐるらしい。

チージは外套の襟を立てて、上靴をびつちやびつちや鳴らしながら、並木街を走つてゐた。その尖つた毒々しい顔は血の氣がうせて、灰色に濡れしよぼけてゐた。まるで意地の悪い力ない涙を流して、泣いてゐるやうに見える。その小さな姿は濁つた雨の簾の中で、しよんぼりと淋しげに動いてゐる。どこもかものがらんとして、すべて生きとし生けるものは、雨を避けて身を隠してゐるのに、彼ひとりだけは憩ひを知らずに駈け廻つてゐる。彼は今日ほど深い孤



獨感を味はつた事がないのであつた。

「雲が走る……」と小柄な大學生は器械的に考へた。「雨が降る……これから何百萬年さきも、やはり雲が匍つて雨が降るだらう……上靴を修繕にやらなけりやならん！……この町から逃げ出さなくちやだめだ……こんなところゐたら、一生だいなしだ！……事によつたら、もう臺なしになつてるかも知れないぞ……これが一たい生活といふものか！……いま／＼しい！……ペテルブルグへ行きたいなあ……あすこではいま劇場や大學などが……だが、向かうでもやはり雨が降つてるかな？……」

彼は冷たさうな、長いネーフスキイの大通りを思ひ浮かべた。看板、濡れた辻馬車、濡れて光る敷き石、そして家、果てしもない家、濁つたネワ河がのろ／＼と氣むづかしげに流れ、何かの艇船が匍ひ、要塞の頂きに聳えた槍が霧の中に浮いてゐる。要塞の中には、新しい生活を空想した人々が幽閉されてゐる……彼らは小さな檻房を隅から隅へと歩きながら、小さな窓を覗いて見る。そしてこの田舎町の濡れた庭や屋根や、曠野の上に擴がつてゐるのと同じ灰いろに泣き濡れた空を、格子ごしに眺めてゐることだらう。

「ちよつ、いま／＼しい！……ぜひ上靴を修繕にやらなくちやならない！……金が手に入つたら、すぐやらなけりや……うか／＼してゐたら、肺炎にとつつかれてしまふ！……だが、結局それもいゝかなあ！……一思ひにくたばつて了へば、このぬかるみも、雲も、雨も見ないで済む……上靴のことも考へないで済むんだ！……くさ／＼しちやふ！……生活は過ぎて行く、そしていつかお了ひになるんだ……いづどんな風でお了ひにならうと、結局同じことぢやないか？……今ごろ伊太利あたりでは、きつと日が照つて、海が青々してるだらうなあ……え、太陽も海もくそを食らへだ！……一つ俱樂部へでも寄つて見るかな？」

チージは急に向きを變へて、どろ／＼したぬかるみをびちや／＼鳴らしながら、廣場を横切つた。そして、汚らしく踏み荒らされた、俱樂部の階段を昇つて行つた。支關番の部屋には誰も見えなくて、帽子かけには、醫師アルノルヂイの見馴れた帽子が掛かつてゐた。それを見ると、チージは嬉しくもあれば、うんざりするやうにも感じられた。一人ほつちでなくなるのは、なんとやつても結構だが、今までもう幾度こゝへ寄つて見て、同じやうにがらんとした、あたりの淋しい様子を見、たつた一つ掛かつてゐる退屈な

老人の帽子を發見した事だらう！

窓硝子はどんより曇つて、雨水が曲がりくねりながら、その上をせはしげに流れてゐた。廣間には青羅紗を張つた歌留多机が、開かれたまゝになつてゐたけれど、水つぼい光りの中では、それもやはり濡れたもののやうに見えた。

醫師のアルノルヂイは食堂に腰かけてゐた。その前にはヲートカの壘が置かれ、兩耳の蔭から、固く縛つたナブキンの端が覗いて、猪の耳のやうに動いてゐた。醫師の顔はゼリイのやうにぐたりと胸の上に垂れて、目はもの憂げにどんよりしてゐた。手もつけないスリーブの皿が、彼の前に冷たくなつてゐた。

「今日は、ドクトル！」と小柄な大學生は言つたが、もう幾度これを繰り返した事だらうと、またしても同じやうな考へが浮かんで來た。

醫師のアルノルヂイは、何やら喉の奥で妙な音をたてながら、目でヲートカをさして見せた。

「えゝ、そんなものを……いや、心の底までぐしよぐしよになつて了つた！」とチージュは氣むづかしげに顔を歪めたが、それでも杯を手もとへ引きよせた。そして、醫師アルノルヂイのかすかに慄へる太い手の下で、白い液體が次第

に硝子の杯を滿たして行くのを、ぢつと注意ぶかく、ほとんど待ちきれないやうに見つめてゐた。

「厭な天氣ですな、全く癩にさはつちまふ！」と小柄な大學生は言つて、醫師と杯を打ち合はせ、ぐつと一息に飲みほして了ふと、もういよゝゝ厭で堪らぬといふ風に顔を顰めた。

「さう。」とアルノルヂイは喉の中で言つた。

「もう死にさうなほど退屈だ！」

醫師は黙つてゐた。

「あなたには驚きますよ、ドクトル……あなたは自由な體だし、金にも困らない人なのに……」とチージュは言ひかけたが、もうこれは幾度も醫師に言つた事だと思ひ出して、急にぶつりと言葉を切つた。

醫師のアルノルヂイは片目を細めたやうだつたが、なんとも言はなかつた。

チージュは溜め息をついて、窓のそとをぢつと見つめた。

廣い消防隊の庭は、やみ間のない雨の簾の中で、ぼやつと滲んでゐた。柱の上の半鐘は濡れびかりに光つて、纏れた繩がだらりとさがつてゐたが、まるでたつたいま首くゝりをはづしたやうな鹽梅だつた。チージュは顔をそむけた。な

「ぜか彼は墓地と、濡れた黄色い落ち葉と、土饅頭を思ひ出した……きつと今ごろは、雨ですつかり憎氣にくしみこんだやうになつてゐるだらう！」

「あすこはやりきれないな！」と彼は獨りごとを言つた。

すると不思議なことに、肥えた醫師は彼の言つたことが分かつたらしい。

「さやう、厭ですなあ……」と彼は言つた。

「實に何もかも莫迦ばかげてゐる！」チージュは、ヲートカを注ぎながら、自分ではそれと氣がつかないで、かう言葉をつけた。「ときに、ドクトル、あなたはどう思ひます——アルブーズフは、ミハイロフが自殺するのを知つてたんでせうか、え？」

醫師はすぐには答へなかつた。

「知つてゐたんですよ。」と彼は鈍い聲で言つて、自分の杯さかづを取り上げた。

「本當になんといふ事だらう？ だつて二人は親友だつたんぢやありませんか……嫉妬しつとなんですかね？」

「知りません。」

「一體アルブーズフは今どこにあるんです？」

「知りませんな。」

「ぢや、あの……なんと言つたつけ……ネルリか、世間の噂うわさぢや、あれもやりかけたさうですね……」

「知りません！」と醫師のアルノルヂイは遮つた。

二人は杯を乾ほした。

チージュは何か尋ねて見たかつた。それはミハイロフの事のやうでもあり、自分自身の憂愁うれしに關する問題のやうでもあつた。彼は紛糾錯綜まがまがしたさまざまな事件を、頭の中で整理することが出来なかつたので、まるで霧に包まれてゐるやうな氣がした。けれど、ありふれた言葉を繰り返したくはなかつた。どんなに悲痛な絶叫げつや、プロテストを試みて憤慨ふんがいしたところで、もう死んで了つた人間を助けることは出来ない。いくら理窟りくつを並べても、それはなんの役にも立たない！ すると急に、舌を動かすのさへ骨が折れるやうな氣がして來た。

「どうです、また乾ほしませうか？」とチージュは機械的に尋ねた。

けれど、壘うの中にはヲートカが残つてゐなかつた。醫師のアルノルヂイは明りに透かかして一振りしたが、それをわきの方へ置いた。そして、ボーイたちの方へ向いて、何か共濟組合員きせいごうがいの合ひ圖あはれめいた手つきをした。

「さう。」新しい壺から酒をつぎながら、彼はかう言つた。

「何が——『さう』です？」と小柄な大學生は尋ねた。

醫師のアルノルジイは説明しなかつた。

すると、烈しい憂愁の念が小柄な大學生を襲つて、彼は是が非でも心を振るひ立たせる必要を感じた。人工的に激昂するなり、騒ぐなり、喧嘩するなり、なんでも構はない——たゞこの灰いろの、空虚な沈黙さへ破ればいゝのだ。

「たうとう僕とあなたと、二人きりになりましたね、ドクトル。」杯になみく／＼とついで、それを自分の前へ置きなほしながら、彼はかう言ひ出した。「みんなでこゝに集まつて騒いだり、飲んだり、興奮したり、議論したりしたのは、ついこの間のやうな氣がするの！……ナウーモフは哲學者ぶるし……エズゲーニヤ・サモイロヴナなんて人もあつたし……それにミハイロフ……クラウゼ……ところで、あのトレニョーフは氣の毒でしたな！……あんな事は誰しも思ひがけなかつた……いま／＼しい女のために身を亡ぼしたんだ！……」

「女なんか何も関係はありませんさ！」醫師のアルノルヂイは出しぬけにかう注意した。

チージュは一議論しようと思つたが、なぜかきつかけを逃

がして了つた。

「さう、がらんとして了ひましたよ！ まるでみんな風にも凌はれたやうだ！……まあ、あんなやつ勝手にしろだ！……ドクトル、あなたは孤獨といふものを恐れませんか？」

「いや。」醫師のアルノルジイは杯を押しやりながら、無關心な調子で答へた。チージュは機械的に杯をとつて、口へ持つて行つた。

「しかし、結局のところ、あなたはどうお思ひです？」からの杯を卓へ置いて、彼は口を歪めながら、言葉をつゞけた。「あの椿事は全體にナウーモフの罪なんでせうか、それとも偶然でせうか？」

「そんな事が分かるもんですか！」相かはらず無關心の調子で、醫師のアルノルヂイは答へた。

「でも、あなたはどう思ひます？」

「なんとも思ひませんさ。」

チージュは、頬がたるんで年寄りらしくやつれた、相手の顔をちよつと見やつた。そして老俳優のやうに綺麗に剃りあげた唇が、ほんの心持ち慄へたのに氣がついた。彼は何かに痛いほど胸を抉られたやうな氣がした。

「ドクトル、あなたは實に變な人ですね、まつたく！」  
「わたしはいつもかうですよ。」

「ねえ、僕はこんな氣がする——われ／＼仲間で、あなたが誰よりも一ばんに心底から、あの氣ちがひ技師の哲學に同感してるんでせう！」小柄な大學生は突つかゝるやうに言つた。

醫師は小さなどんよりした目で彼を見ると、なんともつかぬ表情で、目をぼちりとさせた。

チージュはちよつと考へてゐたが、

「ナウーモフ主義——と彼は思ひきりの悪い調子で言ひ出した。「ことによつたら、科學や藝術のあらゆる價値を汲みつくして、最後の一線まで行きつまつた現代社會にとつては、あの男の説も正しいかも知れません。もちろん取り得るだけのものを取りつくして、ありとあらゆる快樂を底まで汲みつくした社會は、自然の道理として、『それから先は？』といふ疑問に逢着して、それをナウーモフ的に解決せずにゐられない……僕はそれを認めます。しかし……」チージュは活氣づいて來た。すると鶏冠とよこかのやうな髪の毛が、勝ち誇つたやうにびんと立つた。  
「しかし、我々は未來の人類にまで、眞まことつ黒くろな死のゴール

を投げかける權利を持たないです！ 新しい人々——勞働階級が、生活の舞臺に現れるでせう。その旗には『幸福は萬人のために』といふ標語が書いてあるのです……そして、彼らとともに新しい科學、新しい藝術が起こりつゝあります。彼らにとつてナウーモフ主義なんか、縁のない無用のものです！ 彼らの魂はまだ空虚に歸してゐないから、決してナウーモフ的道德などを認めやしない。なぜと言つて、あんなものは無力な、飽滿した、洗練された淫蕩に耽りつゝある、現代の産物に過ぎないからです。彼らは……」

チージュの目はきら／＼光つて、頬には紅の色がさして來た。

醫師のアルノルヂイは溜め息をついた。

「なに、」と彼はもの憂げに言つた。「彼らもそのうちに飽滿するでせうよ。」

チージュは問誤ついた。

「あなたは恐ろしい厭世主義者ですね、ドクトル！……實際の話が、あなたはナウーモフよりいけないくらゐだ！」と彼は叫んだ。  
「さうかも知れない。」

「ぢや、なぜあなたは自殺しないんです、ドクトル？」と小柄な大學生は囁るやうに聞いた。

「またもや醫師はちよつと一瞬間、何の表情もない目を上げて、しばらく無言のまま相手を見つめてゐた。

「何のために自殺なんかする必要がありません？ そんなことをしなくても、わたしはどうに死んでをりますよ！」と彼は籠もつた聲でぶつきら棒に答へた。

「チージュはぎくりとした。何かしら奇妙な寒けが、彼の心へ流れ込んだ。その瞬間、まるで夢でも見てゐるやうに、自分はほんとに死人を相手に話してゐるのではないか、といつたやうな氣持ちがした。

「それはどういふ意味なのです、ドクトル？」と彼は慄へ聲で聞いた。

「醫師は無言のままだった。

「あなた聞いてゐますか？……僕は尋ねてゐるんですよ、つまり……」

「醫師はずるさうに目をばちりとさせた。

「一體あなたは氣でもちがつたんですか、ドクトル？……え、ドクトル！」不意にチージュは細い哀れつばい聲で叫んだ。

醫師はもう冷笑を隠さうともせずに、かた／＼の目を細めたが、やがて平然と太い手をのばして、二人の杯になみなみとついだ。

「やりませう。」と彼は言つた。

三

通りはまつ暗で、風が引つちぎつたやうに吹いてゐた。

肥えてどつしりした醫師のアルノルヂイと、小柄な大學生のチージュは、腕を組み合はして、雨に濡れた板張りの歩道を歩いてゐた。チージュは足をすべらして、ぬかるみに踏み込んだが、片手を振つてかう呷鳴つた。

「ドクトル、あなたは死人だ！……それつきりさ！……え、あなたは自分が死人だつてことを知つてますか？……僕はあなたが大好きだ。しかし、それでもあなたは死骸ですよ、ドクトル！……」

「よろしい、よろしい。」と醫師のアルノルヂイは彼の腕を支へながら、無關心な聲で答へた。

「僕がこんなことをあけすけに言ふのも、つまりあなたを心から愛してるからですよ、ドクトル……僕があなたを愛してることを、本當にしてくれませんか？……」

「しますとも、しますとも……」

「ドクトル、こゝは恐ろしい田舎町ですなあ！……これは死人の町だ！……僕はとき／＼、これはたゞこんな風に思はれるだけで、とこんな気持ちになることがある……つまり、これは町ぢやなくつて、たゞ幻にすぎない！……だつて、ドクトル、たゞ食べたり、飲んだり、寝たりするだけのために、何千人といふ人間がこんな淋しい、悪魔の穴のやうな所に生活してゐるなんて、そんなことがあり得るものでせうか？……そりや悪夢だ！……まあ、ちよつとまはりを見てご覺なさい。闇と、風と、雨と、ぬかるみで、往來は人つ子ひとり通りやしない……いや、本當によく見てごらんなさい。これが人間の町でこゝに人が住んでゐるなんて、そんな事が信じられますか？……ほんたうの生きた人間、いはゆる人類がですよ！……一たい人類なんて、誰の事を言ふんです？……僕やあなたですかね？……そりやまあ、われ／＼は多少ものが分かつてゐるけれど……彼等はどようです？……彼等は何のために生きてゐるんでせう？……假りにこの町が全然ないものと想像してごらんなさい……まあ、雨に付けて、川へ流れてしまつたとしませう……まるで糞み肥えかなんぞのやうに……跡かたもなくなつたと

想像してごらんなさい……そのために世界が一分一厘でも變はると思ひますか！……こないま／＼しい泥沼になつたからつて、誰ひとり氣のつくものさへありやしな……いや……ちや、一體どんな意味なんです？……なんだか得體の知れない役人だの、商人だの、町人だの、軍人だの、そんな連中はかりだ……これと同じやうな商人や、町人や、軍人や、役人が、やはりどの町にもあると想像してごらんなさい……全く寸分たがはず、同じやうな連中はかりだからやり切れない！……もと／＼原物がやくざなのに、そんなに何百何千萬といふコピーをつくつて、一たい何にするのだ！……まるで無意味だ！……もしいま高い所へ上がつて、露西亞の國を見おろしたら——たゞ露西亞の國だけで澤山だ。いや、一つの縣だけでも充分かも知れない——さうすれば何百といふほかの町でも、やはり雨が降つて、ぬかるんで、風が吹いて、眞つ暗闇の中を、ドクトル・アルノルデイと、大學生のチージュが、とぼ／＼歩いてゐるかも知れない……やはり同じやうに、何の役にも立たないドクトル・アルノルデイと、大學生のチージュがさ！……一體あなたはさう思つても癪にさはりませんか、絶望を感じませんかね、ドクトル？」

「いや、何も……」やつとのことでチージを支へながら、  
醫師のアルノルヂイは答へた。

「さう、あなたは何にも公憤を感じないんだ！……あなたは死んだ人間だからなあ！……さあ、白状おしなさい、あなたはたゞの死骸なんぞでせう！」

「それはもう言ひましたよ！……」

「えゝ、言ひましたなんて——そんなことが問題ぢやない……あなたはそれを痛感してゐるんですか……自分が生きながら腐敗してゐるのを、あなたは自覺しないんですか、ドクトル？……われ／＼はみんな生きながら腐つてゐるんだ！……みんな墓場行きの時が來てるんです、ドクトル。もう臭ひがして來ましたからね……わかりますか、臭ひがして來てるんですよ！」

「さうですとも、さうですとも。」と醫師のアルノルヂイは機械的に答へた。

「ドクトル、あなたは、ど、どうしてそんな、い、いき方ができるのか、僕は不思議でかなはない！……そりや死でせず、ドクトル！」

「死ですよ。」

「いや、これはどうだ。あなたはナウーモフよりも一枚

上手うまですな、ドクトル……あの男は破壊といふことだけでも信じてゐるが、あなたはまるで何一つ信じてゐない！……一體あなたは何か信じてゐますかね、ドクトル？」

「信じてゐますよ」

「なにを？」

「なんにも……」

「といつて、どういふ意味なんです？……なんにも信じないんですか、それとも『なんにも』を信じてゐるんですか？」

「行きませう、行きませう……」と醫師は遮まぎつた。

「いや、待つて下さい……一つ聞かして貰はなくちやならない。あなたは何か信じてゐるんですか？ あなただつて空な存在ぢやないんでせう、ちよつ、いま／＼しい！」

醫師はため息をついて、小さな目で物うげに見まはした。  
「空な存在かも知れない……」と彼は疲れたやうに答へた。

チージは頓狂な聲で笑ひ出した。

「こりや素敵だ、ドクトル！じ、じぶんを空くうな存在と、み、みとめて、それでお……おちついてゐられるなんて、そこまで徹底した人間は、まだ誰もゐないやうだ！……しかし、その時は一體どうなるんです、ドクトル？……僕も空な存



在を、み、みとめるのに、やぶ、やぶさかではないだんが……しかし、その先はどうなるんです？……」

「知りませんなあ……」と肥つた醫師は答へて、一そう強くチージュの腕をかゝへた。

小柄な大學生は二足ばかり歩いたと思ふと、腕をふりほどいて、あやふく倒れさうになつた。けれど、濡れた垣根に背をもたせて、やつと重心をとりながら持ちこたへた。

その恰好は何とも言へないほどみじめで、もう愛嬌らしい所さへなかつた。口髭はぐつしより濡れて、雨にしほたれた外套は、風にばた／＼あふられ、ぬれた顔は白や赤のしみだらけになり、目はどんよりとしてゐた。

「知りません、知りません……知りませんとは何のこつた？……どんな人間だつて自分の觀點を持つてゐます……これがなかつたら、人間生きてゆくことができない！」

「ところが、できるらしい……現にみんな生きてるぢやありませんか？」と醫師は無關心な聲で言ひ返した。

「生きてるんですつて？……生きてるんぢやない、悪臭を放つてるんだ！……ばか／＼しい！……あなた方は空気を毒してゐるんだ！……あなた方の傍にゐると、生きた人間は窒息してしまふ！……僕もこゝで窒息しかゝつてゐます

よ、ドクトル！……一體これでも生活ですか？」醫師の手にしがみ付きながら小柄な大學生は泣きさうな聲で叫んだ。「これが人生だなんて、一たい誰が言つたのだ？……ドクトル、金がない、烟草がない……それで到頭こんなにへべれけに酔つ拂つちやつて……これはもういよく最後だ、ねえ、ドクトル！……僕はもう最後が来たのを直覺しますよ！……泥沼に吸ひ込まれちやつた！……」

「ふん、何を下らんことを！」と醫師は勵ますやうに言つた。

二人は狭い板の上をすべりながら、のろ／＼と暗闇の中を歩いて行つた。風は縦横に荒れ廻つてゐた。物狂はしい黒雲が渦を巻きながら、濡れた屋根の上を走り、黒い木立ちは曲がりくねつた濡れた枝を、四方八方に振りまはしてゐる。チージュはのべつぬかるみに足をすべらした。とある曲がり角で、彼はまた倒れさうになつたが、醫師がやつとのことでそれを抱きとめた。彼は小柄な大學生を、品物のやうに垣根へ立てかけて、ぬかるみへ飛んだ帽子を拾ひ上げ、泥を拭きもしないで、ぬれた頭へ横つちよに被せた。チージュはそれさへ氣がつかなかつた。

「だが何と言つても、僕には信仰がありますよ、ドクト

ル？……」垣根から身を離さうと空しく努力しながら、彼はかう叫ぶのであつた。「たとへ僕の身は破滅だとしても……これがいよ／＼最後だとしても……やけ酒に身を持ち崩すとしても、それでも僕は信仰を持つてゐる！ 信仰を持つてゐますよ、ドクトル！……どんなことがあつても信じる！ 僕は人類を信じてゐるんです、ドクトル……民衆を……プロレ……プロレタリアートを信じる……！……労働大衆

立て、進め！」小柄な大學生は調子つばづれに喚き出した。「未來は民衆のものですよ、ドクトル！……僕はプロレタリアだ、僕は貧しい無一物のチージュだ、誰にも用のないチージュだ……しかし、このチージュは信仰を持つてます、ドクトル！……固く信じてゐます！ 信じるとも！……古き世界をしりぞけて！……さあ、歌ひませう、ドクトル！……ぶらうき世界をしりぞけてえ……お歌ひなさいと言ふのに、ドクトル」

「それより行つて寝ませう。」醫師のアルノルヂイは、どうかして、連れて歸らうと骨折つた。

「どこへ？」

「家へさ。」

「家へ？……僕には家なんかありませんよ、ドクトル！……」

古き世界をしりぞけて、その塵ひぢを足より拂ひ……ドクトル、僕は何と言つてもあなたを……」

目に見えぬ合唱隊を指揮してゐたチージュは、とつぜん醫師の手からすべり抜けて、何か知らばか／＼しい踊りの足つきをしたと思ふと、兩足を前へすべらして、ぺちやりとぬかるみの中へ尻餅をついた。

醫師のアルノルヂイは、やつとのことで彼を助け起こし、すつかり濡れて泥だらけになつた帽子を、もう一ど彼の頭へ被せた。

「さあ、もう澤山、行きませう！」

チージュは急に酔ひがさめたやうにおとなしくなつて、黙り込んでしまつた。そして、忙しげに鼻を鳴らしながら歩き出したが、醫師が餘り高く腕をつり上げたので、横這ひのやうな恰好だつた。

「僕もめちやくちやに酔つぱらつてしまつた！」しばらくたつてから、彼は無邪氣な、人のいゝ、同時にみじめな調子で言ひ出した。「なあに、構ふもんか！ 死ぬるくらゐなら音楽入りだ！……ねえ、ドクトル、さうぢやありませんか？」

「さうですとも、さうですとも！」と醫師のアルノルヂイ

は、疲れたやうな聲で合ひ槌を打つた。

「だつて、おんなじ事ぢやありませんか、ドクトル……おんなじことぢや……一體これが人生ですか？……一たい僕は人間なんですか？……僕は破滅だ、ドクトル……いよいよ最後だ……」

チージューはつまづいたり、すべつたり、両手を振りまはしたりしながら、急におい／＼泣き出した。

### 三三

翌朝、彼はおそく目をさました。

部屋の中は濕つぽくて、灰色に寒かつた。暗い不愛想な日が地上を訪れて、鉛のやうな空が低く垂れてゐた。

小柄な大學生は頭が痛んで、舌は棒のやうに口中をふさぎ、手足は衰弱のために震へてゐた。そして、何か取り返しつかぬ恥辱の意識が、心の底にひそんでゐた。

彼は昨日どんなことがあつたのか、一生懸命に思ひ出さうとしたが、結局できなかつた。

始め彼は醫師のアルノルヂイと二人で、薄暗いがらんとした倶楽部の食堂に坐り込んで、飲んだり話したりしてゐた。その時は全くしらふのやうだつたが、そのうち急に灯

がついた。恐ろしく黄色い、ぼやつと曇んだやうな灯だ。

それから、人が大勢あらはれて来た。顔はよく見分けがつかなかつたが、みんな恐ろしく感じのいゝ愛すべき人たちで、向かうでも彼チージューを愛してゐた。彼は誰かと杯を合はしたり、接吻したりした。ナイトカと鯨の匂ひのぶんどんぶんとする、誰かの大きな濡れた髻を覺えてゐる。それから何か口論になつて、彼は誰かに決闘を申し込んだ。誰かが腕を抑へると、彼はそれを振りはなして、嗚鳴り立てた……やがて、しばらくの間は、何もかも暗い穴の中へ落ち込んだやうな具合だつたが、間もなく醫師のアルノルヂイと腕を組みあつて、往來を歩いてゐた。彼は歌をうたつたり、醫師に愛の打ち明けをしたり、接吻したり、轉んだり、泣いたりした……

しかしそのほかに、何より恐ろしいことは（もつとも、チージューはその記憶について、はつきりした確信がなかつたけれど）、町の警部と「君僕」の杯をして、おれは警部の魂をひつくり返してみせる、革命が起こつたら、民衆の先頭に立たせてみせる、などと高言したことである。警部は彼の腕を支へて、いち／＼彼の言葉に合ひ槌を打ちながら、絶えず家へ歸るやうにすゝめたらしい。

それは醜態だつた。ばか／＼しいみじめなことだつた。チージュは、いま町ぢゆうの人がその噂ばかりしてゐるやうな気がした。彼はしじゆう心の中で、そんなことはみんなつまらない話だ、酒の上ではもつと醜態を演ずる者さへゐるではないか、一日二日たてば、そんなことはみんな忘れてしまふ、かう言つて自分を慰めようとしたけれど、羞恥と嫌惡の情は耐へ難いものがあつた。

テーブルの上には二通の手紙がおいてあつた。チージュは衰弱感を征服しながら、封を切つて讀まうとしたが、字が目の前にちら／＼踊つて、嘔き氣と、目まひと、刺すやうなこめかみの痛みがますます募つてくるので、彼は手紙を抛り出し、ぐつたりと長椅子に身を横たへた。すると、長椅子は忽ちふは／＼と動き出して、つゞいて壁が流れはじめ、天井は一つ所で次第に早く廻り出した……

チージュは兩手で頭を抑へながら、立ち上がった。そして、痛みと嘔き氣と憂愁のために、身の置き場を知らないやうに、窓ぎはに腰をおろした。對家のない憎惡の念が、恐ろしい力で彼を捉へた。それは床へ頭をぶつつけたいやうな気がするくらゐだつた。けれど、ちよつとでも體を動かすと、たまらないほどこめかみが痛んで、目の中が暗くな

つてくるので、小柄な大學生は身動きはおろか、息さへしないやうに、無意識に努力してゐた。

「ふう……もう決して酒なんか飲みやしない……」彼は絶望を感じながらかう考へた。

不愛想な年増の女中が来て、煮たつた湯沸をおいて行つた。熱い湯氣が天井へ渦巻き昇つて、そのためになほ氣持ちが悪くなるやうに思はれた。目まひが一そゝ激しくなつて、耐へ難い嘔吐感が喉もとまで込みあげて來た。

「あゝ、何といふことだ！」兩手で額を抑へながら、チージュは惱ましげにつぶやいた。

彼はみんなに見捨てられ忘れられた、恐ろしい孤獨な身の上のやうな気がした。誰かにやつて來て、憐れんで貰ひたかつた。

どうやらかうやら茶を入れた。滋味を帯びた熱い液體が、始めはいくらか氣持ちを軽くしたやうな気がした——少くとも、口中のいやな味だけはなくなつた——けれどその代はり、心臟が重くなつて、動悸が高まつて來た。

「ふうつ、ほんとにこれはどうしたと言ふんだらう！」チージュは殆ど涙をにじませないばかりで、極度の絶望に頭を振つた。こめかみがづきりと痛んで、殆んど聲を立てずに

ゐられないくらゐだつた。

なにか酸っぱいものをうんと飲んだら、樂になるかも知れない、かういふ考へがふと頭に浮かんだ。小柄な大學生は壁をたゞき始めた。

「アンナ・ツシーリエヴァナ！……あなたの所にレモンはありませんか、後生です！」

「たゞ今。」

主婦が壁の向かうでこそ、動きまはつて、戸棚の戸をぱたりと閉めたり、皿の上でナイフの音を立てたりしてゐるのが、チージュの耳に入つた。頭痛はだん／＼ひどくなつて、どうかすると、まるで氣が遠くなることもあつた。いつまでたつても、レモンが來さうにないやうな氣がした。そして病的な焦燥のために、殆ど泣き出さなればかりだつた。

やつと主婦が皿を持つて姿を現した。皿の上には大きな、黄色い、酸っぱさうなレモンを、薄く切つたのが盛つてあつた。

「今日は、キリール・ドミートリッチ！ さあ、レモンを持つて來ました。」

「ありがたう。だけど、なぜそんなに澤山もつて來たんで

す？ 僕はほんの一切れと思つたのに。」

額に縮れた毛が垂れかゝつて、頤の邊がもう重さうにたるとゐる、白粉をこて／＼つけた主婦の顔は、ふざけたやうな、ずるさうな微笑を浮かべてゐた。

「いゝのよ、どうぞうんと召し上がれ！……昨日はあなたどうしてあんな事をなすつたの……よく恥づかしくないことね？」

「何も恥づかしいことはないぢやありませんか？」不自然に虚勢を張りながら、相手の顔を見ないやうにして、チージュはかう言ひ返した、そしてまたこめかみを抑へた。

「あなた氣分が悪いの？ 頭痛がするの？……まあ可哀さうに！」アンナ・ツシーリエヴァナは色つばいしなをして、同情を表した。「なんなら濕布をしてあげませうか」

「いや、なに……それには及びませんよ！ かうしとけば癒ります！」

「だめ、だめ、わたしは今すぐ！」上着につけた桃色のリボンをひらくさせ、肥えた大柄な體をゆすぶりながら、彼女はせか／＼と出て行つた。

チージュはレモン入りの茶をコップに二杯飲みほした。すると、本當に氣分が軽くなつた。なんと言つても、全然ひ

とりほつちではないと思ふと、胸の中が温くなるやうな気がした。

「實際のところ、親切なおかみさんだ！」彼女が色つぼいしなをして、いつも四十女の肉體美を半分むき出しにしてゐるのに、惱まされ通してゐるのを忘れながら、彼はかう考へた。

主婦は間もなく引つ返した。彼女は酸に浸したタオルと、ヲートカの小壺を持つて來た。「そりやまた何のために？」ヲートカを見て、思はず全身を慄はせながら、チージュはかう叫んだ。

「大丈夫、大丈夫、まあ、一杯飲んでごらんさい、よくきゝますから。死んだわたしのつれあひも、いつもかうしてゐたんですよ。」

彼女は殆ど無理やりチージュに一杯のませた。小柄な大学生は、頭痛のためにすっかり自分の意志を失つて、完全に彼女のなすがまゝに身を任せた。それどころか、彼女がこんなに自分の世話を焼くのが、いゝ氣持ちでさへあつた。彼は久しい以前から、愛撫と同情に遠ざかつてゐたのである。

杯を口を持つて行つたとき、チージュは内臓といふ内臓に激しい痙攣を感じて、目の中が暗くなり、顔は緑色になつ

た。

「大丈夫、大丈夫！」とアンナ・ワシーリエヴナは優しく勵ましながら、杯を彼の口へおし付けた。

チージュは殆んど喉を窒らせさうにしたが、すぐに快い温か味が胃の腑を包み、もの憂い疲労感となつて全身にひろがつた。

「さあ、もう一杯……さう、さう！」

もう二杯目を飲み下すのは、たうてい不可能に思はれたが、今度もらく／＼と喉を通つたのに、チージュは自分ながら驚いた。慄へは納まつて、こめかみを刺すやうな痛みも、鈍つたやうに思はれた。

「そうら、ごらんさい。それだのにあなたはいやだなんて……ねえ、樂になつたでせう？」とアンナ・ワシーリエヴナは親身な調子で訊ねた。もう色つぼいしなは少しもなかつた。

チージュは微笑した。

「えゝ、樂になりましたよ！」

「さうね……だから、いつもわたしの言ふことをおきゝなさい……今度は横におんななさいな、濕布をしてあげますから。」

小柄な大學生はどぎまぎした。

「いや、それを貰ひませう……僕が自分で……」

「いゝえ、いゝえ！ 遠慮なんかしないで頂戴、後生だから……」

チージュは内氣らしく笑ひながら、寢臺の上へ横になつた。アンナ・ワシリーエヴナはその傍に腰をおろし、酸の匂ひのする冷たいタオルを、巧者な手つきで小柄な大學生の額にあて、両手でびつたりと撫でつけた。

チージュが下から見ると、彼女の肥つたばら色の腕が、廣い上着の袖の中で、まだまる／＼としたしなやかな肩の邊まで見透かされた。香水と、白粉と、まだ何か別なものの匂ひがした。小柄な大學生は少々いやらしくもあれば、快くもあつた。

冷たい湿布のおかげで、頭痛は鎮まつた。ものうい輕快の感じが全身に流れて行つた。

アンナ・ワシリーエヴナは傍に坐つて、とき／＼氣づかはしげにタオルを撫でた。チージュははつゝの悪い微笑を見せながら、思はず廣い袖の中をちら／＼覗いた。そこには肥えた腕の線が柔かくうねつて、腋の下に黒いものがぼんやり見えてゐた。

彼女は恐ろしくちか／＼と坐つてゐたので、小柄な大學生は腿の邊に彼女の體の温かみと柔らかみを感じた。「一體どこであんなに飲んだんですの？」と彼女は咎めるやうに聞いた。それは世なれた年上の女が、氣に入つた青年に話しかける調子だつた。

「いや、なあに……ちよつと俱樂部へ寄つたところ……醫者のアルノルヂイがゐて……始めはちび／＼やつてみたんだけれど、やがて何がなんだか、めちや／＼になつて了つたんです……」

「なんだつてあなたそんな事を？」

「だつて退屈なんですもの、アンナ・ワシリーエヴナ！」

「それはね、あなたがいつも／＼一人ぼつちだからですよ！……そりやとき／＼破目をはづすのは構ひませんが、でも……あなた、わたしがこんなことを言ふからつて、腹を立てちやいやですよ。だつて、わたしはあなたのお母さん役にちやうど似合つてるんですもの……」

「おや／＼、もうお母さん役ですか！」と小柄な大學生は不器用な愛嬌を見せながら、かう言ひ返した。すると彼の目はまたしても無意識に彼女のあらはな腕をすべつた。

「ちよ、おれはなんて俗なことを言つてるんだ！」と彼は

氣むづかしさうに考へたが、それでも何か妙に氣持ちのいい昂奮を感じた。「いや、全くのところ、この女もまだまんならぢやないぞー……」

アンナ・ワシーリエヅナは聲をたてて笑ひながら、指でおどかす眞似をした。彼は恥づかしくなつて來た。けれどそれと同時に、胸をわく／＼させるやうな無恥な考へも、ちらと心にひらめいた。「なぜそれがいけないんだ？……」

「勿論お母さん役ですわ！」と彼女は繰り返した。するとチージュは、彼女の温かく柔かい、とは言へもう彈力を失つたが、ずつしりと重く押しつけられるのを感じた。「ねえ、あなた、一二杯飲むと……」

「あなたは僕が酒飲みにならないのを、心配してるんですね？」心をそゝるやうな女の肉體の温かみを、殆んど無意識に自分の體へ吸ひ込みながら、チージュは大きな聲で笑ひ出した。

アンナ・ワシーリエヅナはぼつと赤くなつた。すると急に若々しく見えて來た。

「いゝえ、ほんとうよ！……わたしあなたがお氣の毒なの。あなたはいつも一人ぼつちですものね……わたしもやはり一人ぼつちだけれど、わたしはこんなお婆さんでせう。と

ころがあなたはまだお若いんだから、親身になつて優しくしてくれる人が要りますわ。」

彼女の聲には本當に温いひどきが感じられた。小柄な大學生は感謝するやうに彼女を眺めた。

「あなたはけふ莫迦に綺麗ですね、アンナ・ワシーリエヅナ！」

「ほんと？」と彼女はふざけた調子で問ひ返して、男の方へ低く低く屈み込んだ。

やゝ心持ち細めた、何もかも知りつくしてゐるやうな、彼女の暗い目の中に、何か危険な火花がひらめいた。

「本當ですよ！」とチージュは慄へる聲で言つて、自分でも思ひがけなくかう言ひ足した。「あなたに接吻したいくらい！」

その瞬間、二人の視線が出會つた。何かしら露骨な鬨々しい光りが、目から目へと流れた。

「まあ、寝てらつしやい、寝てらつしやい！」とアンナ・ワシーリエヅナは言つて、何か物に驚いたやうに、急いで立ち上がった。

そのすぐ前までは、彼女の接近が窮屈に思はれてゐたのに、今は彼女の立ち上がったのが、生理的に残り惜しく、



いま／＼しく感じられた。

「歸るんですか？」と彼は氣まつい調子で訊ねた。

「だつて、おやすみにならなくつちや……お加減が悪いんですもの！」彼女は男の顔を見ないで笑ひ出した。そして、ほつちやり肥えた體をそらして、ちよつと心持ちのびをし

た。  
チージュの頭には、女の腰に抱きついて、いきなり露骨に自分の寢臺へ引きよせたいといふ欲望が、瞬間的にちらりと閃めいたが、でぶ／＼した大きな體のことを考へると、漠とした嫌惡の念を感じて、しばらくためらつてゐた。

アンナ・マシーリエヅナはちよつとの間そこに立つて、髪をなほしなどしてゐたが、別れに何となく謎めいた圖々しい調子で、

「ぢや、早くよくおんななさいね……わたしまた來ますから！」と言ひすてて、出て行つた。

### 三三

それは氷と雪の間近さを思はせるやうな、どんよりした沾ひのない晩秋の一日であつた。ぎこちない風が、がらんとした庭の黒い裸の枝を激しく吹きたわめ、小道小道には

黄色い落ち葉が、一と塊りになつて追ひ立てられてゐた。往來のぬかるみは忽ち凍つて、まるで鐵で鑄たやうな固い轍の跡は、歩く度びにかさ／＼と鳴り、その中をこまかい埃が渦まき走つてゐる。とき／＼空がかき曇つて低く垂れ、殆ど目に見えぬくらゐの小雪が、空中にひら／＼して來るのであつた。

小柄な大學生は、とさかのやうな髪をふり亂し、目をどんよりさせながら、ほんたうに病氣した癡のやうな恰好で、自分の寢臺に坐つたまゝ、床の上の一點を鈍く見つめてゐた。そこには髪の毛のからみついた、曲がつたピンが落ちてゐた。

今こそ彼は一切が終つたのを悟つた。あれほど永いあひだ、熱情こめて空想してゐた美しい偉大な生活は、永遠に彼を離れてしまつたのである。

「萬事了すだ！」

どうしてこんなことになつたのか、彼は合點が行かなかつた。

彼は酔つぱらつてゐた、見苦しい俗惡な酔つぱらひ方をした。往來に倒れたり、歌を唱つたり、警察の役人と接吻したりするほど、身を持ち崩してしまつた。それから激し

い二日酔ひ、耐へ難い孤獨の意識……

彼の知り合ひで、いくらかでも人間あつかひの出来る連中は、一人として周圍に残つてゐない。何か漠とした恐ろしいものが町の上を吹き過ぎて、かつて存在しなかつたもののやうに、すべての人を奪ひ去つたのである。騎兵少尉補クラウゼ、ナウーモフ、リーザ、ミハイロフなどの顔が、霧をすかさやうに思ひ起こされた……たゞ一切の希望を失つた、飲んだくれの老醫師アルノルヂイだけが、彼と一緒に生き残つて、意味もないことを呟やいてゐる。

「そんなことをしなくても、わたしはとうから死んでをりますよ……」

周圍には町人や、商人や、僧侶や、軍人や、役人ばかりで、勤めに通つたり、かるたをしたり、酒を飲んだり、結婚したり、子供を生んだりしてゐる。その子供がまた大きくなつたら、同じやうな商人や、町人や、役人や、軍人になつて、同じやうに勤めに通つたり、酔つぱらつたり、果てしもなく無意味に生殖するのだ。

なるほど醫師アルノルヂイの言ふとほりだ。彼はまた歩いたり、話したり、感じたりしてゐるけれど、とくの昔に死んでしまつた人間だ。しかし、彼は死んだといふことを

自覺してゐる。ところが、幾千萬の人間は地球の周圍を腐屍に集まる蛆蟲のやうに蠢動して、自分たちが歩きまはる死骸に過ぎないといふことも、誰かの意地悪い皮肉な手でまた墓へ埋められるまで、暫く世の中へ放たれて動きまはつてゐるといふことも、一さい意識しないのであるのだ。

かういふ蒼ざめた死人どもの間を、なぜか急がしさうに駆けまはつてゐるのが、彼なのである、小柄な大學生のチージュなのである。彼は何ものかを信じ、その何ものかのために苦しんだり、激昂したりした……もつとも、今でもやはり信じてゐる！ 何かよく分らないが、とにかく信じてゐる！ 惱ましい苦痛と憂愁を抱きながら、空しく信じてゐる……たゞ今といふ今こそ、彼はもう自分の信じてゐるものから離れて、靜かに深く深く沈んでゆく。實際のところ、彼は萬事したといふことを、もう前から感じてゐるが、手足をばた／＼跳きながら、自分で自分を欺いてゐたのだ。

さうだ、人類の道はひろくとして無限である。けれど一人一人のちつぽけな人間は、その道を二足三足すゝむかと思ふと、やがて落伍してしまつて、どこかうしろの方で、永久に跡もなく消えてゆくのだ。偉大な導師、豫言者、先

驅者なども、幾千年かの間は、不可抗力に驅られて前進する人間の群れが、その記憶を捧げて行くけれど、やがて世紀の流れがその名を磨滅さして、タイムの塵に掩ひつくすのだ。無数の小柄な大學生チージュは、自分でもそれと気がつかないで、自分の浅い墓穴めがけて、せか／＼と走つてゆきながら、跡かたもなくその中へ落ち込んでしまふ。誰の耳にも聞こえないさら／＼といふ低い音を立てながら、誰かの無關心な大きい手で掃き飛ばされる死んだ蟻のやうに、彼等は後から後から穴の中へばら／＼と落ちてゆく。やがてその上に土が被せられて、新しい道がつけられる。そして、これらの道の一つ一つの埃が、かつて鼓動し、苦しみ、期待した人間の心臓から生じたものなどとは、夢にも考へるものがないのである。

終焉は避け難い。小柄な大學生のチージュは、自分の努力が全く無益で、滑稽なものだといふことは氣もつかないで、穴のふちで空しく身もがいてゐる。たとへ彼が箒で掃きとばされ、埃りで目のつぶれた蠅のやうに、身もがきをやめたところで、何一つ變はりはないのだ。いま彼は本當に疲れてもがきやめ、無意味な停滞状態と、泥酔と、凡俗化と、でぶ／＼肥つた愚かな年増女との醜惡な關係——かう

いふどん底まで落ちてしまつた。

「どうしてこんなことになつたのだらう？」と小柄な大學生は自問した。これはもう百度近く發する問ひなのだ。

彼は淋しかった。個人的幸福の小さなかけらでも欲しかつた。誰でもいゝから自分を憐れんで、優しく言つてくれる者がほしかつたのだ。ところが、まはりには誰もゐなかつた。誰も彼などを構ひつける者はなかつた。ところが、彼女は何ともいへない單純な、善良な女に見えたのである。

その日、彼は二日酔ひの眠りからさめると、町をぶらつきに出かけた。どこもかしこもがらんとして、夕闇が、汚らしい往來や、貧しげな小家や、濡れた垣根や、菜園などを、佗びしく包んでゐた。彼は俱樂部へ寄つてみたが、そこには誰もゐなかつた。彼はさびしく惱ましい氣持ちで、とぼとぼと醫師アルノルデイの所へ歩みを運んだが、彼は家にもゐなかつた。そのとき、きのふ酔つたまぎれに「君僕」の杯をしたりした、例の變部に出くわした。

チージュは氣のつかない振りをしようとしたが、變部は立ち止まつて、大膽でから／＼と笑ひながら、皮肉な口を利いて、自分の家へ招待した。二人は一生懸命に君とか、あなたとかいふ代名詞を避けるやうにした。チージュは、つが

わるくなつたので、警部の所へのごく出かけて行つた。そして、酔つぱらつた警官とも一座して、またもやしたたか酒を浴びた。警官たちは騒々しく高笑ひして、ばか／＼しい皮肉を浴びせかけ、彼の下宿の主婦のことで、いやらしい猥褻なあてこすりを言つた。警部は彼の肩をぼんと叩いて「君も豚だなあ」と言つた。始めチージュは、體がぞく／＼するほど、不快でたまらなかつたが、だん／＼耳鳴りがするにつれて、警官たちが愛すべき好漢のやうに感じられ、警部は親愛この上もない男のやうに思はれて來た。そして、彼等の下品な洒落も、一ばしの警句に受けとられた。しまひには、チージュも自分で下劣な事を言つたり、接吻したり、ばか笑ひをしたりした……

彼は大分おそくなつて家へ歸つた。もう殆ど夜中だつた。主婦はもう寢てゐたが、露はな肩に大きなシヨールをかけて起き出し、彼のために戸を開けてくれた。昂奮したチージュは彼女に冗談口をきゝはじめ、どちらとも取れるやうな思はせふりを言つて、シヨールをとつてくれと頼んだ。ヲートカ、間近かに置かれた裸體、寢床で温められた女の匂ひ、黄色い叫び聲、小刻みな神經質の笑ひ——かういふものが彼の頭を逆上させた。

ちよつと一瞬間、小柄な大學生はふと我に返つて、ちよつぽけな貧弱な酔つぱらつて昂奮した自分自身と、半裸體の肥えた大柄な女のみだらな姿を、嫌惡の念をもつて眺めたけれど、何か面當じみた奇妙な自暴自棄の念が、彼を捉へた。

「なに、どうせ同じことだ！」かういふ考へが彼の頭を掠めた。

みだらな穢らはしいひと騒ぎがあつた後、不意に彼女がチージュの部屋に現れた。

「おゝ、なんといふ穢らはしいことだ！」小柄な大學生の心はうづき惱んだ。

翌朝、彼は部屋から出るのが怖かつた。けれど、彼女は自分の方からやつて來た。圖々しく打ち解けて、露骨な好色らしい微笑を浮かべてゐる。女中はゐなかつた。中學へ行つてゐる小さな息子が、隣りの部屋で何か大きな聲で勉強してゐた。昨夜この子供が淋しくなつて、不意に戸を開けたので、彼女は髪を振り亂したまゝ飛んで出て、息子をつき出しながら、戸をばたんと閉めたことを、チージュは激しい恐怖と、嫌惡の念を感じながら思ひ出した。

やがて一家そろつての食事となつた。その時、彼女はチ

「ジュにいゝ料理を選<sup>よ</sup>つて皿へつけ、彼をキリーシャと呼んだ。そして、鼻を皿へつつ込むやうにしてゐる息子の愚痴を並らべて、構はず叱つてくれとチージュに頼んだ。

食後、小柄な大學生は自分の部屋へ引つ込んで、戸に鍵をかけると、片隅の寢臺へ身を投げ出して、死んだやうな鈍い忘我の状態に落ちた。そして、寢臺の傍に落ちてゐる曲がつた汚らしいピンを、無意識な動物的恐怖をもつて見つめてゐた。

次第に夕闇が濃くなつて、ものの影が部屋の中を這ひ、地平線の赤い綺<sup>も</sup>も次第に消えて、ま裸な庭の木立ちの影が、ごつ／＼と眞つ黒に描き出された。

チージュは閉め切つた部屋にちつと坐つてゐた、額にとさかのやうな毛のおつ立つた、やせた蒼白<sup>あざはく</sup>い小さな姿は、病氣した驚<sup>おどろ</sup>にそつくりだつた。

彼の想念は鈍<sup>鈍</sup>くのろ／＼と這ひまはつて、心の中には死んだやうな絶望のほか何もなかつた。

もし彼の心や頭の中にあるものを、言葉で傳へることができたら、こんな風にひびいただらう。

「まあ、よろしい、おれは信じてるとしよう。人生が美しく偉大なものだといふことを、信じてゐるとしよう。しか

し、その人生はおれのためぢやない！……おれは萬事をはつたのだ。もう永久にこゝから抜け出すことはできない。戦はうといふ力もなければ、希望もない。おれはだん／＼落ちてゆくばかりだ……もし現在よりもつとひどい境遇があるとしたら……みんな勝手に生きるがいゝ、幸福でゐるがいゝ。自由な美しい人間生活の知られざる風景が、諸君の眼前に展開されるとしよう！……しかし、おれは破滅した人間だ！……おれは思想が消えて、魂が淺薄に俗化してゆくのを感じる！……だが、それはおれの罪ぢやない。おれは戦つた、信じた、空想した、そして、他人をも信じるやうに鼓舞して来た！……おれはもう力が盡きたのだ！……ところで、おれにこの力を與へなかつたのは、一たい誰の罪だらう？……おれは小つぽげな、不仕合はせな、運命と世間に侮辱された人間だ！……おれは倒れた。もう永久に立つことはできない！……人生が美しいものと變じ、人類が幸福になるなら、それでいゝぢやないか……おれは死に瀕しながらも、汚い水たまりの中から手をさしのべて、おれの事など思ひ出してもくれない、未來の幸福な人々の行路を祝福しよう！」

時は過ぎて、闇は地上を包んだ。けれど、チージュは依然

としてちつと坐つたまゝ、死んだやうな救ひのない絶望の中に、頭からすつぽり洗んでゆく自分を考へた。いや、考へたのではない、たゞ感じたのである。主婦が幾たびか戸を叩いて、彼の名を呼んだ。

「キリール・ドミートリッチ！ キリューシャ！……あけて頂戴！……なんだつて鍵なんかかけたの！」

けれど、小柄な大學生は、いよ／＼深く寢臺の隅へ體を埋めながら、

「僕は氣分が悪いんです……僕はもう寝るんだから……」と答へた。

夜になつた。部屋の中は薄暗く不氣味だつた。外では風がさわいで、乾いた小雪が硝子を打つのが聞こえた。明けがた近く本當の雪になつて、初冬の雪風がうなり始めた。

薄青い光りが部屋の中へさし込んで、蒼ざめた目で臆病さうに隅々を見まはした。嵐はをさまつて、大地は雪に蔽はれ、すべては坦々として白く清らかに見えた。庭の木立ちは白い雪の塊りに包まれて、身動きもせず立つてゐる。チージュの部屋は静かにがらんとしてゐた。あらはな壁は冷ややかに、氣むづかしく部屋の中を見つめて、息づまるやうな静寂があたりに立ちこめてゐた。

小柄な大學生は自分の短い外套と並らんで、外套掛けにぶら下がつてゐた。破れた古い小つぽけな上靴が一足、その傍の床に置いてあつた。

了